

高知空港拡張整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 田村遺跡群

第10分冊

1986

高知県教育委員会

# 田村遺跡群

第10分冊

本文 X

## 例 言

1. 本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財—田村遺跡群—の発掘調査報告書15分冊の内、第10分冊である。
2. 調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54—58年に発掘調査、昭和58—60年度に整理作業及び報告書作成を行い、7年間にわたった。
3. 遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構や遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡と呼ぶこととした。また、各調査区は Loc. 1—48 と呼称した。
4. 本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 図中の方位はすべて磁北であり、標高は海拔高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、横列を $1/60$ 、その他の遺構、断面図及びセクション図を $1/60$ とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を $1/6$ 、古墳時代以降を $1/6$ 、石器、金属器を $1/6$ 、木器を $1/6$ とした。写真図版は約 $1/6$ — $1/6$ であるが縮尺不同である。
7. 遺構の略号は、竪穴住居址—ST、掘立柱建物址—SB、土塚—SK、溝—SD、井戸—SE、横列—SA、水留り状遺構—SP、性格不明遺構—SX、ピット—P、自然流路—SRとした。
8. 調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。
9. 出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあっている。

## 本文目次

1. Loc. 40 .....	1
2. Loc. 41 .....	117
3. Loc. 42 .....	161
4. Loc. 43 .....	335
5. Loc. 48 .....	363
6. 中—近世小結 .....	419
7. 總括Ⅱ .....	459
8. 人骨鑑定 .....	467

## 挿 図 目 次

### 1. Loc. 40

- 第 1 図 調査区設定図
- 第 2 図 SB1・2
- 第 3 図 SB3・4
- 第 4 図 SB5・6
- 第 5 図 SB7・8
- 第 6 図 SB9・10
- 第 7 図 SB11・12
- 第 8 図 SB13・14
- 第 9 図 SB15・16
- 第 10 図 SB17・18
- 第 11 図 SB19・20
- 第 12 図 SB21・22
- 第 13 図 SB23・25
- 第 14 図 SB24・26
- 第 15 図 SB27・28
- 第 16 図 SB29
- 第 17 図 SB30・31
- 第 18 図 SB32・33
- 第 19 図 SB34・35
- 第 20 図 SB36・37
- 第 21 図 SB38・39
- 第 22 図 SB40・41
- 第 23 図 SB42・45
- 第 24 図 SB43
- 第 25 図 SB44
- 第 26 図 SB46
- 第 27 図 SB47・48
- 第 28 図 SB49・50
- 第 29 図 SK1-6
- 第 30 図 SK11・15-19
- 第 31 図 SK20-24

- 第 32 図 SK25-28
- 第 33 図 SK29-31
- 第 34 図 SK32-37
- 第 35 図 SK38-42・44・46・47・50
- 第 36 図 SK51-55・57
- 第 37 図 SK56・58-60・62・63
- 第 38 図 SK64-69
- 第 39 図 SK70-72・74-76
- 第 40 図 SK73・77-81
- 第 41 図 SK82-85
- 第 42 図 SK86-91
- 第 43 図 SK92-98・100・101
- 第 44 図 SK102-106・108
- 第 45 図 SK110-116
- 第 46 図 SD1・2
- 第 47 図 SD3-6
- 第 48 図 第 I ~ III 層、SB11・13・14・  
24・26・29・31・42出土遺物
- 第 49 図 SK14・21・30・38・51・58・  
70・89・124出土遺物
- 第 50 図 SK89・92・93出土遺物
- 第 51 図 SK93・99・101・105・106・  
109・110・121出土遺物
- 第 52 図 SD1出土遺物
- 第 53 図 SD1・2出土遺物
- 第 54 図 SD3・5・6出土遺物
- 第 55 図 SP1、P1・2・4・9-16出  
土遺物
- 第 56 図 SK55、SD1、SP1、P2・  
13出土遺物
- 第 57 図 SK108、SP1、P1出土遺物

### 2. Loc. 41

- 第58図 調査区設定図  
 第59図 調査区セクション  
 第60図 SB1・2  
 第61図 SB3・4  
 第62図 SB5・6  
 第63図 SB7  
 第64図 SB8・9  
 第65図 SB10・11  
 第66図 SK1~7  
 第67図 SK8~13  
 第68図 SK14~19  
 第69図 SK20~24  
 第70図 SK25~29  
 第71図 SK30~32  
 第72図 SK33~36  
 第73図 SK37~42  
 第74図 SK43・44、SD2~5・7~10  
 第75図 第Ⅱ層、SB6・7、SK5・7  
 出土遺物  
 第76図 SK20・27・33、SD2出土遺物  
 第77図 SD2・7、P1・2出土遺物  
 第78図 SD2出土遺物  
 第79図 SK5・24出土遺物

3. Loc.42

- 第80図 調査区設定図  
 第81図 調査区セクション  
 第82図 ♪  
 第83図 ♪  
 第84図 ♪  
 第85図 SB1・2・4  
 第86図 SB3・5  
 第87図 SB6・8  
 第88図 SB7・9  
 第89図 SB10・11

- 第90図 SK1~5・8  
 第91図 SK9~15  
 第92図 SK16~19  
 第93図 SK20~23  
 第94図 SK24~29  
 第95図 SK30~34・37・38  
 第96図 SK36・39~42  
 第97図 SK43~45  
 第98図 SK46~49  
 第99図 SK50~52  
 第100図 SK53~57  
 第101図 SK58・60~62  
 第102図 SK63~67  
 第103図 SK68~72・74  
 第104図 SK73・75・76  
 第105図 SK77~79  
 第106図 SK80・83~87  
 第107図 SK81・82  
 第108図 SK88~92  
 第109図 SK93~95・97・99  
 第110図 SK98・100~102  
 第111図 SK96  
 第112図 SD1~8  
 第113図 SK30・32、SD3~5・7・  
 9・10・12~14  
 第114図 SE1  
 第115図 第Ⅲ層、SB10出土遺物  
 第116図 SK1・3・4・11・20~22・  
 25・26出土遺物  
 第117図 SK27・33~35・37・52出土遺物  
 第118図 SK58~60・68・73・75出土遺物  
 第119図 SK75・77・80・81出土遺物  
 第120図 SK96出土遺物  
 第121図 ♪

- 第122図 SK96出土遺物  
 第123図 SK96・97・99、SD1出土遺物  
 第124図 SD2出土遺物  
 第125図 ◇  
 第126図 ◇  
 第127図 ◇  
 第128図 ◇  
 第129図 ◇  
 第130図 ◇  
 第131図 ◇  
 第132図 ◇  
 第133図 ◇  
 第134図 ◇  
 第135図 SD2～4出土遺物  
 第136図 SD7出土遺物  
 第137図 ◇  
 第138図 ◇  
 第139図 ◇  
 第140図 ◇  
 第141図 ◇  
 第142図 ◇  
 第143図 ◇  
 第144図 SD7・9出土遺物  
 第145図 SD9・13出土遺物  
 第146図 SD13出土遺物  
 第147図 ◇  
 第148図 SD13～15出土遺物  
 第149図 SD15・16、SE1、P1出土遺物  
 第150図 SK58・81、SD2・7出土遺物  
 第151図 SK52、SD7出土遺物  
 第152図 SD7・9出土遺物  
 第153図 SD7・9・13出土遺物  
 第154図 SK81、SD7出土遺物

- 第155図 SK81、SD12出土遺物  
 第156図 SK17・25・81、SD2・7出土遺物  
 第157図 SK60、SD15、SE1出土遺物  
 第158図 SD15出土遺物  
 第159図 SD15、SE1出土遺物  
 第160図 SE1出土遺物  
 第161図 SK60、SE1出土遺物  
 第162図 SK20～22・37・62・122出土遺物

#### 4. Loc. 43

- 第163図 調査区設定図  
 第164図 SK1～4  
 第165図 SK5～9  
 第166図 SD1セクション  
 第167図 ◇  
 第168図 SD1  
 第169図 SD1出土遺物状態、SD2～9  
 第170図 SK1・2出土遺物  
 第171図 SK5・8～10、SD1出土遺物  
 第172図 SK10、SD1・3出土遺物  
 第173図 SD1出土遺物

#### 5. Loc. 48

- 第174図 調査区設定図  
 第175図 SB1・2  
 第176図 SB3・4  
 第177図 SB5・6  
 第178図 SB7・8  
 第179図 SK1～4  
 第180図 SK5～9  
 第181図 SK10～15  
 第182図 SK16～21  
 第183図 SK22～26  
 第184図 SK27～31

- 第185圖 S K 32~37  
第186圖 S K 38 · 39  
第187圖 S K 40 · 41  
第188圖 S K 42 · 43  
第189圖 S K 44 · 45  
第190圖 S D 1 ~ 5  
第191圖 S D 6 ~ 12 · 14~16  
第192圖 第Ⅲ層出土遺物  
第193圖 S B 4 · 8、S K 1 · 3 · 4 出土遺物  
第194圖 S K 11 · 22 · 23 出土遺物  
第195圖 S K 26~28 · 31 · 38 出土遺物  
第196圖 S K 41 · 44、S D 1 · 4 · 6 · 7 · 9 出土遺物  
第197圖 S D 14 · 15、P 1 ~ 4 出土遺物  
第198圖 S K 6 · 22 · 24 · 26 出土遺物  
第199圖 S K 24 · 28 出土遺物  
第200圖 S K 27 · 28 · 34 出土遺物  
第201圖 S D 1 出土遺物  
第202圖 ◇

6. 中~近世小結

- 第203圖 土師質土器小皿分類表  
第204圖 土師質土器皿分類表  
第205圖 土師質土器杯分類表  
第206圖 土師質土器鍋分類表  
第207圖 瓦質土器鍋分類表  
第208圖 S H 分布圖  
第209圖 S H 1 · 2  
第210圖 S H 3 ~ 5  
第211圖 S H 6 ~ 9  
第212圖 S H 10~12  
第213圖 S H 13 · 14  
第214圖 S H 15~17  
第215圖 S H 18~21

- 第216圖 S H 22~25  
第217圖 S H 26 · 27  
第218圖 S H 28 · 29  
第219圖 S H 30 · 31

## 表 目 次

### 1. Loc. 40

- 第1表 掘立柱建物址計測表
- 第2表 土坑計測表
- 第3表 包含層出土土器觀察表
- 第4表 遺構出土土器觀察表
- 第5表 遺構出土石器觀察表

### 2. Loc. 41

- 第6表 掘立柱建物址計測表
- 第7表 土坑計測表
- 第8表 包含層出土土器觀察表
- 第9表 遺構出土土器觀察表
- 第10表 遺構出土石器觀察表

### 3. Loc. 42

- 第11表 掘立柱建物址計測表
- 第12表 土坑計測表
- 第13表 包含層出土土器觀察表
- 第14表 遺構出土土器觀察表
- 第15表 遺構出土石器觀察表
- 第16表 遺構出土金屬器觀察表
- 第17表 遺構出土木器觀察表
- 第18表 遺構出土古銭觀察表

### 4. Loc. 43

- 第19表 土坑計測表
- 第20表 遺構出土土器觀察表
- 第21表 遺構出土石器觀察表
- 第22表 遺構出土木器觀察表

### 5. Loc. 48

- 第23表 掘立柱建物址計測表
- 第24表 土坑計測表
- 第25表 包含層出土土器觀察表
- 第26表 遺構出土土器觀察表
- 第27表 遺構出土石器觀察表
- 第28表 遺構出土木器觀察表

### 6. 中～近世小結

- 第29表 Loc. 42 SD 2 出土土師質土器法量
- 第30表 Loc. 42 SD 7 出土土師質土器法量
- 第31表 Loc. 42 SK96 出土土師質土器法量
- 第32表 SH 1～31の概略
- 第33表 掘立柱建物址の面積別棟数

### 8. 人骨鑑定

- 第34表 出土骨片一覽表

## 写 真 目 次

写真1 No. 1～10

写真2 No. 11～35

写真3 No. 36～42

1. Loc. 40

## Loc. 40

### 1. 位置と調査経過

Loc. 40は、田村遺跡群の中央部のやや北西寄りに位置しており、小字は桑ノ本（クワノモト）である。当調査区は、昭和56年度に実施された試掘調査により、16～18世紀の多数のピット群や土壇群、及び溝等の遺構の存在が確認されたが、土地買取等の手続きの関係で、調査は3次にわたり実施せざるを得なかった。

第1次の調査は、調査区の西半部を対象として実施し、調査期間は、昭和56年6月30日～8月4日の約30日間であり、調査面積は960㎡であった。

第2次の調査は、調査区の北東部を対象として実施し、調査期間は、昭和57年2月1日～2月22日の約20日間であり、調査面積は1,630㎡であった。

第3次の調査は、調査区の南東部を対象として実施し、調査期間は、昭和58年2月21日～2月24日の4日間であり、調査面積は1,580㎡であった。

当調査区の調査期間の延べ日数は、約60日間であり、最終的な調査面積は、約4,170㎡であった。

### 2. 調査概要

Loc. 40は、前記の通り、3次にわたり調査が実施され、調査区の西半部と北東部で、3区画の溝に囲まれた屋敷跡が検出された。

掘立柱建物址は、調査区の西半部と北東部に集中して存在する傾向がみられ、全て溝の区画内に存在した。土壇群は、調査区に散在して分布するが、性格不明のものが大半を占めた。

### 3. 層序と出土遺物

Loc. 40の基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 床土

第Ⅲ層 灰褐色粘質土層

第Ⅳ層 黄褐色粘質土層

第Ⅰ層は耕作土で、ほぼ水平な堆積をしており、伊万里系ぐい呑み（2）等の遺物が出土した。第Ⅱ層は床土で、調査区全域にはみられず、土師質土器杯（1）等の遺物が出土した。第Ⅲ層は灰褐色粘質土層で、中世の遺物包含層であるが、全域には堆積していなかった。第Ⅲ層からは土師質土器鍋（4）、備前摺鉢（5）、青磁碗（3）等の遺物が出土した。第Ⅳ層の黄褐色粘質土層は、中世の遺構検出面で、無遺物層であるが、全域に堆積がみられた。



第1図 調査区設定図

#### 4. 遺構と遺物

##### 掘立柱建物址

##### SB1

SB1は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-72°-Wであるが、北辺西部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.46mを測り、柱間距離は1.64~1.82mである。桁行は4.76mを測り、柱間距離は1.28~1.78mである。柱穴は、直径22~30cm、深さ15~44cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

##### SB2

SB2は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-74°-Wであるが、南辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は1.60mを測り、柱間距離は1.33~1.60mである。桁行は3.42mを測り、柱間距離は1.67~1.75mである。柱穴は、直径16~28cm、深さ12~20cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SB2は、南部でSB3を切っており、SB3より新しい時期の建物址である。

##### SB3

SB3は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-76°-Wであるが、南辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.05mを測り、柱間距離は1.02~1.98mである。桁行は4.64mを測り、柱間距離は2.31~2.33mである。柱穴は、直径24~36cm、深さ7~28cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SB3は、北部でSB2に切られており、SB4・5と重複しているが、新旧関係は不明である。

##### SB4

SB4は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-13°-Eであるが、西辺中央部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.47mを測り、柱間距離は1.02~2.45mである。桁行は4.60mを測り、柱間距離は1.18~1.72mである。柱穴は、直径20~32cm、深さ6~33cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。SB4は、SB3・5と重複しているが、新旧関係は不明である。

### SB5

SB5は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-82°-Wであるが、西辺及び東辺中央部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.88mを測り、柱間距離は不明である。桁行は4.98mを測り、柱間距離は2.28~2.63mである。柱穴は、直径20~28cm、深さ8~34cmを測り、不整形形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片及び炭化物が出土した。SB5は、SB3・4と重複しているが、新旧関係は不明である。

### SB6

SB6は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-16°-Eである。梁間は1.44mを測り、柱間距離は1.37~1.44mである。桁行は3.57mを測り、柱間距離は1.53~1.97mである。柱穴は、直径22~32cm、深さ12~28cmを測り、不整形形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

### SB7

SB7は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は3×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-73°-Wであるが、西辺中央部と南辺東部の柱穴3個は検出されなかった。梁間は4.18mを測り、柱間距離は1.01~1.50mである。桁行は3.59mを測り、柱間距離は0.95~1.81mである。柱穴は、直径20~31cm、深さ12~24cmを測り、不整形形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。SB7は、SB8と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

### SB8

SB8は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-16°-Eであるが、南東隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.74mを測り、柱間距離は1.76~1.98mである。桁行は6.10mを測り、柱間距離は1.80~2.28mである。柱穴は、直径30~44cm、深さ14~36cmを測り、不整形形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。SB8は、SD1東辺を切っており、SB7・9と重複しているが、新旧関係は不明である。

### SB9

SB9は、調査区中央部のやや北寄りに位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-18°-Eであるが、東辺南部の柱穴1個は検出

されなかった。梁間は3.83mを測り、柱間距離は1.78~2.05mである。桁行は7.08mを測り、柱間距離は1.80~2.70mである。柱穴は、直径28~52cm、深さ9~52cmを測り、不整形及び方形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。SB9は、北東部でSB8と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB10

SB10は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-70°-Wであるが、南辺西部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.57mを測り、柱間距離は1.59~2.05mである。桁行は5.96mを測り、柱間距離は1.28~3.00mである。柱穴は、直径24~32cm、深さ10~30cmを測り、不整形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片や炭化物が出土した。SB10は、SK21、SD2西辺を切っており、SB11、SK20と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB11

SB11は、調査区中央部の西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-71°-Wである。梁間は4.59mを測り、柱間距離は2.21~2.38mである。桁行は6.86mを測り、柱間距離は1.44~2.77mである。柱穴は、直径24~34cm、深さ14~38cmを測り、不整形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器鍋(15)や青磁片が出土した。SB11は、SB10・12、SK19・21~23と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB12

SB12は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-72°-Wであり、北辺西部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.61mを測り、柱間距離は1.75~1.86mである。桁行は7.06mを測り、柱間距離は1.82~3.36mである。柱穴は、直径20~52cm、深さ8~52cmを測り、不整形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SB12は、SB11・14・15・19・20、SK19と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB13

SB13は、調査区中央部西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-70°-Wであるが、北東隅、西辺中央部及び南西隅の柱穴3個は検出されなかった。梁間は4.85mを測り、柱間距離は2.16~2.64mである。桁行は

5.09mを測り、柱間距離は1.96mである。柱穴は、直径22~32cm、深さ12~40cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(10、11)等の遺物が出土した。SB13は、SK43を切っており、SK44~47と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB14

SB14は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-18°-Eである。梁間は3.90mを測り、柱間距離は1.32~2.58mである。桁行は5.52mを測り、柱間距離は2.70~2.78mである。柱穴は、直径20~41cm、深さ20~64cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗(9)等の遺物が出土した。SB14は、SB12・15・19~21、SK28と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB15

SB15は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-15°-Eである。梁間は3.66mを測り、柱間距離は1.50~2.10mである。桁行は4.65mを測り、柱間距離は2.31~2.33mである。柱穴は、直径20~32cm、深さ12~45cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SB15は、SB12・14・19~21、SK36と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB16

SB16は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×4間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-21°-Eであるが、南東隅、西辺及び東辺の柱穴4個は検出されなかった。梁間は3.64mを測り、柱間距離は1.74~1.90mである。桁行は7.75mを測り、柱間距離は1.57~2.28mである。柱穴は、直径20~36cm、深さ19~56cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SB16は、SK30を切っており、SB17~19・21~24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB17

SB17は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-22°-Eであるが、北東隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.46mを測り、柱間距離は1.64~1.82mである。桁行は6.48mを測り、柱間距離は1.60~3.02mである。柱穴は、直径24~48cm、深さ20~44cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SB17は、SK25を切っており、SB16・18、SK14と重複している。SB17は、出土遺物等からSK14・25より新しい時期の建物址であるが、SB16・18との新旧関係は不明である。

#### S B 18

S B 18は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×4間の南北棟の総柱の掘立柱建物址であり、棟方向はN-15°-Eである。梁間は3.15mを測り、柱間距離は1.38-1.77mである。桁行は5.85mを測り、柱間距離は1.39-1.53mである。柱穴は、直径21-30cm、深さ12-53cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片及び青磁片が出土した。S B 18は、S K 30を切っており、S B 16・17・21-24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 19

S B 19は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-17°-Eであるが、南西隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は5.12mを測り、柱間距離は2.14-2.78mである。桁行は5.60mを測り、柱間距離は2.50-3.10mである。柱穴は、直径22-33cm、深さ16-45cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S B 19は、S B 12・14-16・20-24、S K 27・28・30・34-39と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 20

S B 20は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の掘立柱建物址であり、棟方向はN-16°-Eである。梁間は3.88mを測り、柱間距離は1.69-2.17mである。桁行は3.94mを測り、柱間距離は1.58-2.28mである。柱穴は、直径18-34cm、深さ18-48cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。S B 20は、S K 36を切っており、S B 12・14・15・19・21、S K 27・28・34・35と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 21

S B 21は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-75°-Wであるが、南辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.24mを測り、柱間距離は1.38-1.86mである。桁行は4.11mを測り、柱間距離は1.95-2.16mである。柱穴は、直径22-32cm、深さ10-48cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。S B 21は、S B 14-16・18-20・22・23、S K 27・28・30・34・35と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 22

S B 22は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の東西棟の掘

立柱建物址であり、棟方向はN-73°-Wであるが、南西隅と西辺中央部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.40mを測り、柱間距離は1.55~1.85mである。桁行は5.20mを測り、柱間距離は2.35~2.85mである。柱穴は、直径21~32cm、深さ13~44cmを測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S B 22は、S B 16・18・19・21・23~25、S K 30~32と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 23

S B 23は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-72°-Wであるが、西辺及び東辺中央部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は5.14mを測り、柱間距離は2.24~2.70mである。桁行は5.60mを測り、柱間距離は1.50~2.12mである。柱穴は、直径24~48cm、深さ11~41cmを測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S B 23は、S K 51を切っており、S B 16・18・19・21・22・24・25、S K 30~33・38・39・57と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 24

S B 24は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は4×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-73°-Wであるが、北辺西部と西辺南部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は5.48mを測り、柱間距離は1.32~1.82mである。桁行は6.18mを測り、柱間距離は1.74~2.40mである。柱穴は、直径25~36cm、深さ17~40cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗(8)等の遺物が出土した。S B 24は、S K 38・39・57を切っており、S B 16・18・19・22・23・25、S K 30~33・37・51と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 25

S B 25は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-15°-Eであるが、東辺及び南辺中央部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は4.74mを測り、柱間距離は1.84~2.90mである。桁行は5.26mを測り、柱間距離は2.58~2.68mである。柱穴は、直径24~32cm、深さ8~44cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。S B 25は、S B 22~24、S K 37・57と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 26

S B 26は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の南北棟の掘

立柱建物址であり、棟方向はN-15°-Eである。梁間は3.69mを測り、柱間距離は1.64~1.98mである。桁行は5.23mを測り、柱間距離は2.58~2.62mである。柱穴は、直径18~34cm、深さ14~52cmを測り、不整形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、白磁皿(12)等の遺物が出土した。S B 26は、S K 64を切っており、S B 27・28と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 27

S B 27は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-14°-Eであるが、東辺の柱穴2個は検出されなかった。梁間は5.20mを測り、柱間距離は2.39~2.82mである。桁行は6.26mを測り、柱間距離は1.25~2.53mである。柱穴は、直径22~40cm、深さ12~38cmを測り、不整形形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。S B 27は、S B 26・28~30、S K 64と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 28

S B 28は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×4間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-77°-Wである。梁間は4.00mを測り、柱間距離は1.98~2.02mである。桁行は7.13mを測り、柱間距離は1.04~2.52mである。柱穴は、直径26~35cm、深さ20~42cmを測り、不整形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。S B 28は、S K 62を切っており、S B 26・27・29・30、S K 64と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 29

S B 29は、調査区南西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は3×4間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-67°-Wであるが、南西隅及び東辺の柱穴3個は検出されなかった。梁間は5.16mを測り、柱間距離は1.50~1.58mである。桁行は7.53mを測り、柱間距離は1.23~2.78mである。柱穴は、直径21~64cm、深さ18~61cmを測り、円形及び不整形形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(13)等の遺物が出土した。S B 29は、S B 27・28・30・31、S K 62・73・75と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 30

S B 30は、調査区南西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-68°-Wである。梁間は4.49mを測り、柱間距離は2.08~2.35mである。桁行は4.51mを測り、柱間距離は1.11~1.75mである。柱穴は、直径20~33cm、

深さ12~61cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。S B30は、S B27~29・31、S K73と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B31

S B31は、調査区南西端に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×4間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-25°-Eであるが、南辺及び東辺の柱穴3個は検出されなかった。梁間は3.88mを測り、柱間距離は1.90~1.98mである。桁行は6.00mを測り、柱間距離は1.10~1.78mである。柱穴は、直径17~44cm、深さ12~56cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(14)等の遺物が出土した。S B31は、S K75を切っており、S B29・30、S K76・79と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B32

S B32は、調査区南西端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の掘立柱建物址であり、棟方向はN-73°-Wであるが、東辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は3.25mを測り、柱間距離は1.43~1.82mである。桁行は3.39mを測り、柱間距離は1.16~2.23mである。柱穴は、直径22~28cm、深さ14~52cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。S B32は、S K74を切っており、S K77と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B33

S B33は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×1間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-73°-Wである。梁間は2.70mを測り、柱間距離は2.63~2.70mである。桁行は3.68mを測り、柱間距離は3.62~3.68mである。柱穴は、直径24~32cm、深さ20~52cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。S B33は、S B34~36、S K66と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B34

S B34は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は3×4間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-67°-Wであるが、東辺の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.98mを測り、柱間距離は1.28~1.40mである。桁行は6.67mを測り、柱間距離は1.20~2.38mである。柱穴は、直径23~36cm、深さ11~49cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S B34は、S K70を切っており、S B33・35・36、S K66・69と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 35

S B 35は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-77°-Wであるが、南東隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は1.90mを測り、柱間距離は1.90mである。桁行は5.73mを測り、柱間距離は2.65-3.08mである。柱穴は、直径22-30cm、深さ12-29cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S B 35は、S B 33・34・36、S K 66・69と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 36

S B 36は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-20°-Eであるが、南東隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は2.12mを測り、柱間距離は2.12mである。桁行は2.93mを測り、柱間距離は1.14-1.78mである。柱穴は、直径26-33cm、深さ19-34cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。S B 36は、S B 33-35、S K 69・70と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 37

S B 37は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-14°-Eであるが、南東隅と東辺北部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は4.84mを測り、柱間距離は2.30-2.60mである。桁行は5.82mを測り、柱間距離は1.56-2.44mである。柱穴は、直径22-30cm、深さ8-25cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S B 37は、S B 38と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 38

S B 38は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の掘立柱建物址であり、棟方向はN-27°-Eであるが、北東隅の柱穴1個は検出されなかった。梁間は5.51mを測り、柱間距離は2.69-2.78mである。桁行は5.56mを測り、柱間距離は2.48-3.03mである。柱穴は、直径25-29cm、深さ8-36cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。S B 38は、S B 37と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 39

S B 39は、調査区南端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の東西棟の掘

立柱建物址であり、棟方向は $N-73^{\circ}-W$ である。梁間は2.23mを測り、柱間距離は2.16~2.23mである。桁行は3.00mを測り、柱間距離は0.90~2.04mである。柱穴は、直径23~28cm、深さ12~36cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

#### S B 40

S B 40は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は $2 \times 4$ 間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向は $N-15^{\circ}-E$ であるが、南西隅と東辺の柱穴4個は検出されなかった。梁間は3.63mを測り、柱間距離は1.67~1.97mである。桁行は7.33mを測り、柱間距離は1.79~2.16mである。柱穴は、直径20~28cm、深さ8~56cmを測り、不整形円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S B 40は、S B 41、S K 86・88・90、S D 3西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 41

S B 41は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は $2 \times 4$ 間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向は $N-72^{\circ}-W$ であるが、西辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は5.29mを測り、柱間距離は1.66~1.84mである。桁行は6.33mを測り、柱間距離は1.32~1.86mである。柱穴は、直径22~49cm、深さ11~32cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S B 41は、S B 40、S K 86・88・90、S D 3西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 42

S B 42は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は $2 \times 3$ 間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向は $N-71^{\circ}-W$ であり、北西隅及び北辺西部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.38mを測り、柱間距離は1.68~1.76mである。桁行は5.92mを測り、柱間距離は1.95~2.12mである。柱穴は、直径25~41cm、深さ7~45cmを測り、円形及び不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯(6、7)等の遺物が出土した。S B 42は、S B 43・48、S D 3西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 43

S B 43は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は $2 \times 2$ 間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向は $N-73^{\circ}-W$ である。梁間は6.27mを測り、柱間距離は2.77~3.34mである。桁行は6.82mを測り、柱間距離は0.84~3.20mである。柱穴は、直径28~36cm、深さ17~33cmを測り、不整形円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片及び青磁

片が出土した。S B 43は、2×2間の母屋の西面に廂を有した建物址と考えられる。S B 43は、S B 42・44~46、S D 4と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 44

S B 44は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は3×5間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-20°-Eであるが、北辺西部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は7.80mを測り、柱間距離は2.36~2.78mである。桁行は8.78mを測り、柱間距離は1.53~1.89mである。柱穴は、直径21~40cm、深さ10~40cmを測り、埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯・鍋の小破片が出土した。S B 44は、S B 43・45・46、S K 97~99、S D 4と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 45

S B 45は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は3×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-75°-Wである。梁間は4.74mを測り、柱間距離は1.20~1.78mである。桁行は5.44mを測り、柱間距離は0.72~1.82mである。柱穴は、直径20~38cm、深さ9~40cmを測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。S B 45は、3×3間の母屋の西面に廂を有した建物址と考えられる。S B 45は、S K 97・98を切っており、S B 43・44・46、S K 99、S D 4と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 46

S B 46は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×5間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-19°-Eであるが、東辺南部及び南東隅の柱穴2個は検出されなかった。梁間は3.53mを測り、柱間距離は2.03mである。桁行は9.10mを測り、柱間距離は1.60~2.33mである。柱穴は、直径26~37cm、深さ11~49cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S B 46は、S D 4を切っており、S B 43~45、S K 96~100・105と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 47

S B 47は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×2間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-71°-Wである。梁間は2.70mを測り、柱間距離は1.04~1.62mである。桁行は4.37mを測り、柱間距離は1.81~2.55mである。柱穴は、直径24~30cm、深さ11~23cmを測り、埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S B 47は、S B 48・49、S D 3西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 48

S B 48は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は1×2間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-15°-Eであるが、東辺中央部の柱穴1個は検出されなかった。梁間は2.16mを測り、柱間距離は2.07-2.16mである。桁行は3.19mを測り、柱間距離は1.37-1.80mである。柱穴は、直径23-28cm、深さ8-43cmを測り、不整形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S B 48は、S B 42・47と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 49

S B 49は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-20°-Eである。梁間は2.72mを測り、柱間距離は1.32-1.40mである。桁行は5.52mを測り、柱間距離は1.49-2.20mである。柱穴は、直径33-51cm、深さ13-41cmを測り、不整形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S B 49は、S K 102を切っており、S B 47・50、S K 103と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S B 50

S B 50は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。規模は2×3間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はN-68°-Wであるが、北東隅及び南辺東部の柱穴2個は検出されなかった。梁間は4.19mを測り、柱間距離は1.84-2.35mである。桁行は4.99mを測り、柱間距離は1.60-1.86mである。柱穴は、直径24-36cm、深さ12-40cmを測り、不整形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。S B 50は、S K 104、S D 3の西辺を切っており、S B 49、S K 102・103と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### 土坑

#### S K 1

S K 1は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.49m、短径0.39m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-65°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

#### S K 2

S K 2は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.76m、短径0.64m、深さ0.38mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-70°-E

である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

### SK 3

SK 3は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.33m、短径0.72m、深さ0.42mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-85°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK 3は、西部に小段を有している。

### SK 4

SK 4は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.96m、短径の残存長0.84m、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-68°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

### SK 5

SK 5は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.77m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-65°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。

### SK 6

SK 6は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.82m、短径0.71m、深さ0.15mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-5°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

### SK 7

SK 7は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.30m、短径0.80m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-56°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK 7は、東部に小段を有する。

### SK 8

SK 8は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.57m、短径0.90m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-62°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

### SK 9

SK 9は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径

0.96m、短径0.79m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK9の南端部は、中世のピットに切られている。

#### SK10

SK10は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.84m、短径0.77m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK11

SK11は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径2.20m、短径1.16m、深さ0.12mである。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-21^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK11は、SD1の北東隅を切っており、SD1より新しい時期の土壇である。

#### SK12

SK12は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.81m、短径0.71m、深さ0.23mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-4^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK12は、SK13の北部を切っており、SK13より新しい時期の土壇である。

#### SK13

SK13は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径の残存長0.73m、短径0.56m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-53^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK13は、北部がSK12に切られており、SK12より古い時期の土壇である。

#### SK14

SK14は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径2.84m、短径2.65m、深さ0.23mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向は $N-20^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、須恵器蓋(21)等の遺物が出土した。SK14は、出土遺物等からSB17、SD1西辺に切られていることが判明した。

#### SK15

SK15は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.16m、短径0.83m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-64°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器及び瓦質土器片が出土した。

#### SK16

SK16は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.40m、深さ0.24mを測る。断面形は擋鉢形を呈し、長軸方向はN-61°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK16は、東西の両端部に小段を有している。

#### SK17

SK17は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、長径2.35m、短径1.94m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-52°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。SK17の北部は、中世のピットに切られている。

#### SK18

SK18は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.61m、深さ0.45mを測る。断面形は擋鉢形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。SK18の西部は、中世のピットに切られている。

#### SK19

SK19は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.81m、短径1.50m、深さ0.20mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-35°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK19は、底面に拳大程度の自然礫数個が堆積していた。SK19は、SB11・12と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK20

SK20は、調査区中央部の西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.25m、短径0.69m、深さ0.27mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-18°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK20は、北

部に小段を有している。

#### SK21

SK21は、調査区中央部の西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.09m、短径0.58m、深さ0.17mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-21°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(17)等の遺物が出土した。SK21は、SB10に切られており、SB11と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK22

SK22は、調査区中央部の西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径0.65m、短径0.55m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-45°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK22は、SB11と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK23

SK23は、調査区中央部の西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径0.87m、短径0.76m、深さ0.20mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-65°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK23の東部は、中世のピットに切られており、SB11と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK24

SK24は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.21m、短径1.13m、深さ0.21mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-88°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK25

SK25は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径2.43m、短径1.97m、深さ0.55mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-76°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK25は、北東部に小段を有し、底面には、人頭大の自然罅8個が堆積していた。SK25は、SD1西辺を切っており、SB17に切られている。SK25は、SB17より古い、SD1より新しい時期の土坑である。

#### SK26

SK26は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、

長径1.28m、短径0.75m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-26°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 27

S K 27は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.70m、深さ7cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-20°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 27は、S B 19-21と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 28

S K 28は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.62m、深さ0.16mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-74°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 28は、S B 14・15・19-21と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 29

S K 29は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径5.25m、短径4.02m、深さ0.76mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-31°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 29は、東部に大きな段部を有し、S K 49、S D 1西辺を切っている。

#### S K 30

S K 30は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.99m、短径1.04m、深さ0.58mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-49°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗(19)、白磁小皿(18)等の遺物が出土した。S K 30は、S B 16・18に切られており、S B 19・21-24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 31

S K 31は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.90m、短径0.77m、深さ0.19mを測る。断面形は浅い箱形を呈し、長軸方向はN-16°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 31は、S B 22に切られており、S B 23・24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 32

S K 32は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.18m、短径0.44m、深さ0.59mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向は $N-82^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 32は、S B 22~24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 33

S K 33は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.99m、短径0.58m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 33は、S B 23・24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 34

S K 34は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.76m、短径0.68m、深さ0.42mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向は $N-7^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。S K 34は、S B 19~21と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 35

S K 35は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.76m、短径0.74m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-4^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 36

S K 36は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径1.32m、短径0.91m、深さ0.17mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-6^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S K 36は、S B 20に切られており、S B 15・19と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 37

S K 37は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.18m、短径0.41m、深さ0.18mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向は $N-10^{\circ}-W$ である。埋土は、灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 37は、S B 19・23~25と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 38

S K 38は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.71m、短径0.64m、深さ0.15mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-45°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(20)等の遺物が出土した。S K 38は、S B 19・23・24に切られており、S B 19・23・24より新しい時期の土壇である。

#### S K 39

S K 39は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.78m、短径0.70m、深さ0.25mを測る。断面形は浅い箱形を呈し、長軸方向はN-5°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 39は、S B 24に切られており、S B 19と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 40

S K 40は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.80m、短径0.52m、深さ0.25mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 40は、東部を中世のピットに切られている。

#### S K 41

S K 41は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.67m、短径0.62m、深さ0.35mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-5°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S K 41は、S K 42を切っており、S K 42より新しい時期の土壇である。

#### S K 42

S K 42は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径1.13m、短径の残存長0.90m、深さ0.49mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-85°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 42は、北部と東部に段部を有しており、南部は最近の攪乱を受けている。S K 42は、北部をS K 41に切られており、S K 41より古い時期の土壇である。

#### S K 43

S K 43は、調査区中央部西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径の残存長0.78m、短径0.76m、深さ0.45mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向

は $N-5^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。SK43は、SB13に切られており、南部は最近の擾乱を受けている。

#### SK44

SK44は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.75m、短径0.66m、深さ7cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-77^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK44は、SB13と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK45

SK45は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長0.81m、短径の残存長0.40m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-77^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK45は、SB13と重複しており、北東部は最近の擾乱を受けている。

#### SK46

SK46は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.78m、短径0.64m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-8^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK46は、SK47を切っており、SB13と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK47

SK47は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.17m、短径の残存長0.66m、深さ4cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は $N-77^{\circ}-E$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。SK47は、SK46に切られており、SB13と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK48

SK48は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.10m、短径0.70m、深さ0.39mを測る。断面形は楕錐形を呈し、長軸方向は $N-80^{\circ}-W$ である。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK48は、SD1西辺を切っており、SD1より新しい時期の土域である。

#### SK49

SK49は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.91m、短径1.19m、深さ0.40mを測る。断面形は楕鉢形を呈し、長軸方向はN-6°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK49は、SK29に切られており、SK29より古い時期の土壇である。

#### SK50

SK50は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長2.53m、短径の残存長1.38m、深さ0.38mを測る。断面形は楕鉢形を呈し、長軸方向はN-29°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。SK50は、SDI西辺と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

#### SK51

SK51は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は細長い長楕円形を呈し、長径2.13m、短径0.25m、深さ0.12mを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はN-71°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁皿(23)等の遺物が出土した。SK51は、SB23に切られており、SB24と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK52

SK52は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径の残存長0.59m、短径0.63m、深さ7cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-41°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK52は、SK53に切られており、SK53より古い時期の土壇である。

#### SK53

SK53は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.71m、短径0.70m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-35°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK53は、SK52を切っており、SK52より新しい時期の土壇である。

#### SK54

SK54は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.30m、短径0.74m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-74°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

#### S K 55

S K 55は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.53m、深さ0.11mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-81°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片、石硯(129)等が出土した。

#### S K 56

S K 56は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径0.65m、短径0.53m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-67°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 57

S K 57は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径4.97m、短径0.77m、深さ0.36mを測る。断面形は擋鉢形を呈し、長軸方向はN-70°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、多量の土師質土器皿・杯の小片及び青磁片等の遺物が出土した。S K 57は、S B 24に切られており、S B 23・25と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 58

S K 58は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.08m、短径0.50m、深さ0.32mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-15°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯(22)等の遺物が出土した。S K 58は、底面が北部から南部に向かって深まっている。

#### S K 59

S K 59は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.90m、短径0.45m、深さ0.14mを測る。断面形は擋鉢形を呈し、長軸方向はN-77°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 60

S K 60は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.82m、短径0.76m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-9°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 61

S K 61は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径の残存長3.38m、短径0.64m、深さ0.15mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-76°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 61は、東部がS D 1東辺に切られており、S D 1より古い時期の土坑である。

#### S K 62

S K 62は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.75m、短径0.63m、深さ0.54mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-88°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 62は、S B 28に切られており、S B 29と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 63

S K 63は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.74m、短径0.54m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-85°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 63の東端部は、中世のピットに切られている。

#### S K 64

S K 64は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.94m、短径0.82m、深さ0.15mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-20°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S K 64は、S B 26に切られており、S B 27・28と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 65

S K 65は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.76m、短径0.50m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-39°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

#### S K 66

S K 66は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.58m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-23°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 66は、S B 34・35と重複するが、新旧関係は不明である。

#### S K 67

S K 67は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.78m、短径0.68m、深さ0.11mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-41°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 67の南部は、中世のピットに切られており、S B 37と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 68

S K 68は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.09m、短径0.76m、深さ0.29mを測る。断面形は楕錐形を呈し、長軸方向はN-50°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 68は、北部に小段を有している。

#### S K 69

S K 69は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.26m、短径1.00m、深さ0.26mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-28°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。S K 69は、S B 33-36と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 70

S K 70は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径1.54m、短径1.19m、深さ0.43mを測る。断面形は楕錐形を呈し、長軸方向はN-69°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁皿(24)等の遺物が出土した。S K 70は、S B 34に切られており、S B 36と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 71

S K 71は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.68m、深さ0.11mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-38°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

#### S K 72

S K 72は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.77m、短径0.75m、深さ0.26mを測る。断面形は楕錐形を呈し、長軸方向はN-1°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K 73

S K 73は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.00m、短径0.30m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-52°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 73は、S B 29・30と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 74

S K 74は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径1.44m、短径0.96m、深さ0.17mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-65°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 74は、S B 32に切られており、S B 32より古い時期の土壇である。

#### S K 75

S K 75は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径2.64m、短径1.35m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-44°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。S K 75は、S B 31に切られており、S B 29と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 76

S K 76は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.74m、短径0.73m、深さ0.21mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-59°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 76は、S B 31と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 77

S K 77は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径1.07m、短径0.91m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-50°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。S K 77は、S B 32と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 78

S K 78は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径2.30m、短径0.71m、深さ0.28mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-69°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片等の遺物が出土した。S K 78は、

南部が最近の擾乱を受けている。

#### SK79

SK79は、調査区南西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径1.03m、短径0.70m、深さ0.11mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-25°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK79は、SB31と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK80

SK80は、調査区南西端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.21m、短径0.76m、深さ0.27mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。

#### SK81

SK81は、調査区南西部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.76m、短径0.50m、深さ0.24mを測る。断面形は擋鉢形を呈し、長軸方向はN-20°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

#### SK82

SK82は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.48m、短径0.97m、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK82は、底面に拳大一人頭大の自然礫7個が堆積していた。

#### SK83

SK83は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.87m、短径0.80m、深さ0.21mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-15°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK83の南端部は、中世のピットに切られている。

#### SK84

SK84は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.39m、短径1.10m、深さ0.30mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯及び青磁の小破片等の遺物が出土した。

#### S K 85

S K 85は、調査区南部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径の残存長2.68m、短径2.20m、深さ0.49mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-87°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。自然礫の集石がみられ、底面にも一部堆積していた。S K 85の東部は、S D 1と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

#### S K 86

S K 86は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径1.24m、短径1.10m、深さ0.49mを測る。断面形は摺鉢形を呈し、長軸方向はN-58°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 86は、東西の両端部に小段を有している。S K 86は、S B 40・41と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 87

S K 87は、調査区北端部で検出された土坑で、S K 86の南西側に位置している。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.14m、短径0.64m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-20°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 87は、S B 41と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 88

S K 88は、調査区北端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径0.88m、短径0.78m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-73°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K 88は、S B 40・41と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K 89

S K 89は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.44m、短径0.75m、深さ1.20mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-64°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器大皿(25)・釜(26)・鍋(28)・備前徳利(27)、瀬戸・美濃系小皿(29)、伊万里系碗(30~32、34~37、39~43)・蓋(38)・瓶(44、45)・徳利(46)、奈半利碗(33)等の遺物が出土した。

#### S K 90

S K 90は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、

長径0.83m、短径0.74m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-68°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK91

SK91は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.99m、短径0.62m、深さ0.22mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-7°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK92

SK92は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.78m、短径0.96m、深さ0.33mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-75°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器小皿(47)等の遺物が出土した。SK92は、SK93に切られており、SK93より古い時期の土壇である。

#### SK93

SK93は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径1.45m、短径1.30m、深さ0.44mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-15°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器釜(48)、伊万里系碗(49、50、53-56)・蓋(51)等の遺物が出土した。SK93は、SK92を切っており、SK92より新しい時期の土壇である。

#### SK94

SK94は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.91m、短径0.73m、深さ0.42mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-70°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK95

SK95は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長1.64m、短径0.89m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-70°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK96

SK96は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.86m、短径0.63m、深さ0.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-10°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK96は、SK97を切っ

おり、S B46と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K97

S K97は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.80m、短径0.66m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-80°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K97は、S B45、S K96に切られており、S B45、S K96より古い時期の土壇である。また、S K97は、S B44・46と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K98

S K98は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長1.02m、短径0.76m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-10°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。S K98は、北西部がS K97に切られており、S B46と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K99

S K99は、調査区北東部で検出された土壇で、S K98の東側に位置している。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.83m、短径0.74m、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-3°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里紅猪口(57)が出土した。S K99には拳程度の自然礫の集石がみられた。S K99は、S B44-46と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### S K100

S K100は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は鉤形を呈し、長径1.83m、短径0.11m、深さ8cmを測る。断面形はU字形を呈し、長軸方向はN-46°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### S K101

S K101は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.71m、短径の残存長1.25m、深さ0.31mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-28°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里系碗(58)等の遺物が出土した。S K101は、S D3東辺を切っており、S D3より新しい時期の土壇である。

#### SK102

SK102は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.84m、短径0.59m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-73°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK102は、SK103を切っているが、SB49に切られている。また、SK102は、SB50と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK103

SK103は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.16m、短径0.72m、深さ0.32mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-72°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK103は、SK102に切られており、SB49・50と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK104

SK104は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は細長い長楕円形を呈し、長径4.35m、短径0.40m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-18°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK104は、SB50に切られており、SB50より新しい時期の土壇である。

#### SK105

SK105は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.36m、短径1.19m、深さ0.41mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-67°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、瀬戸・美濃系統(59)等の遺物が出土した。SK105は、SB46と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SK106

SK106は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径の残存長1.69m、短径1.16m、深さ0.51mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-19°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器釜(60)、唐津系統(62、63)、伊万里系統(64)・瓶(65)、能茶山皿(61)等の遺物が出土した。SK106は、SD3東辺を切っており、SD3より新しい時期の土壇である。

#### SK107

SK107は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、

長径の残存長1.82m、短径1.22m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-22°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK107は、SD5と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

#### SK108

SK108は、調査区東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.43m、短径の残存長1.01m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-80°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、砥石(132)等が出土した。SK108は、SD2に切られており、SD2より古い時期の土城である。

#### SK109

SK109は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径の残存長1.90m、短径0.90m、深さ0.92mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、備前播鉢(66)、伊万里皿(67)等の遺物が出土した。SK109は、南部が最近の攪乱を受けていた。

#### SK110

SK110は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.34m、短径1.05m、深さ0.90mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里碗(70)、瀬戸・美濃系碗(69)等が出土した。

#### SK111

SK111は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径1.16m、短径0.95m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-73°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK111は、SK112を切っており、SK112より新しい時期の土城である。

#### SK112

SK112は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長径の残存長0.86m、短径1.09m、深さ0.29mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-73°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK112は、SK111に切られており、SK111より古い時期の土城である。

#### SK113

SK113は、調査区東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.95m、短径1.84m、深さ0.42mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-76°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK113は、周辺部に小段を有しており、SD2南辺の東端を切っている。

#### SK114

SK114は、調査区東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.52m、短径1.50m、深さ0.62mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-82°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK115

SK115は、調査区東端部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.68m、短径0.83m、深さ1.03mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN-25°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK115の南部は、現代の攪乱を受けている。

#### SK116

SK116は、調査区中央部のやや東寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.42m、短径0.98m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK117

SK117は、調査区中央部の南寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.68m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-29°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK118

SK118は、調査区中央部南寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.96m、短径0.64m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK119

SK119は、調査区中央部南寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は隅丸長方形

を呈し、長径1.05m、短径0.71m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-22°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK120

SK120は、調査区中央部南寄りに位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径1.05m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-86°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK121

SK121は、調査区南東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.31m、短径0.90m、深さ0.21mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-8°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯(72)等の遺物が出土した。SK121は、南部に小段を有している。

#### SK122

SK122は、調査区南東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、長径1.97m、短径1.28m、深さ0.34mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-38°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK123

SK123は、調査区南東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.43m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-43°-Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

#### SK124

SK124は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.84m、短径0.80m、深さ0.38mを測る。断面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-57°-Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里碗(16)等の遺物が出土した。SK124は、SD6の西部を切っており、SD6より新しい時期の土壇である。

#### 溝

#### SD1

SD1は、調査区西半部に位置し、第IV層上面で検出され、長方形の区画を形成している

が、南辺は8.82mほど途切れている。北辺の全長は36.80m、幅0.72m、深さ0.33mを測る。東辺の全長は55.20m、幅0.64m、深さ0.36mを測る。西辺の全長は57.44m、幅0.96m、深さ0.35mを測る。また、西辺南端部は、南部から南西側に1.92mほど延びた箇所があり、排水施設と考えられる。南辺西部の全長14.80m、幅1.12m、深さ0.36mを測る。南辺西部の東端部は北部に24.40mほど延びている。南辺東部の全長は13.68m、幅0.32m、深さ0.12mを測る。埋土は2層に分層され、かなり多量の遺物が出土した。第Ⅰ層は灰色粘質土であり、少量の遺物を包含していた。第Ⅱ層は暗灰色粘質土であり、かなり多量の遺物を包含していた。

SD1からは、土師質土器杯(73、74)・鍋(75~77)、瓦質土器鍋脚部(78)、備前播鉢(79~83)、青磁碗(84、85)、白磁皿(86)、染付碗(87)、伊万里系碗(88)等の遺物が出土した。SD1は、SK14を切っており、SK11・25・29・48、SD2南辺に切られている。SD1の底面から、備前播鉢(79、80)及び青磁碗(85)等の遺物が出土したことを考えると、SD1は16世紀後半に機能し、廃絶したと考えられる。

#### SD2

SD2は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、L字状を呈している。南辺の全長は33.60m、幅1.32m、深さ0.36mを測る。西辺の全長は20.40m、幅0.60m、深さ0.10mを測る。SD2からは、瓦質土器播鉢(91)、備前播鉢(92)等の遺物が出土した。SD2の南辺は、SD1の東辺を切っているが、SK113及びSD3に切られている。SD2の西辺は、SB10に切られている。SD2は、SD1より新しいが、SK113及びSD3より古い時代の溝である。SD2は、出土遺物等より、16世紀後半に機能し、廃絶した溝と考えられる。

#### SD3

SD3は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、門構様に囲繞している。北辺の全長は16.00m、幅0.46m、深さ0.15mを測る。東辺の全長は21.60m、幅0.64m、深さ0.19mを測る。西辺の全長は23.28m、幅0.32m、深さ0.10mを測る。SD3は、東辺南部から東側に溝が1.20mほど延びた箇所があり、排水施設と考えられる。埋土は灰色粘質土であり、土師質土器釜(93)、備前播鉢(94)・徳利(95)等の遺物が出土した。

SD3は、SD2南辺を切っているが、SB50、SK101・106に切られている。また、SD3の西辺は、SB40~42・47と重複しているが、新旧関係は不明である。SD3は、SD2より新しいが、SB50、SK101・106より古い時代の溝であり、出土遺物等から、17世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

#### SD4

SD4は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、北北東から南南西に向かって縦

走している。全長は7.28m、幅0.18m、深さ6cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SD4は、SB45・46に切られ、SB43・44と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SD5

SD5は、調査区北東部に位置し、第IV層上面で検出され、L字状に鋭く屈曲している。全長7.28m、幅0.96m、深さ0.19mを測る。SD5の北部には、拳大程度の自然礫の集石がみられた。埋土は灰色粘質土であり、瓦質土器鉢(96)、伊万里系碗(97)、能茶山蓋(98)等の遺物が出土した。SD5の南辺は、SD3の東辺と切り合っているが、切り合い関係は不明である。SD5は、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

#### SD6

SD6は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出され、北西から南東に向かって、横走している。全長10.80m、幅0.88m、深さ0.32mを測る。埋土は灰色粘質土であり、蓋(99、106)、京焼き碗(101)、奈半利碗(103)、香炉(105)等の遺物が出土した。SD6は西端で2条に分岐し、SK124に切られており、SK124より古い時期の溝である。SD6は、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

#### 水溜り状遺構

#### SP1

SP1は、調査区東部に位置し、第IV層上面で検出された水溜り状遺構である。長径3.20m、短径1.68m、深さ0.83mを測る。埋土は灰色粘質土であり、伊万里仏飯器(107)、石碗(130、131)等の遺物が出土した。SP1は、拳大から人頭大程度の自然礫の集石が逆L字状に配置されていた。SP1は、SK108、SD2南辺及びSD3東辺の南端部を切っており、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した遺構と考えられる。

#### ピット

#### P1

P1は、調査区北西端部に位置し、第IV層上面で検出された。P1は、不整形を呈し、直径90cm前後、深さ51cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器蓋(108、109)・杯身(110、111)・皿(112)、砥石(133、134)等の遺物が出土した。

P 2

P 2は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 2は、不整形を呈し、直径96cm前後、深さ26cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器杯身(113)、石硯(128)等の遺物が出土した。

P 3

P 3は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 3は、不整形を呈し、直径92cm前後、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び土師器の細片が出土した。

P 4

P 4は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、柱痕を有している。P 4は、方形を呈し、直径98cm前後、深さ29cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器杯身(114)等の遺物が出土した。

P 5

P 5は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層で検出され、柱痕を有している。P 5は、方形を呈し、直径112cm前後、深さ32cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び、土師器の細片が出土した。

P 6

P 6は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 6は、不整形を呈し、直径80cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。P 6の東部は中世のピットに切られている。

P 7

P 7は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 7は不整形を呈し、直径92cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

P 8

P 8は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 8は、隅丸方形を呈し、直径98cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び土師器の細片が出土した。

P 9

P 9は、調査区北西部に位置し、第IV層上面で検出された。P 9は、不整形形を呈し、直径76cm前後、深さ9cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、土師質土器皿(115)等の遺物が出土した。

P 10

P 10は、調査区北部に位置し、第IV層上面で検出された。P 10は円形を呈し、直径27cm前後、深さ17.1cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、唐津系碗(117)等の遺物が出土した。

P 11

P 11は、調査区西部に位置し、第IV層上面で検出された。P 11は円形を呈し、直径26cm前後、深さ38cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(116)等の遺物が出土した。

P 12

P 12は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。P 12は円形を呈し、直径25cm前後、深さ15cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯(118、119)等の遺物が出土した。

P 13

P 13は、調査区中央部に位置し、第IV層上面で検出され、柱痕を有している。P 13は不整形形を呈し、直径38cm前後、深さ19cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯(124)、叩石(127)等の遺物が出土した。

P 14

P 14は、調査区北東端部に位置し、第IV層上面で検出された。P 14は、円形を呈し、直径34cm前後、深さ35cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、尾戸碗(123)等の遺物が出土した。

P 15

P 15は、調査区西端部に位置し、第IV層上面で検出され、柱痕を有している。P 15は円形を呈し、直径42cm前後、深さ32cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿(120、121)等の遺物が出土した。

P 16

P 16は、調査区中央部南西寄りに位置し、第IV層上面で検出された。P 16は、円形を呈し、

直径38cm前後、深さ25cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗(125)等の遺物が出土した。

## 5. まとめ

Loc. 40では、9世紀、16世紀後半、17世紀、18世紀の4時期の屋敷跡群の存在を確認することができた。

9世紀の建物址は、調査区北西部で検出されたが、調査区の北側に延びているため、規模や性格等は不明である。SK14は須恵器蓋(21)等の遺物が出土しており、この時期の土壇と考えられるが、性格等は不明である。

16世紀後半の屋敷跡群は、SD1・2により囲まれた範囲が考えられる。SD1により、門構様に囲まれた範囲の長辺は57.27m、短辺は36.30mを測る。この中には、SB1~7・9~39の38棟の建物址群及び、SK5~10・12・13・15~85の80基の土壇が存在した。SD1南辺の西部は、東へ14.80mほど延び、そのあと北へ24.40m程向い、コの字形を呈している。この北へ向かったSD1の東側約2.50mは、遺構が全く存在せず、溝に沿って通路が存在した可能性が高い。

また、調査区の北東部には、SD2によりL字形に区画された範囲があり、長辺は33.40m、短辺は20.00mを測る。この中には、SB8・40~42・47・48・50の7棟の建物址群及び、SK11・86~108の25基の土壇群が存在した。SD2は、南辺がSD1の東辺を切っており、SD1より新しい時期の溝と考えられる。この範囲で検出された屋敷跡群は、北側のLoc.41の屋敷跡群に連続するものである。

17世紀の屋敷跡群は、SD3により、門構様に囲まれた長方形の範囲が考えられ、長辺は22.90m、短辺は16.10mを測る。この中には、SB43~46・49・50の6棟の建物址群及び、SK90・95~108の15基の土壇群が存在した。

18世紀前半の遺構は、調査区東半部に分布していた。出土遺物等を考えると、SK89・93・99・101・105・106・109・110・121・124、SD5・6が18世紀前半の土壇及び、溝である。以上の土壇及び、溝の分布状況を考えると、調査区東半部に18世紀の屋敷跡が存在したが、それに伴う建物址群は検出されなかった。

当調査区で検出した建物址群は、全て溝で囲まれた範囲に存在し、東西棟の建物址の棟方向はN-67°-W~N-77°-W、南北棟の建物址の棟方向はN-14°-E~N-24°-Eのものが多く、井戸址は全く検出されなかった。

また、調査区の北東部では、16~18世紀の建物址群や土壇群が混在しており、複雑な様相を呈していた。

第1表 据立柱建物址計測表

陣図番号	遺構番号	規 模			棟 方 向	面 積 ( $m^2$ )	備 考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第 2 図	S B 1	2 × 3	3.46 × 4.76	1.28 ~ 1.82	N-72°-W	16.5	
⊕	S B 2	1 × 2	1.60 × 3.42	1.33 ~ 1.75	N-74°-W	5.5	
第 3 図	S B 3	2 × 2	3.05 × 4.64	1.02 ~ 2.33	N-76°-W	14.2	
⊕	S B 4	2 × 3	3.47 × 4.60	1.02 ~ 2.45	N-13°-E	16.0	
第 4 図	S B 5	2 × 2	3.88 × 4.98	2.28 ~ 2.63	N-82°-W	19.3	
⊕	S B 6	1 × 2	1.44 × 3.57	1.37 ~ 1.97	N-16°-E	5.1	
第 5 図	S B 7	3 × 3	4.18 × 3.59	0.95 ~ 1.81	N-73°-W	15.0	
⊕	S B 8	2 × 3	3.74 × 6.10	1.76 ~ 2.28	N-16°-E	22.8	
第 6 図	S B 9	2 × 3	3.83 × 7.08	1.78 ~ 2.70	N-18°-E	27.1	
⊕	S B 10	2 × 3	3.57 × 5.96	1.28 ~ 3.00	N-70°-W	21.3	
第 7 図	S B 11	2 × 3	4.59 × 6.86	1.44 ~ 2.77	N-71°-W	31.5	
⊕	S B 12	2 × 3	3.61 × 7.06	1.75 ~ 3.36	N-72°-W	25.5	
第 8 図	S B 13	2 × 2	4.85 × 5.09	1.96 ~ 2.64	N-70°-W	24.7	
⊕	S B 14	2 × 2	3.90 × 5.52	1.32 ~ 2.78	N-18°-E	21.5	
第 9 図	S B 15	2 × 2	3.66 × 4.65	1.50 ~ 2.33	N-15°-E	17.0	
⊕	S B 16	2 × 4	3.64 × 7.75	1.57 ~ 2.28	N-21°-E	28.2	
第 10 図	S B 17	2 × 3	3.46 × 6.48	1.60 ~ 3.02	N-22°-E	22.4	
⊕	S B 18	2 × 4	3.15 × 5.85	1.38 ~ 1.77	N-15°-E	18.4	
第 11 図	S B 19	2 × 2	5.12 × 5.60	2.14 ~ 3.10	N-17°-E	28.7	
⊕	S B 20	2 × 2	3.88 × 3.94	1.58 ~ 2.28	N-16°-E	15.3	
第 12 図	S B 21	2 × 2	3.24 × 4.11	1.38 ~ 2.16	N-75°-W	13.3	
⊕	S B 22	2 × 2	3.40 × 5.20	1.55 ~ 2.85	N-73°-W	17.7	
第 13 図	S B 23	2 × 3	5.14 × 5.60	1.50 ~ 2.12	N-72°-W	28.8	
第 14 図	S B 24	4 × 3	5.48 × 6.18	1.32 ~ 2.40	N-73°-W	33.9	
第 13 図	S B 25	2 × 2	4.74 × 5.26	1.84 ~ 2.90	N-15°-E	24.9	
第 14 図	S B 26	2 × 2	3.69 × 5.23	1.64 ~ 2.62	N-15°-E	19.3	
第 15 図	S B 27	2 × 3	5.20 × 6.26	1.25 ~ 2.82	N-14°-E	32.6	
⊕	S B 28	2 × 4	4.00 × 7.13	1.04 ~ 2.52	N-77°-W	28.5	
第 16 図	S B 29	3 × 4	5.16 × 7.53	1.23 ~ 2.78	N-67°-W	38.9	
第 17 図	S B 30	2 × 3	4.49 × 4.51	1.11 ~ 2.35	N-68°-W	20.2	

棟号番号	遺構符号	規		模		棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)				
第17図	S B 31	2 × 4	3.88 × 6.00	1.10 - 1.98		N - 25° - E	23.3	
第18図	S B 32	2 × 2	3.25 × 3.39	1.16 - 2.23		N - 73° - W	11.0	
*	S B 33	1 × 1	2.70 × 3.68	2.63 ~ 3.68		N - 73° - W	9.9	
第19図	S B 34	3 × 4	3.98 × 6.67	1.20 - 2.38		N - 67° - W	26.5	
*	S B 35	1 × 2	1.90 × 5.73	1.90 ~ 3.08		N - 77° - W	10.9	
第20図	S B 36	1 × 2	2.12 × 2.93	1.14 - 2.12		N - 20° - E	6.2	
*	S B 37	2 × 3	4.84 × 5.82	1.56 - 2.60		N - 14° - E	28.2	
第21図	S B 38	2 × 2	5.51 × 5.56	2.48 - 3.03		N - 27° - E	30.6	
*	S B 39	1 × 2	2.23 × 3.00	0.90 - 2.23		N - 73° - W	6.7	
第22図	S B 40	2 × 4	3.63 × 7.33	1.67 - 2.16		N - 15° - E	26.6	
*	S B 41	2 × 4	5.29 × 6.33	1.32 - 1.86		N - 72° - W	33.5	
第23図	S B 42	2 × 3	3.38 × 5.92	1.68 - 2.12		N - 71° - W	20.0	
第24図	S B 43	2 × 2	6.27 × 6.82	0.84 - 3.34		N - 73° - W	42.8	
第25図	S B 44	3 × 5	7.80 × 8.78	1.53 - 2.78		N - 20° - E	68.5	
第23図	S B 45	3 × 3	4.74 × 5.44	0.72 - 1.82		N - 75° - W	25.8	
第26図	S B 46	2 × 5	3.53 × 9.10	1.60 - 2.33		N - 19° - E	32.1	
第27図	S B 47	2 × 2	2.70 × 4.37	1.04 - 2.55		N - 71° - W	11.8	
*	S B 48	1 × 2	2.16 × 3.19	1.37 - 2.16		N - 15° - E	6.9	
第28図	S B 49	2 × 3	2.72 × 5.52	1.32 - 2.20		N - 20° - E	15.0	
*	S B 50	2 × 3	4.19 × 4.99	1.60 - 2.35		N - 68° - W	20.9	

第2表 土坑計測表

押出番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第 29 図	S K 1	長楕円形	1.49	0.39	0.10	N-65°-W	逆台形	
+	S K 2	不整形	0.76	0.64	0.38	N-70°-E	箱形	
+	S K 3	楕円形	1.33	0.72	0.42	N-85°-W	+	
+	S K 4	隅丸方形	1.96	(0.84)	0.24	N-68°-W	逆台形	
+	S K 5	楕円形	1.00	0.77	0.33	N-65°-W	箱形	
+	S K 6	不整形	0.82	0.71	0.15	N-5°-W	逆台形	
—	S K 7	不定形	1.30	0.80	0.19	N-56°-W	+	
—	S K 8	楕円形	1.57	0.90	0.14	N-62°-W	+	
—	S K 9	+	0.96	0.79	0.14	N-17°-E	+	
—	S K 10	不整形	0.84	0.77	0.16	N-17°-E	+	
第 30 図	S K 11	隅丸長方形	2.20	1.16	0.12	N-21°-E	+	
—	S K 12	不整形	0.81	0.71	0.23	N-4°-W	+	
—	S K 13	隅丸三角形	(0.73)	0.56	0.18	N-53°-E	+	
—	S K 14	円形	2.84	2.65	0.23	N-20°-E	摺鉢形	
第 30 図	S K 15	楕円形	1.16	0.83	0.10	N-64°-W	逆台形	
+	S K 16	長楕円形	1.12	0.40	0.24	N-61°-W	摺鉢形	
+	S K 17	不定形	2.35	1.94	0.19	N-52°-W	逆台形	
+	S K 18	楕円形	1.05	0.61	0.45	N-14°-E	摺鉢形	
+	S K 19	不整形楕円形	1.81	1.50	0.20	N-35°-W	逆台形	
第 31 図	S K 20	+	1.25	0.69	0.27	N-18°-E	箱形	
+	S K 21	隅丸長方形	1.09	0.58	0.17	N-21°-E	逆台形	
+	S K 22	不整形	0.65	0.55	0.10	N-45°-W	+	
+	S K 23	+	0.87	0.76	0.20	N-65°-W	箱形	
+	S K 24	円形	1.21	1.13	0.21	N-88°-E	逆台形	
第 32 図	S K 25	隅丸台形	2.43	1.97	0.55	N-76°-E	箱形	
+	S K 26	不整形楕円形	1.28	0.75	0.09	N-26°-W	逆台形	
+	S K 27	楕円形	0.91	0.70	0.07	N-20°-W	+	
+	S K 28	+	0.80	0.62	0.16	N-74°-E	摺鉢形	
第 33 図	S K 29	隅丸三角形	5.25	4.02	0.76	N-31°-E	+	
+	S K 30	不整形楕円形	1.99	1.04	0.58	N-49°-E	+	

神田番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 33 区	S K 31	不整形	0.90	0.77	0.19	N-16°-W	浅い箱形	
第 34 区	S K 32	不定形	1.18	0.44	0.59	N-82°-W	楕円形	
◇	S K 33	楕円形	0.99	0.58	0.12	N-17°-E	逆台形	
◇	S K 34	不整形	0.76	0.68	0.42	N-7°-W	楕円形	
◇	S K 35	円形	0.76	0.74	0.14	N-4°-W	逆台形	
◇	S K 36	隅丸三角形	1.32	0.91	0.17	N-6°-W	◇	
◇	S K 37	不定形	1.18	0.41	0.18	N-10°-W	箱形	
第 35 区	S K 38	不整形	0.71	0.64	0.15	N-45°-E	逆台形	
◇	S K 39	◇	0.78	0.70	0.25	N-5°-W	浅い箱形	
◇	S K 40	不整形楕円形	0.80	0.52	0.25	N-17°-E	楕円形	
◇	S K 41	不整形	0.67	0.62	0.35	N-5°-E	◇	
◇	S K 42	◇	1.13	(0.90)	0.49	N-85°-W	箱形	
——	S K 43	◇	(0.78)	0.76	0.45	N-5°-W	楕円形	
第 35 区	S K 44	◇	0.75	0.66	0.07	N-77°-E	逆台形	
——	S K 45	不定形	(0.81)	(0.40)	0.13	N-77°-E	◇	
第 35 区	S K 46	不整形	0.78	0.64	0.13	N-8°-E	◇	
◇	S K 47	楕円形	1.17	(0.66)	0.04	N-77°-E	◇	
——	S K 48	◇	1.10	0.70	0.39	N-80°-W	楕円形	
——	S K 49	◇	(0.91)	1.19	0.40	N-6°-W	◇	
第 35 区	S K 50	不定形	(2.53)	(1.38)	0.38	N-29°-E	◇	
第 36 区	S K 51	長楕円形	2.13	0.25	0.12	N-71°-W	浅い逆台形	
◇	S K 52	不整形	(0.99)	0.63	0.07	N-41°-W	逆台形	
◇	S K 53	円形	0.71	0.70	0.18	N-35°-E	◇	
◇	S K 54	楕円形	1.30	0.74	0.12	N-74°-W	◇	
◇	S K 55	◇	0.75	0.53	0.11	N-81°-W	◇	
第 37 区	S K 56	隅丸台形	0.65	0.53	0.14	N-67°-E	◇	
第 36 区	S K 57	長楕円形	4.97	0.77	0.36	N-70°-W	楕円形	
第 37 区	S K 58	不整形楕円形	1.08	0.50	0.32	N-15°-E	箱形	
◇	S K 59	楕円形	0.90	0.45	0.14	N-77°-W	楕円形	
◇	S K 60	不整形	0.82	0.76	0.12	N-9°-E	逆台形	

洞番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
—	S K 61	隅丸長方形	(3.38)	0.64	0.15	N-76°-W	逆台形	
第 37 図	S K 62	不整形	0.75	0.63	0.54	N-88°-W	摺鉢形	
◇	S K 63	◇	0.74	0.54	0.09	N-85°-E	逆台形	
第 38 図	S K 64	隅丸方形	0.94	0.82	0.15	N-20°-E	◇	
◇	S K 65	楕円形	0.76	0.50	0.09	N-39°-W	◇	
◇	S K 66	◇	0.75	0.58	0.14	N-23°-E	◇	
◇	S K 67	円形	0.78	0.68	0.11	N-41°-W	◇	
◇	S K 68	楕円形	1.09	0.76	0.29	N-50°-W	摺鉢形	
◇	S K 69	◇	1.26	1.00	0.26	N-28°-E	箱形	
第 39 図	S K 70	不整形	1.54	1.19	0.43	N-69°-W	摺鉢形	
◇	S K 71	楕円形	1.18	0.68	0.11	N-38°-E	逆台形	
◇	S K 72	円形	0.77	0.75	0.26	N-1°-W	摺鉢形	
第 40 図	S K 73	不定形	1.00	0.30	0.09	N-52°-W	逆台形	
第 39 図	S K 74	不整形	1.44	0.96	0.17	N-65°-W	◇	
◇	S K 75	不整形	2.64	1.35	0.10	N-44°-E	◇	
◇	S K 76	円形	0.74	0.73	0.21	N-59°-W	摺鉢形	
第 40 図	S K 77	不整形	1.07	0.91	0.16	N-50°-W	逆台形	
◇	S K 78	不定形	2.30	0.71	0.28	N-69°-W	◇	
◇	S K 79	不整形	1.03	0.70	0.11	N-25°-W	◇	
◇	S K 80	長方形	1.21	0.76	0.27	N-17°-E	箱形	
◇	S K 81	隅丸長方形	0.76	0.50	0.24	N-20°-E	摺鉢形	
第 41 図	S K 82	楕円形	1.48	0.97	0.24	N-17°-E	逆台形	
◇	S K 83	隅丸長方形	1.87	0.80	0.21	N-15°-E	箱形	
◇	S K 84	◇	1.39	1.10	0.30	N-17°-E	◇	
◇	S K 85	不整形	(2.68)	2.20	0.49	N-87°-W	逆台形	
第 42 図	S K 86	◇	1.24	1.10	0.49	N-58°-W	摺鉢形	
◇	S K 87	隅丸長方形	1.14	0.64	0.09	N-20°-E	逆台形	
◇	S K 88	不整形	0.88	0.78	0.12	N-73°-W	◇	
◇	S K 89	隅丸長方形	1.44	0.75	1.20	N-64°-W	箱形	
◇	S K 90	不整形	0.83	0.74	0.33	N-68°-W	◇	

棟圖書号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第 42 回	S K 91	不整楕円形	0.99	0.62	0.22	N-7°-E	逆台形	
第 43 回	S K 92	楕円形	(0.78)	0.96	0.33	N-75°-W	楕鉢形	
+	S K 93	不整方形	1.45	1.30	0.44	N-15°-E	逆台形	
+	S K 94	隅丸長方形	0.91	0.73	0.42	N-70°-W	箱形	
+	S K 95	不定形	(1.64)	0.89	0.14	N-70°-W	逆台形	
+	S K 96	不整円形	0.86	0.63	0.45	N-10°-E	+	
+	S K 97	楕円形	(0.80)	0.66	0.13	N-80°-W	+	
+	S K 98	+	(1.02)	0.76	0.10	N-10°-E	+	
—	S K 99	隅丸方形	0.83	0.74	0.24	N-3°-E	+	
第 43 回	S K 100	鈴形	(1.83)	0.11	0.08	N-46°-W	U字形	
+	S K 101	楕円形	1.71	(1.25)	0.31	N-28°-E	楕鉢形	
第 44 回	S K 102	隅丸長方形	0.84	0.59	0.33	N-73°-W	箱形	
+	S K 103	+	1.16	0.72	0.32	N-72°-W	+	
+	S K 104	長楕円形	4.35	0.40	0.13	N-18°-E	逆台形	
+	S K 105	隅丸方形	1.36	1.19	0.41	N-67°-W	箱形	
+	S K 106	隅丸三角形	(1.69)	1.16	0.51	N-19°-E	+	
—	S K 107	隅丸長方形	(1.82)	1.22	0.19	N-22°-E	逆台形	
第 44 回	S K 108	隅丸方形	1.43	(1.01)	0.33	N-80°-W	箱形	
—	S K 109	不整楕円形	(1.90)	0.90	0.92	N-14°-E	+	
第 45 回	S K 110	隅丸長方形	1.34	1.05	0.90	N-17°-E	+	
+	S K 111	不整方形	1.16	0.95	0.33	N-73°-W	+	
+	S K 112	+	(0.86)	1.09	0.29	N-73°-W	+	
+	S K 113	円形	1.95	1.84	0.42	N-76°-E	楕鉢形	
+	S K 114	+	1.52	1.50	0.62	N-82°-W	箱形	
+	S K 115	楕円形	(0.68)	0.83	1.03	N-25°-E	+	
+	S K 116	+	1.42	0.98	0.18	N-17°-E	逆台形	
—	S K 117	+	1.68	0.90	0.13	N-29°-E	+	
—	S K 118	+	0.96	0.64	0.14	N-14°-E	+	
—	S K 119	隅丸長方形	1.05	0.71	0.12	N-22°-E	+	
—	S K 120	不整円形	1.05	0.90	0.13	N-86°-W	+	

牌図番号	遺構番号	平面形	要 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
——	S K 121	楕円形	1.31	0.90	0.21	N - 8° - E	楕 鉢 形	
——	S K 122	不整形	1.97	1.28	0.34	N - 38° - E	*	
——	S K 123	楕円形	0.80	0.43	0.12	N - 43° - E	逆 台 形	
——	S K 124	*	1.84	0.80	0.38	N - 57° - W	楕 鉢 形	

第3表 包含層出土土器観察表

神田番号	層位	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
1	第Ⅱ層	土師質土器 杯	— ( 2.9 ) — 6.6	平底。	内外面ともロクロナデ。	粘土、黄色。
2	第Ⅰ層	ぐい呑み	6.5 2.3 — 2.4	口縁端、つまみ上げ、低い高台を有する。	全面に輪飾。	伊万里系。
3	第Ⅲ層	青磁 碗	( 2.5 ) — 6.2	高台内の折りが深い。	見込に印花文がある。	淡緑色釉。
4	*	土師質土器 鍋	25.6 ( 5.7 ) — —	口縁部に粘土帯を貼付。	体部外面に拍頭牙痕。 内面ナデ調整。	粘土、黄褐色。
5	*	播 鉢	22.2 ( 8.3 ) — —	片口がみられる。	内外面ともロクロナデ。 赤輪10条1單位。	黄銅。

第4表 遺構出土土器観察表

神田番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
6	S B 42	土師質土器 杯	— ( 3.3 ) — 5.0	平底。	ロクロ目成が残る。 内外面ともロクロナデ。	粘土、淡黄褐色。
7	*	*	11.5 3.3 — 4.4	体部は、外反ぎみに立ち上がる。 平底。	*	*
8	S B 24	青磁 碗	13.6 ( 2.1 ) — —	口縁端は丸味がかかる。	内面に印花文。 内外面、貫入あり。	緑色釉。 粘土、灰白色。
9	S B 14	*	18.0 ( 2.5 ) — —	口縁端は丸味がかかる。 体部は内湾して立ち上がる。	口縁部外面に雷文を施す。 内面に、1条の厚線。 内外面、貫入あり。	淡緑色釉。 粘土、灰白色。
10	S B 13	土師質土器 皿	10.5 2.2 — 6.1	口縁端は、やや外側へ折り返す。 体部は、外反ぎみに立ち上がる。	内外面ともナデ調整。	粘土、黄褐色。
11	*	*	11.6 2.5 — 5.0	体部は、平坦な底面から内湾して外上方に立ち上がる。	*	*
12	S B 26	白磁 皿	8.8 ( 1.5 ) — —	体部は、やや内湾ぎみに立ち上がる。	内外面、貫入あり。	白色釉。 粘土、灰白色。
13	S B 29	土師質土器 皿	13.4 ( 2.6 ) — —	体部は、外反ぎみに立ち上がる。	口縁部は、ヨコナデ調整。	粘土、淡赤褐色。 粘土中に砂粒多し。

種別番号	選情番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
14	S B 31	土師質土器 罎	9.8 2.8 — 3.2	胴部は、外反気味に立ち上がる。	口縁部は、ヨコナゲ調整。	胎土、淡赤褐色。
15	S B 11	土師質土器 罎	24.0 ( 5.5) 28.0 —	ほぼ直立に立ち上がる。胴部から内湾気味に緩く口縁部を有する。	内外面ともナゲ調整。	胎土、黒灰色。 両面に煤状の炭化物付着。
16	S K 124	鏡	10.4 6.2 — 4.8	高台内の削りが深い。	外面に唐草文。 内面口縁部に2条の青線。	全面に透明釉。 伊万里。
17	S K 21	土師質土器 罎	12.2 ( 2.6) — —	胴部は、外反気味に立ち上がる。	口縁部は、ヨコナゲで仕上げる。 胴部にナゲ調整。	胎土、淡赤褐色。
18	S K 30	白 磁 小 皿	9.8 ( 2.0) — —	口縁端は丸く終る。	内外面ロクロナゲ調整。	胎土、乳白色。 透明釉。
19	*	青 磁 碗	15.0 ( 1.5) — —	*	口縁部外面に、倒先状の扉蓋弁が入る。貫入あり。	胎土、灰白色。 淡青緑色釉。
20	S K 38	土師質土器 罎	10.7 ( 2.3) — —	口縁端は、やや尖り気味。	口縁部をヨコナゲ調整。	胎土、淡赤褐色。
21	S K 14	須恵器 蓋	12.8 1.4 — 7.6	口縁端部は丸く終る。	口縁部、ロクロナゲ調整。	胎土、灰色。
22	S K 58	土師質土器 杯	( 2.2) — 5.0 —	平坦な底部から、外反気味に立ち上がる底部を有する。	内外面、ロクロナゲ調整。 ロクロ目が残る。	胎土、淡赤褐色。
23	S K 51	青 磁 皿	12.3 ( 1.4) — —	口縁端部は丸味をもつ。 稜花型である。	口縁部内面に、3条の青線。 全面に貫入が入る。	胎土、灰白色。 淡青緑色釉。
24	S K 70	*	12.4 ( 1.6) — —	*	*	胎土、淡灰色。 淡青緑色釉。
25	S K 89	土師質土器 大皿	47.8 ( 4.6) — —	口縁部と胴部間に稜をもつ。	内外面ナゲ調整。	胎土、淡赤褐色。
26	*	土師質土器 釜	12.7 ( 7.9) 13.4 —	口縁は直立して立ち上がる。 フタはやや下方気味。	*	胎土、暗灰色。
27	*	磁 利	(11.2) 9.9 6.0 —	胴部下手に稜を有する。	内外面ロクロナゲ調整。	備前。
28	*	土師質土器 罎	15.4 ( 8.6) — —	口縁部は、外側に折り返り尖りとなる。	口縁部、ヨコナゲ調整。	

採掘番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
29	SK 80	小 甌	10.4 2.2 — 4.2	平底。	内面縁線。	縁口・高透孔。 内面に重ね焼痕あり。
30	*	甌	6.9 3.6 — 2.7	外反する体部を有し、口縁端はつまみあげている。	高台の外面に2条の界線。	見込に「寿」記。 伊万里系。
31	*	*	8.4 4.4 — 2.4	ハの字状の高台で、削り出しは浅い。	口縁端ロクロナデ。	伊万里。
32	*	*	9.4 4.9 — 3.4	高台の先端はやや尖り気味。	内面口縁部に1条の界線。 外面草花文。	*
33	*	*	12.6 5.1 — 4.8	高台内の削りが深い。	外面口縁部に1本の沈線。	奈半利。 箱巻。
34	*	*	7.8 4.3 — 3.1	体部は、外方へ直線的に立ち上がる。	内面口縁部に1条の界線。	伊万里系。
35	*	*	9.3 5.2 — 3.6	口縁部を外側へ折り返す。	見込に「白鷺」。 内面口縁端2条の界線。	*
36	*	*	11.2 6.2 — 3.9	高台内の削りが深い。	高台外面に2条の界線。	*
37	*	*	10.4 6.8 — 5.4	体部は厚く、口縁端はつまみ上げ。	内面口縁部に2条、底部に1条の界線。	*
38	*	甌	9.2 2.7 — 3.7	体部は直線的である。	内面、見込に雲文。外面、染付。	*
39	*	甌	( 4.5) 5.9 — —	高台内の削りが深い。	外面、体部と高台の境に2条の界線。	*
40	*	*	15.4 6.0 — 6.4	口縁は外開き。 高台の先端は尖り気味。	口縁部を外側へ折り返す。	伊万里。
41	*	*	9.2 5.2 — 4.1	体部は内湾ぎみに立ち上がる。	内面に3条の界線。 外面、縞杉文。	*
42	*	*	17.0 ( 5.6) — —	体部は外開き。	内外面を染付。	*
43	*	*	8.0 5.4 — 3.4	口縁端を丸くおさめる。	外面、縞杉文。	*

標記番号	通稱番号	器種	口径 器高 胴径 底径 注量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
44	S K 89	瓶	1.3 ( 7.4) — —	体部は丸味をもつ。 口縁部は直線的に立ち上がる。	外面全体に、タコ唐草文が施される。	伊万里。
45	・	・	1.4 13.0 6.0 4.0 — —			・
46	・	徳利	(19.8) 8.3 —	体部は直線的に立ち上がる。	外面に梅花文。	・
47	S K 92	土師質土器 小 皿	5.8 1.0 — 3.5	平底の底部に深く口縁部は外上方に立ち上がる。口唇部は尖り気味である。	口縁部はつまみ上げる。 全体をナデ調整。	
48	S K 93	土師質土器 釜	10.8 6.9 11.8 6.2 —	口縁部は直線的に立ち上がり、先端は丸味をもつ。 鈷は、下方へどがる。	内外面とも、ナデ調整。	
49	・	瓶	7.0 3.5 — 3.1	口縁部は丸味をもつ。	外面に染付。	伊万里系。
50	・	・	— ( 1.6) — 2.5	高台はハの字状を呈し、先端は尖り気味。	見込に染付。	・
51	・	蓋	5.2 1.8 — 2.2	外弁部は丸味をもち、つまみを有する。	天弁部外面に染付。	・
52	・	碗	6.2 2.8 — 2.2	高台内の削りが深い。	口縁部をつまみ上げる。	
53	・	・	— ( 2.8) — 3.4	底部にくらべて、体部の器壁は薄い。	外面に染付。 見込に染付。	伊万里系。
54	・	・	10.2 6.4 — 4.2	高台は、ハの字状で厚みは薄い。	内外面に染付。	・
55	・	・	10.2 ( 4.5) — —	体部に深く口縁部は直線状に外上方へ開く。	口縁部内面に2条の界線がある。 体部外面に染付。	・
56	・	・	( 4.0) — 5.6	高い高台をもち、内湾気味に体部がのびる。	高台外面に2条の界線が施される。	・
57	S K 99	紅藍口	4.6 1.2 — 1.4	口縁部は縁取りをして平直にしている。	内外面に白色釉がみられる。	伊万里。
58	S K 101	碗	10.0 5.7 — 4.2	丸味を持った体部に深く口縁部は直線状に外上方に開くが、わずかに外反する。	体部外面及び見込に染付。	伊万里系。

標頭番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
59	S K 105	碗	11.4 7.0 — 4.3	高台内の削りが深い。	外面に染付。	瀬戸・美濃系。
60	S K 106	土師質土器 釜	10.4 ( 3.2) 10.7 —	口縁部は直線状に立ち上がる。 胴は下方気味。	全体をナデ調整。	
61	*	皿	9.6 2.9 — 5.2	高台の幅は広い。	外面に染付。	能高山。
62	*	碗	8.4 3.3 — 3.2	底形にくらべて、体部は厚みをもつ。	高台部を除き、施釉。	唐津系統か？
63	*	*	12.4 5.0 — 4.3	高台内の削りが深い。	足元の輪を、蛇目状にかき取る。	*
64	*	*	9.4 4.8 — 3.3	口縁部を外方へやや折り返す。	外面に染付。	伊万里。
65	*	瓶	( 6.9) 9.1 4.2 —	球形の体部をもつ。	外面上部に染付。	*
66	S K 109	龍 鉢	2.7 ( 4.5) — —	口縁部は丸味をおびる。	口縁部に2本の沈線。 ロクロナデ調整。	備前。
67	*	皿	14.2 3.2 — 8.4	高台の高さは低い。	口縁内面に染付。	伊万里。
68	S K 110	碗	10.8 ( 4.4) — —	体部の器壁は薄い。	外面に唐草文を、内面口縁部に 帯状の雲形文を染付。	
69	*	*	10.0 7.0 — 5.8	体部は直線的にのびる。	外面に線を染付。	瀬戸・美濃系。
70	*	*	10.7 ( 5.1) — —	体部は、流線的に外方へのびる。	外面に給付。	伊万里。
71	*	*	8.4 4.0 — 2.8	高台内の削りが深い。	外面、高台内に染付。	
72	S K 121	土師質土器 杯	( 2.0) — 3.6 —	平底。	内面にロクロ目が残る。	粘土、淡黄褐色。
73	S D 1	*	13.7 ( 2.5) — —	体部は直線的である。	口縁部内外側をナデ調整する。	粘土、褐色。

標頭番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
74	SD 1	土師質土器 杯	13.0 3.8 — 5.6	平坦な平底をもち、体部は直線的。	両面共に、ロクロナダ調整。 内面にロクロ目が残る。 底部は、回転糸切り。	
75	*	土師質土器 罎	35.8 (10.7) — —	口縁部が外側へ反曲している。	外面、縦方向のハケ調整。	
76	*	*	52.6 ( 7.3) — —	*	外面、ハケ調整。	
77	*	*	34.4 ( 5.5) — —	口縁部は内湾する。	口縁部をへら切り調整。	
78	*	瓦質土器 罎	全長(5.4) 径 1.7	棒状の脚部である。	端部を指ナゲする。	色黒、洗灰灰色。
79	*	摺鉢	24.8 11.7 — 10.4	口縁部は内湾する。	内面に、8条1単位の条線。	錆色。
80	*	*	28.4 ( 8.8) — —	口縁は内湾さみ。	内面に、9条1単位の条線。 内外面とも、ロクロナダ調整。	*
81	*	*	30.0 ( 7.8) — —	口縁部は、やや内湾して立ち上がる。	口縁部、ロクロナダ調整。体部、 ロクロナダ調整。	*
82	*	*	31.2 ( 6.1) — —	口縁部は丸味をもつ。	体部、内面に5条の条線。	*
83	*	*	— ( 5.4) — 10.0	瓶頸の破片。体部は厚みをもつ。	内面に10条1単位の条線。	*
84	*	青磁 碗	15.4 ( 4.8) — —	口縁部を軽く外側へ折り返す。	口縁部を外方へ折り返す。	胎土、灰白色。 洗緑色釉。
85	*	*	— ( 2.3) — 5.0	高台内の削りが浅い。	器付にも施釉。 金剛に貫入が入る。	胎土、淡赤灰色。 淡青緑色釉。
86	*	白磁 皿	10.0 2.1 — 4.3	高台端をへら切り。	内面口縁部から、外面高台部ま で施釉。 貫入が入る。	胎土、灰白色。 白色釉。 口はげ。
87	*	染付 碗	15.0 ( 4.5) — —	器壁は厚い。	口縁部内面に2条の界線。 外面には、波とう文とアラベスク 文が施付される。	胎土、灰白色。 白色釉。
88	*	碗	— ( 1.9) — 5.4	高台内の削りが浅い。	高台外面に3条の界線。 体部に藍と黄を施文。	胎土、灰白色。 伊万里系。

神器番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
89	SD 1	碗	10.6 ( 3.8 ) — —	体部は丸味をもつ。	体部外面に絵付。	粘土、灰白色。
90	*	皿	— ( 1.4 ) — 7.0	高台内の削り出しが浅い。	砂止め。 見込に絵付。	*
91	SD 2	瓦質土器 撰鉢	26.6 ( 9.5 ) — —	口縁端部を凹取り。	内面、ヨコナゲ調整。 細い糸線。	外面に拍痕圧痕。
92	*	撰鉢	31.0 ( 6.5 ) — —	口縁端は丸味をもつ。	内面に細い糸線。	備前。
93	SD 3	土師質土器 釜	14.8 ( 5.7 ) — —	口縁端を折り返す。	内外面ともヨコナゲ調整。	
94	*	撰鉢	25.8 9.0 — —	口縁端は、直線的に立ち上がる。	内面に細い糸線。	備前。
95	*	德利	2.5 15.2 8.3 5.9	体部下方で、押え込みによる膨 形成形。	全体をロクロナゲ調整。	*
96	SD 5	瓦質土器 鉢	16.5 8.2 18.0 16.6	底部に3個の脚がつく。	内面に拍痕圧痕。	
97	*	碗	10.7 5.0 — 4.2	口縁部は、つまみ上げ。	体部下半に拍痕遺存。 内面口縁部に雷文を絵付。	伊万里系か？
98	*	蓋	9.5 2.8 — 3.5	天弁部は丸味をもつ。	外面及び見込に絵付。	能楽山。
99	SD 6	*	4.3 1.4 — 2.6	天弁部につまみを有する。 口縁端に盛りが付く。	天弁部外面に拍痕。	
100	*	碗	— ( 2.5 ) — 3.1	高台先端は尖る。	高台外面に2本の糸線。	
101	*	*	9.2 ( 4.3 ) — —	体部は内湾する。	外面に登の拍痕上縁。	京焼。
102	*	皿	12.2 3.3 — 4.2	高台内への削りは浅い。	底面外面に磨青。 見込、能ノ目輪ハギ。	
103	*	碗	12.4 4.6 — 4.8	高台内の削りが深い。	ロクロナゲ調整。	赤平利。 陶器。

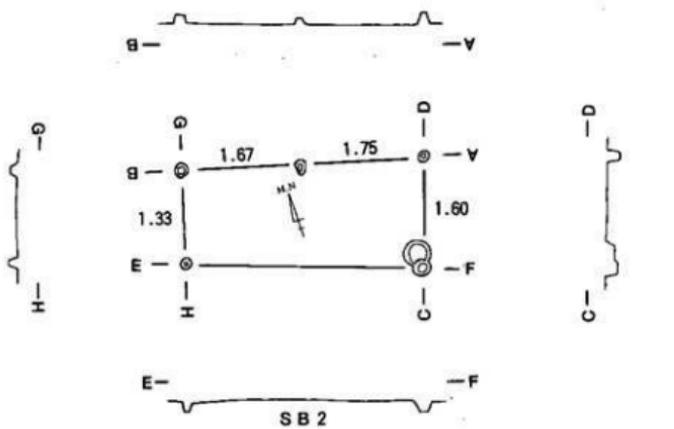
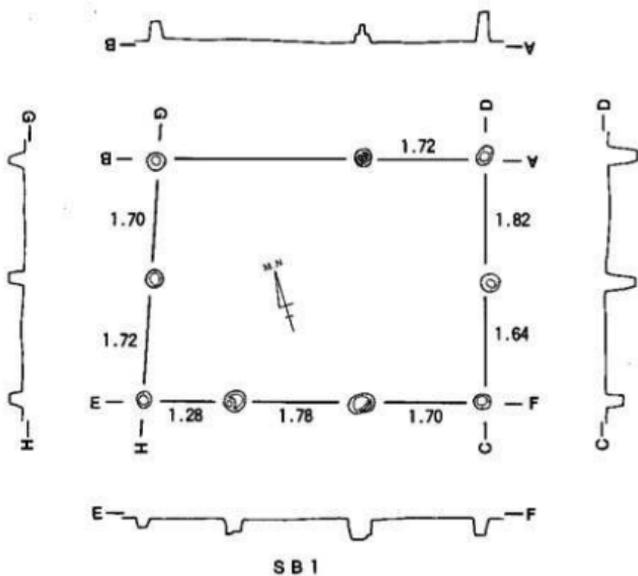
押出番号	遺情番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
104	S D 6	鍋	( 3.1 ) — 5.8	体部は内湾のみ。	高台外面に3条の界線。	磁器。
105	+	香 炉	( 3.2 ) 9.5 3.6	胴部に3ヶ所の突起をもつ。	見込に、細かい砂粒が密着して いる。	+
106	+	蓋	10.0 3.0 — 5.0	天井部は平直である。	天井部に発付。	
107	S P 1	仏飯器	( 3.7 ) — 3.7	体部は、表縁状に立ち上がる。	高台端は、面取りを施す。	伊万里系。
108	P 1	須恵器 蓋	12.9 ( 1.9 ) — —	口縁部を内側へ折り返す。	内外面ともロクロナゲ調整。	粘土、灰白色。
109	+	+	13.6 ( 1.2 ) — —	+	+	胎土、灰色。
110	+	須恵器 杯	( 1.3 ) — 8.1	低い高台を貼付する。	内外面ともロクロナゲ調整。 底面内面は、ナゲ調整。	
111	+	+	( 2.0 ) — 10.2	平底の底部から、外方へ直線的 に立ち上がる。	不明。	磨耗が著しい。
112	+	須恵器 皿	13.8 2.3 — 13.0	口縁端は丸くおさめる。	口縁部をロクロナゲ調整。	
113	P 2	須恵器 杯	( 2.1 ) — 9.0	ハの字状の高台を貼付する。	体部を、ロクロナゲ調整。	
114	P 4	+	( 2.6 ) — 9.4	+	+	
115	P 9	土師質土器 甌	17.4 2.2 — 9.0	体部は、外方へ直線的にのびる。	口縁部はヨコナゲ調整。	粘土、褐色。
116	P 11	+	10.2 ( 2.4 ) — —	体部はやや内湾気味である。	+	
117	P 10	甌	( 2.1 ) — 5.6	高台端面を面取りする。	体部は薄く仕上げる。	陶器。
118	P 12	土師質土器 杯	11.6 3.9 — 4.6	体部は、直線的に立ち上がり、 口縁端は面取り。	内面にロクロ目が残る。	

採掘番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 口径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
119	P 12	土師質土器 杯	10.9 3.8 — 4.7	平底。	体部はナゲ調整。	
120	P 15	土師質土器 皿	12.2 2.4 — 7.6	体部は厚みをもつ。	口縁部はヨコナゲ調整。 体部はナゲ調整。	
121	＊	＊	11.8 ( 2.4) — —	体部は外反する。	口縁部、ヨコナゲ調整。	
122	P 14	碗	13.2 ( 3.9) — —	口縁部は丸味をもつ。	外面に染付。	
123	＊	＊	— ( 6.0) — 4.0	体部は丸味をもち、内湾する。		尾戸。
124	P 13	土師質土器 杯	— ( 4.5) — 4.5	平底。	内外面にロクロ目模様をもつ。	
125	P 16	青磁 碗	12.7 ( 3.2) — —	体部は、内湾気味に立ち上がる。	体部外面に、削先状の磨弁。	胎土、淡赤褐色。 緑色釉。

第5表 遺構出土石器観察表

採掘番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, g)	材 質	特 徴	備 考
126	S D 1	石 斧	10.9 1.4 1.3 25.6	粘板岩	磨製の柱状片及び斧。	瓶入である。
127	P 13	叩 石	14.9 5.2 2.8 315.0	砂 岩	楕円状の敲打痕をもつ。	
128	P 2	石 棍	(4.6) (3.0) 0.9 11.0	粘板岩	方棍である。 断面を有する。	
129	S K 55	＊	(4.0) (2.7) (7.0) 5.0	＊	＊	
130	S P 1	＊	(10.0) 5.9 1.9 145.6	＊	よく研磨された方棍で使用痕が残る。	
131	＊	＊	(15.7) 6.0 1.6 230.0	＊	＊	

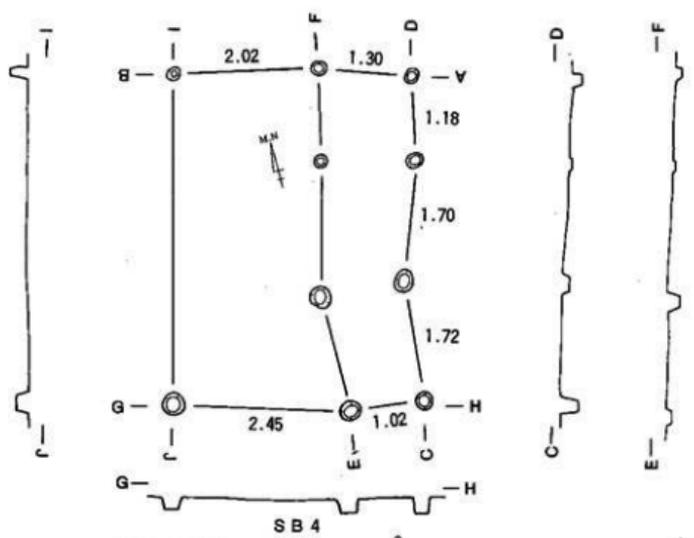
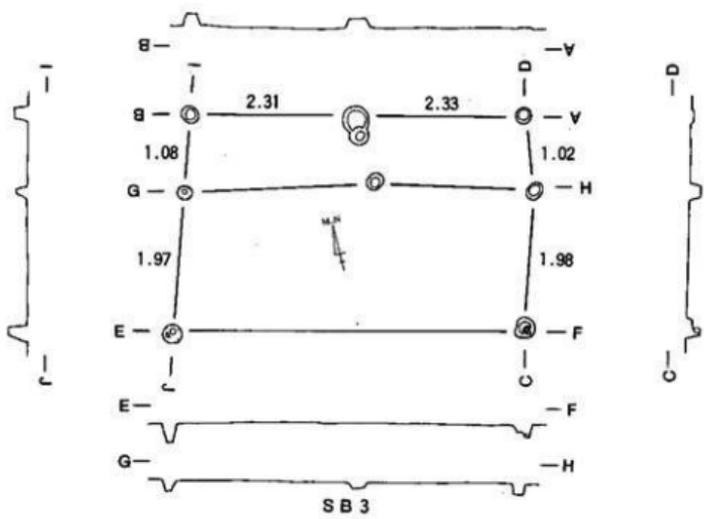
押出番号	造機番号	器 種	計測値 (mm, g)	最大長 最大幅 最大厚 重量	材 質	特 徴	備 考
132	S K 108	紙 石		8.8 (6.2) 3.9 365.4	砂 岩	1 面は剥離面であるが、その他は研削面で 疵痕を有す。	
133	P 1	*		(5.6) (4.9) 0.9 31.0	*	1 面のみが、研削面。その他は剥離面。 疵痕を有す。	
134	*	*		10.4 4.5 2.4 145.4	*	3 面が研削面。	



DL = 7.20m



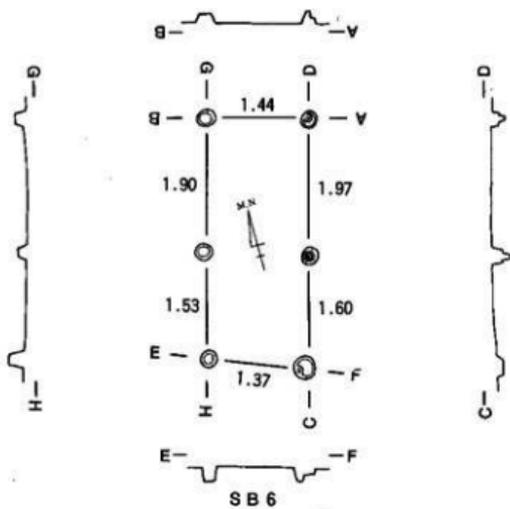
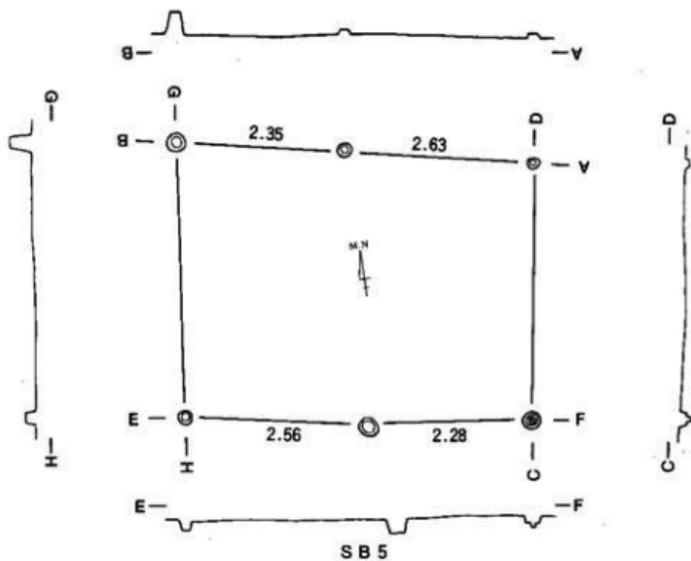
第2圖 SB 1 · 2



D L = 7.20m



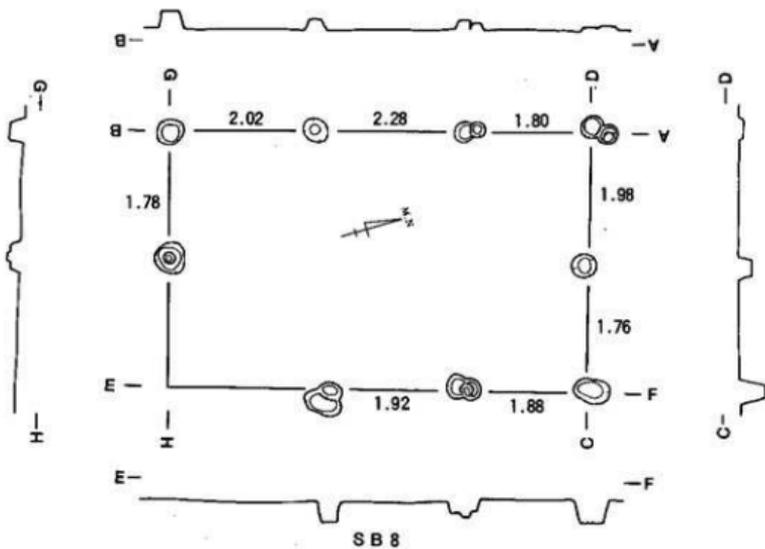
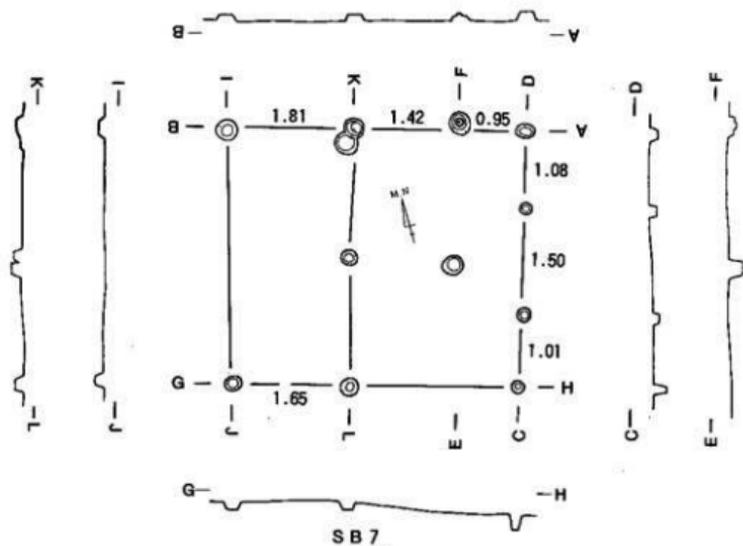
第3圖 SB 3 · 4



DL=7.20m



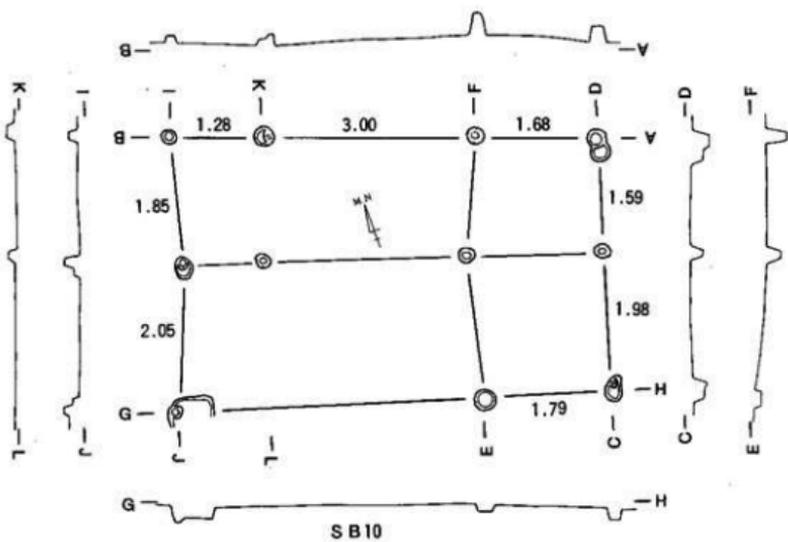
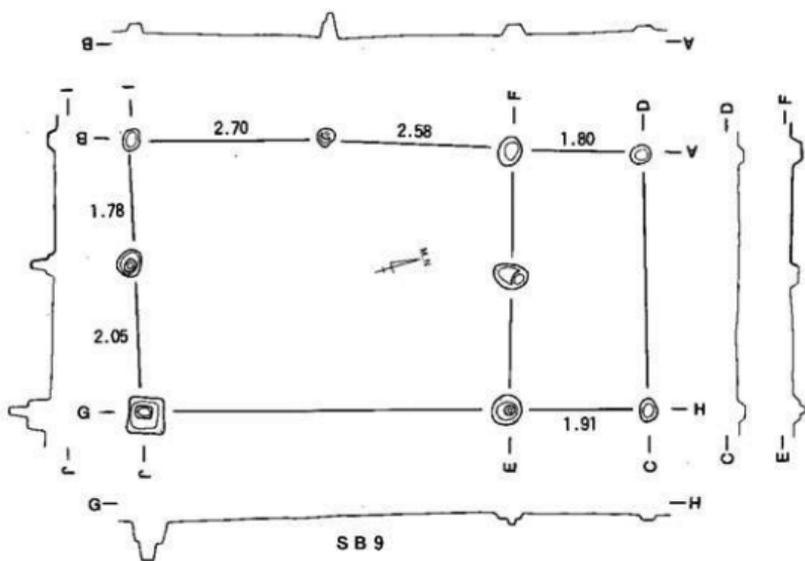
第4圖 SB 5・6



DL=7.20m



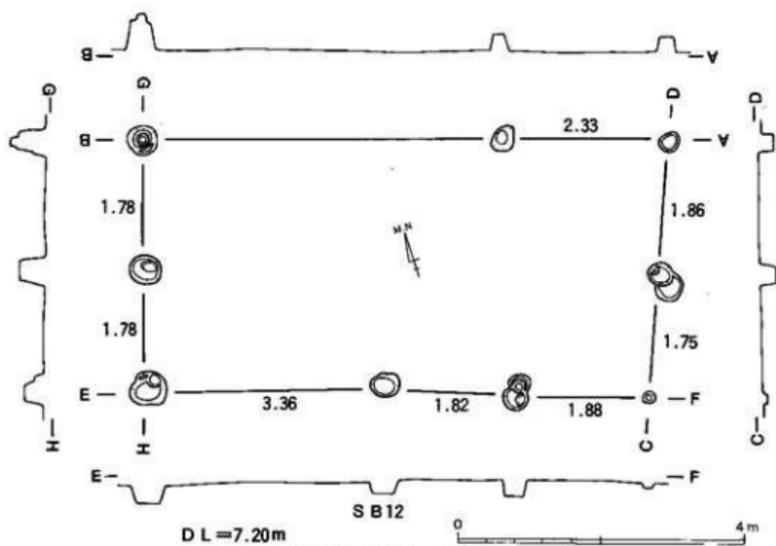
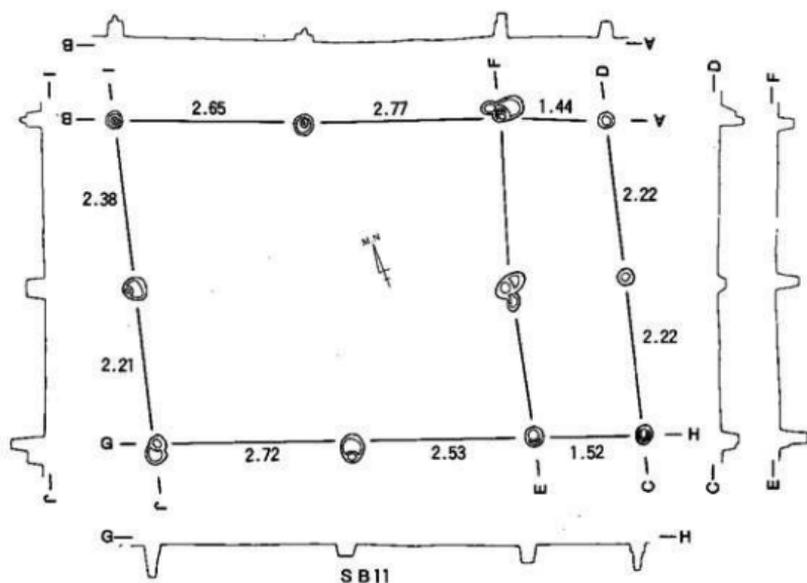
第5圖 SB 7 · 8



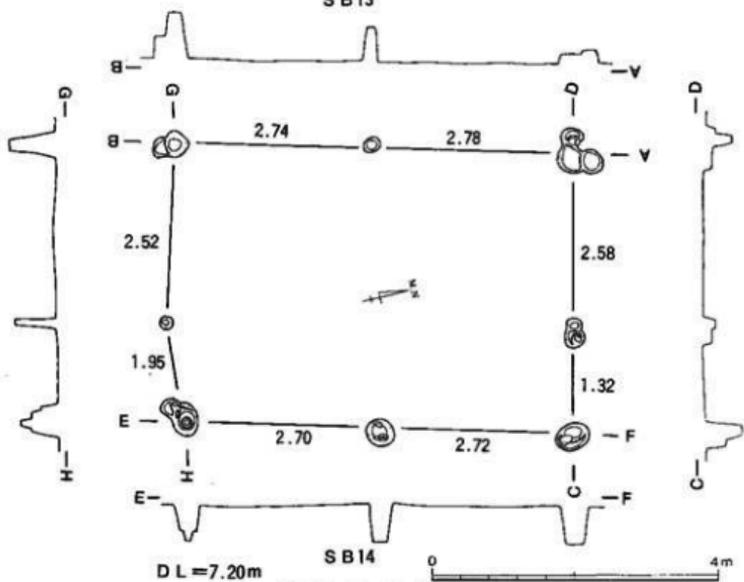
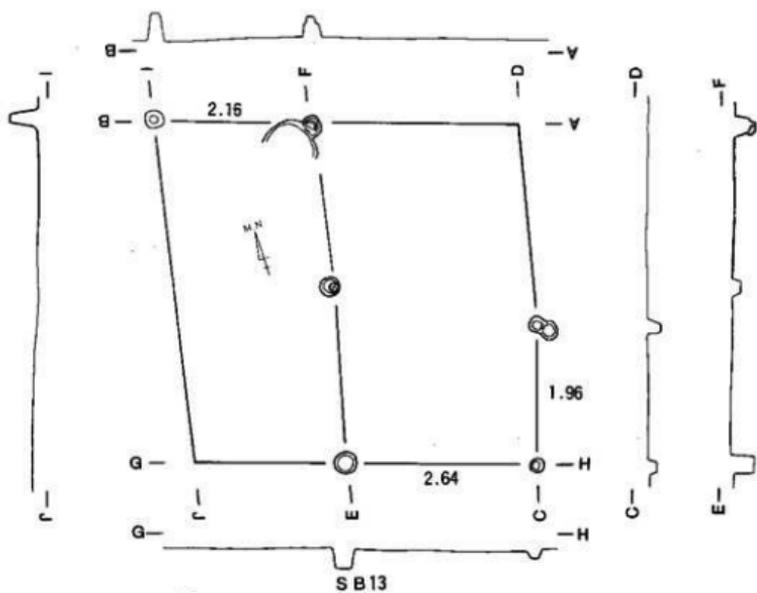
DL = 7.20m

0 4m

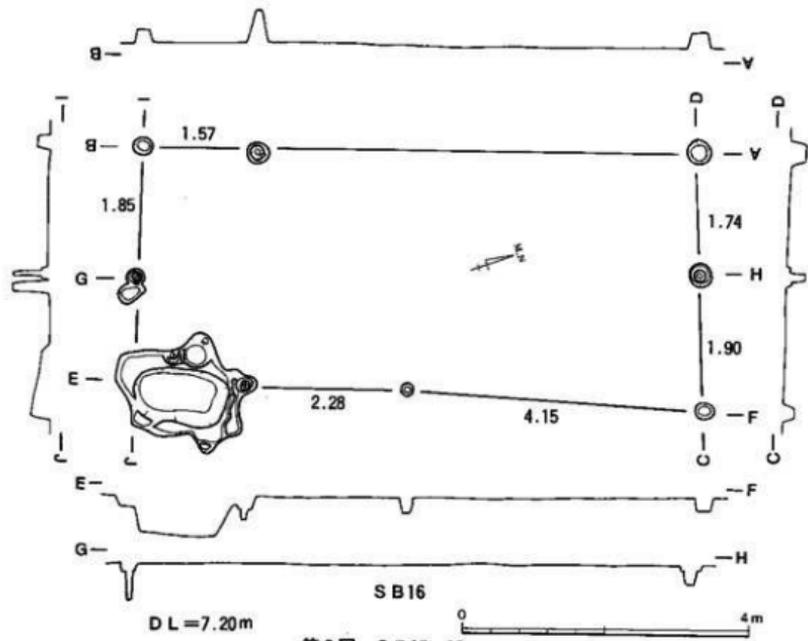
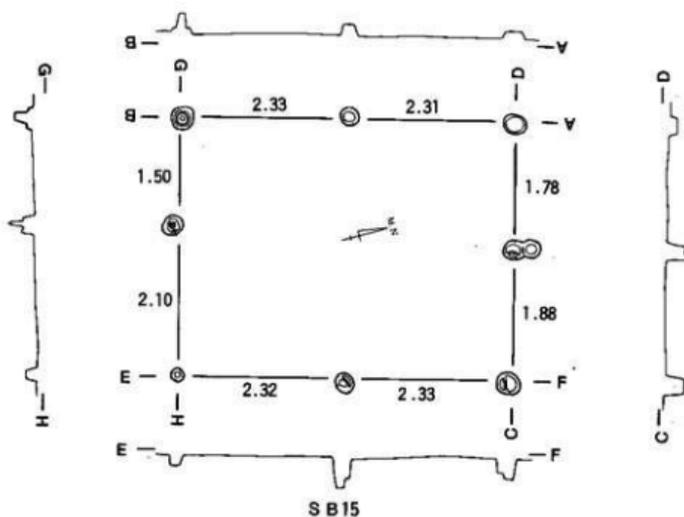
第6圖 SB 9・10



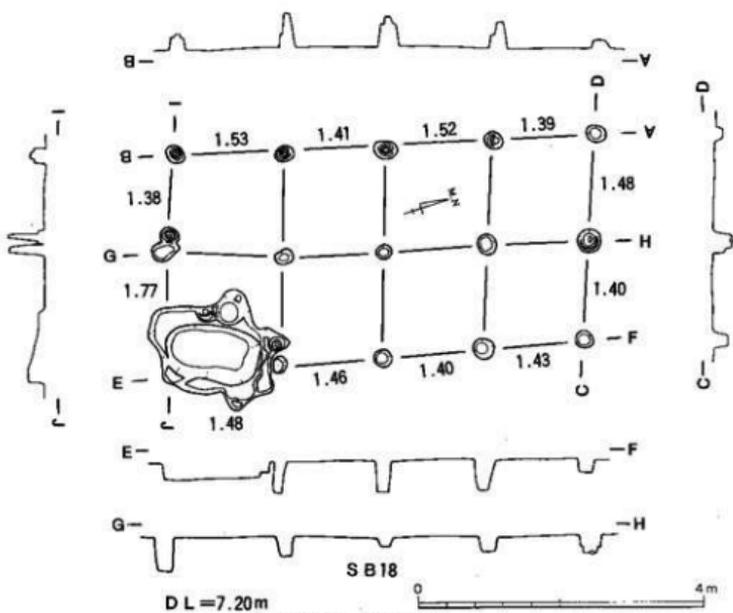
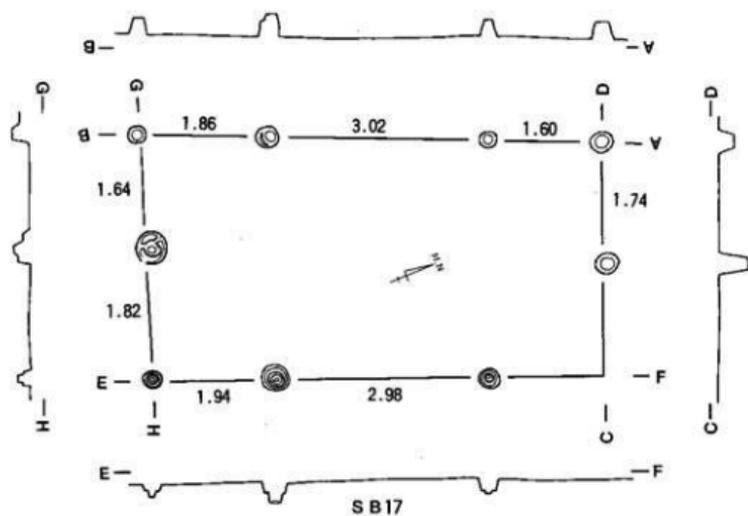
第7图 SB11·12



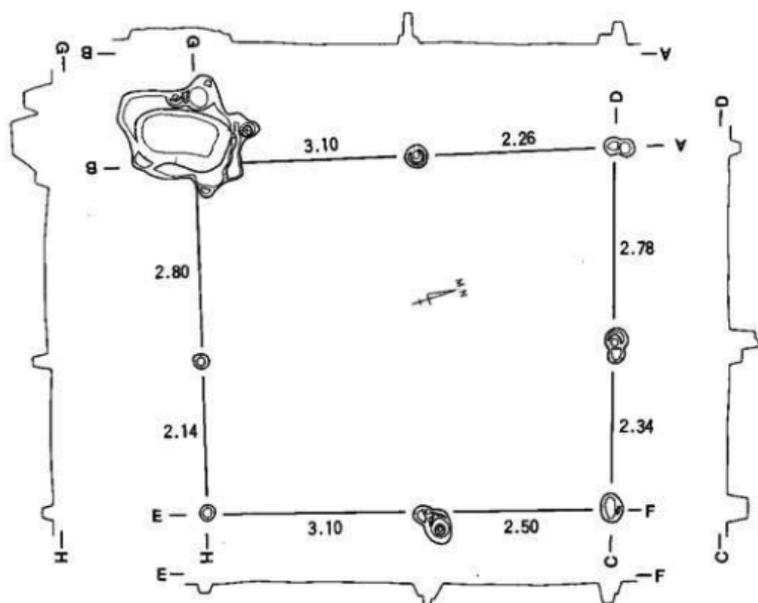
第 8 圖 SB 13 · 14



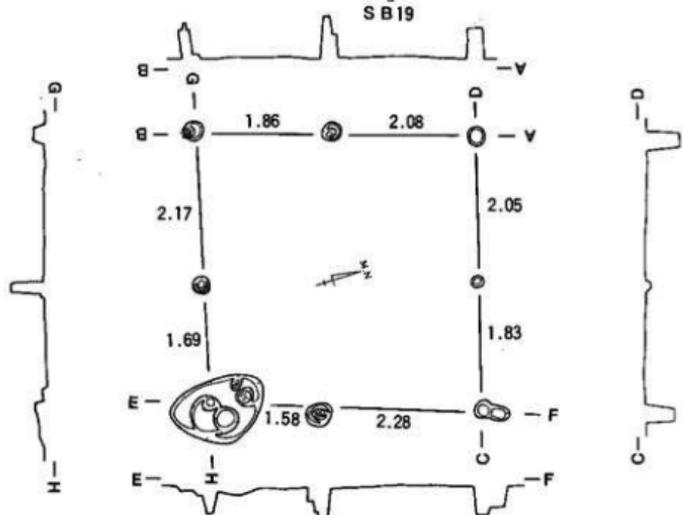
第9圖 SB15・16



第10圖 SB17・18



SB 19

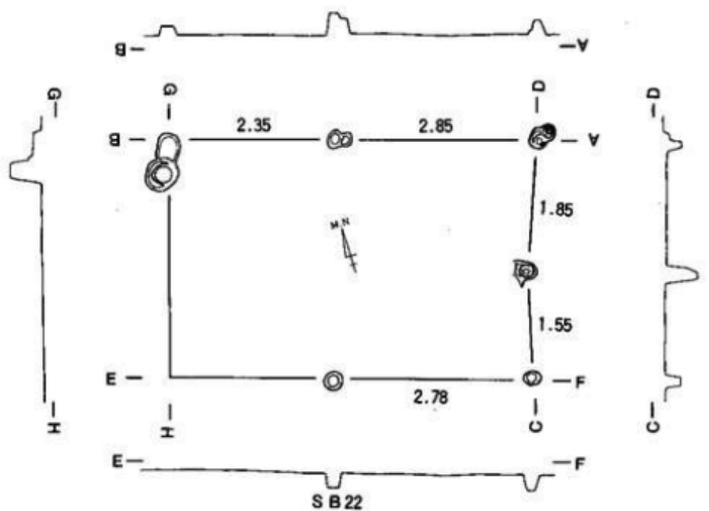
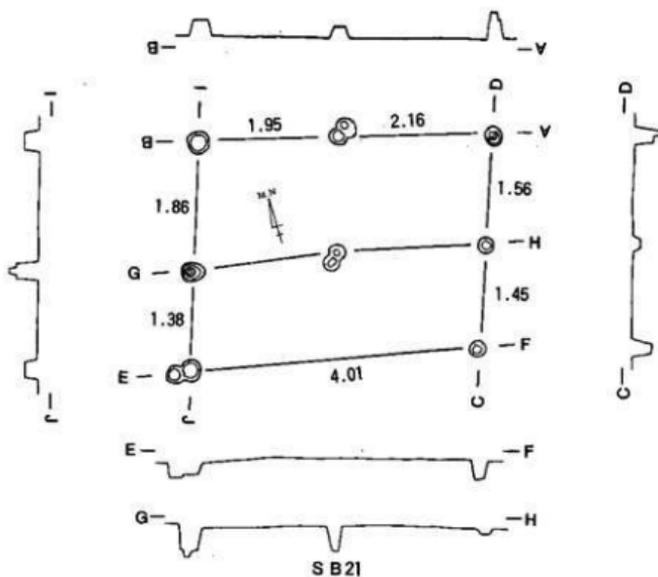


DL = 7.20m

SB 20

第11圖 SB 19 · 20

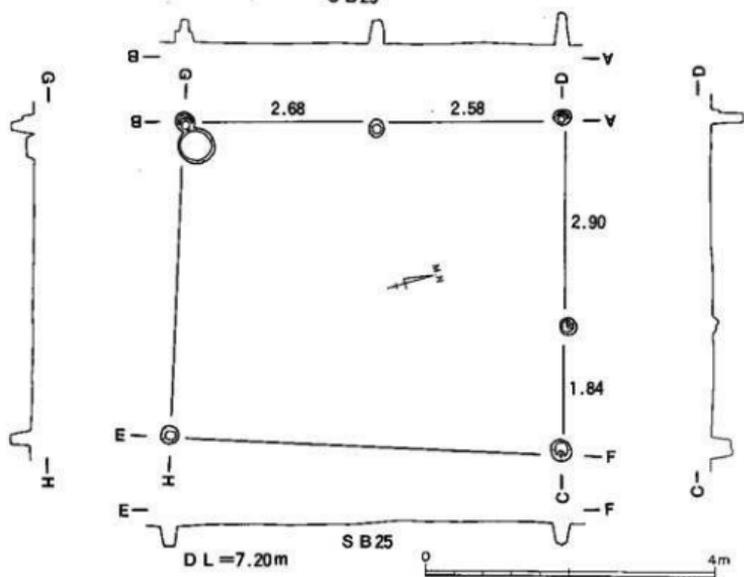
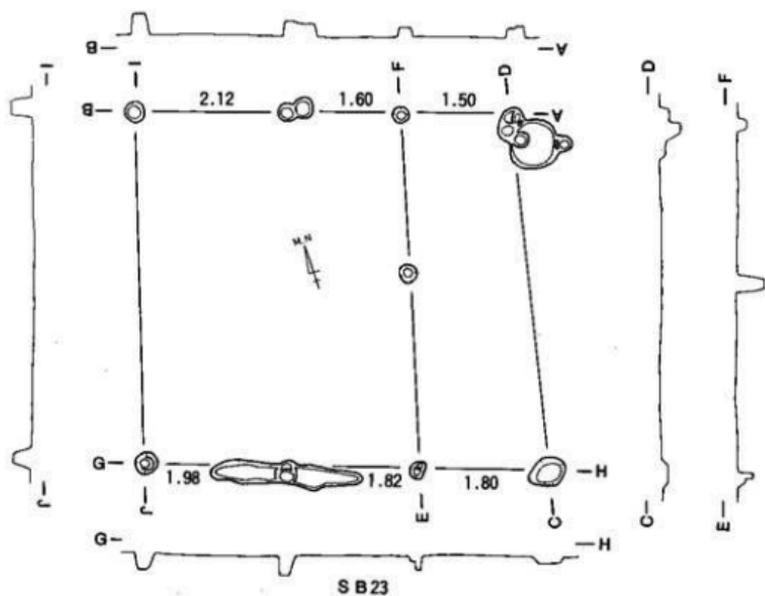
0 4m



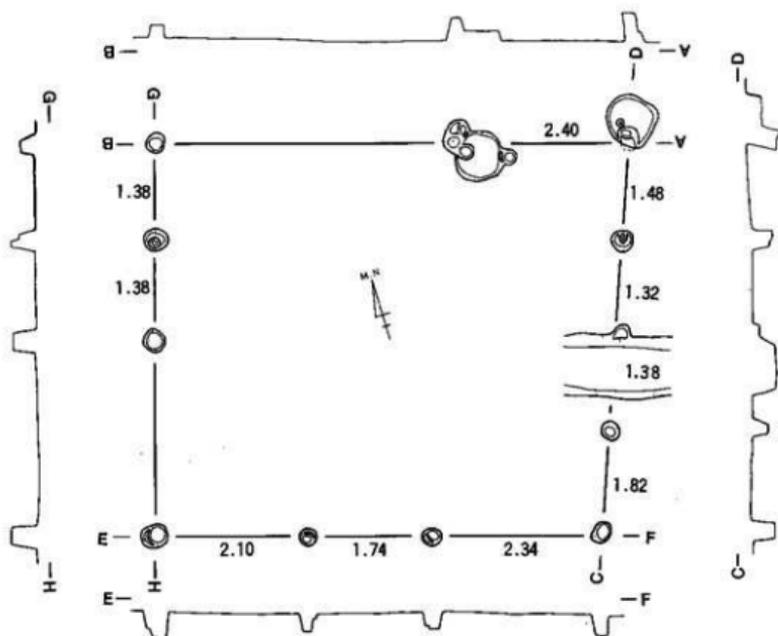
DL = 7.20m

0 4m

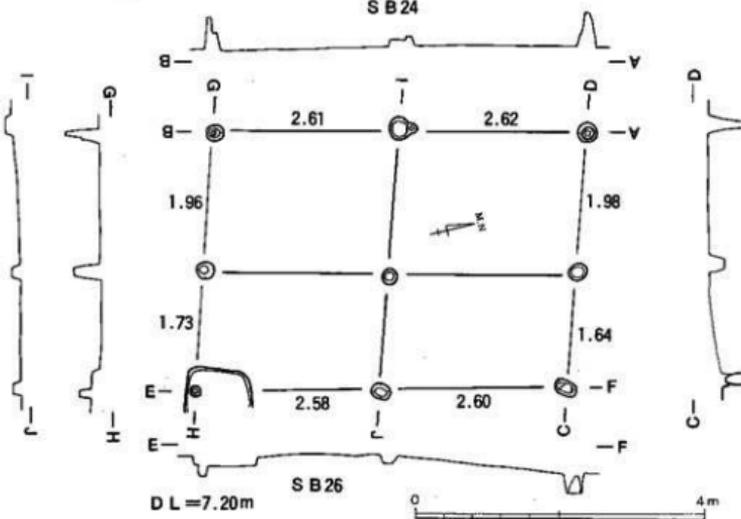
第12圖 SB 21 · 22



第13圖 SB 23・25



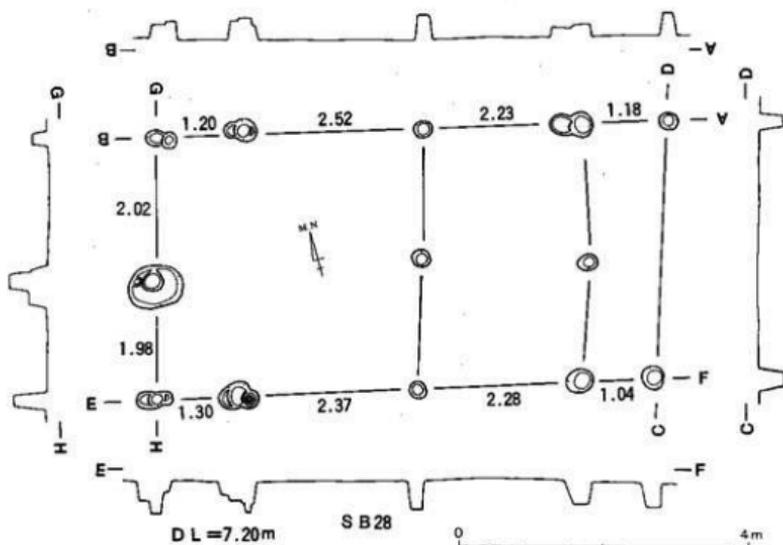
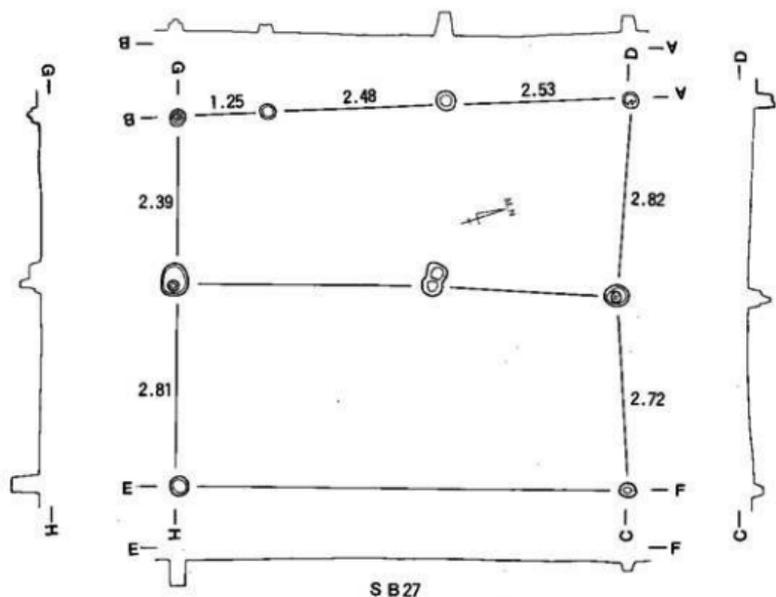
SB 24



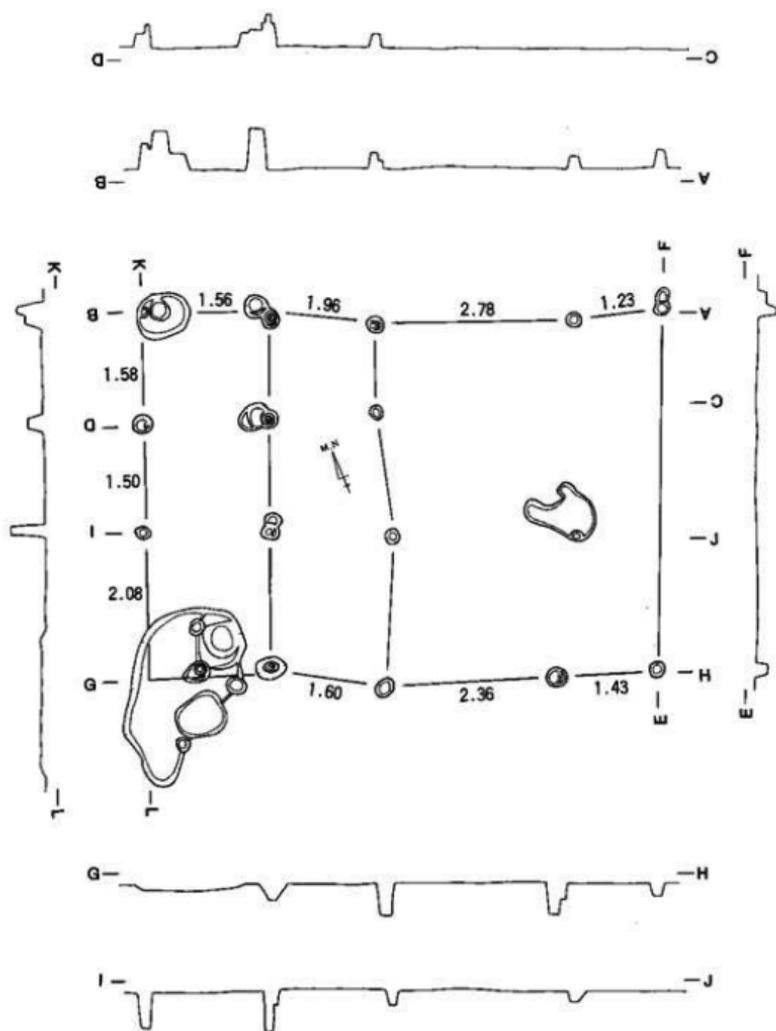
SB 26

DL = 7.20m

第14圖 SB 24・26



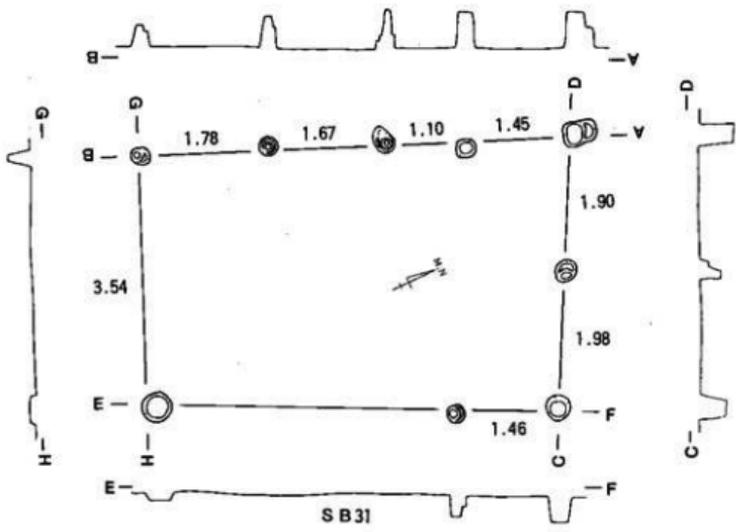
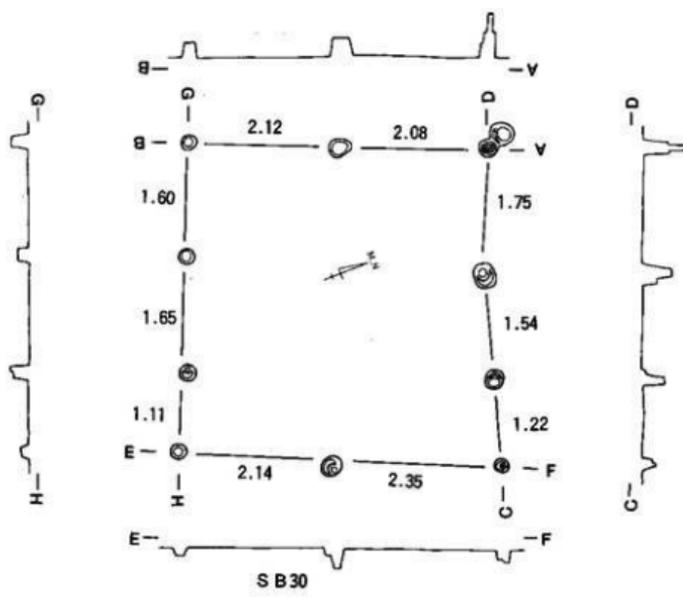
第15圖 SB 27・28



SB 29

DL = 7.20m

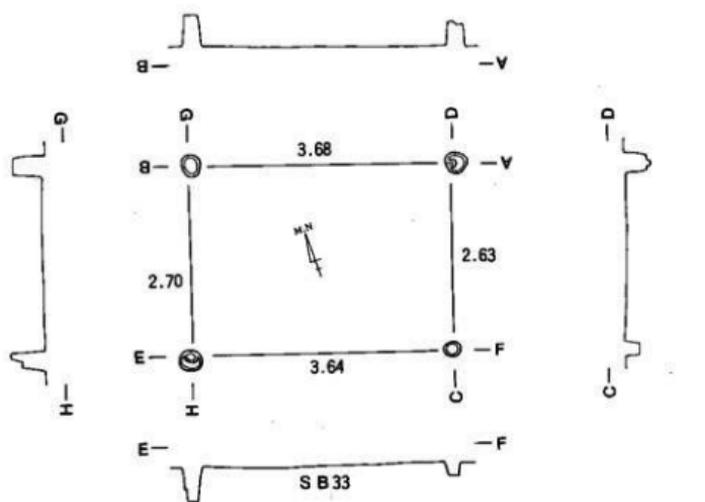
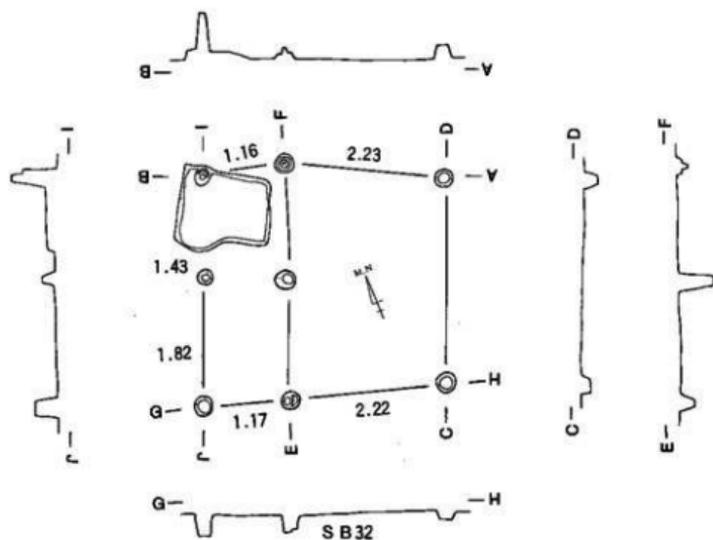
第16圖 SB 29



DL = 7.20m



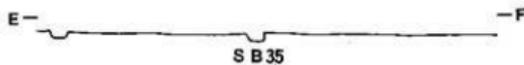
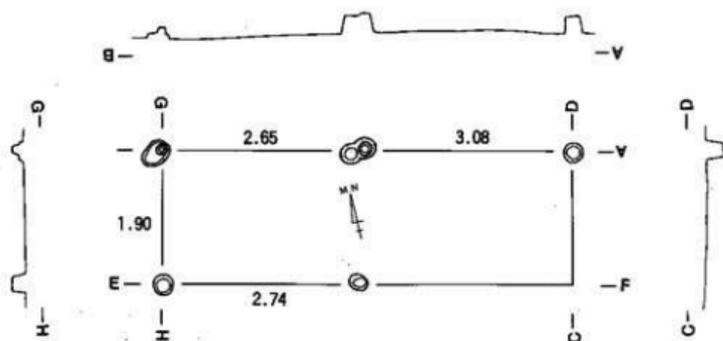
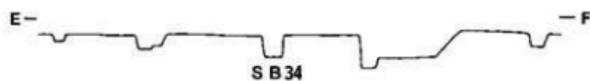
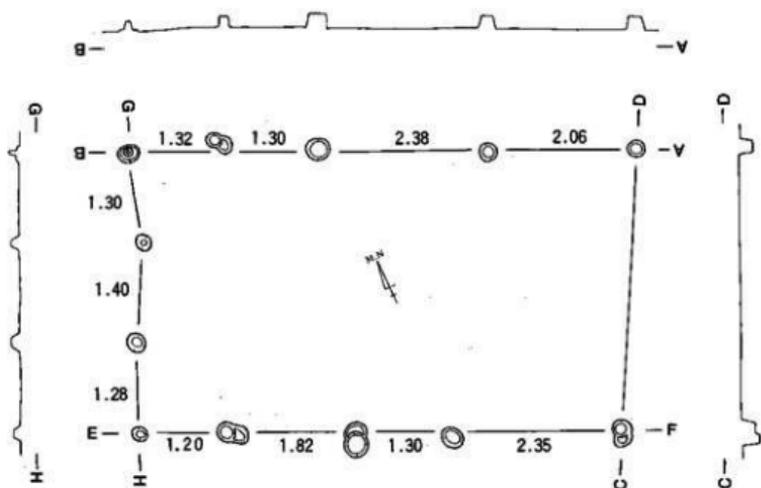
第17圖 SB 30 · 31



DL=7.20m

0 4m

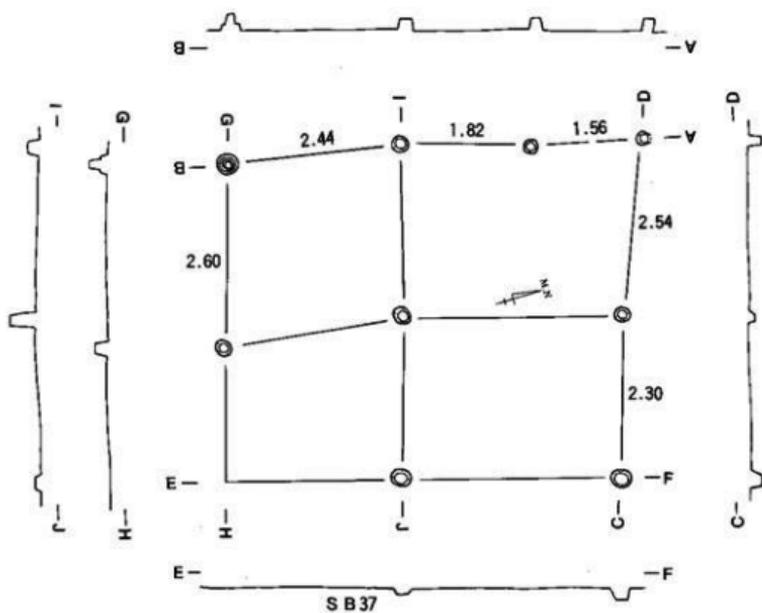
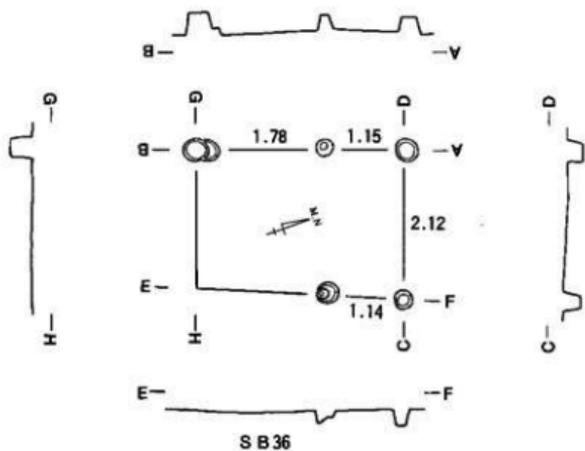
第18圖 SB32・33



DL = 7.20m



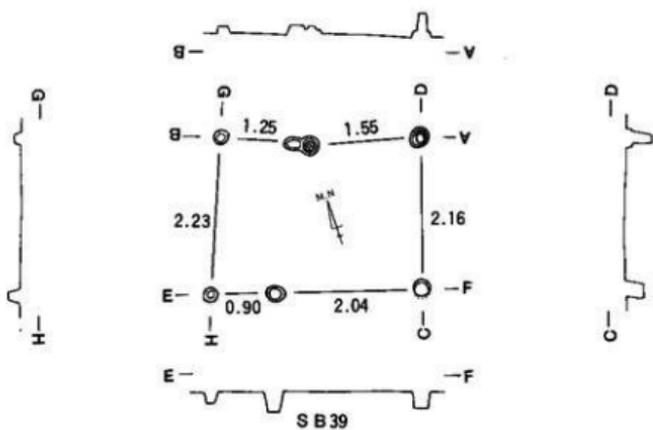
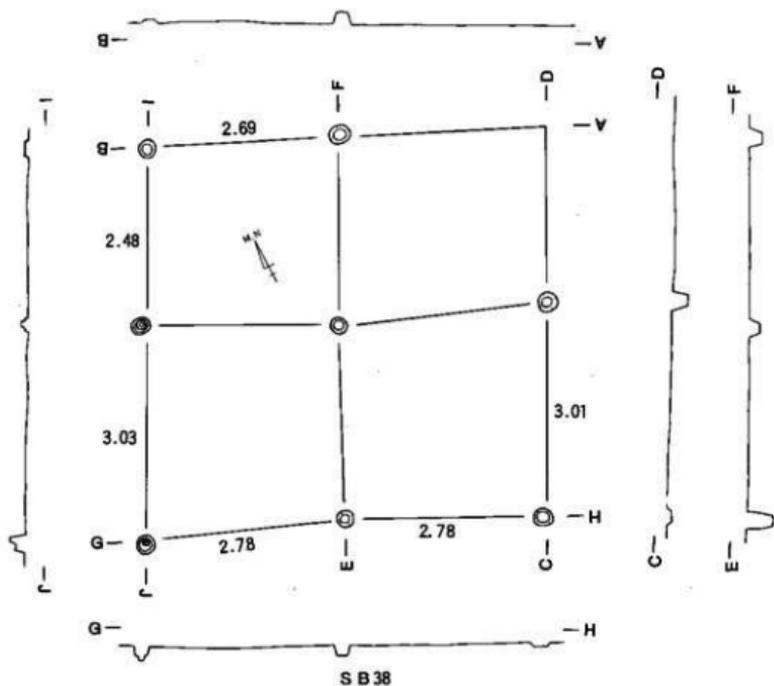
第19圖 SB 34 · 35



D L = 7.20 m

0 4 m

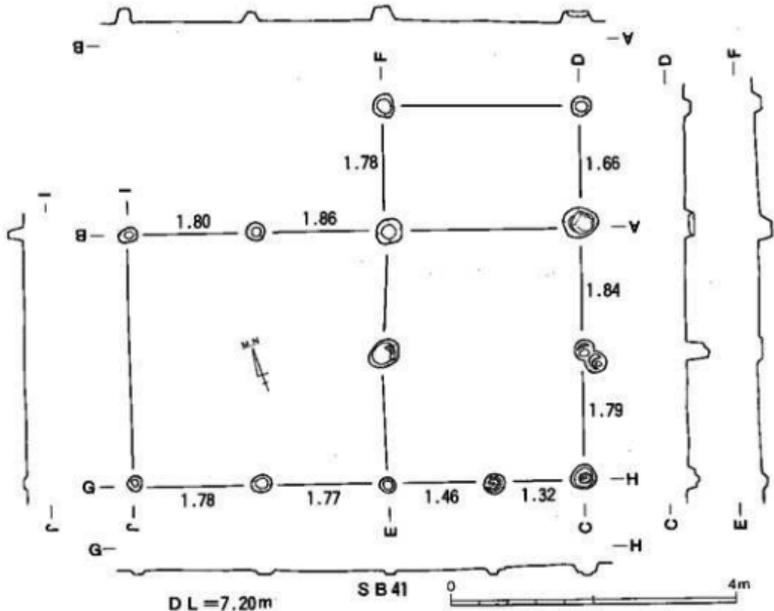
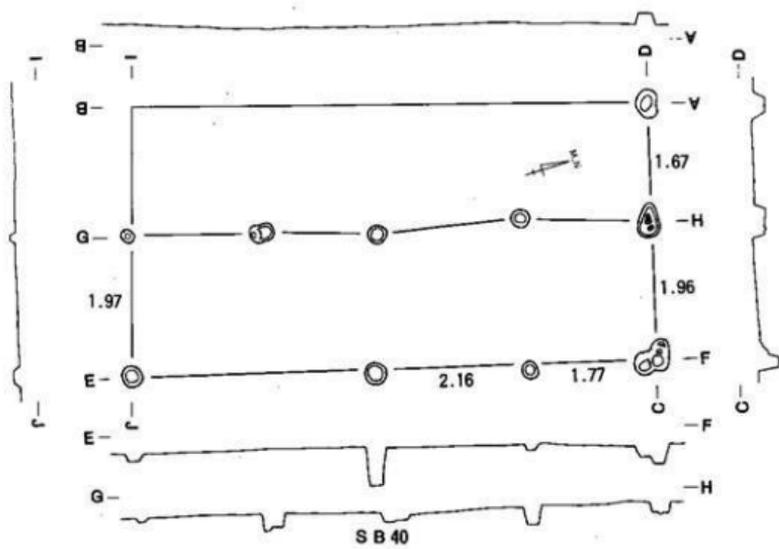
第20圖 SB 36 · 37



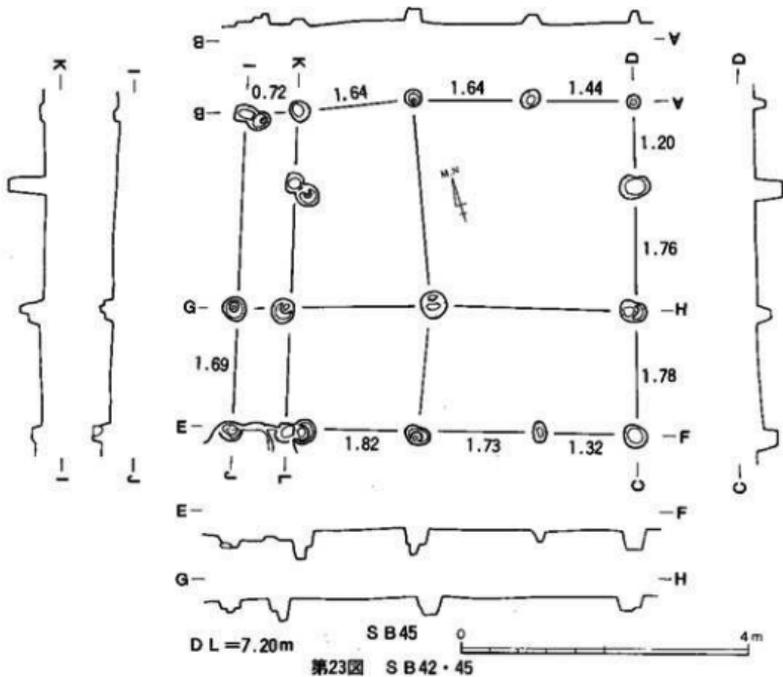
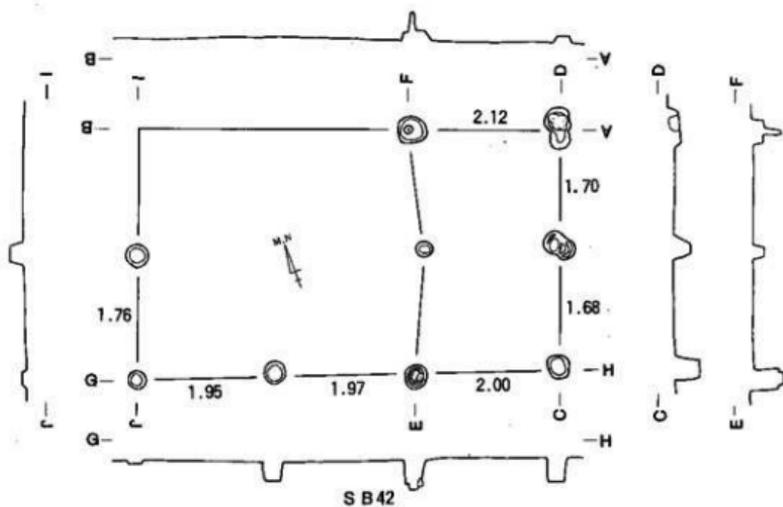
DL = 7.20m

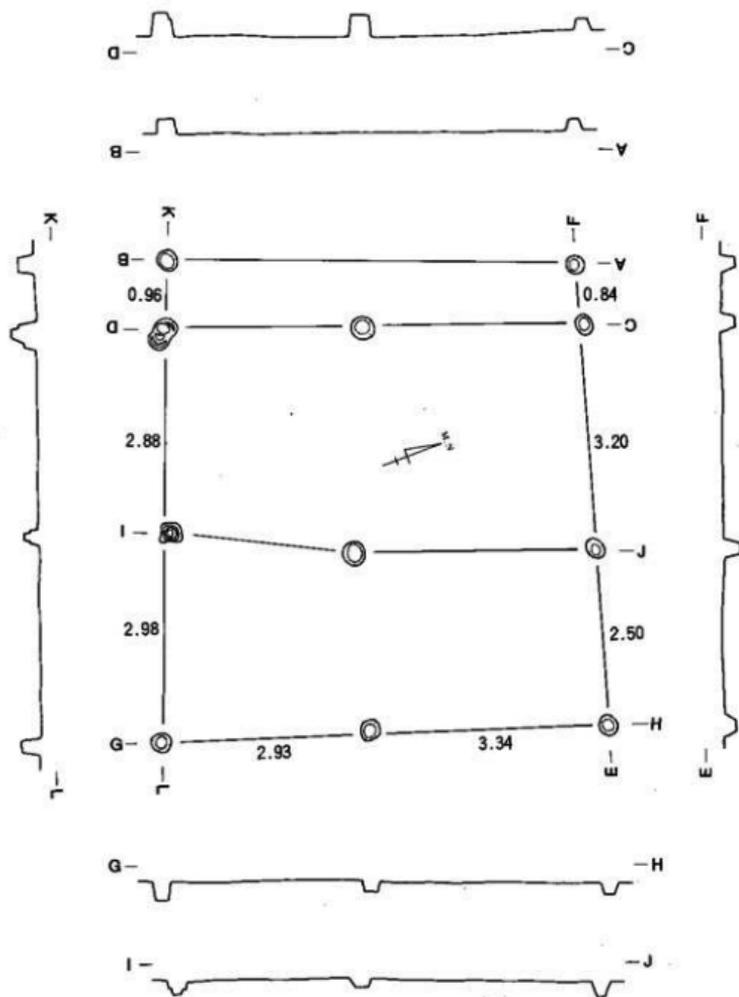


第21圖 SB 38 · 39



第22图 SB 40 · 41



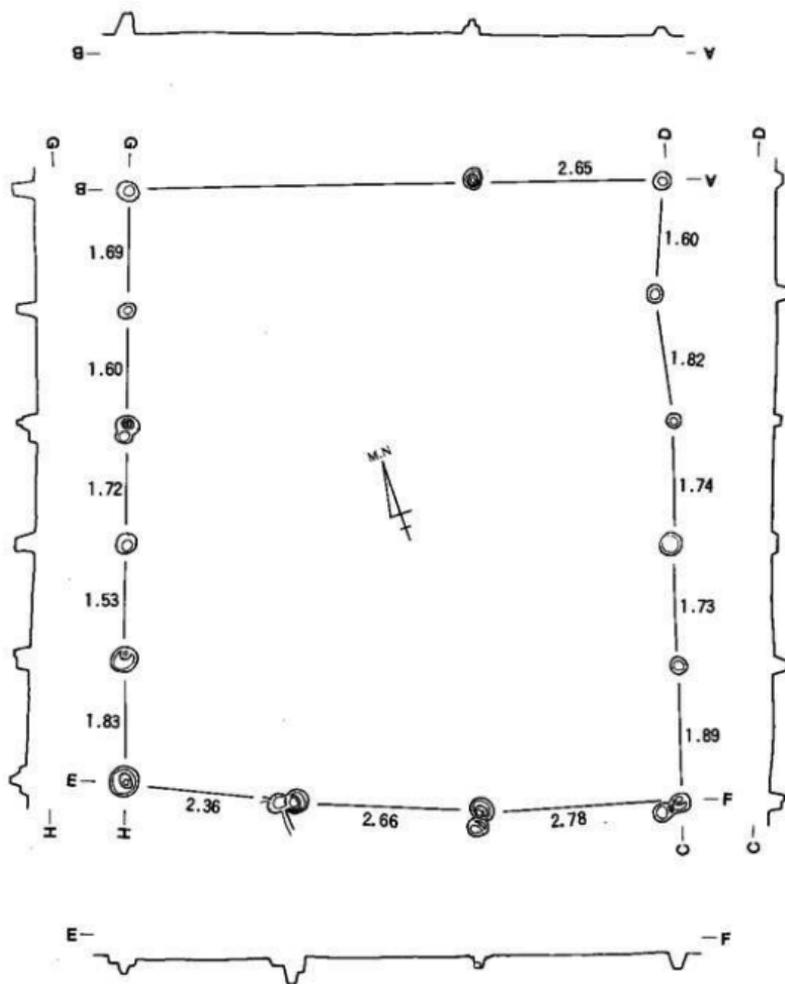


SB 43

DL = 7.20m



第24图 SB 43

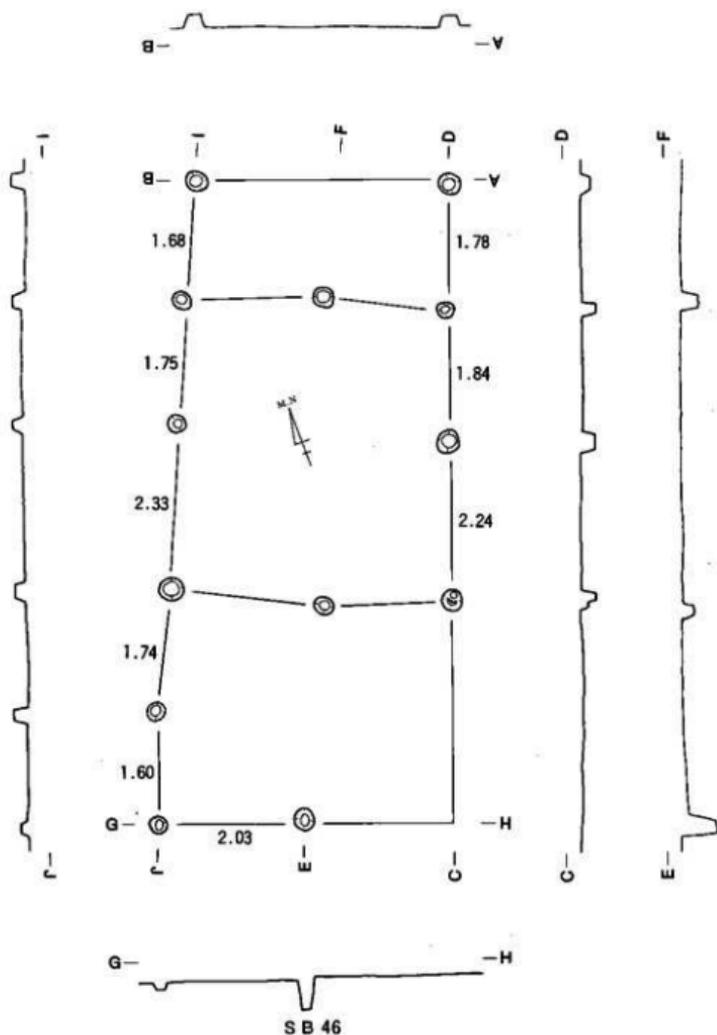


SB44

DL = 7.20m

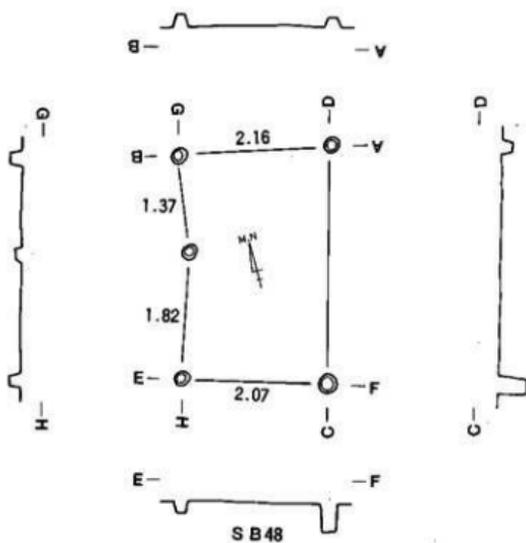
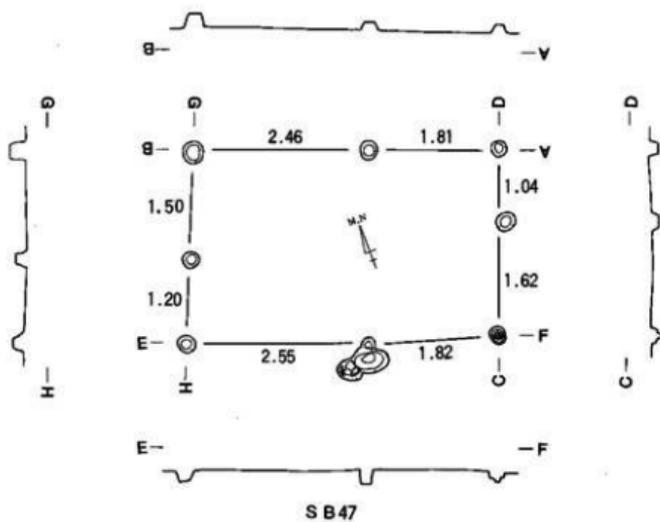


第25圖 SB44



D L = 7.20m

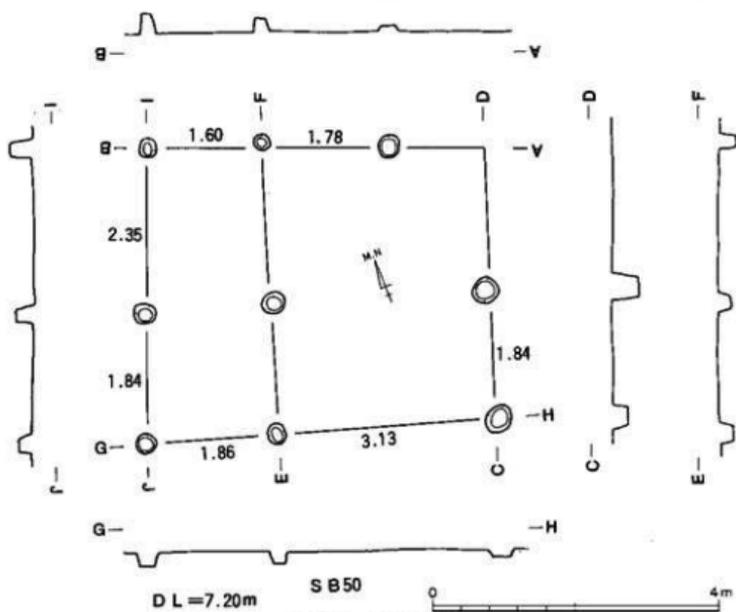
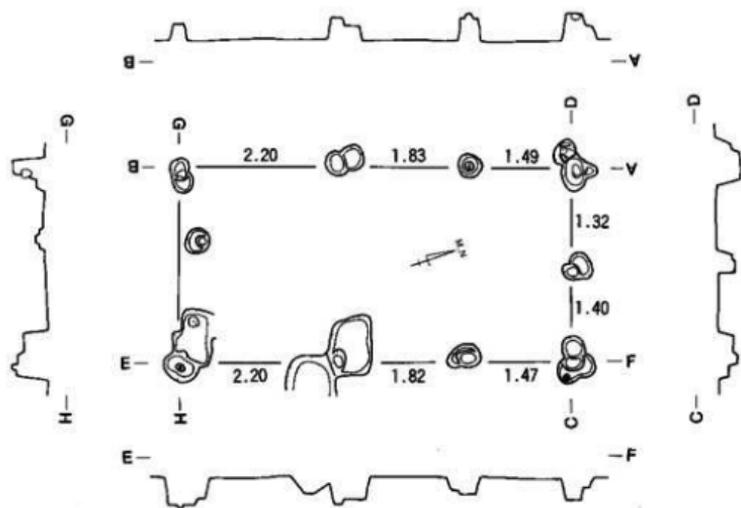
第26图 SB 46



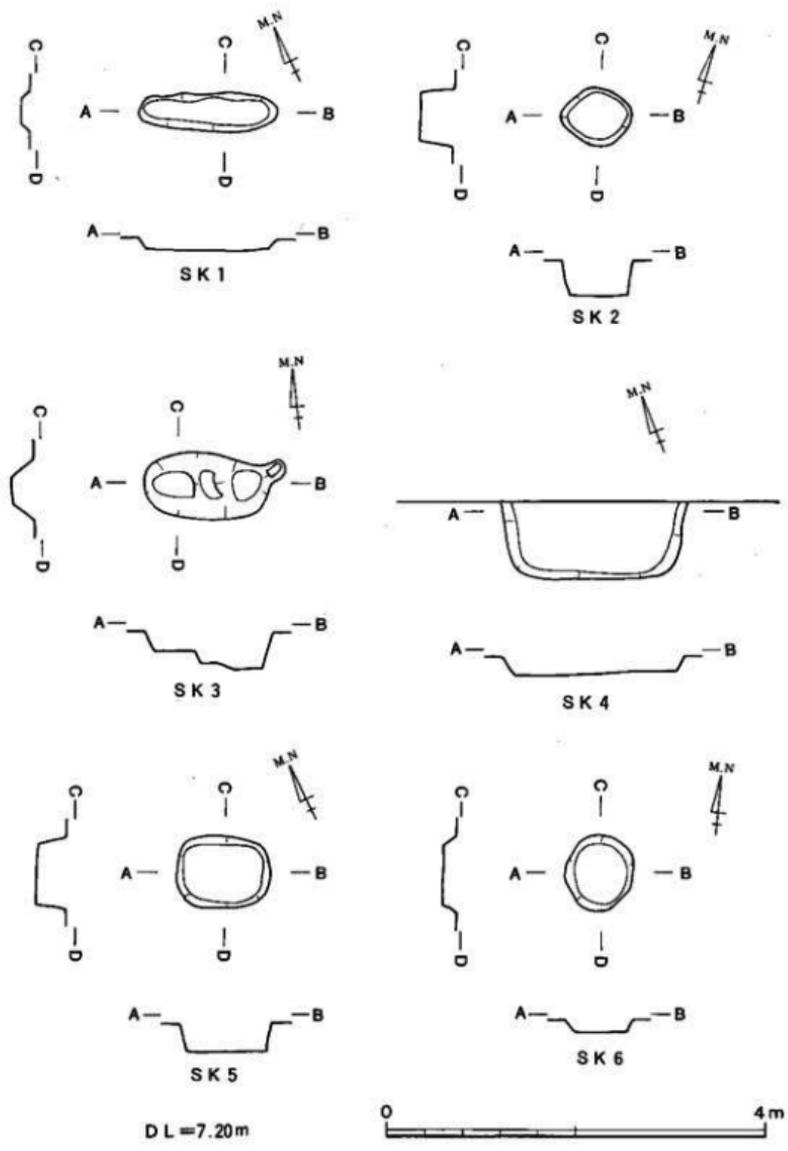
DL = 7.20m



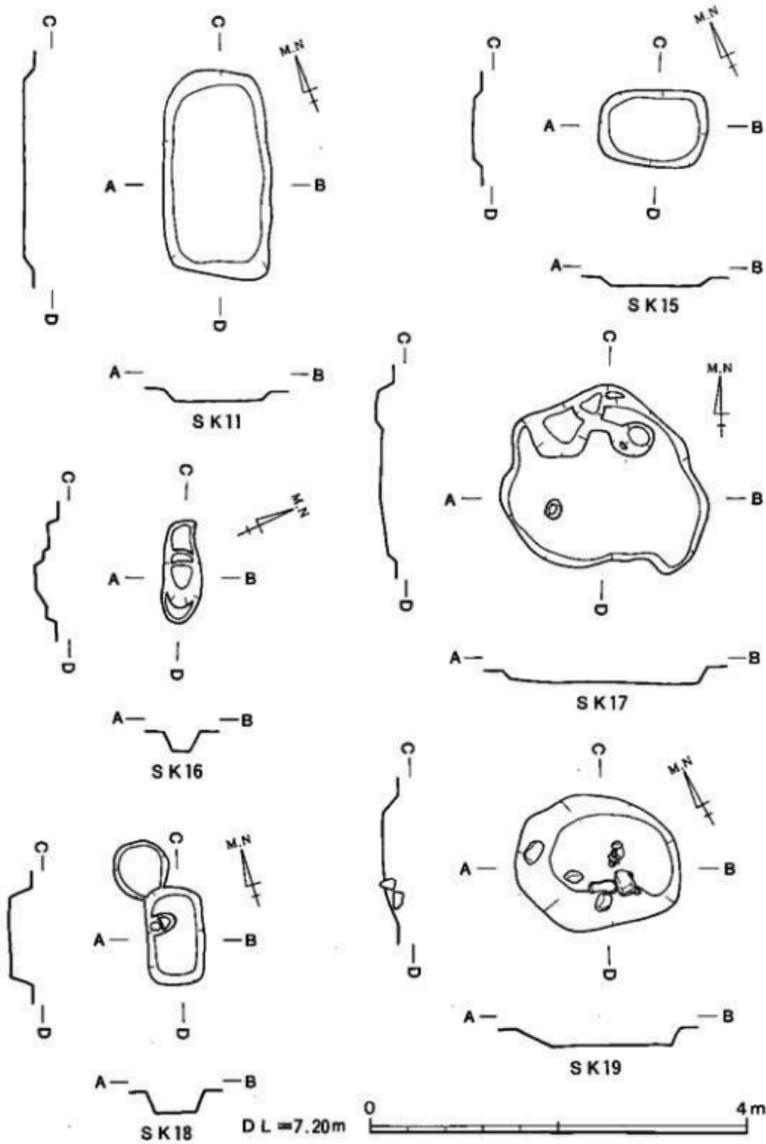
第27圖 SB 47 · 48



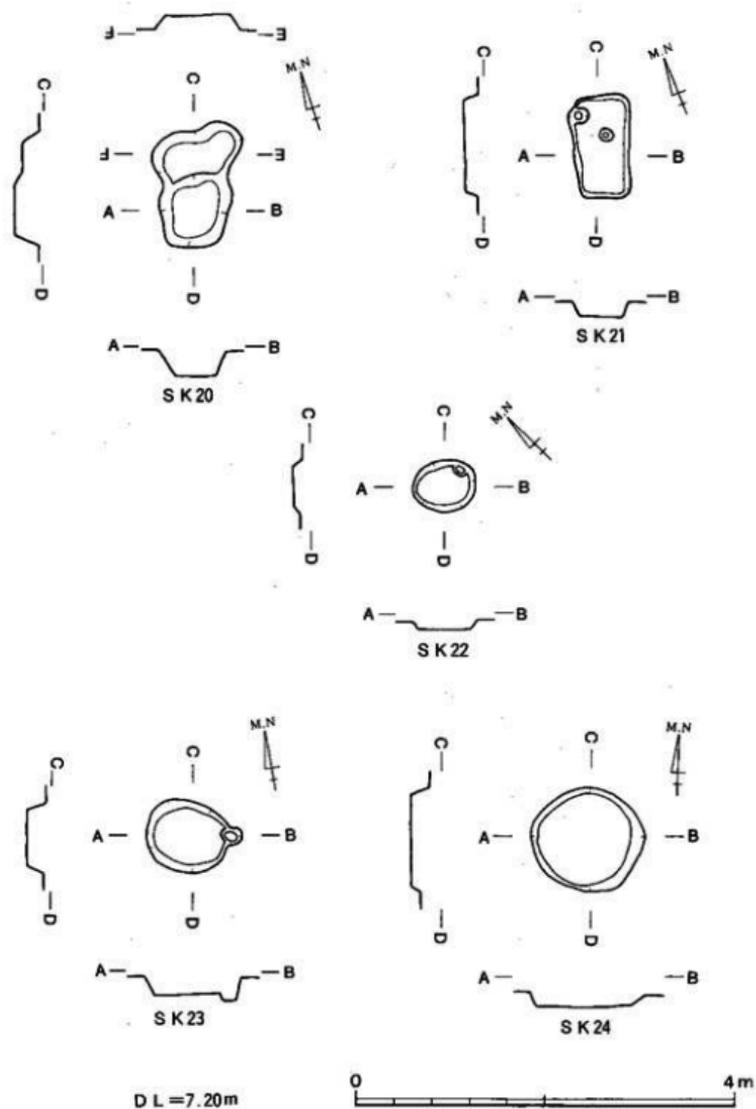
第28回 SB 49・50



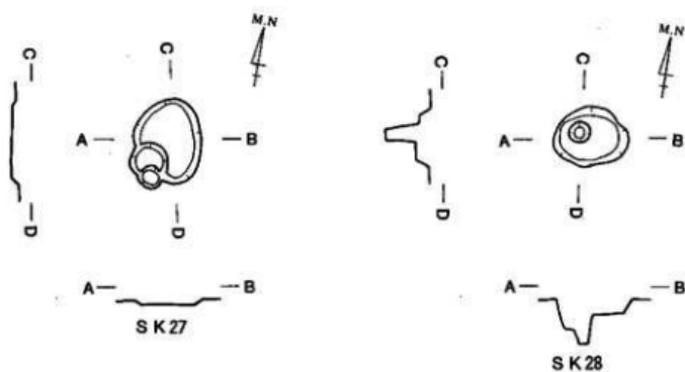
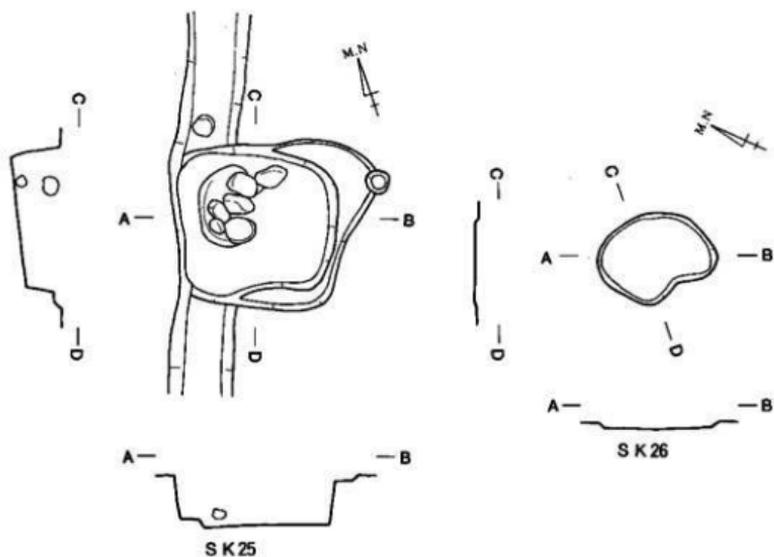
第29圖 SK 1~6



第30图 SK11·15~19



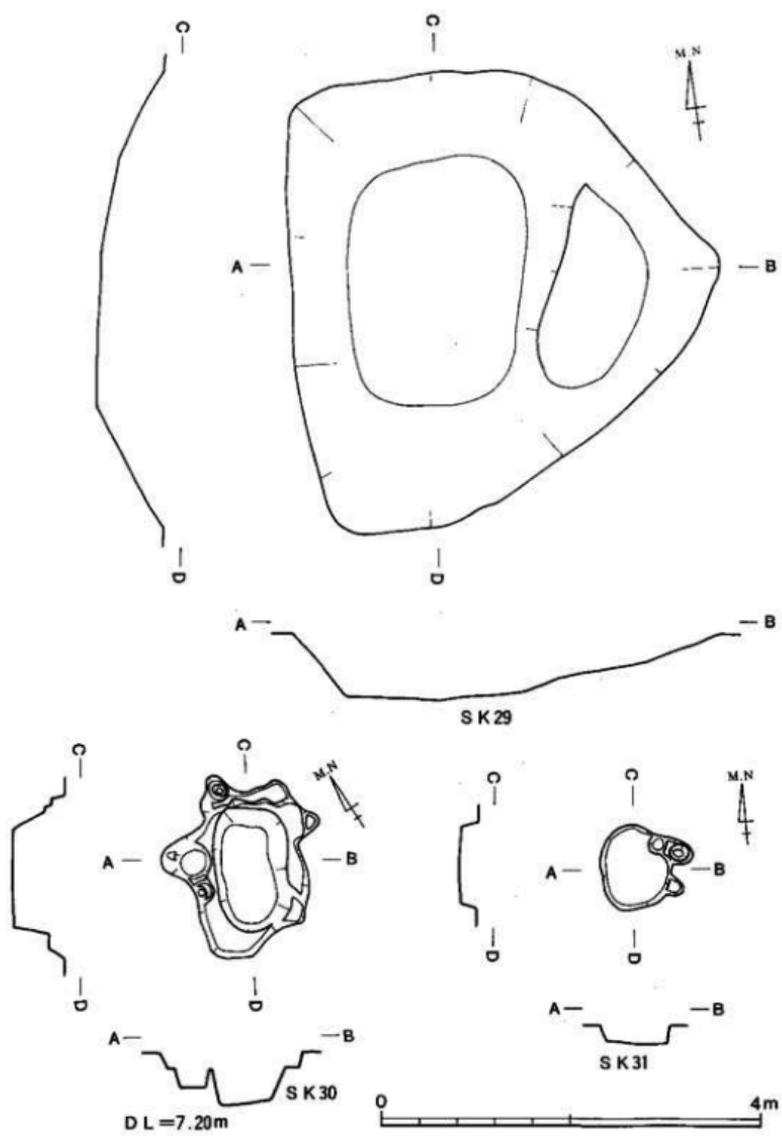
第31图 SK 20~24



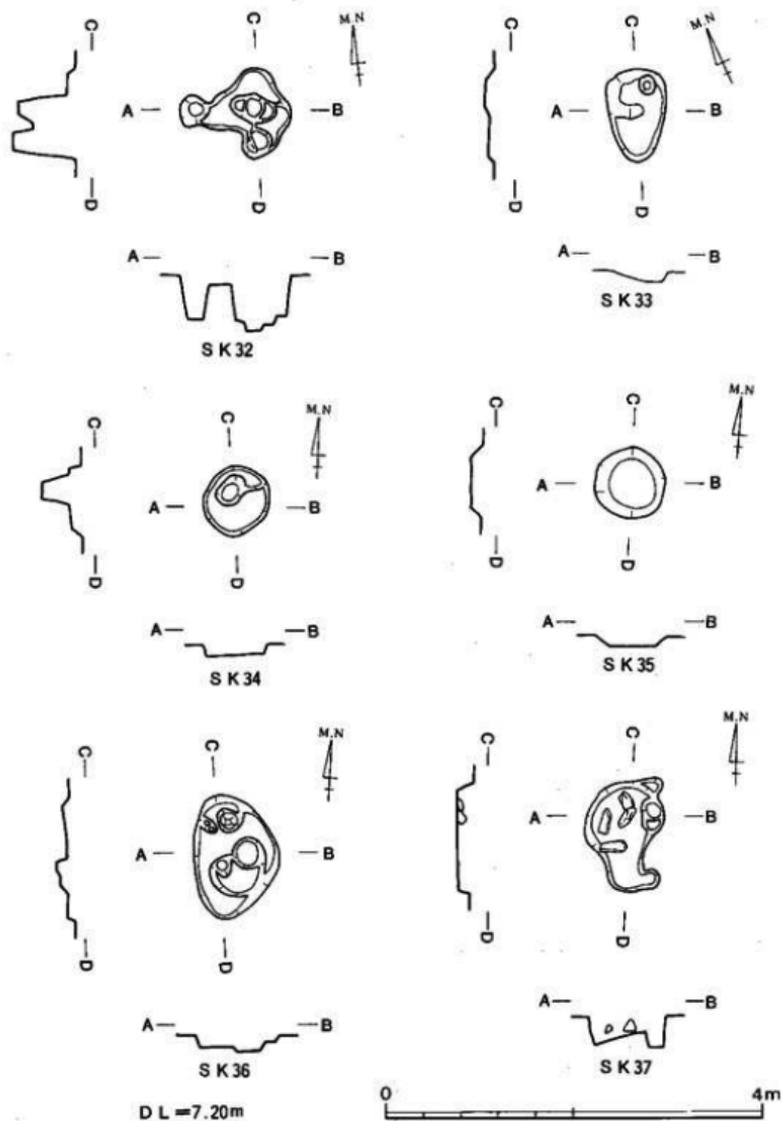
DL = 7.20 m



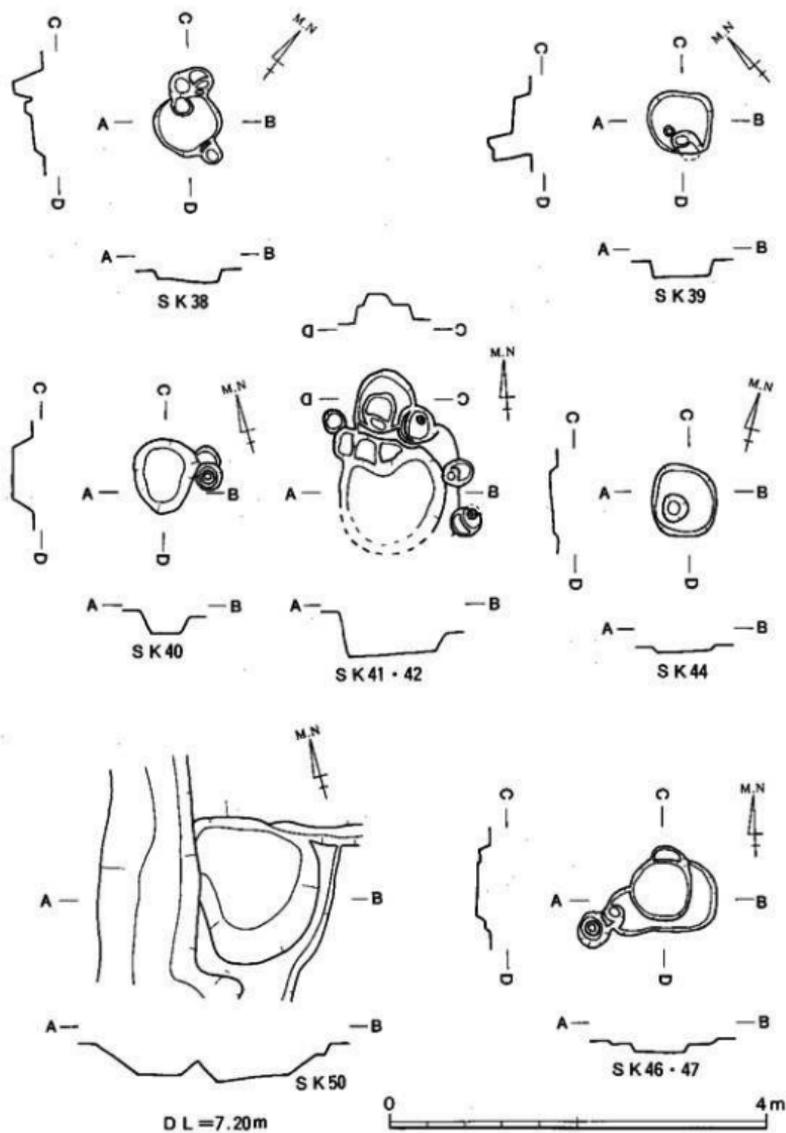
第32图 SK 25~28



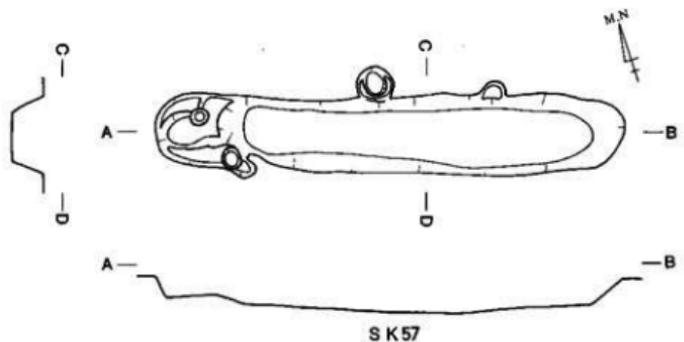
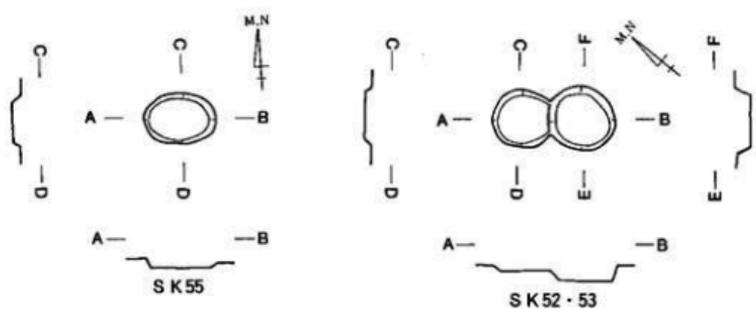
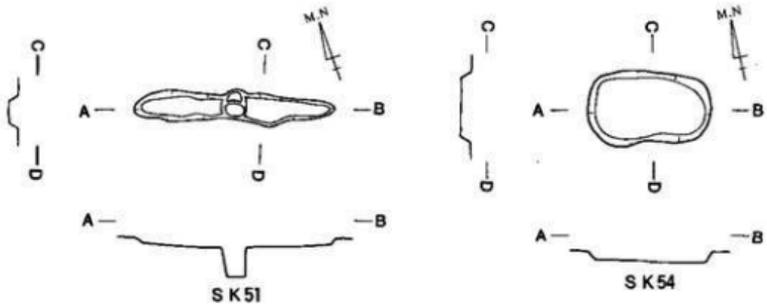
第33圖 SK 29~31



第34圖 SK 32~37



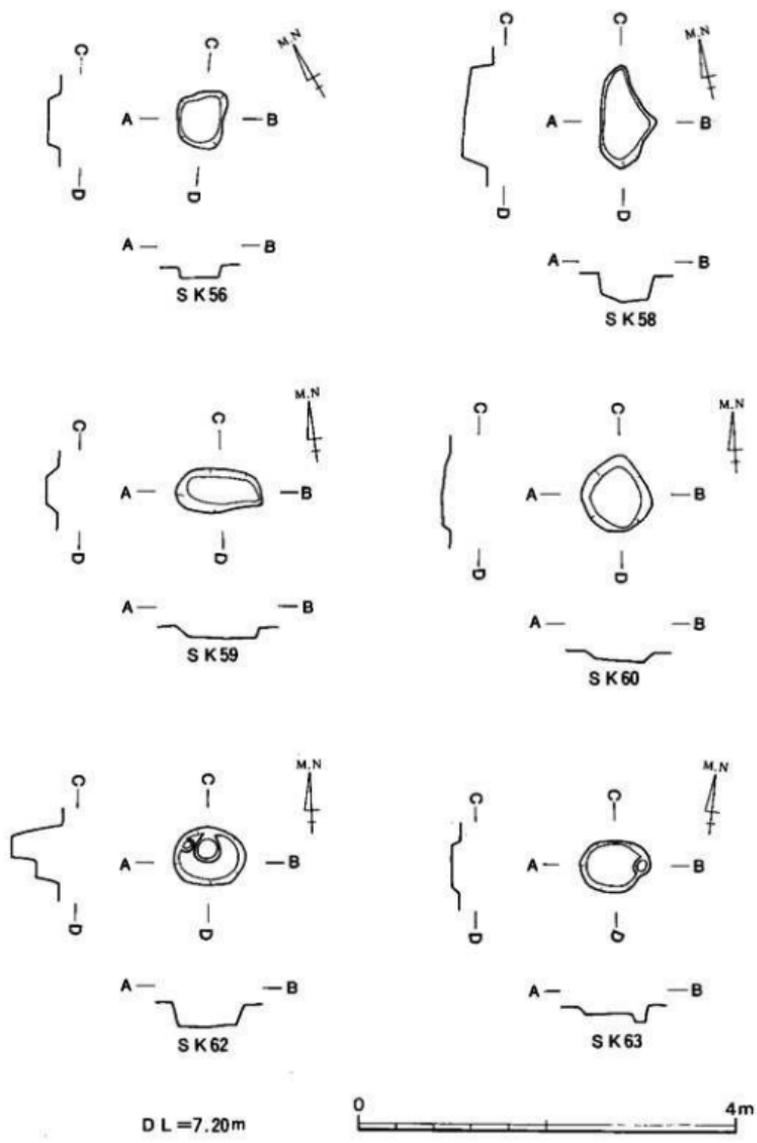
第35图 SK 38~42·44·46·47·50



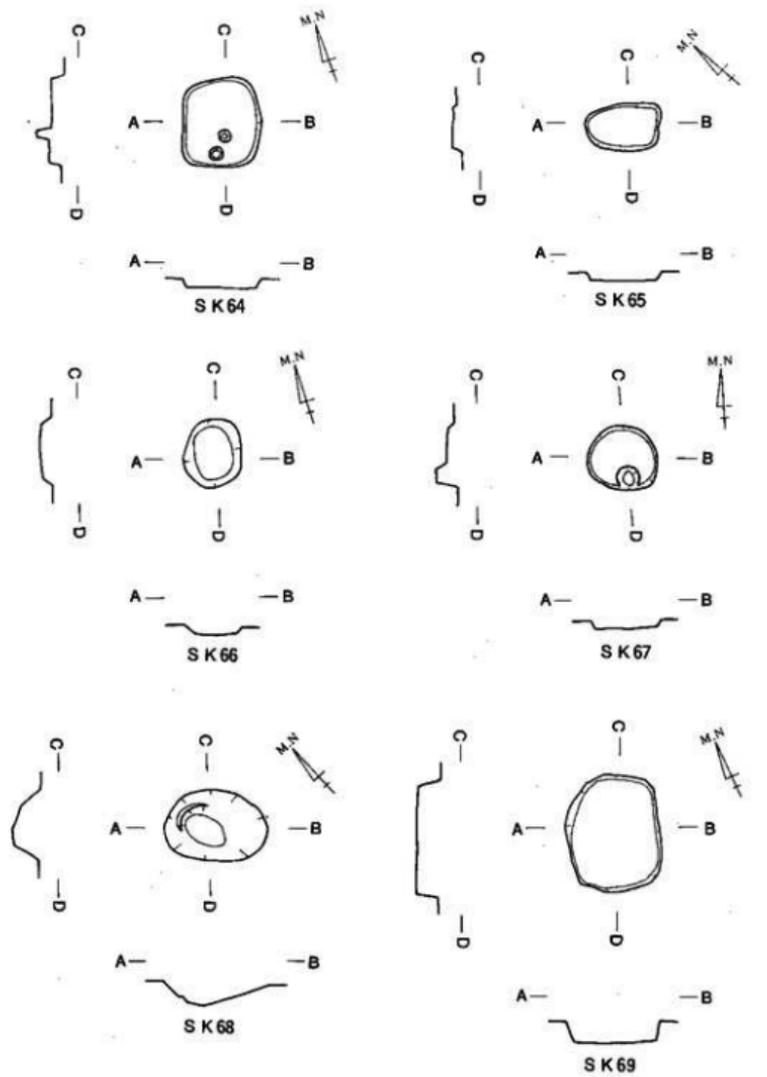
DL = 7.20m



第36圖 SK 51~55 · 57



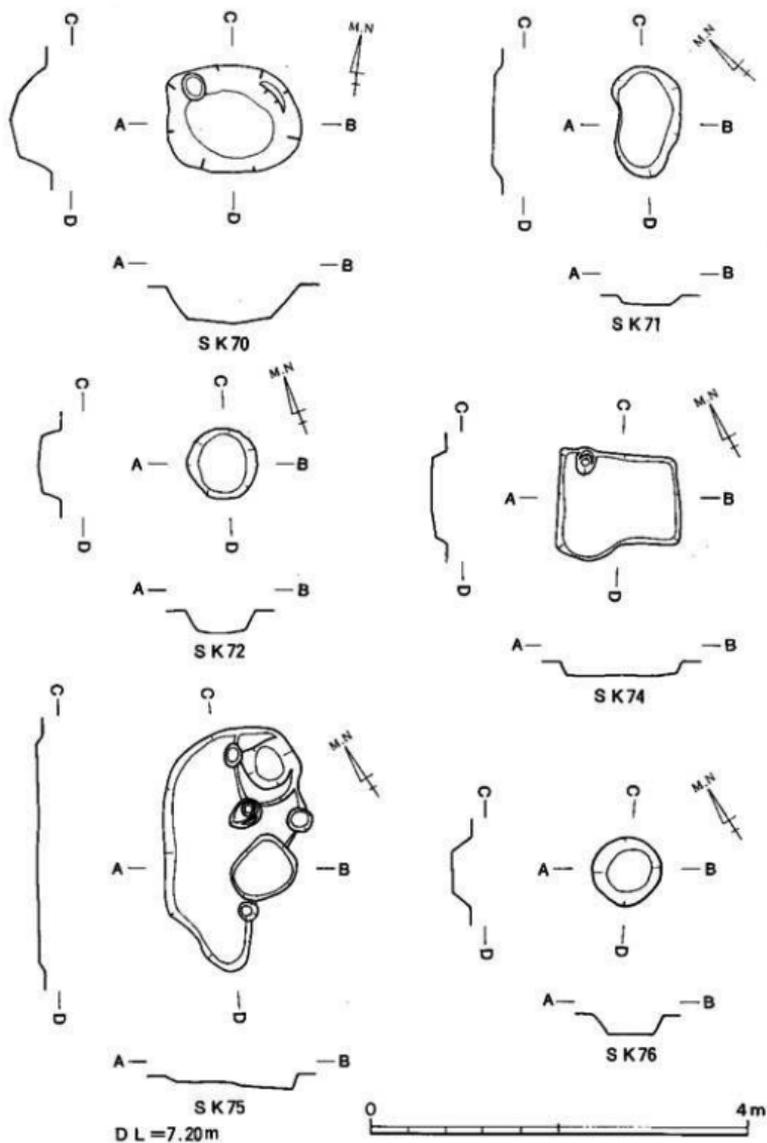
第37图 SK 56 · 58 ~ 60 · 62 · 63



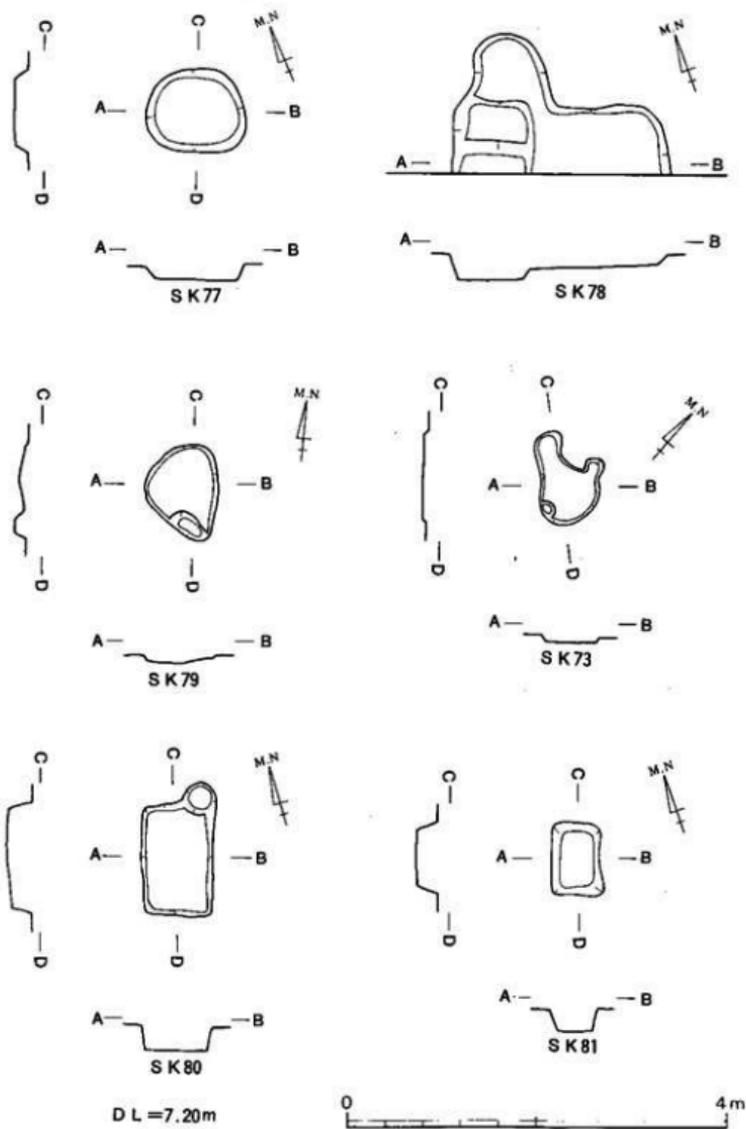
D L = 7.20 m



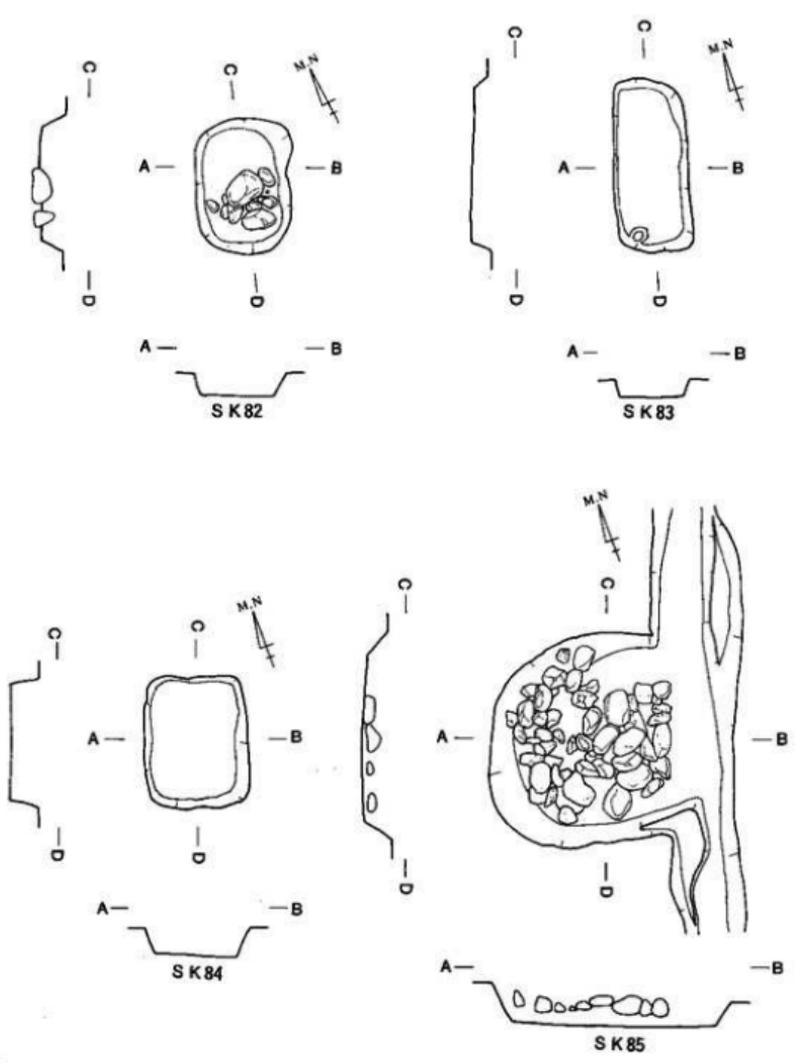
第38圖 SK 64~69



第39圖 SK 70~72 · 74~76



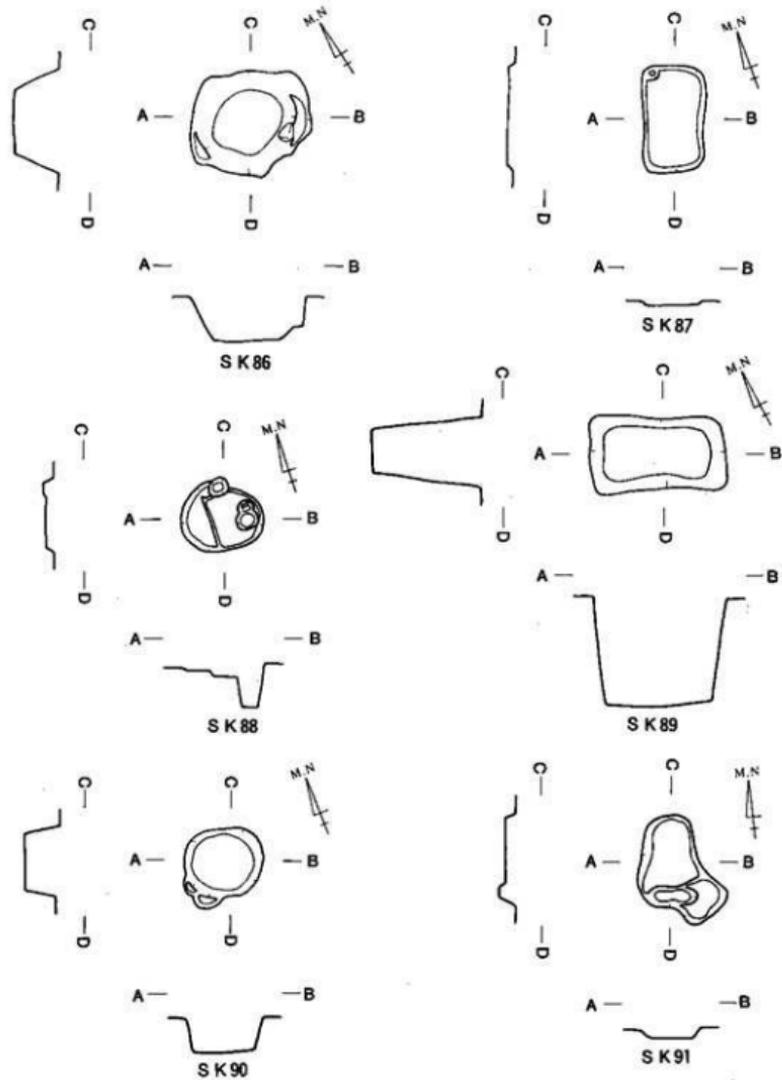
第40図 SK 73・77~81



DL = 7.20m



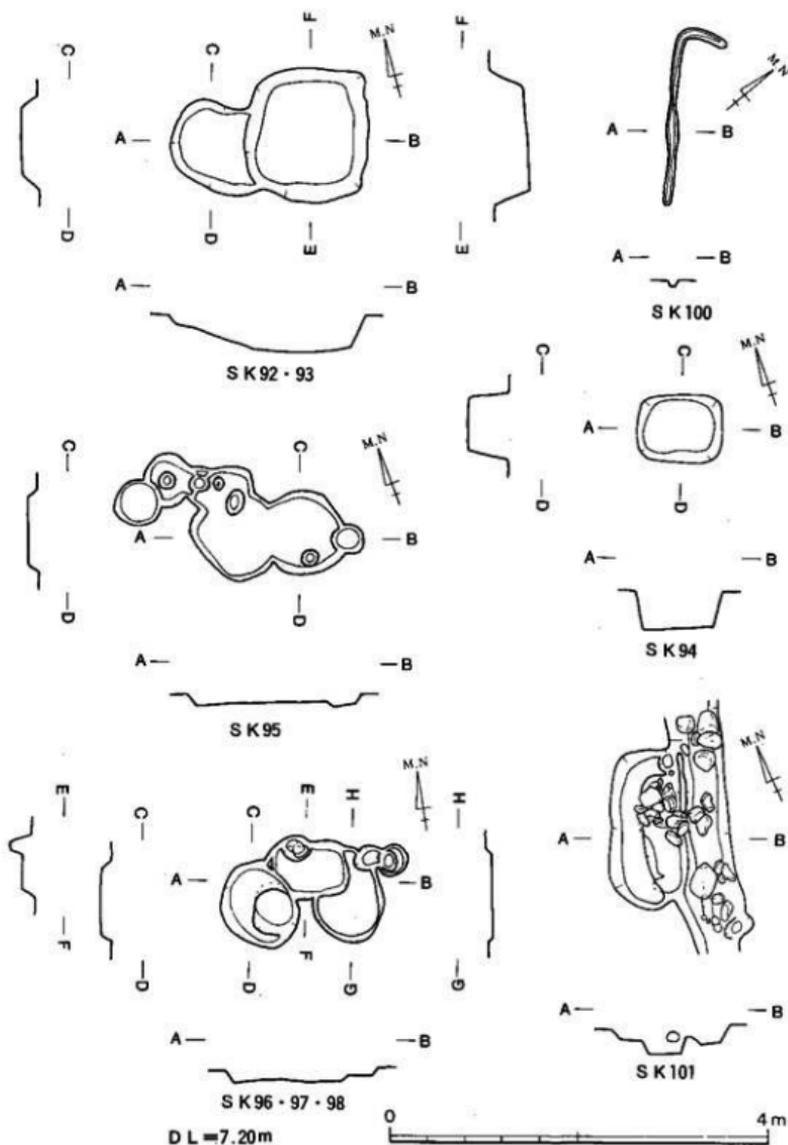
第41圖 SK 82~85



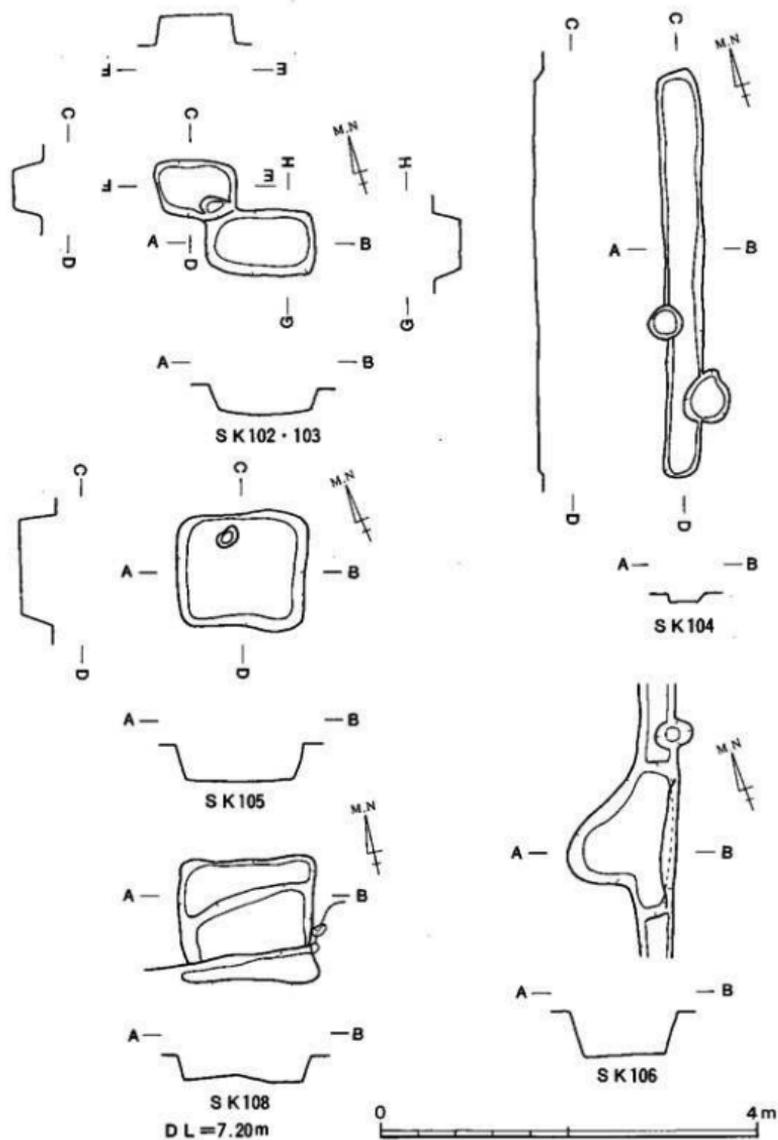
D L = 7.20m



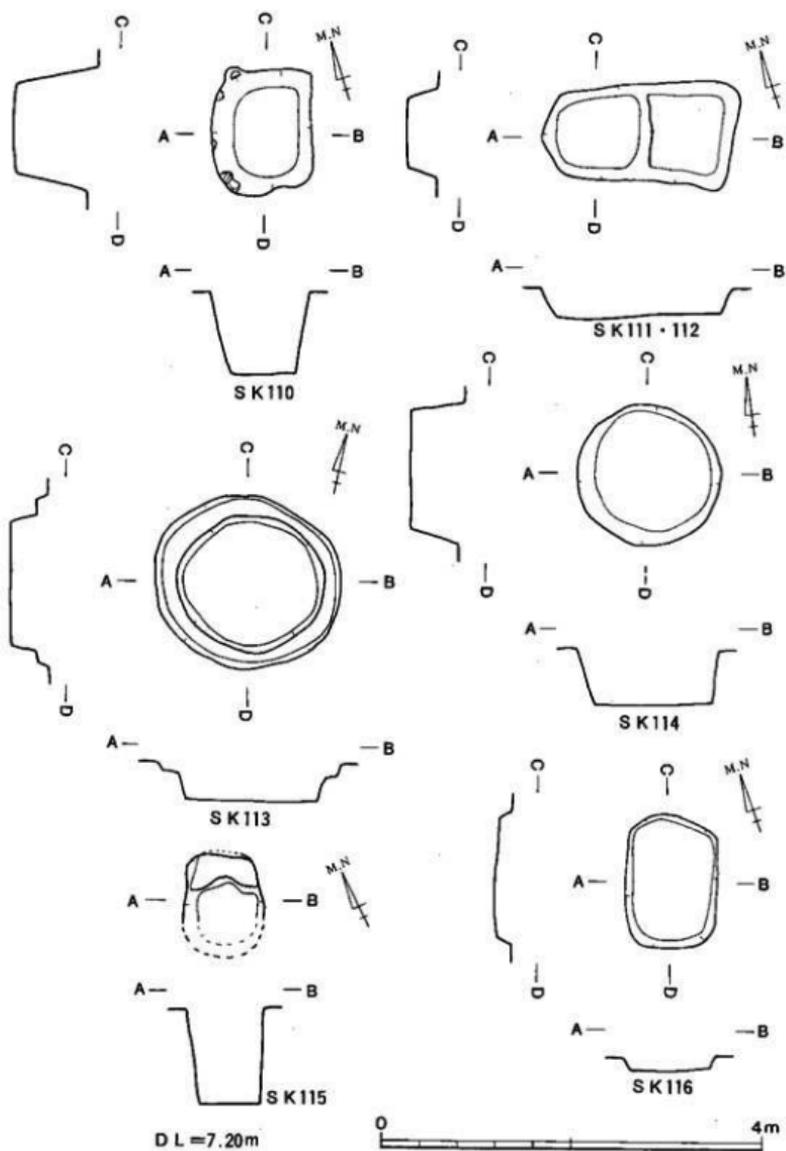
第42圖 SK 86~91



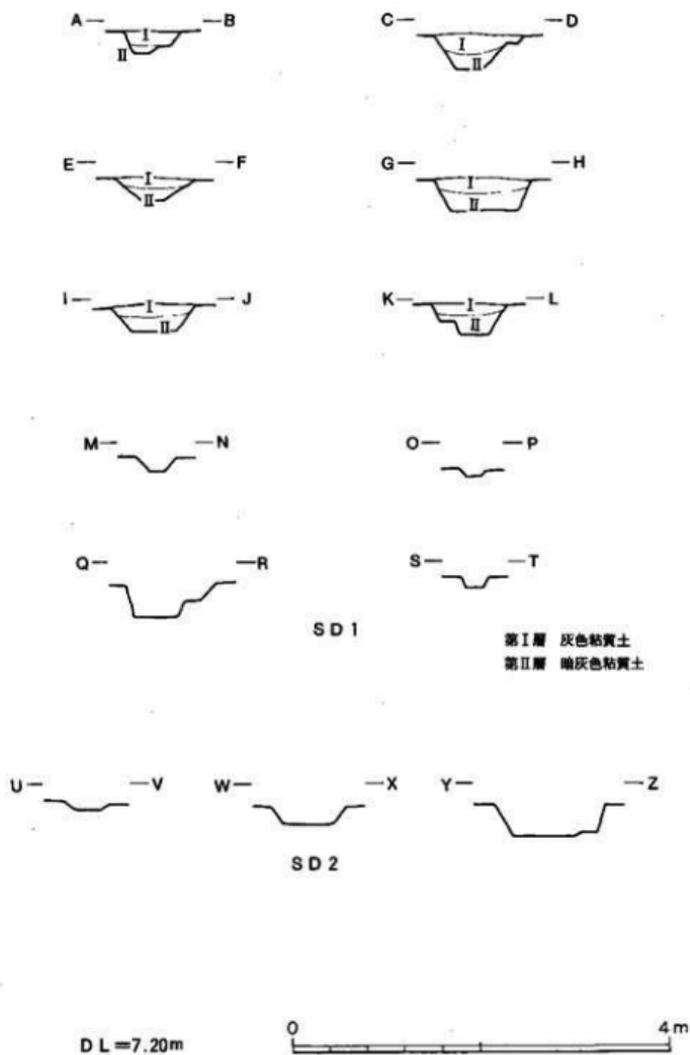
第43图 SK 92~98 · 100 · 101



第44圖 SK 102~106・108



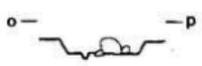
第45図 SK110~116



第46圖 SD 1 · 2



SD 3



SD 4



SD 5

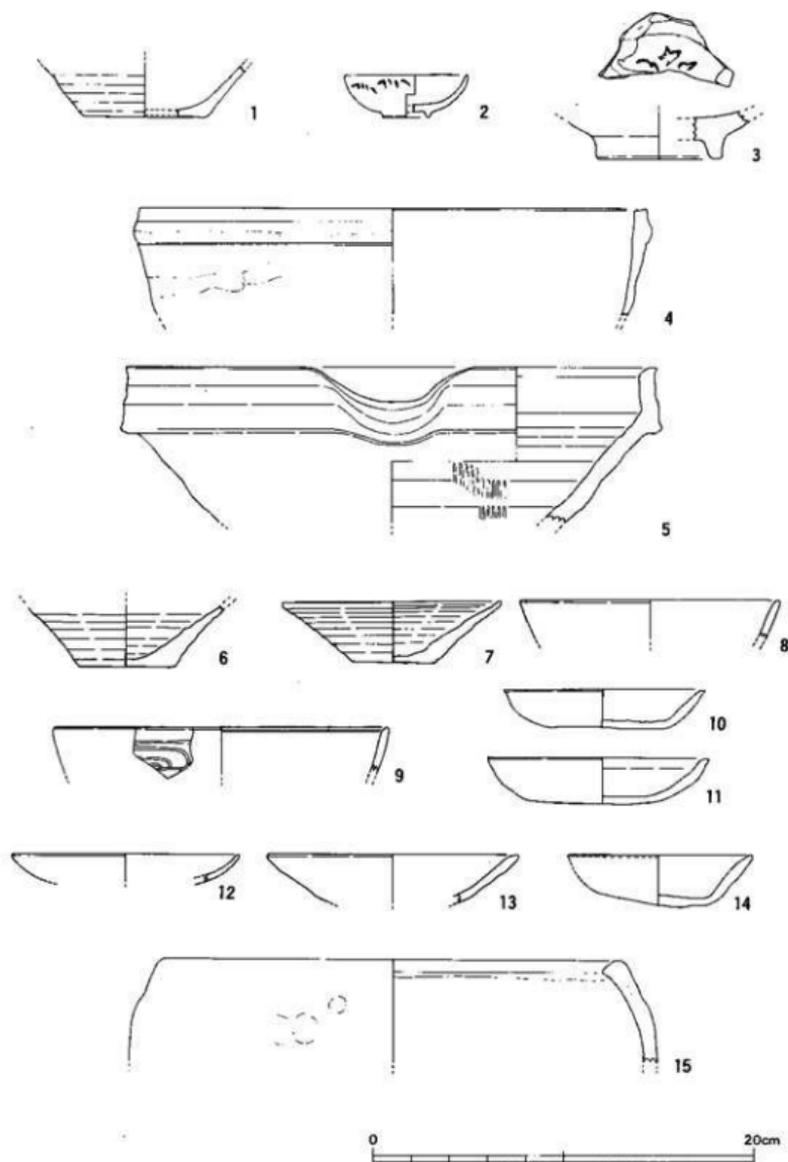


SD 6

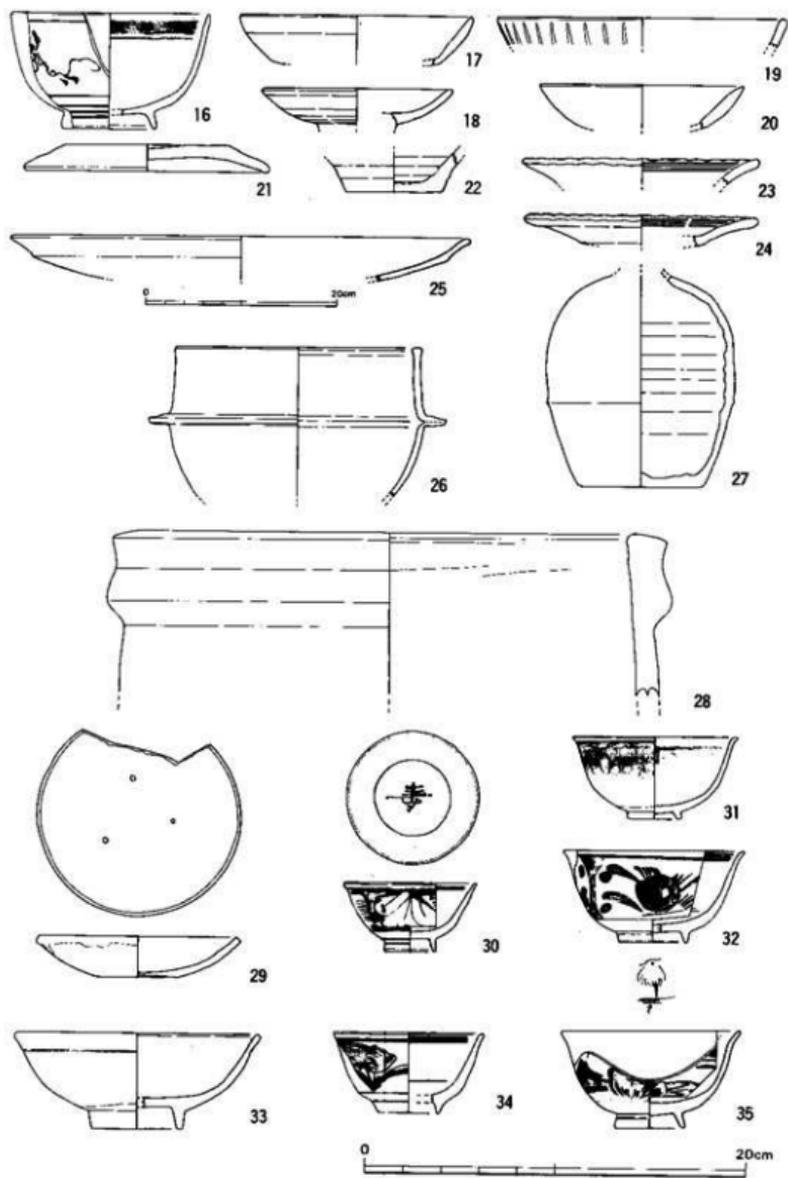
DL = 7.20m



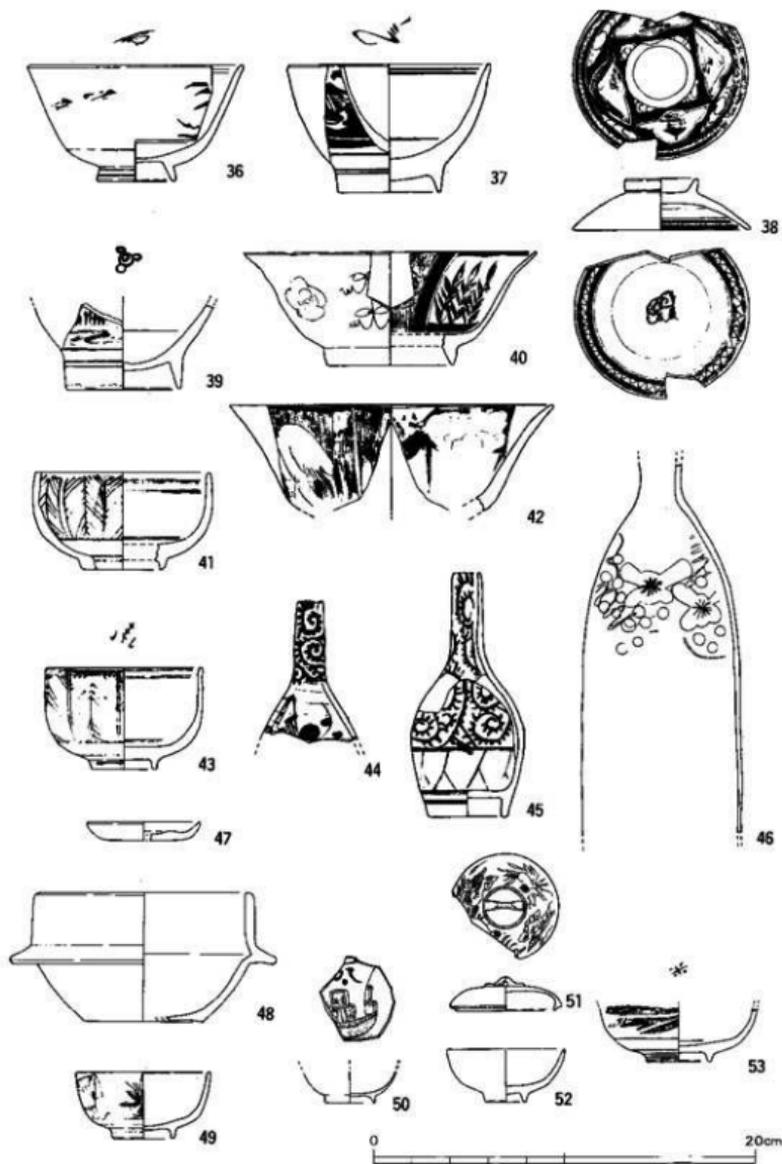
第47图 SD 3~6



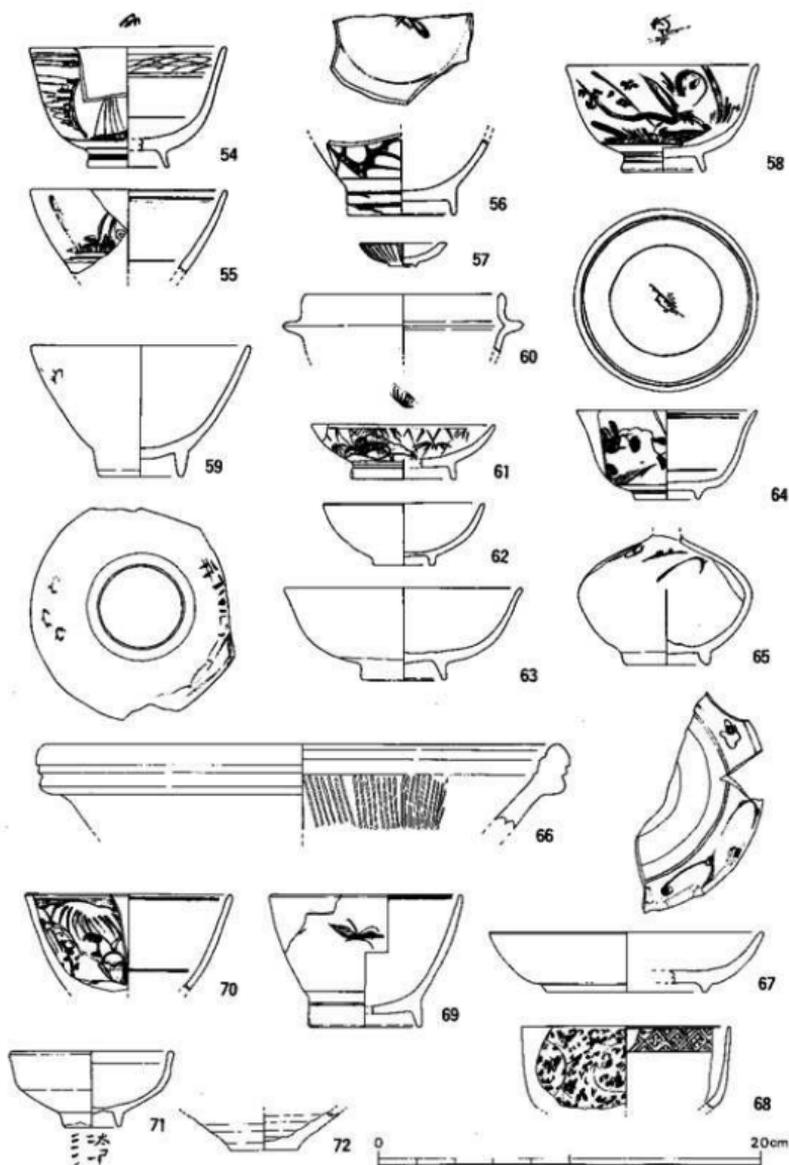
第48圖 第I～II層、SB11・13・14・24・26・29・31・42 出土遺物



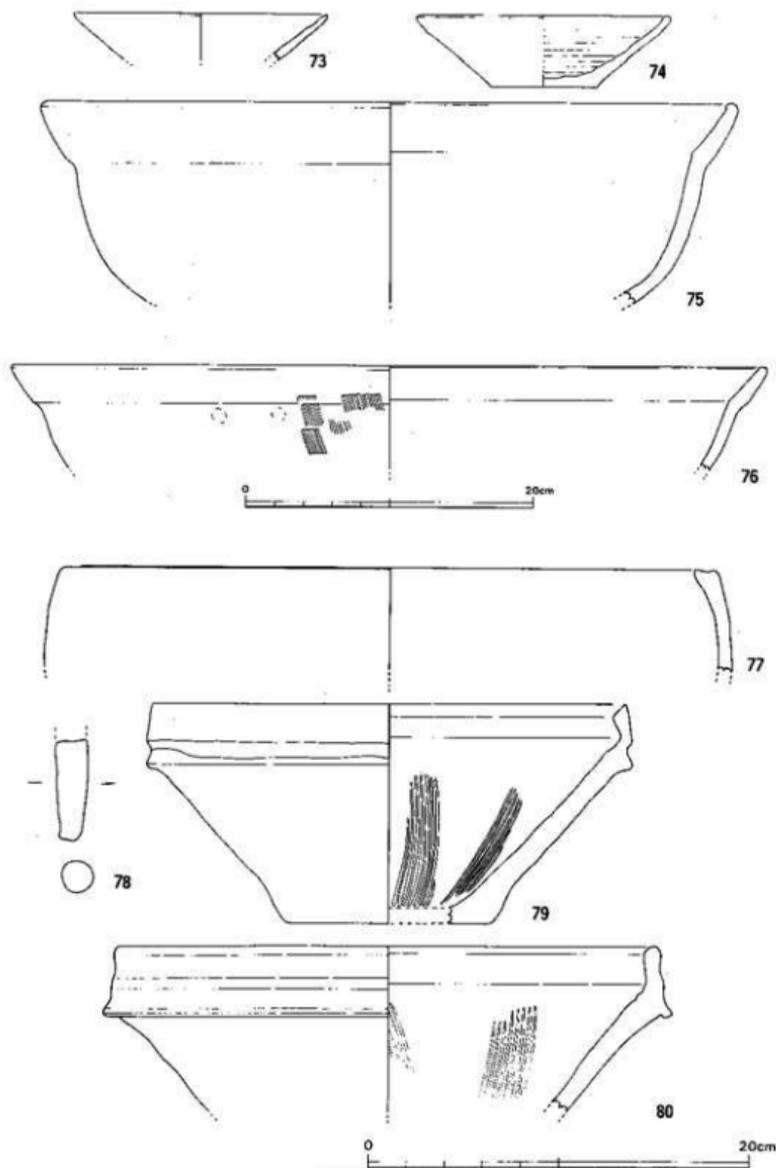
第49図 S K 14・21・30・38・51・58・70・89・124 出土遺物



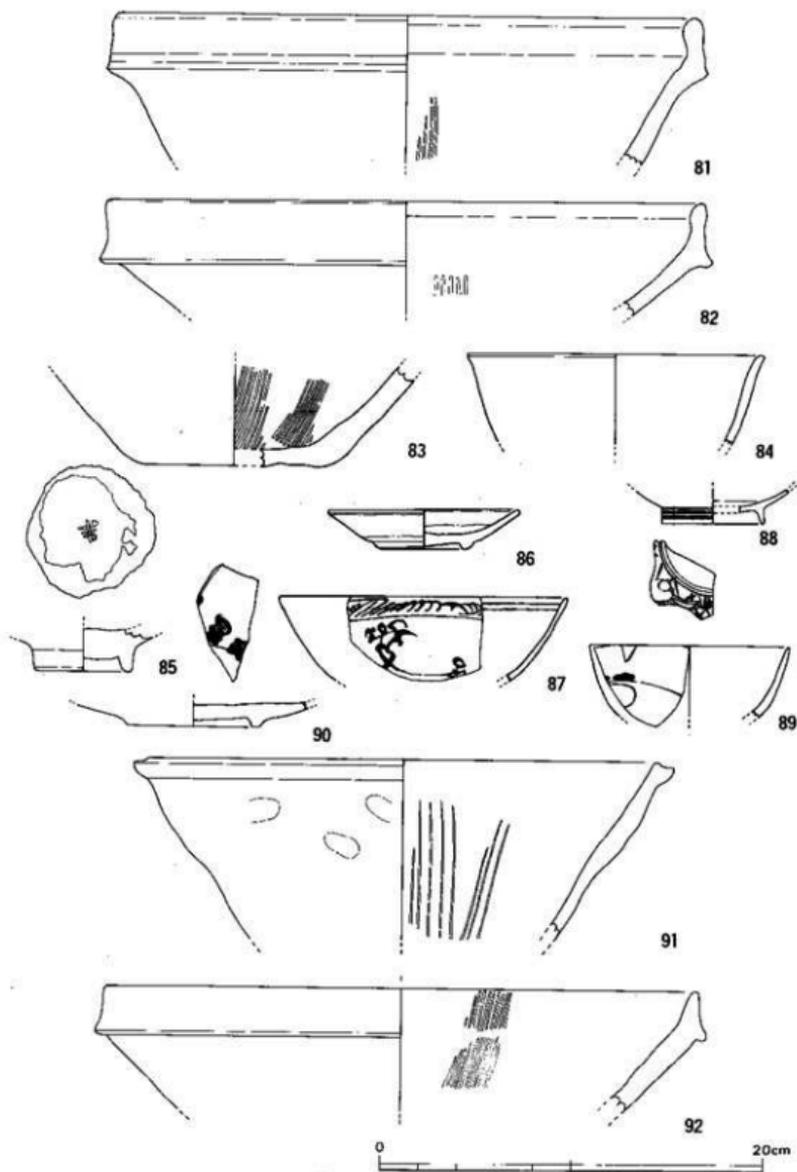
第50图 S K 89 · 92 · 93 出土遗物



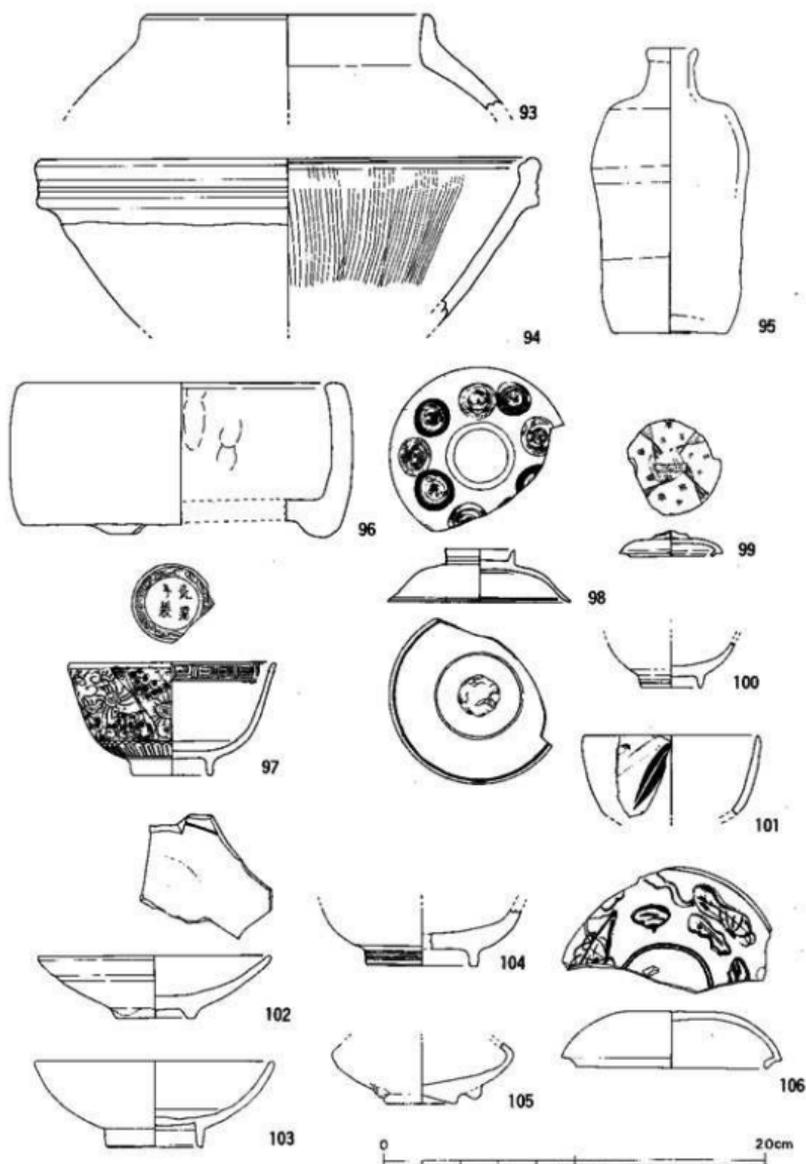
第51图 S K 93 · 99 · 101 · 105 · 106 · 109 · 110 · 121 出土遺物



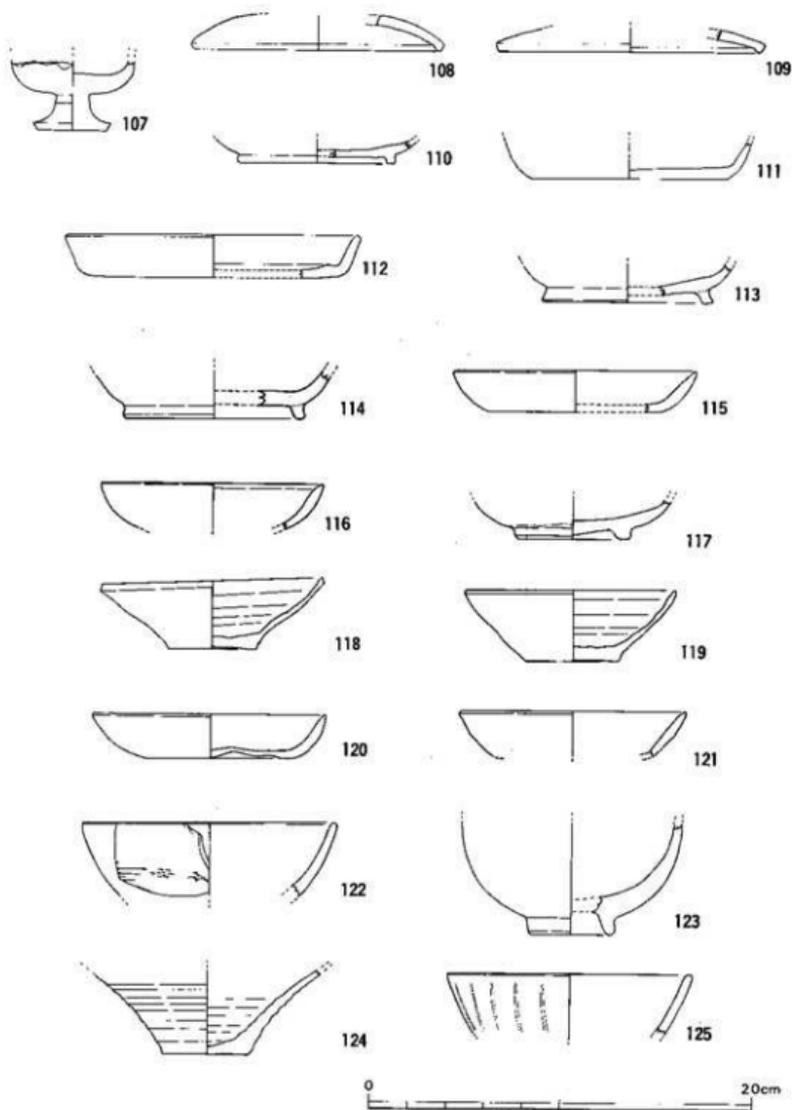
第52図 SD I 出土遺物



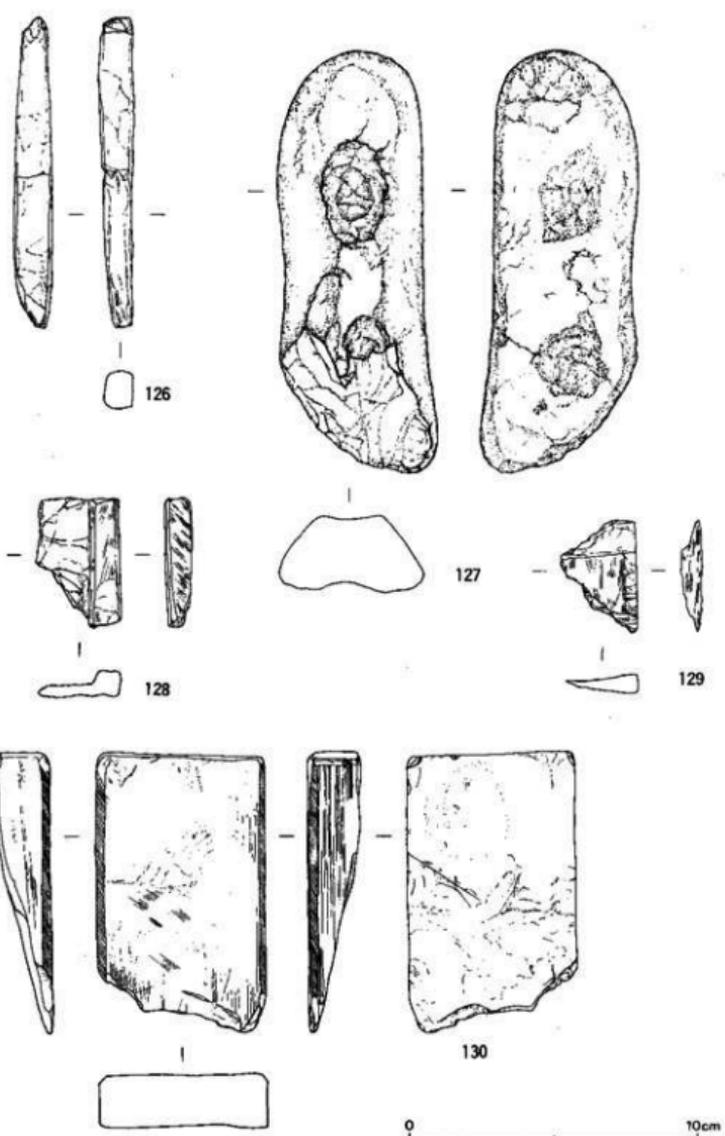
第53図 SD1・2 出土遺物



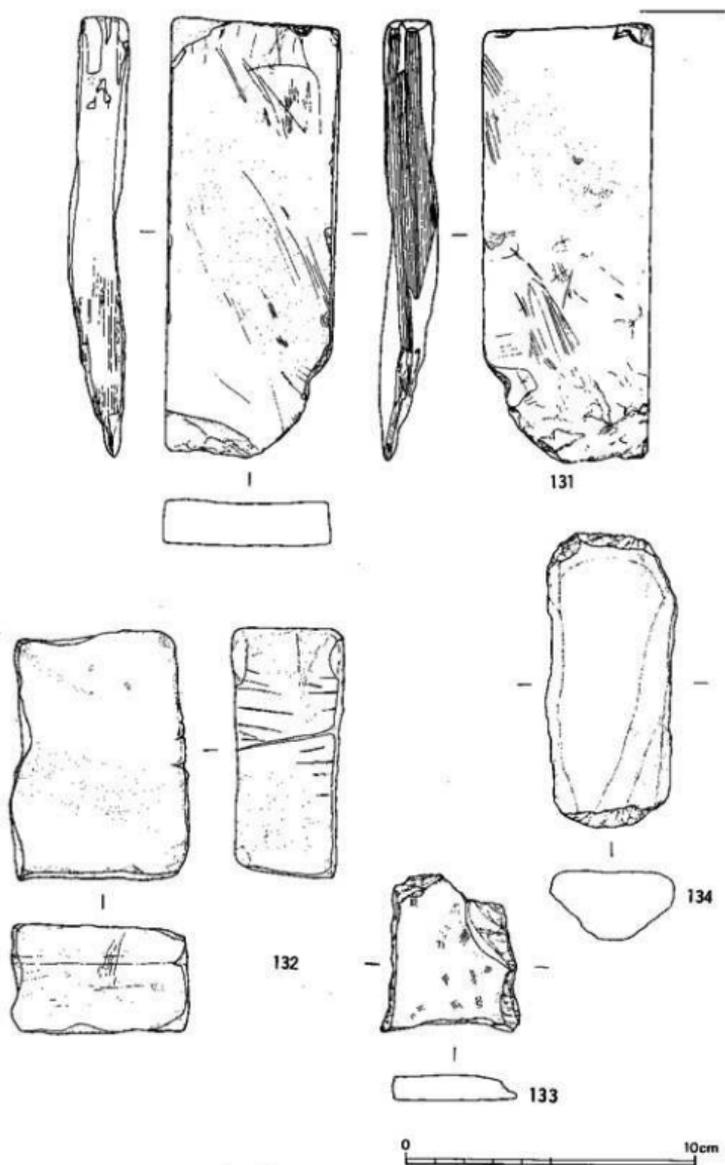
第54图 SD 3·5·6 出土遺物



第55圖 SP 1、P 1・2・4・9~16 出土遺物



第56圖 SK55、SD1、SP1、P2・13 出土遺物



第57図 SK108、SP1、P1 出土遺物

## 2. Loc. 41

## Loc. 41

### 1. 位置と調査経過

Loc. 41は、田村遺跡群の西部に位置し、小字名は柿の本である。北には弥生時代の自然流路及び中世の掘立柱建物址群を検出した Loc. 36が接しており、西にも同類の遺構を検出した Loc. 32・33が接している。

当調査区では、空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴い、まず、東半部の田村川右岸域2,275㎡の調査を緊急に行い、後に、西半部2,268㎡の調査を行った。東半部では、その北端部と南端部にトレンチを入れたところ、溝が検出されたため、同遺構を追って全面を発掘した。西半部でも、4か所にA～Dトレンチを任意に設定して試掘を行った結果、溝及びピット群が検出されたため、調査区中央の一部を除き、ほぼ全面を発掘した。

### 2. 調査概要

当調査区の最終的な発掘面積は4,453㎡に及び、掘立柱建物址11棟、土坑45基、溝10条並びに弥生の自然流路（SR2）を検出した。

うち、溝1条（SD1）と自然流路（SR2）については『弥生編』で記述済みである。掘立柱建物址及び溝の大半は中世のものであり、土坑の中には近世墓と目される遺構も比較的多数を占めていた。但し、溝の中に1条だけ古墳時代に属するもの（SD2）があり、同遺構は本来ならば『古墳時代編』で扱うべきであるが、出土遺物も限られているため、本項において記述している。

### 3. 層序と出土遺物

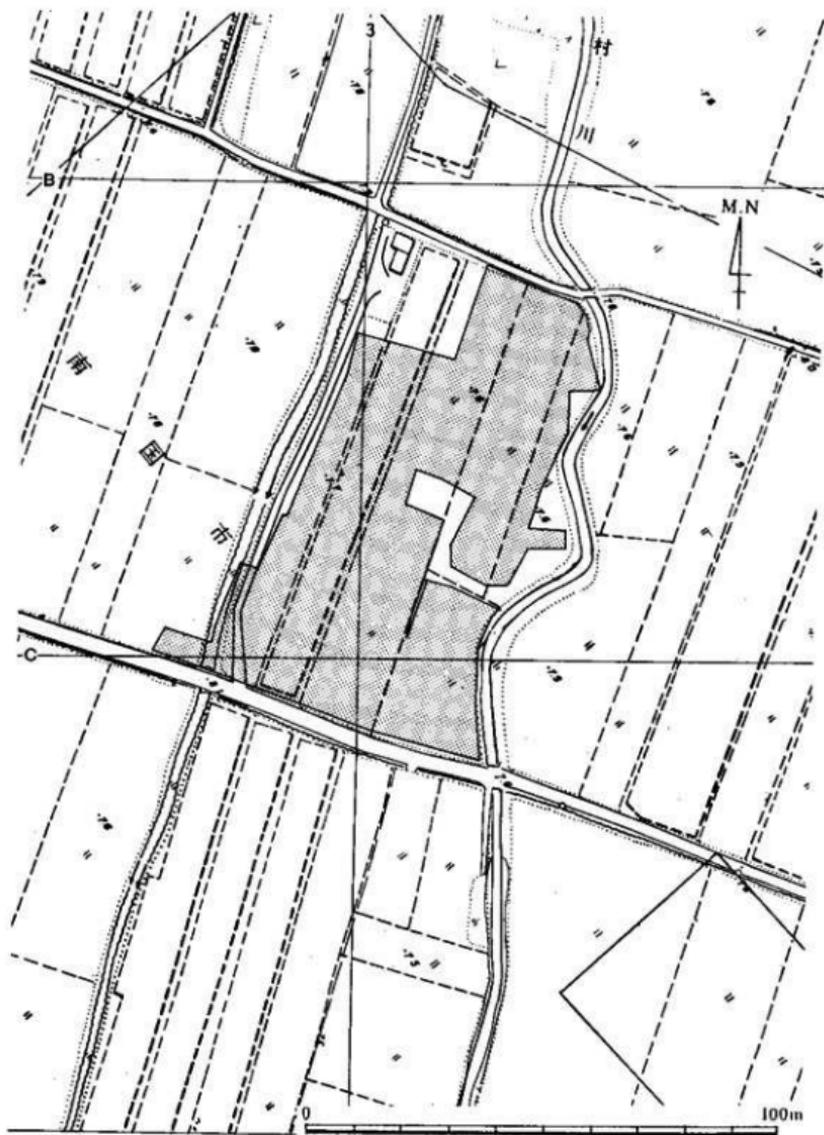
Loc. 41における基本的な層序は次の通りである。

第Ⅰ層 耕作土

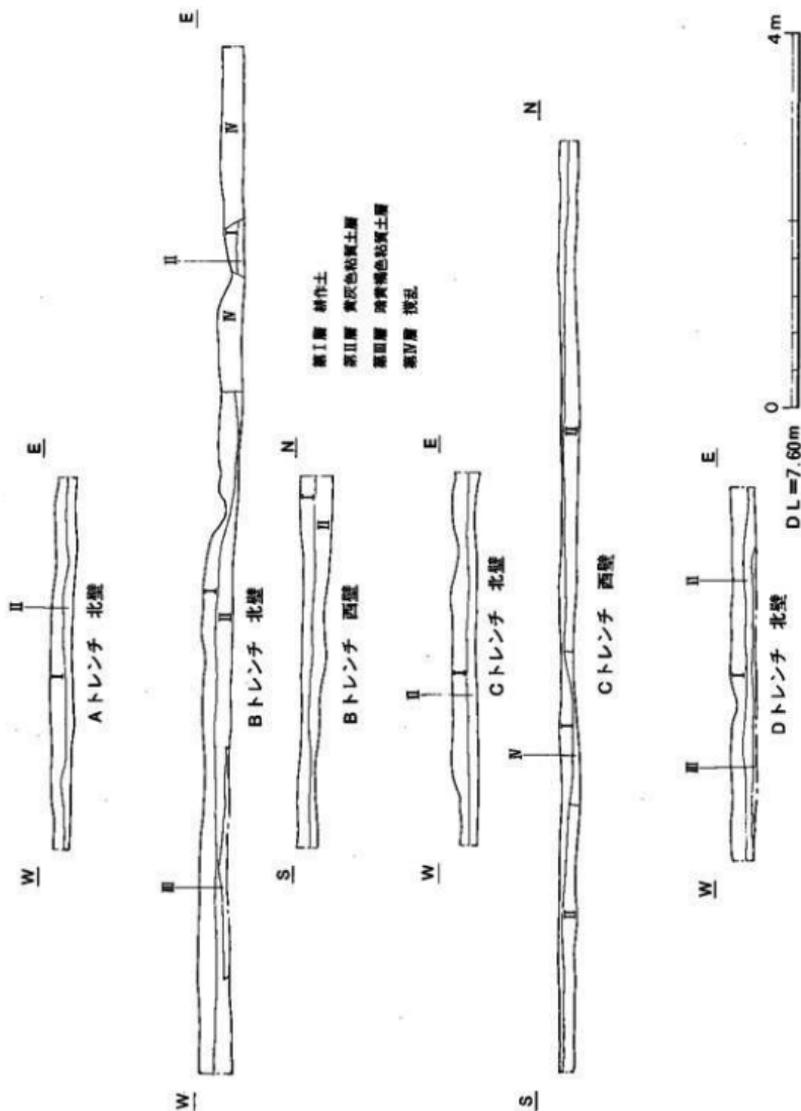
第Ⅱ層 黄灰色粘質土層

第Ⅲ層 暗黄褐色粘質土層

第Ⅱ層は、遺物包含層であり、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、備前焼摺鉢（1、2）、白磁碗（3）及び唐津系鉢（4）等が出土している。第Ⅲ層は、弥生時代～中・近世の遺構検出面である。但し、調査区東部ではSR2の埋土上層（灰褐色砂質土あるいは淡灰黒褐色粘質土）が中・近世遺構の検出面となっていた。以後、同層を便宜上第Ⅳ層として記述することにする。



第58図 調査区設定図



第59図 調査区セクション

#### 4. 遺構と遺物

##### 掘立柱建物址

##### SB1

SB1は、調査区の北西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。2×2間のほぼ正方形を呈する建物であるが、東西3.00m、南北3.20mを測り、南北に若干長くなっている。棟方向はN-27°-Eを指す。但し、南辺の中間柱穴を欠いている。

各柱穴の平面形は直径20cm内外の円形を呈し、深さも20cm前後を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

##### SB2

SB2は、SB1の南西に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。2×2間の建物であるが、東西6.00m、南北3.60mを測る東西棟であり、棟方向はN-70°-Wを指す。桁行西半の柱間距離が4mと非常に長くなっている。

各柱穴の平面形は直径25cm内外の円形あるいは不整形を呈し、深さは8-36cmを測る。確認できた柱痕の直径は16cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SB2はSK13・14・16と重複している。SB2がSK14によって切られているのが確認できた他は、新旧関係は不明である。

##### SB3

SB3は、調査区の中央部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。2×3間の東西棟であり、梁間4.60m、桁行5.60mを測り、棟方向はN-71°-Wを指す。

各柱穴の平面形は直径35cm内外の円形あるいは不整形を呈し、深さは16-43cmを測る。確認できた柱痕の直径は16cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より須恵器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SB3はSB4と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

##### SB4

SB4は、SB3とほぼ同位置で、第Ⅲ層上面において検出された。2×3間の東西棟であり、梁間3.70m、桁行5.60mを測り、棟方向はN-72°-Wを指す。

各柱穴の平面形は直径35cm内外の円形あるいは不整形を呈し、深さは5-40cmを測る。確認できた柱痕の直径は14cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。なお、SB3・4は、形状、規模ともに類似しており、ほぼ同位置での建て

替えが行われたものと考えられるが、両者の新旧関係は不明である。

#### SB5

SB5は、SB4の南西に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。1×2間の南北棟と考えられるが、南東端の柱穴を欠いている。梁間2.40m、桁行3.60mを測り、棟方向はN-20°-Eを指す。

各柱穴の平面形は直径38cm内外の円形あるいは不整形円形を呈し、深さは22~42cmを測る。確認できた柱痕の直径は18cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

#### SB6

SB6は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。1×4間の南北棟であり、梁間2.20m、桁行7.00mを測り、棟方向はN-10°-Eを指す。

各柱穴の平面形は直径20~36cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さは10~25cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より若干の土師質土器が出土している。また、埋土上位より唐津系碗(5)も出土しているが、これは後世の混入によるものと考えられる。なお、SB6はSK34・35によって切られている。

#### SB7

SB7は、調査区の南西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。4×4間の一辺9mの正方形を呈する建物であるが、西北端部の柱穴を欠いている。棟方向はN-21°-Eを指す。

各柱穴の平面形は直径25cm内外の円形あるいは不整形円形を呈し、深さは20~45cmを測る。確認できた柱痕の直径は15cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器杯(6)・碗(7、8)が出土している。なお、SB7はSB8・9及びSD2と重複している。SB7がSD2を切っているのが確認できた他は、新旧関係は不明である。

#### SB8

SB8は、SB7の内部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。1×3間の東西棟であり、梁間1.50m、桁行5.10mを測る。東端部の北側に2.10m×1.50mの張り出し部が付いている。東西棟の棟方向はN-69°-Wを指す。

各柱穴の平面形は直径25cm内外の円形あるいは不整形円形を呈し、深さは12~40cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器が出土している。

### SB9

SB9は、SB7の東南に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。3×4間の総柱の建物であり、梁間6.40m、桁行7.80mを測る。桁行の柱間距離はほぼ均一に2m弱となっているが、梁間の柱間は、中央部と東部が広く、西部が狭くなっている。棟方向はN-14°-Eを指す。

各柱穴の平面形は直径30cm内外の円形あるいは不整形円形を呈し、深さは15-45cmを測る。確認できた柱痕の直径は15cm内外である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器が出土している。

### SB10

SB10は、調査区の南部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。1×2間の南北棟であり、梁間2.20m、桁行2.70mを測り、棟方向はN-23°-Eを指す。

各柱穴の平面形は直径30cm内外の円形あるいは不整形円形を呈し、深さは20-48cmを測る。確認できた柱痕の直径は15cmである。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

### SB11

SB11は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。1×3間の東西棟であり、梁間4.00m、桁行5.60mを測り、棟方向はN-85°-Wを指す。

各柱穴の平面形は直径35cm内外の円形あるいは長円形を呈し、深さは20-50cmを測る。確認できた柱痕の直径は10cmである。埋土は黄灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SB11はSD9を切っている。

## 土城

### SK1

SK1は、調査区の北端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整形長円形を呈し、長径2.02m、短径1.68mを測り、長軸方向はN-36°-Wを指す。深さは0.40mであり、断面形は逆台形状を呈す。但し、東壁部には段を有している。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より近世陶磁器が出土している。なお、SK1はSD4を切って掘り込まれている。

### SK2

SK2は、SK1の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.30m内外の不整形円形を呈し、深さは0.20mを測る。断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

### SK 3

SK 3は、調査区の北東端部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は直径1.20m内外の不整形円形を呈し、深さは0.20mを測る。底面はほぼ平坦であるが、周縁部に深さ3cmの環状の細溝が検出された。壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁には2段の小段を有している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、備前焼及び青磁の細片が出土している。形状からみて、座棺を埋置した近世墓と考えられる。

### SK 4

SK 4は、SK 3の東に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は直径0.78mの円形を呈し、深さは0.12mを測る。断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の弥生土器が出土している。

### SK 5

SK 5は、調査区の北部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は直径0.80mの円形を呈し、深さは0.10mを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、須恵器高杯(9)及び砥石(35)が出土している。

### SK 6

SK 6は、SK 5の南に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.80m、短径1.32mを測り、長軸方向はN-15°-Eを指す。深さは0.13mであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が出土している。

### SK 7

SK 7は、調査区の北部中央に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は不整形長方形を呈し、長径3.35m、短径1.52mを測り、長軸方向はN-25°-Eを指す。深さ0.22mまで掘り下げた時点で、南半部は底面に達したが、北半部においては直径1.35mの円形土壇が検出された。円形土壇内では長径20cm内外の自然礫よりなる集石が検出され、検出面から底面までの深さは0.40mに及んだ。底面周縁には、幅8cm、深さ3cmの小溝が巡っていた。埋土は灰褐色粘質土であり、集石の間を中心にして弥生土器及び伊万里系碗(10)が出土している。

SK 7は、形状から座棺を埋置したところの近世墓と考えられるが、木片類の出土はみられなかった。なお、SK 7は、2つの土壇が重複したような形状を呈しているが、全面が同一の埋土であり、切り合い関係は確認できなかった。

#### SK 8~10

SK 8~10は、SK 7の東に位置し、第IV層上面において検出された。SD 3の西側に位置しており、埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

SK 8は、平面形が不整形長方形を呈し、長径1.23m、短径0.98mを測り、長軸方向はN-20°-Eを指す。深さは0.14mであり、底面はほぼ平坦であるが、中央部に深さ6cmのピット状の窪みを有している。埋土中からの出土遺物は皆無であった。

SK 9は、平面形が長円形を呈し、長径1.40m、短径1.20mを測り、長軸方向はN-73°-Wを指す。深さは0.38mであり、断面形は逆台形状をなしている。但し、西壁部には段を有している。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SK 9はSD 3の西屑を切って掘り込まれている。

SK 10は、平面形が直径0.76mの円形を呈し、深さは0.58mに及ぶ。断面形は逆台形をなしている。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

#### SK 11・12

SK 11・12は、調査区の北東部で、第IV層上面において検出された。SD 2の東側に位置し、埋土はいずれも黄灰褐色砂質土であった。

SK 11は、幅0.18m、長さ1.35mの帯状の小土壇であり、深さは8cmを測る。埋土中より若干の弥生土器片が出土している。

SK 12は、平面形が不整形長円形を呈し、長径3.21m、短径1.12mを測る。深さは0.29mであり、底面には起伏がみられる。埋土中より弥生土器が出土している。

#### SK 13~17

SK 13~17は、調査区の北西部で、第III層上面において検出された。SK 13・14・16はSB 2と重複する位置にある。埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

SK 13は、平面形が隅丸長方形を呈し、長径1.30m、短径0.72mを測り、長軸方向はN-80°-Wを指す。深さは0.20mであり、断面形は逆台形状をなしている。底面直上において長径20cm内外の自然礫よりなる集石が検出された。集石付近より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SK 13とSB 2との新旧関係は不明である。

SK 14は、平面形が不整形長方形を呈し、長径1.58m、短径0.92mを測り、長軸方向はN-65°-Wを指す。深さは0.22mであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土中より、須恵器、土師質土器及び瓦質土器が出土している。なお、SK 14の北壁はSB 2の柱穴を切っている。

SK 15は、平面形が不整形長円形を呈し、長径0.72m、短径0.60mを測り、長軸方向はN-41°-Wを指す。深さは0.30mであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土中より若干の弥生土器が出土している。

SK16は、平面形が長円形を呈し、長径0.82m、短径0.65mを測り、長軸方向はN-82°-Wを指す。深さは0.21mであり、断面形は逆台形をなす。埋土下位より弥生土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、SK16とSB2との新旧関係は不明である。

SK17は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.00m、短径0.60mを測り、長軸方向はN-80°-Wを指す。深さは0.12mであり、断面形は逆台形状をなす。埋土中からの出土遺物は皆無であった。

#### SK18

SK18は、調査区の東部北寄りに位置し、第IV層上面において検出された。平面形は不整長方形を呈し、長径2.25m、短径1.15mを測り、長軸方向はN-15°-Eを指す。深さは6cmと浅く、中央部にピット状の窪みを有している。埋土は黄灰色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、備前焼及び近世陶磁器が出土している。

#### SK19~21

SK19~21は、調査区の中央部で、第III層上面において検出された。SB4の南部に位置し、埋土はいずれも黄灰褐色粘質土であった。

SK19は、平面形が直径0.80m内外の不整円形を呈し、深さは5cmと浅い。底面は平坦で、北西部に深さ3cmの小さなピット状の窪みを有している。出土遺物は皆無であった。

SK20は、平面形が直径0.68mの不整円形を呈し、深さは0.48mに及ぶ。断面形はU字形をなしているが、西壁は袋状に抉り込まれている。埋土中位より、弥生土器、土師質土器及び近世陶器碗(11)が出土している。

SK21は、平面形が不定形であり、深さも6cmと浅い。出土遺物も皆無であった。

#### SK22・23

SK22・23は、調査区の東部中央に位置し、第IV層上面において検出された。SD6を挟んで東西に並んでおり、両土壇とも埋土は灰褐色粘質土であった。

SK22は、平面形が直径1.30m内外の不整円形を呈し、深さは0.15mを測る。底面外縁には深さ4cmの周溝を有し、底面中央には深さ15cmのピット状の窪みを有している。埋土中より土師質土器及び近世陶磁器の細片が出土している。形状から、塚館埋置の近世墓である可能性が強いが、木片等は検出されなかった。

SK23は、平面形が長円形を呈し、長径1.50m、短径0.81mを測り、長軸方向はN-40°-Wを指す。深さは0.30mであり、断面形は逆台形状をなしている。底面中央に深さ5cmの不定形の落ち込みを有している。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

#### S K 24・25

S K 24・25は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅲ層上面において検出された。S B 5の南に南北に並ぶ近世墓である。

S K 24は、平面形が直径1.75m内外の不整形円形を呈し、深さは0.60mに及ぶ。埋土は、3層に分層され、第Ⅰ層が灰色粘質土、第Ⅱ層が灰黄色粘質土、第Ⅲ層が灰褐色粘質土であり、第Ⅱ・Ⅲ層には黒色土がブロック状に混入していた。第Ⅰ層除去の段階で、座棺埋置部と考えられる第Ⅱ層が直径1.20mの円形プランをもって検出され、その周縁を掘り方部の埋土と目される第Ⅲ層が環状に巡っていた。第Ⅱ層下位において、長径20cm内外の自然石が20個程検出され、その中に石臼も1点(36)混入していた。底面直上においては骨片と木片が若干出土している。元来、座棺の直上に配されていた自然石が座棺の腐朽に伴って陥落したものと考えられる。出土遺物は弥生土器及び備前焼等であった。

S K 25は、平面形が不整形長円形を呈し、長径1.86m、短径1.60mを測り、長軸方向はN-60°-Wを指す。深さは0.61mに及び、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は、2層に分層され、第Ⅰ層が灰黄色粘質土、第Ⅱ層が灰褐色粘質土であり、両層とも黒色土の混入が認められた。第Ⅰ層が座棺埋置部と考えられ、直径1.20mの円形プランを有しており、その周縁部の第Ⅱ層は掘り方部と判断される。第Ⅰ層と第Ⅱ層の境目には木目痕が残っている部分もあった。第Ⅰ層の上層部には大小の自然礫がぎっしり詰められており、その下位からは、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が若干出土しており、また、木片の出土もみた。

#### S K 26

S K 26は、S K 24の東に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径3.55m、短径2.16mを測り、長軸方向はN-68°-Wを指す。深さは0.34mであり、底面には若干の起伏がみられ、北壁と西壁には段を有している。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。底面直上から埋土上層に至るまで大小の自然礫よりなる集石が配せられており、集石の間より若干の弥生土器片が出土している。

S K 26も、S K 24・25と同じく近世墓である可能性が強いが、桶状の座棺が埋置されていた痕跡はなかった。

#### S K 27～29

S K 27～29は、S K 26の東南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも、座棺を埋置したところの近世墓と考えられるが、S K 28・29は上層部が攪乱を受けており、断定はできない。

S K 27は、平面形が直径1.58mの円形を呈し、深さは0.42mを測る。断面形は逆台形状をなし、底面はほぼ平坦である。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がプロ

ック状に混入していた。埋土下層において約20個の自然礫も検出されており、底面直上からは骨片及び木片も出土している。出土遺物は、土師質土器、土錘(12)及び近世陶磁器の細片であった。

SK28は、平面形が直径1.40m内外の不整形を呈し、深さは0.48mを測る。底面には起伏があり、南半部が若干深くなっており、ピット状の浅い窪みを有している。壁は垂直に近く立ち上がるが、北壁際において深さ3cm程の周溝が確認された。周溝は、おそらく座棺埋置に伴うものであろう。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より土師質土器の細片が出土している。

SK29は、平面形が直径1.18m内外の不整形を呈し、深さは0.46mを測る。底面はほぼ平坦であり、南部に周溝の一部と目される小溝を有している。埋土はSK28と同様であり、埋土中より近世陶磁器の細片が出土している。

#### SK30・31

SK30・31は、調査区の東部南寄りに位置し、第IV層上面において検出された。両土坑は東西に隣接しており、SK31の西壁がSK30の東壁を切っている。

SK30は、平面形が直径1.80mの円形を呈し、深さは0.65mを測る。断面形はU字形をなし、底面には若干の起伏がみられる。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が出土している。

SK31は、平面形が直径1.82m内外の不整形を呈し、深さは0.78mに及ぶ。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は、SK30とほぼ同様であるが、若干灰色が強い。埋土中より、弥生土器、近世陶磁器及び木片が出土している。

SK30・31も、形状から、座棺埋置の近世墓である可能性が高い。

#### SK32

SK32は、SK31の東に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は不整形長円形を呈し、長径3.76m、短径1.10mを測り、長軸方向はN-70°-Wを指す。深さは0.24mであり、断面形は逆台形状をなしている。底面はほぼ平坦であるが、西部に深さ3cm程のピット状の窪みを有している。埋土は、灰黒褐色粘質土であり、それに灰色土がブロック状に混入していた。埋土中より弥生土器の細片が出土しているが、SK32は検出状況等からして、近世の寝棺墓である可能性が高い。なお、SK32はSD1の西屑を切って掘り込まれている。

#### SK33

SK33は、SK30の南に位置し、第IV層上面において検出された。西端部が調査区外となっ

ており、全容は明らかでないが、平面形は長大な長方形を呈しており、長径5.00m以上、短径2.80mを測る。深さは0.15mと浅い。埋土は灰色シルトであり、埋土中より、土師質土器、備前焼及び伊万里系碗(13)が出土している。

#### S K 34・35

S K 34・35は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも近世墓と考えられる土壇である。

S K 34は、平面形が不整形長方形を呈し、長径2.22m、短径1.60mを測り、長軸方向はN-30°-Eを指す。深さは0.55mであり、断面形はU字形をなしている。埋土は、3層に分層され、第Ⅰ層が灰色粘質土、第Ⅱ層が暗灰色粘質土、第Ⅲ層が灰褐色粘質土であり、第Ⅱ層には黒色土がブロック状に混入していた。第Ⅰ層除去後に、S K 34の南部において、第Ⅱ層が直径1.35mの円形のプランをもって検出され、外縁部に第Ⅲ層が環状に確認された。第Ⅱ層が座棺埋置部と考えられ、同層より近世陶磁器及び木片が出土している。また、西壁際より若干の自然礫も出土している。なお、S K 34はS K 35の北壁を切って掘り込まれている。

S K 35は、平面形が直径1.40mの円形を呈し、深さは0.39mを測る。断面形は箱形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、南半部に深さ3cm程の周溝を有している。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より土師質土器の細片が出土している。なお、S K 34・35はS B 6の柱穴の一部を切っている。

#### S K 36~39

S K 36~39は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

S K 36は、平面形が一辺1.38mの方形を呈し、深さは0.11mを測る。埋土中より若干の須恵器及び土師質土器片が出土している。

S K 37は、平面形が不整形長方形を呈し、長径2.70m、短径2.56mを測り、長軸方向はN-25°-Wを指す。深さは0.22mであり、底面には若干の起伏がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

S K 38は、平面形が一辺1.10m内外の不整形方形を呈し、深さは0.12mを測る。底面には起伏がみられ、北壁際が若干深くなっている。埋土中からの出土遺物は皆無であった。なお、S K 38はS D 10の西屑を切っている。

S K 39は、平面形が不整形円形を呈し、長径1.05m、短径0.40mを測り、長軸方向はN-28°-Eを指す。深さは8cmと浅く、埋土中より若干の土師質土器片が出土している。

#### SK40~43

SK40~43は、調査区の南端部東寄りに位置し、第IV層上面において検出された。うち、SK40・42・43は近世墓と考えられる土塚である。

SK40は、平面形が直径1.78mの円形を呈し、深さは0.47mを測る。埋土は、座棺埋置部と考えられる第I層と掘り方部と考えられる第II層とに分層され、第I層が灰黄色粘質土、第II層が灰褐色粘質土であり、いずれも黒色土がブロック状に混入していた。前者の上面は直径1.20mの円形を呈しており、埋土中より近世陶磁器及び木片が出土している。

SK41は、平面形が不定形であり、深さも9cmと浅い。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物も皆無であった。

SK42は、平面形が直径1.70mの円形を呈し、深さは0.48mを測る。本土塚も座棺埋置の近世墓と考えられ、埋土の状況はSK40の場合と同様であった。底面直上より近世陶磁器及び木片が出土している。

SK43は、平面形が不定形を呈しているが、その内側において遺構検出の時点より、座棺埋置部が直径1.20mの円形のプランをもって確認できた。同部及び掘り方部とも、埋土はSK40の場合と同様であった。底面よりやや浮いた状態で近世陶磁器及び木片が出土している。

#### SK44

SK44は、SK43の東に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は長方形を呈するものと考えられるが、南半部は調査区外となっており、全容は不明である。深さは0.15mであり、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、須恵器、土師質土器及び備前焼が出土している。

#### 溝

#### SD2

SD2は、調査区の北東部から幾分屈曲しながら南西端部に至る長大な溝である。東半部は第IV層上面において検出され、西半部は第III層上面において検出された。幅1.50~2.00mを測り、深さは0.40mを標準とする。断面形は舟底形を呈するが、概して最深部は西に偏している。確認長は115mに及び、北部中央では長さ10mの浅い支流も検出されている。また、南端部はLoc. 31のSD3に続くものと考えられる。埋土は、5層に分層され、第I層灰褐色砂質土、第II層灰黒褐色粘質土、第III層青灰色砂質土、第IV層暗灰色細砂、第V層暗灰褐色荒砂となっている。埋土中より、弥生土器壺(14~23)・甕(24)・小形土器(25)、土師器及び須恵器鉄鉢(26)が出土している。また、叩石(32、33)や砥石(34)の出土もみられた。

SD2は、出土遺物からみて弥生後期から古墳時代にかけて機能した溝と考えられる。なお、

同溝はSB7及びSD3によって切られている。

#### SD3

SD3は、調査区の北端部から直線的に南へ延びる溝であり、第IV層上面において検出された。幅0.76m、深さ0.25mを標準とし、断面形はU字形を呈している。長さは25mに及び、方向からみて南のSD5に連続する可能性が高い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SD3は、SD2・4を切っており、SK9によって切られている。

#### SD4

SD4は、調査区の北部に位置し、第IV層上面において検出された。SD3と交錯して東西に延びる溝であり、確認長は11mである。幅1.00m、深さ0.12mを標準とするが、西部では規模が半減している。断面形は逆台形状を呈す。埋土は灰褐色砂質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、SD4はSD3の他、SK1によっても切られている。

#### SD5

SD5は、調査区の東部に位置し、第IV層上面において検出された。SD1の西側を南北に縦走する溝であり、全長31mに及ぶ。幅1.10m、深さ0.36mを標準とし、断面形は舟底形を呈している。埋土は、3層に分層され、第I層灰褐色シルト、第II層暗灰褐色砂質土、第III層茶褐色砂質土となっている。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び備前焼の細片が出土している。なお、SD5は、SD1・6を切っており、SD7によって切られている。

#### SD6

SD6は、調査区の東部で、第IV層上面において検出された。SD1の西側に位置し、SD5と交錯しながら北西から南東へ延びている。幅0.80m、深さ0.24mを標準とし、断面形は舟底形を呈している。長さは49mに及び、方向はN-27°-Eを指す。埋土は、2層に分層され、第I層が灰褐色シルト、第II層が暗灰褐色砂質土であり、SD5とはほぼ同様であるが、SD6の方が若干砂質に富んでいた。第II層を中心にして、弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

#### SD7

SD7は、調査区の東部中央に位置し、第IV層上面において検出された。調査区の東端部より西北西へ向かって延びる溝であり、確認長は32mに及ぶ。幅0.75m、深さ0.25mを標準とし、

断面形はU字形を呈している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器壺 (27)、土師質土器、備前焼播鉢 (28) 及び近世陶磁器碗 (29) が出土している。なお、SD7はSD1・5・6を切っている。

#### SD8

SD8は、調査区の中央部で、第Ⅲ層上面において検出された。SB3・4の東側に位置する南北溝であり、全長7.50mを測る。幅0.50m、深さ0.18mを標準とし、断面形は逆台形状を呈している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の弥生土器及び土師質土器が出土している。位置からみてSB3・4に付随した溝である可能性が高い。

#### SD9

SD9は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。SD1の東側に南北に並走する溝であり、北部は2条に分かれている。幅1.00m、深さ0.20mを標準とし、断面形は逆台形状を呈している。確認長は19mである。埋土は灰褐色シルトであり、埋土中より、弥生土器、須恵器及び土師質土器が出土している。なお、SD9はSB11を形成する柱穴によって切られている。

#### SD10

SD10は、SD9の東側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。SD9と方向をほぼ同じくする南北溝であり、全長20mを測る。幅1.20m、深さ0.14mを標準とするが、北部では徐々に規模を縮小している。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中より、弥生土器、須恵器及び近世陶磁器の細片が出土している。

#### ピット

#### P1

P1は、調査区の南西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。平面形は直径30cmの円形を呈し、深さは28cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器杯 (30) が出土している。

#### P2

P2は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は一辺20cm内外の不整形を呈し、深さは24cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び土鍾 (31) が出土している。

## 5. まとめ

Loc. 41における主な検出遺構としては、弥生時代のSD1とSR2を除けば、古墳時代のSD2と中世の堀立柱建物址群及び近世座棺墓があげられる。

SD2は、出土遺物からして、弥生後期から古墳時代にかけて機能した可能性が強い。また、屈曲部も多く、人為的に構築された溝とは考えられない。

SB1～11は、中世の堀立柱建物址と把握して誤りないと考えられるが、特にSB7は、柱穴より出土した土師質土器の形態からして、14～15世紀のものと考えられる。また、建物の方角・建て方から、SB2・8・9もSB7とそれほど時期差をもたないものと判断してよからう。

SD3～9も、SD7を除けば中世の溝と考えられるが、堀立柱建物址群を囲むような形状を呈しているものは皆無であった。但し、SD8のみがSB3・4に伴うものであった可能性がある。

当調査区では、座棺を埋置したところの近世墓群も、調査区の中央部及び南端部で確認されている。当調査区一帯が水田化されて後、その片隅が墓域として設定されたものと考えられる。

第6表 掘立柱建物址計測表

棟目番号	遺構番号	規 模			棟 方 向	面 積 ( $m^2$ )	備 考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)			
第60回	SB 1	2×2	3.20×3.00	1.42~2.94	N-27°-E	9.6	
◇	SB 2	2×2	3.60×5.00	1.00~4.60	N-70°-W	21.6	
第61回	SB 3	2×3	4.60×5.60	1.12~2.76	N-71°-W	25.8	
◇	SB 4	2×3	3.70×5.60	1.40~3.64	N-72°-W	20.7	
第62回	SB 5	1×2	2.40×3.60	1.75~2.50	N-20°-E	8.6	
◇	SB 6	1×4	2.20×7.00	1.42~2.22	N-10°-E	15.4	
第63回	SB 7	4×4	9.00×9.00	2.12~4.22	N-21°-E	75.6	
第64回	SB 8	1×3	1.50×5.10	1.42~2.18	N-69°-W	7.7	
◇	SB 9	3×4	6.40×7.80	1.26~2.92	N-14°-E	49.9	
第65回	SB 10	1×2	2.20×2.70	1.27~2.58	N-23°-E	5.9	
◇	SB 11	1×3	4.00×5.60	1.80~4.00	N-85°-W	22.4	

第7表 土壇計測表

棟目番号	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	断 面 形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第66回	SK 1	不整長円形	2.02	1.68	0.40	N-36°-W	逆台形	
◇	SK 2	不整円形	1.40	1.25	0.20	N-45°-W	◇	
◇	SK 3	◇	1.20	—	0.20	—	◇	
◇	SK 4	円形	0.78	—	0.12	—	◇	
◇	SK 5	◇	0.80	—	0.10	—	皿形	
◇	SK 6	長方形	1.80	1.32	0.13	N-15°-E	逆台形	
◇	SK 7	不整長方形	3.35	1.52	0.40	N-25°-E	◇	
第67回	SK 8	◇	1.23	0.98	0.14	N-20°-E	箱形	
◇	SK 9	長円形	1.40	1.20	0.38	N-73°-W	◇	
◇	SK 10	円形	0.76	—	0.58	—	逆台形	
◇	SK 11	带状	1.35	0.18	0.08	N-20°-E	◇	
◇	SK 12	不整長円形	3.21	1.12	0.29	N-30°-E	皿形	
◇	SK 13	隅丸長方形	1.30	0.72	0.20	N-80°-W	逆台形	
第68回	SK 14	不整長方形	1.58	0.92	0.22	N-65°-W	◇	
◇	SK 15	不整長円形	0.72	0.60	0.30	N-41°-W	◇	

陣團番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長 径	短 径	深 さ			
第 68 団	S K 16	長円形	0.82	0.65	0.21	N-82°-W	逆台形	
*	S K 17	不整長方形	1.00	0.60	0.12	N-80°-W	*	
*	S K 18	*	2.25	1.15	0.06	N-15°-E	楕形	
*	S K 19	不整円形	0.80	—	0.05	—	*	
第 69 団	S K 20	*	0.58	—	0.48	—	U字形	
*	S K 21	不定形	1.35	0.45	0.06	N-15°-E	楕形	
*	S K 22	不整円形	1.30	—	0.30	—	逆台形	
*	S K 23	長円形	1.50	0.81	0.35	N-40°-W	楕形	
*	S K 24	不整円形	1.75	—	0.60	—	*	
第 70 団	S K 25	不整長円形	1.86	1.60	0.61	N-60°-W	*	
*	S K 26	隅丸長方形	3.55	2.16	0.34	N-68°-W	逆台形	
*	S K 27	円形	1.58	—	0.42	—	*	
*	S K 28	不整円形	1.40	—	0.48	—	楕形	
*	S K 29	*	1.18	—	0.46	—	*	
第 71 団	S K 30	円形	1.80	—	0.65	—	U字形	
*	S K 31	不整円形	1.82	—	0.78	—	*	
*	S K 32	不整長円形	3.76	1.10	0.24	N-70°-W	逆台形	
第 72 団	S K 33	長方形	5.00	2.80	0.15	N-68°-W	*	
*	S K 34	不整長方形	2.22	1.60	0.55	N-30°-E	U字形	
*	S K 35	円形	1.40	—	0.39	—	楕形	
*	S K 36	方形	1.38	—	0.11	—	逆台形	
第 73 団	S K 37	不整長方形	2.70	2.56	0.22	N-25°-W	*	
*	S K 38	不整方形	1.10	—	0.12	—	*	
*	S K 39	不整長円形	1.05	0.40	0.08	N-28°-E	*	
*	S K 40	円形	1.78	—	0.47	—	楕形	
*	S K 41	不定形	1.80	1.00	0.09	N-60°-E	逆台形	
*	S K 42	円形	1.70	—	0.48	—	楕形	
第 74 団	S K 43	不定形	2.00	1.80	0.30	N-40°-W	*	
*	S K 44	長方形	—	—	0.15	—	逆台形	

第8表 包含層出土器観察表

押出番号	層位	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
1	第三層	摺鉢	38.0 (9.8)	口縁部に2条の凹線。	9条1単位の垂線を有す。 回転ロクロナゲ調整。	備前焼。
2	*	*	34.4 (7.0)	口縁部を上方に拡張。口唇部 は内傾する面を有す。	回転ロクロナゲ調整。	*
3	*	白磁 碗	20.0 (2.5)	玉縁状口縁。		
4	*	鉢	24.0 (7.2)	*	内外面とも施釉。	唐津系。

第9表 遺構出土土器観察表

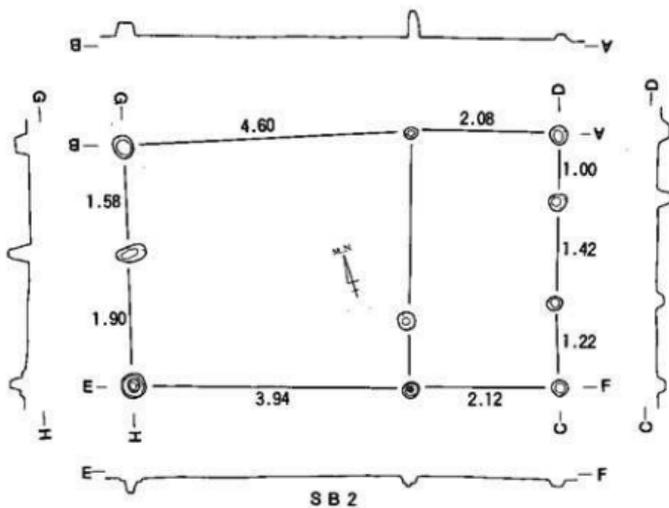
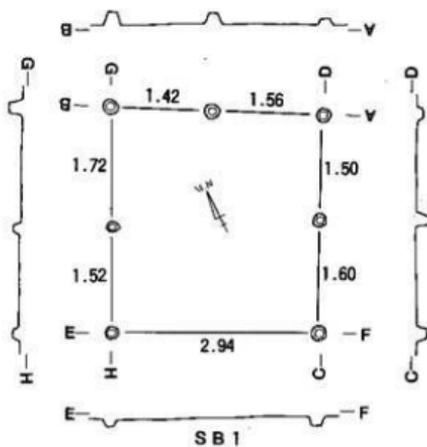
押出番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
5	SB 6 P 1	碗	12.5 (5.2)	体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁部は傾く外反する。	外面体部下位は露胎。	唐津系。
6	SB 7 P 1	土師質土器 杯	(1.9) 6.2		底部回転承切り。	
7	*	土師質土器 椀	12.7 (3.9)	内湾して立ち上がり、唇部は傾 く外反し、丸くおさめる。		
8	SB 7 P 2	*	11.5 (3.5)	直線的に立ち上がり、唇部は傾 く外反し、丸くおさめる。		
押出番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
9	SK 5	須恵器 高杯	(4.0) 6.5	高杯胴部の上通部。		
押出番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
10	SK 7	碗	9.8 5.1 3.9		内外面とも施釉。 外面に草文文。	伊万里系。
11	SK 20	*	11.5 (6.5)		内外面貫入有り。	

押固番号	連携番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (mm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
12	S X 27	土 鐘	全 長 4.2 直 径 1.0 重量(g) 3.8	鈴鉢形を呈す。		十部貫。
13	S X 33	碗	— ( 2.6 ) — 6.4		高台部に2条の帯線。	伊万里系。
押固番号	連携番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (mm)	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
14	S D 2	弥生土器 壺	19.2 ( 9.2 ) — —	短く直立広縁に立ち上がり、胴部から口縁部は直線的に外反す。口縁部外周には幅2.3mmの粘土帯を設けず。口唇部は幅広く円状をなし、上下縁に厚みを配す。	胴部上縁に心上がりハケ状原形による列点文を配す。 口唇部縁方向のナゲ調整。 胴部外面縁方向のハケ調整。	
15	*	*	11.5 ( 4.4 ) — —	口縁部は丸く外反する。 口唇部は面をなす。		
16	*	*	20.4 ( 7.4 ) — —	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口唇部、胴部内面は右下がりのハケ調整。	
17	*	*	12.5 ( 6.2 ) — —	わずかに肩のふくらんだ上胴部から口縁部は短く外反する。口唇部は面をなす。口縁部外面に外方から直径3mmの円孔を穿つ(虎皮状)。	口唇部及び口縁部内外面縁方向のナゲ調整。胴部内面は右から左へのヘラ削り。外面ハケ調整。	
18	*	*	— ( 4.8 ) — 10.4	非常に厚い底部。	調整不明。	
19	*	*	— ( 6.9 ) — 7.8	下胴部は直線的に外上方に立ち上がる。		下胴部から外底にかけて黒塗有り。
20	*	*	— ( 5.2 ) — 5.4	上げ底気味の厚い底部。		
21	*	*	— ( 3.9 ) — 9.0		外面へラ磨き。	外底に黒塗有り。
22	*	*	— ( 5.3 ) — 5.2	下胴部は直線的に外上方に立ち上がる。		
23	*	*	— ( 3.2 ) — 5.2	若干小さい底部。		
24	*	弥生土器 壺	— ( 7.0 ) — 6.4		外面ハケ調整。	下胴部に黒塗有り。
25	*	小形土器	— ( 2.9 ) — 2.5		手捏ね。	外底に黒塗有り。

標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
26	SD 2	須恵器 鉄鉢	23.4 (6.3)	上胴部から内傾して立ち上がり、 肩部は丸くおさめる。		
27	SD 7	弥生土器 甕	18.8 (6.4)	口縁部は扇形から滑らかに外反する。 口唇部はわずかに凹状をなし、 下下に短目を施す。	扇状部にハケ原形押圧による段が 出している。	
標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
28	SD 7	播 鉢	(6.7) 14.2		6条1単位の垂線を施す。	備前焼。
29	*	甕	(4.9) 4.7		垂付のみ露出。 内外面とも貫入有り。	
30	P 1	十師賢土器 杯	16.0 (4.4)	内湾しなから立ち上がり、 肩部は短く外反。	口縁部内面に弱い比線有り。	
31	P 2	土 鐘	全長 4.0 直径 1.5 重量(g) 7.7	円筒形を施す。		土厚質。

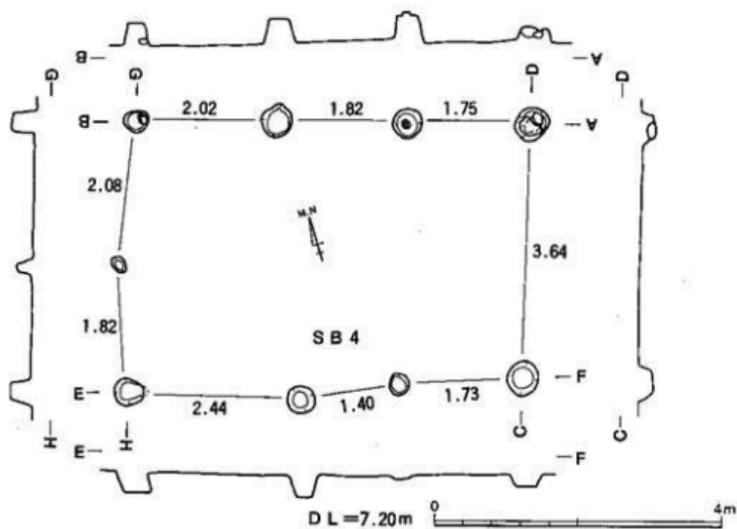
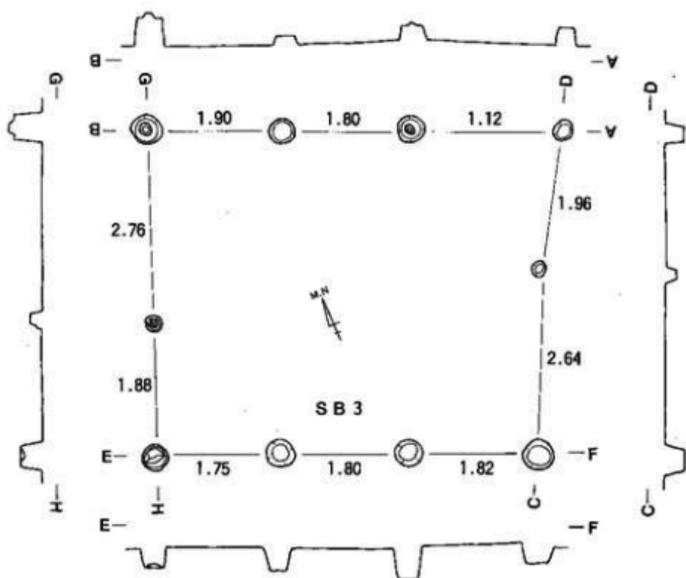
第10表 遺構出土石器観察表

標記番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 計測値 (cm, #) 最大厚 重量	材 質	特 徴	備 考
32	SD 2	叩 石	10.4 8.0 2.4 325.0	砂 岩	上面中央部および反面縁部に 痕有り。	
33	*	*	8.8 5.3 1.0 56.0	*	自然面と削離面とからなる。 周縁部に浅い痕を残す。	
34	*	砥 石	8.4 4.4 3.9 295.0	砂 岩	3面を使用している。	
35	SK 5	*	7.9 6.2 4.4 184.0	*	4面とも使用している。	
36	SK 24	石 臼	直径 30.6 全厚 5.7 重量(g) 8900.0	*	周縁部に柄杓着のための穿孔有 り。	

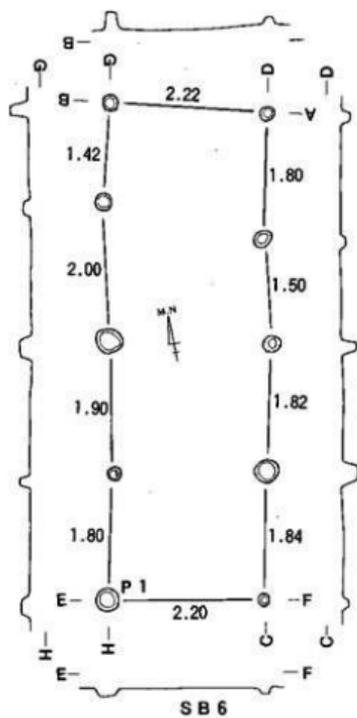
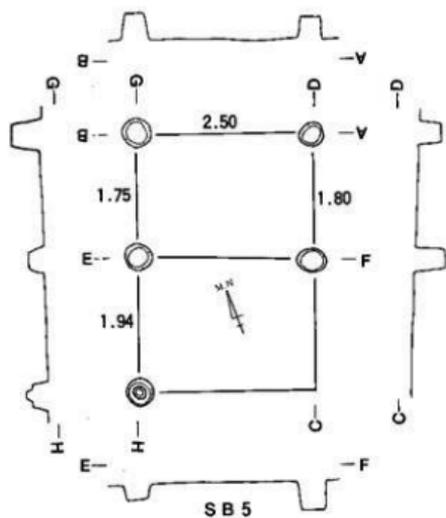


DL = 7.20m 0 4m

第60圖 SB 1 · 2

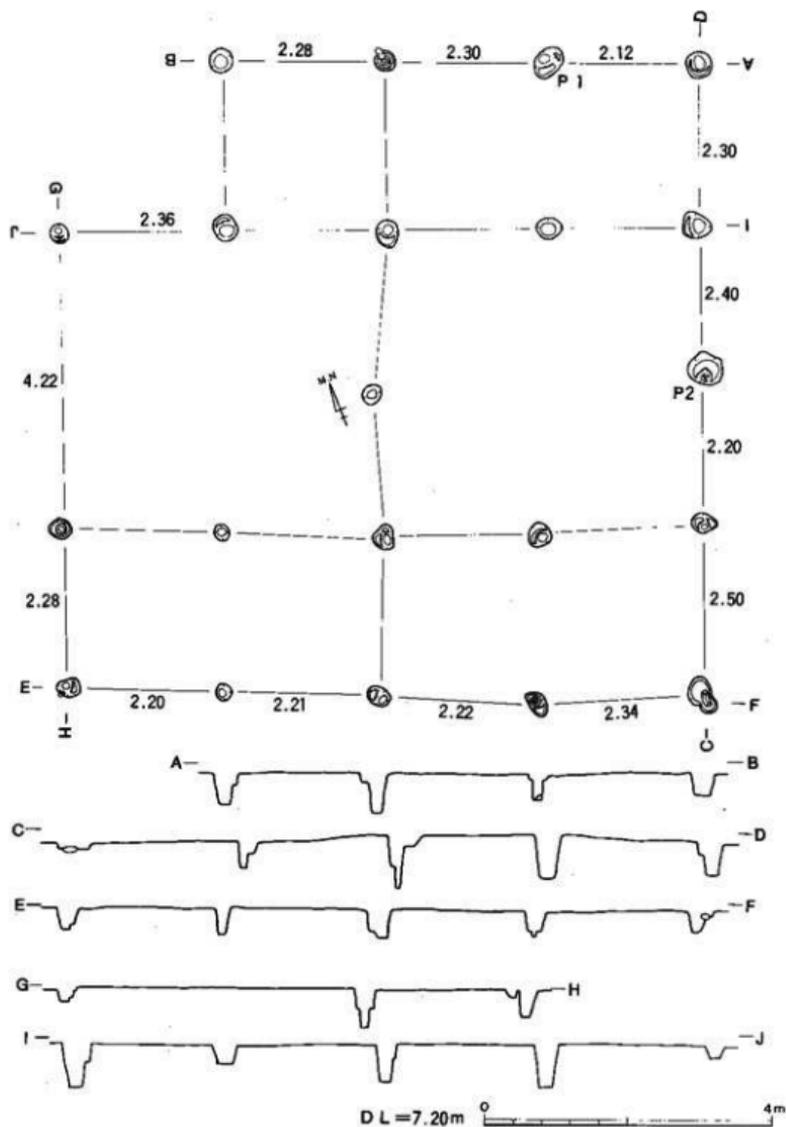


第61图 SB 3 · 4

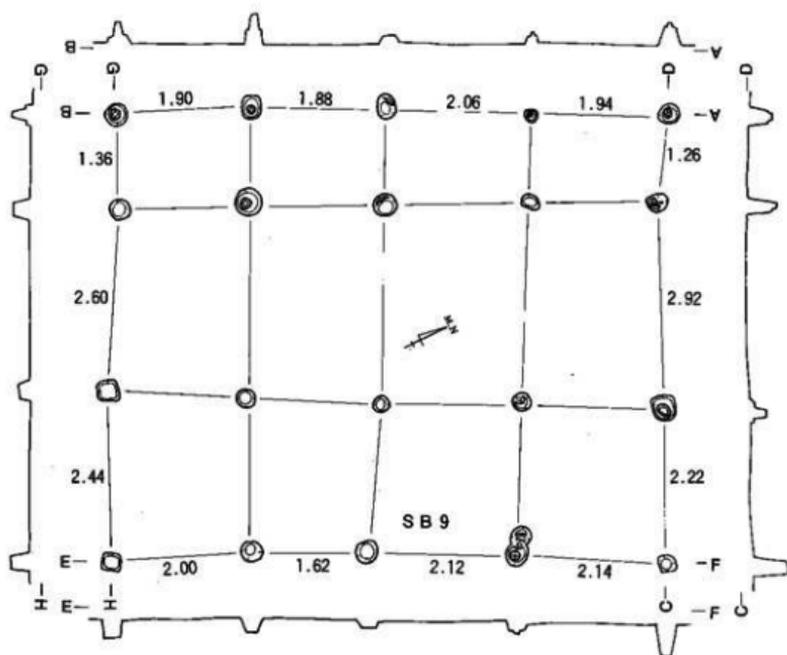
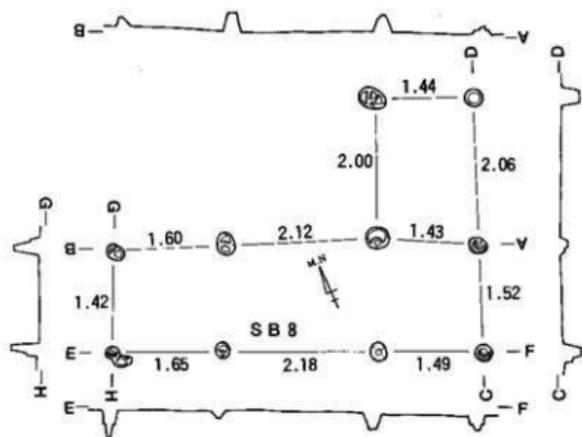


DL=7.20m 0 4m

第62圖 SB 5・6

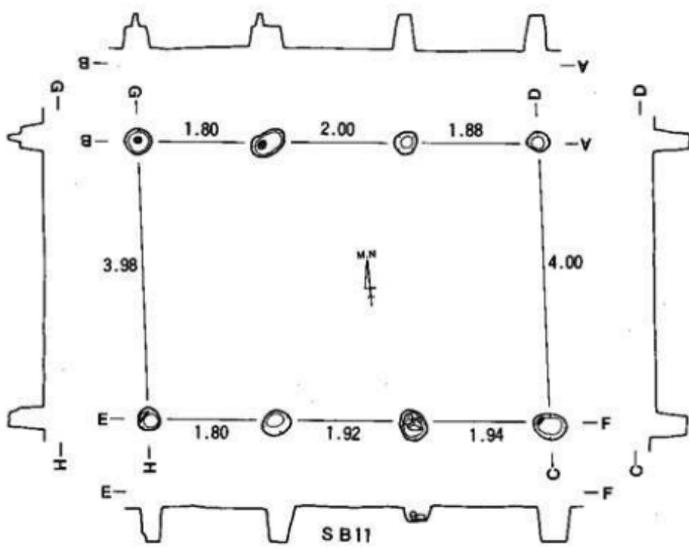
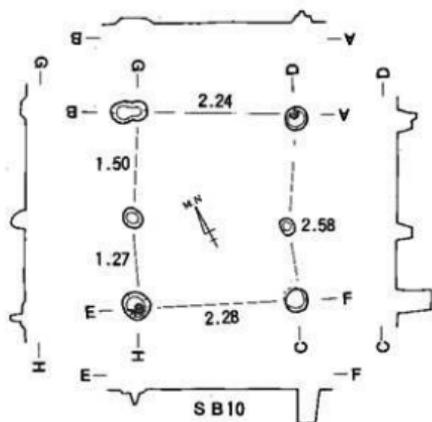


第63图 SB 7



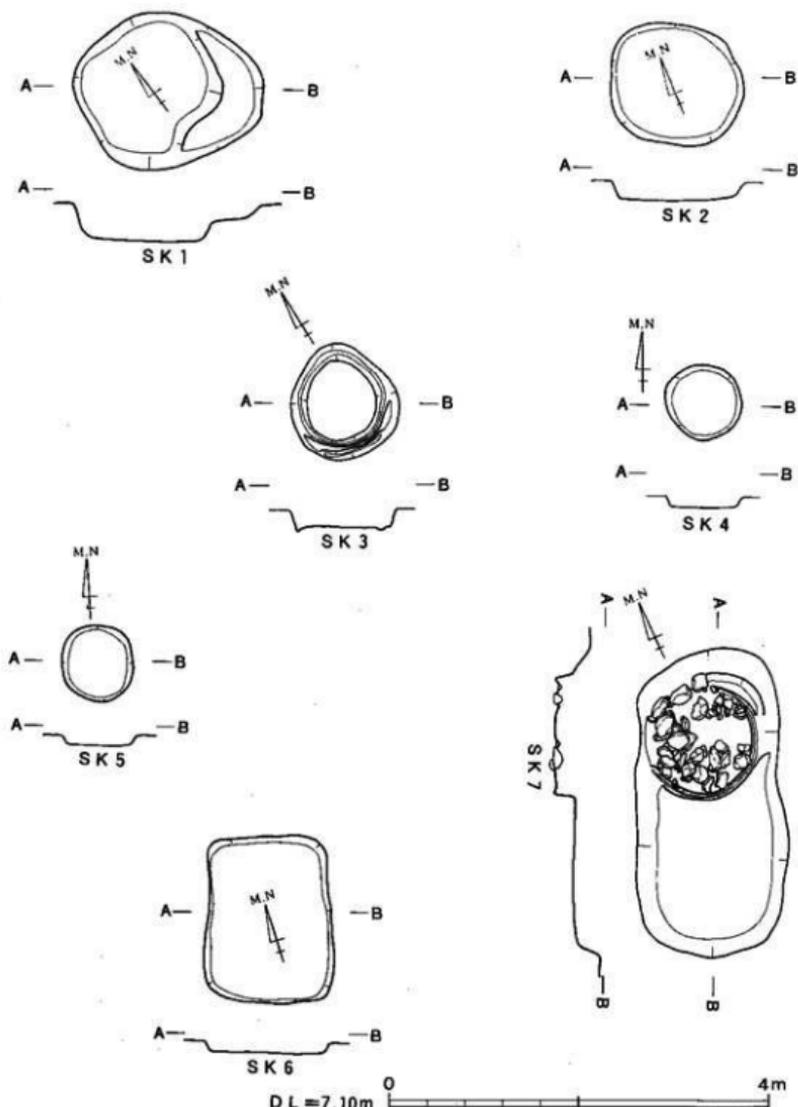
DL = 7.20 m 4m

第64圖 SB 8 · 9

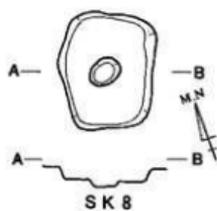


DL = 7.20m 0 4m

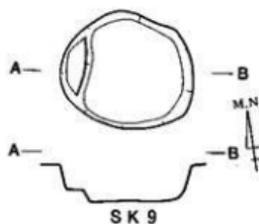
第65圖 SB10・11



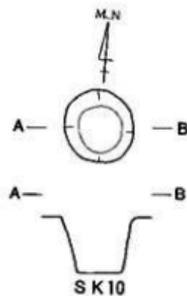
第66圖 SK 1~7



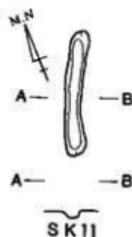
SK 8



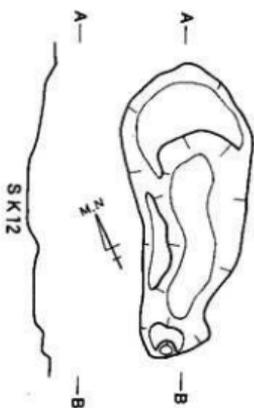
SK 9



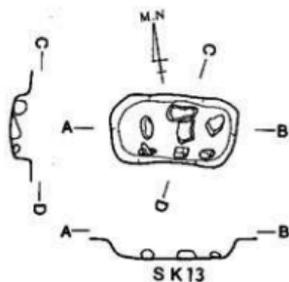
SK 10



SK 11



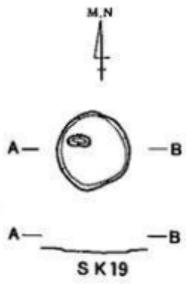
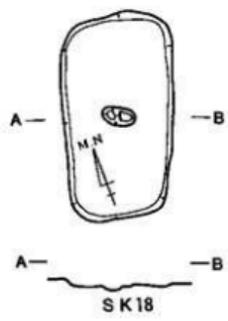
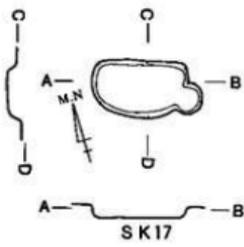
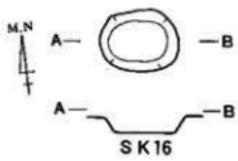
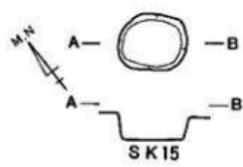
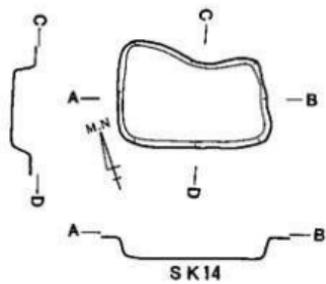
SK 12



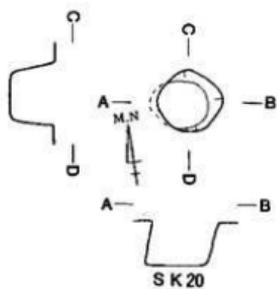
SK 13



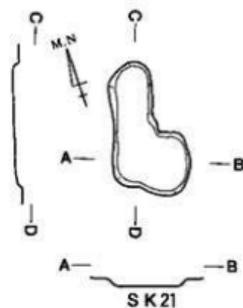
第67圖 SK 8~13



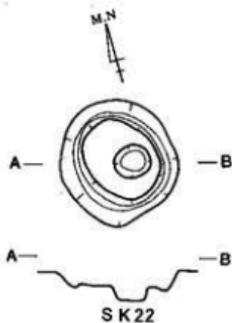
第68圖 SK 14~19



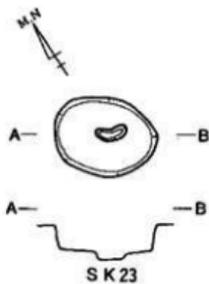
SK 20



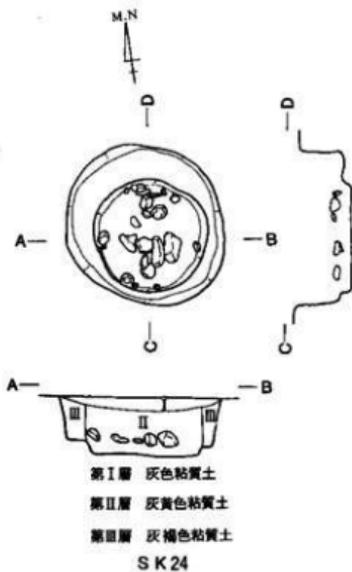
SK 21



SK 22



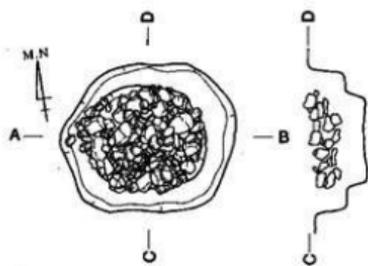
SK 23



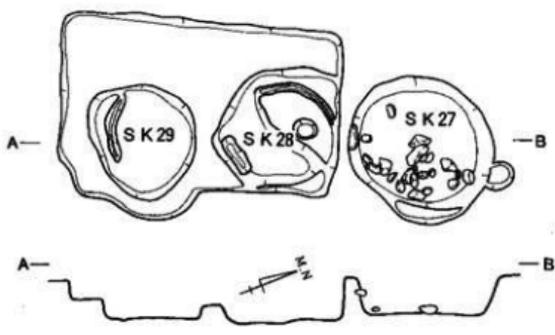
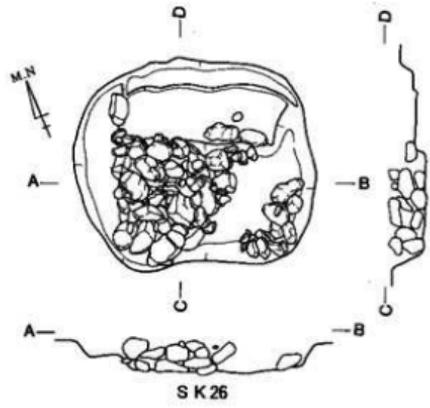
SK 24

DL = 7.10m 0 4m

第69圖 SK 20~24

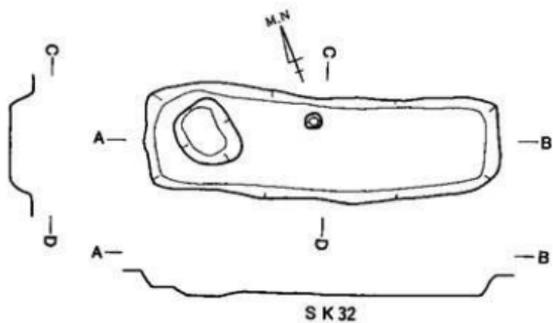
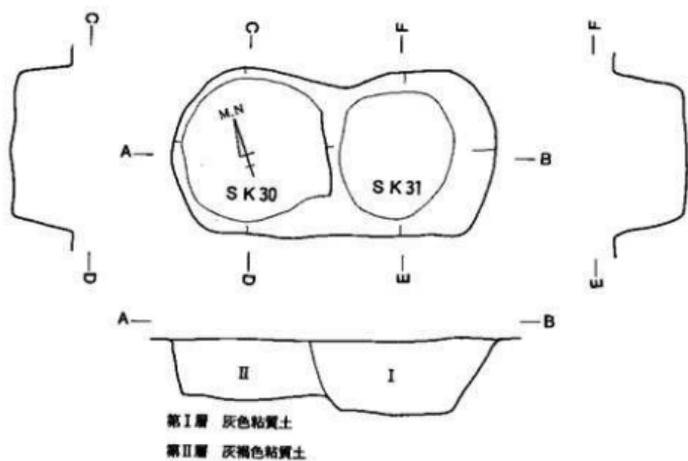


第I層 灰黃色粘質土  
 第II層 灰褐色粘質土  
 S K 25



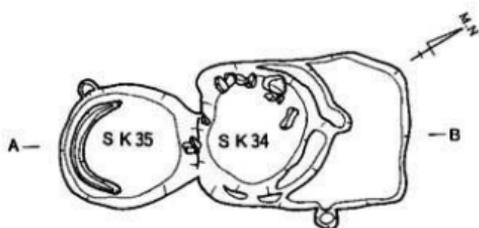
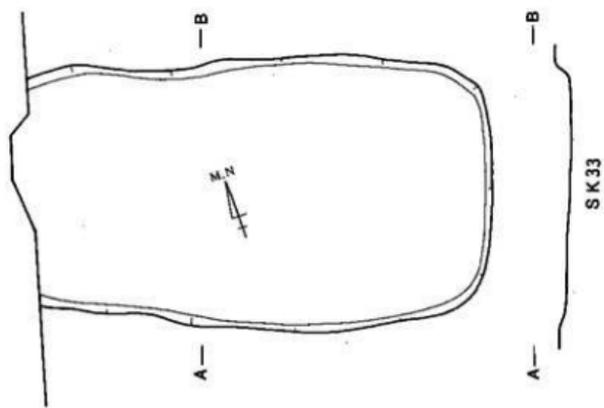
DL = 7.10m 0 4m

第70圖 S K 25~29

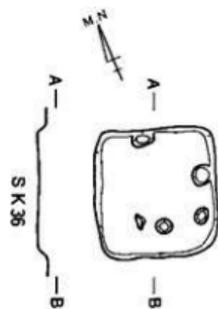


D L = 7.10 m 0 4 m

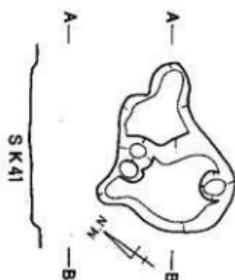
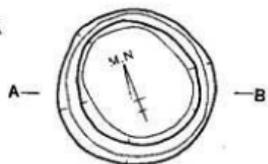
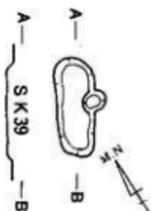
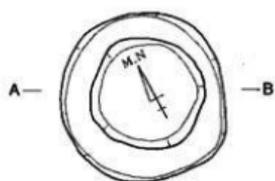
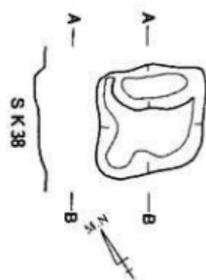
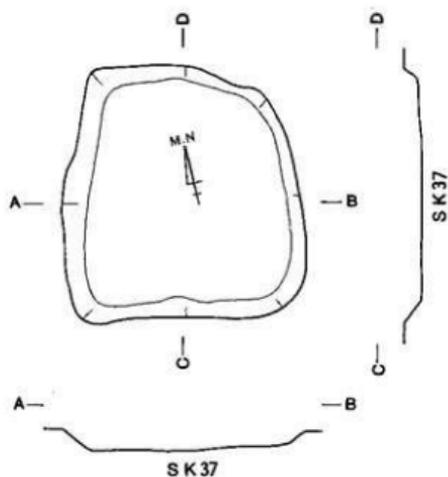
第71圖 SK 30~32



- 第I層 灰色粘質土
- 第II層 暗灰色粘質土
- 第III層 灰褐色粘質土
- 第IV層 灰褐色粘質土

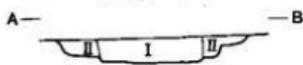
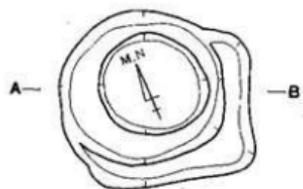


第72圖 SK 33~36



DL = 7.10m 0 4m

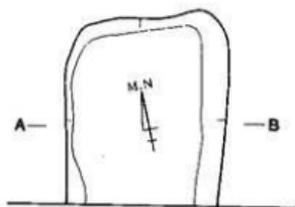
第73圖 SK 37~42



第I層 灰黄色粘質土

第II層 灰褐色粘質土

SK43



SK44



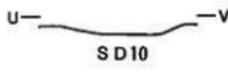
第I層 灰褐色砂質土  
第II層 灰黒褐色粘質土  
第III層 青灰色砂質土  
第IV層 暗灰色細砂  
第V層 暗灰褐色瓷砂

SD2



第I層 灰褐色シルト  
第II層 暗灰褐色砂質土  
第III層 茶褐色砂質土

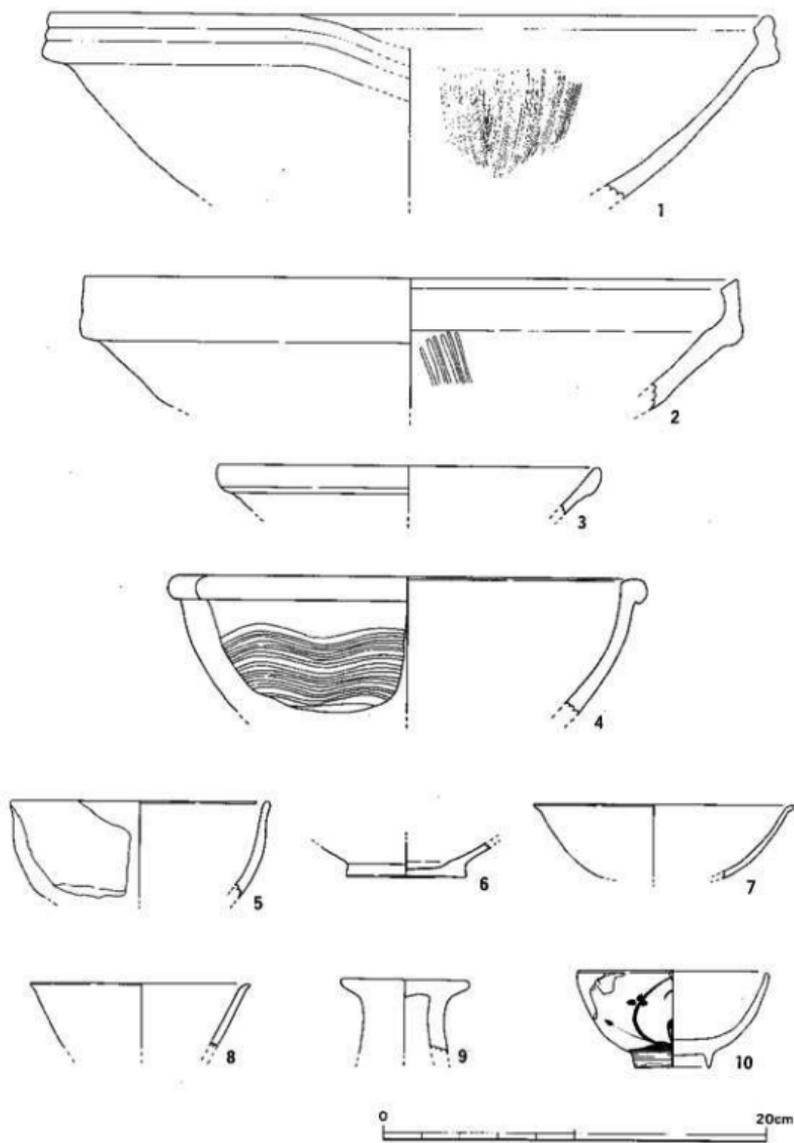
SD5



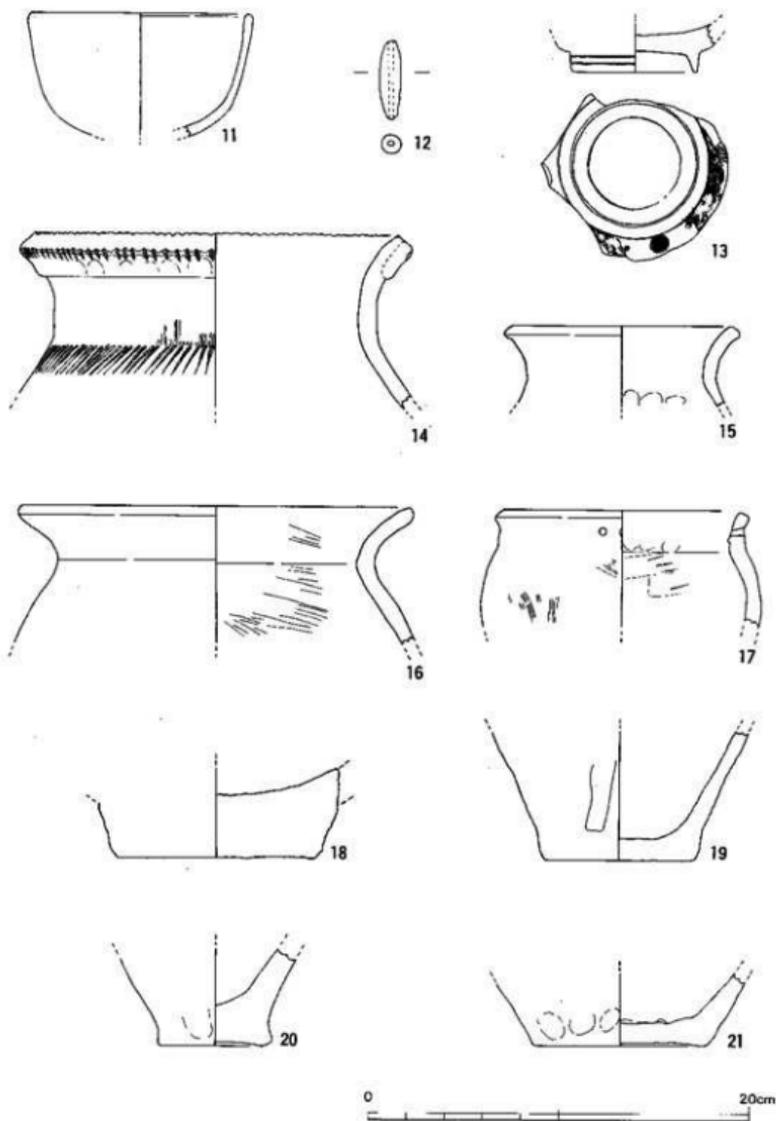
DL=7.10m



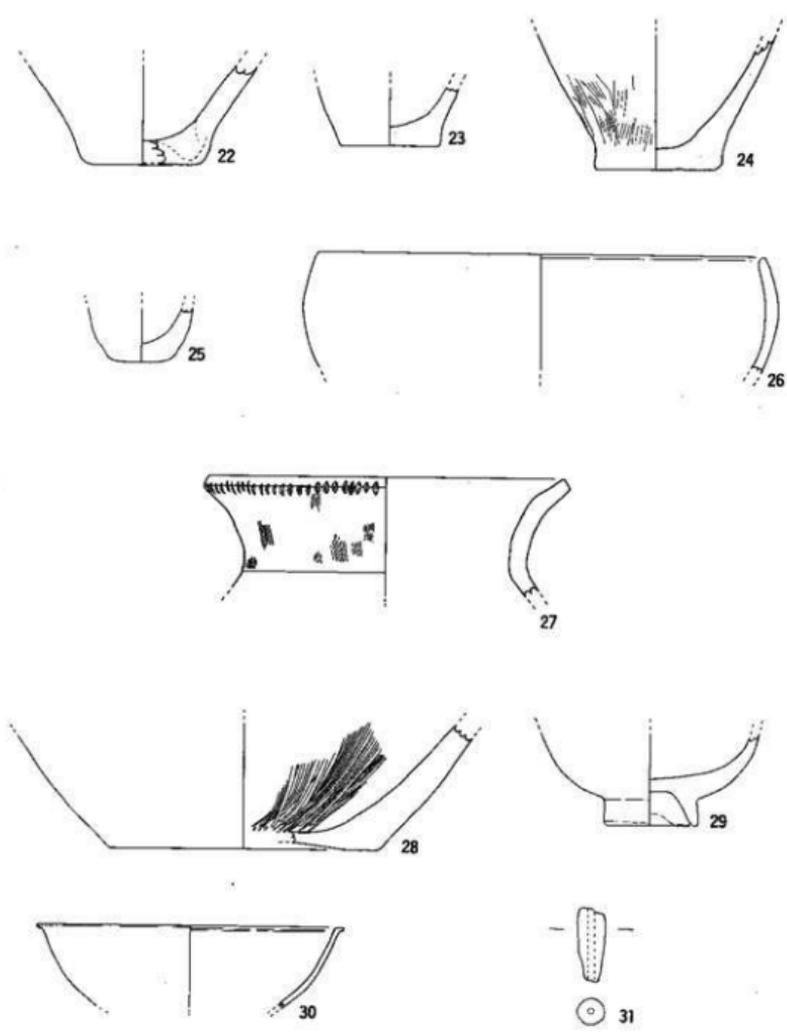
第74図 SK43・44、SD2~5・7~10



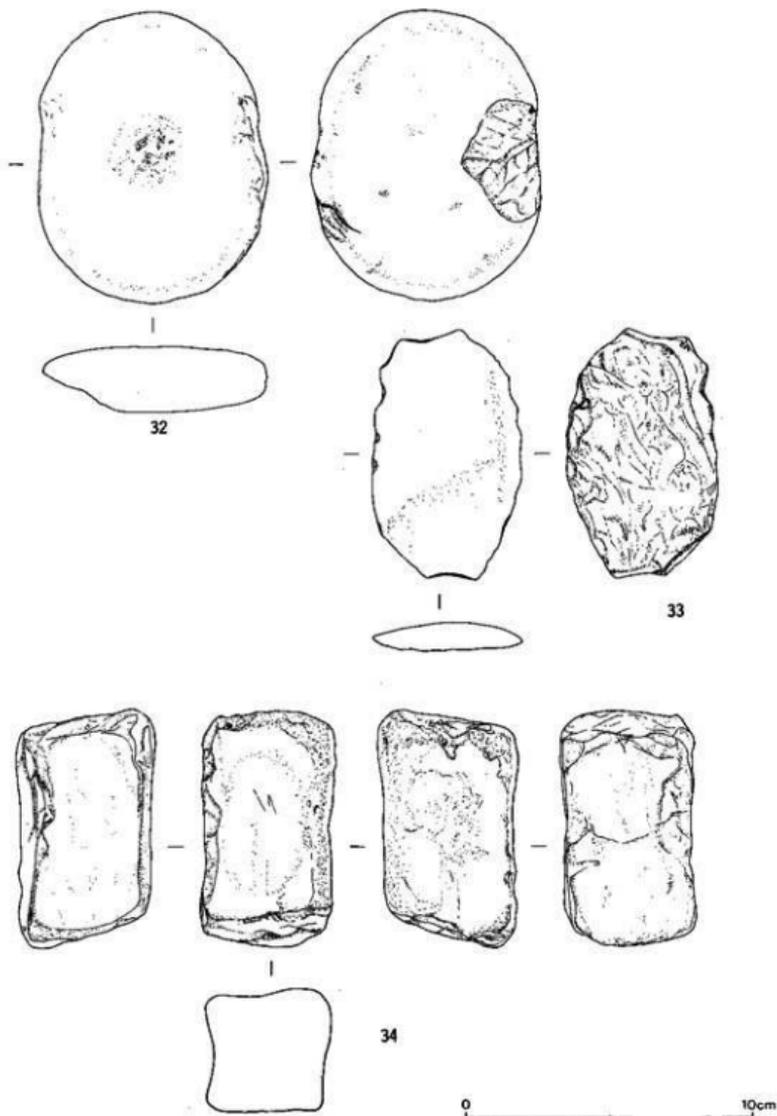
第75圖 第Ⅱ層、SB6・7、SK5・7 出土遺物



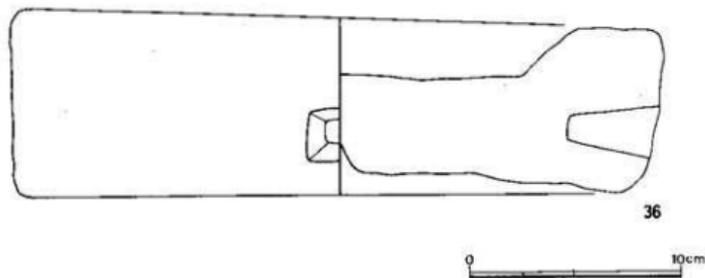
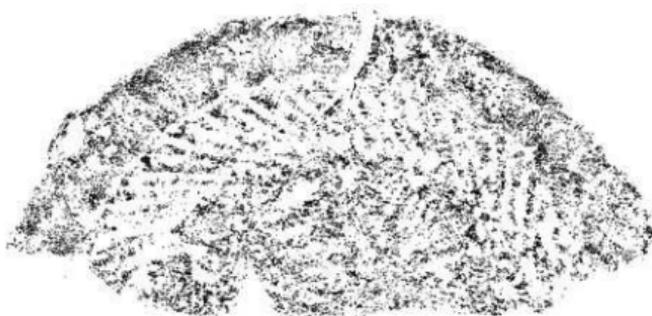
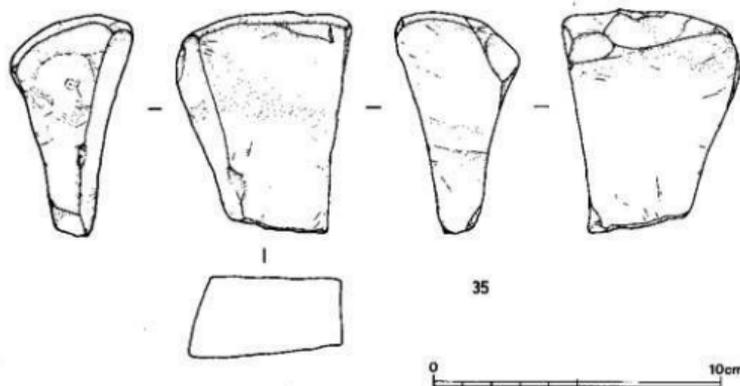
第76图 SK 20·27·33、SD 2 出土遗物



第77图 SD2·7、P1·2 出土遗物



第78図 SD 2 出土遺物



第79圖 SK 5・24 出土遺物

### 3. Loc. 42

## Loc. 42

### 1. 位置と調査経過

Loc. 42は、田村遺跡群の北端部に位置する。Loc. 42の周辺の小字で城、桂昌寺中、二本松と呼称されている地域は、守護代細川氏の城館の所在地として有名な所である。その中で、Loc. 42の調査区は、小字二本松の南東部にあたる。本調査区は、高知空港拡張工事に伴う、県道地下道化工事に係るものである。調査対象範囲は、空港拡張範囲の北限から北へ延びる県道及びその拡張部分である。まず場周道路及び用排水の関係上、調査範囲の南端部に試掘トレンチを設定し調査を行った。調査区北部においては、田村城館内にはいることから全面発掘を実施した。調査は、排土の関係上、57年度において、県道の東西拡張部分及び旧県道部を行い、さらに吉本氏所有民家の移築及び工事仮設道の関係で一部58年度にかけて実施した。

### 2. 調査概要

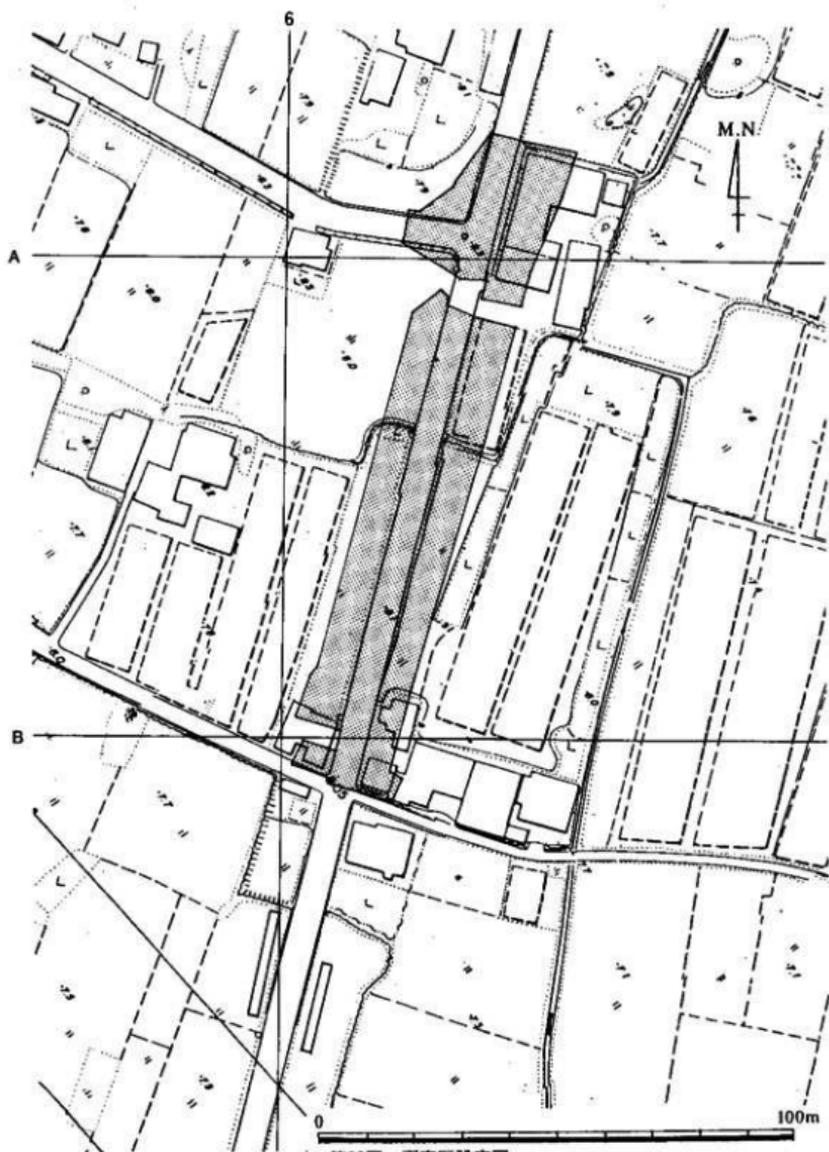
Loc. 42は、大部分が田村城館内にはいることから、調査の成果が期待された。検出遺構は、掘立柱建物址11棟、土壇103基、溝15条、井戸1基、性格不明遺構1基、ピット群である。出土遺物も15～16世紀にかけての土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器等が多量に出土した。SK96では、一括して土師質土器が投棄されており良好な資料を得ることができた。また、調査区の南端部では外堀と、北端部では内堀の可能性のある遺構を確認することができた。遺構の残存状況は、旧県道等により上部が削平されているものが多かった。近世遺構については、木棺墓等を検出し、副葬品としての近世陶磁器類の資料も得ることができた。

### 3. 層序と出土遺物

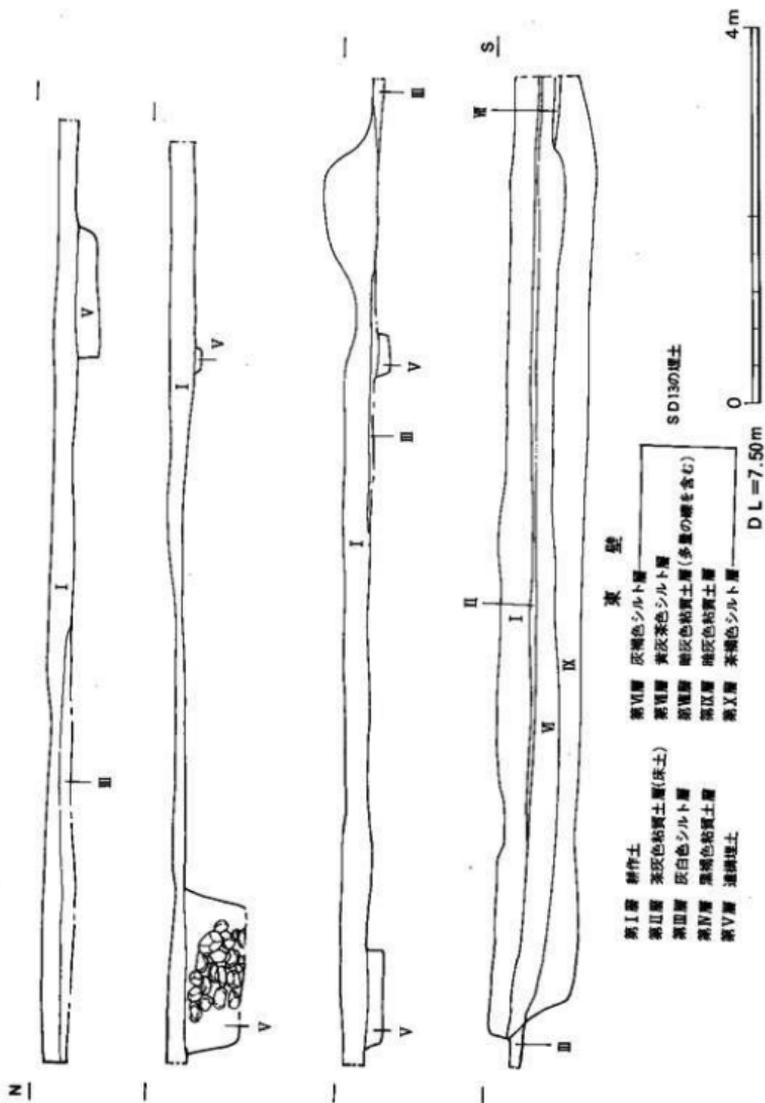
調査区において認められた基本層序は、以下の通りである。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 茶灰色粘質土層 (床土)
- 第Ⅲ層 灰白色シルト層
- 第Ⅳ層 黒褐色粘質土層

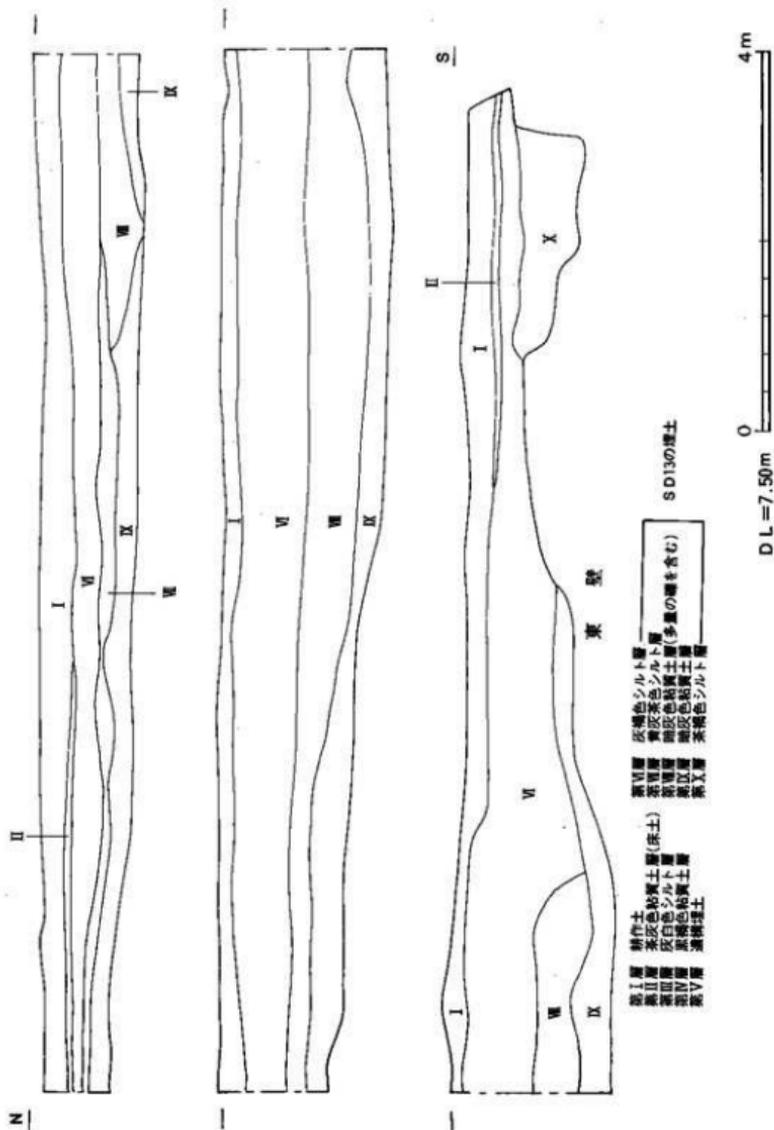
遺構は第Ⅰ～Ⅲ層を除去した段階で検出された。本調査区は、旧県道下であり、遺構の大半は上部が削平され、残存状況は悪かった。基本層序も、西側は第Ⅱ・Ⅲ層が堆積しているが、東側部分は第Ⅰ層の耕作土が大半である。第Ⅳ層以下は無遺物層である。第Ⅲ層中より、土師質土器鍋(1)・釜(2)、V期の備前焼摺鉢(3)、近世備前焼摺鉢(4、5)、青磁稜花皿(6)、白磁皿(7)、土鍾(8)、伊万里系紅猪口(9)が出土した。

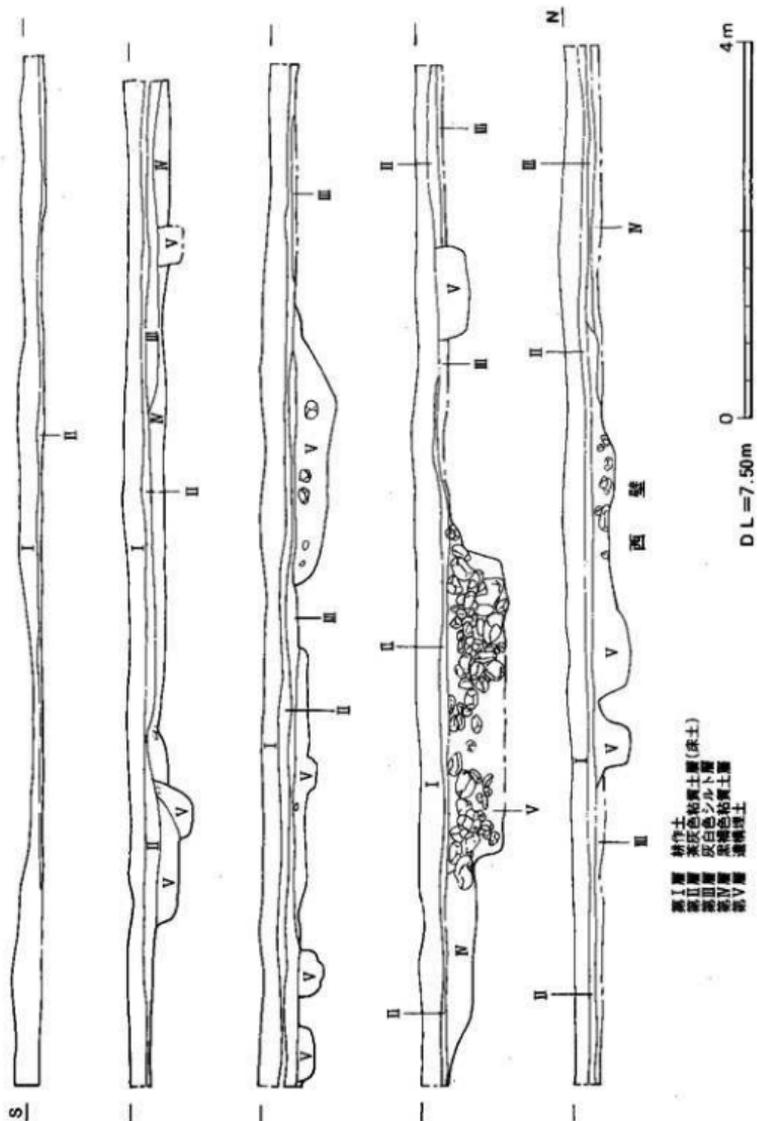


第80図 調査区設定図

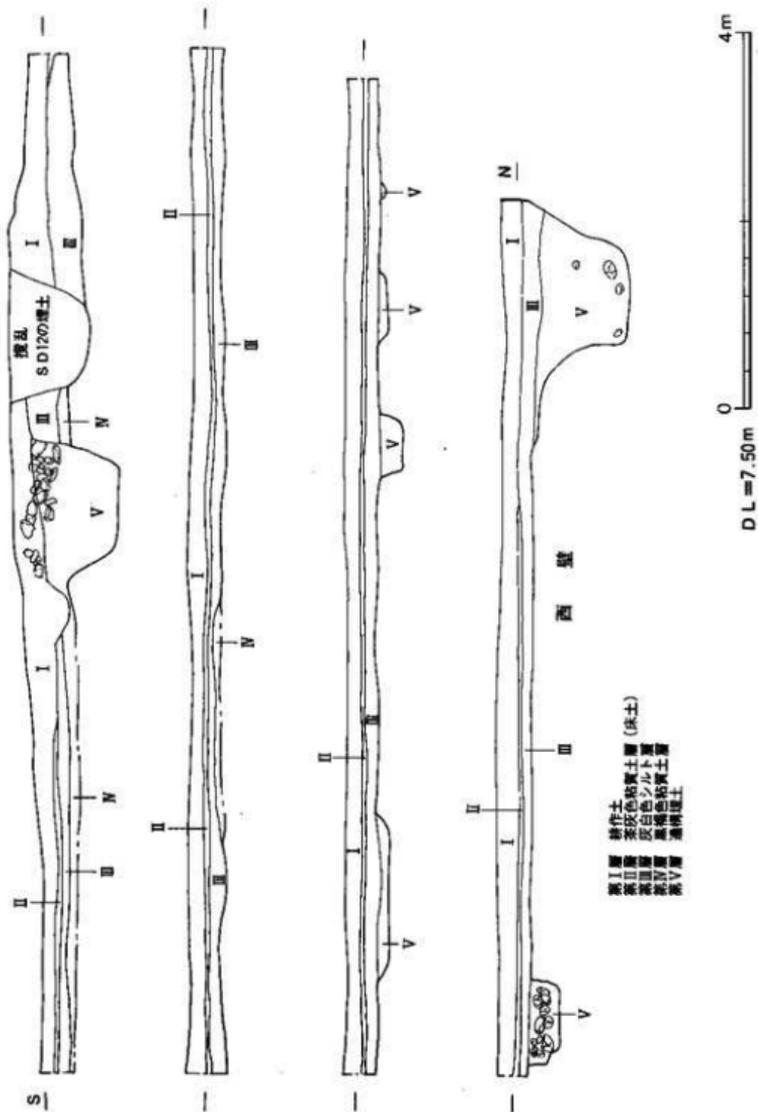


第81図 調査区セクション





第83図 調査区セクション



崩乱土  
 赤褐色砂質土層 (灰土)  
 灰白色シルト層  
 赤褐色砂質土層  
 高層砂質土層  
 高層粘土層

I層  
 II層  
 III層  
 IV層  
 V層

第84図 調査区セクション

#### 4. 遺構と遺物

##### 掘立柱建物址

###### SB1

SB1は、調査区の北端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、1×2間の南北棟で、梁間（東西）3.20m、桁行（南北）4.75mを測る。棟方向はN-17°-Eである。柱穴の平面形は、円形で直径20~30cm、検出面からの深さは20~60cmを測る。北東隅の柱穴が浅い。基底面の標高は6.59~7.00mである。柱間距離は、梁間3.10~3.20m、桁行が1.95~2.80mである。桁行北部の柱間距離が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

###### SB2

SB2は、調査区の北東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、東側が調査区外へ延びているため規模は不明であるが、2×2間以上の東西棟と考えられる。棟方向はN-75°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径20~30cm、検出面からの深さは20~30cmを測る。北側の柱穴が浅い。基底面の標高は7.02~7.08mである。柱間距離は、桁行が1.75~1.80m、梁間が3.45mを測る。西妻の中央柱がSK13に切られたと考えられるが、埋土が類似しているため不明である。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器細片がP1より出土しているが、実測不可能である。建替え等は行われていない。

###### SB3

SB3は、調査区北部の中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、1×4間の東西棟で、梁間（南北）3.45m、桁行（東西）6.55mを測る。棟方向はN-72°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径20~40cm、検出面からの深さは20~60cmを測る。基底面の標高は6.65~6.95mである。柱間距離は、梁間3.10~3.45m、桁行が1.40~2.55mを測る。梁間の中間柱は確認できなかったが、建物の規模は2×4間の東西棟になる可能性もある。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

###### SB4

SB4は、調査区北部の中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、2×2間の南北棟で、梁間（東西）2.95m、桁行（南北）4.30mを測る。棟方向はN-20°-Eである。柱穴の平面形は、円形で直径20~30cm、検出面からの深さは20~50cmを測る。基底面の標高は6.75~7.05mである。柱間距離は、梁間1.45~1.50m、桁行が2.15~

2.20mを測る。南妻の東隅の柱穴が欠ける。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。SB5及び北側に位置するSB3と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### SB5

SB5は、調査区北部の中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、2×2間の東西棟で、梁間(南北)3.80m、桁行(東西)7.31mを測る。棟方向はN-76°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径20~30cm、検出面からの深さ15~50cmを測る。西妻の中間柱が浅い。基底面の標高は6.71~7.15mである。柱間距離は、梁間が1.80~2.00m、桁行が3.55~3.75mを測る。東妻の中間柱が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SB3と北西部を、SB4と西半部をそれぞれ重複しているが、ピットの切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。

#### SB6

SB6は、調査区の北東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、2×3間の南北棟で、梁間(東西)は推定3.40m、桁行(南北)5.45mを測る。棟方向はN-19°-Eである。柱穴の平面形は、円形で直径30~50cm、検出面からの深さ13~53cmを測る。基底面の標高は6.45~6.90mである。柱間距離は、梁間1.55~1.70m、桁行1.80~1.85mを測る。東辺柱列を検出できなかったが、梁間は3間以上東側に延びる可能性はない。

遺物は、P1より青磁細片、P2より土師質土器皿・鍋、瓦質土器片等が出土した。しかし、細片で実測不可能である。SB7と重複関係にあるが、ピットの切り合いが認められないため新旧関係は不明である。

#### SB7

SB7は、調査区の北東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、2×3間の南北棟で、梁間(東西)3.45m、桁行(南北)5.00mを測る。棟方向はN-14°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径27~47cm、検出面からの深さ19~41cmを測る。基底面の標高は6.73~6.84mである。柱間距離は、梁間1.60~1.85m、桁行1.35~1.90mを測る。北妻の東側柱穴、東辺の南側柱穴を欠く。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、P1より土師質土器、瓦質土器、P2・3より土師質土器片が出土している。細片のため実測不可能である。SB6と重複関係にあるが、ピットの切り合いが認められず新旧関係は不明である。また、SK46・38との関係も明確にできなかった。SK37は、切り合い関係が認められるが、埋土が類似しているため、新旧関係は不明である。

### SB8

SB8は、調査区中央の東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、2×3間の南北棟で、梁間（東西）3.80m、桁行（南北）6.80mを測る。棟方向はN-17°-Eである。柱穴の平面形は、円形で直径25~40cm、検出面からの深さ16~53cmを測る。基底面からの標高は6.51~6.98mである。柱間距離は、梁間1.80~2.00m、桁行2.10~2.35mを測る。東辺柱穴が1個欠損する。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器がP1-3より、瓦質土器がP4より出土した。いずれも細片で、実測不可能である。重複関係は、南西部がSK53を切っている。

### SB9

SB9は、調査区中央部東寄りに位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、東側柱列、北側柱列が不明で明確にできないが、3×4間の南北棟と考えられる。棟方向はN-14°-Eである。柱穴の平面形は、円形で直径27~50cm、検出面からの深さ15~39cmを測る。基底面からの標高は6.51~6.77mである。柱間距離は、梁間（東西）1.40~1.75m、桁行（南北）0.80~1.85mを測る。西辺柱列の距離が不統一である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。南北に縦走するSD9・10の一部を覆う形で存在するが、ピットの切り合いがなく、新旧関係は不明である。

### SB10

SB10は、調査区の南西隅に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、1×3間の東西棟で西側が調査区外に接しており、西側に延びる可能性もある。棟方向はN-76°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径32~60cmとやや大きい。検出面からの深さは19~48cmを測る。基底面からの標高は6.65~7.08mである。柱間距離は、梁間（南北）3.65m、桁行（東西）1.60~1.95mを測る。梁間が1間広く、精査したが中間柱を確認できなかった。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、P1から10の白磁皿が出土した。重複関係は、南北に縦走するSD9を切っている。

### SB11

SB11は、調査区の南西隅に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

建物は、西側が調査区外になっており西に延びる可能性もあるが、1×1間の東西棟と考えられる。梁間（南北）3.10m、桁行（東西）4.20mを測る。棟方向はN-74°-Wである。柱穴の平面形は、円形で直径26~50cm、検出面からの深さ20~43cmを測る。基底面からの標高は6.73~6.87mである。柱間距離は、梁間3.05~3.10m、桁行3.95~4.20mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が出土しているが、細片のため実測不可能であ

る。本遺構は、SK97を覆う形で存在するが、新旧関係及び関連等は不明である。

## 土壇

### SK1

SK1は、調査区の北西隅に位置する。第I層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.90m、短径0.65m、深さ0.54mを測る。長軸方向はN-12°-Eである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.64mを測る。埋土は、1層で暗灰色粘質土である。

本遺構は、近世の木棺墓で、木棺の蓋が埋没しており、それを除去すると底板が検出された。人骨は溶解しており木棺の幅は0.35m、長さ1.60mである。幅の狭いことなどから横臥屈肢葬と考えられる。遺物の出土状況は、木棺の蓋の上から11の瀬戸・美濃系小碗が1点出土した。

### SK2

SK2は、調査区の北西隅に位置し、SK1の南側1mの所に隣接する。第I層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長径1.02m、短径0.40m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-52°-Wである。壁は傾斜して立ち上がり、底面は西側が一段深くなっている。標高は西部で6.92m、東部で6.98mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。

本遺構は、隅丸長方形のプランを呈しており、掘り方もしっかりとしている。北側に位置するSK1は、木棺墓であり、形態、規模、位置等からも墓の可能性はある。出土遺物は皆無である。

### SK3

SK3は、調査区の北西隅に位置し、SK2の南西0.50mの所に隣接する。第I層を除去した段階で検出したが、かなり削平を受けている。

平面形は不整形円形を呈する。規模は、長径0.95m、短径0.77mを測り、深さは7cmと浅い。長軸方向はN-38°-Eである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、標高は7.10mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、底面直上より土師質土器、近世陶器が出土した。実測可能な土師質土器皿(12、13)でいずれもロクロ成形であるものと、唐津焼皿(14)である。

### SK4

SK4は、調査区の北西隅に位置し、SK3の東側1mの所に隣接する。第I層を除去した

段階で検出した。

平面形は、不整形を呈する。規模は、長径2.20m、短径1.20m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-40°-Eである。比較的急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦であるが、東部がやや高くなっている。底面の標高は6.65mである。埋土は、1層で灰色粘質土である。遺物は、15の伊万里系統が出土している。

#### SK5

SK5は、調査区の北西端に位置する。第I層の耕作土を除去した段階で検出したが、割平が著しい。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.47m、短径1.15m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。壁は、急に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.94mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が若干出土している。

#### SK8

SK8は、調査区の北西端に位置し、第I層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.50m、短径1.25m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-26°-Eである。壁は、急に傾斜して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で標高6.73mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

重複関係は、本遺構の北西部をSK6、南西部をSK7に切られている。SK6・7共に、現代の擾乱と考えられ、埋土中から現代も使用されている瓦片が出土している。本遺構は、これらの土壌に切られていることや、埋土の状態から近世の時期と考えられる。

#### SK9

SK9は、調査区の北西端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は瓢箪形を呈する。規模は、長径0.72m、短径0.48m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-64°-Wである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は水平である。底面の標高は6.95mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器の細片1点のみ出土しているが、実測不可能である。重複関係は、東側に位置するSK10を切っている。

#### SK10

SK10は、調査区の北西端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.95m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-13°-Eである。上面が割平されており、SK9よりも浅い。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、

平坦で標高7.07mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、本遺構の西端部をSK9に切られている。

#### SK11

SK11は、調査区の北端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.98m、短径0.56m、深さ0.16mを測り、SK3・10同様著しく削平を受けている。長軸方向はN-1°-Wで、ほぼ磁北をさす。壁は、南部が比較的緩く、その他は急傾斜で立ち上がる。底面は、北部半分がやや深く落ち込んでいる。北側の底面の標高は7.03mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、本遺構の北東部の底面から完形に近い土師質土器杯1点(16)が出土している。その他、火葬骨片が出土している。形態も方形を呈しており、火葬墓として把握してもよからう。

#### SK12

SK12は、調査区の北東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径2.45m、短径1.25m、深さ0.60mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は、平坦で標高7.15mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より近世陶磁器が若干出土しているが、小片のため実測不可能である。重複関係は、周囲に掘り込まれているピットを切っている。

#### SK13

SK13は、調査区の北東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.65m、短径1.60m、深さ0.49mを測る。長軸方向はN-70°-Wである。壁は、急傾斜をもって立ち上がり、底面は、平坦で標高6.80mを測る。埋土は黄灰色粘質土である。底面直上より、小礫の集石が若干見られる。遺物は、埋土中より土師質土器、近世陶磁器が出土したが、細片のため実測不可能である。重複関係は、本遺構の南東側に位置するSK14を切って掘り込まれている。

#### SK14

SK14は、調査区の北東隅に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈するものと考えられるが、SK13に大部分を切られており明確でない。規模は、推定であるが長径0.90m、短径0.70m、深さ0.15mを測る。SK13に比べて、極端に浅く大部分が削平を受けているとみられる。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.20mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK

13に大部分を切られている。

#### SK15

SK15は、調査区の北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径2.10m、短径1.02m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-14°-Eである。壁は、比較的急に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.21mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より瓦質土器、土師質土器、青磁碗等が出土した。細片のため実測不可能である。重複関係は、円形のピットに切られている。

#### SK16

SK16は、調査区の北東端に位置し、東側は調査区外である。第I層を除去した段階で、染み状になっており、明確なプランをつかむことができなかった。

平面形は不整形を呈する。規模は、調査区内で長径2.35m、短径1.00m、深さ0.14mで、掘り込みは非常に浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.12mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、周囲に存在するピット群を切っている。

#### SK17

SK17は、調査区の北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の円形を呈する。規模は、直径0.80m、深さ8cmを測る。上部はかなり削平されており、残存している部分は浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.25mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器1片の他、寛永銭1枚と蓮管の吸口の破片が出土した。出土遺物からみて座棺墓と判断してもよい。

#### SK18

SK18は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の隅丸方形を呈する。規模は、長径3.25m、短径3.00m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-74°-Wである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦で標高は7.01mである。埋土は、1層で茶褐色シルトである。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、東西に走るSD2を切っている。

#### SK19

SK19は、調査区北部ほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.50m、深さ1.20mを測る。壁は、急傾斜で立ち上が

り底面は平坦である。底面の標高は6.73mを測る。埋土は、1層で暗灰色粘質土である。遺物の出土状況は、プラン検出時に20~30cm大の集石がみられ、それを除去すると埋土中より、備前焼、青磁、土師質土器等が出土した。細片のため実測不可能である。重複関係は、東西に走るSD2を切っている。

#### SK20

SK20は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径3.50m、短径2.05m、深さ0.37mを測る。長軸方向はN-60°-Wである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は、平坦で標高6.70mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。

出土遺物は、伊万里系小杯(17)、二重網目文碗(18)、仏飯器(19)、京焼系碗(20-22)、産地不明壺(23)、寛永銭(744)である。重複関係は、本遺構の西側を走るSD3を切っている。

#### SK21

SK21は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.80m、短径0.60m、深さ0.46mを測る。長軸方向はN-23°-Eである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.60mである。埋土は、1層で暗灰色粘質土である。

本遺構の付近には、7基の土壇が密集して残存している。すべて近世墓と考えられるが、その中でも、本遺構は、木棺、人骨の残存状況が良好であった。木棺の幅は0.30m、長さ1.50mである。人骨は、足を折りまげ、西向きに横臥させている。副葬品として、人骨の頭部付近より伊万里系小碗(24)と、寛永銭(745)が出土した。

#### SK22

SK22は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は、SK21よりやや幅広い長方形を呈する。規模は、長径1.55m、短径0.82m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-20°-Eである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.50mである。埋土は、1層で暗灰色粘質土である。本遺構も近世墓であり、SK21と同規模の木棺を埋置してある。棺蓋は、埋没しており残りが悪い。蓋を除去すると、人骨の残存状況は悪く足の骨のみ検出した。寝槽で横臥屈肢葬と考えられる。副葬品と考えられる遺物は、棺蓋の上から小皿1枚(25)が出土した。その他、寛永銭(746、747、751)も出土している。重複関係は、南西側に隣接しているSK23に切られている。

### SK23

SK23は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の円形を呈する。規模は、直径0.80m、深さ0.20mを測る。上部は、かなり削平を受けているものとみられる。壁は、比較的急に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.85mを測る。埋土は、1層で茶灰色粘質土である。

本遺構は、棺及び人骨の出土はみられなかったが、南東に位置するSK25と形態的に類似している点や位置から、座棺の近世墓と考えられる。出土遺物は皆無である。重複関係は、北東に隣接するSK22を切って残存している。

### SK24

SK24は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.70m、短径0.64m、深さ1.00mを測る。長軸方向はN-18°-Eである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.10mを測る。埋土は、1層で暗灰褐色粘質土である。本土址は、周辺の遺構と比べ非常に深く、1m余りも掘り下げた段階で若干の木片が出土した。これが木棺の残片とも考えられる。しかし、人骨は出土しなかった。

### SK25

SK25は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90m、深さ0.52mを測る。2段に掘り込まれており、壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.52mを測る。埋土は、1層で茶灰色粘質土である。

本遺構は近世墓であるが、円形の掘り方の中に直径0.50m程の座棺が埋められていた。被葬者は背を北に向け、頭を垂下させ埋葬されており、副葬品は伊万里系碗(26)と煙管(720)である。

### SK26

SK26は、調査区の北西部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90m、深さ8cmを測り、非常に浅い掘り込みである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、平坦で標高7mを測る。埋土は、1層で茶灰色粘質土である。

本遺構は、円形のプランを持つものであり、形態から近世座棺墓を考えさせる。しかし、付近の土坑よりも浅く、上部が著しく削平されているものとみられる。遺物は、埋土中より近世陶磁器が出土しており、唐津鉢(27)である。

#### S K 27

S K 27は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.80m、短径0.50m、深さ1.30mを測る。長軸方向はN-24°-Eである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.70mを測る。埋土は、1層で暗灰色粘質土である。

本遺構は、S K 21・22・24同様の近世寝棺墓である。長方形の掘り方内に、幅0.30m、長さ1.60mの木棺が配置され、棺の蓋を除去すると人骨及び副葬品が出土した。人骨は、頭部を北に向け、西向きに横臥させている。頭部の東側に伊万里系小碗(28)1個体と寛永銭、煙管が副葬されていた。

#### S K 28

S K 28は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.20m、深さ0.30mを測る。壁は、比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.80mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、S D 4・5を切っている。

#### S K 29

S K 29は、調査区の北西部で、S K 28の南側に隣接して位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.48m、深さ0.58mを測る。壁は、傾斜して立ち上がる。底面は、平坦で標高6.78mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係はS D 5を切っている。

#### S K 30

S K 30は、調査区の北西部でS K 29の南側に隣接して位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈するものと考えられる。しかし、南側は調査区外であり全容は明らかではない。規模は、推定直径1.48m、深さ0.15mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.83mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### S K 31

S K 31は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.00m、深さ0.34mを測る。壁は急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.85mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土で

ある。本土域の中央よりやや西側に直径30cmのピットが掘られているが、埋土が濃茶色シルトであり、本土域に付属するものではないとみられる。遺物は、埋土中より土師質土器等が出土した。細片のため実測不可能である。

#### SK32

SK32は、調査区の北西部で、SK31の南に隣接して位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.65m、深さ0.35mを測る。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.84mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。本土域の中央に、SK31同様濃茶色シルトの埋土をもつ直径0.30m程のピットが掘り込まれているが、付属するものではないとみられる。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁等が出土しているが、細片で実測不可能である。

#### SK33

SK33は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の楕円形を呈する。規模は、長径1.90m、短径1.40m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-14°-Wである。底面は、南部が一段高くなっており、平坦部を形成している。北部底面の標高は6.73mを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より近世陶磁器、瓦片等が出土している。29は伊万里皿である。重複関係は、南側に位置するSK34に切られている。

#### SK34

SK34は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.70m、深さ0.54mを測る。壁は、底面から垂直に立ち上がり、上部で若干段部をもち緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.74mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。本土域も、SK31・32同様のピットが掘り込まれている。埋土は、濃茶色シルトである。遺物は、埋土中より近世陶器や瓦片が出土した。30は唐津皿である。重複関係は、北側に位置するSK33を切っている。

#### SK36

SK36は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。北側は、大部分が調査区外である。

平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.00m、短径0.35m、深さ0.25mを測る。壁は、西部が比較的急に立ち上がり、東部は段部を有し緩やかに

立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高6.89mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、実測不可能ではあるが、唐津の細片が出土している。

#### S K 37

S K 37は、調査区北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、直径2.10m、深さ0.18mを測る。壁は急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.90mである。埋土は、1層で灰白色シルトである。遺物は、近世陶磁器、瓦石、寛永銭(748)、京焼系小碗(35)が埋土中より出土した。重複関係は、西側に位置するS D 8、東側に位置するS K 38を切っている。

#### S K 38

S K 38は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.75m、短径1.45m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN-16°-Eである。壁は、垂直に近く立ち上がる。底面は、ほぼ水平で標高6.70mを測る。埋土は、1層で赤褐色シルトである。遺物は、埋土中より土師質土器片が比較的多く出土したが、細片のため実測不可能である。重複関係は、西側に位置するS K 37に切られている。

#### S K 39

S K 39は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.30m、深さ0.16mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面の状況は、平坦で標高7.20mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。底面直上より2個の自然石が出土した。遺物は、埋土中より土師質土器、備前焼破片が出土しているが、細片のため実測不可能である。

#### S K 40

S K 40は、調査区北部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.25m、深さ0.70mを測る。本遺構の西側は、調査区外である。壁は、東部が段部をもち、南北は急な傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高7mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。埋土中より10~20cm大の自然石が密集して出土した。遺物は底面直上より近世陶磁器が数点出土した。細片のため実測不可能である。

#### S K 41

S K 41は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径0.95m、短径0.85m、深さ8cmを測る。上部が削

平されているため非常に浅い。長軸方向は $N-28^{\circ}-E$ である。壁は、緩やかに立ち上るが、底面は、平坦で標高7.17mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK42

SK42は、調査区北部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。本遺構の西の一部は調査区外である。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70m、深さ0.32mを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は平坦だが、周囲に断面凹状の浅い溝がまわる。底面の標高は7.04mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は埋土中より土師質土器片が数点出土している。SK39と同形態を示していることや位置からも、同様な性格を有するものであろう。

#### SK43

SK43は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は東側に位置するSK44に切られているため不明であるが、方形を呈していたと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.95m、短径0.60m、深さ0.32mを測る。長軸方向は $N-13^{\circ}-W$ である。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.04mを測る。埋土は、1層で赤灰色粘質土である。埋土中より20~30cm大の自然石が多量に出土した。出土遺物は皆無である。重複関係は、東側に位置するSK44に切られている。

#### SK44

SK44は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は、長径6.05m、短径3.05m、深さ0.64mを測る。長軸方向は $N-80^{\circ}-W$ である。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、北東端に一段高い平坦部をもち、西端が一段低い。西端の底部標高は6.72mを測る。埋土は、1層で黄褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK43を切っている。

#### SK45

SK45は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は、長径1.53m、短径0.70m、深さ0.24mを測る。長軸方向は $N-24^{\circ}-E$ である。壁は、比較的緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.10mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK44を切っている。

#### SK46

SK46は、調査区の北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.65m、短径1.08m、深さ0.21mを測る。長軸方向はN-85°-Wである。壁は、比較的緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.95mを測る。埋土は、I層で灰褐色シルトである。遺物は、底面直上より青磁、土師質土器、備前焼等が出土している。重複関係は、東側に隣接するピットを切っている。

#### SK47

SK47は、調査区の北部西端に位置する。第III層を除去した段階で検出した。

平面形は西側が調査区外へ延びているため完形は不明だが、方形を呈すると考えられる。規模は、残存している部分で長径2.20m、短径2.10m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.10mを測る。埋土は、I層で灰茶色シルトである。出土遺物は皆無である。

#### SK48

SK48は、調査区の北部ほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い楕円形を呈する。規模は、長径3.00m、短径0.78m、深さ0.13mを測る。長軸方向はN-12°-Eである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、平坦で標高7.35mを測る。埋土は、I層で黄灰色粘質土である。遺物の出土状況は、底面直上及び埋土中より、土師質土器、白磁等が出土した。細片で実測不可能である。

#### SK49

SK49は、調査区の北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径4.10m、短径1.73m、深さ0.41mを測る。長軸方向はN-83°-Wである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、中央部がやや窪むがほぼ平坦である。底面の標高は6.72mを測る。北壁の中央部に集中して10~20cm大の自然石が集中していた。出土遺物は皆無である。

#### SK51

SK51は、調査区北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、直径1.20m、深さ0.19mを測る。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.95mである。埋土はI層で茶灰色シルトである。遺物は、底面直上及び埋土中より、多量の土師質土器が出土した。重複関係は、南北に縦走するSD9を切っている。

#### SK52

SK52は、調査区の中央西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径4.30m、短径3.65m、深さ1.18mを測る。長軸方向はN-19°-Eである。壁は、急傾斜で南部のみ段部を形成し、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.40mを測る。埋土は、1層で黄褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器杯(37)・鍋(38)、備前焼甕(39、40)、青磁碗(41、42)等多量に出土したが、SD7と切りあっており、SD7の遺物が混入しているとも考えられる。石製品は、砥石(705)が出土している。重複関係は、西側に位置し南北に縦走するSD7を切っている。

#### SK53

SK53は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.45m、短径1.05m、深さ9cmを測る。長軸方向はN-84°-Wである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高6.97mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK54

SK54は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.32m、短径0.75m、深さ0.99mを測り、上部は削平されている。長軸方向はN-75°-Eである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK55

SK55は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.50m、短径2.30m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN-8°-Eである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.88mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中から青磁、備前、土師質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。

#### SK56

SK56は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.83m、短径1.24m、深さ0.52mを測る。長軸方向はN-14°-Eである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、ほぼ水平で標高6.54mを測る。埋土は、1層で茶灰色シルトである。遺物は、埋土中から土師質土器、青磁片が出土している。重複関係は、南北に縦走するSD9とピットを切っている。

#### SK57

SK57は、調査区の北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い方形を呈する。規模は、長径3.18m、短径0.57m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN-56°-Wである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、西部がやや深くなっている。標高は、西端部が6.88m、東端部が6.98mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。西半部埋土中より、10-20cm大の自然石が多量に出土した。出土遺物は皆無である。

#### SK58

SK58は、調査区北東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.45m、短径1.28m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN-82°-Wである。壁は、東西が緩やかに立ち上がり、東部は平坦部をもつ。南北は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部がやや深い。標高は、西部が6.90m、東部が6.72m、平坦部で6.95mを測る。遺物は、埋土中より近世陶磁器が出土している。伊万里碗(43)で見込に荒礎文が施されている。伊万里の半磁器系碗(44)である。石製品は、叩石(701)が出土しているが、これは混入したものである。重複関係は、南北に縦走するSD9・10を切っている。

#### SK60

SK60は、調査区の中央部西端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。西半部は調査区外である。

平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で長径1.45m、短径0.65m、深さ0.60mを測る。長軸方向はN-12°-Eである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、北部がやや落ち込んでいる。標高は、北部で6.63m、南部で6.75mを測る。埋土は、1層で黄褐色粘質土である。遺物は、底面直上より墨壺が出土し、埋土中より伊万里、唐津破片が出土した。土師質土器杯(46)、伊万里系小杯(47)、碗(48)、火消し壺(50)である。48は、見込に手描きの五弁花が施されている。木製品は、板材(724)、曲物の底板(743)が出土している。

#### SK61

SK61は、調査区中央の西部に位置する。第II層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い溝状を呈する。規模は、長径3.40m、短径0.43m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.80mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より瓦、備前、土師質土器等が出土している。

#### SK62

SK62は、調査区の中央西寄りに位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.20m、短径0.65m、深さ0.41mを測る。長軸方向はN-13°-Eである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.76mを測る。埋土は、1層で黄褐色粘質土である。遺物は、底面直上より木棺の破片と鉄釘、寛永銭(749、750)が出土した。出土遺物から、近世墓と考えられる。

#### SK63

SK63は、調査区の中央西寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は、直径0.62m、深さ0.15mを測る。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高7mを測る。埋土は、1層で黄茶褐色粘質土である。

人骨が出土しており、部位は足と頭蓋骨である。頭蓋骨は、腐って落ちこんだものと考えられる。平面形が円形を呈すると考えられることや、頭蓋骨の出土状況からして、本遺構は、座棺を埋葬した近世墓と考えられる。重複関係は、南側に位置するSK64に切られている。SK64は現代の攪乱である。

#### SK65

SK65は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.50m、短径0.73m、深さ0.68mを測る。長軸方向はN-19°-Eである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.23mを測る。埋土は、1層で黄褐色粘質土である。

本遺構は近世墓であるが、木棺の残存状況が悪く木片はほとんど出土しなかった。しかし、所々に鉄釘が残り、棺の規模を推定できた。それによると、棺は、長さ1.25m、幅0.30mを測り、横臥屈肢葬で、他と比較すると小型である。また掘り方の主軸に比し、棺の軸は若干西へ振っている。西側に位置するSK60・62と一連の墓ではないかと考えられる。遺物は、埋土中より寛永銭と歯が出土した。重複関係は、南に位置するSK66を切っている。

#### SK66

SK66は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い溝状を呈する。規模は、長径5.20m、短径0.50m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-70°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.82mを測る。本遺構の西側は、削平が著しい。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、備前焼等が出土している。細片のため実測不可能である。重複関係は、北側に位置するSK65に切られている。

#### S K 67

S K 67は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い不整形の溝状を呈する。規模は、長径7.50m、短径1.60m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、西部と北部に傾斜して立ち上がる。底面の標高は、西部で7.15m、東部で6.78mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁等が出土しているが細片のため実測不可能である。重複関係は、周囲に散在しているピット群に切られている。

#### S K 68

S K 68は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.90m、深さ0.82mを測る。壁は、西壁が垂直に近く、その他も急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西部のみやや傾斜して立ち上がる。底面の標高は6.35mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より扁平な磁石や近世陶磁器が出土した。51は、外面に草花文が染め付けられている伊万里系統である。

#### S K 69

S K 69は、調査区の中央部やや東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.20m、深さ0.19mを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.75mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが細片で実測不可能である。

#### S K 70

S K 70は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.18m、短径0.70m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-70°-Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、東部にやや傾斜して立ち上がり、標高は、西部で6.80m、東部で6.90mを測る。埋土は、1層で灰褐色シルトである。遺物は、埋土中より近世の備前片が出土しているが、細片で実測不可能である。

#### S K 71

S K 71は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の方形を呈する。規模は、長径2.28m、短径1.50m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-82°-Wである。壁は、西部は緩やかに、東部は垂直に立ち上がる。底面は、中央部が一番深く、東西に一段高い平坦部を有する。標高は、中央部で6.73m、西端で6.75m、東端で6.87mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より、備前、須恵器、

弥生、近世陶磁器片が雑多に出土した。また、上面に15~25cm前後の自然石が投棄されていた。近世陶磁器類が多く、他の遺物は混入したものと考えられる。

#### SK72

SK72は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.80m、短径0.70m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-14°-Eである。壁は比較的急に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.01mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片や寛永銭が出土した。

#### SK73

SK73は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.00m、短径2.30m、深さ0.30mを測る。長軸方向はN-65°-Wである。壁は、西部が二段の平坦部を有し、その他の壁も緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。底面の標高は6.92mを測る。埋土は、1層で灰茶色シルトである。

遺物は、埋土中より近世陶磁器、土師質土器片、寛永銭が出土した。近世陶磁器は、伊万里系(52)、京焼系(54)、唐津(53)である。いずれも18世紀頃生産されたものと考えられる。また、上面には20~30cm大の自然石が密集して投棄されている。重複関係は、北に位置するSK71、東側に位置するSK75を切っている。いずれも近世の時期での切合い関係である。

#### SK74

SK74は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。本遺構の西側は調査区外である。

平面形は、調査区外へ延びるため明確でないが、細長い楕円形を呈するものと考えられる。規模は、残存部分で、長径3.42m、短径0.93m、深さ0.64mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、南が一段深くなっている。標高は、南部で6.88m、北部で7.05mを測る。埋土は、1層で茶灰色シルトである。遺物は、土師質土器片、近世陶磁器が出土したが、細片で実測不可能である。また、北半部に20~30cm大の集石がみられる。

#### SK75

SK75は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径6.00m、短径3.88m、深さ0.92mを測る。長軸方向はN-77°-Wである。壁は西部を除いて垂直に立ち上がる。底面は、北半部で凹凸が激しく、南半部は平坦である。標高は、南端部で6.61mを測り、北部はやや高くなっている。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。

遺物は、埋土中より備前、青磁、白磁、瓦質土器、土師質土器、瓦片等が出土している。実測可能なものは、土師質土器小皿(55)・鍋(56、57)、土錘(59)、備前焼大甕(58、60)、常滑甕(61)である。本遺構の南半部は、20~30cm大の河原石が密集しており、北半部は、粘土と若干の小礫が見られるのみであった。重複関係は、西側に位置するSK73に切られている。

#### SK76

SK76は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長径2.77m、短径0.88m、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。壁は、東壁が垂直に、西壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.41mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より唐津、土師質土器が出土している。細片のため実測不可能である。

#### SK77

SK77は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径5.58m、短径4.95m、深さ1.00mを測る。長軸方向はN-79°-Wである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、西部に一段高い平坦部を有す。東部は平坦である。底面の標高は、東部で6.19m、西部で5.84mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。

遺物は、埋土中より近世陶磁器や中世の陶磁器が出土している。その中でも、伊万里や唐津片が比較的多い。実測可能なものは62~70までで、中には鎮蓮弁文碗(64)や、備前焼甕(62)等が出土しているが、これら中世の遺物は混入したものと考えられる。また、北側の埋土中には20~30cm大の河原石が多量に流れ込んでいる。

#### SK78

SK78は、調査区のはほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径3.75m、短径0.80m、深さ0.11mを測り、非常に浅い土壇である。長軸方向はN-74°-Wである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.80mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に走るSD9・10を切っている。

#### SK80

SK80は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は、不整形の細長い溝状を呈する。平面形を確認した段階では、SDとして考えていたが、南北の壁を確認したのでSKとして取扱った。規模は、長径6.10m、短径0.20m、深さ

0.20mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面の状況は、北部がやや深い。標高は、北部で7.10m、南部で7.20mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、南部の底面直上より土師質土器杯(72)・皿(71)の完形品が出土した。重複関係は、南側でSK81と接合しているが、上面での切合い関係は確認できなかった。

#### SK81

SK81は、調査区中央部の西端に位置する。第II層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈するものと考えられる。本遺構の西側は調査区外である。規模は、残存部分で長径6.10m、短径2.30m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-15°-Eである。壁は、南部は緩やかに、北部は急に立ち上がる。底面は、中央部が深く、南北に二段平坦部を形成している。標高は、中央部で6.55m、北部で6.63m、南部で6.95mを測る。埋土は、1層で灰褐色シルトである。埋土上面で、若干の石積が検出された。これらの石積は、北部、中央部、南部と3ブロックに区分でき、南部と中央部は明瞭に円形を意識して積み上げられていた。北部は、調査区外へ延びるため明確でない。河原石は、20-30cm大のものが多い。遺物は、埋土中より土師質土器片、瓦、近世陶磁器が出土している。実測可能なものは、唐津焼皿(74)、伊万里系小碗(73)である。いずれも18世紀頃生産されたものである。石製品は、砥石(704、713)、石臼(715)、凹石(718)が出土している。

#### SK82

SK82は、調査区中央の西部に位置する。第II層を除去した段階で検出した。

平面形は、西半部をSK81に切られており明確でないが、楕円形を呈していたと考えられる。規模は、残存部分で長径1.30m、短径1.10m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-60°-Wをとると考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.11mを測る。埋土は、1層で黄茶色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、西側に位置するSK81に切られている。出土遺物から本遺構は中世に属するものと考えられる。

#### SK83

SK83は、調査区中央部南寄りに位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.50m、短径1.10m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-72°-Wである。壁は、南部が緩やかに、その他は垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.74mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に走るSD9を切っている。

#### S K 85

S K 85は、調査区南部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.30m、短径1.30m、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-33°-Eである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部がやや高くなっている。標高は、西部で6.68m、東部で6.82mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器が出土したが、細片のため実測不可能である。また、上層に10~20cm大の河原石が投棄されている。重複関係は、S D 9と南側に位置しているS K 86を切っている。

#### S K 86

S K 86は、調査区南部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.60m、短径1.80m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-33°-Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.84mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より青磁、染付、土師質土器片が出土したが、細片で実測不可能である。埋土中に、10~20cm大の河原石が積み上げられた状態で密集していた。重複関係は、北側に位置するS K 85に切られている。

#### S K 87

S K 87は、調査区中央部のやや南寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.30m、短径1.90m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN-60°-Wである。壁は、西部が二段の平坦部を有し、南・東壁は、一段平坦部を有し緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高は6.35mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁種花皿の破片が出土したが、細片で実測不可能である。

#### S K 88

S K 88は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ・Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西側が調査区外で明確でないが、円形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で直径3.95m、深さ0.83mを測る。壁は、北・南部が一段の平坦部をもち、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.70mを測る。埋土は、1層で灰褐色シルトである。遺物は、埋土中より青磁、備前、瓦質土器、土師質土器が出土しているが、細片で実測不可能である。また、埋土の上層に、20~30cm大の河原石が多量に投棄されている。

#### S K 89

S K 89は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.90m、短径0.48m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-70°-Wである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.76mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK90

SK90は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い楕円形を呈する。規模は、長径1.70m、短径0.43m、深さ5cmと非常に浅い土壇である。長軸方向はN-30°-Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.89mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側に位置するピットに切られている。

#### SK91

SK91は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形はやや不整だが円形を呈する。規模は、直径0.90m、深さ6cmで非常に浅い土壇である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.83mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK92

SK92は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の方形を呈する。規模は、長径0.80m、短径0.73m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-72°-Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、西部に一段平坦部を有し、水平である。標高は、西部で6.84m、東部で6.76mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK93

SK93は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.15m、短径0.77m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-30°-Eである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、南部が深く掘り込まれているが平坦である。標高は、南部で6.82m、北部で6.96mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK94

SK94は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は、中央がやや窪み、瓢箪形を呈する。規模は、長径0.95m、短径0.65m、深さ0.41m

を測る。長軸方向はN-24°-Eである。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で北部が一段深く掘り込まれており、標高6.50mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK95

SK95は、調査区の南東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.05m、短径0.67m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-20°-Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.14mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK96

SK96は、調査区の南東部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

SD13に切られており、平面形は、明確ではないが円形を呈すると考えられる。規模は、直径2.10m、深さ0.55mを測る。壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁のみは比較的急である。底面は、平坦でなく凹凸がある。底面の最深部標高は6.56mである。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。

遺物の出土状況は、埋土を若干掘り下げると、重なりあって多量に土師質土器が出土した。上層で若干炭化物も検出したが、下層ではみられない。多量に出土した土師質土器(75-185)は、一括して廃棄されており、良好な資料である。中には完形品が多く、器種は小皿、皿、小杯、杯で、皿類は褐色系と白色系のものが見られ、ロクロは使用されていない。杯類は、すべて褐色系で、ロクロ成形、底部回転糸切り調整が施されている。その他に、若干の備前焼と青磁碗1点が出土しており、その中で実測可能な青磁碗(186)は細蓮弁文が施されている。重複関係は、南北に縦走するSD13に、東壁の一部を切られている。

#### SK97

SK97は、調査区の南西端に位置する。第II層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径3.30m、短径1.30m、深さ0.40mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東西両端が一段高い平坦部を有しており、ほぼ水平な面をもつ。標高は6.72mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。本遺構は、検出面ですでに若干の河原石を確認しており、これを掘り下げると、長方形の土壇に20-30cm大の河原石が充満した状況で出土した。遺物は、埋土中より近世の瓦片や備前焼播鉢が出土した。土師質土器杯(187)、伊万里碗(188)、京焼系碗(189)と考えられる。重複関係は、北東に位置するピットに切られている。

#### SK98

SK98は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.15m、短径0.95m、深さ0.15mを測る。長軸方向は $N-31^{\circ}-E$ である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.00mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

#### SK99

SK99は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径4.40m、短径1.40m、深さ1.40mを測る。長軸方向は $N-70^{\circ}-W$ である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.06mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、近世陶磁器が出土しており、190は瀬戸・美濃系の陶胎上絵技法をもつ碗である。

#### SK100

SK100は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径3.35m、短径1.35m、深さ0.10mを測る。長軸方向は $N-65^{\circ}-W$ である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.12mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、埋土中より備前焼、土師質土器や伊万里、唐津などの近世陶磁器が出土している。細片のため実測不可能である。

#### SK101

SK101は、調査区南部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

西側が調査区外へ延びているため、平面形は明確でないが、方形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で南北1.60m、東西1.30m、深さ0.30mを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、南西部が一段高く平坦部を形成している。標高は、北部で6.98m、南部で7.18mを測る。埋土は、1層で赤茶色粘質土である。出土遺物は皆無であるが、埋土上層の東南隅に集石が投棄されている。重複関係は、北側に位置するSD9を切っている。

#### SK102

SK102は、調査区の南東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径2.00m、短径1.70m、深さ0.38mを測る。長軸方向は $N-8^{\circ}-W$ である。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は北西部が一段高い平坦部を有するが、ほぼ水平である。標高は、中央部で6.78m、北西部で7.10mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、近世陶磁器が出土しているが、細片で実測不可能である。

その他の土域 (SK6・7・35・50・59・64・79・84・103)

ここでは、現代の攪乱である土域あるいは、他の遺構に切られて遺存状況の悪い土域の説明を一括して行うことにする。SK6・7は、北部に位置しており、SK8を切っている現代の攪乱である。壁は、垂直に立ち上がり、その内側に白赤色のハンダを敷いた状態で、現代の瓦等が投棄されていた。SK35は、SD6の南側に位置するが、幅5mの溝状を呈する。掘り方は浅く15cm内外で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。調査区外に延びるため、東西の規模は不明である。埋土中より近世陶磁器類が出土した。SK35の北肩は、吉本氏所有(居住)の家屋のコンクリート工事を受けている。SK50は、中央部北東寄りに位置する。SD9を切っている。本遺構の東半分は、発掘区外へ延びており、未調査である。埋土を掘り下げると、河原石が円形状に積み上げられていた。井戸の可能性もあるが、完掘していないため不明である。SK59は、調査区中央の西部に位置する。SD7・12に切られており、西と南の壁は残存していない。切り合いが激しく全形は不明だが、大型の円形を呈するものとみられる。SK64は電柱塚であり、現代の攪乱である。SK79は、調査区南西部に位置する。小型の方形を呈するが、上部は著しく削平されており浅い。出土遺物は皆無である。SK84は、調査区南部に位置する。平面形は方形を呈するが、SK79同様、上部は削平されており浅い土域である。出土遺物は皆無である。SK103は、調査区南東端に位置する。SD14に切られて残存する。平面形は、明確ではないが方形を呈するものとみられる。底面はSD14よりも浅く、壁、底面に礫である。出土遺物は皆無である。

## 溝

### SD1

SD1は、調査区の北西隅に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

本遺構の西側は調査区外で、肩の一部のみ調査した。調査区外は水田となっており、この水田の畦がSD1と対になるカーブを描いている。この畦は、明らかに堀を踏襲していたかのよう観察できる。推論ではあるが、この田の畦がSD1の西壁であるとすれば、規模は、幅約8mを測り、本調査区南端で検出した田村城館の外堀と同規模になる。以上の点及びその位置から、SD1は、内堀の東南隅にあたる可能性がある。規模は推定幅約8m、方向は北から緩やかにカーブを描き西側に屈折する。壁は、コーナー部で緩やかに立ち上がり、北部及び西部に延びる地点では急傾斜で立ち上がる。埋土は、3層に区分でき、第I層は暗灰色粘質土、第II層は赤褐色小礫、第III層は暗青色粘質土である。出土遺物は、埋土上層より近世陶磁器、輸入陶磁器類が出土した。溝に伴う時期と考えられる遺物は少ない。青磁碗(193)、染付皿(194)が出土している。重複関係は、東西に走るSD2・3を切っている。

## SD 2

SD 2は、調査区北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、幅3～4m、深さ0.60～0.80m、長さ21.50mを測る。断面形は、U字形を呈する。本遺構の南東隅は、近代の擾乱をうけている。基底面の標高は6.44～6.66mを測る。埋土は、2層に区分でき、第Ⅰ層は褐色粘質土、第Ⅱ層は暗灰色土である。出土遺物は、土師質土器皿(200～286)・小杯(287～290)・杯(291～322)・鍋(323～331)・釜(332)、瓦質土器播鉢(333)・鍋(334～344)・羽釜(345、346)及び備前焼播鉢(347～354)・壺(355)・甕(356～358)、瀬戸小壺(359)等であり、土錘(380～401)も出土している。また、青磁碗(360～376)・盤(377)及び、白磁(378、379)も出土している。石製品では、石鍋(702)、凹石(717)が出土している。重複関係は、SK 18・19、SD 1に切られている。

## SD 3

SD 3は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.50～2.00m、深さ0.50m、長さ11mで、北東から緩やかにカーブを描き西側へ延びる。底面の標高は6.40～6.56mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は、3層で第Ⅰ層は茶灰色粘質土、第Ⅱ層は黄白色粘質土、第Ⅲ層は灰白色土である。

出土遺物は、埋土中より土師質土器皿(409、410)・杯(411)・小皿(408)があり、410の皿は、完形に近い形で底面直上より出土した。備前の播鉢で(412)は、Ⅲ期の特徴をもっている。

重複関係は、SD 4、SD 1に切られている。また、SK 20にも切られていたものとみられるが、上面の切り合いにあたる部分が渠道側壁による擾乱をうけており、平面形確認の段階では不明であった。しかし、出土遺物から見るとSK 20が新しいものである。SD 2との切り合いについても、同様な理由で明確にできなかった。

## SD 4

SD 4は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.60～2.70m、深さ0.80～0.90m、長さ10.50mで、北東から緩やかにカーブして西側へ延びる。底面の標高は、北東部が5.76m、西部が6.12mを測り、北東部に向けて低くなっている。しかし、溝は北東端で切れている。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は、5層に区別でき、第Ⅰ層は黄茶色粘質土、第Ⅱ層は灰褐色シルト、第Ⅲ層は黄褐色シルト、第Ⅳ層は黄色シルト、第Ⅴ層は暗青色粘質土である。

出土遺物は埋土中より土師質土器、備前焼、青磁が出土している。青磁は、稜花皿(415)・内外面無文碗(416)等が出土している。また、本遺構の西端部では、埋土上層に20～30cmの河原石を配列したかのように並べて投棄していた。重複関係は、SD 3を切っている。SD 5

については、重複している部分が市道の側壁や電柱の擾乱をうけており、全容は明確にできなかった。

#### SD5

SD5は、調査区の北西端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、幅1.00m、深さ0.85m、長さ5.30mを測り、断面形は、箱形を呈する。底面の標高は6.20～6.30mで北部が深くなっている。埋土は、1層で灰黄褐色粘質土であり、他の溝とはやや様相を異にしている。遺物は、土師質土器、瓦質土器、青磁が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、SK28・29・32に切られている。SD4との関係は不明である。本遺構の南側は調査区外になっているが、その南端の断面形を観察すると、南に位置する調査区で南北に走るSD7の断面形と類似しており、位置的な面からも一連の溝の可能性もある。

#### SD6

SD6は、調査区北部に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.40～0.90m、深さ0.20m、長さ18.50mを測る。東西に走る溝であるが、西端部に南に屈曲して方向を変えている。断面形は、緩いU字形を呈する。底面の標高は6.87～6.95mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は認められない。

#### SD7

SD7は、調査区中央西部に位置する。第III層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、幅1.40～2.30m、深さ1.30m、長さ30mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。底面の標高は6.01～6.20mを測る。埋土は、北端部で3層に、南端部で6層に区分できた。北端部は、第I層茶灰色粘質土、第II層灰褐色粘質土、第III層暗灰色粘質土である。南端部では、第I層灰褐色粘質土、第II層黄茶色粘質土、第III層黄灰色粘質土、第IV層茶黒褐色粘質土、第V層茶灰色粘質土、第VI層暗灰色粘質土である。

遺物は、埋土中より多量に出土した。土師質土器皿(417～421)・小杯(422～477)・杯(478～606)・鍋(607～612)である。国内産の陶器は、備前焼播鉢(613～619)・甕(620)、瀬戸・美濃系天目茶碗(630)である。土師質土器の杯類が非常に多いのが特徴である。輸入陶磁器は、青磁稜花皿(621)・碗(622～627)である。また、白磁皿(628、629)が出土している。さらに、石硯(703)、砥石(706～708、710)、茶臼(714)、煙管(720)が出土している。重複関係は、南端部でSK52、SD12に切られている。また、周辺部に散在しているピット群にも切られている。

### SD8

SD8は、調査区北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、幅0.20～0.30m、深さ0.10～0.20m、長さ3.90mを測る。非常に浅く短い溝で、断面形は、緩いU字形を呈する。底面の標高は7.03～7.06mを測る。埋土は、1層で茶灰色シルトである。出土遺物は皆無である。重複関係は、東側に位置するSK37に切られている。

### SD9

SD9は、調査区北東端から縦走して南西端まで延びている。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.40～1.20m、深さ0.10～0.40m、長さ約80mを測る。調査区を斜めに小さなカーブをもちながら縦走する溝で、南西端部で西に屈曲する。断面形は、北部でU字形、南部で緩いV字形を呈する。底面の標高は6.75～7.06mを測り、北に行く程幅が広くなり、検出面からの深度も深くなる。埋土は、1層で茶褐色粘質土である。出土遺物は備前焼播鉢(636)、青磁椀花皿(637)・碗(638)、京焼系統(640)および土師質土鍾(639)等であり、砥石も2点(709、711)出土している。重複関係は、北からSK50・51・56・58、SE1、SD10、SK78・83・85・98・101に切られている。

### SD10

SD10は、調査区中央の東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

調査区中央部の北東隅からSD9の東側に沿って縦走する溝で、幅0.40～0.70m、深さ0.20～0.60m、長さ30mを測る。南端は緩やかに立ち上がり、SK77の南側で終わっている。断面形は、緩いU字形を呈する。底面の標高は6.82～6.87mを測る。埋土は、茶灰色粘質土で1層のみである。遺物は弥生土器が若干出土したが、実測不可能である。重複関係は、北よりSK58、SE1、SK78、ピット群に切られている。また、西側に隣接するSD9を切っている。

### SD11

SD11は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面プランからすると、細長い土壇にも分類できるが、断面形、幅等からみて溝として取扱うことにする。南北に走る溝で、幅0.40～0.50m、深さ0.30～0.50m、長さ1.50mを測る。断面形は、U字形を呈する。底面の標高は7.15～7.22mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、北側に位置するSK52に切られている。SD12との関係は不明である。

#### SD12

SD12は、現代まで使用されている用水路である。用水路の水流による還元粘土を除去すると、底面よりSD7の南端やSE1の石組みを検出した。調査区の中央部に位置し、東西に走る用水路である。規模は、幅0.80~2.50m、深さ0.60~0.70m、長さ22.80mを測る。遺物は、716の石臼が投棄されていた。

#### SD13

SD13は、調査区東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝であるが、東側が調査区外のため全体の規模は不明である。検出した部分で、幅2.00~3.40m、深さ0.60~1.10m、長さ38mを測る。底面の標高は5.89~6.40mである。埋土は、5層に区別でき、第I層は灰褐色シルト、第II層は黄灰茶色シルト、第III層は暗灰色粘質土（多量の礫を含む）、第IV層は暗灰色粘質土、第V層は茶褐色シルトである。

遺物は、比較的多量に出土しており、土師質土器皿（641~643）・杯（644~646）・鍋（647、648）・釜（649）等及び瓦質土器播鉢（650）・鍋（651~653）等があり、また、備前焼播鉢（654~659）、常滑焼甕（660、661）、瀬戸・美濃系天目茶碗（662）も出土している。輸入陶磁器では、青磁碗（663~666）と、染付碗（667、668）・皿（669）があり、他に土錘（670、671）や、近世陶磁器類（672~678）の出土もみた。石製品では砥石（712）が存在する。重複関係は、北部の西をSX1に切られており、南部の西でSK96を切っている。

#### SD14

SD14は、調査区の南東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、北端が調査区外へ延びている。南端は、SK103の位置する所で終結している。幅0.80~1.00m、深さ0.60m、長さ11.00mを測る。断面形は、U字形を呈する。底面の標高は6.10~6.16mである。埋土は、1層で褐色粘質土である。出土遺物は、土師質土器皿（679~684）・杯（685）・鍋（686）と、青磁稜花皿（687）、土錘（688）である。重複関係は、南端東側に位置するSK103を切っている。

#### SD15

SD15は、調査区の南端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、調査区外に延びており、基盤である礫層を1m以上も掘削している。規模は、幅5.50~6.80m、深さ1.20~1.30mを測る。本遺構は、位置、規模から田村城館の外堀と考えられる。東側は、未調査で不明だが、西側はLoc.43のSD7に連結するものと考えられる。遺物は、土師質土器杯（689）・釜（690）、青磁皿（691）・碗（692）、近代陶磁器（693、694）が出土しており、木製品では、棒状木製品（722、731、732）、板材木製品（735）、及び性格不

明木製品 (725、729、730、733、734) が出土している。

## 井戸

### SE1

SE1は、調査区中央の東部に位置する。第I層を除去した段階で、掘り方のプランと北側の石組を検出した。しかし、中央部は、現代まで使用されていた溝SD12に切られており、上部は破壊されていた。SD12の埋土をすべて除去した段階で、環状に並ぶ井戸の石組を確認した。石組は直径30~40cm前後の河原石を利用しており、上端の内径は1.30mを測り、その掘り方は直径3.50mの不整形を呈する。石組は、下層に向かうにしたがって内径を漸減させ、下端部で直径1.10mとなる。さらに、その下に木製の桶状井筒が設置され、周囲には河原石が敷きつめられていた。井戸の深さは、検出面より井筒の下端部まで3.20mを測る。埋土は、上層で灰褐色粘質土、下層に向かうにしたがって黒灰色粘質土になり粘性を帯びてくる。井筒の上端部で湧水が著しい。掘り方は、黄灰褐色土で小礫を含有している。桶状の井筒は、幅7.50cm、長さ45cmの板を円形に組み合わせ、竹紐の箍で固定している。出土遺物は、瓦質土器鍋(697)、青磁碗(698)で、木製品は、棒状木製品(723)、板材木製品(727、728)、曲物底板(726、737、739~742)、性格不明木製品(736、738)である。重複関係は、東西に走るSD12に切れ、南北に走るSD9・10を切っている。

## 性格不明遺構

### SX1

SX1は、調査区中央部東端に位置する。第I層を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈する。規模は、長径1.20m、短径0.80mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は、1層で灰色粘質土である。埋土中には、10~20cm大の礫が円形状に投棄されていた。遺物は、近世陶磁器類が出土したが、実測可能なものは碗(699)のみである。

## ピット

### P1

ピット群は、調査区北東端部と中央部東寄り、北西端部に比較的集中して存在する。すべて掘立柱建物址が存在する部分に集中している。平面形はすべて円形である。規模は、直径20~40cm、深さ30~40cm程度のものが多い。

P1は、調査区の中央から、北東寄りに位置し、平面形は直径25cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。埋土中より、青磁盤(700)を出土している。

## 5. まとめ

Loc. 42における検出遺構は、獨立柱建物址11棟、土坑103基、溝14条、井戸1基、性格不明遺構1基、ピット群である。本調査区は、田村城館内に位置することから、調査の成果が期待された。城館に伴うと考えられる。遺構は、調査区の南端で検出したSD15と、北端で検出したSD1である。SD15は城館の南側外堀で、SD1は内堀である。しかし、内堀に関しては、調査を行った範囲が狭く全貌を明確にすることができず、現段階では一応その可能性があるということしておきたい。獨立柱建物址は、出土遺物が細片で数少なく、時期を明確にすることができない。中世の土坑は、性格不明のものが多し。しかし、その中でSK96などは、良好な一括資料を得ることができるものであった。SK96は、土師質土器が多量に投棄された土坑で、杯、小杯、皿、小皿等の器種があり、共伴した186の青磁碗も出土していることから、年代を15世紀後半～16世紀前半におさえることができる。SK96出土の遺物については、中世の考察の項で、詳しく述べることにする。SD2・7からも多量の遺物が出土している。SD2は土師質土器皿類を主として、SD7は土師質土器杯を主として出土する。Loc. 42から出土した遺物は、全体的に近世を除けば15世紀後半～16世紀前半にかけてのものが主流である。調査は、田村城館の一部について実施したのみで、城館の全体的な様相を明確にすることはできなかった。しかし、文献上で推察されていた城館の外堀等を確認できたことは大きな成果といえよう。

近世の遺構として把握できるものは、SK1・21～27に代表される近世墓である。平面形は、長方形と円形を呈するものである。長方形のものは寝棺で、円形のものも座棺である。出土遺物は、副葬品として18世紀に生産された伊万里系猪口や碗がある。さらにSK21などでは、人骨の残存状況が良好で、西向きに横臥させ、足を折りまげた屈肢葬の方法で埋葬していたことを確認することができた。その他、近世土坑群中のSK58などからは、43の伊万里焼の見込荒磁碗が出土しており、17世紀後半代と考えられる遺構も存在している。近世の遺構は、土坑が多く存在し、墓以外は性格不明である。しかし、遺物は、伊万里焼、唐津焼、京焼系の陶器等が土坑から共伴して出土しており、良好な資料を得ることができた。

第11表 掘立柱建物址計測表

棟固番号	遺構番号	規 模			棟 方 向	面 積 ( $m^2$ )	備 考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)			
第85回	SB 1	1×2	3.20×4.75	1.95~3.20	N-17°-E	15.2	
◇	SB 2	————	————	1.75~3.45	N-75°-W	——	
第86回	SB 3	1×4	3.45×6.55	1.40~3.45	N-72°-W	22.6	
第85回	SB 4	2×2	2.95×4.30	1.45~2.20	N-20°-E	——	
第86回	SB 5	2×2	3.80×7.31	1.80~3.75	N-76°-W	27.2	
第87回	SB 6	2×3	3.40×5.45	1.55~1.85	N-19°-E	——	
第88回	SB 7	2×3	3.45×5.00	1.35~1.90	N-14°-W	17.3	
第87回	SB 8	2×3	3.80×6.80	1.80~2.35	N-17°-E	25.8	
第88回	SB 9	3×4	————	0.80~1.85	N-14°-E	——	
第89回	SB 10	1×4	3.65×5.60	1.60~3.65	N-76°-W	20.4	
◇	SB 11	1×1	3.10×4.20	3.05~4.20	N-74°-W	13.0	

第12表 土坑計測表

棟固番号	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	断 面 形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第90回	SK 1	長方形	1.90	0.65	0.54	N-12°-E	箱 形	
◇	SK 2	隅丸長方形	1.02	0.40	0.24	N-52°-W	逆 台 形	
◇	SK 3	不整形円形	0.95	0.77	0.07	N-38°-E	浅い逆台形	
◇	SK 4	不整形	2.20	1.20	0.50	N-40°-E	逆 台 形	
◇	SK 5	方 形	1.47	1.15	0.23	N-28°-E	◇	
————	SK 6	円 形	1.50	——	——	——	——	攪乱。
————	SK 7	◇	1.20	——	——	——	——	◇
第90回	SK 8	隅丸方形	1.50	1.25	0.42	N-26°-E	逆 台 形	
第91回	SK 9	瓢箪形	0.72	0.48	0.12	N-64°-W	◇	
◇	SK 10	不整形	1.95	——	0.12	N-13°-E	——	
◇	SK 11	方 形	0.96	0.56	0.16	N-1°-W	逆 台 形	
◇	SK 12	長方形	2.45	1.25	0.60	N-25°-E	◇	
◇	SK 13	隅丸方形	1.65	1.60	0.49	N-70°-W	◇	
◇	SK 14	槽門形	0.90	0.70	0.15	——	◇	規模は指定。
◇	SK 15	長方形	2.10	1.02	0.20	N-14°-E	浅い逆台形	

神田番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 92 団	S K 16	不整形	2.35	1.00	0.14	——	——	平面形は推定。
◇	S K 17	円形	0.80	——	0.08	——	浅い逆台形	
◇	S K 18	隅丸方形	3.25	3.00	0.20	N-74°-W	◇	
◇	S K 19	円形	1.50	——	1.20	——	逆台形	
第 93 団	S K 20	方形	3.50	2.05	0.37	N-60°-W	◇	
◇	S K 21	長方形	1.80	0.60	0.46	N-23°-E	箱形	
◇	S K 22	◇	1.55	0.82	0.50	N-20°-E	◇	
◇	S K 23	小型の円形	0.80	——	0.20	——	逆台形	
第 94 団	S K 24	長方形	1.70	0.64	1.00	N-18°-E	箱形	
◇	S K 25	円形	0.90	——	0.52	——	◇	
◇	S K 26	◇	0.90	——	0.08	——	浅い逆台形	
◇	S K 27	長方形	1.80	0.50	1.30	N-24°-E	箱形	
◇	S K 28	円形	1.20	——	0.30	——	逆台形	
◇	S K 29	◇	1.48	——	0.58	——	浅い逆台形	
第 95 団	S K 30	◇	1.48	——	0.15	——	——	規模は推定。
◇	S K 31	◇	1.00	——	0.34	——	逆台形	
◇	S K 32	◇	1.65	——	0.35	——	◇	
◇	S K 33	不整形円形	1.90	1.40	0.42	N-14°-W	◇	
◇	S K 34	円形	1.70	——	0.54	——	箱形	
——	S K 35	——	(8.40)	4.50	0.50	——	——	東側は調査区外。
第 96 団	S K 36	方形	1.00	0.35	0.25	——	——	
第 95 団	S K 37	◇	2.10	——	0.18	N-16°-E	逆台形	
◇	S K 38	◇	2.75	1.45	0.32	N-16°-E	◇	
第 96 団	S K 39	円形	1.30	——	0.16	——	浅い逆台形	
◇	S K 40	◇	1.25	——	0.70	——	——	
◇	S K 41	不整形	0.95	0.85	0.08	N-28°-E	逆台形	
◇	S K 42	円形	0.70	——	0.32	——	◇	
第 97 団	S K 43	方形	1.95	0.60	0.32	N-13°-W	◇	平面形は推定。
◇	S K 44	長方形	6.05	3.05	0.64	N-80°-W	◇	
◇	S K 45	隅丸長方形	1.53	0.70	0.24	N-24°-E	——	

押出番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第 98 図	S K 46	隅丸長方形	1.65	1.08	0.21	N-85°-W	浅い逆台形	
*	S K 47	方 形	2.20	2.10	0.24	N-75°-W	逆 台 形	平面形は推定。
*	S K 48	楕円形	3.00	0.78	0.13	N-12°-E	浅い逆台形	
*	S K 49	長方形	4.10	1.73	0.41	N-83°-W	逆 台 形	
第 99 図	S K 50	—	1.93	—	0.80	—	—	
*	S K 51	方 形	1.20	—	0.19	—	逆 台 形	
*	S K 52	不整形	4.90	3.65	1.18	N-19°-E	*	
第 100 図	S K 53	隅丸方形	1.45	1.05	0.09	N-84°-W	浅いレンズ状	
*	S K 54	楕円形	1.32	0.75	0.99	N-75°-E	*	
*	S K 55	方 形	2.50	2.30	0.25	N-8°-E	逆 台 形	
*	S K 56	隅丸方形	1.83	1.24	0.52	N-14°-E	*	
*	S K 57	方 形	3.18	0.57	0.29	N-56°-W	箱 形	
第 101 図	S K 58	不整形	3.45	1.28	0.38	N-82°-W	逆 台 形	
—	S K 59	—	—	—	0.30	—	—	S D 12 に破壊されている北側のみ検出。
第 101 図	S K 60	方 形	1.45	0.65	0.60	N-12°-E	—	推定。
*	S K 61	溝 状	3.40	0.43	0.35	N-75°-W	逆 台 形	
*	S K 62	楕円形	1.20	0.65	0.41	N-13°-E	*	
第 102 図	S K 63	円 形	0.62	—	0.15	—	—	
*	S K 64	隅丸方形	1.45	0.65	0.65	N-75°-W	逆 台 形	複乱
*	S K 65	長方形	1.50	0.73	0.68	N-19°-E	箱 形	
*	S K 66	溝 状	5.20	0.50	0.11	N-70°-W	浅い逆台形	
*	S K 67	不整形溝状	7.50	1.60	0.50	N-75°-W	*	
第 103 図	S K 68	円 形	1.90	—	0.82	—	逆 台 形	
*	S K 69	*	1.20	—	0.19	—	*	
*	S K 70	隅丸方形	1.18	0.70	0.35	N-70°-W	U 字 形	
*	S K 71	不整形	2.28	1.50	0.50	N-82°-W	逆 台 形	
*	S K 72	楕円形	0.80	0.70	0.20	N-14°-E	*	
第 104 図	S K 73	不整形	3.00	2.30	0.30	N-65°-W	—	
第 103 図	S K 74	楕円形	3.42	0.93	0.64	N-28°-E	—	推定。
第 104 図	S K 75	大型方形	6.00	3.88	0.92	N-77°-W	—	

挿出番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第104図	S K 76	隅丸方形	2.77	0.88	0.27	N-75°-W	逆台形	
第105図	S K 77	不整形	5.58	4.95	1.00	N-79°-W	——	
◇	S K 78	方 形	3.75	0.80	0.11	N-74°-W	浅い逆台形	
◇	S K 79	隅丸方形	1.25	1.05	0.50	N-25°-E	◇	
第106図	S K 80	不整形溝状	6.10	0.20	0.20	——	◇	
第107図	S K 81	大型方形	6.10	2.30	0.50	N-15°-E	——	
◇	S K 82	楕円形	1.30	1.10	0.15	N-60°-W	——	推定。
第106図	S K 83	方 形	1.50	1.10	0.23	N-72°-W	逆台形	
◇	S K 84	◇	2.40	1.20	0.12	N-25°-E	◇	
◇	S K 85	不整形	2.30	1.30	0.27	N-33°-E	——	
◇	S K 86	◇	3.60	1.80	0.20	N-33°-E	——	
◇	S K 87	◇	2.30	1.90	0.50	N-57°-W	——	
第108図	S K 88	円 形	3.95	——	0.83	——	浅いU字形	推定。
◇	S K 89	楕円形	0.90	0.48	0.20	N-70°-W	逆台形	
◇	S K 90	◇	1.70	0.43	0.05	N-30°-E	浅い逆台形	
◇	S K 91	円 形	0.90	——	0.06	——	◇	
◇	S K 92	不整形	0.80	0.73	0.20	N-72°-W	逆台形	
第109図	S K 93	方 形	1.15	0.77	0.14	N-30°-E	浅い逆台形	
◇	S K 94	瓢箪形	0.95	0.65	0.41	N-24°-E	楕 形	
◇	S K 95	楕円形	1.05	0.67	0.15	N-20°-E	逆台形	
第111図	S K 96	円 形	2.10	——	0.55	——	——	平面形は推定。
第109図	S K 97	長方形	3.30	1.30	0.40	N-75°-W	——	
第110図	S K 98	隅丸方形	1.15	0.95	0.15	N-31°-E	浅い逆台形	
第109図	S K 99	楕円形	4.40	1.40	1.40	N-70°-W	◇	
第110図	S K 100	長方形	3.35	1.35	0.10	N-65°-W	◇	
◇	S K 101	方 形	1.60	1.30	0.30	——	——	推定。
◇	S K 102	楕円形	2.00	1.70	0.38	N-8°-W	逆台形	

第13表 包含層出土土器観察表

神田番号	層位	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
1	第Ⅲ層	土師質土器 罎	15.8 ( 5.2)	胴部に肩を持ち、外方に突出する。口縁部は内傾する面を持つ。	内外面に指頭圧痕。体部外面に印目あり。口縁部にヨコナゲが観察される。	外面、肩部以下に炭状炭化物付着。によい褐色。
2	*	土師質土器 蓋	( 7.4)	胴部は内湾し、腹縁で一旦屈曲してから直立し、口縁部にいたる。肩部に把手が貼付される。	ロクロナデ。 内面に指頭圧痕。	淡黄色
3	*	播 鉢	27.4 ( 7.9)	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は、上方及び下方方に拡張される。	条線数不明。	内面、灰白色。 外面、赤褐色。 備前焼。
4	*	*	31.0 ( 7.9)	体部は直線的。口縁部上方に拡張し、内面に段を有す。外面は凹線状になる。	条線は、10本1単位。 ロクロナデ。	備前焼。(近世)
5	*	*	31.8 ( 7.2)			*
6	*	青 磁 伎花皿	13.9 ( 2.1)	体部は腰部で屈曲し、外反気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は、楕円形に割まれる。	口縁部内面に2条の比線。 内外面、貫入あり。	濃緑色釉。
7	*	白 磁 皿	8.4 2.0 — 4.1	高台は、アーチ状を呈する。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり丸くおさまった口縁部にいたる。	全面に施釉される。 貫入なし。	白色釉。 胎土、灰白色。
8	*	土 鍋	全 長 3.2 直 径 1.1 重 量 9) 2.5	土師質の土器で、円筒形を呈し、ほぼ中央部に直径4mmの円孔を穿つ。		
9	*	紅磁口	4.2 1.4 — 6.4	断面三角形の高台を持つ底形から、体部は内湾して立ち上がる。口縁部は、水平に面取られ、体部外面には細かい放射状の凹色。	口縁部外面と見込の部分に釉が施される。	白色釉。 伊万具系。

第14表 遺構出土土器観察表

神田番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
10	S B 10	白 磁 皿	— ( 1.8) — 5.2	高台は、アーチ状を呈する。体部は、内湾して外上方に立ち上がる。	全面に施釉される。 貫入あり。	
11	S K 1	小 碗	7.2 3.4 — 2.5	高台内やや深く削られた底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部やや外反。	体部外面、西方に文様が濃青色に染色する。	白色釉。 瀬戸・美濃系。
12	S K 3	土師質土器 皿	10.4 1.9 — 6.3	体部は、やや内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕あり。	淡黄褐色。
13	*	*	10.9 2.8 — 4.7	平坦な底部から、体部は一尺くびれた後、やや内湾気味に口縁部にいたる。		*

標記番号	通標番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
14	SK 3	皿	11.2 3.3 4.6	底縁は、張り出して高台状にしている。体部は内湾気味に口縁部にいたる。	内面金面及び外面口縁下まで施釉される。	灰白色釉。 胎土は褐色。
15	SK 4	碗	— (3.1) 2.7	断面三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	装付を除く全面に施釉される。	白色釉。 焼成不良。 伊万里。初期。
16	SK 11	土師質土器 杯	12.5 4.3 4.9	平坦な底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕あり。	淡黄褐色。
17	SK 20	小 杯	— (3.6) 1.3	高台は、断面台形状を呈する。胴部で一旦屈曲してから、体部は直線的に、外上方へ立ち上がる。	高台部に、二重の界線が淡青緑色に発色する。装付は、輪が削りとられる。	灰白色釉。 伊万里系。
18	*	碗	— (3.7) 3.4	断面長方形の高内を持つ底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がる。	貫入なし。高台外面に二重の界線、体部外面に二重網目文が、あせた青色に発色する。	明るい明緑灰色釉。
19	*	仏教器	7.4 4.4 7.6	脚部は短い。胴部は内湾して外上方に立ち上がる。		伊万里系。
20	*	碗	12.3 7.9 5.2	高台は断面台形形で、高台内の削りは、やや深い。体部は内湾して立ち上がり、直立し脚部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内外面貫入あり。 装付は輪が削りとられる。 高台内面に砂消磨。	淡黄色釉。 京焼系。
21	*	*	12.4 8.3 4.9			*
22	*	*	— (3.5) 4.4	断面四角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面、高台部まで施釉され、外面及び高台は露胎。	明オリブ灰色釉。 胎土、灰白色。
23	*	甕	28.0 (18.1)	胴部は、内湾して立ち上がり、内傾してT字状の口縁部にいたる。	全面に施釉された後、さらに外面に放射状に施釉される。	
24	SK 21	小 碗	7.0 3.5 3.0	断面四角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	装付は、輪が削りとられる。外面に藍文が淡オリブ色に発色する。貫入なし。	灰白色釉。
25	SK 22	土師質土器 小 皿	7.0 1.2 4.3	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部回転糸切り痕あり。 ロクロナデ。	淡黄褐色。
26	SK 25	碗	11.0 7.8 5.3	体部は内湾して外上方に立ち上がり、直立した口縁部にいたる。底部は丸くおさめぬ。	装付の輪が削りとられる。体部外面に山水文があせた青灰色に発色する。全面に貫入あり。外底に砂消磨。	青味がかった白色釉。 平組釉。
27	SK 26	鉢	— (6.5) 10.0	高台は、断面長方形で幅広く安定している。体部は内湾して立ち上がる。	内面に白色または薄い黄褐色の釉をハケ塗りしている。外面に自然釉があらわれる。	胎土、薄い赤褐色。 唐津焼。
28	SK 27	小 碗	7.1 3.6 2.9	高台は断面三角形。体部は内湾して外上方に立ち上がり、丸くおさめた口縁部にいたる。	装付の輪は、削りとられる。体部外面に藍文が施される。	白色釉。 胎土、灰白色。

標記番号	濃模番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
29	S K 33	皿	13.8 3.1 — 7.9	高台は、断面逆台形状を呈する。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	内面につる草文があせた青色に発色する。墨付は釉が削りとられる。見込部分、底ノ目状輪ハヤ。	白色釉。 胎土、灰白色。
30	S K 34	＊	10.2 ( 5.4 ) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して外反、肩部は上方に拡張する。高台内の削りが深い。	白または灰オリーブ色の釉を内外面にハケで塗る。外底が半分埋戻輪する以外は、全面に施輪される。	内湾、墨跡。
31	S K 35	＊	— ( 1.6 ) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は丸くおさめらる。	内面に、四方帯文がぶい青色に発色する。 内外面かきわけ。	内面、明緑灰色釉。 外面、淡緑色釉。
32	＊	碗	— ( 2.2 ) — 4.0	断面逆台形状の安定した高台から、体部は内湾して立ち上がる。底面見込付近絶縁。	墨付は、釉が削りとられる。高台輪、墨付に砂浴着。	淡黄色系の灰白色釉。 胎土、灰白色。
33	＊	燈明皿	11.2 ( 2.0 ) — —	体部は、底部から屈曲した縁、直線的に口縁部にいたる。「立ち上がり」は、内傾して立ち上がる。	「立ち上がり」の内面を除く内面全面に、外面口縁部まで、釉が施される。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。 瀬戸・美濃系。
34	＊	前	— ( 3.7 ) — 5.1	高台は断面長方形で、外方にやや開く。体部は内湾して、外上方へ立ち上がる。	墨付は、釉が削りとられる。全面に貫入がみられる。	淡黄色釉。 胎土、灰白色。
35	S K 37	＊	— ( 1.5 ) — 3.1	高台は、外方に開き、断面長方形。高台内の削りやや深い。体部は、内湾気味の立ち上がりを示す。	内面全面及び外面高台縁まで施輪される。	明緑灰色釉。 胎土、灰白色。 藤助土、淡黄褐色。 京焼系。
36	＊	土師質土器 皿	— ( 1.6 ) — 5.8	平坦な底部から、体部は外上方に内湾して立ち上がる。	内面口縁部、底部面輪糸切り痕有り。	淡黄褐色。
37	S K 52	土師質土器 杯	— ( 2.8 ) — 4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内面、口縁部有り。	淡黄褐色。 器表の磨耗が激しい。
38	＊	土師質土器 鉢	22.6 ( 7.6 ) — —	体部は内湾気味に立ち上がり、内傾して口縁部にいたる。底部は内傾した面を成す。両部に断面三角形の飾。	口コロナダ。 体部外面、肩部下に印目有り。	内面、橙色。 外面、ぶい赤褐色。 外面に腐状炭化物。
39	＊	要	— ( 7.5 ) — 26.0	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	口コロナダ。	備前焼。
40	＊	＊	32.6 ( 11.9 ) — —	直立した胴部の上に玉縁状の口縁部を有する。	口コロナダ。 体部外面、口縁部内面に自然輪。	＊
41	＊	青磁 碗	— ( 3.5 ) — 5.4	高台内の削りが浅い。高台は、外方にやや開き気味で、外面が凹取られ、墨付は狭くされる。体部は内湾気味。	体部外面にヘラ掻き沈線。 内面に一条のヘラ掻き沈線。	オリーブ灰色釉。 胎土、灰白色。
42	＊	＊	— ( 2.3 ) — 4.4	＊	墨付及び外底部の釉は削り取られる。 内面に印花文。	オリーブ黄色釉。 胎土、灰白色。
43	S K 58	碗	— ( 3.9 ) — 5.8	高台は断面三角形で、内面を凹取られ、墨付が狭くされる。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	見込に二重の青線。その中に黄褐色文が淡いオリーブ灰色に発色する。高台外面に二重の青線が同様に発色する。貫入なし。	灰白色釉。



押出番号	造機番号	器種	口徑 器高 胴徑 底徑	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
58	S K 75	壺	34.6 (22.0)	玉縁状の口縁部を呈する。	ロクロナデ。	水褐色。 備前焼。
59	*	土 罎	全 長( 4.3) 直 径 1.9 重量(9) 12.5	土師質の土罎で内筒形を呈す。 やや端より到底径4.5mmの円孔 を穿つ。		
60	*	壺	34.8 (22.0)	胴部は内湾しながら内傾した立ち 上がりを示し、腹部で屈曲した 後直すし、玉縁状の口縁部に いたる。	胴部内面へう削り。肩部にハケ 目が見られる。 内面に指痕は僅有り。 ロクロナデ。	にぶい赤褐色。 備前焼。
61	*	*	22.2 ( 6.5)	N字状の口縁部を呈する。	ロクロナデ。	灰赤色。 常滑焼。
62	S K 77	*	35.1 ( 5.5)	直立した頸部から、玉縁状の口 縁部にいたる。	*	灰赤色。 備前焼。
63	*	*	22.8 ( 8.7)	頸部でくの字状に屈曲した後、 外反した口縁部にある。口縁 部は肥厚する。	口縁部外側に2条の凹線。 ロクロナデ。	暗赤灰色。 備前焼。
64	*	青 磁 罎	14.9 ( 4.2)	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、やや外反気味の口縁部に いたる。	体部外面に墨書文。 貫入なし。	濃緑色釉。 粘土、灰白色。
65	*	甌	( 4.5) 4.3	高台は逆内形状を呈し、体部は 外方に大きく開いて内湾気味に 立ち上がる。	足込、総ノ目状輪ハギ。 外面は、高台外面あるいは高台 縁にかけて施物される。 貫入なし。高台に砂浴着。	明淡緑色釉。 粘土、白色。 伊万里。初期。
66	*	*	13.0 3.4 4.8	高台は、断面定台形状で、体部 は、内湾して外上方に大きく開 いて立ち上がり、口縁部にいた る。	足込、総ノ目状輪ハギ。 外面は、高台縁まで施物される。 貫入有り。高台に砂浴着。	内面、青緑色釉。 外面、淡黄色釉。 粘土、灰白色。 常滑焼。
67	*	甌	( 2.6) 5.1	高台は、外面が垂直に附られ、 断面定台形状を呈す。体部は、内 湾して外上方に立ち上がる。	外面の一部以外の全面に施物さ れる。 貫入有り。兼付に砂浴着。	灰白色釉、粘土 灰白色。 常滑焼。
68	*	*	( 3.0) 4.3	断面長方形の高台を有する底部 から、体部は内湾して立ち上 がる。	内面及び外面高台縁まで施物さ れる。貫入有り。 足込に砂浴着。	淡黄色釉。 粘土、灰白色。
69	*	*	10.4 4.9 3.9	断面三角形の高台を有する底部 から、体部は内湾して立ち上 がり、口縁部にある。	貫入有り。 兼付に砂浴着。	淡黄色釉。 粘土、灰白色。
70	*	土罎	全 長( 5.4) 直 径 2.5 重量(9) 16.0	土師質の土罎で、円筒形を呈し、 ほぼ中央部に直径5.5mmの円孔 を穿つ。		
71	S K 80	土師質土器 罎	8.0 1.8 5.1	体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。	淡褐色。
72	*	土師質土器 杯	10.2 3.8 6.7	体部は、内湾して外上方に立ち 上がり、胴部を先くおさめた口 縁部にある。	ロクロナデ。 底部凹部縁切り状有り。	灰白色。

押取番号	遺構番号	群 種	口径 器高 脚径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
73	SK 81	小 碗	7.3 4.3 — 2.7	断面三角形の高内を持つ底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部外側に周縁り文が、高台外面に二重、高白磁に少量の茶線が、にが青に染色する。墨付の輪は取り取られる。貫入なし。	青味がかった白色種。 灰白色。 伊万里系。
74	*	皿	— (2.1) — 3.7	高台は断面逆台形状で、外周は墨画に周り取られる。体部は、大きく開きながら、内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面、純ノ目状輪ハズ。 外面は、高白磁、高台外周にかけて施釉される。 見込及び高台、外底に砂浴着。	緑がかった淡黄色種。 濃赤褐色。内野山類。
75	SK 96	土師質土器 小 皿	6.6 1.6 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	外面に指痕上痕有り。	淡黄褐色。
76	*	*	7.1 1.5 — —	*	*	灰白色。
77	*	*	6.8 1.8 — —	*	*	*
78	*	*	7.0 1.6 — —	*	*	淡黄褐色。
79	*	*	6.3 1.5 — 4.2	体部は外傾して外上方に立ち上がる。口縁部は外傾した水平面をなす。	ロクロナデ。 底面回転糸切り痕有り。	*
80	*	土師質土器 皿	10.0 2.0 — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はナゲのため外反する。	内面は、丁寧なヨコナゲにより仕上げられる。	白色系。
81	*	*	10.6 2.3 — 4.8	*	内面は、丁寧なヨコナゲにより仕上げられる。 体部外面に指痕上痕有り。	淡黄褐色。
82	*	*	10.3 2.2 — —	*	*	灰色または黒褐色。
83	*	*	10.0 2.1 — —	*	*	灰色。
84	*	*	9.6 2.2 — —	*	内面は、丁寧なヨコナゲで仕上げられている。	淡黄褐色。
85	*	*	13.1 2.9 — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は強いヨコナゲのため外反し、口縁下はやや肥厚する。	体部内外面に指痕上痕有り。 口縁部はヨコナゲで仕上げられる。	*
86	*	*	13.0 3.0 — —	*	*	*
87	*	*	13.2 3.0 — —	*	*	淡褐色。

押出番号	産機番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (mm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
88	S K 96	土師質土器 皿	12.8 3.0 — 7.0	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下は、ヨコナデのために肥厚する。	体部内外面に指頭押痕。口縁部はヨコナデで仕上げている。	淡褐色。
89	*	*	13.3 2.4 — —	*	*	*
90	*	*	12.5 3.1 — —	*	*	淡黄褐色。
91	*	*	13.2 2.4 — —	*	*	褐色。
92	*	*	13.0 2.9 — —	*	*	*
93	*	*	12.8 3.1 — —	*	*	淡黄褐色。
94	*	*	12.7 3.0 — —	*	*	*
95	*	*	6.5 3.8 — —	*	*	*
96	*	*	13.1 2.7 — —	*	*	淡褐色。
97	*	*	13.1 2.8 — —	*	*	淡黄褐色。
98	*	*	12.9 3.1 — —	*	*	内面、淡褐色。 外面、淡黄褐色。
99	*	*	19.0 3.0 — —	*	*	淡褐色。
100	*	*	12.5 3.1 — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下は、ヨコナデのために肥厚する。	*	*
101	*	*	13.2 2.9 — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下はナデのために肥厚する。	*	*
102	*	*	11.9 2.7 — —	*	*	*

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
103	S K 96	土師質土器 皿	13.6 2.7 — 5.8	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下はヨコナデのための肥厚する。	体部内外面に指頭印痕有り。口縁部はヨコナデで仕上げている。	淡褐色。
104	*	*	13.5 2.8 — 8.0	*	*	*
105	*	*	13.2 2.8 — 6.0	*	*	*
106	*	*	12.8 2.5 — 7.0	*	*	*
107	*	*	12.8 2.9 — —	*	*	*
108	*	*	12.8 ( 2.7 ) — —	*	*	淡黄褐色。
109	*	*	10.8 3.0 — —	*	*	*
110	*	*	13.4 ( 2.8 ) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	*	淡褐色。
111	*	*	13.4 2.4 — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下が、やや肥厚する。	*	淡黄褐色。
112	*	*	13.8 2.5 — —	*	*	内面、淡褐色。 外面、淡黄褐色。
113	*	*	13.4 2.3 — —	*	*	淡黄褐色。
114	*	*	13.4 2.7 — —	*	*	淡褐色。
115	*	*	13.9 2.8 — —	*	*	*
116	*	*	14.6 2.5 — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、外反気味の口縁部にいたる。	体部内外面及び底面に指頭印痕が有り。口縁部及び内面はヨコナデで仕上げられる。	内面、灰白色。 外面、淡黄褐色。 体部外面に底痕有り。
117	*	*	12.8 2.4 — 7.2	*	*	灰白色。

洋図番号	遺構番号	器 種	口徑 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
118	S K 96	土師質土器 皿	17.0 2.9 — 10.6	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、外反した口縁部にいたる。	体部外面に指環状痕が残り、口縁部及び内面は、いはいなロコナゲで仕上げられる。	淡黄褐色。(白色系)
119	*	*	15.9 2.6 — 10.2	*	*	*
120	*	*	16.5 3.0 — —	*	*	灰白色。(白色系)
121	*	*	15.0 2.7 — —	*	*	*
122	*	*	14.8 2.5 — —	*	*	*
123	*	*	14.2 2.8 — 9.2	*	*	淡褐色。
124	*	*	15.4 2.9 — 9.5	*	*	白色系。
125	*	*	15.2 2.8 — —	*	*	*
126	*	土師質土器 小 杯	6.6 2.0 — 3.4	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕、底部回転痕残りあり。	褐色。
127	*	*	6.8 1.9 — 4.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	調査不明。	褐色。 器表の磨耗が激しい。
128	*	*	7.3 1.8 — 3.9	*	内面にロクロ痕有り。	褐色。
129	*	*	7.2 1.8 — 3.8	*	ロコナゲ。	淡褐色。 器表の磨耗が激しい。
130	*	*	7.2 1.8 — 3.9	*	*	*
131	*	*	7.3 2.0 — 3.9	*	*	淡黄褐色。 器表の磨耗が激しい。
132	*	*	7.3 2.1 — 4.0	*	*	*

押出番号	遺構番号	器 種	口徑 容 量 胴 径 底 径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
133	SK 96	土師黄土器 小 杯	7.4 2.2 — 4.1	体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄褐色。 器表の磨耗が激 しい。
134	*	*	7.0 1.9 — 3.6	*	*	*
135	*	*	7.0 1.8 — 3.5	体部は外反気味に外上方へ立ち 上がり、口縁部にいたる。	*	*
136	*	*	5.9 1.9 — 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕、底部回転糸切 り痕有り。	灰白色。(白色 系) 砂粒はほとんど 含まない。
137	*	*	8.0 2.0 — 3.8	*	ロクロナデ。	淡黄褐色。 器表の磨耗が激 しい。
138	*	*	7.1 1.9 — 3.8	*	内面にロクロ痕有り。	*
139	*	*	6.6 1.8 — 3.5	*	調査不明。	*
140	*	*	6.4 1.9 — 4.0	*	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。
141	*	*	7.2 1.9 — 4.0	*	*	褐色。
142	*	*	7.6 2.0 — 4.2	*	*	淡黄褐色。
143	*	*	7.4 2.0 — 3.6	体部は、一旦外反し、それから 内湾気味に口縁部にいたる。	調査不明。	淡黄褐色。 器表の磨耗が激 しい。
144	*	*	7.7 2.0 — 4.0	体部は直線的に外上方に立ち上 がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。	*
145	*	*	7.9 2.0 — —	体部は外反気味に立ち上がり、 口縁部は、やや内湾する。	内面にロクロ痕。 底部、回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。
146	*	*	6.9 2.2 — 4.0	体部は、外反気味に外上方に立 ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。	褐色。 器表の磨耗が激 しい。
147	*	*	7.2 2.1 — 3.7	*	*	内面、淡褐色。 外面、褐色。

標記番号	産地番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
148	S X 96	土師質土器 小 杯	6.2 2.1 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部に一箇所、穿孔がみられる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。 砂粒はほとんど含まず、底底は極めて良好。
149	*	*	5.9 2.0 3.1	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	*	淡黄褐色。(白色系) 砂粒は、ほとんど含まれない。
150	*	*	6.6 2.0 3.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	褐色。 器表の磨耗が激しい。
151	*	*	5.8 2.0 2.5	体部はやや内反気味に外上方へ立ち上がり、わずかに屈曲して口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。(白色系) 砂粒はほとんど含まない。
152	*	*	7.8 2.5 4.0	体部は、外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄褐色。 器表の磨耗が激しい。
153	*	*	7.4 2.1 3.8		*	*
154	*	土師質土器 杯	12.6 3.9 4.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、丸くおさめられた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。
155	*	*	12.0 3.5 5.6		内面、ロクロ痕有り。	褐色。
156	*	*	11.9 3.5 5.4		*	褐色。 器表の磨耗が激しい。
157	*	*	10.6 4.2 5.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は、外傾した面をなす。	内面、ロクロ痕、底部回転糸切り痕有り。体部内外面に指頭圧痕。	淡黄褐色。 底底は極めて良好。
158	*	*	11.7 3.6 5.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味の口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕有り。	褐色。 器表の磨耗が激しい。
159	*	*	11.7 3.5 5.4		*	*
160	*	*	11.5 3.8 5.4	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	*	淡褐色。
161	*	*	11.9 3.5 5.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味の口縁部にいたる。	*	褐色。
162	*	*	11.2 3.8 5.7	体部は外反して外上方へ立ち上がる。口縁部は外傾した水平面をなす。	内面にロクロ痕、底部回転糸切り痕、体部外面に指頭圧痕有り。	淡褐色。

碑頭番号	遺構番号	器 種	口徑 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
163	SK 96	土師質土器 杯	11.7 3.5 — 5.2	体部は、外反気球に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄褐色。
164	*	*	12.2 3.6 — 5.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	*	褐色。
165	*	*	12.4 4.1 — 5.6	*	*	淡黄褐色。
166	*	*	11.7 3.1 — 5.2	体部は、やや内湾した立ち上がりを示す。口縁下が肥厚する。	*	*
167	*	*	11.9 3.7 — 4.9	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに内湾する。	内面にロクロ痕。 底部面輪糸切り痕有り。	*
168	*	*	11.8 3.6 — 4.7	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。	淡褐色。 器表の磨耗が激しい。
169	*	*	11.5 4.1 — 4.7	*	*	淡黄褐色。 器表の磨耗が激しい。
170	*	*	12.0 3.2 — 5.3	体部は外反気球に外上方へ立ち上がり、直線的な口縁部にいたる。	*	*
171	*	*	10.7 3.7 — 4.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	調査不明。	*
172	*	*	10.2 3.8 — 5.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 口縁部わずかに内湾。	内面ロクロ痕が残る。	褐色。 器表の磨耗が激しい。
173	*	*	13.6 3.6 — 7.4	体部は内湾気球に立ち上がり、やや外反した口縁部にいたる。	*	*
174	*	*	11.6 3.6 — 5.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	*	*
175	*	*	12.3 3.3 — 5.1	*	*	淡黄褐色。 器表の磨耗が激しい。
176	*	*	12.4 3.6 — 5.2	*	調査不明。	*
177	*	*	12.4 3.4 — 4.8	体部は内湾気球に外上方に立ち上がる。	内面ロクロ痕。	*

舞臺番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
178	S K 96	土師質土器 杯	12.6 3.7 — 5.6	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁下が肥厚する。	内面にロクロ痕有り。	褐色。
179	*	*	12.3 3.2 — 5.5	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、外反した口縁部にいたる。	*	褐色。 器表の磨耗が激しい。
180	*	*	12.0 3.4 — 5.0	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、外反気味の口縁部にいたる。	*	*
181	*	*	11.8 3.8 — 5.0	体部は、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄褐色。 砂粒をほとんど含まない。
182	*	*	11.1 3.8 — 5.0	体部は、外反気味に外上方に立ち上がり、やや内湾して口縁部にいたる。	*	*
183	*	*	10.6 3.5 — 4.8	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	*	灰白色。(白色系) 砂粒をほとんど含まない。
184	*	*	11.8 3.5 — 5.0	*	内面、ロクロ痕。	淡黄褐色。
185	*	*	11.8 3.5 — 5.0	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部はわずかに内湾。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	*
186	*	青磁 碗	14.3 (5.0) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面に貫入あり。 体部外側に細線弁文があり、蓮弁の単位は重複されている。	淡暗緑色釉。 胎土、灰白色。
187	S K 97	土師質土器 杯	— (4.3) — 7.0	平坦な底部から、体部は内湾して立ち上がる。	底部回転糸切り痕、ロクロナデが観察される。	淡黄褐色。
188	*	碗	— (3.4) — 3.7	断面は三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	垂付は、釉が剥り取られる。文様は、あせた暗黄灰色に発色する。 垂付に砂粒着。	灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里。
189	*	*	10.6 5.0 — 4.0	断面長方形の高台を持つ底部から、体部は内湾して立ち上がり、屈曲して直立する口縁部にいたる。	内面及び外面高台部まで施釉される。内外面に貫入あり。 体部外側に陶胎土施法による空文が淡緑黄色に発色する。 見込に砂粒着。	淡黄色釉。 胎土、明るい淡黄色。 京焼系。
190	S K 99	*	10.0 5.4 — 3.9	*	内面及び外面高台部まで施釉される。内外面に貫入あり。 体部外側に陶胎土施法による空文が淡緑黄色に発色する。	淡黄色系の灰白色釉。 胎土、灰白色。 瀬戸・美濃系。
191	S D 1	権鉢	30.4 (5.6) — —	体部は、直線的に外上方に並び、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	口縁部外面に2本の凹線が施される。内面には、二段の段を有す。	赤黄褐色。 薄青釉。
192	*	壺	10.3 (4.5) — —	頸部から口縁部にかけて外反し、肩部は小玉縁を築する。	ロクロナデ。	暗赤褐色。 胎土、灰白色。 備前焼。

神田番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
193	SD 1	青磁 甕	— (4.0) — 5.2	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。高台は、比較的高く歪三角形を呈す。	高台内まで施釉。外底に物は施されない。見込に文様有り。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
194	*	甕	— (2.1) — 5.2	高台は、前面歪台形である。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。	高台外まで施釉され、外底、壺付は露胎する。見込、蛇の貝状輪ハナ。内外面に文様が施付される。高台輪に一重の界線。	青味を帯びた白色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
195	*	猪口	3.3 3.4 — 2.3	底部は比較的厚く、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面に薄いコバルトブルーの染付が施される。輪は内外面施されるが、壺付、外底、高台の一部は露胎。壺付の一部に砂泥着。	灰白色釉。 胎土、白色。 伊万里系。
196	*	杯	(7.2) (1.9) — —	体部は、直線的に外上方に延び、口縁部は外反する。	口縁に一重の界線が施される。外面にあせた青い草花文。	灰白色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
197	*	甕	— (1.5) — 7.8	削り出し高台で、壺付は内外を露胎られ狭くされる。ヘソ高台を有し、施釉されている。	見込に鮮やかな藍色に染出した文様が施される。高台外面に、一重の界線。見込に日輪が残る。	灰白色釉。 胎土、乳白色。 現見焼。
198	*	*	— (1.8) — 3.8	高台は低い削り出しで、外底まで物は施されていない。壺付は露胎、内ぐりは丁寧ではない。	内外面貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。 清浄焼。
199	*	甕	— (9.3) — —	胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく屈曲して外反する。肩部は、小玉縁を呈す。	胴部上位に5条と3条の凹線が施される。内外面コクロナダ。	灰紫褐色。
200	SD 2	土師質土器 甕	11.6 (2.0) — —	口縁部は内湾する。	手捏ね。	淡黄褐色。
201	*	*	14.3 (3.0) — —	体部は内湾して立ち上がり、口縁下が若干肥厚し、肩部はつまみ上げられる。	*	*
202	*	*	12.8 3.2 — —	体部は内湾して立ち上がり口縁部は内湾している。	内外面指痕状痕有り。	褐色。
203	*	*	10.8 (2.1) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁下は、ナダのため肥厚する。	口縁部コナダ。 体部外面指痕状痕。	淡黄褐色。
204	*	*	13.5 2.7 — 9.0	平坦な底部から屈曲し、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は内湾している。	*	*
205	*	*	11.3 2.7 — 4.0	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。ナダのため口縁下は若干肥厚する。	*	淡黄褐色。 口縁部内面に塗付着。
206	*	*	12.1 2.4 — 8.0	平坦な底部から、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は内湾している。底部中央の器底は厚い。	体部内外面に指痕状痕有り。	暗灰褐色。
207	*	*	12.4 (2.1) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は、強いナダのため、やや外反する。	口縁部内外面コナダ。	淡黄褐色。

押印番号	選擇番号	器種	口径 器高 胴径 放径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
208	SD 2	土師質土器 壺	12.9 2.0 — 8.4	平直な底部から、ほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいる。口縁下はナデのため若干肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面に指頭圧痕。	淡褐色。
209	*	*	12.5 2.3 — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。口縁下、ナデのため若干肥厚する。	*	淡黄褐色。
210	*	*	12.8 2.1 — 8.2	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。口縁下、ナデのため若干肥厚。口縁部でやや屈曲する。	体部内外面指頭圧痕。	*
211	*	*	10.2 3.3 — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。口縁下はヨコナデのため肥厚する。	体部内外面指頭圧痕。 口縁部内外面ヨコナデ。	*
212	*	*	13.0 (2.1) — —	体部は、やや内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいる。ナデのため口縁部外周に軽い段を有する。	*	*
213	*	*	12.3 (2.2) — —	体部は底部から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がる。	*	*
214	*	*	12.4 2.7 — —	体部は、底部から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部はナデのため屈曲する。	*	灰茶褐色。
215	*	*	12.6 (2.6) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。	*	淡褐色。
216	*	*	12.3 2.2 — —	平直な底部から、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はナデのため外反する。底部中央の器壁が厚い。	*	*
217	*	*	12.3 2.5 — —	平直な底部から屈曲し、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。	*	*
218	*	*	12.2 2.6 — —	平直な底部から直線的に、外上方へ立ち上がり口縁部にいる。	体部内外面指頭圧痕。	褐色。
219	*	*	13.5 3.0 — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	淡黄褐色。
220	*	*	11.6 2.4 — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	*	淡褐色。
221	*	*	12.5 2.5 — 8.0	*	口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色。
222	*	*	12.6 2.1 — 7.5	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部はナデのためやや外反。	体部内外面、指頭圧痕。	

押出番号	造機番号	器種	口径 器高 胴径 注量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
223	SD 2	土師質土器 壺	11.5 2.4 — 5.0	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	口縁部、コナデ。 体部内外面指痕正直。	淡黄褐色。
224	*	*	13.9 2.9 — —	体部内湾して外上方に立ち上がる。	*	にぶい褐色。
225	*	*	12.4 2.4 — —	体部、内湾して外上方に立ち上がる。 口縁部はナデによりやや外反する。	*	*
226	*	*	12.4 (1.9) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	*	淡褐色。
227	*	*	12.4 2.8 — (8.0)		*	淡黄褐色。
228	*	*	12.3 3.4 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部がやや外反する。	*	*
229	*	*	12.3 2.3 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部が若干肥厚する。		淡黄褐色。 磨減が著しい。
230	*	*	11.7 2.7 — 4.4	平坦な底部から、ほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部が肥厚する。	内外面指痕圧痕が残る。	にぶい褐色。
231	*	*	12.3 2.9 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部コナデ。 体部内外面、指痕正直。	褐色。
232	*	*	12.7 2.8 — 6.5	体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して、上方に立ち上がる。	*	にぶい褐色。
233	*	*	11.6 2.1 — 8.0	平坦な底部から屈曲して外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	*	*
234	*	*	12.5 (2.6) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部下が肥厚し、肩部はやや外反する。	*	褐色。
235	*	*	13.1 2.5 — —	体部は肥厚し、直線的に外上方に立ち上がる。	*	にぶい黄褐色。
236	*	*	12.9 2.8 — —	体部は屈曲しながら直線的に外上方に立ち上がる。	*	淡黄褐色。
237	*	*	11.6 1.9 — 7.0	平坦な底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部やや外反する。	*	淡黄色。

押印番号	遺情番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
238	SD 2	七脚寶土器 皿	12.3 2.4 — 9.0	体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁部はやや外反する。体部は 肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面、折衝正度が残る。	褐色。
239	•	•	13.4 2.6 — 8.0	体部は、内湾して外上方に立ち 上がり、口縁部はいたる。	•	•
240	•	•	13.0 3.0 — 8.0	•	•	にぶい褐色。
241	•	•	11.6 2.1 — 5.6	体部は内湾気味に外上方に立ち 上がり、口縁部下が肥厚する。	•	淡黄褐色。
242	•	•	11.4 2.5 — —	•	•	淡褐色。
243	•	•	12.4 3.3 — —	•	•	淡黄褐色。
244	•	•	12.4 2.2 — 9.0	•	•	淡褐色。
245	•	•	12.9 2.5 — —	体部は内湾気味に大きく開いて 外上方に立ち上がる。	•	•
246	•	•	11.8 2.7 — 6.8	体部は、内湾気味に外上方に立 ち上がり、口縁部はやや外反す る。	•	淡黄色。
247	•	•	12.2 2.5 — 8.2	体部は、内湾気味に外上方に立 ち上がる。	•	淡黄褐色。
248	•	•	12.7 2.4 — 7.6	体部は、内湾気味に外上方に立 ち上がる。 口縁部下が肥厚する。	•	淡褐色。
249	•	•	13.8 2.4 — 9.0	•	•	淡黄色。
250	•	•	12.6 2.7 — 10.2	体部は内湾して外上方に立ち上 がり、口縁部はいたる。	•	淡黄褐色。
251	•	•	12.3 2.1 — 8.2	•	•	•
252	•	•	12.2 2.6 — —	体部は内湾して外上方に立ち上 がり、口縁部はいたる。 口縁部下が肥厚する。	•	•

標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
253	SD 2	土師質土器 皿	12.3 2.4 — —	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭印痕が残る。	淡赤褐色。
254	*	*	12.7 2.4 — —	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部下が肥厚する。	*	淡黄褐色。
255	*	*	13.0 2.4 — —	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 溝部をつまみ上げている。	*	淡赤褐色。
256	*	*	11.7 (2.7) — —	体部は直線して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	*	灰色。
257	*	*	11.1 1.5 — —	底部から屈曲して口縁部に立ち上がる。口縁部は、ナデによりやや外反する。	口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色。
258	*	*	13.8 (2.1) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はナデによりやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭印痕。	黄褐色。
259	*	*	13.1 (2.1) — —	*	口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色。
260	*	*	12.4 2.2 — —	平坦な底部から内湾して外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。ナデにより溝部がやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭印痕。	灰黄褐色。
261	*	*	10.2 2.1 — 7.5	平坦な底部から屈曲して直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はナデにより、外反する。	*	淡黄褐色。
262	*	*	11.4 2.7 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	*	淡褐色。
263	*	*	12.0 2.3 — —	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色。
264	*	*	13.0 2.2 — 4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭印痕。	*
265	*	*	11.0 (2.6) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、体部は若干肥厚し、口縁部は外反する。	*	淡褐色。
266	*	*	13.5 2.1 — 10.0	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	淡黄褐色。
267	*	*	12.3 1.9 — 7.4	*	*	に深い黄褐色。

標記番号	建構番号	器 種	口径 器高 器径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
268	SD 2	土師質土器 罎	12.9 2.8 7.8	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚し、口縁部はやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	淡黄褐色。
269	*	*	13.3 2.4	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	淡褐色。
270	*	*	13.4 2.4	*	*	淡黄褐色。
271	*	*	9.0 11.9 2.6	*	*	*
272	*	*	13.0 2.5	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部は肥厚する。	*	*
273	*	*	14.0 1.9 10.2	平坦な底部から屈曲して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部下が若干肥厚する。	*	褐色。
274	*	*	14.4 (2.1)	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚する。	*	淡赤褐色。
275	*	*	14.8 2.7	体部は、平坦な底部から屈曲し、外上方に立ち上がる。口縁部は外反する。	*	淡茶褐色。
276	*	*	15.0 2.2 9.6	平坦な底部から外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚する。	体部内外面指頭圧痕。	明茶褐色。
277	*	*	18.2 (2.7)	体部は直線的に大きく開いて外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部外面に指頭圧痕。	淡黄褐色。
278	*	*	14.0 (2.4)	体部は屈曲しながら外上方に立ち上がる。	口縁部、ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	内面、によい褐色。 外面、黒褐色。
279	*	*	14.7 2.6 9.0	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	*	によい黄褐色。
280	*	*	14.4 2.8 9.0	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	*	淡褐色。
281	*	*	13.7 2.5 10.0	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部の指頭による凹凸が激しい。	*	淡黄褐色。
282	*	*	14.1 (3.0)	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下は若干肥厚する。	*	*

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
283	SD 2	土師質土器 皿	14.3 1.9 — —	体部は、大きく開いて外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。体部から口縁部にかけて肥厚する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指紋圧痕が残る。	淡黄褐色。
284	*	*	15.8 (1.9) — —	体部、内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部ヨコナデ。	にぶい褐色。
285	*	*	26.3 2.8 — —		*	灰白色。
286	*	*	15.0 2.9 — —	*	口縁部ヨコナデ。 内外面、比較的丁寧なナゲによる調整が行われている。	淡黄色。
287	*	土師質土器 小 杯	6.9 2.1 — —	平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	黄茶褐色。
288	*	*	7.1 2.1 — 5.4	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。	*	淡褐色。
289	*	*	6.1 2.2 — 2.9	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄色。
290	*	*	6.1 1.8 — 3.4	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。 口縁部はわずかに凹出し、上方に立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。 口縁部ヨコナデ。	*
291	*	土師質土器 杯	11.7 3.4 — 5.9	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄褐色に赤褐色が混じる。
292	*	*	11.3 4.1 — 5.4		*	内外面にロクロ痕。
293	*	*	11.0 4.1 — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 口縁部は丸取りされている。	内面、ロクロ痕。 底部、回転糸切り痕。	淡黄褐色。 磨滅が著しい。
294	*	*	12.3 4.1 — 5.0	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内面に若干ロクロ痕が残る。	淡黄褐色。 磨滅が著しい。
295	*	*	11.3 4.6 — 4.7	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 口縁部ヨコナデ。	淡黄色。
296	*	*	11.3 4.3 — 4.0	*	*	内外面、ロクロ痕。
297	*	*	11.7 3.8 — 5.2	*	内面ロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄色。

測定番号	産種番号	器 種	口径 器高 胴径 成径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
298	SD 2	土師質土器 杯	12.1 3.4 — 5.6	体部は直線的に外上方に立ち上 がり口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	淡黄色。
299	*	*	12.0 3.9 — 4.9	*	*	*
300	*	*	12.2 3.5 — 5.6	体部は中位で屈折し、口縁部は、 外上方へ開いた立ち上がりを示 す。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。 内面に指頭圧痕。	*
301	*	*	12.2 3.8 — 4.8	体部は、直線的に外上方へ立ち 上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕が残る。	淡黄褐色。
302	*	*	13.7 ( 3.8 ) — —	*	*	黄褐色。
303	*	*	11.8 ( 2.9 ) — —	体部はやや外反気味に外上方へ 立ち上がる。	*	淡赤褐色。 磨減が著しい。
304	*	*	11.5 ( 2.7 ) — —	体部は直線的に外上方に立ち上 がり、口縁部は面をなし、上 方につまみ上げられる。 器壁が他と比べて薄い。	*	淡黄褐色。
305	*	*	( 2.1 ) — 5.5	体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	内面にロクロ痕が残る。 底部回転糸切り痕が残る。	淡黄色。
306	*	*	( 2.8 ) — 5.1	*	内面、ロクロ痕。	*
307	*	*	( 4.0 ) — 4.6	*	*	黄褐色。
308	*	*	9.2 2.5 — 5.5	*	*	淡黄灰色。
309	*	*	( 1.4 ) — 6.5	*	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕が残る。	茶褐色。
310	*	*	( 2.9 ) — 4.8	*	内面、ロクロ痕。	淡黄褐色。
311	*	*	( 2.5 ) — 4.4	*	*	淡黄褐色。
312	*	*	( 3.4 ) — 5.0	*	*	*

脚注番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
313	SD 2	土師質土器 杯	( 3.3 ) — 4.0	体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	内外面、ロクロ目有り。	淡黄色。
314	*	*	( 2.5 ) — 4.6	*	*	淡黄褐色。
315	*	*	( 2.6 ) — 5.2	*	内面にロクロ痕。	淡褐色。
316	*	*	( 2.9 ) — 5.3	*	内面にロクロ痕。 底部面転承切り痕。	淡黄褐色。
317	*	*	( 2.8 ) — 5.4	*	内面ロクロ痕有り。	淡黄色。
318	*	*	12.0 — 4.2 — 4.8	*	内面ロクロ痕有り。 底部面転承切り痕。	淡黄色。 底部に黒付着。
319	*	*	( 4.2 ) — 3.7	*	*	淡黄褐色。 砂粒はほとんど 含まない。
320	*	*	( 3.5 ) — 3.8	*	*	淡褐色。
321	*	*	12.2 — 4.0 — 5.8	*	*	淡黄色。
322	*	*	( 2.4 ) — 5.4	*	*	*
323	*	土師質土器 罎	16.8 ( 9.3 ) — —	底部から内湾して、体部は上方 に立ち上がり、肩部は、外上方 に突出する。口縁部は内傾して 立ち上がり、肩部は丸くおさめ る。	口縁部、肩部はヨコナデで、肩 部に指痕残が残り、体部外面 肩部以下に印目、内面はナデ調 整。	にぶい棕色。 体部外面肩部下 に黒付着。
324	*	*	20.0 ( 8.5 ) — —	体部は内湾して上方に立ち上 がり、肩部は外上方に突出する。 口縁部は内傾して立ち上がり、 肩部は内傾する面をなす。	口縁部、肩部は内外面ヨコナ デ、体部は右上がりの印目が施 され、体部内面ナデ調整。	内面、淡棕色。 外面にぶい棕色。 体部外面肩部下 に黒付着。
325	*	*	19.5 ( 7.1 ) — —	肩部は断面三角形を呈し、外上 方に突出する。口縁部は、内傾 して立ち上がるが、肩部は肥厚 し広く内傾する面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ、肩部外 面に指痕残が残り、体部外面 は右上がりの印目、内面はナデ 調整。	暗棕色。 肩部から体部に かけて黒付着。
326	*	*	30.2 ( 10.7 ) — —	体部は大きく内湾して立ち上 がり、肩部は断面三角形で外上 方に突出する。口縁部は内傾して 立ち上がり、肩部は内傾する面 をなす。	口縁部と肩部は強いヨコナデ、 体部は外面右上がりの印目、内 面はナデ調整。	褐色。 肩部以下に黒付 着。
327	*	*	22.2 ( 9.9 ) — —	*	口縁部と肩部は内外面ヨコナ デ。 体部外面は、上位に指痕残、 中位に右上がりの印目、体部内 面に指痕残。	褐灰色。 体部に黒付着。

図番号	遺構番号	器種	口径 (cm)	口縁 器高 胴径 底径	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
328	SD 2	土師質土器 鍋	19.7 (4.1)	—	肩部は外上方に突出し、口縁部は内傾して立ち上がる。肩部は内傾した面をなす。	口縁部外面、肩部はヨコナデ。体部外面、右上がりの印目。内面ナデ調製。	にぶい褐色。肩部下に煤付着。
329	*	*	22.2 (11.4)	—	体部は内湾し、上方に立ち上がり、肩部は外上方に突出する。口縁部は内傾して立ち上がり、肩部は若干平厚し、内傾する面を持つ。	口縁部、肩部は内外面ヨコナデで肩部には指頭圧痕が残る。体部外面は右上がりの印目、内面はナデ調製。	褐色。
330	*	*	33.8 (16.1)	—	体部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は肥厚する。	口縁部、肩部の外面に指頭圧痕が残る。内面は横位のハケ目調製で、口縁部内面には、若干指頭圧痕が残る。	淡黄褐色。体部外面の一部に煤付着。
331	*	*	35.0 (9.0)	—	口縁部は内傾する。口縁部は外反する。	口縁部内面、体部下位に若干指頭圧痕が残る。内面体部下位に指頭圧痕。	*
332	*	土師質土器 釜	15.6 (10.8)	—	胴部上位から口縁部にかけて内傾した立ち上がりを示す。口縁部は肥厚する。	口縁部外面ヨコナデ。外面口縁部下と胴部内外面に指頭圧痕が残る。肩部内面に粘土結痕が観察できる。	にぶい黄褐色。
333	*	瓦質土器 搾 鉢	25.4 (4.3)	—	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は若干肥厚して、唇部は外傾する。指おさえの片口。	外面に指頭圧痕有り。内面に8本1単位の条痕が施され、その上に横ハケが施される。	黒灰色。
334	*	瓦質土器 鍋	19.0 (4.6)	—	胴部は内湾して上方へ立ち上がり、胴部で屈曲し、外反した口縁部になっている。	胴部と胴部に指頭圧痕有り。	
335	*	*	(18.8) (8.3)	—	胴部は大きく内湾して、胴部で屈曲し上方に立ち上がる。肩部は水平面をなす。	横方向のナデ。	
336	*	*	18.8 (4.7)	—	内湾した胴部から、胴部で屈曲し、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。	口縁部内外面ともヨコナデ。	
337	*	*	20.6 (4.3)	—	内傾した胴部から、やや外反した口縁部になっている。肩部はわずかに外傾した面をなす。	口縁部ヨコナデの後、指頭圧痕が残る。口縁縁部に浅い一糸の凹線。	胴部外面に煤付着。
338	*	*	17.8 (6.4)	—	内傾した胴部から、直立した口縁部になっている。肩部は水平面をなす。	ロクロナデ。	内面、灰色。外面、黒灰色。
339	*	*	11.4 (5.8)	—	大きく内湾した胴部から胴部で屈曲した後、やや外反気味の口縁部になっている。肩部は外傾する面をなす。	内面ヨコナデ。胴部に指頭圧痕。	
340	*	*	31.6 (5.7)	—	*	内外面ヨコナデ。胴部に指頭圧痕。	
341	*	*	23.2 (6.5)	—	大きく内湾した胴部から、胴部で屈曲した後、口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。肩部は外傾する面をなす。	内面、ヨコナデ。外面、胴部に指頭圧痕。	
342	*	*	25.0 (6.3)	—	体部は大きく内湾し、胴部で屈曲して、外反した口縁部になっている。肩部は、外傾した面をなす。	体部内面に一部ヨコナデ。胴部外面、体部内面に指頭圧痕。口縁縁部に一糸の浅い凹線。	

辨別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
343	SD 2	瓦質土器 罎	22.6 (11.5)	大きく内湾した体部から、頸部で屈曲した後、外反気味の口縁部にいる。肩部は水平面をなす。	体部外面に指頭圧痕。	
344	*	*	19.4 ( 3.6)	大きく内湾した体部から、頸部で屈曲した後、外反気味の口縁部にいる。肩部は外傾した面をなす。	口縁部内外面ヨコナデの後、指頭圧痕が残る。口縁部部にナデによる凹線がみられる。	
345	*	瓦質土器 釜	22.4 ( 7.1)	口縁部は内傾して立ち上がる。踵は、水平に長く突出。口縁部部は内傾する面を持つ。	胴部内面ハケ調整の後ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。踵部は、ナデにより凹状。	鈴以下に僅存着。
346	*	*	20.5 ( 7.2)			
347	*	播 鉢	( 5.6) 18.8	本胴部の平坦な底部から、外上方に開く体部を持つ。	9本単位の糸網。 ロクロナデ。	内面、赤灰色。外面、にぶい赤褐色。備前焼。
348	*	*	27.2 ( 5.0)	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は肥厚して上方に立ち上がる。口縁部外面に一条の凹線、内面に縦段を有す。	*	備前焼。
349	*	*	( 4.2) 17.4	本胴部の底部から体部は直線的に立ち上がる。	糸網の単位は不明。 ロクロナデ。	*
350	*	*	27.0 ( 4.3)	体部は直線的。口縁部は肥厚して、下方にわずかに拡張される。	*	*
351	*	*	24.8 ( 4.6)	体部は直線的で、口縁部は上下に拡張される。	*	*
352	*	*	29.6 ( 6.6)	直線的に立ち上がった体部が外反気味に口縁部にいる。口縁部は上方に拡張され、内傾する。	*	*
353	*	*	( 8.1)	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は拡張され、上方に立ち上がる。	*	*
354	*	*	21.6 ( 4.0)	体部は直線的で、口縁部は肥厚して、下方に拡張される。	*	*
355	*	壺	14.2 ( 7.4)	内傾した肩部から、頸部は屈曲して直立し、玉線状の口縁部にいる。	ロクロナデ。 肩部に自然釉がかかる。	*
356	*	壺	33.0 ( 6.0)	頸部は、直立し、口縁部は玉線状を呈する。	ロクロナデ。	*
357	*	*	35.0 ( 7.8)		*	*

標本番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
358	SD 2	壺	40.6 (7.9)	内傾した胴部から居直して、胴形は直立、玉縁状の口縁部にある。	ロクロナデ。	備前焼。
359	*	小 壺	— (8.2)	胴部は広く、胴形のみ球形を呈す。	ロクロナデ。	瀬戸。
360	*	青 磁 甗	14.0 (4.8)	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にある。胴部は丸くおさめる。	口縁部に1本の沈線と、片切彫りで幅広い葉弁文が施される。	青緑色釉。 胎土、灰色。
361	*	*	13.3 (4.9)	*	外面口縁部に雷文帯、体部に葉弁文が施される。内外面貫入あり。	深い青緑色釉。 胎土、灰白色。
362	*	*	14.8 (4.3)	*	口縁部内外面に雷文帯が施されるが、外面は磨滅が著しくはっきりしない。体部内面に文様が施される。	淡緑黄色釉。 胎土、淡灰褐色。
363	*	*	(14.6) (4.9)	*	外面にヘラ先による線描細葉弁文が施される。縦線と刺頭とが葉弁の単位を意識している。内外面貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
364	*	*	13.8 (5.5)	*	*	*
365	*	*	14.3 (4.5)	*	*	*
366	*	*	13.2 (5.6)	*	体部外面にヘラ先による葉弁が施される。山形の刺頭は省略される。内外面貫入あり。	*
367	*	*	12.9 (4.5)	*	口縁部外面に雷文帯、体部外面に幅広い葉弁が施されている。	*
368	*	*	13.6 (4.5)	*	無文である。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色で部分的に赤褐色に発色している。
369	*	*	15.0 (2.8)	口縁部は外反する。	無文で、内外面貫入あり。	淡青緑色釉。 胎土、灰色。
370	*	*	16.6 (2.1)	*	無文である。	青緑色釉。 胎土、乳白色。
371	*	*	(13.6) (4.0)	体部は、内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。	無文で、内外面貫入あり。	灰緑色釉。 胎土、灰色。
372	*	*	— (2.8)	底部の器壁は厚く、比較的高くしっかりとした高台を持つ。高台内の隅りは浅い。	見込に磨滅あり。目録が二ヶ所正められる。内外面貫入あり。葉付、外底は露胎し、赤褐色に発足する。	青緑色釉。 胎土、灰色。
			6.0			

押印番号	遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
373	SD 2	青磁 碗	( 3.3 ) 6.1	底部の胎線が厚く高台部もしっ かりとして安定感がある。体部 は内湾気味に外上方に立ち上る 。	見込に数ヶ所目跡が残る。 外底は、軸の目跡に軸を削り取 られ、それ以外の全面に施軸さ れる。内外面に貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。 底胎線、赤褐色。
374	・	・	( 2.2 ) 5.2		高台臺付まで施軸され、高台内 及び外底は磨削する。見込に界 線あり。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
375	・	・	( 3.4 ) 4.9	肩部を斜めに削り取り、臺付を 狭くした高内を持ち、器壁の厚 い底部から、体部は、内湾して 立ち上がる。	軸は、臺付を越えて、高台内面 途中までかかり、外底は無軸。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
376	・	・	( 2.6 ) 7.0	高台内面を斜位に削り取り、臺 付を狭くしている。体部は内湾 して外上方に立ち上がる。	見込中央部は円形に施軸されず 磨削。軸は、一部臺付を越えて、 外底までかかるが、大部分の外 底は磨削。内外面に貫入あり。 磨削部部に砂遺着。	薄い青緑色釉。 胎土、灰色。
377	・	青磁 盤	( 3.5 ) 11.0	底面は厚く、体部は大きく開い て、外上方に立ち上がる。臺付 は、丸くおさめられる。	軸は 1mm の厚さで施され、臺付 を越えて外底までかかる。外底 はその後、軸の目跡に軸を削り 取られる。	濃緑色釉。 胎土、白色。 磨削部は赤く発 色。
378	・	白磁 皿	( 1.4 ) 3.8	高台アーチ状を呈す。		白濁色。
379	・	・	( 9.0 ) 2.2 4.5	アーチ状の高台を有する底部か ら、体部は内湾気味に外上方へ 立ち上がる。	全面に施軸され、見込に目跡が 三ヶ所確認される。	灰白色釉。 胎土、灰白色。
380	・	土 罐	全 長 3.5 直 径 8.5 重量(g) 2.5	土師質の土罐で円筒形を呈す る。ほぼ中央部に直径4.5mmの 円孔を穿つ。		
381	・	・	全 長 4.1 直 径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径2.5mm。		
382	・	・	全 長 4.8 直 径 1.3 重量(g) 7.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径6mm。		
383	・	・	全 長 ( 2.1 ) 直 径 0.9 重量(g) 2.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径4mm。		
384	・	・	全 長 3.8 直 径 0.9 重量(g) 4.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径3mm。		
385	・	・	全 長 3.4 直 径 0.8 重量(g) 2.5	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径4mm。		
386	・	・	全 長 3.2 直 径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径3mm。		
387	・	・	全 長 5.5 直 径 1.1 重量(g) 6.0	土師質の土罐で円筒形を呈す る。円孔は直径4.5mm。		

押出番号	遺構番号	器種	口徑 器高 胴徑 底徑 法差 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
388	SD 2	土 罎	全 長 3.2 直 径 0.7 重量(g) 2.0	土師質の土罎で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径3mmの円孔を穿つ。		
389	+	+	全 長 3.8 直 径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径4mm。		
390	+	+	全 長(3.3) 直 径 1.0 重量(g) 2.5			灰白色。
391	+	+	全 長 3.1 直 径 1.0 重量(g) 3.5	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径3mm。		灰色。
392	+	+	全 長 3.6 直 径 0.8 重量(g) 2.5			
393	+	+	全 長 3.5 直 径 0.9 重量(g) 3.0			黒色。
394	+	+	全 長 3.1 直 径 1.0 重量(g) 3.0			灰色。
395	+	+	全 長(3.0) 直 径 0.9 重量(g) 2.5			
396	+	+	全 長 3.6 直 径 0.9 重量(g) 2.5	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径4mm。		
397	+	+	全 長 3.3 直 径 0.8 重量(g) 2.5	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径2mm。		
398	+	+	全 長 3.6 直 径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径3mm。		
399	+	+	全 長(4.3) 直 径 1.8 重量(g) 12.5			
400	+	+	全 長(3.9) 直 径 1.0 重量(g) 2.5			
401	+	+	全 長 4.3 直 径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土罎で円筒形を呈する。円孔は直径3.5mm。		
402	+	瓦質土器 火 鉢	— ( 8.5 ) — —	口縁部は内側に水平にのびる。	二重の尖帯中に斜格子の文様が つく。	

標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
403	SD 2	皿	— ( 1.3 ) — 4.8	体部は大きく開く。	見込、絶の目状輪ハギ。 墨付に彩着。	伊万里系。
404	*	猪口	7.6 ( 3.1 ) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。		白色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
405	*	皿	12.0 4.0 — 4.6	前面逆台形のしっかりとした高台を持つ底部から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外折し、肩部は上方へ肥厚する。	輪が、体部中位から下位にかかる。 見込に目録が5ヶ所残る。底部から高台にかけては露胎。	磨洋焼。
406	*	碗	9.9 7.1 — 5.0	高台は断面長方形でやや開き気味である。体部は内湾して立ち上がり、やや外折して口縁部にいたる。	体部下位まで輪が施され、底部から高台にかけて、化粧がけがなされる。	唐津。
407	*	*	— ( 6.2 ) — 4.8	高台内を斜めに削られた、断面三角形の高台を有す。体部は内湾気味に立ち上がり、直線的に上方に延びる。	全面に施釉され、墨付のみ輪が磨り取られる。 墨付に彩が着。	京焼系。
408	SD 3	土師質土器 小皿	6.2 1.4 — 4.4	体部は、直線的に立ち上がる。口縁部は即取りされ、外側する面をなす。	ロクロナゲ。 底部回転糸切り痕あり。	
409	*	土師質土器 皿	10.6 3.0 — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は即曲してやや外反する。	口縁部内外面ロコナゲ。 体部内外面指頭圧痕あり。	
410	*	*	14.0 3.9 — —			
411	*	土師質土器 杯	— ( 1.7 ) — 4.8	体部は直線的に立ち上がる。	内面にロクロ痕が残る。 底部回転糸切り痕あり。	
412	*	播鉢	23.5 ( 3.8 ) — —	体部は直線的で口縁部は上下に拡張される。	ロクロナゲ。	磨洋焼。
413	SD 4	土師質土器 皿	14.3 ( 2.3 ) — —	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ロコナゲ。 体部指頭圧痕が残る。	
414	*	播鉢	— ( 8.2 ) — 13.2	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	ロクロナゲ調整の後、指頭圧痕が残る。底部未調整。 3本単位の糸轆が下から上へ施される。	
415	*	青磁 模花皿	13.0 ( 2.0 ) — —	体部下位で屈曲し、大きく外反して口縁部にいたる。肩部は、輪花状を呈する。	口縁部内外面に3本の化粧を模花状に配する。内外面貫入あり。	
416	*	青磁 碗	— ( 3.3 ) — 5.4	高台は断面長方形で、肩部外側を削り、墨付を狭くしている。高台内の削りは、やや浅い。体部は内湾気味に立ち上がる。	輪は高台外までかかる。 内外面貫入あり。	緑色釉。 胎土、灰白色。
417	SD 7	土師質土器 皿	12.6 2.5 — —	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は若干外反する。	口縁部ロコナゲ。 体部内外面指頭圧痕。	

押印番号	造模番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
418	SD 7	土師貫土器 罎	15.5 2.7 — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下はナダのため肥厚する。	口縁部ヨコナダ。 体部内外面指線圧痕。	
419	+	+	12.0 ( 2.5) — —	*	*	淡褐色。
420	+	+	13.2 ( 2.2) — —	口縁下はヨコナダのため肥厚する。	*	淡黄褐色。
421	+	+	11.3 ( 2.7) — —	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下、ナダのためやや肥厚する。	*	灰白色。
422	+	土師貫土器 小 杯	6.8 2.2 — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
423	+	+	3.1 6.0 2.4 — —	*	*	
424	+	+	2.8 6.7 2.3 — —	*	*	
425	+	+	2.7 6.5 2.3 — —	*	*	
426	+	+	2.4 6.6 2.4 — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。	内面にロクロ痕。	
427	+	+	3.0 6.6 2.3 — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
428	+	+	3.9 6.2 2.2 — —	*	*	
429	+	+	2.9 6.3 2.1 — —	*	内面にロクロ痕。	
430	+	+	3.0 6.4 2.1 — —	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部にいる。	内面ロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
431	+	+	2.8 6.1 2.1 — —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	内面にロクロ痕。	
432	+	+	3.6 6.3 2.1 — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	*	
			2.4			

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
433	SD 7	土師質上器 小 杯	6.4 2.3 — 3.0	胴部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	内外面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
434	*	*	6.7 2.1 — 2.8	*	内面にロクロ痕。	
435	*	*	6.7 2.2 — 2.9	*	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
436	*	*	6.5 2.1 — 3.0	*	*	
437	*	*	6.9 2.2 — 2.9	*	*	
438	*	*	6.5 2.0 — 2.8	*	*	
439	*	*	6.2 2.0 — 2.9	*	*	
440	*	*	6.5 2.1 — 3.0	*	内面にロクロ痕。	
441	*	*	6.2 1.9 — 2.4	*	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
442	*	*	6.5 2.3 — 2.7	*	*	淡褐色。
443	*	*	6.4 2.5 — 2.6	*	*	*
444	*	*	6.5 2.2 — 2.8	*	*	
445	*	*	6.4 2.1 — 2.8	*	*	
446	*	*	6.6 2.3 — 3.3	*	*	
447	*	*	6.6 2.1 — 2.8	*	*	

洋画番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
448	SD 7	土師質七器 小 杯	6.2 2.3 — 2.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転承切り痕あり。	
449	*	*	6.8 2.0 — 3.3	*	*	
450	*	*	6.8 2.0 — 3.2	*	*	
451	*	*	6.6 1.9 — 3.6	*	*	
452	*	*	7.3 2.3 — 3.1	*	*	
453	*	*	6.5 2.4 — 3.2	*	*	
454	*	*	7.8 2.1 — 3.2	*	*	
455	*	*	7.2 2.4 — 2.5	*	*	
456	*	*	6.7 2.3 — 2.5	*	*	
457	*	*	8.0 2.0 — 3.0	*	*	
458	*	*	6.6 2.0 — 2.8	*	*	
459	*	*	6.0 2.2 — 2.2	*	*	
460	*	*	6.1 2.1 — 3.4	*	*	
461	*	*	6.3 2.3 — 2.8	*	*	
462	*	*	6.1 2.0 — 3.0	*	*	

押出番号	産物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (mm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
463	SD 7	土師質土器 小 杯	6.2 2.1 — 3.0	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
464	*	*	6.1 2.1 — 3.2	*	内面にロクロ痕。	
465	*	*	7.9 2.2 — 3.2	*	*	
466	*	*	6.6 1.9 — 3.3	*	*	
467	*	*	5.8 2.5 — 3.1	*	*	
468	*	*	6.8 2.0 — 3.0	*	*	
469	*	*	6.9 2.5 — 3.8	*	*	
470	*	*	7.0 (1.6) — —	*	*	
471	*	*	(2.1) — 3.0	体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
472	*	*	(1.7) — 3.8	*	*	
473	*	*	6.5 2.3 — 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。	*	
474	*	*	6.7 2.1 — 3.0	*	*	
475	*	*	7.3 2.4 — 3.1	*	*	
476	*	*	7.3 2.2 — 3.8	*	*	褐色。
477	*	*	6.6 1.9 — 3.5	*	*	*

秤皿番号	通稱番号	器 種	口徑 容高 胴徑 底徑 法量 (mm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
478	SD 7	土師質土器 杯	11.9 4.5 — 4.0	胴部は直線的に外上方へ立ち上 がり、腰部を丸くおさめた口縁 部にいる。	内面にロクロ痕。 底部面転承切り痕あり。	
479	*	*	11.2 4.0 — 3.8	*	*	
480	*	*	11.0 3.8 — 3.8	*	*	
481	*	*	11.0 3.8 — 3.8	*	*	
482	*	*	11.6 3.7 — 3.7	*	内面にロクロ痕。	
483	*	*	11.2 4.2 — 4.2	*	内面にロクロ痕。 底部面転承切り痕。	
484	*	*	12.3 4.0 — 4.1	*	*	
485	*	*	11.5 3.9 — 3.6	*	内面にロクロ痕。	
486	*	*	10.9 3.2 — 3.4	*	*	
487	*	*	12.6 3.9 — 3.8	*	*	
488	*	*	11.6 3.8 — 3.4	*	*	
489	*	*	11.4 4.2 — 4.3	*	*	
490	*	*	10.6 4.2 — 3.6	*	*	
491	*	*	12.9 3.7 — 4.2	*	*	
492	*	*	12.8 4.4 — 4.5	*	*	

杯同番号	流槽番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
493	SD 7	土師質土器 杯	11.4 4.0 — 4.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、肩部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。	
494	*	*	12.4 3.8 — 4.4	*	*	
495	*	*	11.3 4.5 — 3.4	*	*	
496	*	*	13.0 4.1 — 4.2	*	*	
497	*	*	11.8 4.0 — 3.4	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、肩部を丸くおさめた口縁部にいたる。	*	
498	*	*	12.4 4.1 — 4.0	体部は、わずかに外反気味の立ち上がりを示す。	*	
499	*	*	10.8 3.8 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、肩部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 体部内面に帯書が散見できるが意味不明。	
500	*	*	10.5 4.1 — 3.7	体部は直線的で、口縁部は、やや内湾気味に立ち上がる。	内面にロクロ痕が残る。	
501	*	*	11.6 3.9 — 3.5	*	内外面にロクロ痕。	
502	*	*	10.6 3.5 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転痕あり。	
503	*	*	11.7 4.2 — 4.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや内湾して口縁部にいたる。	*	淡黄褐色。
504	*	*	10.8 3.7 — 3.9	*	*	*
505	*	*	11.2 4.1 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	*	*
506	*	*	10.5 3.8 — 4.0	*	*	淡褐色。
507	*	*	11.1 4.0 — 3.8	*	*	*

押出番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
508	SD 7	土師質土器 杯	11.4 4.0 — 3.6	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、丸くおさめた口縁部に いたる。	内面にロクロ痕あり。	内面、淡褐色。 外面、褐色。
509	*	*	11.9 3.7 — 3.8	*	*	淡褐色。
510	*	*	11.2 3.8 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、やや内湾状時に、口縁部 にいたる。	内面にロクロ痕あり。 底面回転痕あり。	淡褐色。 砂粒をほとんど 含まない。
511	*	*	10.8 4.2 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。	*	淡褐色。
512	*	*	11.0 4.0 — 4.0	*	*	*
513	*	*	11.0 4.2 — 3.7	*	*	*
514	*	*	10.5 3.6 — 3.7	*	*	淡赤褐色。
515	*	*	10.7 4.3 — 3.8	*	*	淡褐色。
516	*	*	11.0 3.9 — 3.7	*	*	*
517	*	*	12.0 3.6 — 3.7	体部は、やや内湾状に外上方 へ立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁端部は外傾した面をなす。	*	*
518	*	*	11.8 3.7 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。端部は 丸くおさめる。	*	*
519	*	*	10.6 4.1 — 4.0	*	*	*
520	*	*	11.5 4.2 — 3.5	*	*	*
521	*	*	11.6 4.5 — 4.0	*	*	*
522	*	*	11.9 3.7 — 3.8	体部は内湾して外上方に立ち上 がり、丸くおさめた口縁部に いたる。	*	*

標記番号	遺構番号	器 種	口径 容高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
523	SD 7	土師質土器 杯	11.2 4.2 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁部にいたる。頸部は 丸くおさめらる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	灰褐色。
524	*	*	11.2 4.0 — 4.0	*	*	*
525	*	*	11.2 3.9 — 3.8	*	*	*
526	*	*	12.8 4.5 — 4.5	*	*	*
527	*	*	11.1 4.2 — 3.3	*	*	*
528	*	*	8.6 3.2 — 3.0	*	内面にロクロ痕。	淡黄褐色。 磨滅が著しい。
529	*	*	11.7 4.1 — 3.6	*	*	*
530	*	*	11.5 3.2 — 3.7	*	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	灰白色。
531	*	*	11.6 4.1 — 3.4	*	*	*
532	*	*	11.6 3.9 — 4.1	*	*	*
533	*	*	12.6 ( 3.1) — —	体部は直線的で、口縁部は丸 くおさめられる。	内面にロクロ痕。	
534	*	*	12.8 ( 4.0) — —	*	*	
535	*	*	12.2 ( 2.7) — —	*	*	淡黄褐色。
536	*	*	12.0 3.6 — 4.1	体部は内湾して外上方に立ち上 がり口縁部にいたる。頸部は外 傾した面をなす。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	*
537	*	*	( 2.4) — 3.7	体部は、直線的に外上方へ立ち 上がる。	内面にロクロ痕。	

標識番号	遺構番号	器種	口径 器高 器径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
538	SD 7	土師質土器 杯	( 3.3 ) — 3.6	体部は数線的に外上方へ立ち上 がる。	内面にロクロ痕。 底形は転糸切り痕あり。	
539	*	*	( 3.0 ) — 3.6	*	*	
540	*	*	( 3.1 ) — 3.5	*	*	
541	*	*	( 1.7 ) — 5.5	*	内面にロクロ痕。	
542	*	*	( 3.1 ) — 4.3	*	*	
543	*	*	( 3.2 ) — 4.5	*	*	
544	*	*	( 2.7 ) — 3.7	*	*	
545	*	*	( 3.0 ) — 4.0	*	*	
546	*	*	( 1.9 ) — 3.5	*	*	
547	*	*	( 2.6 ) — 4.0	*	*	
548	*	*	( 2.2 ) — 3.6	*	*	
549	*	*	( 3.0 ) — 4.6	*	*	
550	*	*	( 2.1 ) — 3.4	*	*	
551	*	*	( 2.7 ) — 4.0	*	*	
552	*	*	( 3.6 ) — 4.1	*	*	

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
553	SD 7	土師質土器 杯	11.3 4.1 — 3.9	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	淡褐色。
554	*	*	10.9 4.2 — 3.8	*	*	*
555	*	*	11.2 4.1 — 3.8	*	*	*
556	*	*	( 2.8) — 3.9	体部は内湾気味に立ち上がる。	*	*
557	*	*	( 3.0) — 3.8	体部は直線的に立ち上がる。	*	*
558	*	*	( 3.3) — 3.8	体部は内湾気味に立ち上がる。	*	*
559	*	*	( 2.7) — 4.0	*	内面にロクロ痕あり。	*
560	*	*	( 2.1) — 3.9	*	*	*
561	*	*	( 2.8) — 3.7	*	*	*
562	*	*	( 2.9) — 3.7	体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	*	*
563	*	*	( 2.3) — 3.5	*	*	*
564	*	*	( 3.3) — 3.7	*	*	*
565	*	*	( 3.0) — 3.5	*	*	*
566	*	*	( 2.7) — 5.1	*	*	*
567	*	*	( 2.5) — 4.0	*	*	*

標記番号	透視番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
568	SD 7	土師質上器 杯	( 2.5 ) 4.3	胴部は、直線的に外上方へ立ち 上がる。	内面にロクロ痕あり。	
569	*	*	( 2.7 ) 4.0	*	*	
570	*	*	( 3.6 ) 4.0	*	*	
571	*	*	( 2.7 ) 4.2	*	*	
572	*	*	( 2.4 ) 3.6	*	*	
573	*	*	( 2.8 ) 4.6	*	*	
574	*	*	( 2.9 ) 3.7	*	内外面にロクロ痕。	
575	*	*	( 2.2 ) 5.3	*	内面にロクロ痕。 底部回転余切り痕。	
576	*	*	( 2.9 ) 3.4	*	内面にロクロ痕。	
577	*	*	( 2.5 ) 4.4	*	内面にロクロ痕。 底部回転余切り痕。	淡黄褐色。
578	*	*	( 1.5 ) 4.2	*	*	*
579	*	*	( 2.1 ) 5.2	*	*	*
580	*	*	( 2.5 ) 3.8	*	*	*
581	*	*	( 1.6 ) 3.7	*	内面にロクロ痕。 底部回転余切り痕。 底部に平行仔痕あり。	*
582	*	*	( 3.2 ) 3.5	*	内面にロクロ痕。 底部回転余切り痕。	淡棕色。

標記番号	選別番号	器 種	口径 器高 刷径 実径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
583	SD 7	土師質土器 杯	( 3.0 ) — 3.2	体部は直線的に立ち上がる。	内面にロクロ痕あり。	
584	*	*	( 2.7 ) — 4.0	*	*	
585	*	*	( 3.1 ) — 4.3	*	*	
586	*	*	( 1.9 ) — 4.0	*	*	淡黄褐色。
587	*	*	( 3.0 ) — 4.4	*	*	*
588	*	*	( 2.9 ) — 4.4	*	*	淡褐色。
589	*	*	( 3.2 ) — 3.7	*	*	*
590	*	*	( 2.0 ) — 4.2	*	内面にロクロ痕あり。 底部回転承切り。	*
591	*	*	( 2.1 ) — 3.8	*	内面にロクロ痕。	淡黄褐色。
592	*	*	( 1.9 ) — 3.8	*	*	*
593	*	*	( 2.1 ) — 4.2	*	内面にロクロ痕。 底部回転承切り。	
594	*	*	( 2.7 ) — 4.2	*	*	
595	*	*	( 3.2 ) — 4.4	*	内面にロクロ痕。	
596	*	*	( 3.6 ) — 3.9	*	内面にロクロ痕。 底部回転承切り。	淡黄褐色。
597	*	*	( 2.3 ) — ( 3.9 )	*	内面にロクロ痕。	

標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
598	SD 7	土師質土器 杯	( 1.9 ) — 3.9	胴部は内湾気味に立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄褐色。
599	*	*	( 2.0 ) — 3.2	胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	*	*
600	*	*	( 2.6 ) — 4.2	*	*	*
601	*	*	( 2.3 ) — 4.1	*	*	淡褐色。
602	*	*	( 2.2 ) — 3.8	*	*	*
603	*	*	( 2.1 ) — 3.7	*	内面にロクロ痕。 底形は転丸切り。 底面に平行浮痕有り。	*
604	*	*	( 2.2 ) — 3.7	*	内面にロクロ痕。	*
605	*	*	( 1.9 ) — 3.7	*	*	*
606	*	*	( 2.3 ) — 3.9	*	*	*
607	*	土師質土器 鍋	31.3 (10.3) — —	胴部で屈曲した後、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は水平面を成す。	内外面にハケ目が残る、口縁部外面に指頭圧痕がみられる。	
608	*	*	18.4 ( 5.8 ) — —	胴部は前面三角形、口縁部は内傾して立ち上がり、底部は内傾した面を成す。	口縁部内外面と胴部はヨコナデで仕上げられ、胴部に指頭圧痕が残る。胴部外側に叩目有り。	褐色。 胴部以下に灰付着。
609	*	*	19.8 ( 6.0 ) — —	*	*	にぶい褐色。 外面に灰付着。
610	*	*	17.4 ( 5.7 ) — —	*	*	*
611	*	*	22.2 ( 4.3 ) — —	*	*	*
612	*	*	10.6 ( 4.6 ) — —	胴部は前面三角形で外上方に突出する。口縁部は大きく内傾し、底部は内傾した面を持つ。	口縁部と胴部は強いヨコナデ。胴部は内外面ともナデ調整。	褐色。 外面胴部以下に灰付着。

押圖書号	造構番号	粉種	口径 器高 制径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
613	SD 7	播 鉢	23.4 (4.8)	口縁部は肥厚し、上方に拡張される。	糸線は10本単位。 ロクロナデ。	内面、黄灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
614	*	*	31.8 11.8 14.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味に口縁部にいる。口縁部は上下に拡張される。	糸線は3本単位。 ロクロナデ。	淡褐色。 備前焼。
615	*	*	35.4 (7.9)			内面、灰青色。 外面、赤褐色。
616	*	*	32.3 (7.2)	体部はやや外反して口縁部にいたる。口縁部は肥厚し上方に拡張される。	糸線は10本単位。 ロクロナデ。	内面、灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
617	*	*	26.2 (4.3)	口縁部は上方及び外方に拡張される。	糸線の部位は不明。 ロクロナデ。	内面、黄灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
618	*	*	(6.2)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	糸線は、7本単位。 ロクロナデ、指頭は横有り。	淡黄色。 備前焼。
619	*	*	7.6 10.4		糸線は、9本単位。 ロクロナデ。体部内面に指頭は横。	内面、黄灰色。 外面、にぶい赤褐色。 備前焼。
620	*	壺	36.0 (6.2)	口部は直立し、口縁部は、上縁状を呈する。	ロクロナデ。	灰赤色。 備前焼。
621	*	青磁 桜花皿	(2.9) 6.6	高台は、器部外面を面取りし、畳付を狭くしている。腰部で縦曲した後、体部は外反した立ち上がりを示す。	全面施釉施、外底は、蛇の目状に釉を削り取られる。内外面貫入有り。見込に1条の沈線と印花文有り。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。
622	*	青磁 碗	14.2 (3.9)	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部にいる。	体部外側に片切彫のヘク掻き重弁文。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
623	*	*	(4.6) 5.5	高台は断面長方形で、外面縁部は肥厚される。体部は内湾して立ち上がる。	体部に片切彫の重弁文。足込に一家の彫刻、それに覆まれて印花文が施される。	*
624	*	*	(2.8) 5.9	高台は断面長方形で内湾し、内外の両部は削られる。高台内の面は浅い。	釉は高台外面まで施され、畳付、高台内及び外底は露出する。見込は内面に釉を削り取る。	灰オリーブ色釉。 胎土、灰白色。
625	*	*	(3.3)	口縁部は反り示す。	内外面貫入有り。	明緑灰色釉。 胎土、白色。
626	*	*	13.4 (4.1)	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	貫入なし。	オリーブ灰色釉。 胎土、灰白色。
627	*	*	14.0 (2.7)	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、反りの口縁部にいる。	内外面貫入有り。	淡緑色釉。 胎土、白色。

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
628	SD 7	白磁 皿	10.0 2.7 — 4.2	高台はアーチ状を呈する。 体部は内湾外縁に外方に大きく 開いて立ち上る。	内外面に貫入有り。 臺付の一部を帯いて金肉に輪が 施される。見込に目録有り。	青味がかった白 色釉。 胎土は白色。
629	*	*	— (2.1) — 3.7	断面長方形で、やや外に開き気 味の高台を有し、体部は内湾し て外上方に立ち上がる。	不明。	胎土は灰白色。 洗成が極めて悪 く輪は磨製され ない。
630	*	天目茶碗	— (3.1) — 4.3	高台は内反りで、高台縁を水平 に割る。体部は内湾して外上方 に立ち上がる。	高台縁まで輪がかかり、外縁か ら高内輪にかけては磨製。	にぶい赤褐色 釉。胎土、灰白 色。裏胎部、赤 色あるいは棕色。 器口・裏底部。
631	*	土 鉢	全 長 4.6 直 径 1.7 重量(g) 7.5	土質質の土鉢で円筒形を呈す る。ほぼ中央部に直径5mmの円 孔を穿つ。		
632	*	*	全 長 (2.5) 直 径 1.5 重量(g) 5.0	土質質の土鉢で円筒形を呈す る。円孔は直径5mm。		
633	*	*	全 長 4.3 直 径 1.6 重量(g) 10.0	土質質の土鉢で円筒形を呈す る。円孔は直径3mm。		
634	*	瓦質土器 火鉢	— (4.5) — —	口縁部は内縁に水平にのびる。	口縁部外面に2本の突帯をめぐ らし、その突帯間を施文帯とし ている。	
635	*	*	— (5.0) — —	口縁部は上方に立ち上がる。		
636	SD 9	播 鉢	33.0 (7.7) — —	体部は真鍮的に外上方へ立ち上 がり。口縁部は肥厚し、上下に 拡張する。口縁部内面に浅い段 を有す。	高縁は?本單位。 口コナナダ。	内面、にぶい橙 色。 外面、にぶい赤 褐色。 黄褐色。 濃緑色釉。 胎土、灰白色。
637	*	青磁 種花皿	13.4 (2.1) — —	体部は厚壁で、凡層化した後、 外反して口縁部にいたる。口縁 部は種花形に割られる。	内外面に貫入有り。	
638	*	青磁 碗	— (3.1) — 4.5	高台は筒部内外を面取られ、臺 付を狭くする。高台内の割りは 浅い。体部は内湾して立ち上る。	体部外面に柳葉弁文、高台外面 と高台縁に各々一重の比喩。高 内内から外底にかけて磨製し、 それ以外の全面に施成される。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
639	*	土 鉢	全 長 (2.8) 直 径 1.5 重量(g) 5.7	土質質の土鉢で円筒形を呈す る。ほぼ中央部に直径3mmの円 孔を穿つ。		
640	*	碗	7.1 — 5.2	高台外面は垂直に、内面は斜め に深く削られる。腹縁が張り、 体部は内湾して立ち上がる。	臺付は輪が削り取られ、それ以 外の全面に施成される。 内外面に貫入有り。 見込及び臺付に砂浴着。	淡青色釉。 胎土、淡黄灰白 色。京焼系。
641	SD 13	土師質土器 皿	9.5 (2.1) — 5.6	体部は平直な底面から屈曲し て、直線的に外上方へ立ち上 る。	磨製不明。	淡黄褐色。 磨製が著しい。
642	*	*	17.8 1.9 — —	体部は大きく内湾外縁に開き、 口縁部は口コナナダのための外反す る。	口縁部は口コナナダ。 体部は丁寧なナダで仕上げる。	白色系。

神田番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
643	S D 13	土師質土器 皿	16.7 ( 1.7) — —	体部は大きく内湾気味に開き、 口縁部はヨコナデのための外反す。 — —	口縁部はヨコナデで仕上げられ、 体部内外面に指頭圧痕が残る。	白色系。
644	*	土師質土器 杯	— ( 2.4) — 5.0	— — — 体部は内湾気味に立ち上がる。	— — — 内面にロクロ痕、底部回転痕あり。	— — — 灰白色。
645	*	*	— ( 2.5) — 5.4	— — — 体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	— — — 内面にロクロ痕あり。	— — — 淡褐色。
646	*	*	— ( 2.7) — 5.0	— — — 体部は内湾気味に上方へ立ち上がり、口縁部は軽く内傾する。	— — — 内面にロクロ痕あり、 底部回転痕あり。	— — — 灰白色・白色に近い。
647	*	土師質土器 鍋	20.8 ( 8.2) — —	— — — 体部は内湾気味に上方へ立ち上がり、口縁部は軽く内傾する。	— — — 口縁部内外面ヨコナデ。	— — — 内面、淡黄褐色、 外面、淡赤褐色。
648	*	*	32.4 ( 8.5) — —	— — — 体部は内湾して外上方へ立ち上がり、ヨコナデのため口縁部下で一旦巻曲してから外反する。	— — — 口縁部、体部ともヨコナデで仕上げられる。	— — — 淡黄褐色、あるいは濃い褐色、 体部内外面に焼付痕。
649	*	土師質土器 釜	— — — —	— — — 胴部は内傾して胴部にいたり、 屈曲した後、口縁部は上方に立ち上がる。肩部に外耳が貼付される。	— — — 口縁部及び体部はナデにより仕上げられる。	— — — 淡黄褐色。
650	*	瓦 質 擂鉢	23.7 ( 5.0) — —	— — — 体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は、肩部は外傾する面を有する。	— — — 体部外面に指頭圧痕あり、 高縁は上から下へ抽され、単位は不明。	— — — 灰色。
651	*	瓦 質 鍋	16.4 ( 6.5) — —	— — — 口縁部は内傾し、肩部はわずかに内傾した面を有す。肩部に退化した鈎を持つ。	— — — 外面に指頭圧痕あり。	— — — 内面は灰色、 外面は灰白色。
652	*	*	10.6 ( 7.3) — —	— — — —	— — — —	— — — 灰白色。
653	*	*	19.2 ( 3.9) — —	— — — 内湾して上方に立ち上がってきた体部は、肩部で巻曲した後外反した口縁部にある。	— — — —	— — — 灰色。
654	*	擂鉢	— ( 5.3) — 15.9	— — — 米裏敷の平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	— — — 高縁は8本単位、 内外面ともロクロナデ、 内外面に指頭圧痕。	— — — 淡黄褐色、 磨削痕。
655	*	*	32.4 ( 9.9) — 18.5	— — — 体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上方へ延びられる。	— — — —	— — — 赤褐色、 磨削痕。
656	*	*	28.4 (10.5) — —	— — — 体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上方へ拡張される。 口縁部内面に浅い段を有す。	— — — 高縁は8本単位、 内外面ともロクロナデ、 口縁部外面に2条の凹線あり。	— — — 内面、濃い赤褐色、 外面、濃い赤褐色。
657	*	釜	33.8 ( 9.0) — —	— — — 胴部は直立し、口縁部は平縁状を呈す。	— — — ロクロナデ。	— — — 灰赤色。

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
658	SD 13	壺	27.3 (6.3)	胴部は直立して立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈す。	ロクロナデ。	にぶい赤褐色。 焼附焼。
659	*	壺	15.1 (5.5)			にぶい褐色。 焼附焼。
660	*	壺	34.0 (6.2)	口縁部は外傾気味に上方に立ち上がる、口縁部はN字状を呈する。	*	淡黄褐色。 安土焼。
661	*	小 壺	(5.9) 5.1	平頭な底部から胴部は大きく内湾して上方に立ち上がり、上胴部は内傾する。	胴部に自然軸。 底部回転糸切り。	内面、にぶい赤褐色。 外面、赤褐色。 胎土、灰白色。
662	*	天目茶碗	(4.9) 4.2	高台は内反りで高内輪を平並に深く削る。体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、くびれを持つ。	外面、胴部下位から高台にかけて露筋。	にぶい赤褐色。 胎土、灰白色。 焼附焼。
663	*	青 磁 碗	13.9 (4.8)	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部外面に縮漚弁文。 内外面に貫入有り。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
664	*	*	11.3 (4.6)		*	明緑灰色釉。 胎土、灰白色。
665	*	*	(2.8) 5.4	高台は肩部外面を面取りされ、裏付が狭くされている。高台内の削りが浅い。	裏付は軸が削り取られ、外底も靴ノ目状に軸が削り取られる。体部に蓮弁文有り。貫入がみられる。 裏付に粉塗着。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
666	*	*	(3.8) 5.5		裏付は軸が削り取られ、外底も靴ノ目状に軸が削り取られる。見込に一重の帯線。その中に印花がみられる。高台内面に粉塗着。	明黄緑色釉。 胎土、灰白色。
667	*	染付 碗	18.7 (5.8)	体部は内湾して外上方に立ち上がり、外反する口縁部にいたる。	体部外面、口縁部内外面に文様が淡青色に発色する。内外面貫入あり。	白色釉。 胎土、灰白色。
668	*	*	(2.8) 4.3	高台は外面積直。内面側面に削り取られ、見込中央部は彫厚する。体部は内湾して立ち上がる。	外底及び高台は露筋。高台脇に一重の帯線、見込に蓮の文様が、あわい青色に発色する。高台に粉塗着。	*
669	*	染付 皿	(2.0) 13.4	高台は、前向き三角形で外面端部は面取りされる。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	裏付及びその周辺は軸が削り取られる。裏面半の底で、裏底は青色に発色する。裏付、高台内に粉塗着。	白色釉。 胎土、白色。
670	*	土 鉢	全長 4.2 直径 1.7 重量 9-10.2	土質質の土鉢で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径5.5mmの円孔を穿つ。		
671	*	*	全長 3.9 直径 1.2 重量 9-5.0	土質質の土鉢で円筒形を呈する。円孔は直径4mm。		
672	*	火 鉢	— — —	体部は直線的に上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部外面に2条の染付帯線を有する。	内外面ともロクロナデ。	内外面とも黒色。

邦国番号	遺構番号	形 種	口徑 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
673	S D 13	皿	12.5 3.6 — 2.4	足底中央の器縁は厚い。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部にいる。	高外裏付近まで釉がかかる。見込縁の目状輪ハズ。洗付、高台盤に砂浴着。	青緑色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。
674	・	・	( 3.2) — 5.8	高外外面高部は面取られ、受けを狭くする。高内内は斜めに深く削られる。体部は内湾気味に立ち上がる。	外面高台盤まで施釉される。見込縁の目状輪ハズ。	明褐色釉。 胎土、淡黄褐色。 唐津焼。
675	・	天目茶碗	11.6 6.9 — 4.2	端部外面を面取られ、外に開く形状の高台を有する。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は一旦くびれて外反する。	外面胴部中位ぐらいまで施釉され、それ以下は露胎。	茶色褐色釉。 胎土、淡黄褐色。 唐津焼。
676	・	鉢	( 4.2) — 9.7	幅広く安定した断面逆台形の高内を有する。体部は内湾気味に立ち上がる。	灰赤色または白色の釉を内面に細毛で施る。内面と外周縁付まで施釉される。	外面緑赤灰色釉。 胎土、灰赤色。 唐津焼。
677	・	碗	14.6 ( 5.2) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいる。	内外面に貫入有り。	にぶい褐色釉。 胎土、淡褐色。
678	・	・	10.5 ( 6.8) — —	・	・	淡黄緑色釉。 胎土、灰白色。
679	S D 14	土師質土器 皿	13.3 ( 2.1) — —	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいる。	体部内外面に白頸土痕。	淡黄褐色。
680	・	・	12.7 2.1 — —	・	・	・
681	・	・	13.0 2.1 — 8.2	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいる。口縁部下はナデのため肥厚する。	体部内外面に白頸土痕。ヨコナデ調整。	・
682	・	・	11.3 1.9 — 6.0	体部は内湾して口縁部にいる。	体部内外面に白頸土痕。	褐色。
683	・	・	13.2 2.5 — —	体部は内湾して口縁部にいる。口縁部下はナデのため肥厚する。	体部内外面に白頸土痕。口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色。
684	・	・	12.2 1.7 — 7.4	・	・	・
685	・	土師質土器 杯	( 2.0) — 4.8	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にクロコ灰。底部回転糸切り。	・
686	・	土師質土器 鉢	17.2 ( 6.2) — —	胴部はわずかに内湾気味に上方へ立ち上がる。口縁部は内傾した面を成す。胴部に断面三角形の窪有り。	外面高部下に右上がりの印目有り。口縁部内外面、体部内面は、ヨコナデで仕上げられる。	内面、褐色。 外面、にぶい褐色。 外面に強状炭化物付着。
687	・	青磁 観花瓶	12.4 ( 2.0) — —	胴部で一旦屈曲した後、体部は外反して口縁部にいる。口縁部は種花形に割られる。	口縁部内面に3条の沈線がみられる。内外面、貫入有り。	透射色釉。 胎土、灰白色。

神田番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm)	口径器高 胴径 底径	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
688	SD 14	土 鉢	全 長 4.1 直 径 1.6 重 量(g) 5.0		土師質の土締で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径3.5mmの 口孔を穿つ。		
689	SD 15	土師質土器 杯	9.1 4.3 4.8		体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	高部頂部糸切り。	淡黄褐色。
690	*	土師質土器 釜	6.8 (7.6)		胴部上位は内湾し、内傾して胴 部位に屈曲、口縁部は直線的 に上方に立ち上がる。	ロクロナデ。	*
691	*	青 磁 甕	(1.3)	5.0	高台は外面端部を面取られ、促 付を狭くする。	外面は絶の目状に釉が削り取ら れる。見込円形輪ハキ。 見込に一葉の青線と印花有り。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
692	*	青 磁 甕	(2.1)	4.7	高台は断面三角形で、体部は内 湾の削りは浅い。体部は内湾気 味に立ち上がる。	高台内面の途中まで施釉され る。見込円形輪ハキ。 見込に砂浴着。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
693	*	桜花皿	10.8 2.3 6.2		高台は断面三角形で、体部は内 湾して外上方に立ち上がる。口 縁部は端反りを示し、端部は桜 花形に割れる。	見込にゴム印染付が黒色に発 色。	白色釉。 胎土、白色。 瀬戸焼、昭和一。
694	*	甕	10.5 (3.8)	---	体部は内湾気味に外上方へ立ち 上がり直線的な口縁部にあた る。	体部外面に銅板染付が濃い青色 に発色する。	白っぽい灰白色 釉。 胎土、白色。 明治末～大正 末。
695	SD 16	皿	14.0 (2.8)	---	体部は内湾気味に外上方へ立ち 上がり、口縁部は端反りを示す。	体部外面につき草文。内面に黄 の輪文があせた濃青色に発色 する。	白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里。
696	*	*	11.5 3.7	---	高台は断面長方形で、外に開き 気味で有り、端部外面が面取ら れる。体部は内湾気味に外上方 へ立ち上がる。	外面高台部まで施釉され、見込 絶の目状輪ハキ。	淡黄オリーブ色 釉。 胎土、灰白色。 陶器。
697	SE 1	瓦質土器 甕	22.6 (6.2)	---	体部は内湾して上方に立ち上 がり、直線的な口縁部にあ たる。端部は水平面を成す。	ロクロナデ。 外面に指染し痕有り。	内面は灰白色。 外面は灰色。
698	*	青 磁 甕	(2.4)	4.9	高台は、内面端部を面取られ、 高台内の削りは浅い。体部は高 白釉で一旦思慮して、やや内湾 気味に外上方へ立ち上がる。	内面及び高台外面まで施釉され る。体部外面に蓮青文、見込に 一葉の青線。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
699	*	甕	7.0 5.7	3.9	高台は断面定内形を呈する。体 部は断面で一且思慮し、上方に 直立する。		淡黄色系灰白色 釉。 胎土、灰白色。
700	P 1	青 磁 甕	(3.5)	9.0	外面端部を面取られ、断面定台 形状の高台を有する底部から、 体部は内湾して立ち上がる。	見込に印花文有り。 外面は内形に釉を削り取る。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。

第15表 遺構出土石器観察表

拝啓番号	遺構番号	器種	最大径 最大幅 最大厚 計測値 (cm, g)	材質	特 徴	備 考
701	S K 58	叩石	11.4 9.1 3.4 494.0	砂岩	盤半の河原石をそのまま利用し、中央部と縁辺部に潰痕がみられる。	
702	S D 2	石 鍋	口径 20.8 器高 7.9 胴径 — 底径 11.2	頁岩	体部は直線的に外上方に立ち上がり縁部は肥厚して作りだされている。	
703	S D 7	石 鏡	(8.6) (8.8) 1.0 70.0	*	大型の鏡で大部分が欠損しており、残部には使用痕がみられる。	
704	S K 81	砥石	8.0 4.2 9.5 75.0	流紋岩	断面長方形で断面は垂直である。1面のみ使用している。	
705	S K 52	*	(11.3) 14.3 4.3 1130.0	砂岩	大型の砥石で断面は長方形を呈する。表面と側面の2面使用している。	
706	S D 7	*	(8.3) 10.1 7.8 1128.0	*	上下端が欠損している。 4面共使用している。	
707	*	*	(12.8) 9.4 7.6 1460.0	*	大型の砥石で断面方形を呈する。3面を使用している。	
708	*	*	(13.0) 9.5 3.5 790.0	*	大部分が欠損している。 表面の1面のみ使用している。	
709	S D 9	*	9.4 4.9 2.1 1225.0	泥岩	断面は垂直に切っており、表面を除き3面使用している。砕痕が認められる。	
710	S D 7	*	(9.3) 7.5 9.9 1010.0	不 明	大部分が欠損している。 1面のみ使用している。	
711	S D 9	*	8.7 4.4 2.0 130.0	泥岩	断面長方形を呈する。 4面共使用している。	
712	S D 13	*	10.8 7.5 3.4 460.0	砂岩	断面長方形を呈する。 表面と側面の3面を使用している。	
713	S K 81	*	(5.6) 5.1 1.9 82.5	流紋岩	小型の砥石で断面長方形を呈する。4面共使用している。	
714	S D 7	茶 臼	直径 18.3 11.6 3000.0	砂岩	臼牙が残存している。	
715	S K 81	石 臼	直径 44.0 8.4 4000.0	*	石臼で径20cmの幅で狭む。臼目は磨滅しており、細くなっている。	

採出番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, #)		材質	特 徴	備 考
			計測値 (cm, #)	最大長 最大幅 最大厚 重量			
716	SD 12	石 臼	半 径	13.9 6.9 2100.0	砂 岩	下臼で、楕圓は磨滅しており細くなっている。	
717	SD 2	円 石		16.7 12.5 7.4 3200.0	*	楕圓形を呈し、中央部は4cm幅で磨む。開口に深付垂。	
718	SK 81	*		11.4 11.1 10.2 1740.0	*	中央部は幅4cmで深さ1cmに窪む。	

第16表 遺構出土金属器観察表

採出番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, #)		材質	特 徴	備 考
			計測値 (cm, #)	最大長 最大幅 最大厚 重量			
719	SK 17	煙 管		6.8 1.0 0.1	銅		
720	SD 7	*		5.0 1.5 0.04	*		
721	SK 25	*		10.3 1.1 0.1	*		

第17表 遺構出土木器観察表

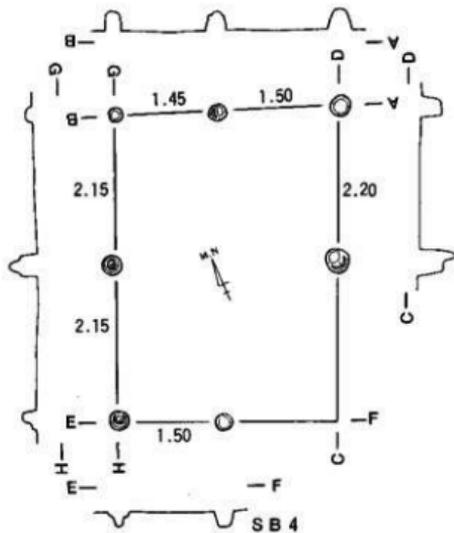
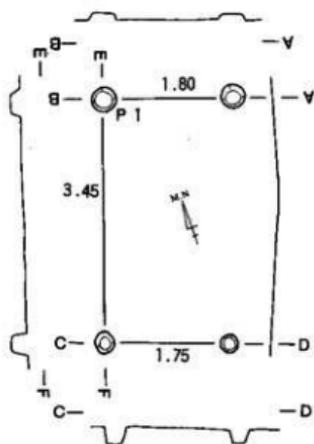
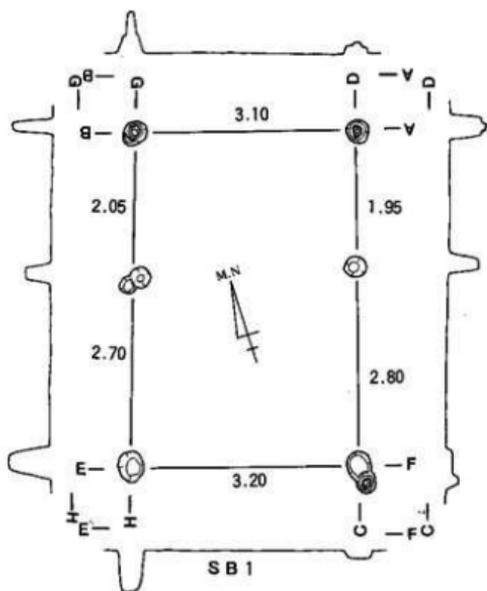
採出番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, #)		材質	特 徴	備 考
			計測値 (cm, #)	最大長 最大幅 最大厚 重量			
722	SD 15	角 材		8.8 1.7 1.5	不 明	断面方形の材の上下両面に切り込みをいれている。	
723	SE 1	木 片		10.3 1.9 2.0	*	断面円形を呈し、上端部にコの字形に切り込みを入れている。	
724	SK 60	板 材		10.2 5.0 1.3	*	上端を削り、先みを作っている。曲物の修復の一部と考えられる。	
725	SD 15	不 明		11.1 3.1 1.0	*	上端部を刃物で削っている。小破片で不明の木製品である。	
726	SE 1	曲物底板		12.7 4.0 0.8	*	上縁部に丸みを有しており、曲物の修復の一部と考えられる。	

標記番号	通稱番号	器種	最大長 計商値 (cm, #)	材質	特 徴	備 考
727	S E 1	板 材	17.4 3.3 1.1	不 明	断面長方形で、上端部は丸みを有しており、切り込みを入れて径3mmの円孔が穿たれる。	
728	*	*	8.6 8.3 2.3	*	厚さ、轆から棒状板製品の一部と考えられる。	
729	S D 15	不 明	8.9 7.2 2.2	*	断面長方形を呈し、上端の一部に切り込みが見られる。	
730	*	*	4.7 10.4 1.6	*	断面長方形を呈し、両側面を削り出し、板状にしている。	
731	*	角 材	13.4 2.9 1.7	*	断面方形を呈し、上下両端を切断している。	
732	*	*	15.2 2.7 2.1	*	断面方形を呈し、上下両端に切り込みを入れ切断している。	
733	*	不 明	20.6 8.7 4.1	*	下端の一部に切り込みが見られるが、用途は不明。	
734	*	*	33.5 0.6 0.6	*	上下両端に切り込みがはいり用途不明である。	
735	*	板 材	22.5 5.0 1.0	*	断面長方形を呈し上端を切断している。下端は不明。	
736	S E 1	不 明	24.0 6.3 1.8	*	切り抜きの棒の一部と考えられるが、鏡片で不明である。	
737	*	動物皮板	30.0 9.0 1.3	*	周辺部を円形に丁寧に削り取っている。	
738	*	不 明	23.6 5.1 3.9	*	杖の一部と考えられるが、残存している部分が少なく不明である。	
739	*	動物皮板	13.7 11.0 0.6	*	3枚の板を繋ぎ合わせ、周辺部を丁寧に円形に削り取っている。	
740	*	*	15.8 8.7 1.0	*	周辺部を円形に削り取っている。約半が残存。	
741	*	*	14.6 13.8 1.0	*	円形を呈し、周辺部を丁寧に削り取っている。	

押印番号	遺構番号	部 種	最大長 最大幅 最大厚 重 量		材 質	特 徴	備 考
			引測値 (cm, g)	算 出			
742	S E 1	歯物底板	18.0 13.1 1.3		不 明	約写残存している。 円形を呈していたと考えられ、 周辺部は丁寧に削り取っている。	
743	S X 60	*	25.6 16.7 1.0		*	約写が残存している。 周辺部を円形に削り取っている が、磨滅が著しい。	

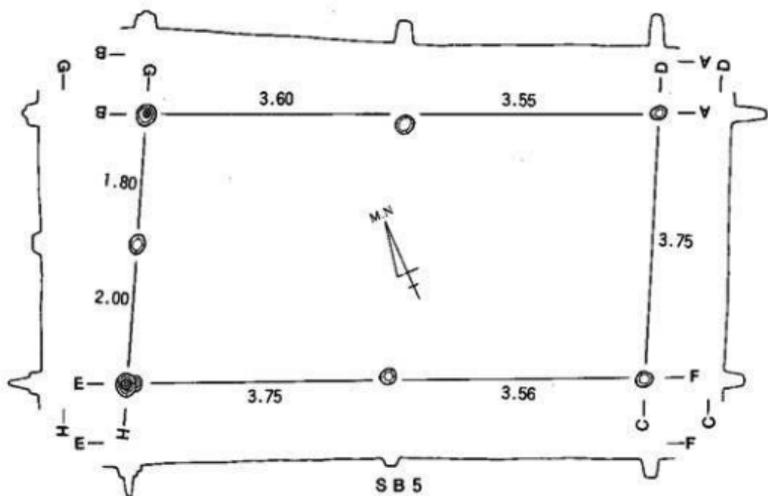
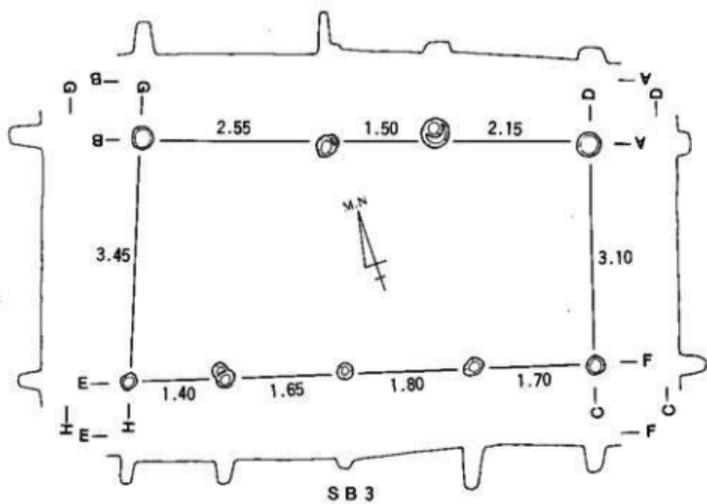
第18表 遺構出土古銭観察表

押印番号	遺構番号	銭 種	初鋳年(西 暦)	備 考
744	S K 20	寛永通宝	日本明正(1636)	
745	S K 21	*	*	
746	S K 22	*	*	
747	*	*	*	
748	S K 37	*	*	
749	S K 62	*	*	
750	*	*	*	
751	S K 122	*	*	



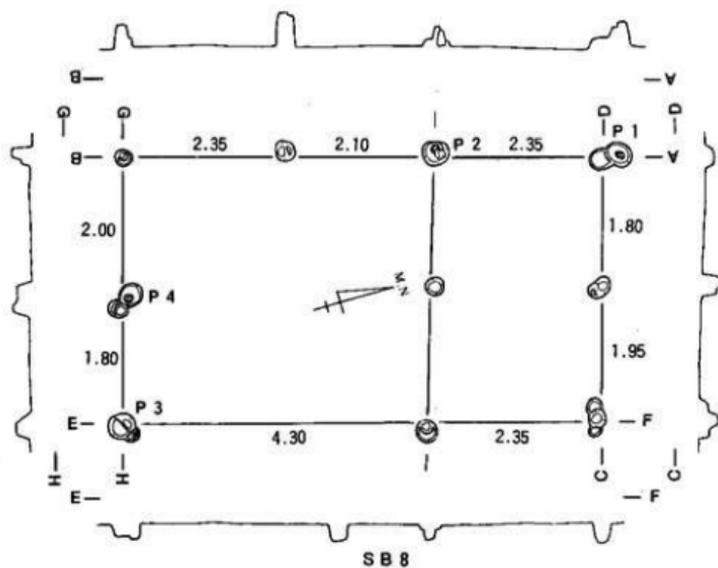
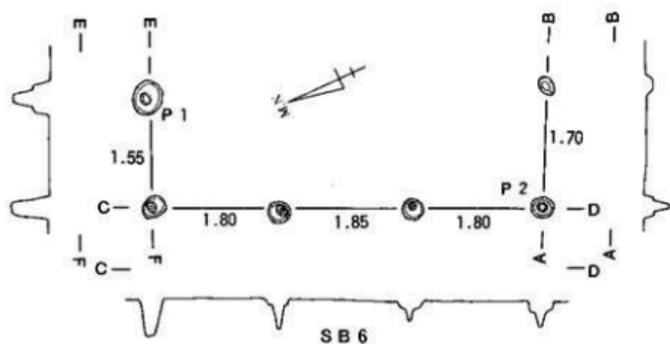
DL = 7.50m 0 4m

第85圖 SB 1 · 2 · 4

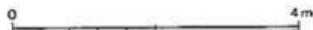


DL = 7.50 m  4m

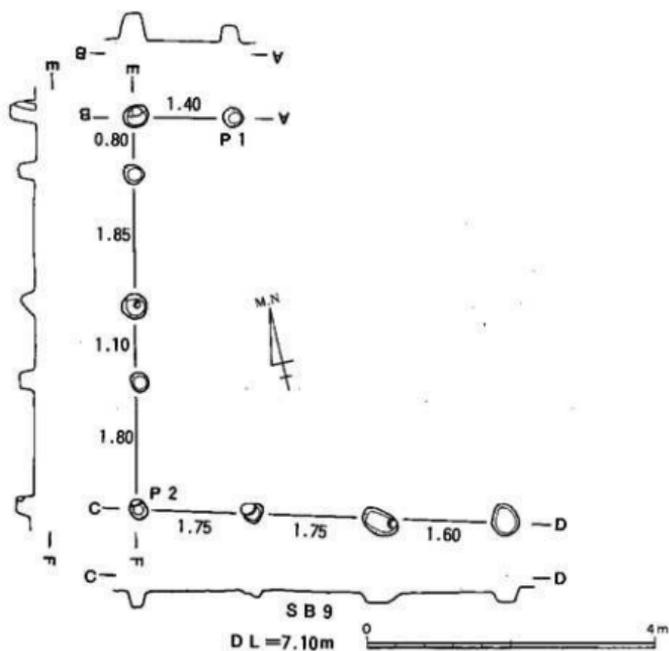
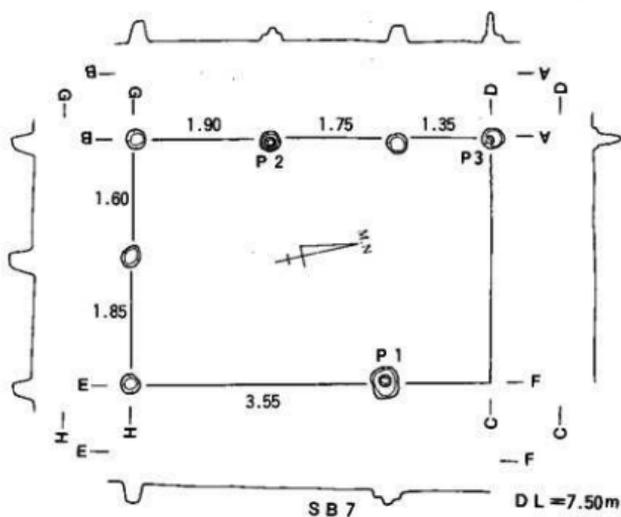
第86圖 SB 3 · 5



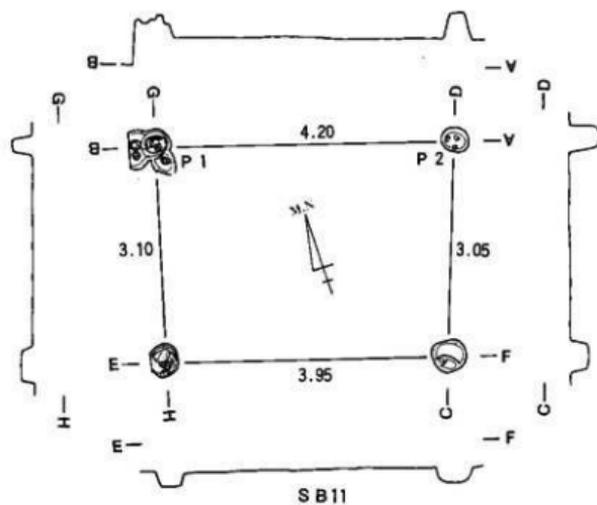
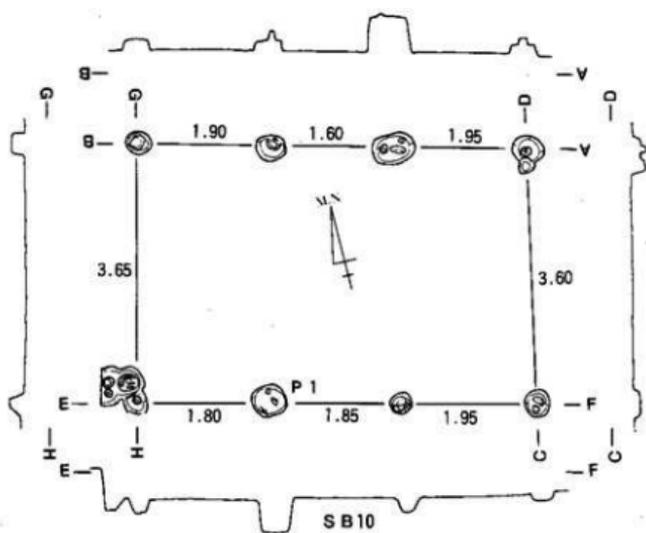
DL = 7.50m



第87圖 SB 6 · 8



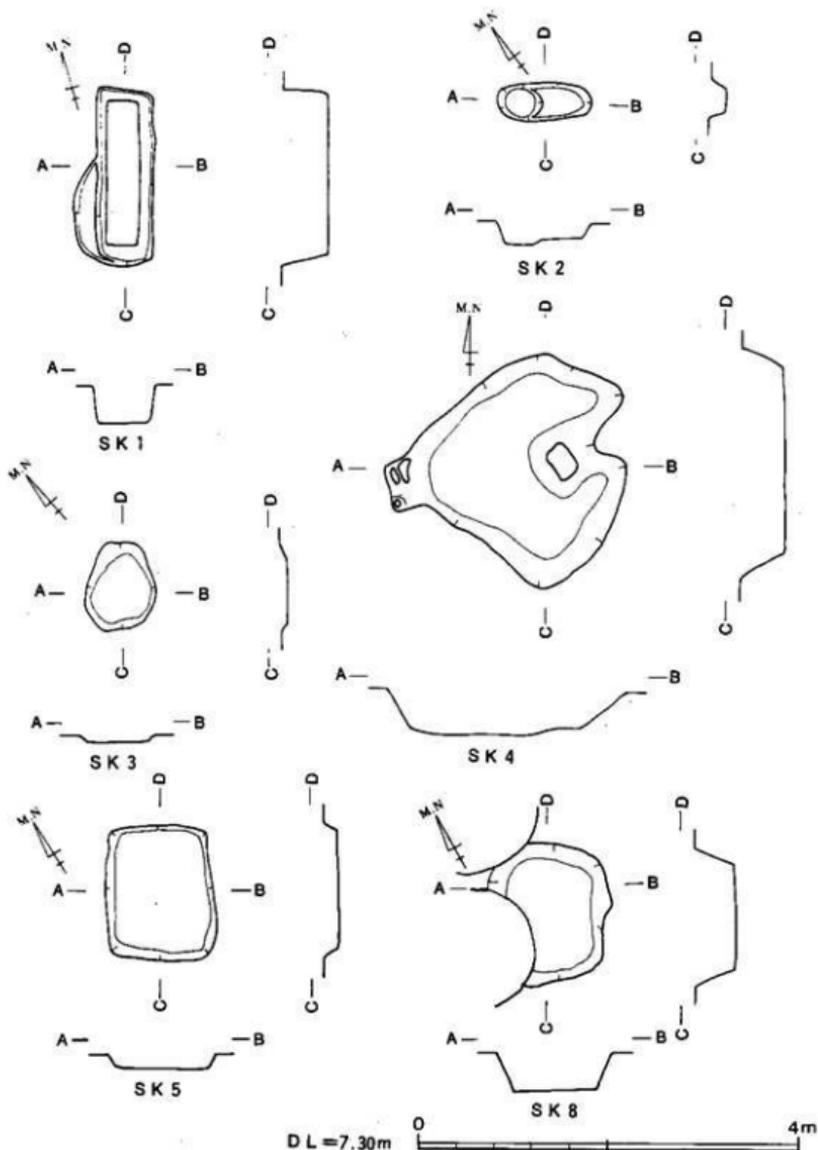
第88圖 SB 7 · 9



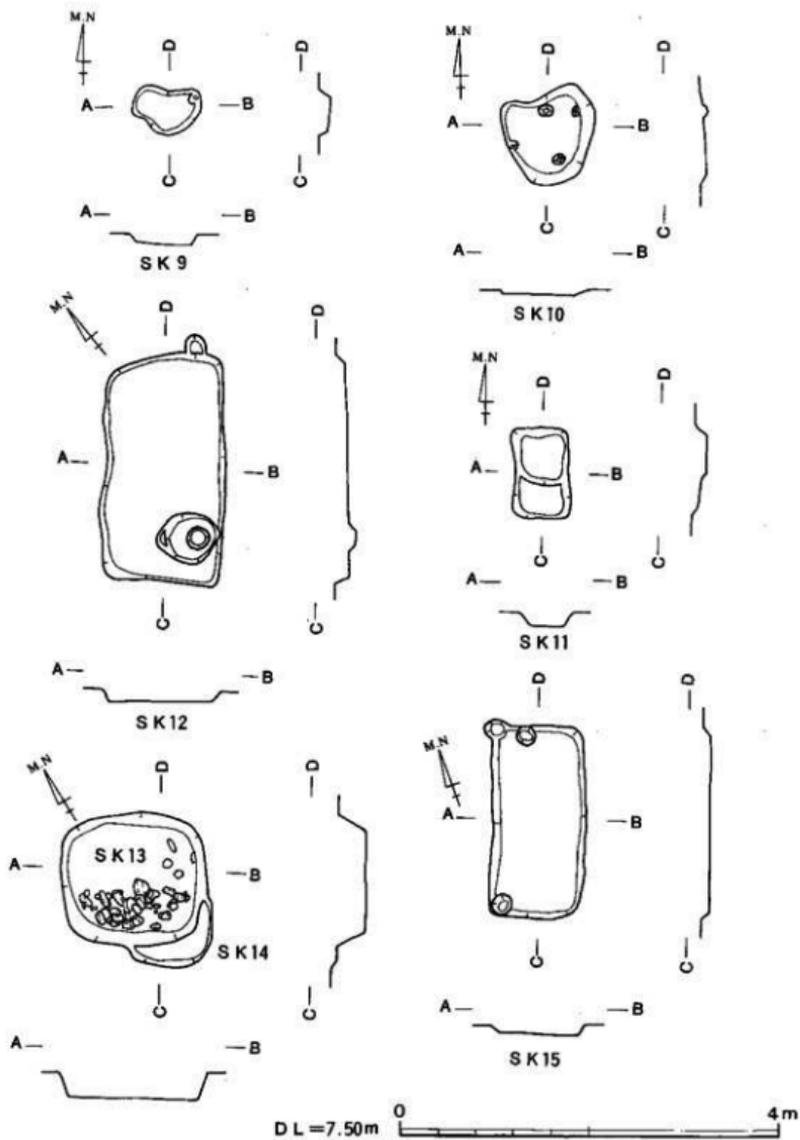
DL = 7.50m



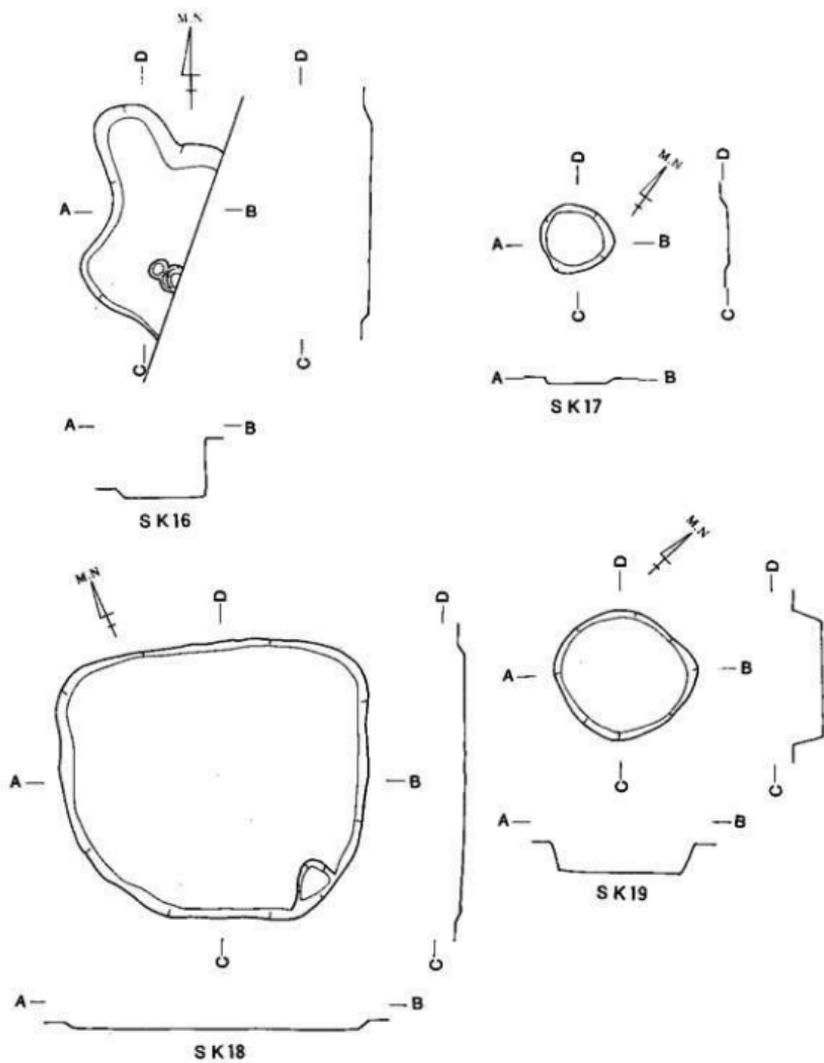
第89圖 SB10·11



第90图 SK 1~5·8

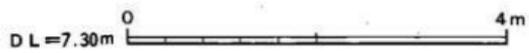
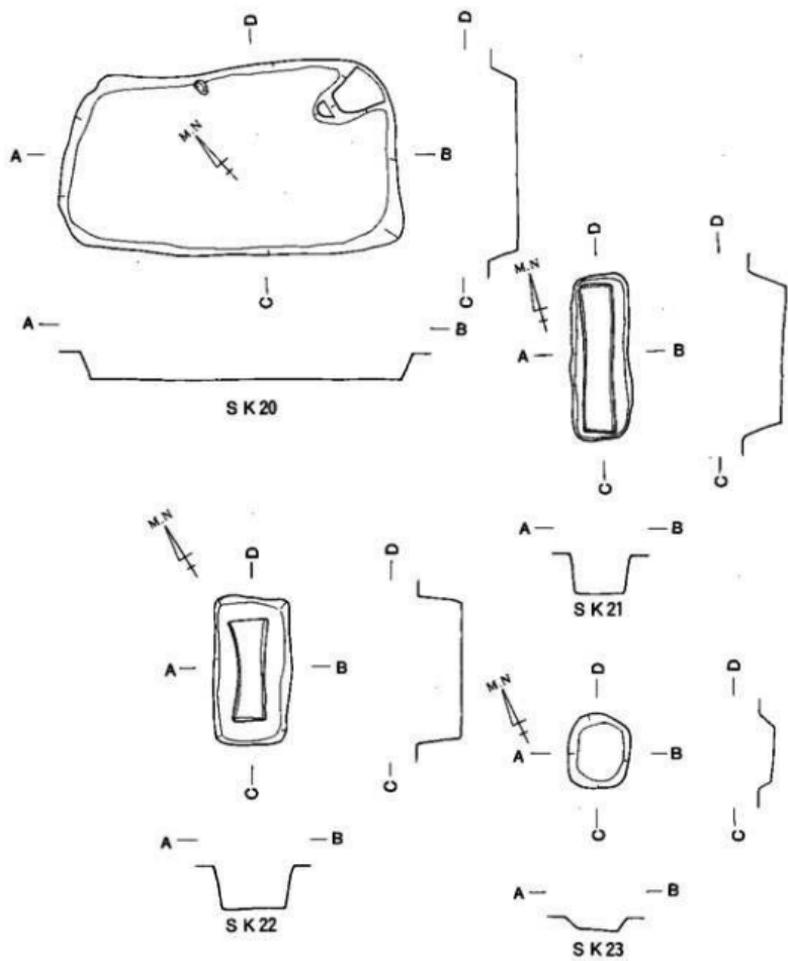


第91圖 SK 9~15

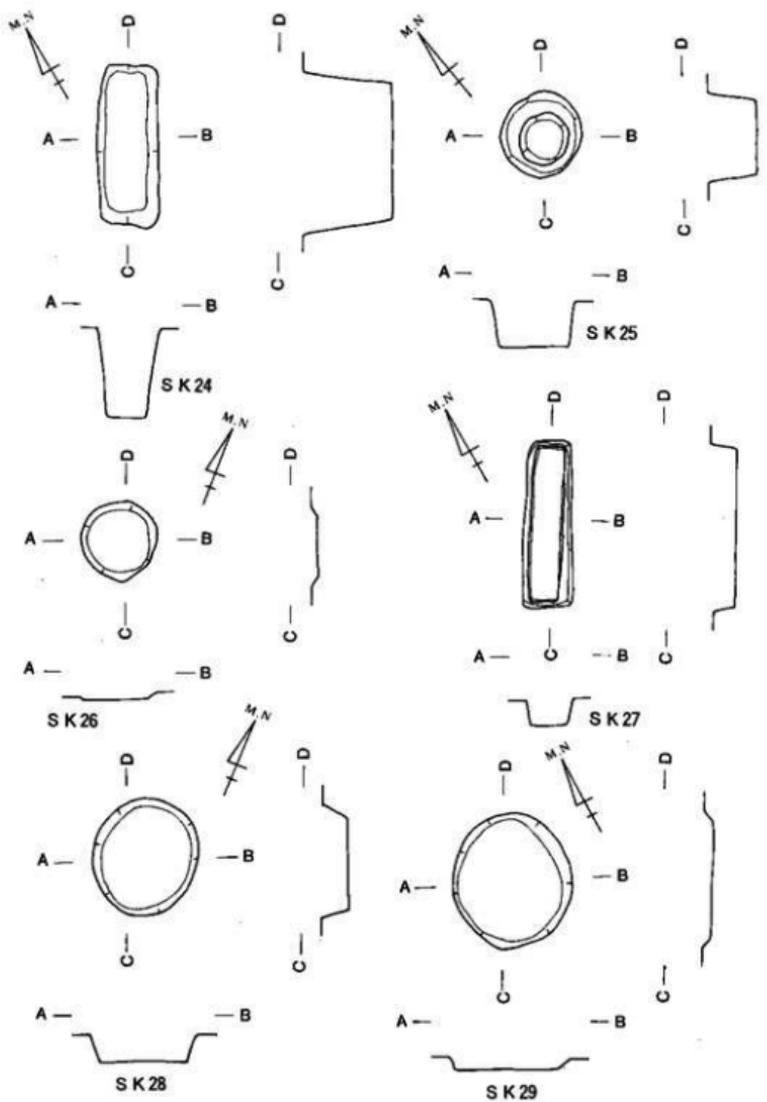


DL = 7.30m 0 4m

第92圖 SK16~19

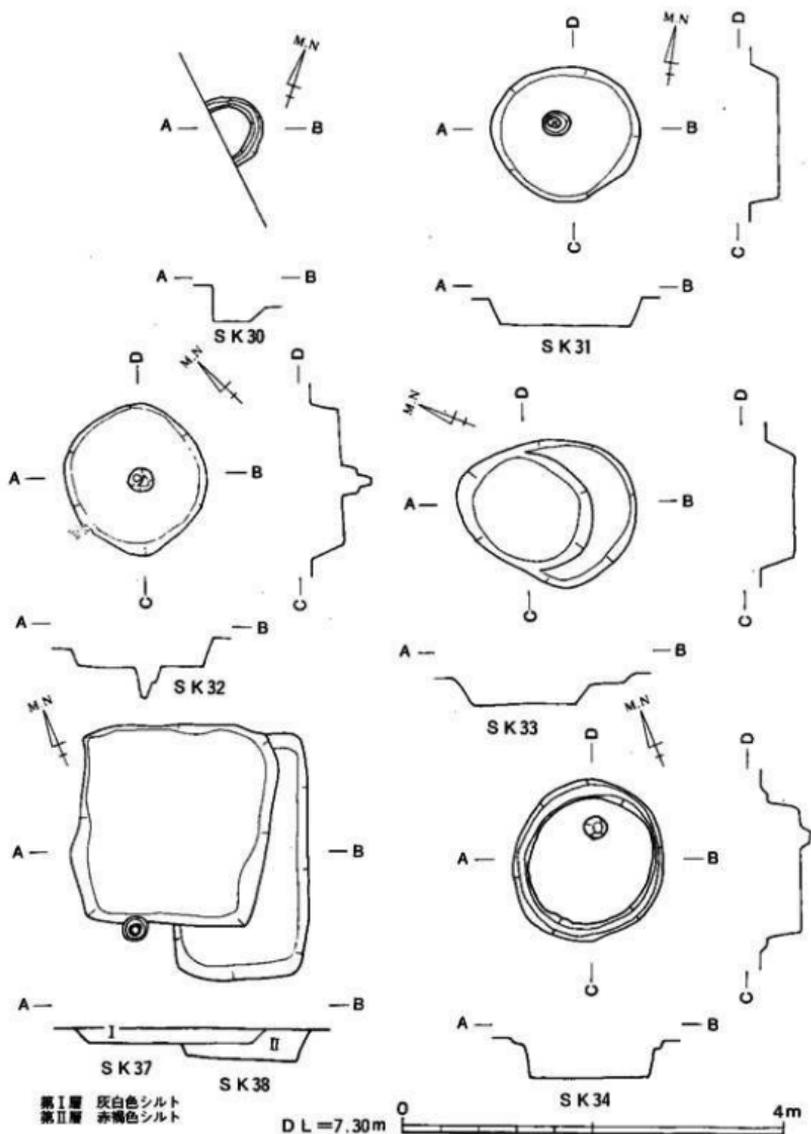


第93图 SK20~23

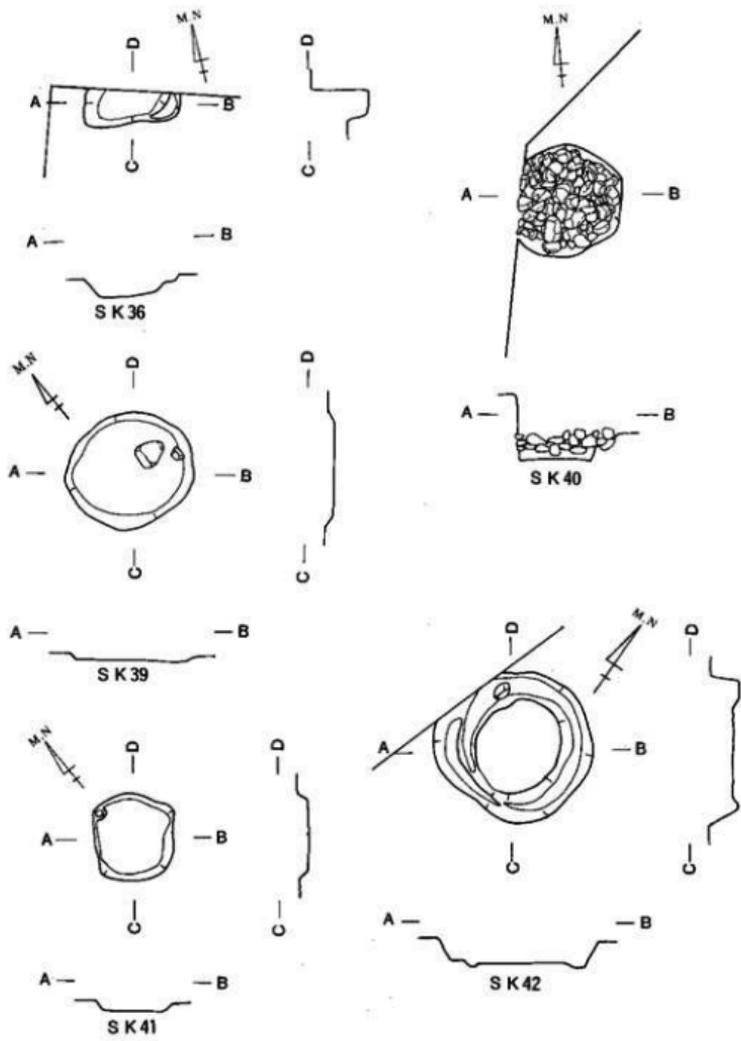


DL = 7.30m 0 4m

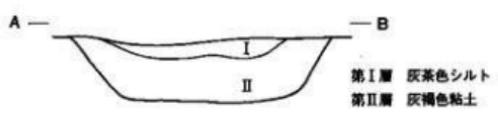
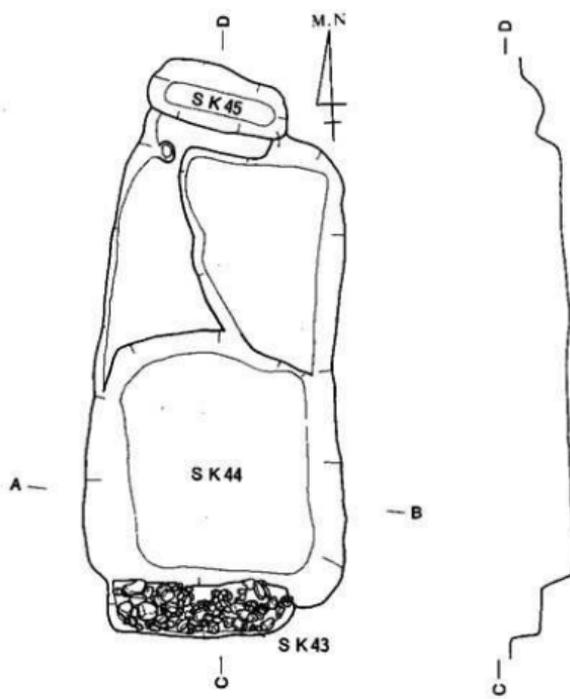
第94圖 SK 24~29



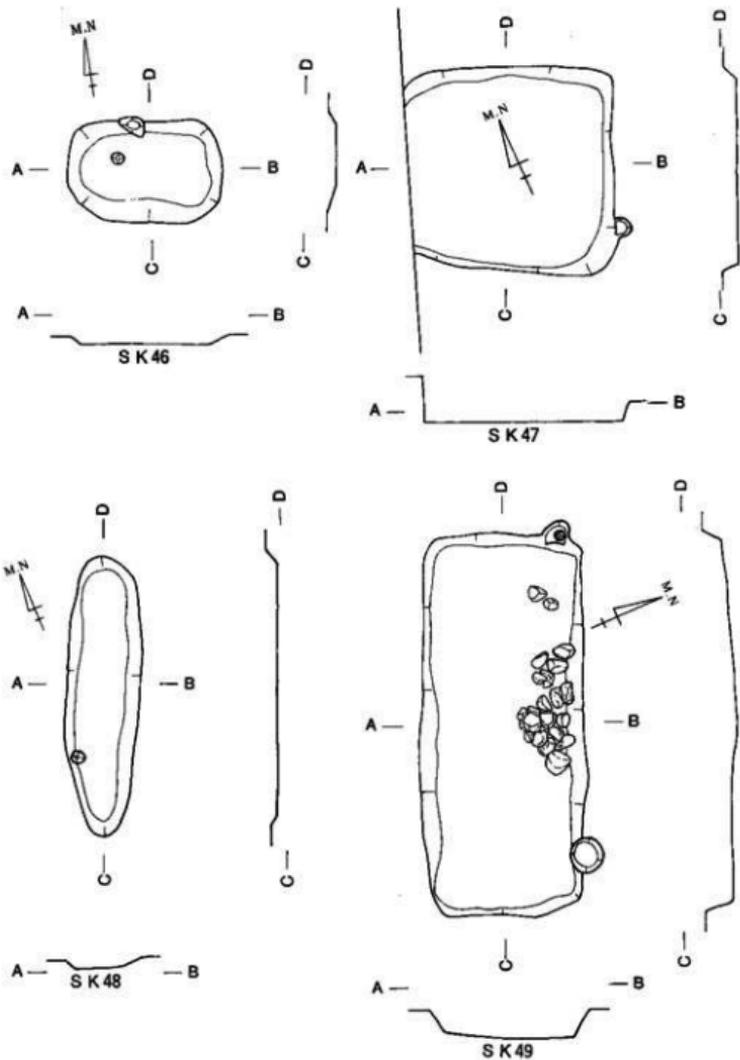
第95図 SK 30~34・37・38



第96图 SK 36 · 39~42

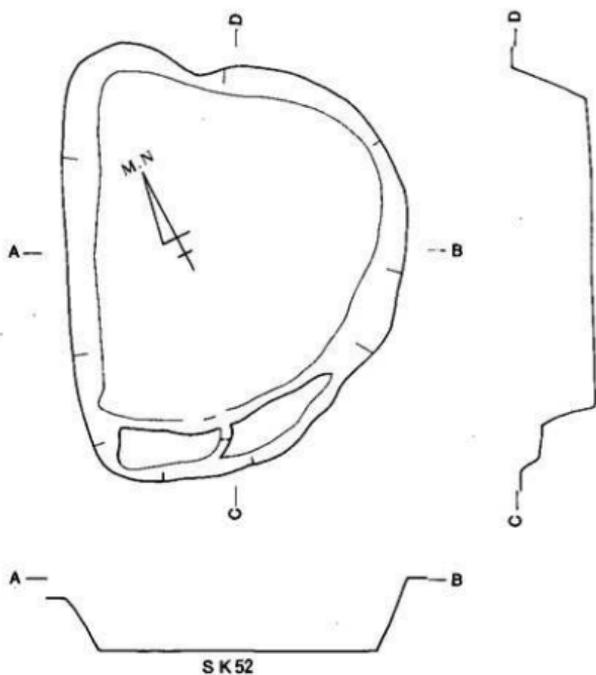
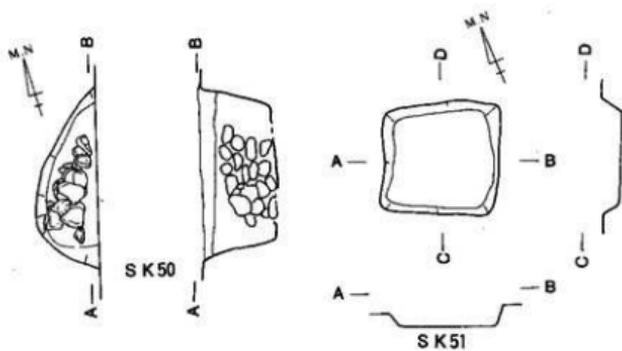


第97図 SK43~45



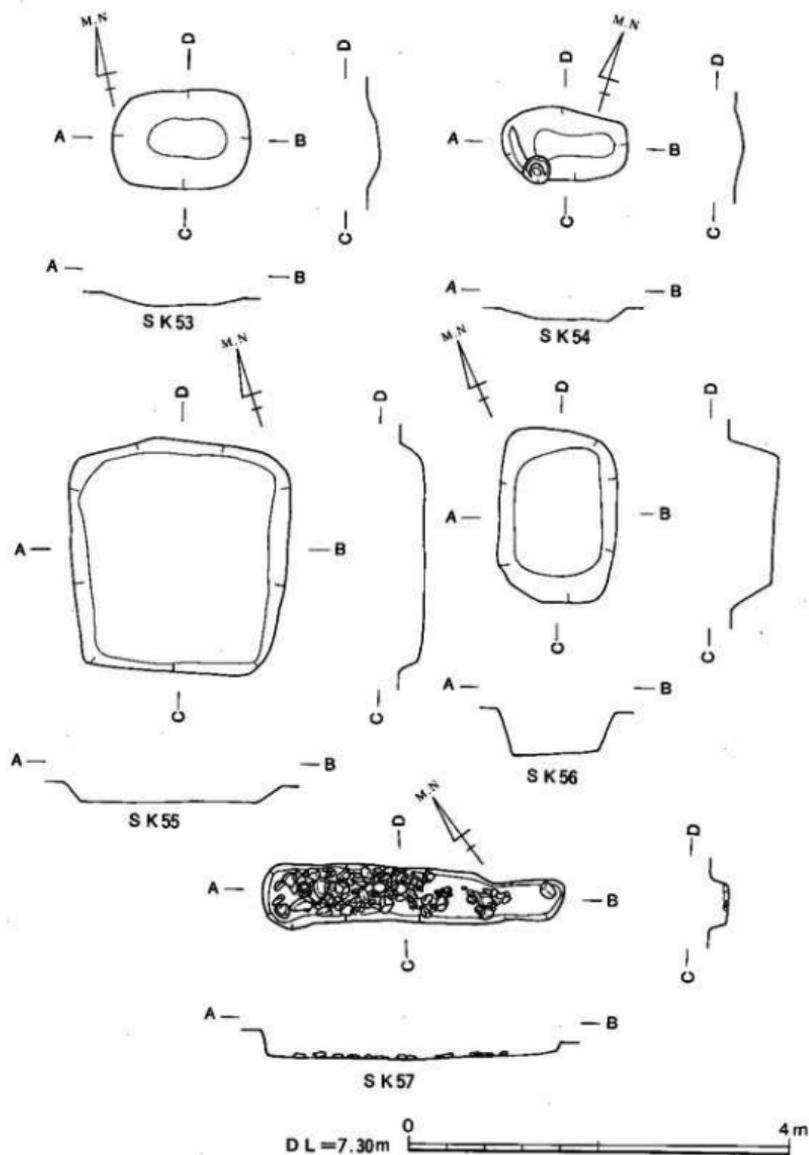
DL = 7.30m 0 4m

第98圖 SK 46~49

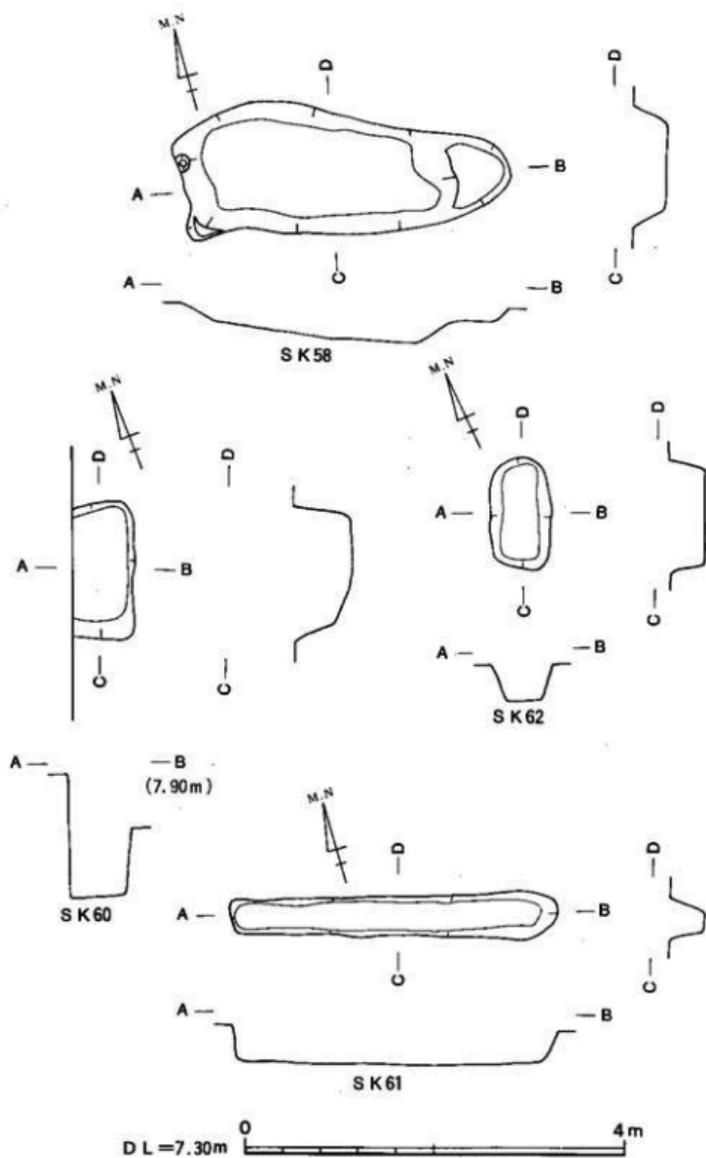


DL = 7.30m  0 4m

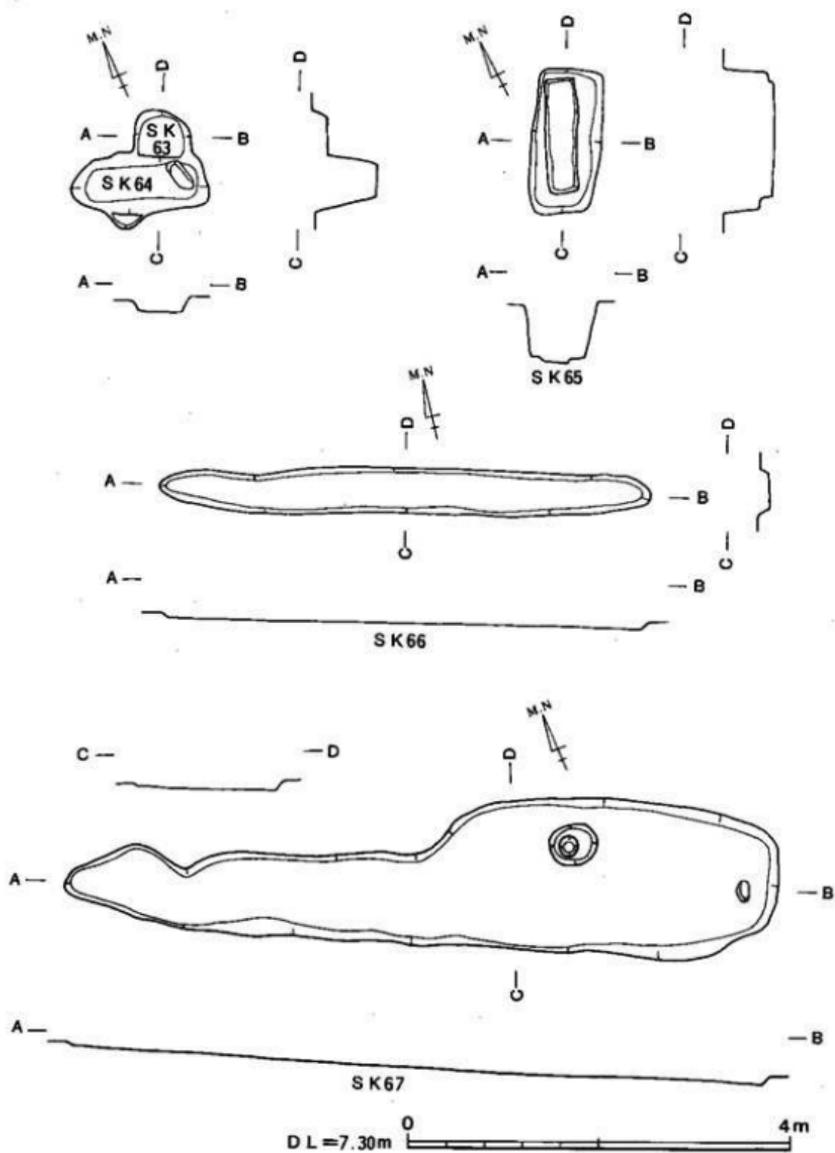
第99图 SK50~52



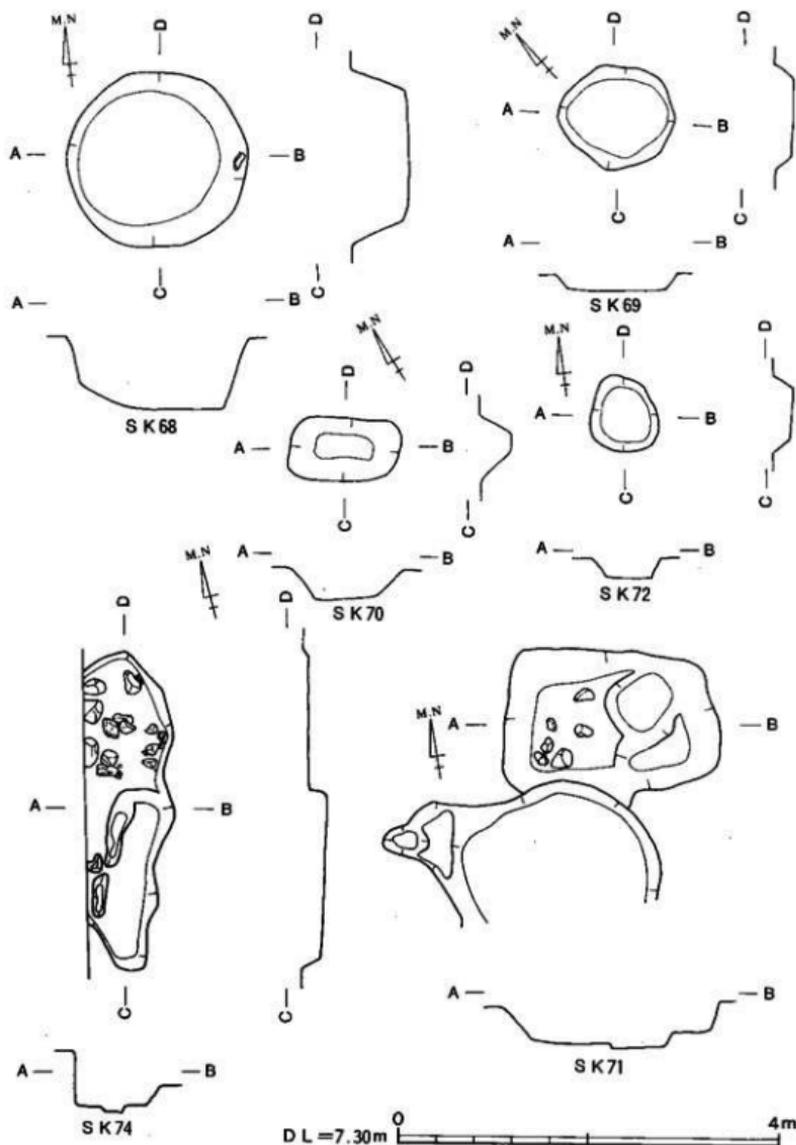
第100圖 SK 53~57



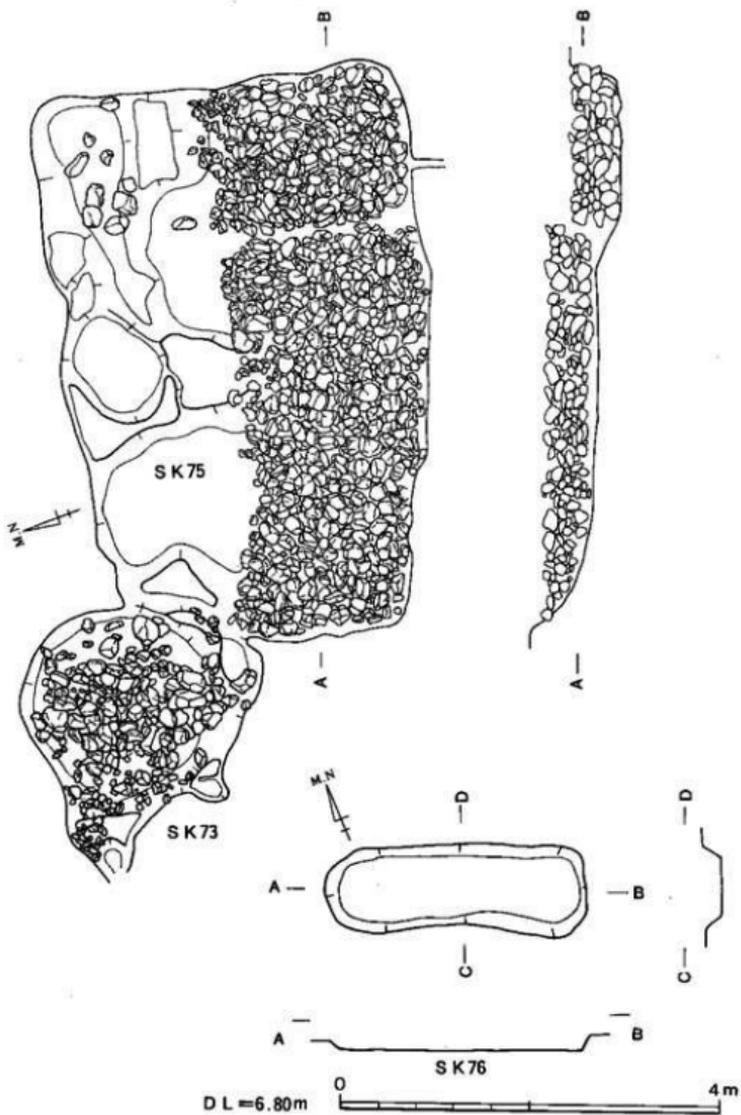
第101図 SK 58・60~62



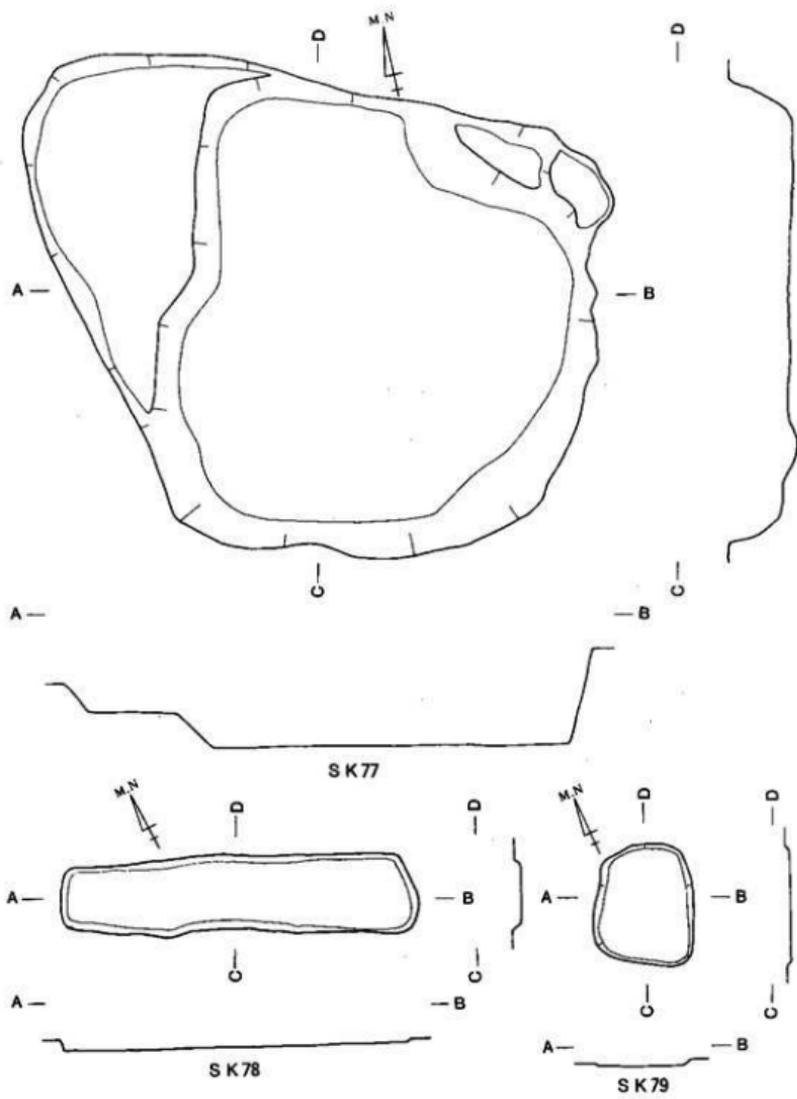
第102図 SK63~67



第103図 SK 68~72・74

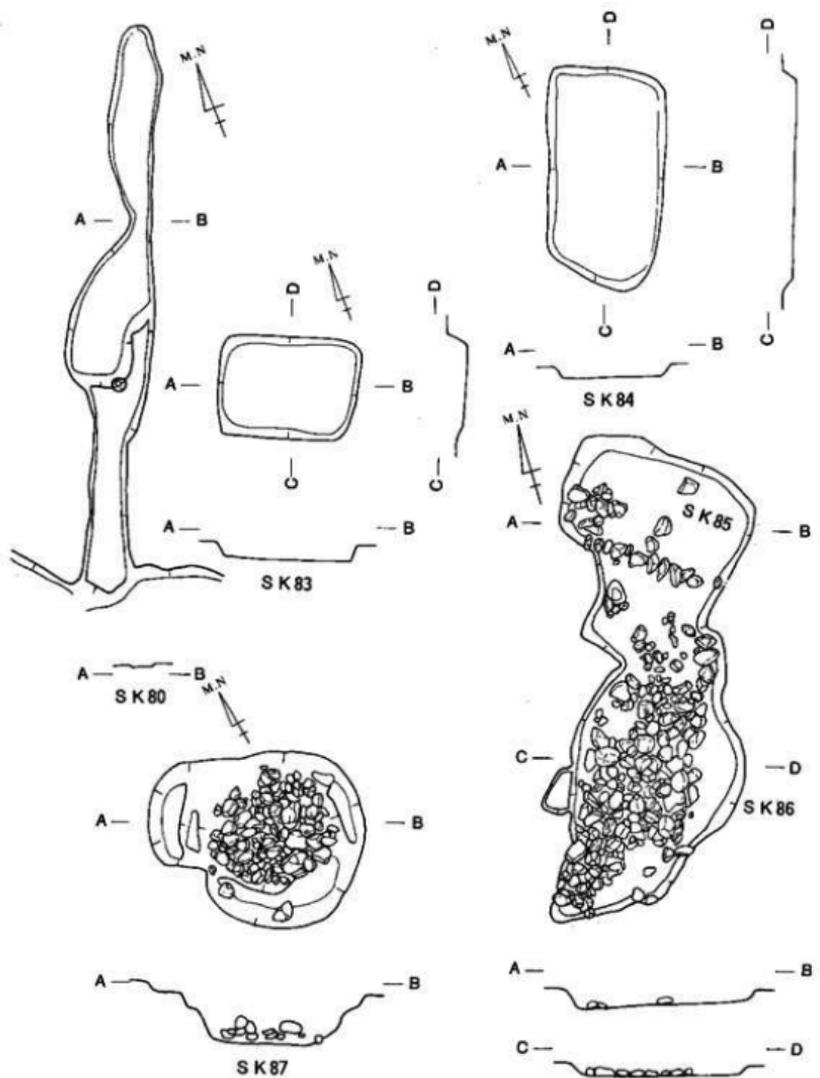


第104圖 SK 73・75・76



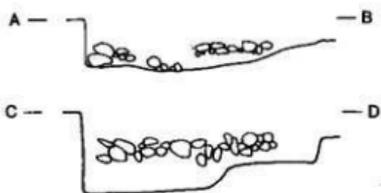
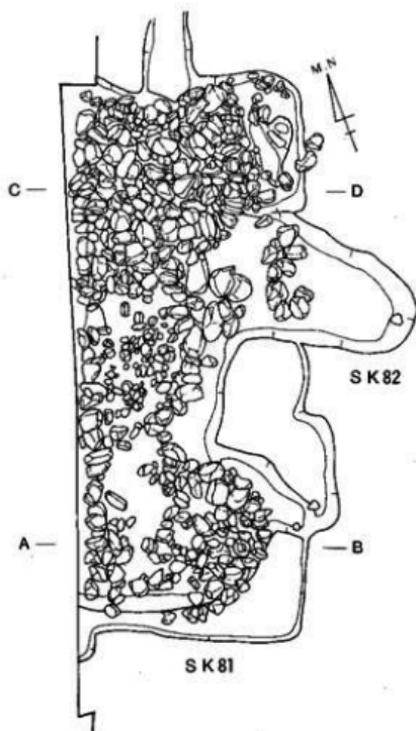
DL=7.30m 0 4m

第105図 SK77~79

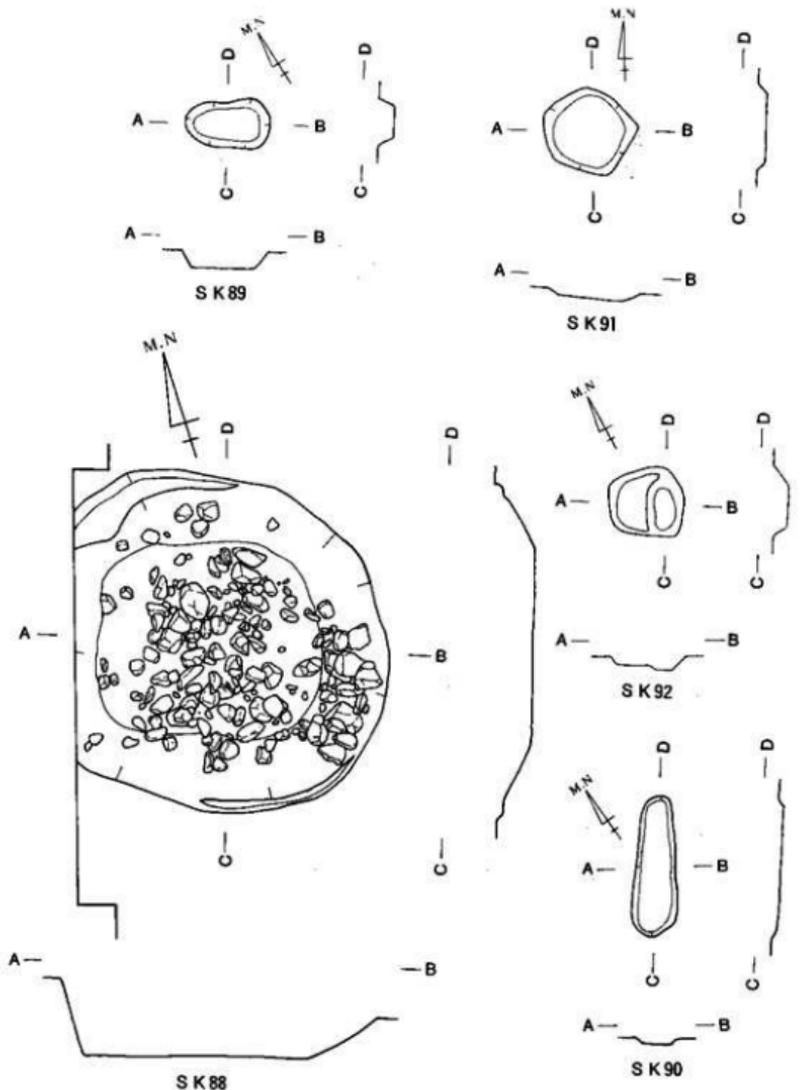


DL = 7.10m 0 4m

第106圖 SK 80 · 83~87

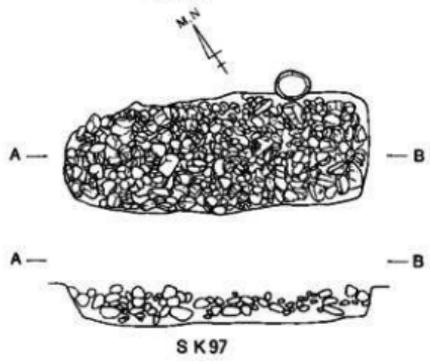
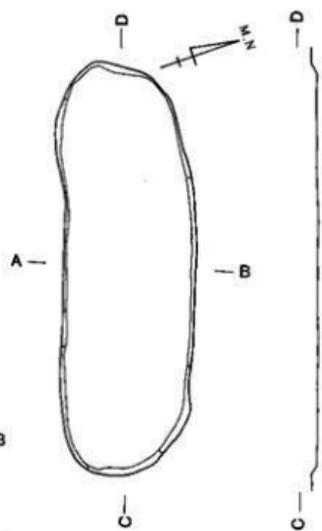
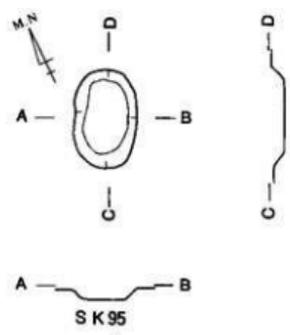
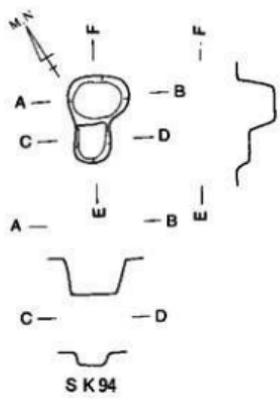
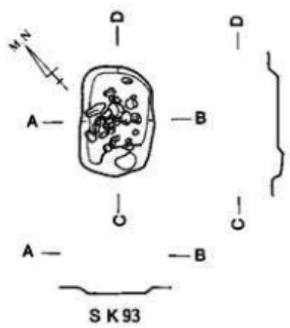


第107图 SK81·82



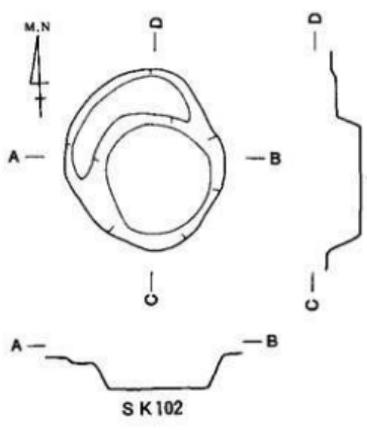
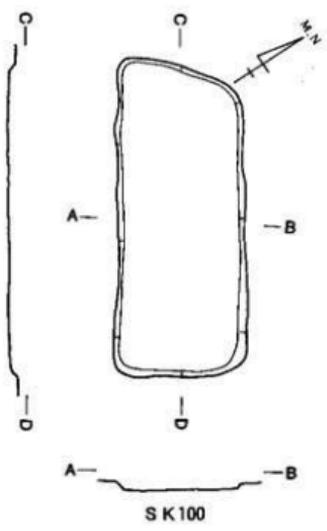
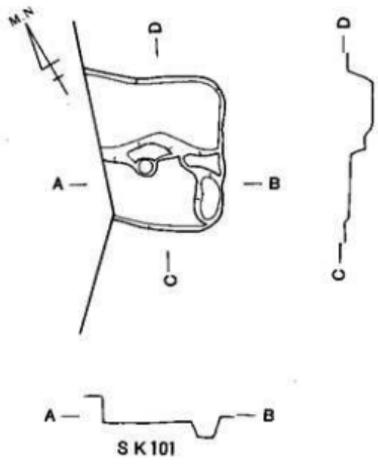
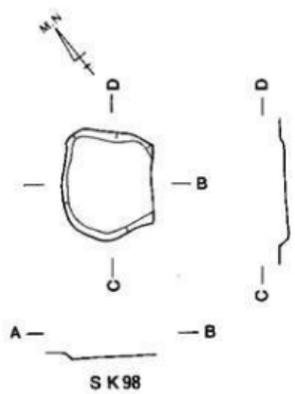
DL = 7.10m 0 4m

第108圖 SK 88~92



DL = 7.30m 0 4m

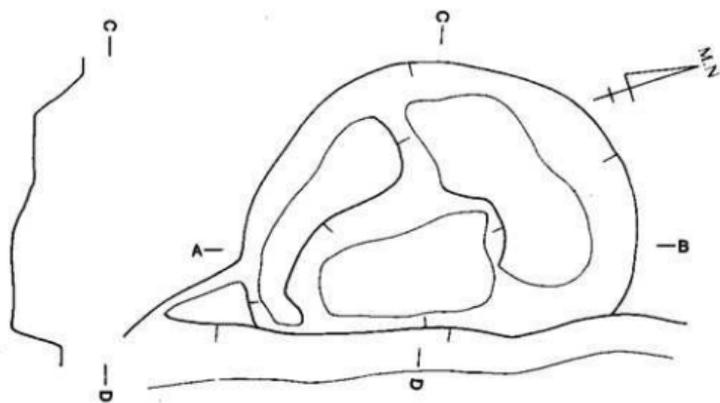
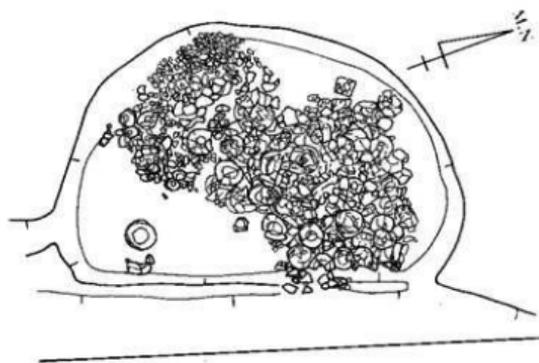
第109圖 SK 93~95 · 97 · 99



DL = 7.30m



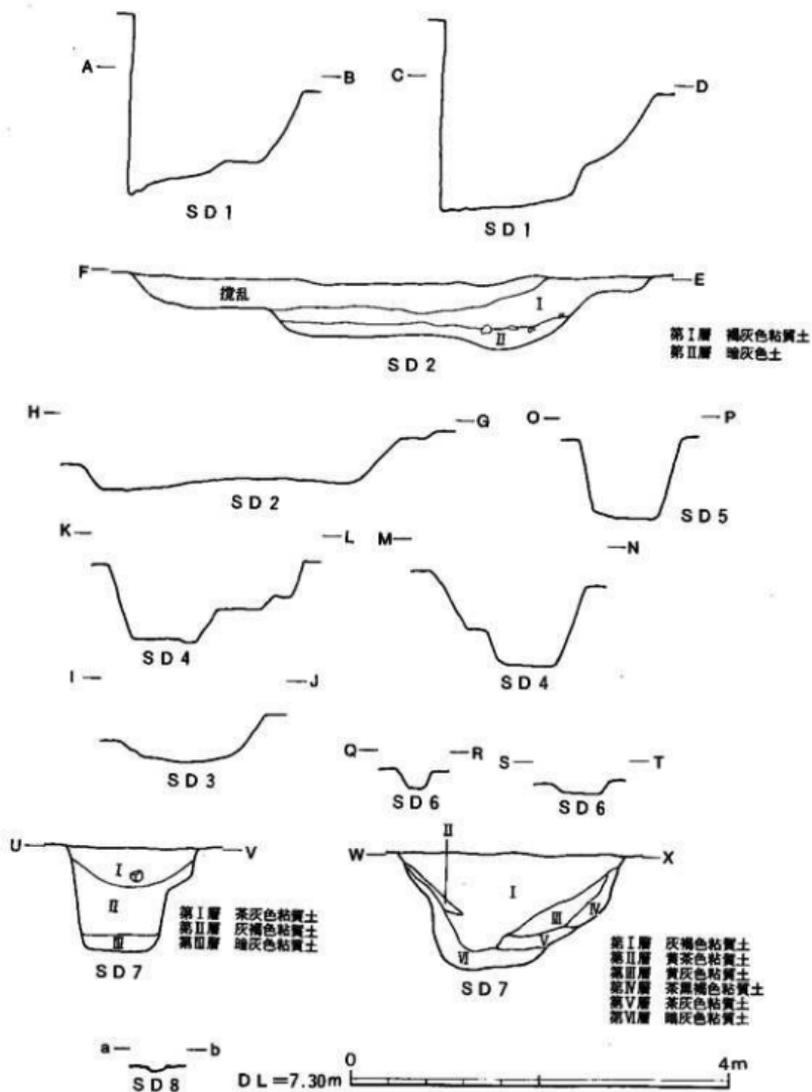
第110圖 SK 98・100~102



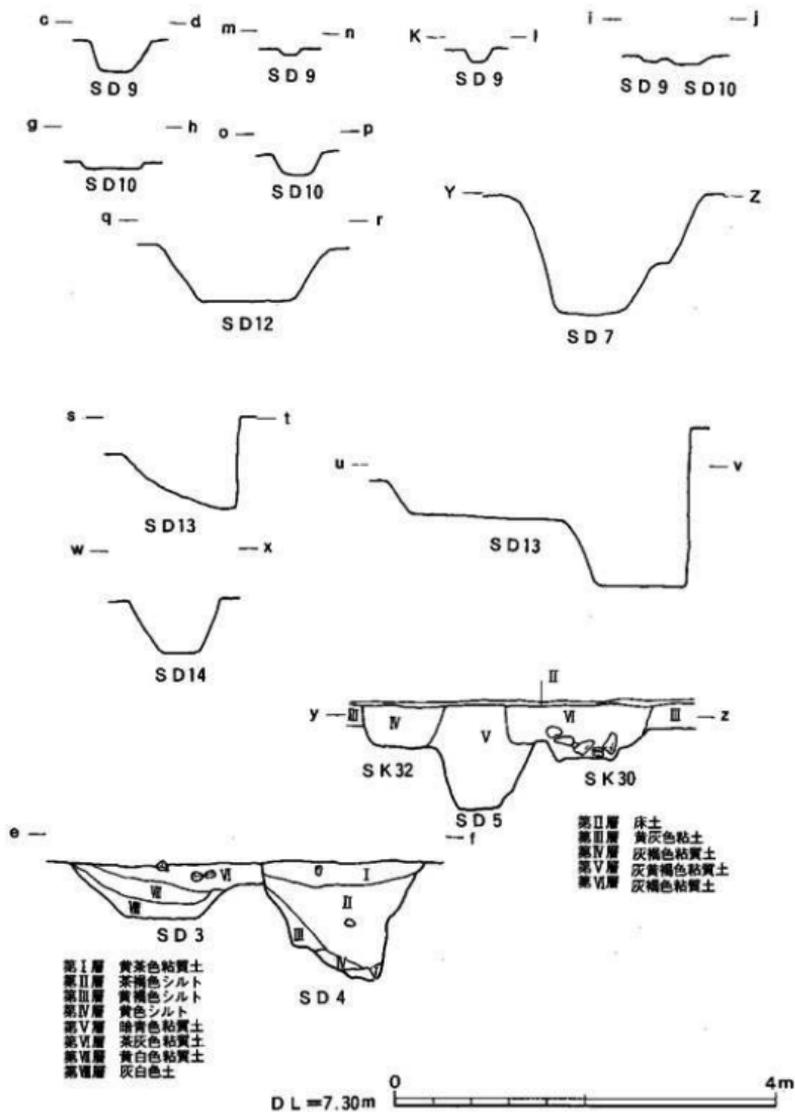
S K 96



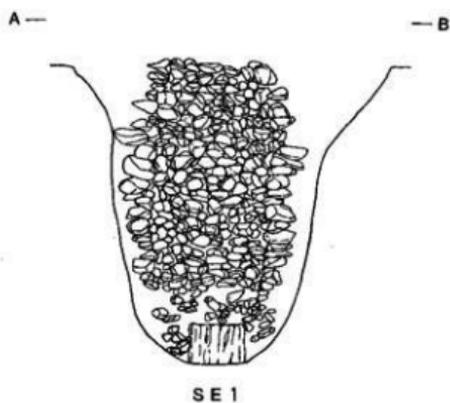
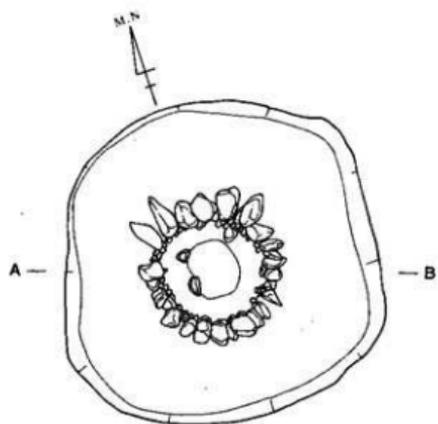
第111圖 S K 96



第112圖 SD 1~8



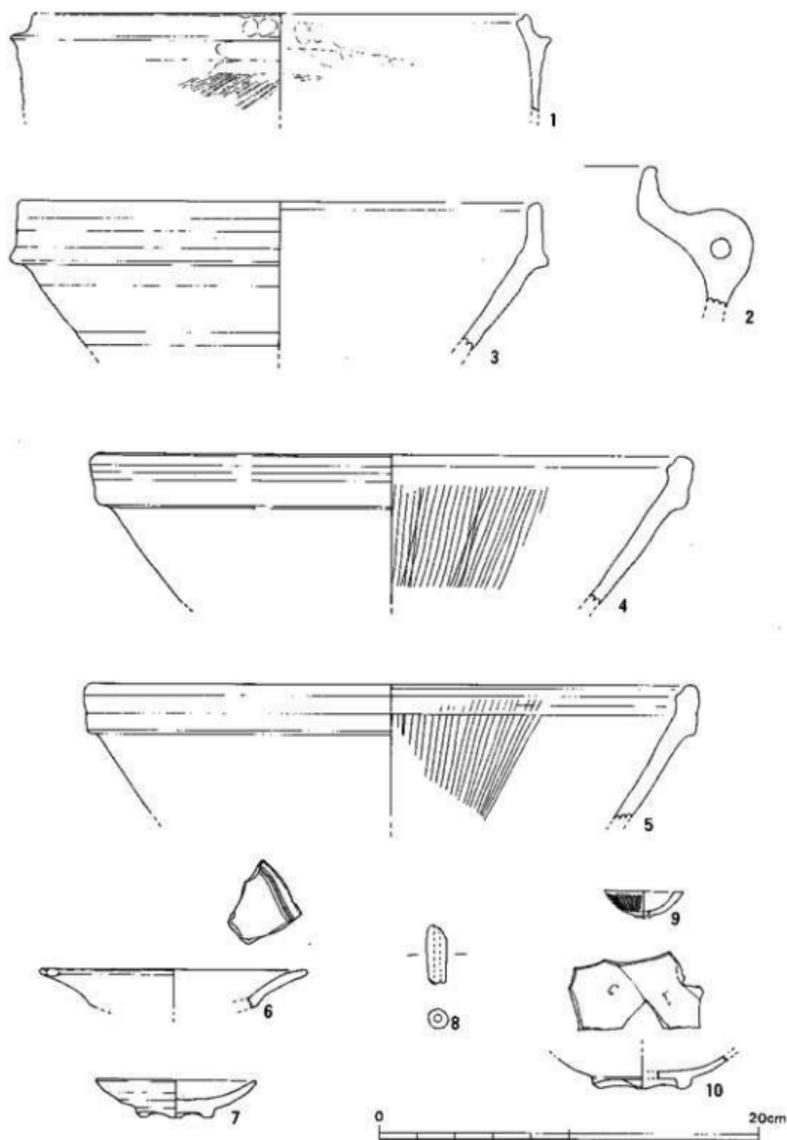
第113圖 SK 30・32、SD 3～5・7・9・10・12～14



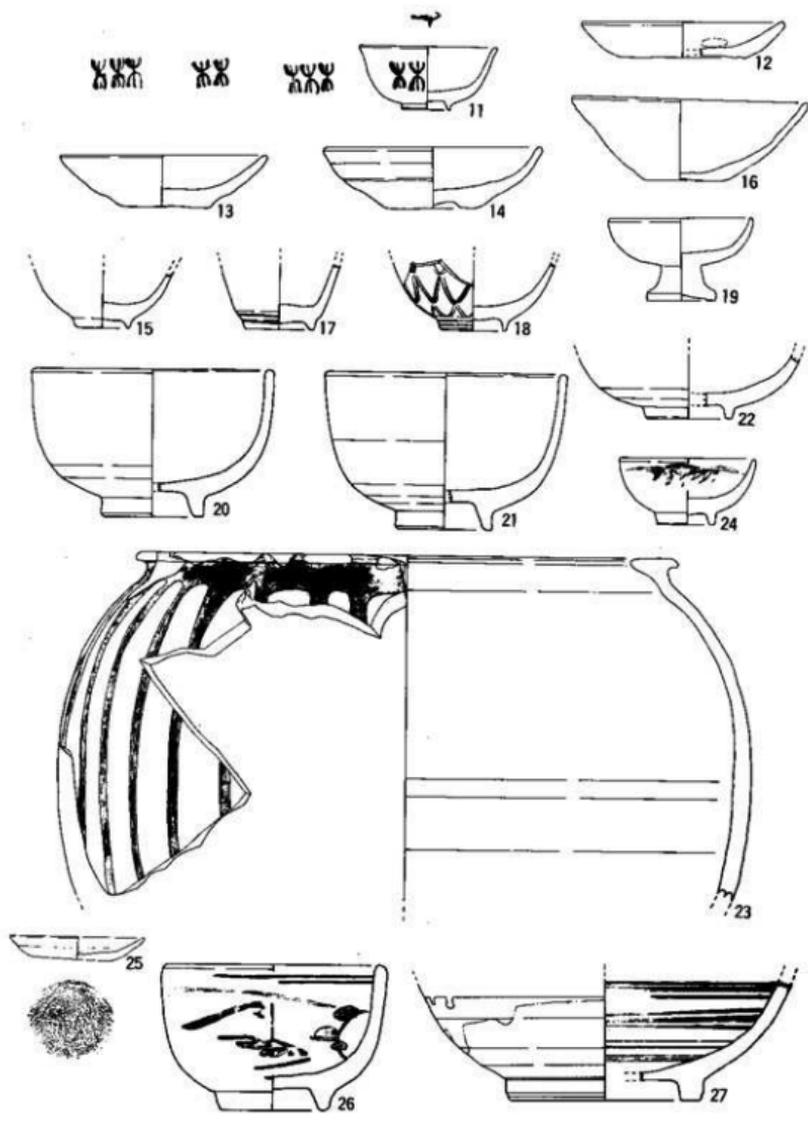
D L = 7.50m

0 2m

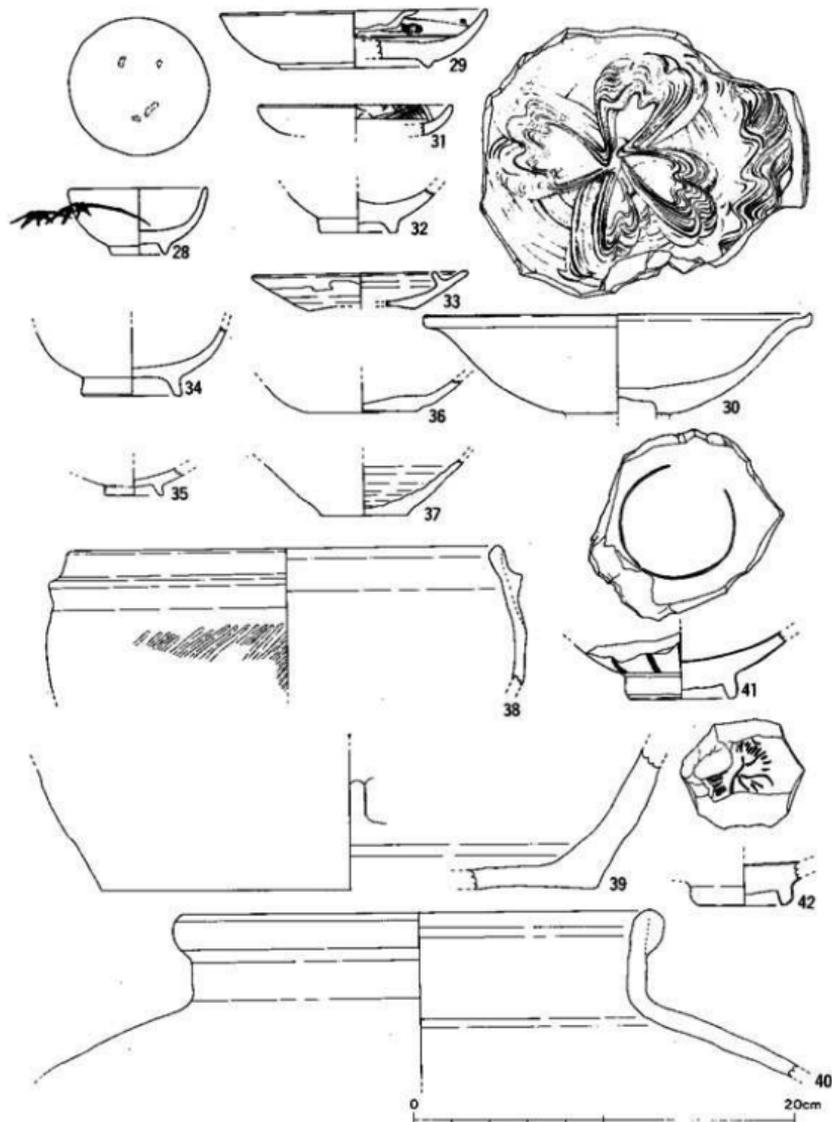
第114图 SE 1



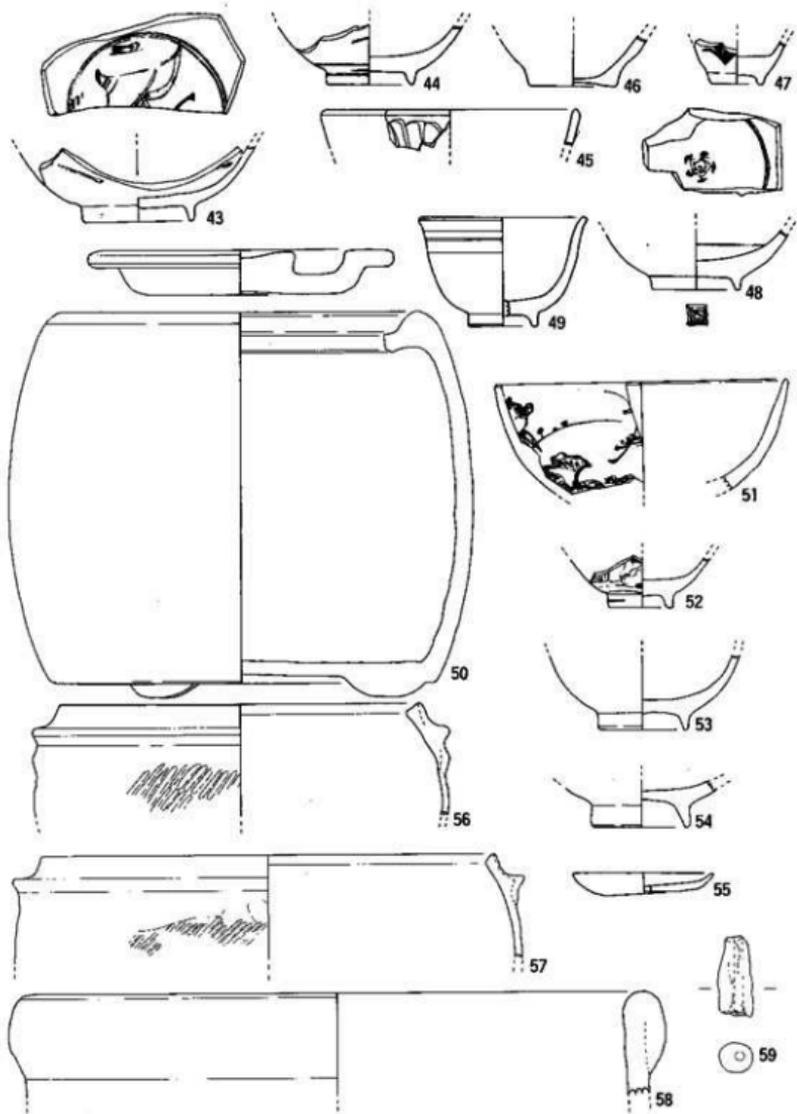
第115圖 第Ⅷ層、SB10出土遺物



第116図 SK 1・3・4・11・20~22・25・26 出土遺物

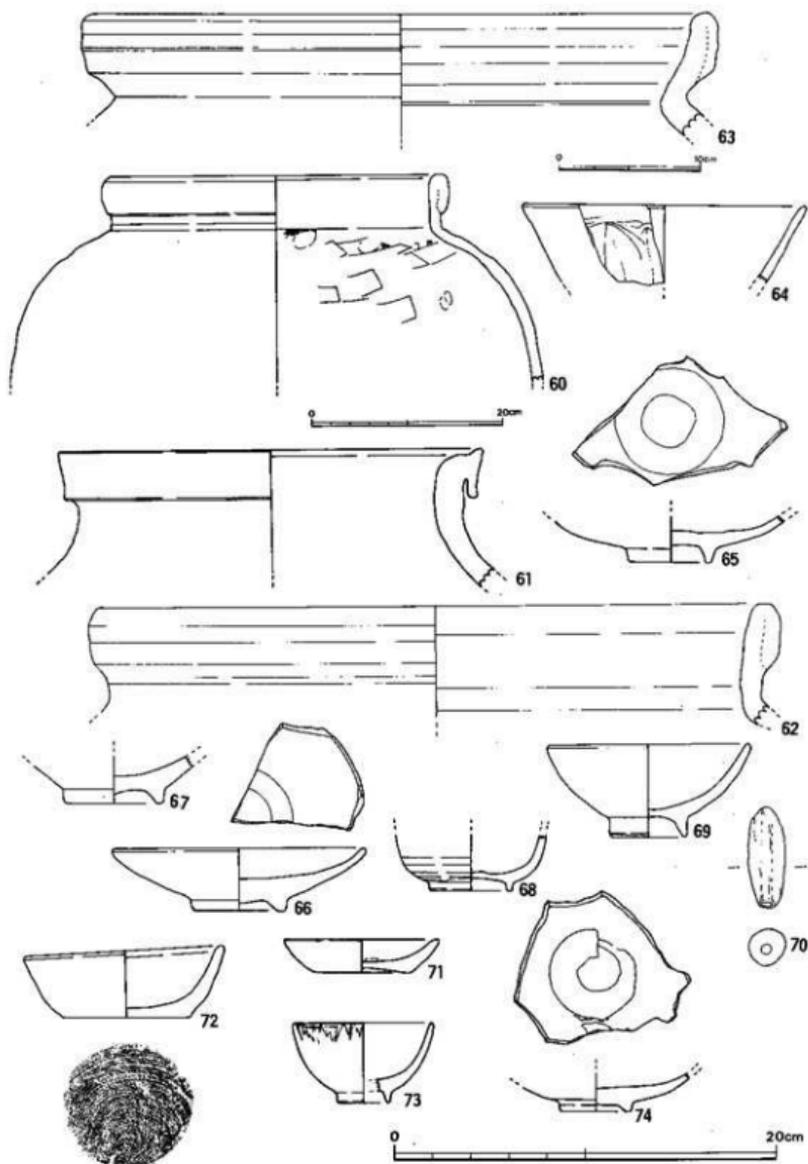


第117図 SK 27・33~35・37・52 出土遺物

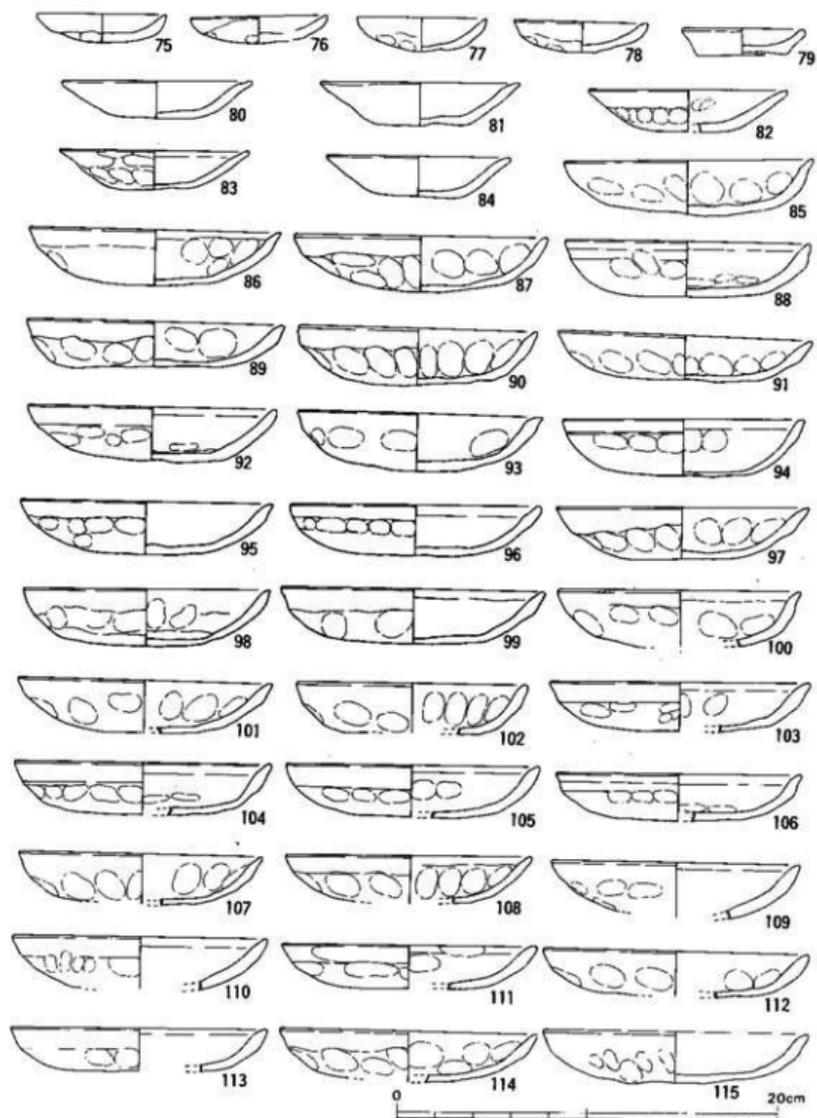


0 20cm

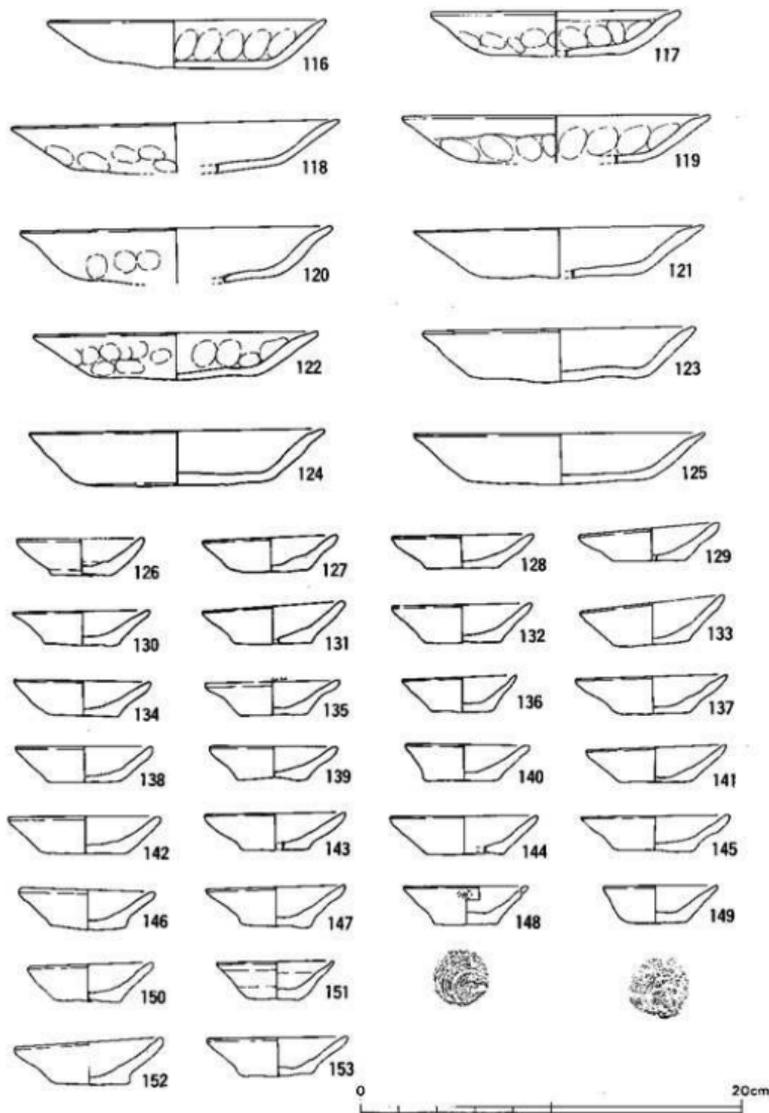
第118图 S K 58~60·68·73·75 出土遗物



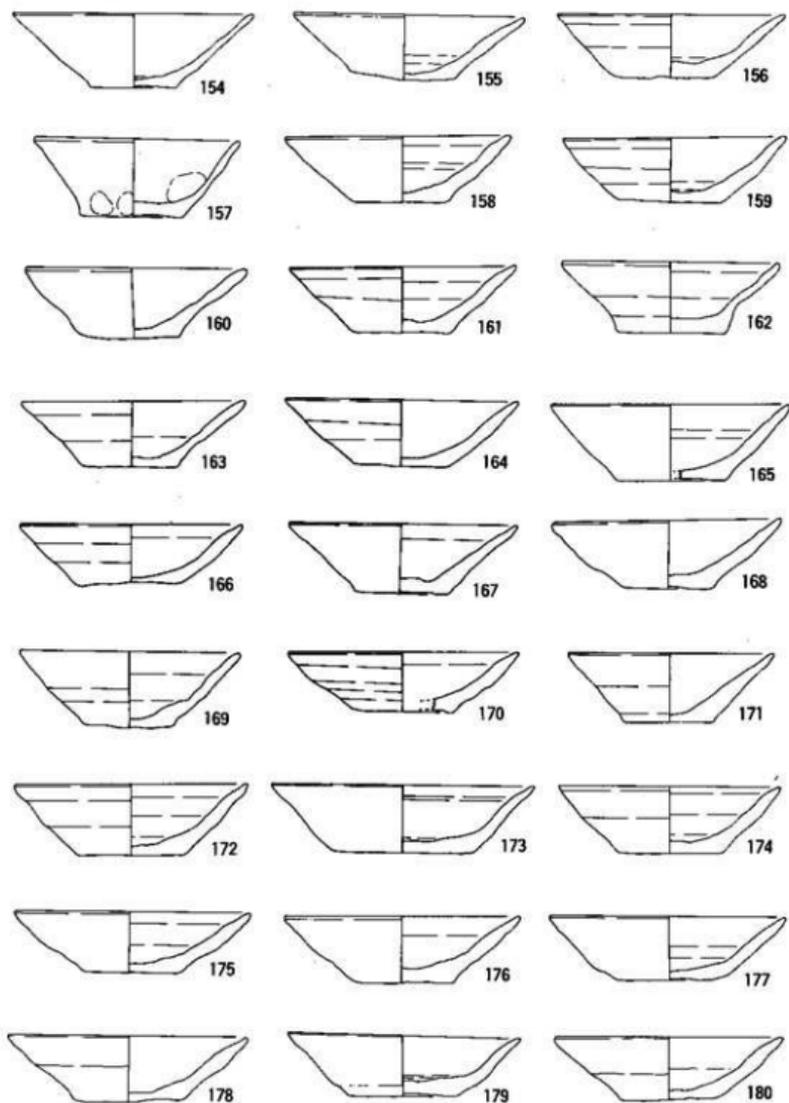
第119圖 S K 75・77・80・81 出土遺物



第120図 SK96 出土遺物

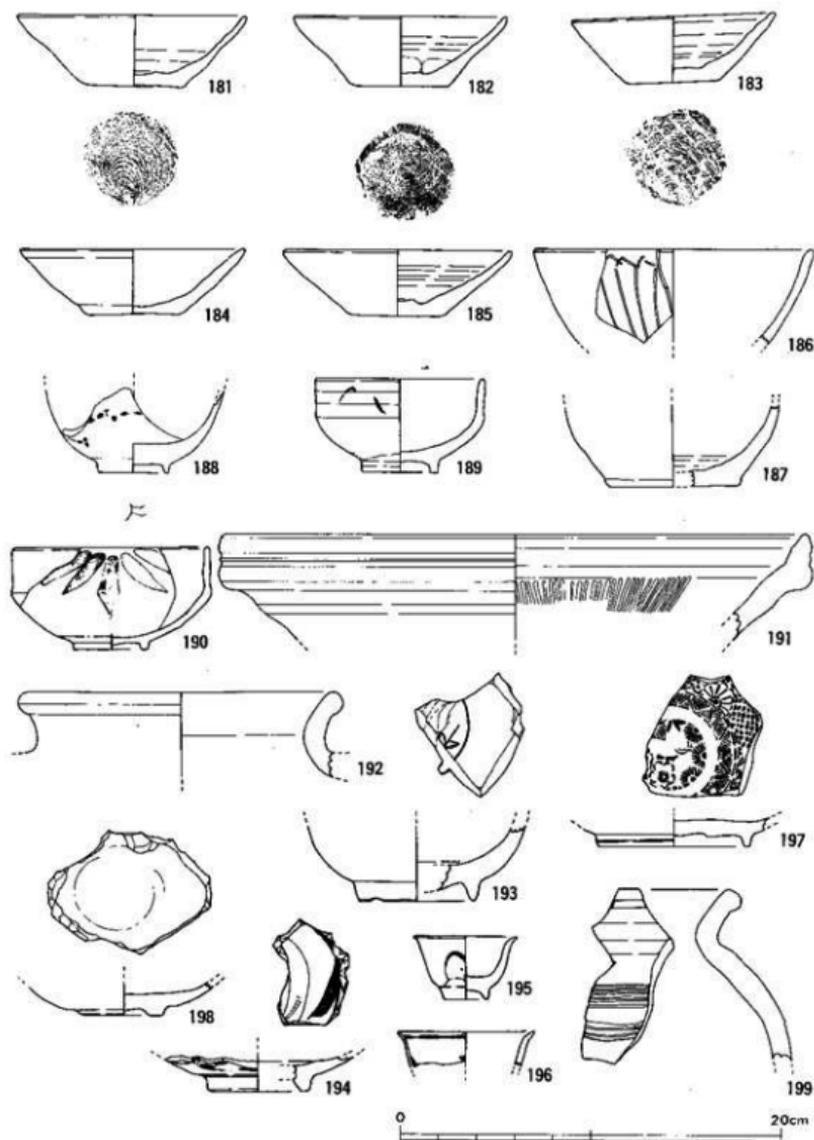


第121図 SK96 出土遺物

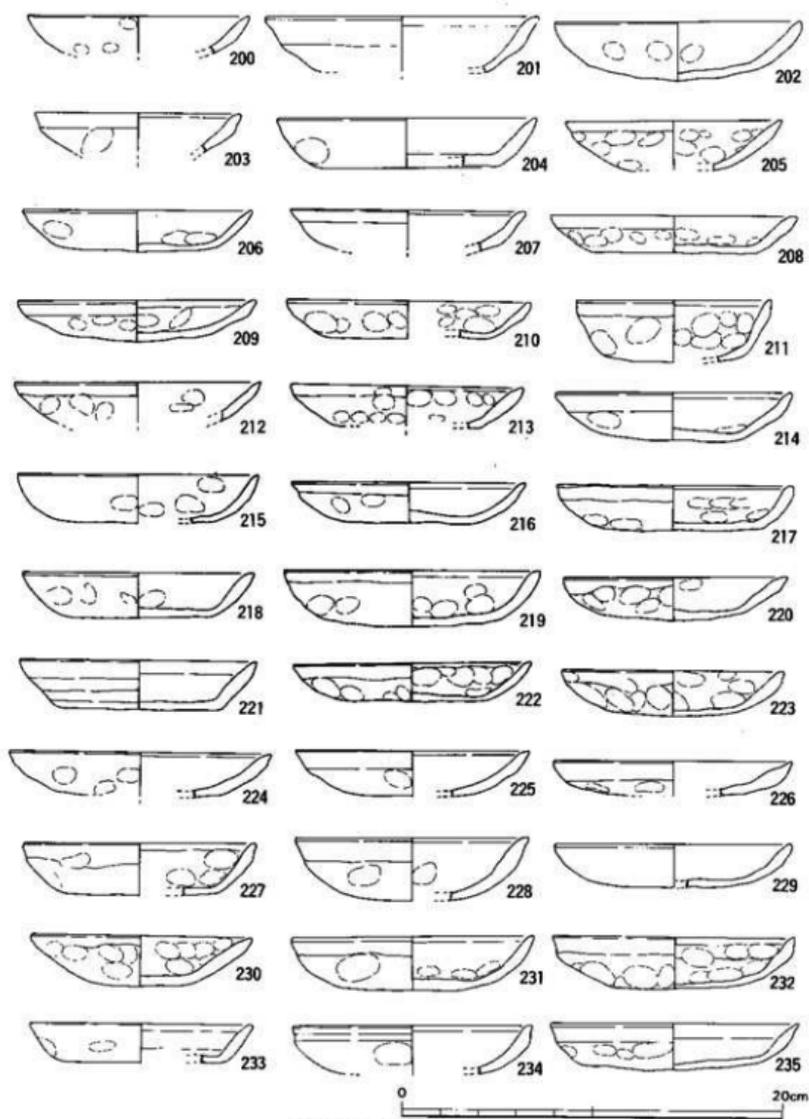


0 20cm

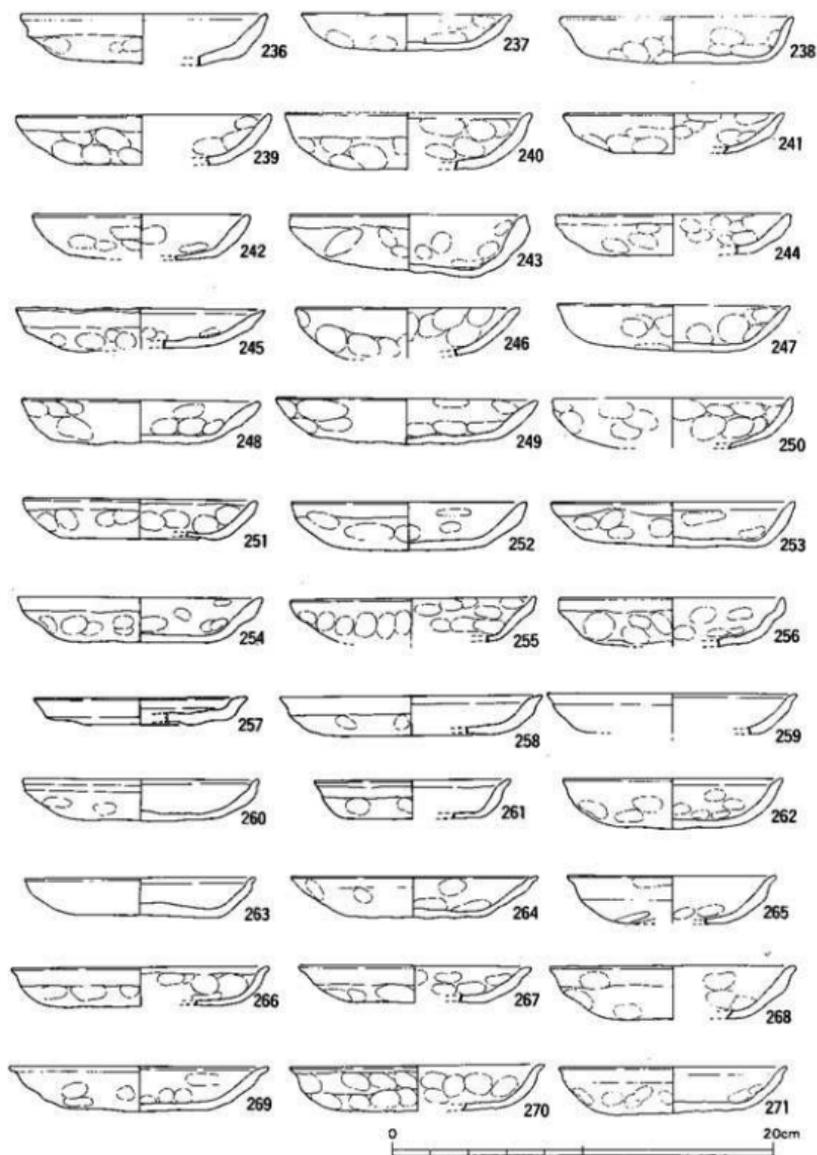
第122図 SK96出土遺物



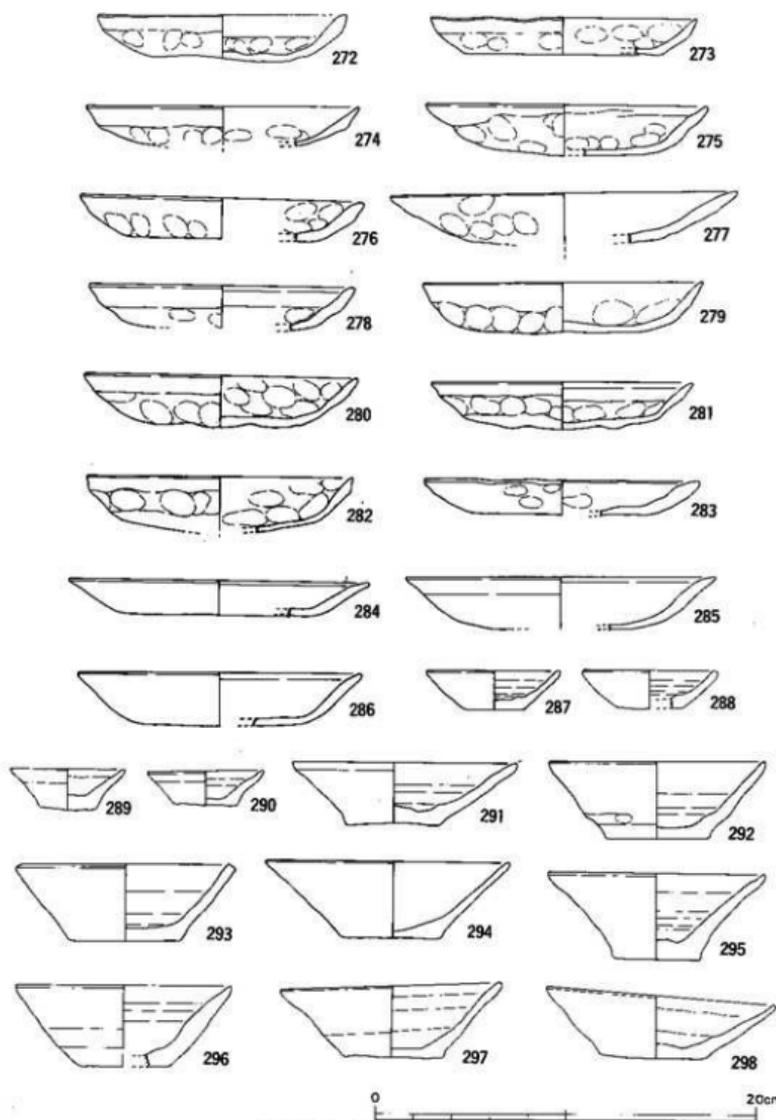
第123图 SK96·97·99、SD1 出土遺物



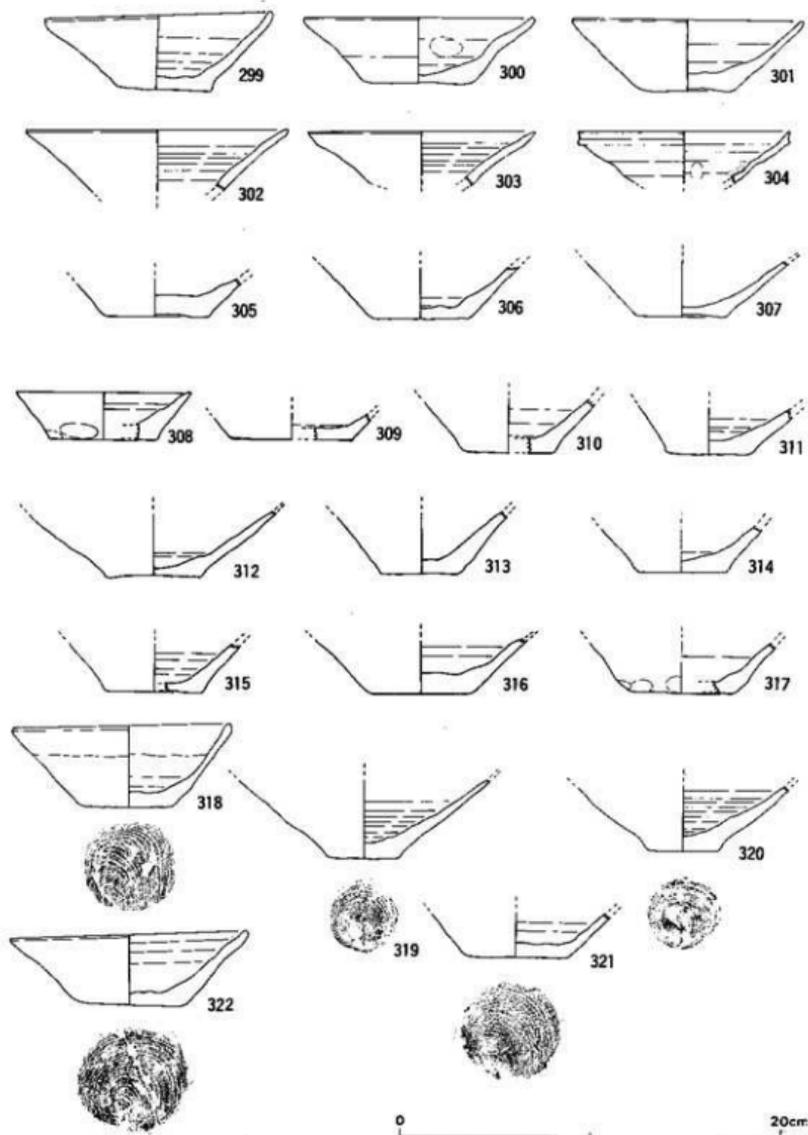
第124図 S D 2 出土遺物



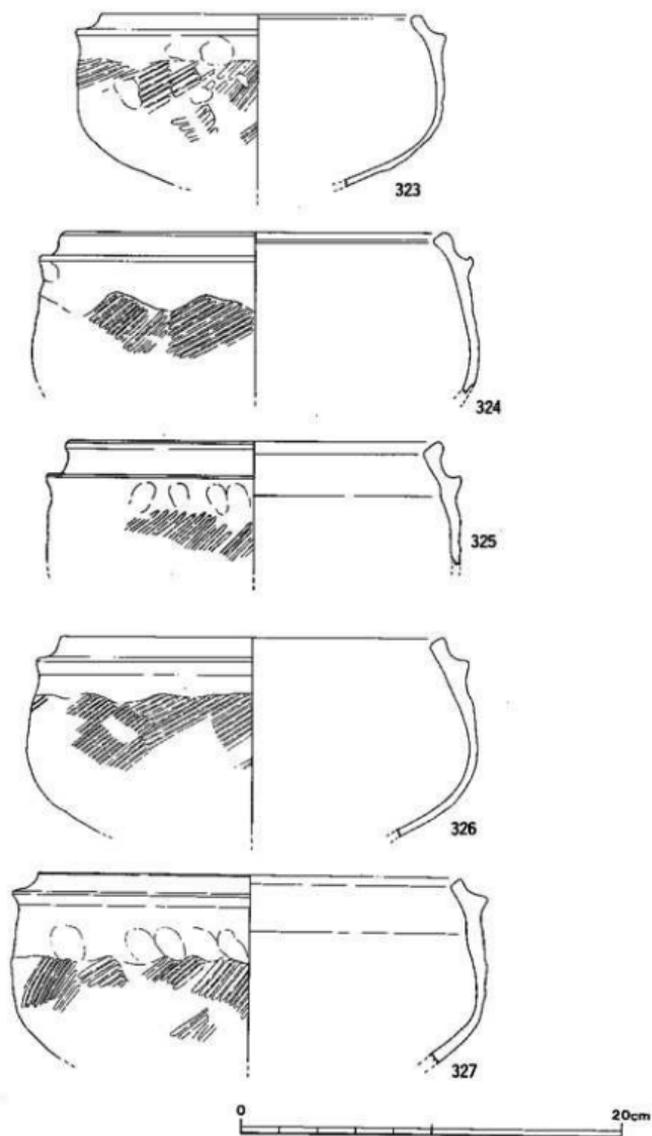
第125圖 SD 2 出土遺物



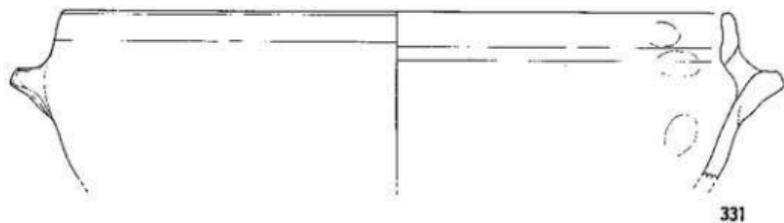
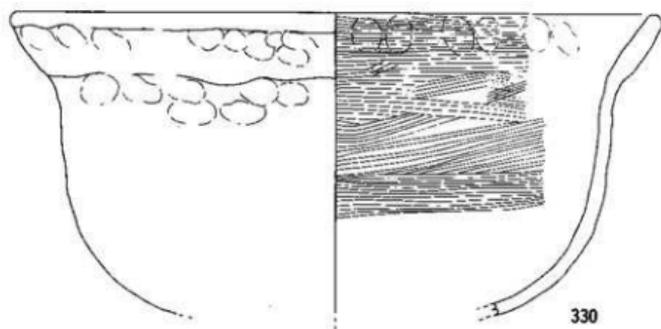
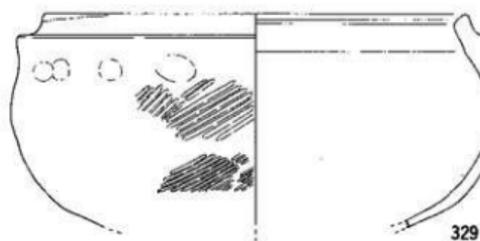
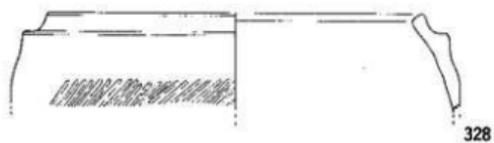
第126図 S D 2 出土遺物



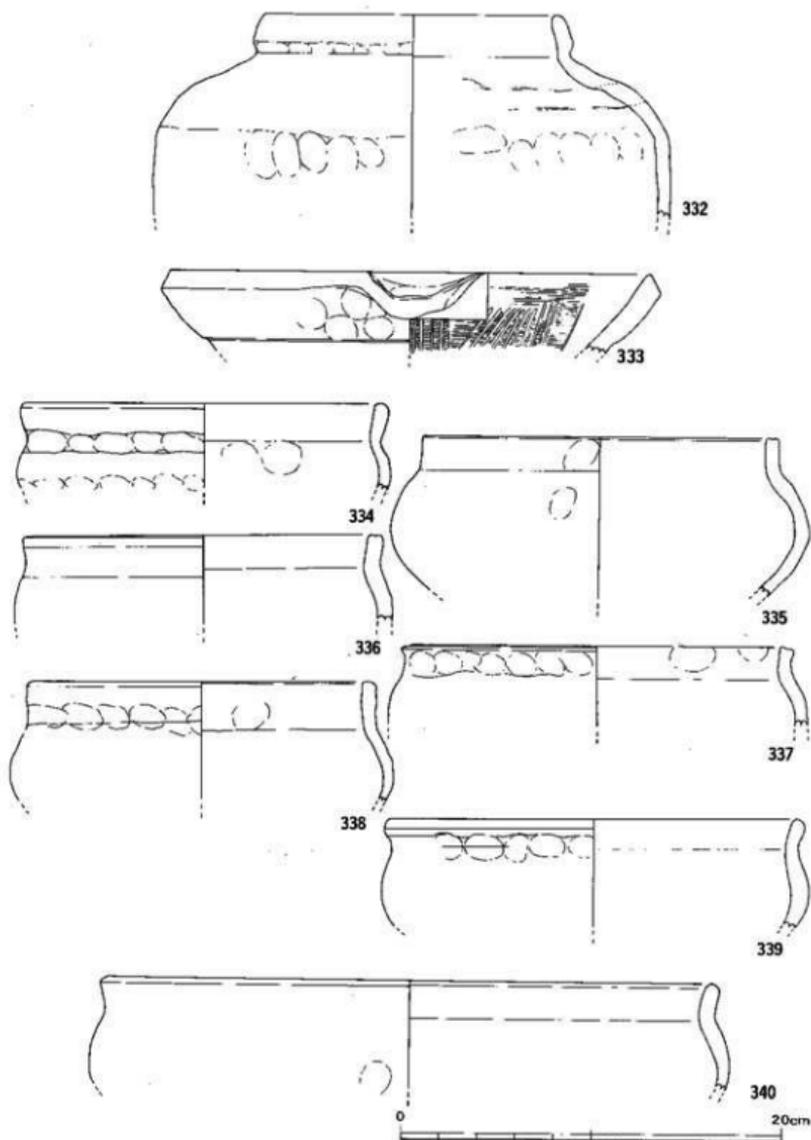
第127图 S D 2 出土遗物



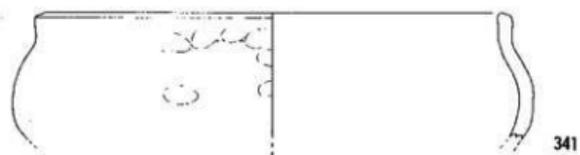
第128図 SD 2 出土遺物



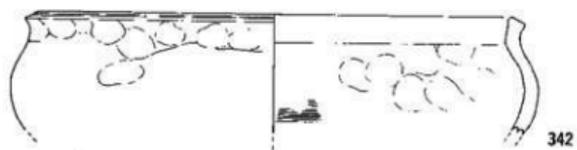
第129圖 S D 2 出土遺物



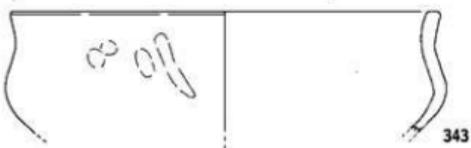
第130圖 SD 2 出土遺物



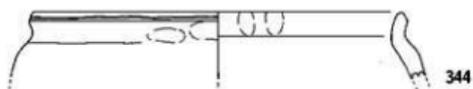
341



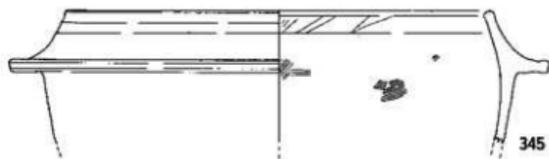
342



343



344



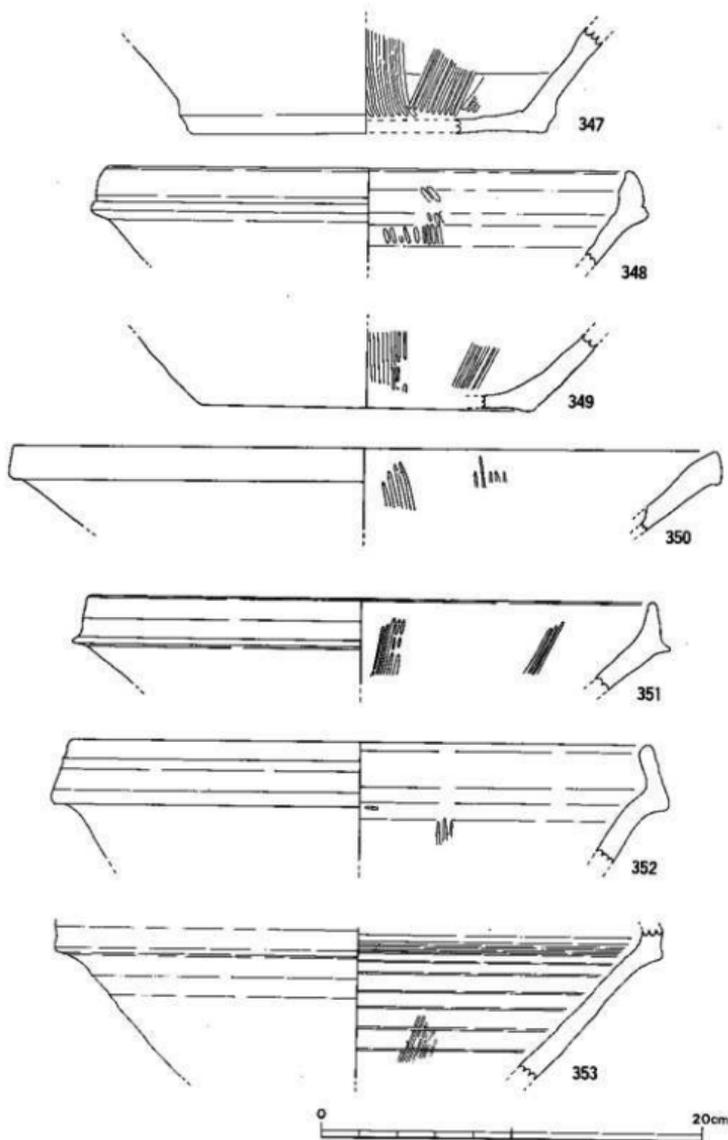
345



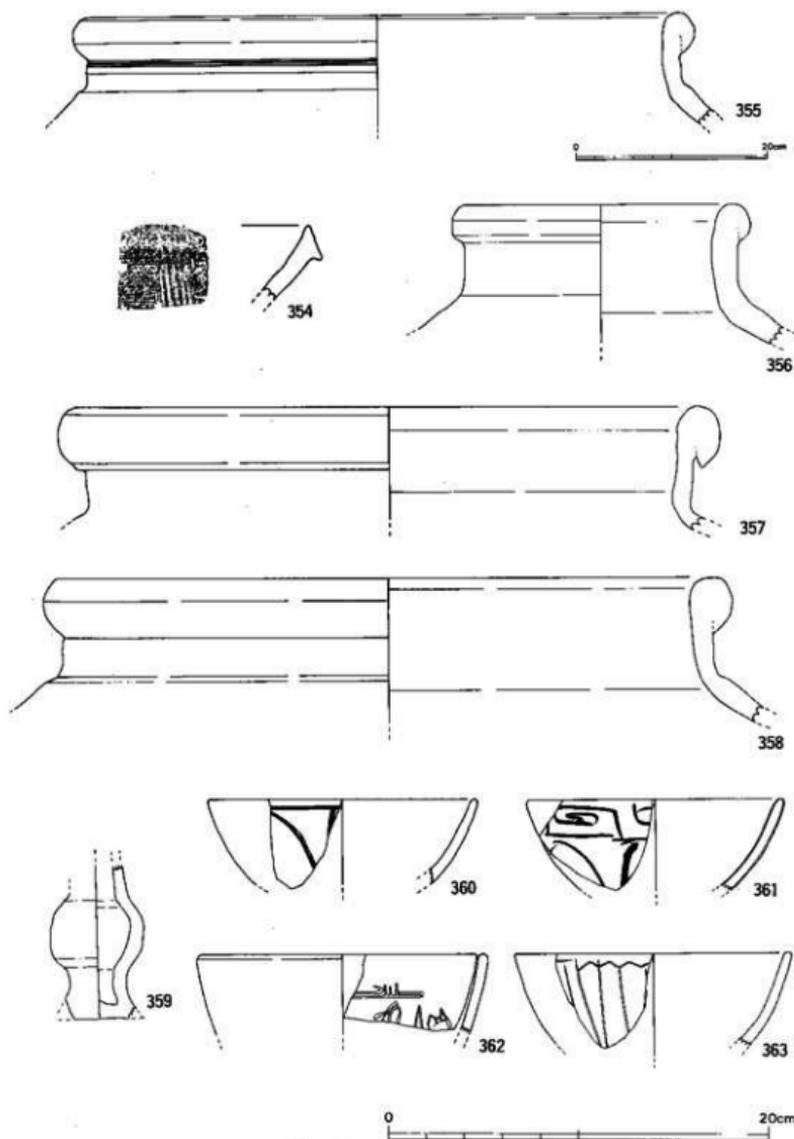
346



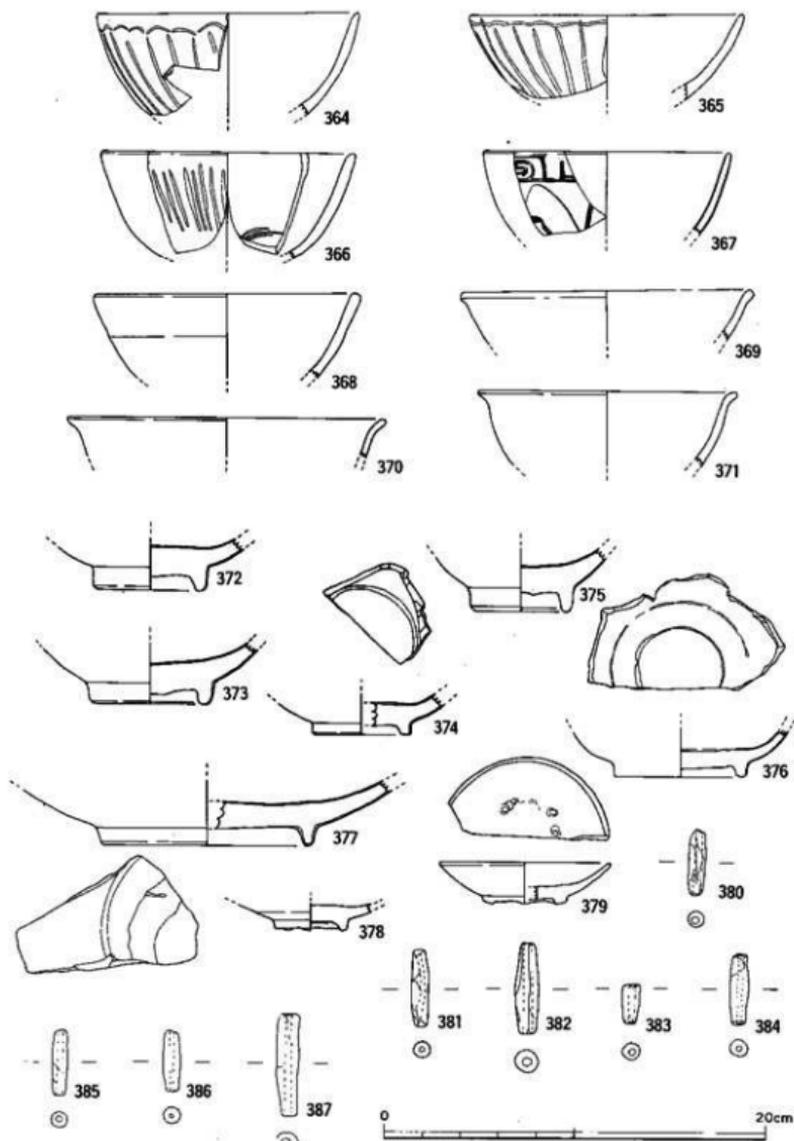
第131图 SD 2 出土遺物



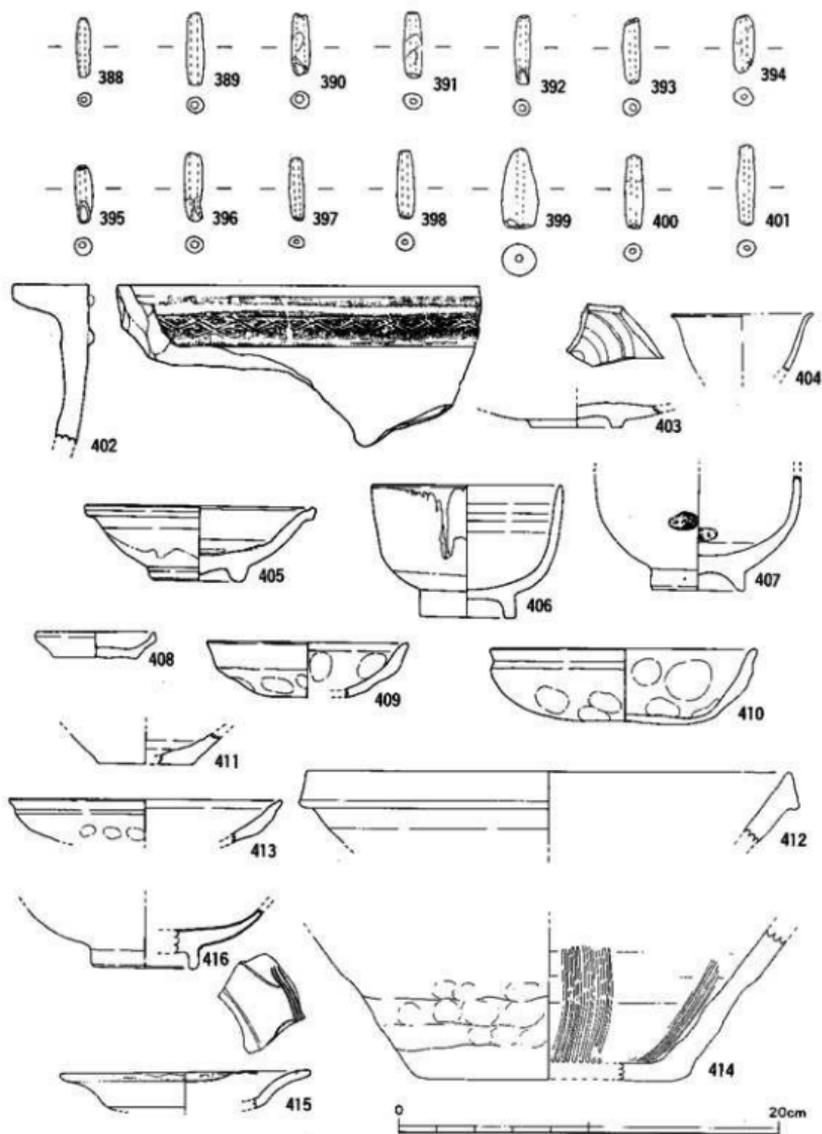
第132圖 SD 2 出土遺物



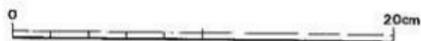
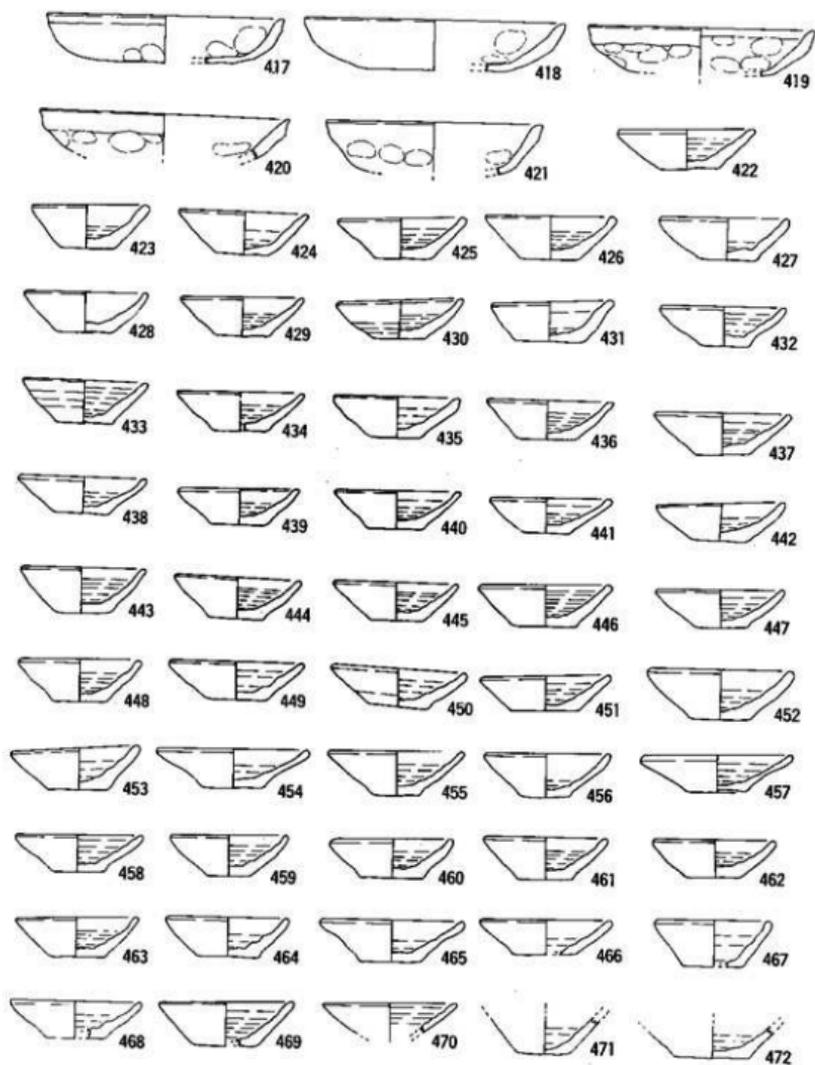
第133圖 SD 2 出土遺物



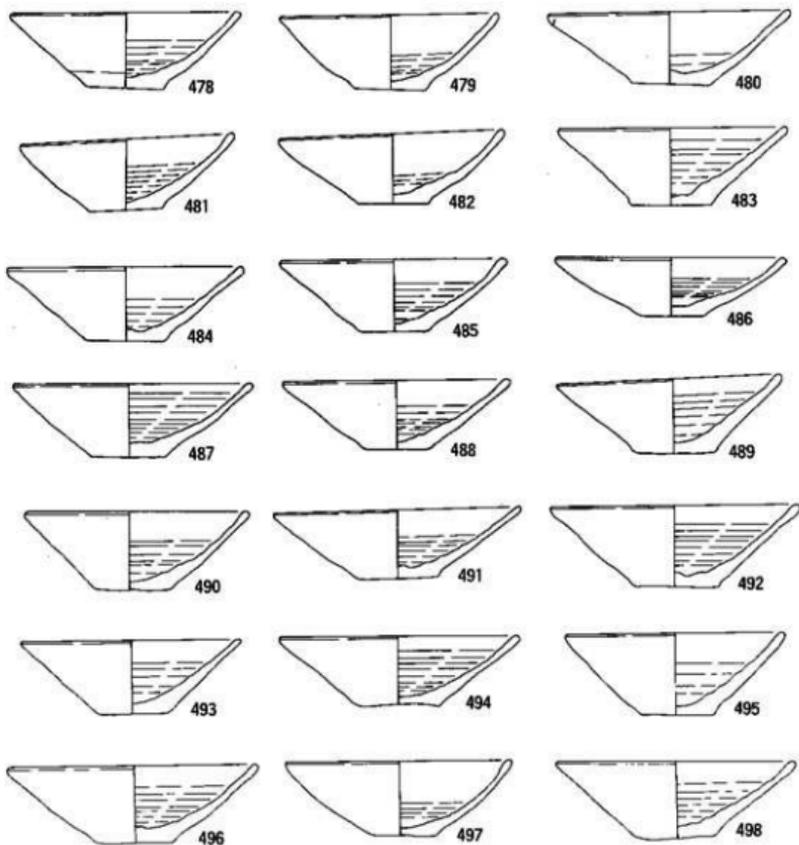
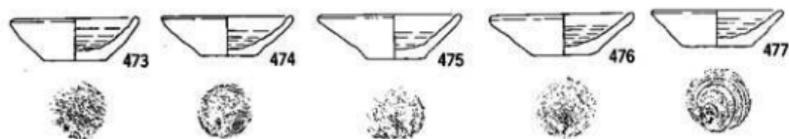
第134圖 SD 2 出土遺物



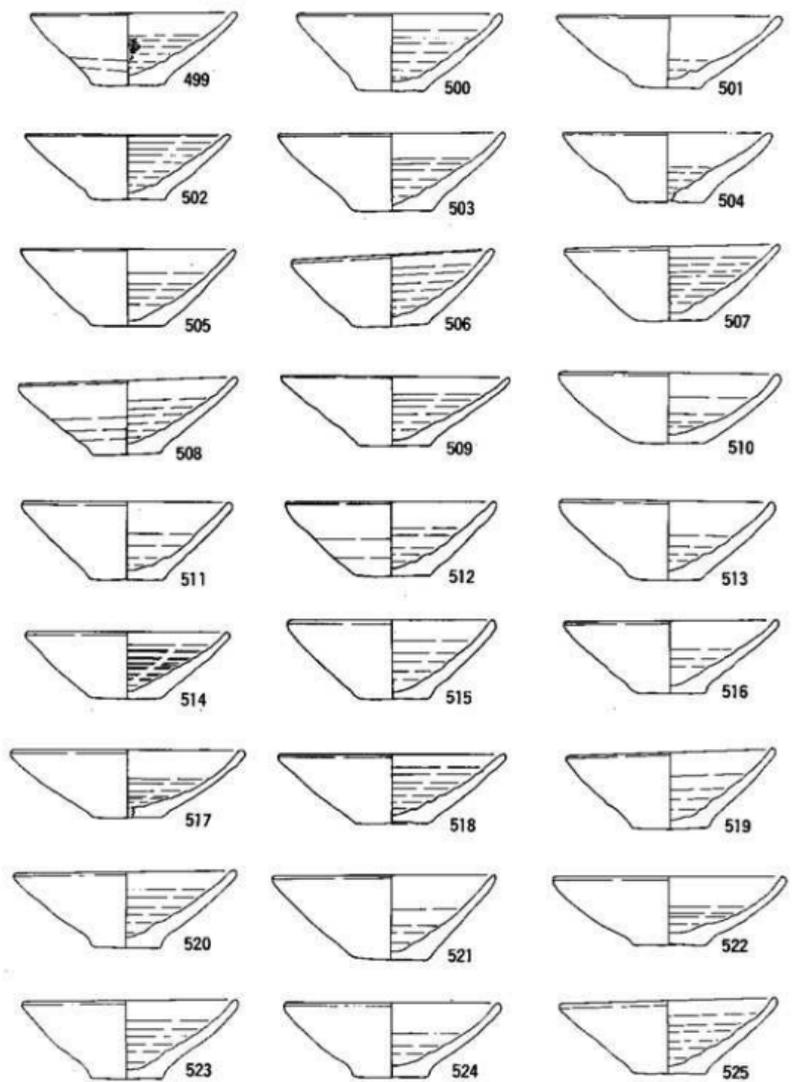
第135図 SD 2 ~ 4 出土遺物



第136图 SD 7 出土遗物

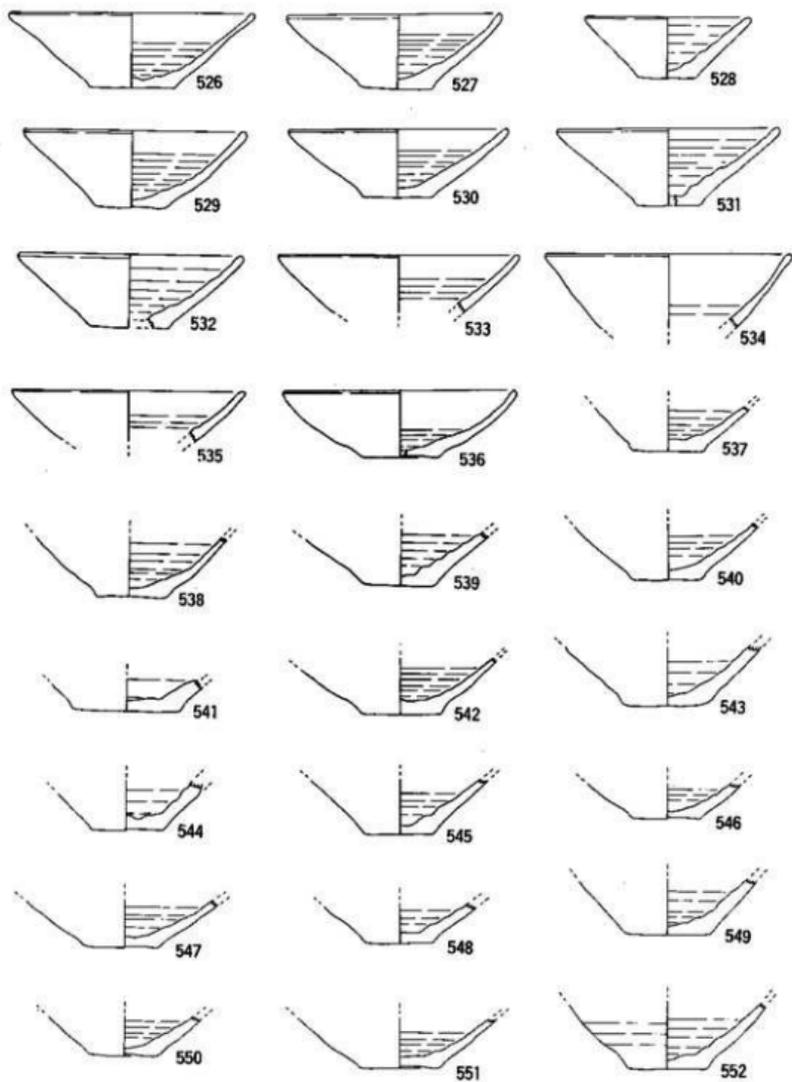


第137图 SD 7 出土遗物

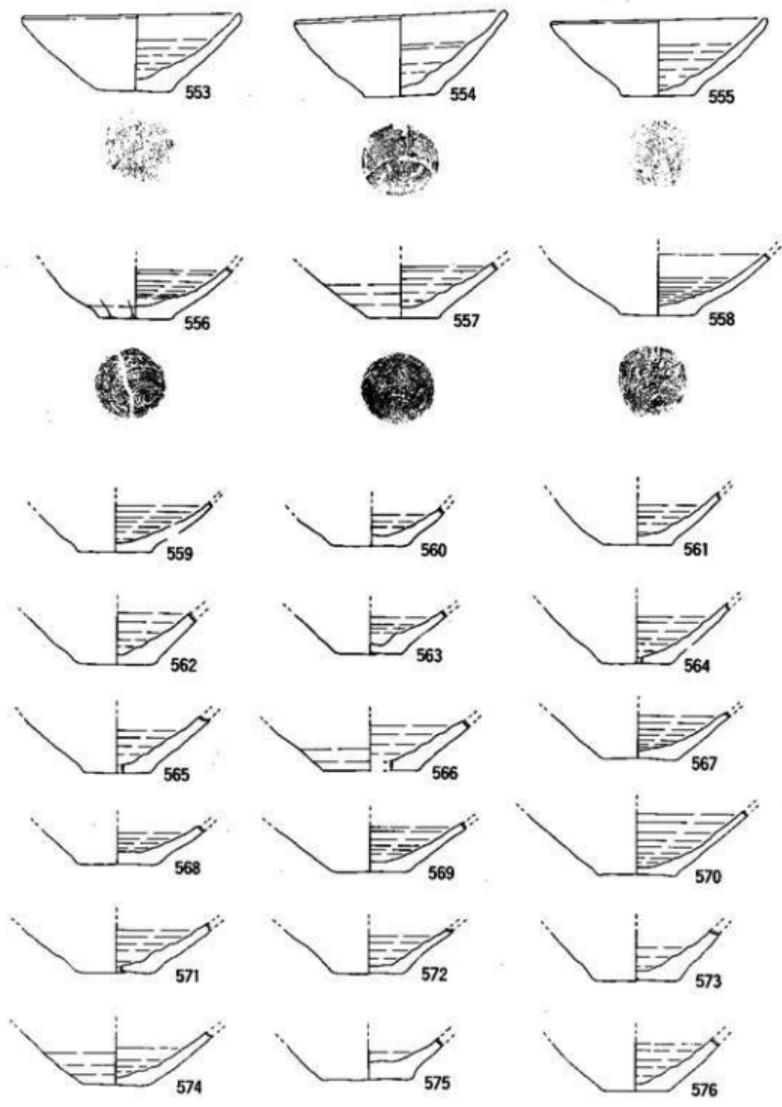


0 20cm

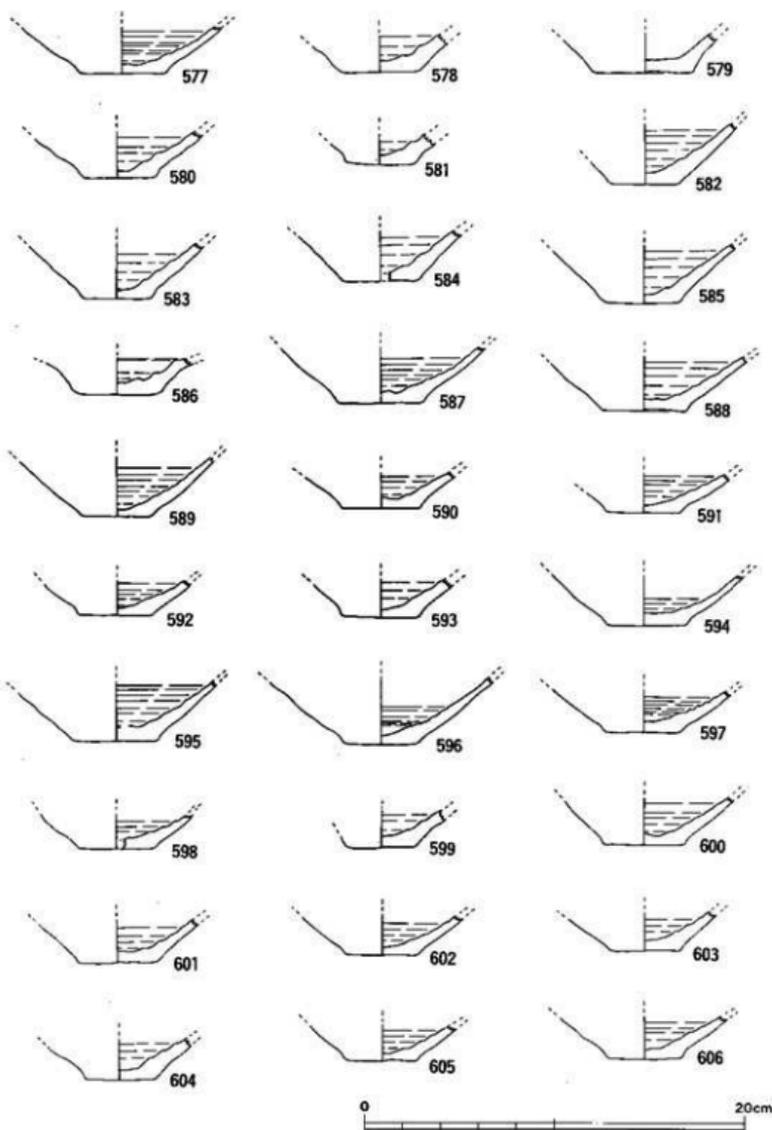
第138图 S D 7 出土遺物



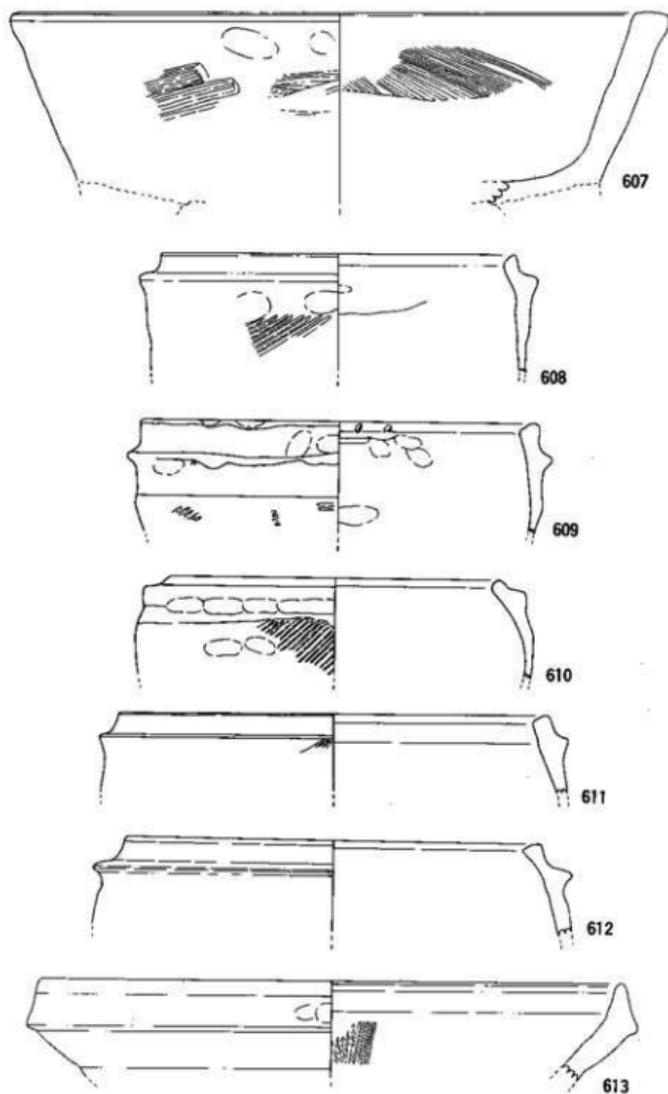
第139圖 S D 7 出土遺物



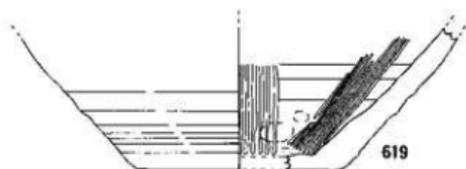
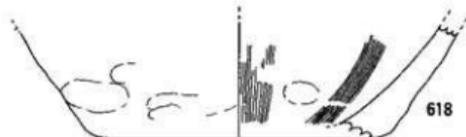
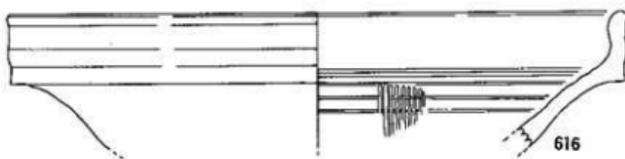
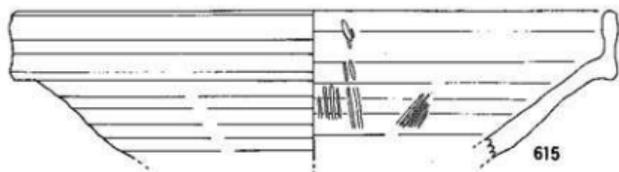
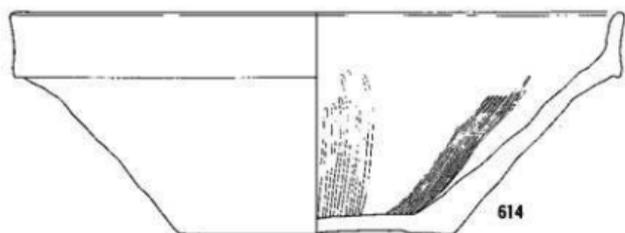
第140図 S D 7 出土遺物



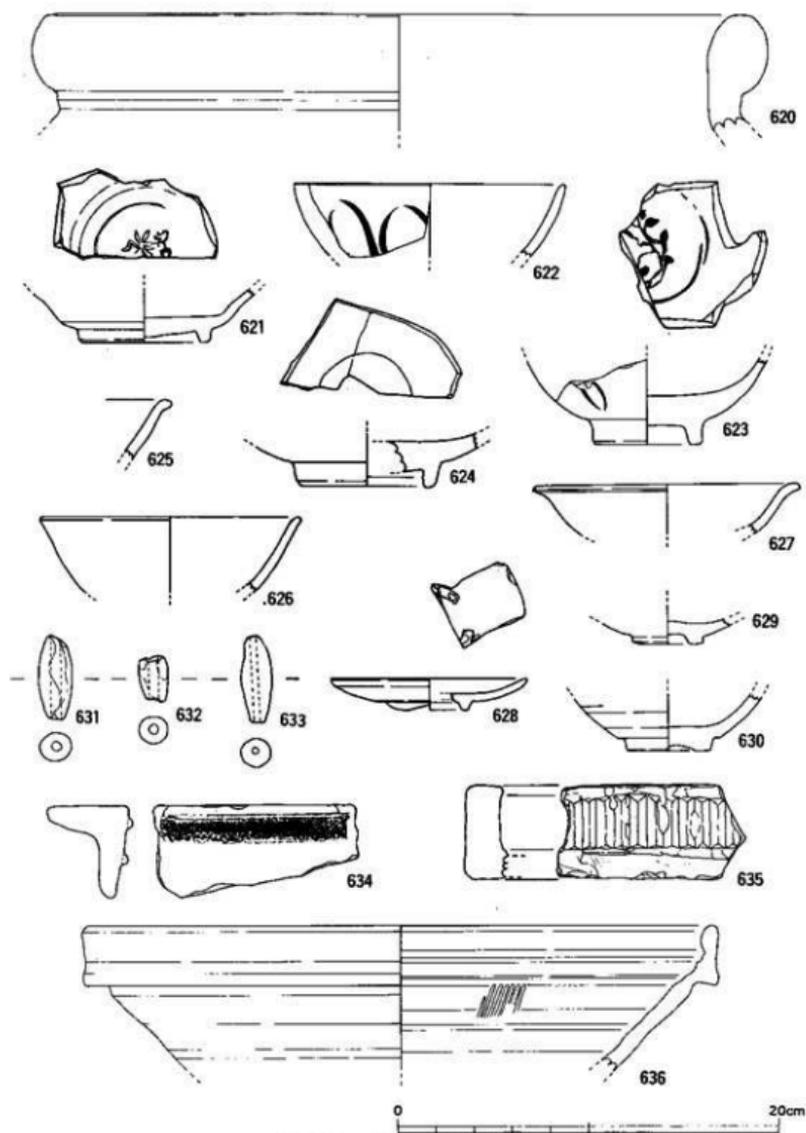
第141圖 SD 7 出土遺物



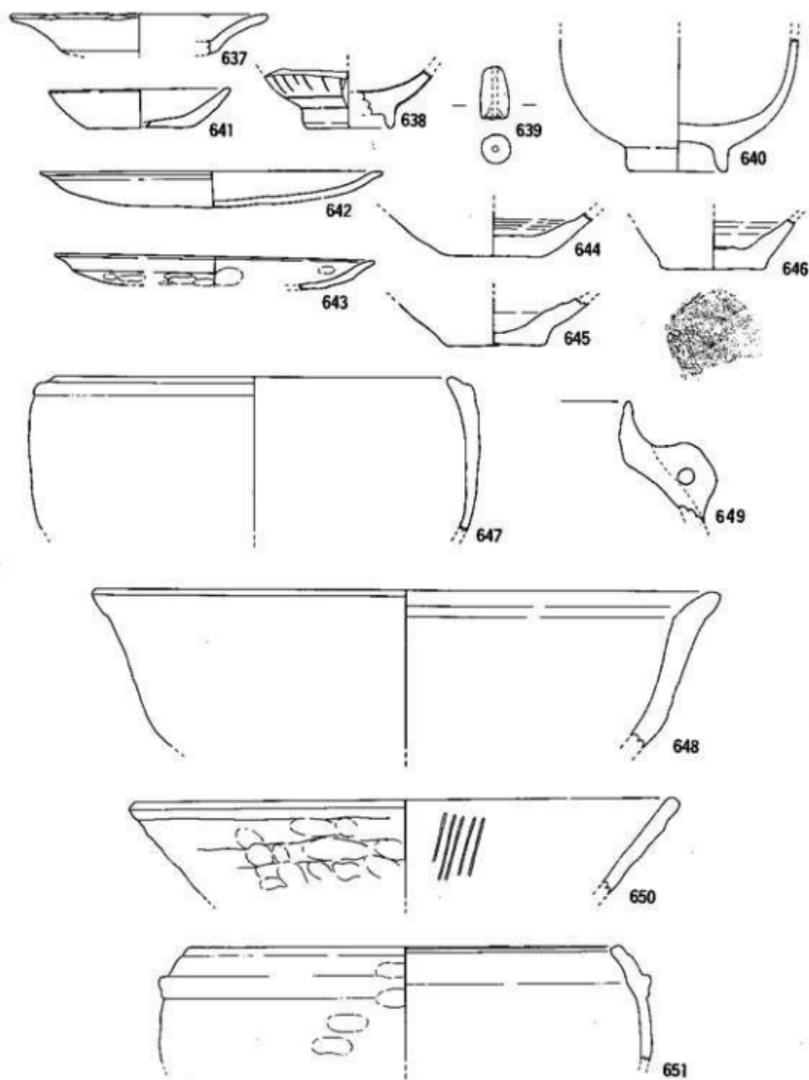
第142図 SD 7 出土遺物



第143图 SD 7 出土遗物

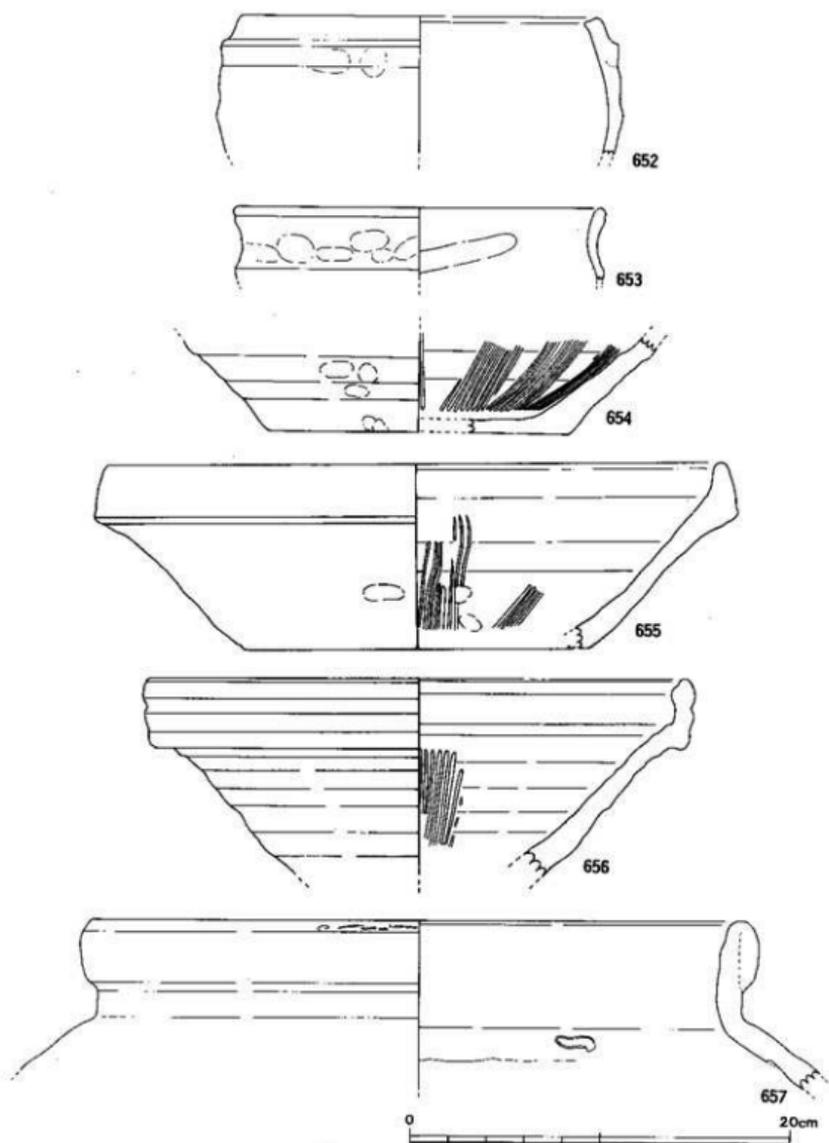


第144图 S D 7 · 9 出土遺物

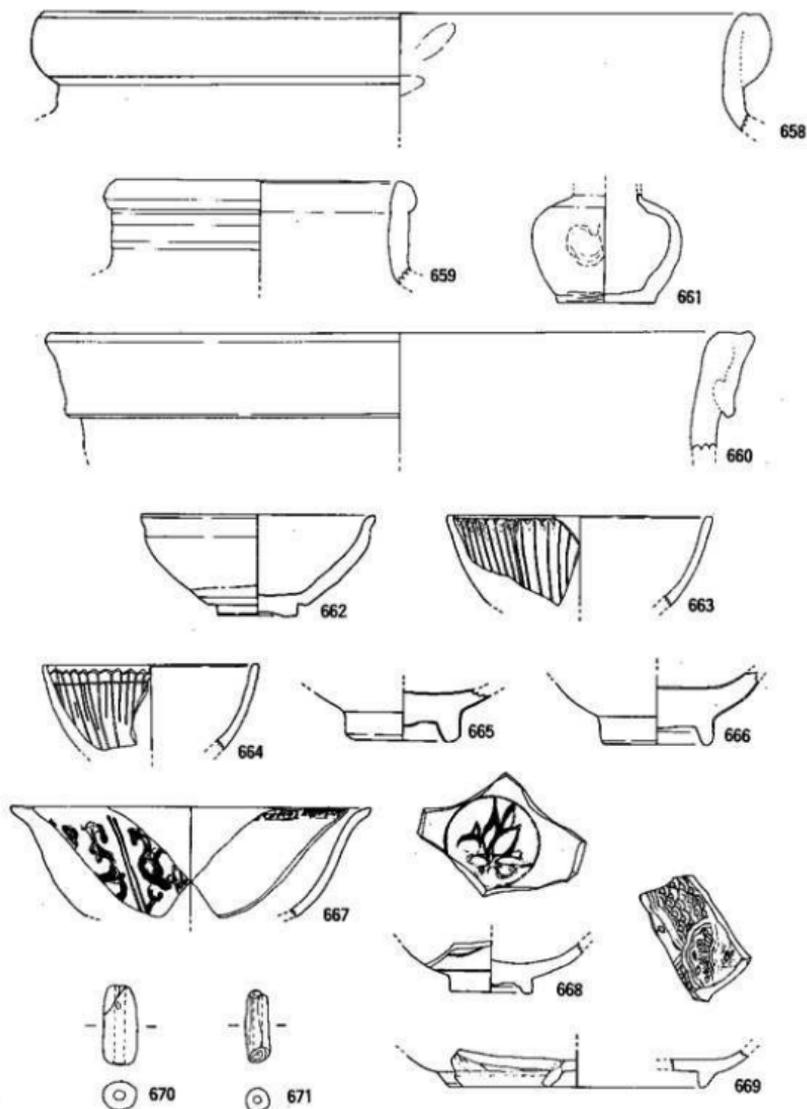


0 20cm

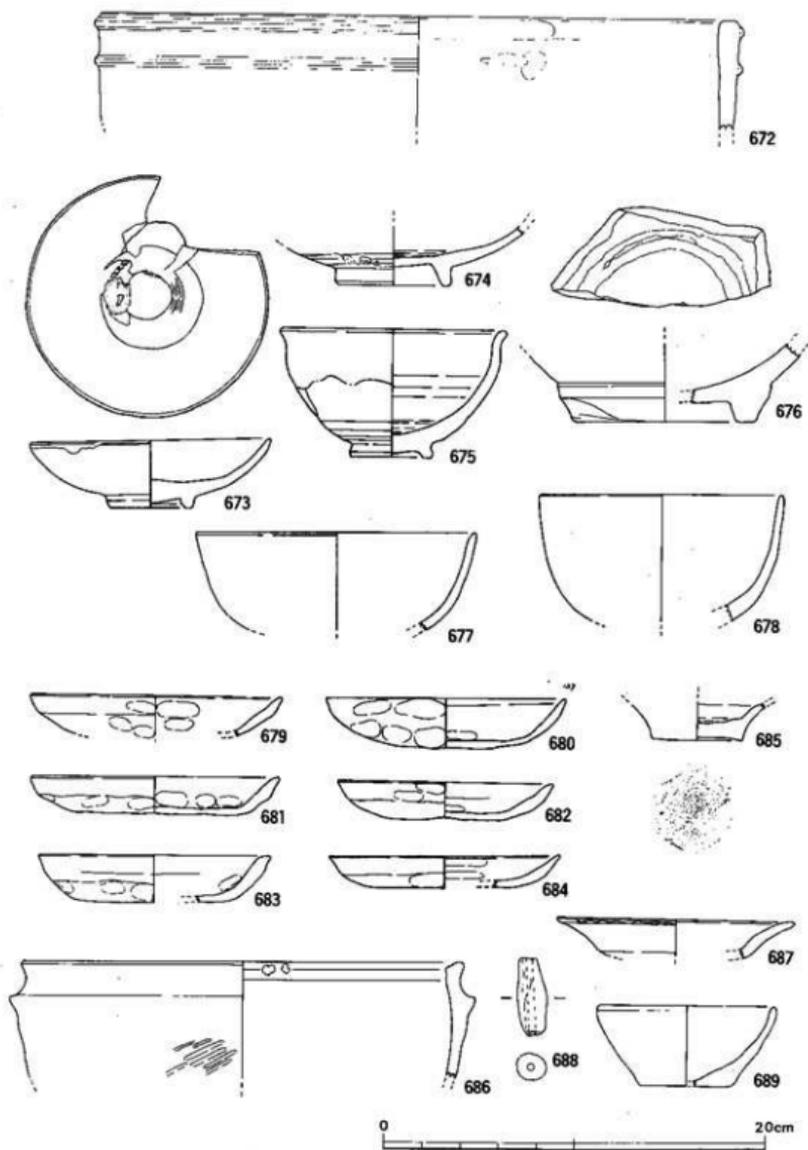
第145図 SD 9・13 出土遺物



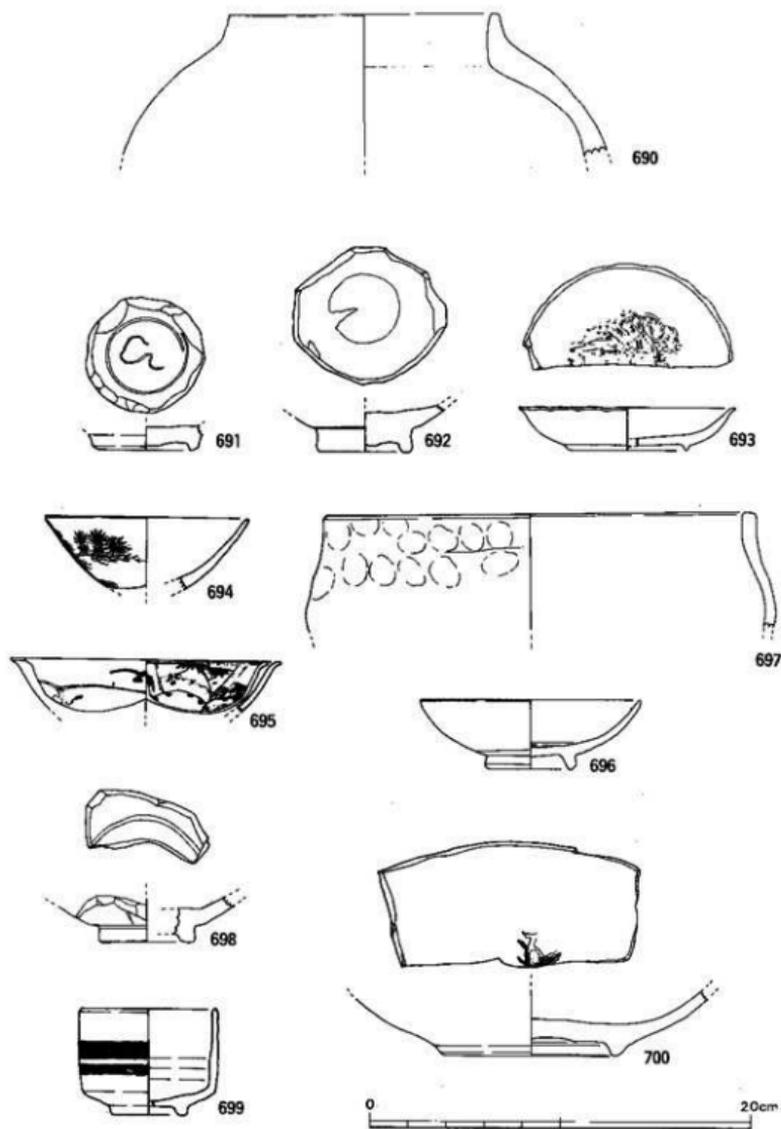
第146図 S D13 出土遺物



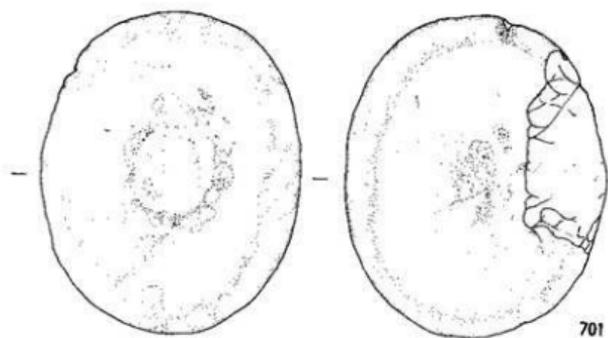
第147圖 SD13 出土遺物



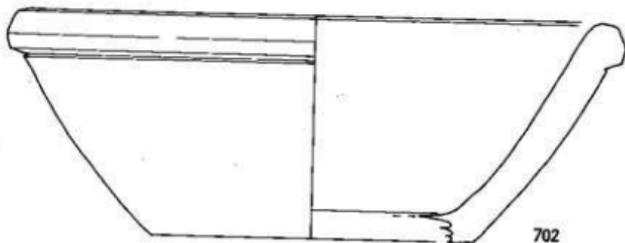
第148圖 S D13~15 出土遺物



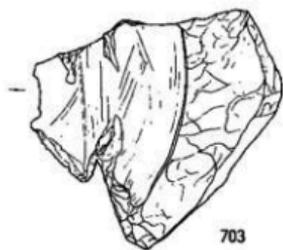
第149圖 SD15・16、SE1、P1 出土遺物



701



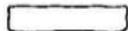
702



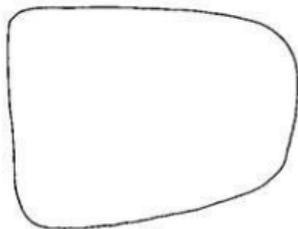
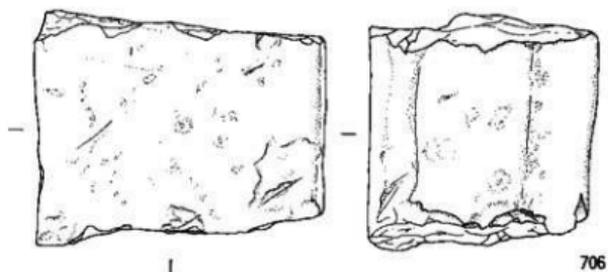
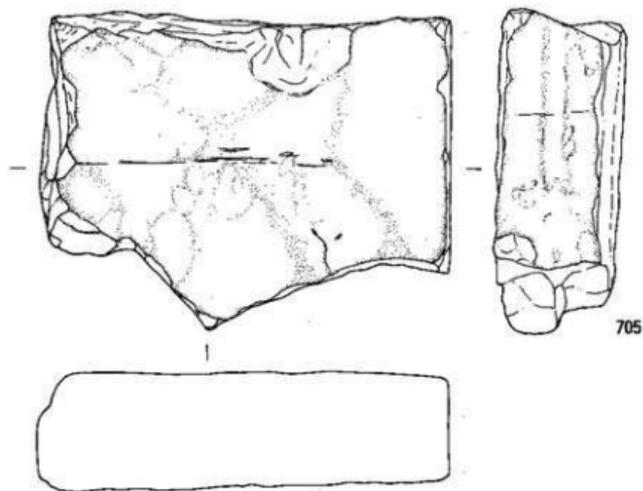
703



704

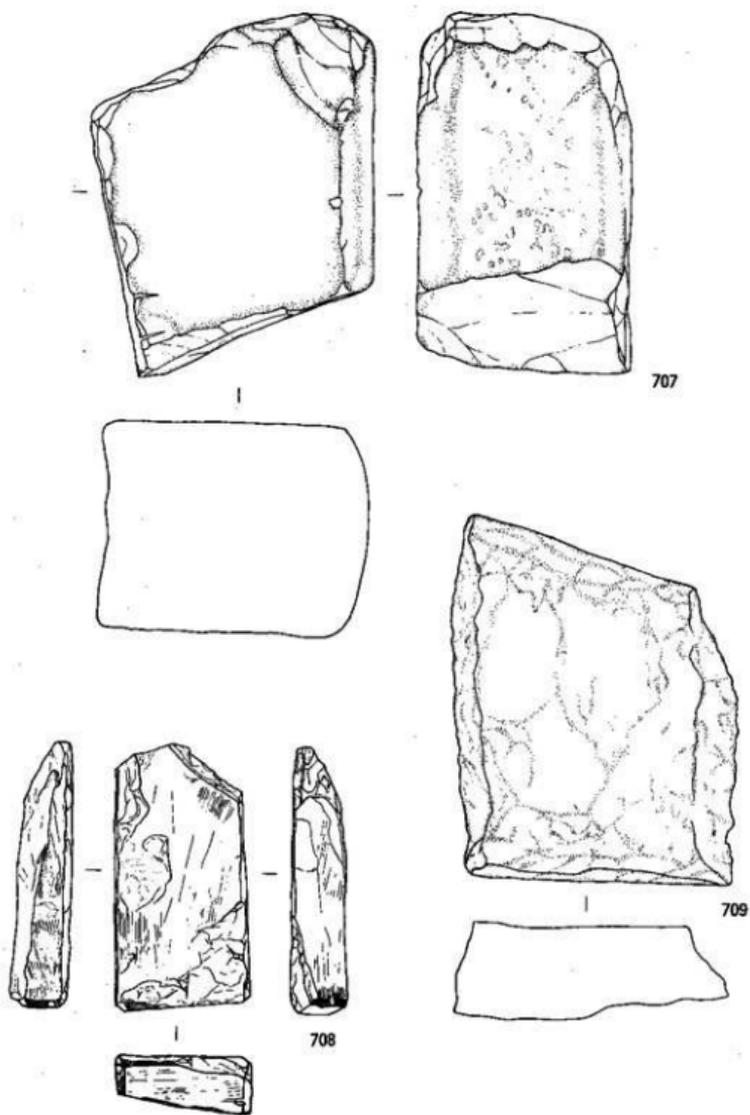


第150圖 SK58・81、SD2・7 出土遺物

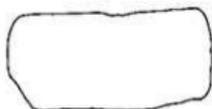
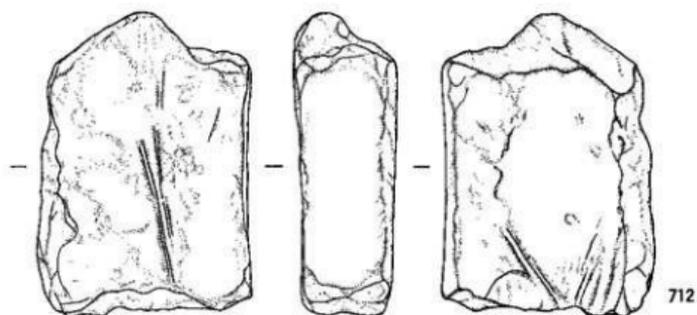
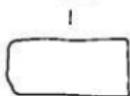
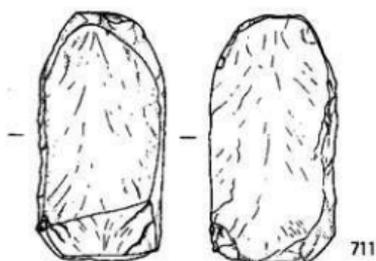
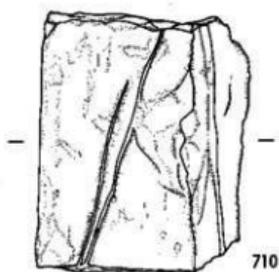


0 10cm

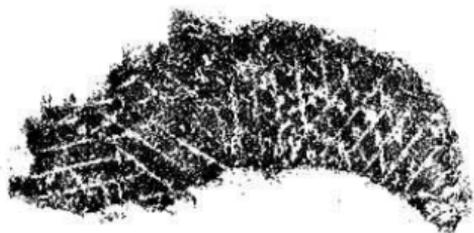
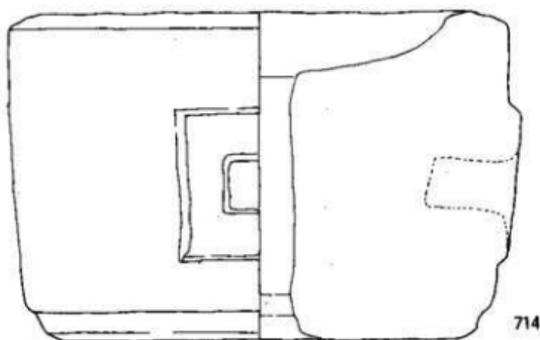
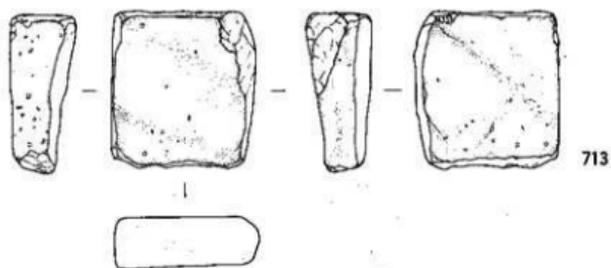
第151圖 SK52、SD7 出土遺物



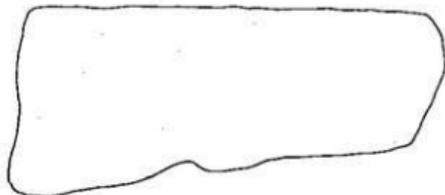
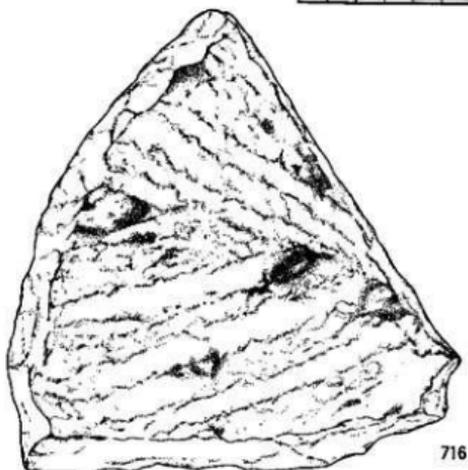
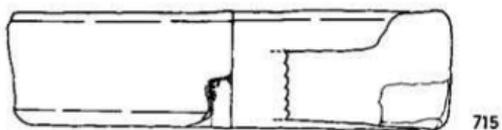
第152圖 SD 7・9 出土遺物



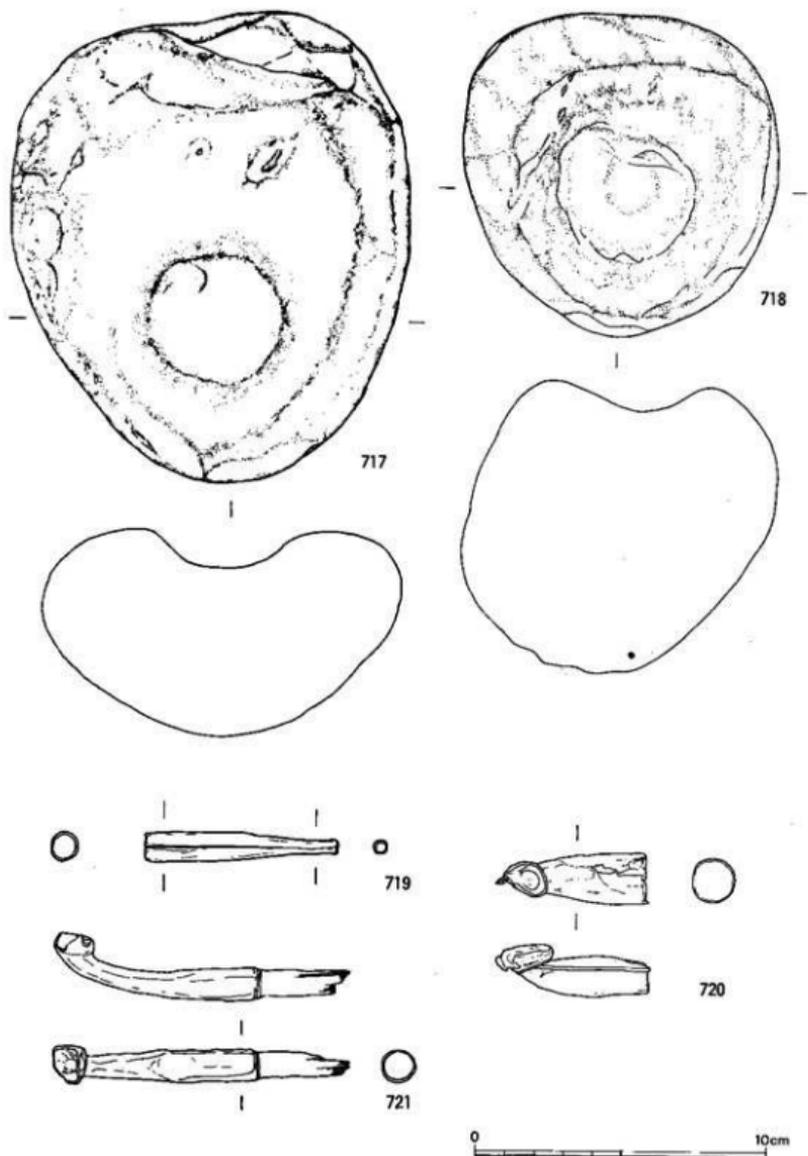
第153圖 SD 7・9・13 出土遺物



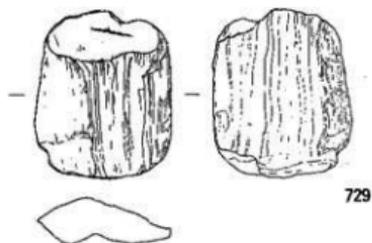
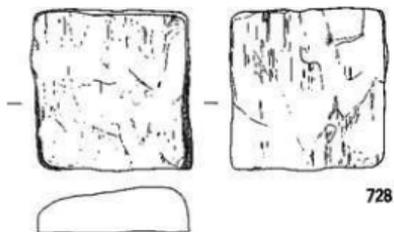
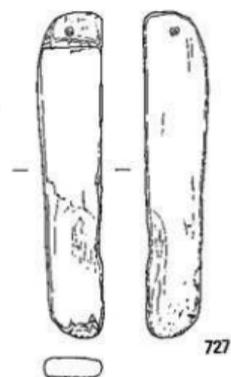
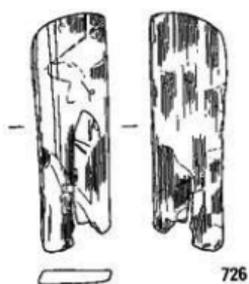
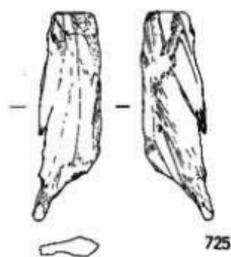
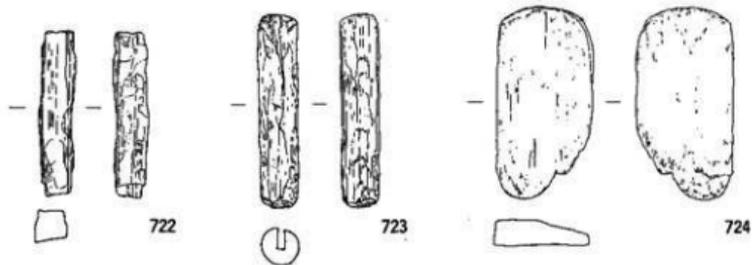
第154図 SK 81、SD 7 出土遺物



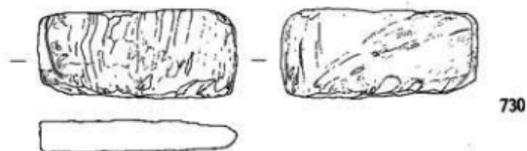
第155圖 SK81、SD12 出土遺物



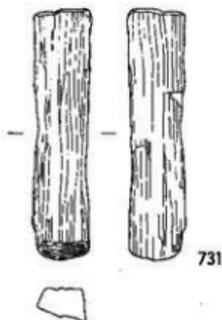
第156圖 SK17・25・81、SD2・7 出土遺物



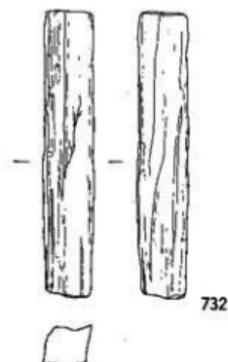
第157図 SK60、SD15、SE1 出土遺物



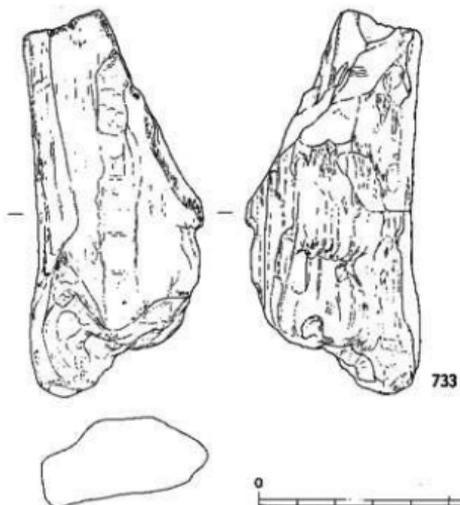
730



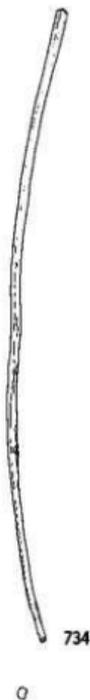
731



732



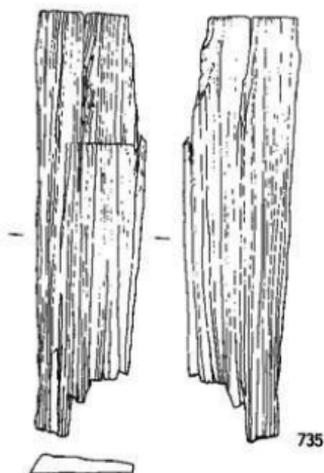
733



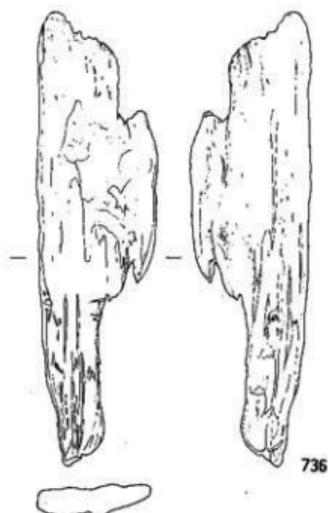
734



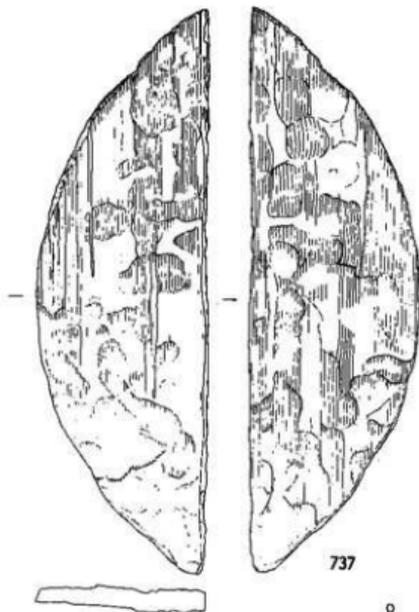
第158圖 S D 15 出土遺物



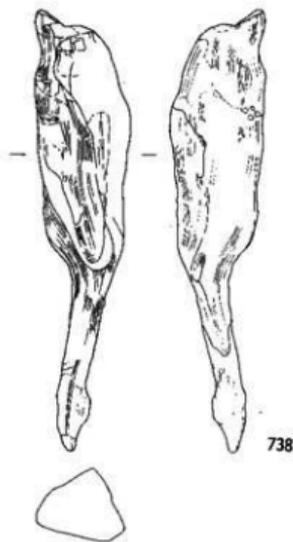
735



736



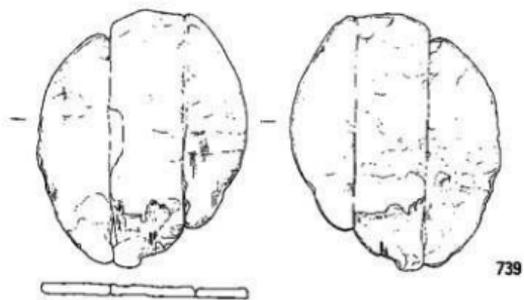
737



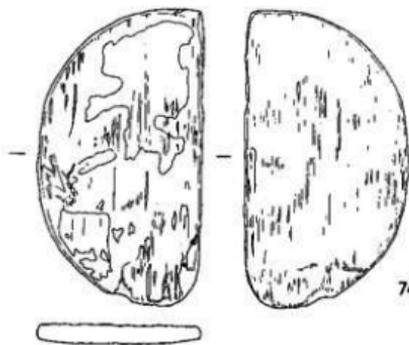
738

0 20cm

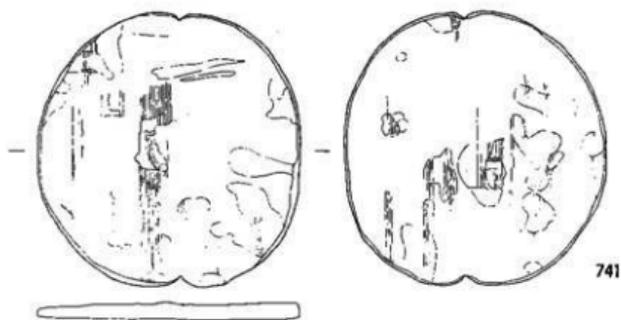
第159圖 SD15、SE1 出土遺物



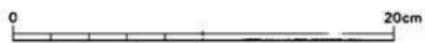
739



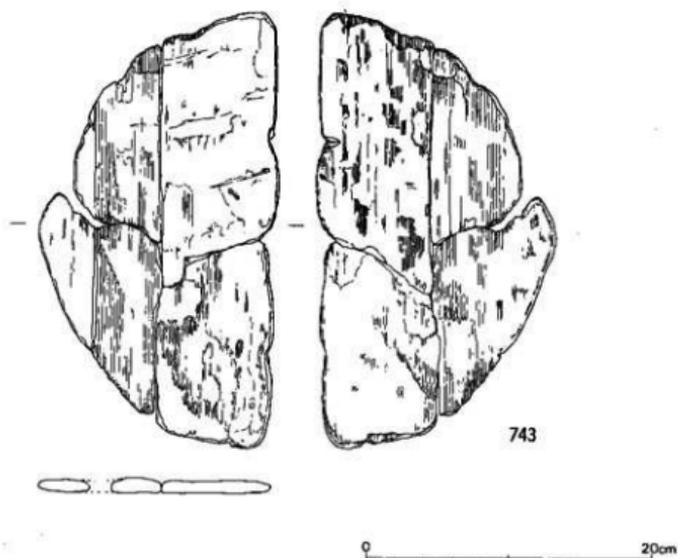
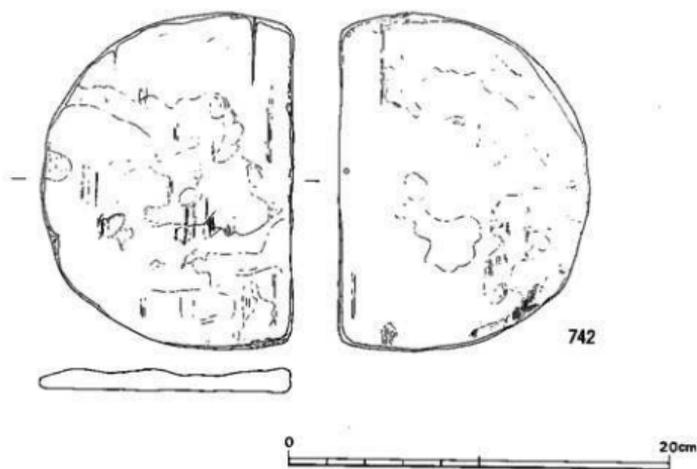
740



741



第160図 SE 1 出土遺物



第161圖 SK60、SE1 出土遺物



744



745



746



747



748



749



750



751



第162圖 S K 20~22・37・62・122 出土遺物

## 4. Loc. 43

## Loc.43

### 1. 位置と調査経過

Loc. 43は、田村遺跡群の北端部に位置しており、場外整備事業として行われた。田村川から分かれ、場外場周水路から秋田川へ流れる排水路の工事に伴うものである。字名は柱昌寺中と呼ばれている。現状は、細勝寺の西を100m南下し、さらに東へと続く、幅約2mの水路であり、工事計画は、水路幅を3mと拡張し、深さは約2mほどに掘り下げ、コンクリート3面張りにするものであった。調査区の範囲は、現状の水路部分とわずかな拡張部分であり、東西方向の部分では道路の下なども工事範囲に入っていたので、調査は工事工程により期間的な問題もあって、南北方向と東西方向の部分の2回に分け行われ部分的には工事と並行して調査が行われた。

今回の調査範囲は、従来、田村城の外堀が図上で復元され、その存在が明確な部分であった。調査の結果は水路部分の調査であり、かつ調査面積も狭いので、その全貌を知ることはできなかったけれども、堀の存在は実証された。

調査期間は昭和57年10-12月にかけての約3か月間であり、調査面積は873㎡である。

### 2. 調査概要

調査は、当初、空港拡張範囲の北の場周道路及び水路部分として試掘調査を行った。この試掘グリッドにおいて、堀の南西コーナーの壁が検出され、また、東の試掘グリッドでは、弥生時代前期及び中～近世の土壌が検出された。そこで現状の水路及び道路部分については、工事の段階で調査を行うことにし、それ以外の拡張部分については、事前に調査を行った。

柱昌寺中の西辺にあたる水路部分については工事工程上、まず最初に調査された。その結果、現状の水路には重複するように、堀(SD1)が検出された。次いで調査の行われた東西方向の拡張部分においては、試掘トレンチと同様に、弥生時代前期と中～近世の土壌、及び溝が検出された。東西方向の堀(SD1)については、北壁のプランが確認されたが最後に一括して調査を行った。その結果、堀は南北方向から、直角に東へ曲り、調査区外へと延びていることが確認された。また、東の県道部分の調査区(Loc.42)において、SD1の延長とみられる堀が一部検出されている。

### 3. 層序と出土遺物

Loc.43の基本層序は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 床土
- 第Ⅲ層 黄灰色粘質土層



第163図 調査区設定図

#### 第IV層 明褐色粘質土層

第I層耕作土は厚さ約10cm、第II層床土は厚さ約5cmを測る。第III層黄灰色粘質土層は遺物包含層であり厚さ約15cmを測る。第IV層明褐色粘質土層は基盤であり、その上面は遺構検出面である。掘部分の断面によれば、第IV層以下には、第V層茶褐色粘質土層、第VI層黒褐色粘土層がみられた。

遺物包含層である第III層からの出土遺物は土師質土器の細片及び近世陶磁器の細片が混在しており出土量も少なく、図示できるものはなかった。

#### 4. 遺構と遺物

##### 土城

##### SK1

SK1は、試掘トレンチにおいて検出された土城であり、SD1の北に隣接している。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径3.92m、短径0.89m、深さ0.37mを測る。平面形は不整形であり、長軸方向はN-23°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、南端部には、深さ5cmほどの小さな落ち込みがみられる。また、西壁は、深さ10cm前後の不整形の落ち込みが幅0.86mに張り出し、浅い段状をなす。断面形は逆台形を呈し、埋土は黒茶褐色粘質土である。遺物は底面上及び10cmほど上部に面をなし出土しており、壺(2)甕(3-16)がみられる。石器は磨製石鏃(17)が出土している。時期は、前期IIと考えられる。

##### SK2

SK2は、試掘トレンチの北に位置しており、SK1の北に隣接して、検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径4.50m、短径0.89m、深さ0.25mを測る。平面形は不整形であり、長軸方向はN-14°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上る。断面形は箱形を呈し、北半部の底面上には薄く炭化物がみられる。埋土は黒茶褐色粘質土である。遺物は、北半部の炭化物上部に面をなし出土しており、壺(1)がみられる。

時期は、SK1と同じく前期IIと考えられる。また、中央部をSD4に切られている。

##### SK3

SK3は、試掘トレンチの東部に位置しており、SD6の西壁に接し、検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径0.90m、短径0.73m、深さ0.18mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-82°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK3は、SD6と重複し、切っているので新しく、埋土などからみれば、中～近世の土塚ではないかと考えられる。

#### SK4

SK4は、試掘トレンチの東端部に位置しており、SK3の東、SD6の東壁に接し、検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径1.08m、短径0.83m、深さ0.20mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-12°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK4は、SD6と重複し、切っているので新しく、SK3と同じく中～近世の土塚ではないかと考えられる。

#### SK5

SK5は、試掘トレンチの北東に位置しており、調査区の北東部にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径3.08m、短径2.85m、深さ0.68mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-17°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。壁は緩やかに立ち上り、調査区外へと続いている。埋土は2層に分かれ、上層は灰褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土である。出土遺物は、土師質土器小皿(18)、伊万里皿(19)、瀬戸・美濃系の植木鉢(20)がみられ、時期的には、18世紀と考えられる。

SK5はSK3と重複し、切っているので、SD3が深く、重複部分は、SD3を完掘した段階では消滅した。

#### SK6

SK6は、東の調査区の北部に位置しており、SK7と重複し、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長1.17m、深さ0.22mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-60°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK6はSK7と重複し、切っているので新しいが、時期は出土遺物もなく不明である。

### SK7

SK7は、東の調査区の北部に位置しており、SK6と重複し、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長0.80m、深さ0.13mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-79°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK7は、前述のとおりSK6に切られており古い、時期は不明である。

### SK8

SK8は、東の調査区の南部に位置しており、SD1の北壁にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径2.81m、短径2.13m、深さ0.45mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-75°-Wを示す。底面は西半部に深さ10cmほどの落ち込みがみられ、北西部には小ピットが存在する。断面形は不整逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物は伊万里の紅猪口(21)がみられる。

SK8は、SD1・9と重複し、切っているのが新しく、出土遺物からみれば、18-19世紀と考えられる。

### SK9

SK9は、東の調査区の東部に位置しており、SK10と重複し検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長1.03m、深さ0.39mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-25°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を示す。埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物は土師質土器の杯(27)がみられた。

SK9はSK10に大部分を切られており古く、時期は、出土遺物から16世紀と考えられる。

### SK10

SK10は、東の調査区の東部に位置しており、SK9、SD1と重複し検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径3.98m、短径1.99m、深さ1.23mを測り、深い。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-81°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、下部は水路からの水分により青灰色となる。出土遺物は、伊万里皿(22)、大皿(29)、白磁菊花皿(23)、瀬戸・美濃系灯明皿(24)、備前播鉢(25)、産地不明碗(26)がみられた。

SK10は、SK9、SD1を切っており新しく、時期は、出土遺物から18-19世紀と考えら

れる。

## 溝

### SD1

SD1は、田村川から分離し、南北方向に流れる水路部分と、東に曲り延びる水路と道路部分であり、検出された全形はL字状をなしている。検出状態は、調査部分が水路と道路であり、かつ、工事に並行する調査のために、きわめて難しく、南北部分では、SD1の基底部及び西壁の一部、南の東西部分においても基底部から壁の半分ほど検出されたにすぎない。

規模は、南北部分では、検出長136m、深さ2.88m、幅5.20~6.80mを測り南端部は南西コーナーとなり東へ続いている。北端部はさらに北へ延びると思われる。基底部は、幅2.10~3mを測り、中央部から北が狭くなっている。また、北から52.4mの部分には、西壁側に幅1.80m、基底部からの高さ1mほどの段がみられる。底面の高さは、ほぼ平坦であるが、中央部がわずかに低くなっている。

SD1の東壁は、そのほとんどが調査区の東壁であり、SD1の壁として認められる部分は南から28mの範囲の基底部から0.50m上部までである。西壁は、ほぼ原形が検出されていると考えられるが、上端部1mほどについては、現状の水路と工事の関係により上部を削られたので明確にはできなかった。基底部と、明確に検出された両壁の立ち上りからみれば、西壁は比較的緩やかに立ち上るのに対して、東壁は40°ほどの角度をもって立ち上り、やや急傾斜をもっている。

また、北半部の東壁側には、細勝寺の西を区切る土塁状の地形がみられたが、SD1の東壁は、完全に土塁状の地形の下に入っており、SD1との直接的な関連は認められず時期的に新しいものと考えられる。

東西部分の規模は、検出長70.80m、幅5.20~6.40m、深さ0.70mを測る。西端部は南北方向から続き、東端部はさらに東へ延びている。基底部は、幅2.80~3.40mを測り、東端部でやや細くなっている。南北部分に比べ、深さが浅いのは、南の道路部分及び、北の拡張部分について、検出面が現状の水路の影響により、SD1の埋土と共に青灰色を呈し、不明確なために掘り下げた結果であり、本来はさらに深いと考えられる。

南壁と北壁の立ち上りは、共に緩やかであり、32°の角度を測る。両壁の中間部には、部分的な小段がみられる。底面はほぼ平坦であるが、わずかに東へ低く、傾斜している。

埋土は基本的に青灰色から黒灰色を呈する粘土であり、部分的に砂、砂利層がみられる。上半部は、現状の水路にあたっており、かなりの攪乱がみられる。また基底部上には、暗青灰色粘土が薄く堆積しており、その中に多量の木葉がみられ、松笠も混り出土している。

出土遺物の中で特記すべきものは、土師質土器小皿(45~52)、皿(53~58)と御札(60)

であり、これらの遺物は、南西コーナーより北へ28mの地点において、基底部の暗青灰色粘土の上面に一括出土している。御札には、文頭に金剛界大日如来を表す梵字（パーンク）がみられ、「○ 奉轉讀大般若經一部六〇」が中央に、その右には、般若菩薩を表す梵字（ジーク）がみられ、「○ 飯命十六善神〇」が左に、「大永〇年〇」が読み取られる。これらの出土状態からみれば、病災を除去するために使用し、一括廃棄されたものである。また、大永年間には1521～1527年なので、SD1の廃絶時期は16世紀初頭である。他に、埋土中の遺物としては、土師質土器杯(37)、銅脚部(38)、備前播鉢(39)、瀬戸梅瓶(28)、仏飯器(44)、青磁碗(40、41)、尾戸皿(42、43)がみられる。

以上のように、SD1は、守護代細川氏の城館である田村城の外堀にあたると思われる、西辺の南半部から南西コーナー、さらに南辺の一部が検出された。堀の状態としては、基底部の暗青灰色粘土中に、木葉、松笠がみられ、かつ一括遺物が出土することから、ほとんど水はなく、空堀のような状況であり、必要に応じて、水を入れたと考えられる。また、堀の機能した時期としては、細川頼益が土佐の守護代として赴任し、田村へ居城をかまえた1380年から廃絶時期の大永年間の約150年間と考えられる。

#### SD2

SD2は、試掘トレンチの北に位置する南北方向の溝であり、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長3m、幅0.48m、深さ0.12mを測る。方向はN-55°-Eを示し、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は黄茶褐色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

SD2は、SD3と重複し、切られているので古く、SD3が15世紀と考えられることから、15世紀以前の溝である。

#### SD3

SD3は、試掘トレンチの北に位置しており、東西方向から北へ曲り、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長は、東西方向12.70m、南北方向2.10m、幅1.10m、深さ0.15mを測る。方向はN-81°-Wを示し、北へほぼ直角に曲る。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、土師質土器皿(30～32)、小杯(33)、杯(34～36)がみられる。

SD3は、SK2、SD2・4・5と重複するが、SD4にのみ切られている。時期は、出土遺物からみれば、15世紀と考えられる。

#### SD 4

SD 4は、試掘トレンチの北に位置しており、SD 3と重複し検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長6.50m、幅0.60m、深さ0.24mを測る。方向は、南北方向であり $N-30^{\circ}-E$ を示す。底面は平坦であり、中央部に長径20cm前後の円礫が一列に並べられている。断面形は逆台形を呈し、埋土は白灰色粘土である。出土遺物はみられなかった。

SD 4は、前述のとおりSD 3を切っているので新しく、埋土などからみれば、近世～近代にかけての溝と考えられる。

#### SD 5

SD 5は、試掘トレンチの北に位置する南北方向の溝であり、SD 3に重複し検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長2.50m、幅0.40m、深さ9cmを測る。北はSD 3に切られ、南は試掘トレンチの攪乱により切られている。方向は $N-8^{\circ}-E$ を示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は黄白灰色シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD 5は、SD 3と重複し、切られているので古く、15世紀以前の溝である。

#### SD 6

SD 6は、試掘トレンチの東に位置する南北方向の溝であり、SK 3・4と重複し検出されている。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長4.00m、幅0.60m、深さ0.18mを測る。方向は $N-2^{\circ}-W$ を示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

SD 6は、SK 3・4に切られており古い、時期は、不明である。

#### SD 7

SD 7は、試掘トレンチの中央部に位置する南北方向の溝であり、北部は攪乱を受け、検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長2.20m、幅1.20m、深さ0.41mを測る。方向は $N-6^{\circ}-E$ を示し、底面は平坦である。西壁には幅0.20m、深さ0.11mの小段がみられ、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。時期は不明である。

#### SD 8

SD 8は、東の調査区の東部に位置する南北方向の溝であり、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長3.80m、幅0.54m、深さ0.17mを測る。方向はN-12°-Eを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰色シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD8は、SD9と重複し、切っているのが新しいが、時期は不明である。

#### SD9

SD9は、東の調査区の西部に位置する東西方向の溝であり、SK8、SD8と重複し検出された。検出面は第四層上面である。

規模は、全長7.40m、幅0.70m、深さ0.21mを測る。方向はN-76°-Wを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰白色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

SD9は、SK8、SD8に切られており古く、SK8が18-19世紀と考えられるので中世の溝ではないかと考えられる。

### 5. まとめ

Loc.43では、弥生時代前期の土坑2基と中-近世の土坑、溝、さらに土佐の守護代であった細川氏歴代の居館である田村城館の外堀が検出された。

弥生時代前期の土坑は、SK1・2であり、いずれも水路の拡張部分において、中-近世の遺構と同一面に検出された。その規模は、両者共に長径4m前後、短径1m弱を測る南北に長い溝状を呈しており、南北に並んでいる。時期は、出土遺物から前期Ⅱと考えられ、周辺部のLoc.35・44などの調査区においても同時期の遺構が検出されており、前期Ⅱにおける集落の一部を構成するものと考えられる。SK1・2共に同様な規模を有し、南北に並ぶことから、遺物の出土量は多いが、同じ性格をもつ土坑であり、墓塚である可能性も存在する。

中世における遺構としては、田村城館の外堀として確認されたSD1と、SD3・5が存在するが、SD3・5は田村城館に関連する遺構であるか否か不明である。他の土坑、溝については近世-近代の遺構と考えられるが、不明な点が多い。

田村城館の外堀であるSD1は、西辺と南西コーナーから南辺にかけて検出されており、確実に堀として確認される部分は基底部と壁の立ち上り1mの範囲であり、壁の上半部、特に西辺の東壁はほとんど検出することができなかった。確実に検出された部分から堀の全体を推定すると、上部は幅6m、基底部は幅1m、深さ2m前後を測ると考えられ、やはり大規模なものである。また、堀の南辺は東へ延びており、県道部の調査区Loc.42で一部検出され、さらに東へ延びることが、確認されている。

田村城館については、かつて島田豊寿氏が「長宗我部地検帳」を基にして図上で復元されている。これによると田村城館の範囲は、東辺と北辺は不確定要素が多く明確ではないが、西辺と南辺は坪境界線にあり、西辺に土塁と堀をもつ。面積は、四町五反以上に及ぶ巨大な城館である。今回の調査で検出した堀は、西辺の南半部から南辺の西部にかけてであり、島田氏によ

る復元が誤りでない事が明確になった。

SD1からの出土遺物中、大永年間の年号をもつ御札は、田村遺跡群にあつてはまれな実年代を示す資料であり、田村城館の外堀からの原位置を保つ一括出土であることをみれば、その意義は大きい。この御札の出土により田村城館の廃絶の時期を知ることができる。堀の基底部から木葉、松笠、木枝等と共に出土していることから、空堀として機能していた段階に廃棄されたことを示している。埋土中の遺物はほとんどみられないことから短期間に埋没したと考えられ、御札の年号である大永年間、実年代1521～1527年に廃絶したと推定される。また、この廃絶年代によって、間接的ではあるが田村城館に関連する溝に囲まれた屋敷跡もほぼこの頃に姿を消した事が推測される。また、御札の文面及び出土状態から病災等を除去するために使用された後、共伴する土師質土器小皿、杯と一括廃棄されたものである。

註1 鳥田豊寿「田村城館と守護代町について」『土佐史談』復刊40号19

第19表 土坑計測表

探洞番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第164回	SK 1	不整形	3.92	0.89	0.37	N-23°-E	逆台形	
*	SK 2	*	4.50	0.89	0.25	N-14°-E	楕圆形	
*	SK 3	楕円形	0.90	0.73	0.18	N-82°-W	逆台形	
*	SK 4	*	1.08	0.83	0.20	N-12°-E	*	
第165回	SK 5	不定形	3.08	2.85	0.68	N-17°-E	*	
*	SK 6	楕円形	1.17	—	0.22	N-60°-W	*	
*	SK 7	*	0.80	—	0.13	N-79°-W	*	
*	SK 8	不定形	2.81	2.13	0.45	N-75°-W	不整逆台形	
*	SK 9	*	1.03	—	0.39	N-25°-W	逆台形	
—	SK 10	楕円形	3.98	1.99	1.23	N-81°-W	*	

第20表 遺構出土土器観察表

探洞番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 型 ・ 文 様	手 法	備 考
1	SK 2	壺	34.2 ( 6.6) — —	口縁部はなめらかに外反する。	口縁部内外部ヘラミガキ。	
2	SK 1	*	( 4.8) — 7.8	底部はやや上げ底気味。	不明。	磨耗が著しい。
3	*	甕	20.4 ( 3.8) — —	口縁部は如壺形に外反する。 口唇部に刻目。有段部をもつ。	外面ヨコナデと一部縦のハケ目。	
4	*	*	20.2 ( 5.0) 18.6 —	口縁部は如壺形に外反する。口唇部に刻目。胴上部に有段部をもつ。	口縁部外面はヨコナデ。	
5	*	*	20.6 ( 9.0) 18.8 —	*	口縁部外面はヨコナデ。胴部はハケ目だが、摩耗して不明。	
6	*	*	19.0 (10.0) 18.0 —	*	口縁部外面ヨコナデ。外面は斜位のハケ目。	
7	*	*	19.6 ( 3.2) — —	口縁部は如壺形に外反する。口唇部に刻目。	口縁部外面ヨコナデ。	
8	*	*	28.0 ( 9.2) 25.4 —	口縁部は如壺形に外反する。胴部に有段部を有する。口唇部は刻目。	外面ヨコナデの後ハケ目。内面は一部ナデ。	

押出番号	遺構番号	器種	口徑 器高 胴徑 底徑 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
9	SK 1	甕	19.8 (12.4) 16.0 —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部に削目。	不明。	磨耗が著しい。
10	*	*	27.8 (12.2) 26.6 —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部に削目。胴部中に有段部。	外面斜位、縦位のハケ目。	
11	*	*	21.4 (5.8) 19.8 —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部に削目。	不明。	磨耗が著しい。
12	*	*	21.2 (4.6) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部に削目。	口縁部外面ヨコナデの後、斜位 縦位のハケ目。	
13	*	*	21.2 (9.4) 18.4 —	*	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外 面縦のハケ目。内面はナデ調整。	
14	*	*	23.2 (7.8) 21.8 —	*	口縁部外面ヨコナデ、胴部縦の ハケ目。	
15	*	*	— (2.8) 7.6 —	底部は平底。	外面ハケ目調整。	
16	*	*	— (2.8) 10.8 —	底部はほぼ平底。	外面はナデ調整。	
押出番号	遺構番号	器種	口徑 器高 胴徑 底徑 法量 (cm)	形 態	文 様・手 法	備 考
18	SK 5	土師質土師 小 皿	6.3 1.4 — 2.3 —	体部は内湾して立ち上がる。	手捏ねにより成形し、内外面に 指頭押圧が残る。	
19	*	くらわんか皿	13.2 3.4 — 8.3 —	体部は内湾して立ち上がり口縁 にいたる。 高台は扇面三角形。	見込部にコンニャク判による五 弁花文。 外面につる草文。裏地有り。	伊万里。
20	*	植木鉢	28.8 (4.5) —	わずかに外反した胴部より逆し 字状の口縁部へといたる。	内面は口縁下まで施釉。 外面口縁下に3条の沈線がみら れる。内外面ともに貫入有り。	瀬戸・美濃系。
21	SK 8	缸罌口	4.6 1.4 — 1.5 —	体部は内湾して水平面をなし口 縁へといたる。	見込と口縁部に施釉。	伊万里。
22	SK 10	皿	— (1.3) — 4.3 —	高台は外面を垂直に内面を斜め に削る。	見込に手描きによる五弁花文外 面に「うずまき強」の裏地有り。 盤付けは輪を削りとする。	*
23	*	白磁 菊花瓶	7.8 2.4 — 3.4 —	体部は内湾して立ち上がる。 盤付けは内外面を圍取りする。	内面際うら成形の菊花瓶であ る。	

標記番号	遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
24	SK 10	灯明皿	10.4 2.2 3.7	あげ底の底部より体部は内湾して立ち上がる。 内面たち上がりは上方へ立ち上がる。	内面及び口縁部外面にのみ施釉。貫入有り。 底面に磨管がみられる。	瀬戸・美濃系。
25	*	播鉢	( 3.9 ) 8.0	体部は直線的に立ち上がる。	糸線は1本1単位で底部にまでみられる。	備前。
26	*	碗	13.2 4.9 6.0	体部は内湾して立ち上がりやや外反する口径へいたる。垂付けは内外面を重取りする。	内面は総の目状に輪ハギが施される。 外面は高台輪まで施釉。	
27	SK 9	土師質土器 杯	( 1.5 ) 3.5	体部は直線的に外方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
28	SD 1	染付 梅瓶	(17.5) 17.0 10.0	よく張った肩形よりやや丸みをもって底部へといたる直線型の輪線。	内面に輪線成形痕。	
29	SK 10	大皿	40.0 6.2 22.6	体部は内湾して大きく外上方に立ち上がる。口縁部はさらに大きく外反し、輪花状を呈する。	足込部二重の界線内には、牡丹と梅の文様が施される。 外周の華文及び外縁には裏銘(福の文字)がみられる。	伊万里。
30	SD 3	土師質土器 小皿	8.6 2.2 4.7	平皿な底部より、体部は内湾しながら外方へと立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
31	*	土師質土器 皿	12.7 2.6 9.8	比較的平坦な底部より屈曲して体部は立ち上がる。 口縁下はナゲにより肥厚。	手捏ねにより成形。 内外面に指頭押圧が残る。	
32	*	*	12.8 2.2 7.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部にいたる。	手捏ねによる成形。 内外面に指頭押圧が残る。 底部外面に黒塗有り。	
33	*	土師質土器 小杯	6.6 2.4 3.8	平皿な底部より屈曲して直線的に体部から立ち上がる。	底部回転糸切り痕。	
34	*	土師質土器 杯	11.7 4.1 3.8		内面にロクロ痕が明瞭に残る。 底部回転糸切り痕。	
35	*	*	11.8 3.9 4.1			
36	*	*	11.7 4.7 3.5	平皿で小さな底部より体部は少しくびれて直線的に立ち上がる。		
37	SD 1	*	( 2.6 ) 4.9	平皿な底部より屈曲して直線的に体部が立ち上がる。		
38	*	瓦質土器 罎 筒	全長(10.9) 直径 4.1	断面形はほぼ円形。	全面に指頭押圧が残る。	

標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (m)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
39	SD 1	撞鉢	— (5.7) — 14.8	あげ底気味の底面より体部は直線的に立ち上がる。	本鉢は7本1単位。外面に指頭圧痕が残る。	備前。
40	*	青磁 碗	12.7 7.8 — 5.0	体部は内湾して立ち上がり、直線的に口縁へいたる。高台は内面を垂直に、外面端部を丸くおさめ量付を狭くする。	足込に印花文。体部外面には細線弁文。外底は蛇の目状に釉をはく。	
41	*	*	— (3.2) — 5.7	高台は内外面とも垂直に削られ、外面端部を面取りして量付を狭くする。	全面に施軸した後、底付の一部及び外底を蛇の目状に釉ハギする。足込に「清・記・何」の字がみられる。	
42	*	皿	13.1 4.9 — 4.9	体部は内湾して立ち上がり、広く外反する口縁部へいたる。高台は内面を斜めに削り端部外面を面取りする。	内面は蛇の目状に釉をかきとる。外面は高台縁まで施軸。	尾戸。
43	*	*	12.8 4.6 — 4.1	体部は内湾に立ち上がり口縁へいたる。量付は内外面を削りとる。	*	*
44	*	仏飯器	5.9 4.8 — 3.2	中空の胴部は内傾して立ち上がり、内湾した体部を持つ杯部へ続く。		瀬戸。
45	*	土師質土器 小皿	6.9 1.9 — 3.8	凹凸のある底面より内湾した体部へいたる。口縁下が肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。	
46	*	*	6.6 1.7 — 2.3	全体的に内湾した体部である。底面は若干肥厚し口縁端部は丸くおさめる。	*	
47	*	*	6.3 1.6 — 2.2	内湾した体部。器縁は全体的に厚いが底面は若干肥厚する。	外面に指頭圧痕が残る。	
48	*	*	6.3 1.6 — 3.7	若干肥厚した底面より内湾して外方へ立ち上がった体部。口縁端部は丸くおさめる。	手捏ね成形により、外面に指頭圧痕が残る。	
49	*	*	6.1 1.6 — 1.3	全体的に内湾した体部。底面は若干肥厚し、口縁端部は丸くおさめる。	*	
50	*	*	6.6 1.8 — 1.2	底面が若干肥厚した内湾する体部をもつ。口縁下がやや肥厚する。	*	
51	*	*	6.7 1.6 — 1.3	底面が若干肥厚した内湾する体部をもつ。体部はやや肥厚する。	*	
52	*	*	6.7 1.5 — 1.2	若干肥厚した底面より内湾して外上方に立ち上がった体部。口縁端部は丸くおさめる。	*	
53	*	土師質土器 皿	12.6 1.9 — 7.3	比較的平らな底面より扇面して外反気味に立ち上がった体部。口縁下は肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。底面に黒底がみられる。	

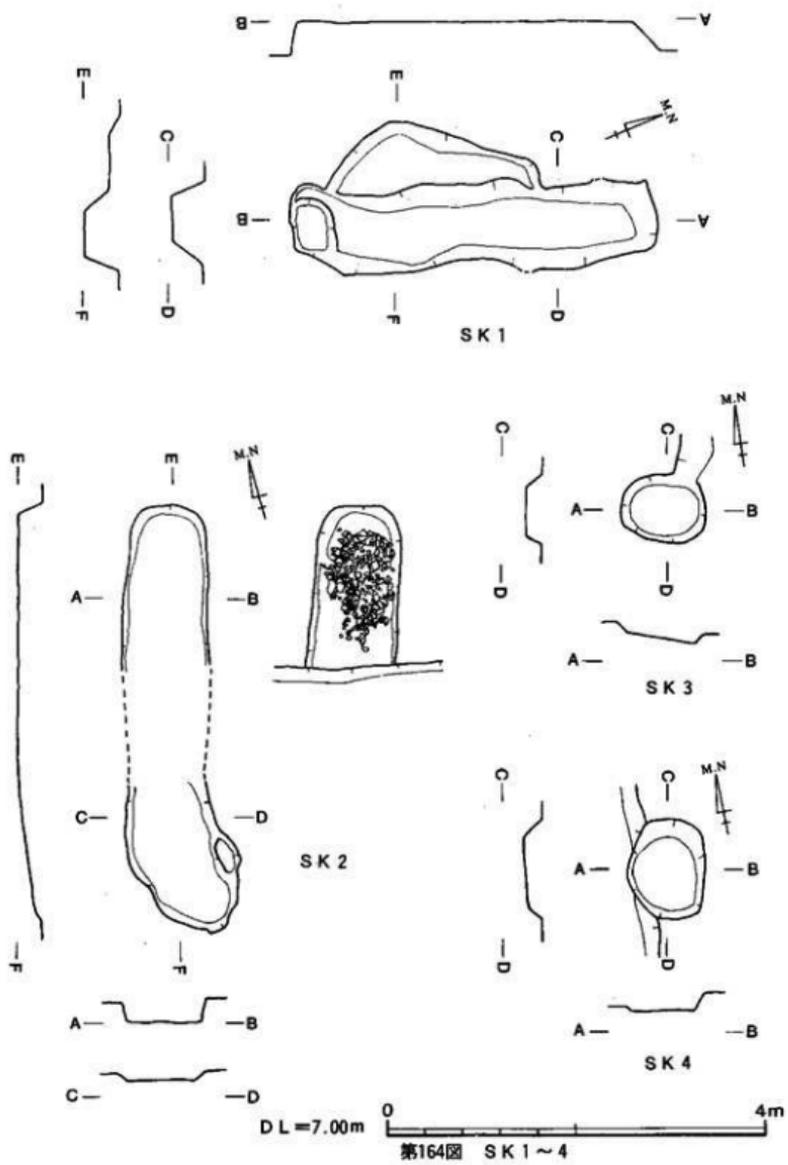
標記番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
54	SD 1	土師質土器 甕	11.8 2.3 7.9	比較的平坦な底部より屈曲して内湾気味に立ち上がった体部。口縁下が肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。	
55	*	*	11.8 2.1 7.4	比較的平坦な底部より屈曲して内湾気味に立ち上がった体部。底部及び口縁下は肥厚する。	*	
56	*	*	11.9 2.0 8.0	底部より内湾気味に立ち上がった体部。口縁下は肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残るが、ナデにより丁寧に仕上げる。	
57	*	*	12.5 2.5 8.7	体部は底部より屈曲してやや内湾気味に立ち上がる。口縁下はナデのための若干肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残るが、仕上げはヨコナデによる。底部に平行圧痕。	
58	*	*	12.0 2.1 7.3	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁下はナデにより肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残るが、仕上げはヨコナデによる。	
59	*	天目茶碗	11.2 (5.5)	内湾して立ち上がった体部が一且垂直方向にのび、口縁下で一度くびれた後、短く外反する口縁へといたる。高台輪を平らに彫る。	内面及び外面口縁下折のところに無調に赤い赤褐色を塗る。	破片。

第21表 遺構出土石器観察表

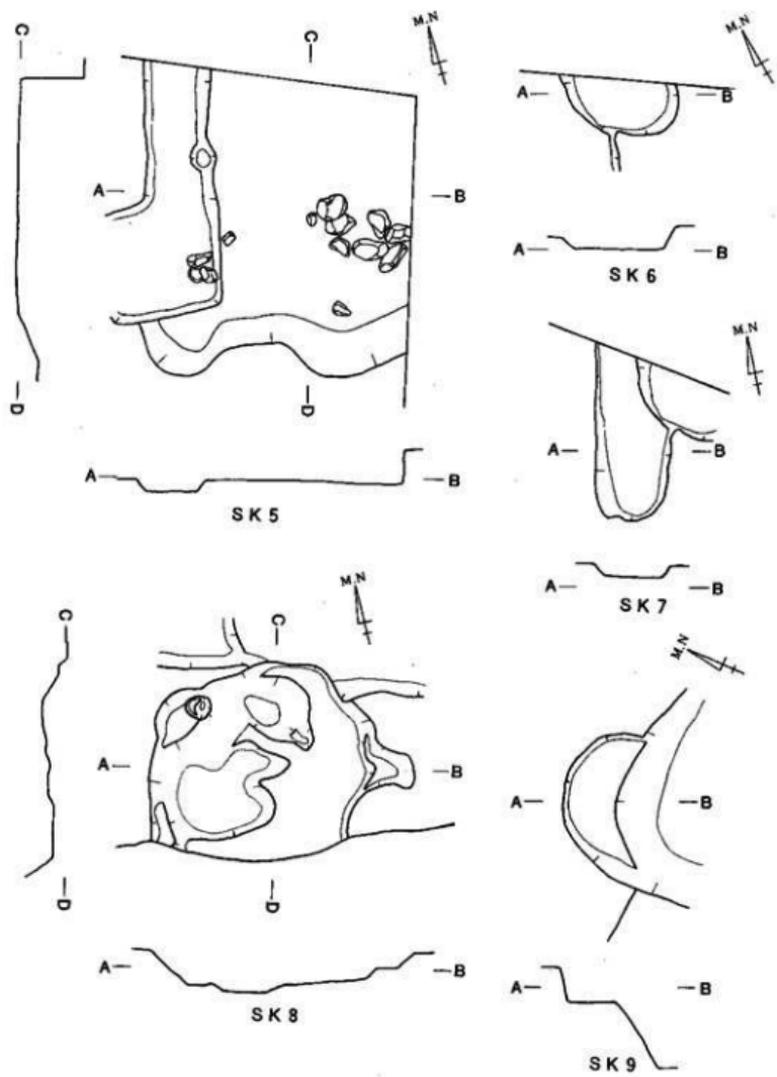
標記番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, #)	材 質	特 徴	備 考
17	SK 1	石 鏃	3.1 1.1 0.4 2.3	頁 岩	先端部と基部が欠損する。全体的によく研磨されている。	

第22表 遺構出土木器観察表

標記番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, #)	材 質	特 徴	備 考
60	SD 1	罌 札	(24.4) 4.4 0.9	杉	頭部を半環とし、下端部は欠損する。	



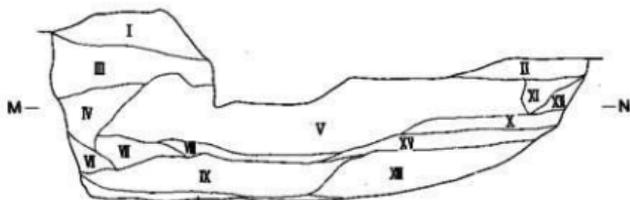
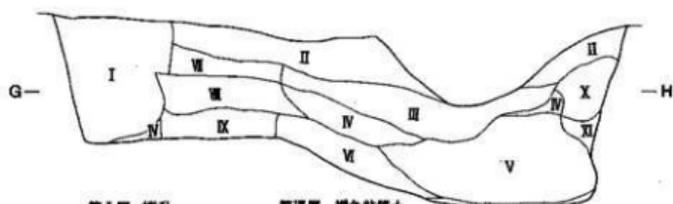
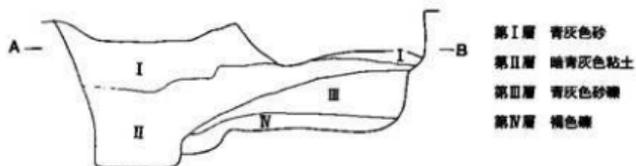
第164圖 SK 1~4



DL = 7.00m



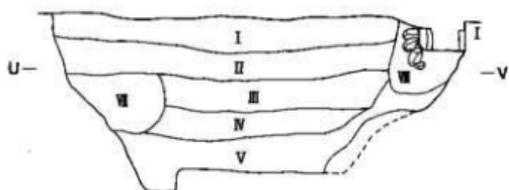
第165圖 SK 5~9



D L = 7.00m



第166図 SD I セクション



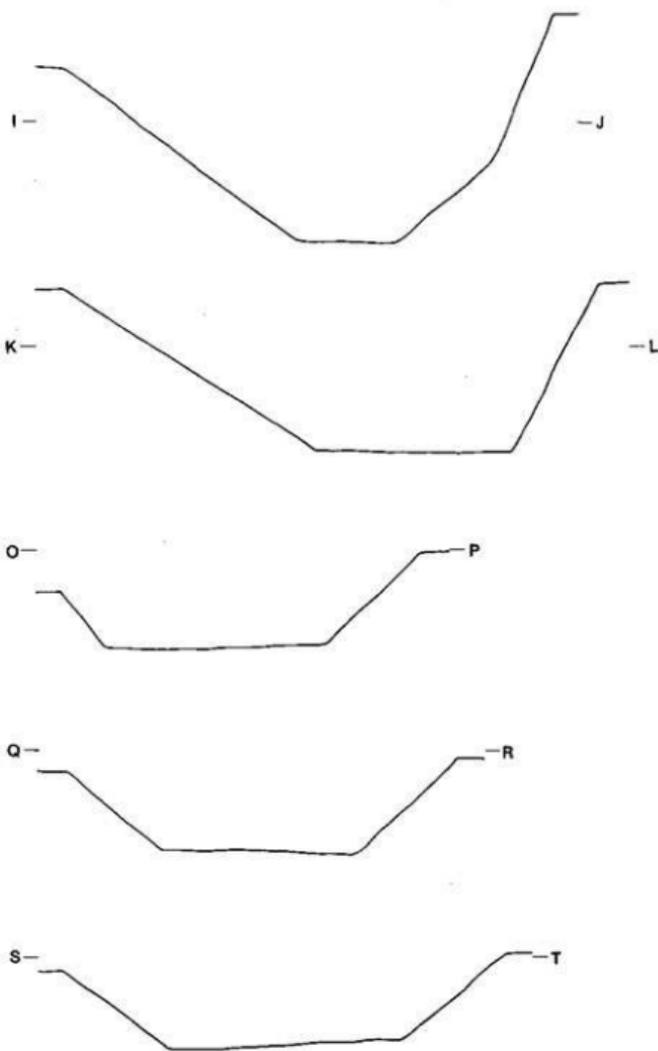
- |             |               |
|-------------|---------------|
| 第I層 壤土      | 第VI層 青灰色小砂利   |
| 第II層 暗灰茶色粘土 | 第VII層 灰色礫     |
| 第III層 深灰色粘土 | 第VIII層 暗青灰色粘土 |
| 第IV層 灰色粘土   |               |
| 第V層 暗灰色粘土   |               |



DL=7.00m



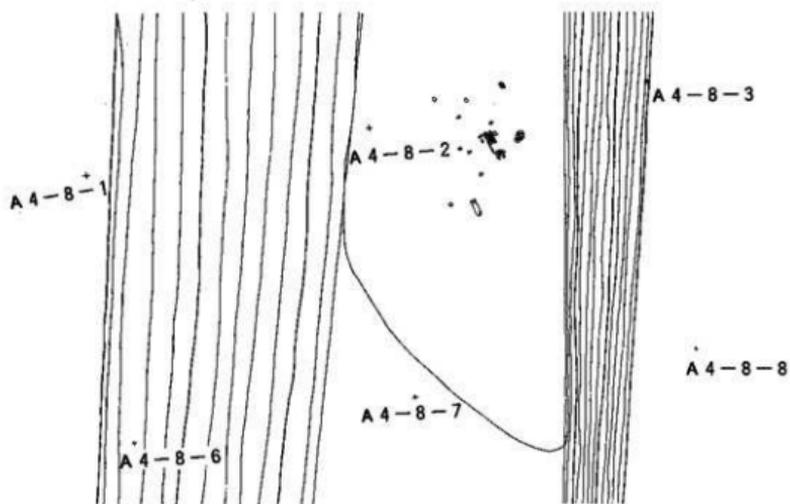
第167圖 SD1セクション



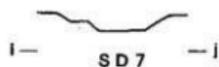
DL = 7.00m



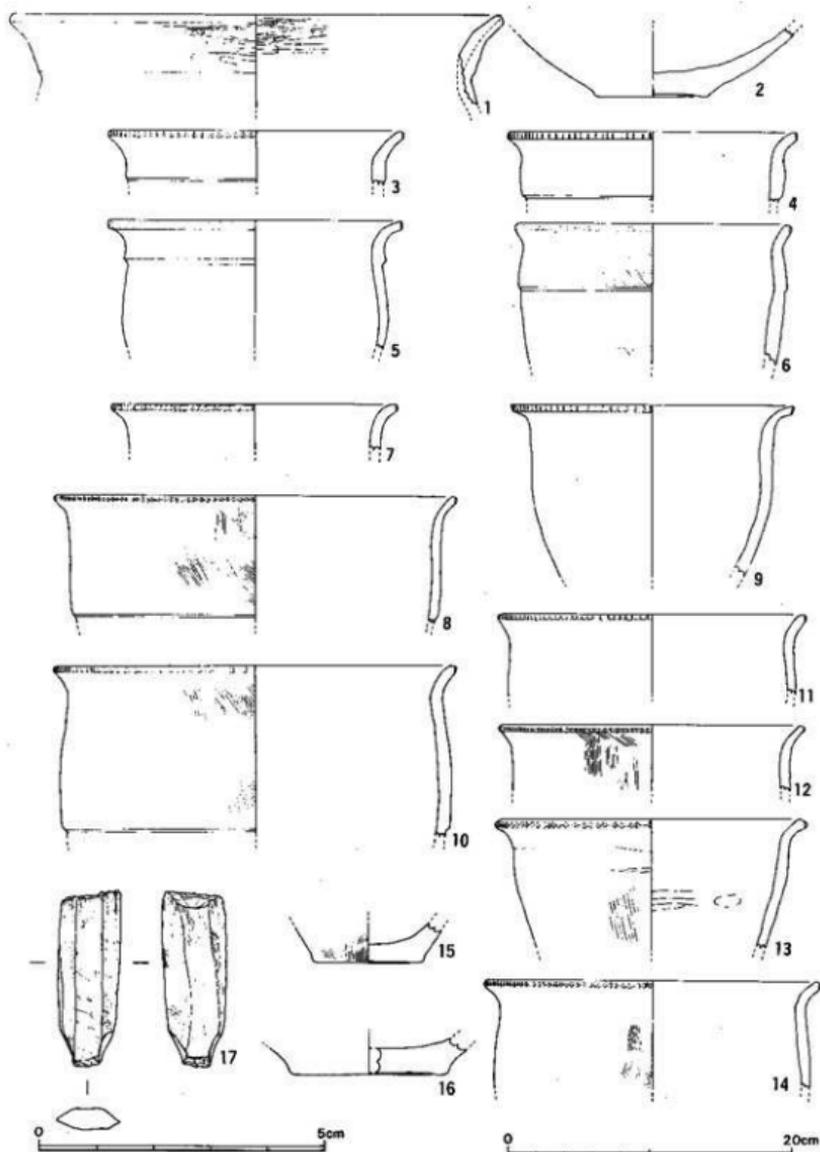
第168圖 SD 1



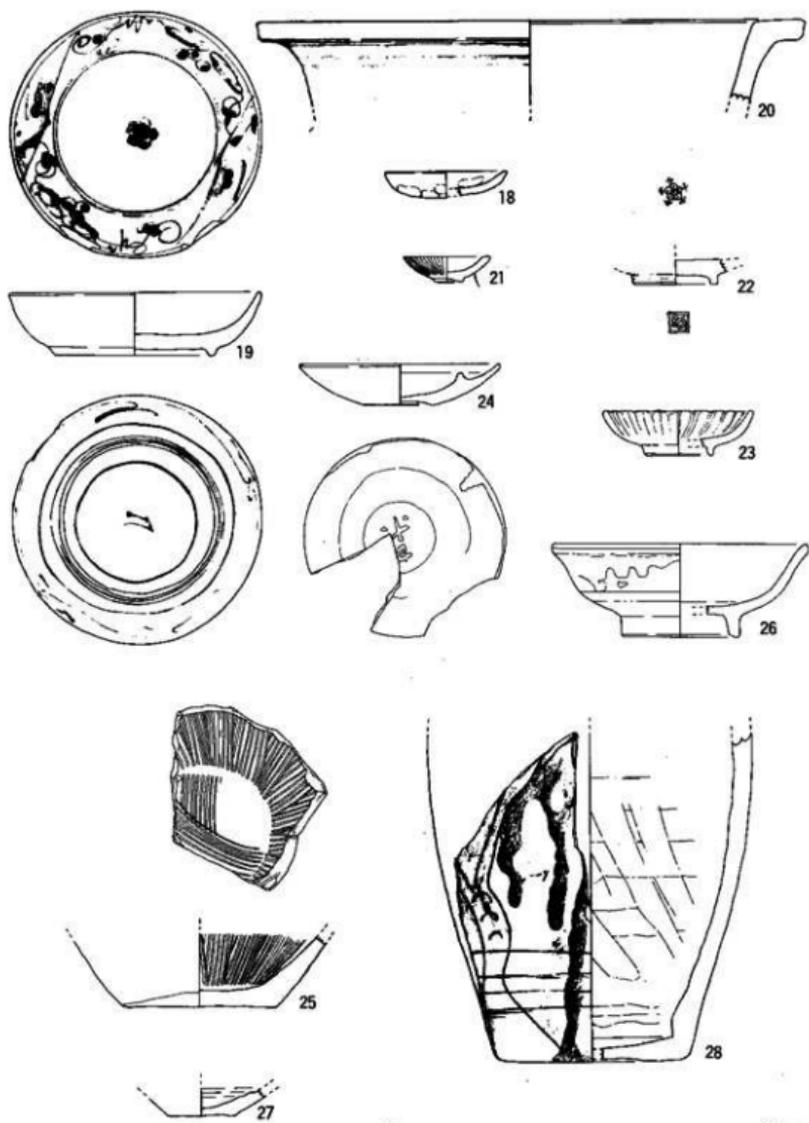
SD 1 遺物出土状態



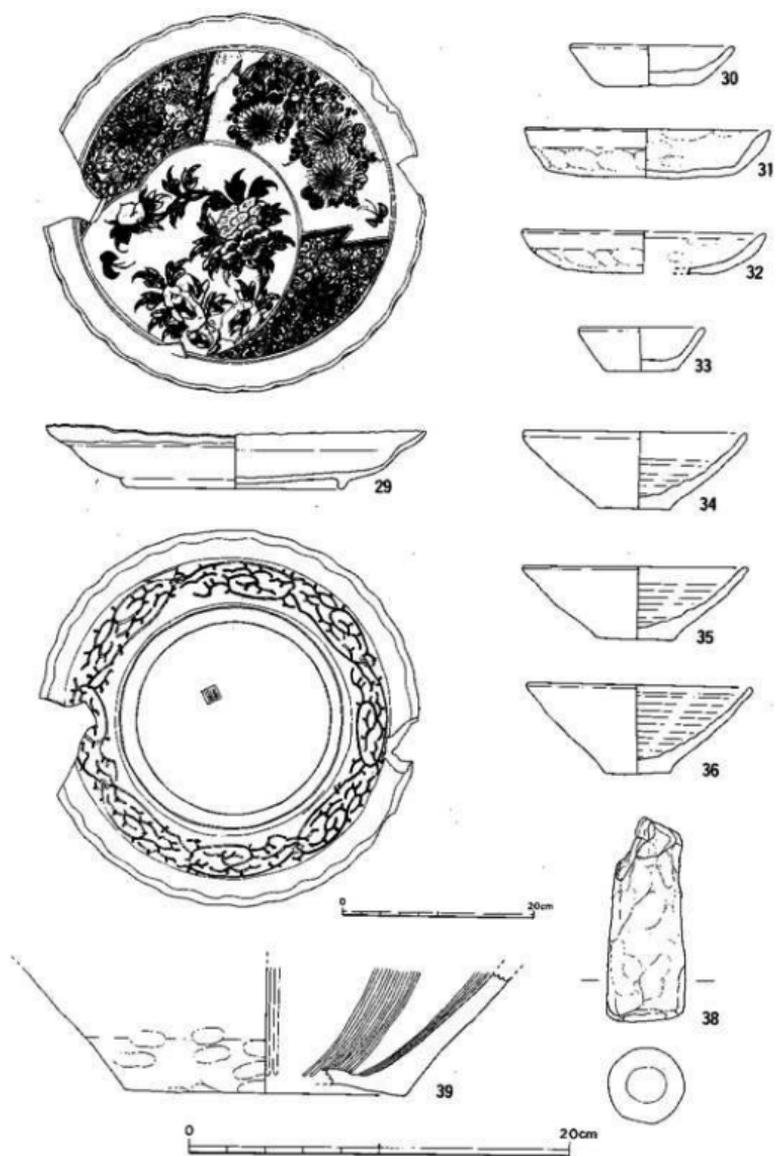
第169圖 SD 1 遺物出土状態、SD 2~9



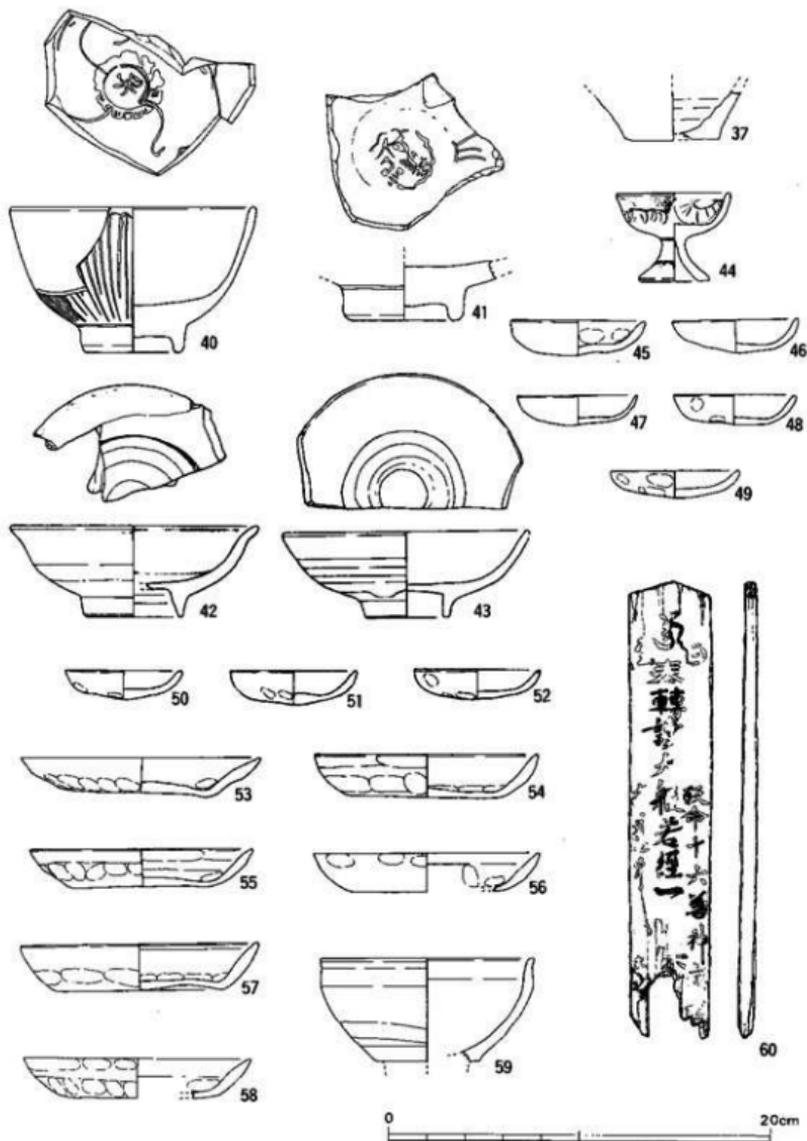
第170図 SK1・2出土遺物



第171圖 SK 5・8～10、SD 1 出土遺物



第172図 SK10、SD1・3出土遺物



第173図 S D 1 出土遺物

## 5. Loc. 48

## Loc. 48

### 1. 位置と調査経過

Loc. 48は、空港拡張範囲の南に位置しており、県道の地下道化工事に伴い、設定された調査区である。Loc. 48の字名は三ノ戸であり、下田村分に含まれる。調査期間は昭和57年10月から昭和58年6月にかけてである。調査面積は2,383㎡である。県道は、空港拡張範囲の中央部を南北に走っており、拡張計画の当初より地下道化が考えられていた。地下道部分は空港拡張範囲内に含まれ、地下道に至る取付け道路は、幅約20mで北が約125m、南は約250mの拡張が計画されていた。調査は、まず試掘トレンチにより遺構、遺物の存在を確認し、検出された場合は拡張することとしたが、諸般の事情により、Loc. 48全体では5次にわたる小面積ごとの調査であった。最終的には北と南の2か所の調査区となり、北をA区、南をB区と呼ぶこととした。A区は県道の東と西のトレンチ状の調査区であり、県道部分は北端部の堀の部分のみ調査された。B区では一部未調査部分が残された。

### 2. 調査概要

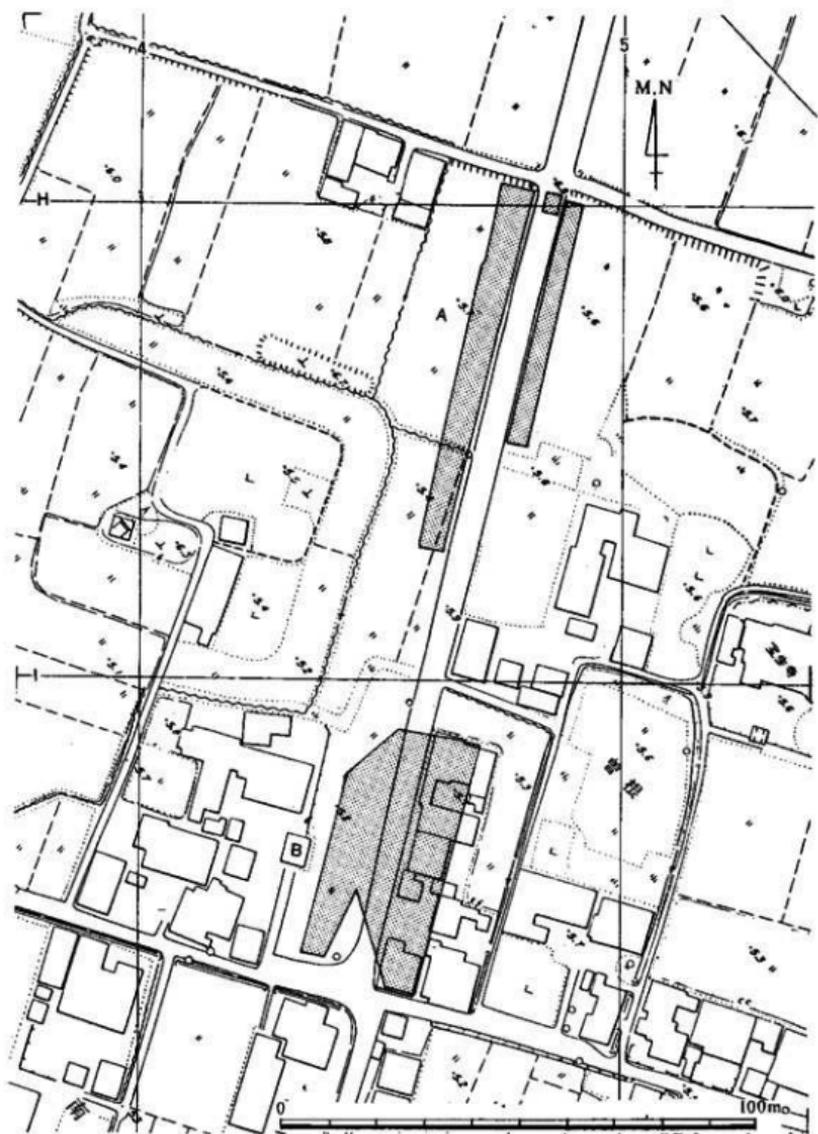
Loc. 48は空港拡張範囲外の南部であるが、調査区の西には、室町一戦国時代に台頭した有力国人である千屋氏の居館とされている千屋城跡が存在しており、千屋城関係の遺構の存在が考えられた。A区の調査では、北端部に堀と考えられるSD1が検出され、千屋城の外堀ではないかと推定された。また、その南部においても、SD1と同様に堀の一部ではないかと考えられるSD6が検出された。他の遺構としては、土壇と溝、ピットが北半部に検出されたが、土壇は近世及び近一現代のものがほとんどであり、また、溝とピットは時期不明のものが多く、中世の遺構として時期を決定できるものはほとんど存在しなかった。

B区の調査では、千屋城跡の東に隣接しているため、A区よりさらに千屋城関係の遺構の検出が期待されたが、一部を除き、近一現代の土壇及び時期不明のピットが多く検出された。しかしSD17がSD1・6と同じく堀と考えられる他に、SD14-16、SK38など確実に中世と考えられる遺構も存在している。また、掘立柱建物址は、SB1-8が検出されたが、これらも中世と考えられる。

### 3. 層序と出土遺物

Loc. 48の基本層序は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 床土
- 第Ⅲ層 黄褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 明褐色粘質土層



第174図 調査区設定図

第Ⅰ層耕作土は厚さ10cm、第Ⅱ層床土は厚さ5cmを測る。第Ⅲ層黄褐色粘質土は、遺物包含層であり、厚さ5～15cmを測るが、遺物の出土数は少なく、近世～近代の遺物が中心である。第Ⅳ層明褐色粘質土層上面が遺構検出面であり、厚さ約20cmを測る。第Ⅳ層下には暗茶褐色粘質土層、黒褐色粘質土層、茶褐色砂質土層、青灰色砂層などがみられ、地表面約2.3mで基盤の砂礫層がみられた。

第Ⅲ層出土遺物としては、土師質土器杯(1)、鍋(2)、備前播鉢(3、4)、甕(5)、青磁碗(6～9、11)、伊万里皿(10)、唐津皿(12)、土錘(13～15)がみられ、時期的には15～16世紀と18世紀のものが混在している。

#### 4. 遺構と遺物

##### 掘立柱建物址

##### SB1

SB1は、B区の北端部に位置しており、SB2と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.69m、桁行3.59mを測る1×2間の南北棟であり、棟方向はN-20°-Eを示す。柱間距離は、1.64～2.69mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径20～40cmを測る円形および不整形であり、深さは8～32cmを測る。柱痕を残す柱穴は2個存在し、柱痕の直径は8～28cmである。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SB1は、SB2と重複するが、柱穴の切り合いはみられず、新旧関係は不明である。またSK18には切られており、より古いことが判明している。

##### SB2

SB2は、B区の北端部に位置しており、SB1と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、2×2間であり、やや南北に長いので南北棟と考えれば、梁間3.62m、桁行3.95mを測り、棟方向はN-13°-Eを示す。柱間距離は、1.80～2.05mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径20～48cmを測る円形および方形であり、深さは12～30cmを測る。柱痕を残す柱穴は2個存在し、柱痕の直径は24～26cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SB2は、SB1と重複するが、柱穴の切り合いはみられず、新旧関係は不明である。

### SB3

SB3は、B区の北部に位置しておりSB2の南3.6mに検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、梁間2.40m、桁行3.73mを測る1×2間の南北棟であり、棟方向はN-10°-Eを示す。柱間距離は、1.62~2.40mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24cm前後を測る円形であり、深さは13~25cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SB3は、SK21と重複するが、切り合いはなく、新旧関係は不明である。

### SB4

SB4は、B区の北部に位置しており、SB5の北辺と重複して検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、1×1間であり、南辺2.64m、西辺2.85mを測り、正方形に近いが、わずかに南北に長い。柱間距離は、2.60~2.85mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24cm前後を測る円形であり、深さは9~36cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿(16、17)がみられる。

SB4は、SB5と重複しているが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

### SB5

SB5は、B区の中央部に位置しており、SB4の南に一部重複して検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、梁間2.93m、桁行7.29mを測る2×3間の東西棟であり、棟方向はN-80°-Wを示す。柱間距離は、1.14~3.38mを測り、桁行では西が短く、梁間においても南が短く、よく揃っている。

柱穴は、直径20~38cmを測る円形及び不整形であり、深さは16~42cmを測り、ほとんどは30cm前後である。柱裏を残す柱穴は4個存在し、柱裏の直径は13~15cmを測る。また切り合いをもつ柱穴は3個存在するが、掘立柱建物址と認められるものはない。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器片が若干みられた。

SB5は、SB4・6と重複しているが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

### SB6

SB6は、B区の中央部に位置しており、SB5の南辺と重複して検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、梁間2.61m、桁行4.33mを測る1×2間の南北棟であり、棟方向はN-15°-Eを

示す。柱間距離は、2.02～2.61mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24～32cmを測る円形である。深さは12～44cmを測り、ほとんどは30cm前後である。柱痕を残す柱穴は1個存在し、柱痕は長径28cmを測る不整形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SB6は、SB5・7、SK33と重複している。SB5・7とは柱穴の切り合いもなく、新旧関係は不明である。また、不明瞭ではあるがSK33により切られており、SB6がより古いことが判明している。

#### SB7

SB7は、B区の中央部に位置しており、SB6と重複してやや南に検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、2×2間であり、やや東西に長いので東西棟と考えれば、梁間3.08m、桁行3.49mを測り、棟方向はN-78°-Wを示す。柱間距離は、1.40～1.95mを測り、よく揃っている。また西辺の柱穴が1個検出されなかった。

柱穴は、直径28～40cmを測る円形および不整形である。深さは20～64cmを測り、ほとんどは30cm前後である。柱痕を残す柱穴は1個存在し、柱痕の直径は8cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SB7は、SB6、SK32・33と重複するが、切り合いはなく、新旧関係は不明である。

#### SB8

SB8は、B区の中央部に位置しており、SB5～7の西2mに検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、梁間2.56m、桁行4.00mを測る1×2間の南北棟であり、棟方向はN-8°-Eを示す。柱間距離は、1.71～2.56mを測り、桁行の北がやや短い。

柱穴は、直径34～44cmを測る円形および不整形である。深さは25～48cmを測り、ほとんどは30cm前後である。柱痕を残す柱穴は3個存在し、柱痕の直径は12～18cmを測る。また切り合いをもつ柱穴は3個存在するが、掘立柱建物址は認められない。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、青磁碗(18)、産地不明の鉢(19)がみられる。

SB8は、SK30・31と一部重複するが、埋土の違いは明確ではなく、新旧関係は不明である。

#### 土城

#### SK1

SK1は、A区の西側調査区北部に位置しており、SD2の南2.2mに単独で検出された。

検出面は第IV層上面である。

規模は、長径1.16m、短径0.94m、深さ0.38mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-37°-Wを示す。底面は平坦であり、直上に木片が2点みられた。壁は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物は、産地不明の碗(20)、磁器遺土像(21)がみられた。出土遺物及び、底面上の木片などからみるとSK1は近世墓である。

#### SK 2

SK 2は、A区の西側調査区北部に位置しており、調査区にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径4.98m、短径0.91m、深さ0.35mを測る。平面形は溝状を呈し、長軸方向はN-15°-Eを示す。底面は中央部がやや低く、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK 2は、SD 3と重複しており、SD 3を切っているのも、より新しいことが判明している。

#### SK 3

SK 3は、A区の西側調査区の北部に位置しており、調査区にかかり検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径4.97m、短径1.20m、深さ0.42mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-18°-Eを示す。底面は、ほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は、備前壺(22)、甕(23、24)、青磁皿(25)がみられ、時期的には15世紀と考えられる。

SK 3は、SD 3・5と重複しているが、埋土の違いは不明瞭であり、新旧関係は明らかでない。

#### SK 4

SK 4は、A区の西側調査区の北部に位置しており、SK 2の南10.8mに検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径2.24m、短径0.72m、深さ0.11mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-5°-Eを示す。底面は、平坦であり、3個の小ピットがみられる。断面形は浅い逆台形を呈し、埋土は灰黄色粘質土である。出土遺物は備前甕(26)がみられる。また、単独で検出されており重複する遺構は存在しない。

#### SK 5

SK 5は、A区の西側調査区の北部に位置しており、SK 4の東2.8mに単独で検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径2.06m、短径1.71m、深さ0.86mを測る。平面形は円形であり、長軸方向はN-18°-Eを示す。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はみられない。また、単独で検出されており、重複する遺構は存在しない。

#### SK 6~8

SK 6~8は、A区の東側調査区の北部に位置しており、SK 6・8は調査区の東辺に接し、SK 7はその西に検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、SK 6が、長径2.10m、短径1.60m、深さ0.48m、SK 7が、長径1.95m、短径1.60m、深さ0.10m、SK 8が、長径2.95m、短径1.46m、深さ0.16mを測る。平面形は、SK 6が楕円形、SK 7・8は不定形である。長軸方向は、SK 6がN-20°-E、SK 7・8がN-13°-Eを示す。底面はいずれもほぼ平坦であり、断面形はすべて逆台形である。埋土は、SK 7が灰色粘質土であり、SK 6・8は黄灰色粘質土である。出土遺物は、SK 6から砥石(80)がみられたのみである。

SK 8は、SD 7を切っており、より新しいが、SK 6・7は単独で検出されており、時期は近世以降とも考えられるが不明である。

#### SK 9~12

SK 9~12は、A区の東側調査区の中央部に位置しており、SK 11・12は調査区の西辺にかけ、いずれも単独で検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、SK 9が、長径2.24m、短径0.36m、深さ0.10m、SK 10は、長径1.15m、短径1.06m、深さ0.12m、SK 11は、長径1.45m、短径1.19m、深さ0.30m、SK 12は、長径1.09m、短径0.91m、深さ0.30mを測る。平面形は、SK 9が不整形、SK 10は円形、SK 11・12は不定形である。長軸方向は、SK 9がN-70°-W、SK 10はN-15°-E、SK 11はN-79°-W、SK 12はN-17°-Eを示す。底面は、いずれもほぼ平坦であり、中に小ピットが数個みられる。断面形もすべて逆台形である。埋土はSK 9~12共に黄灰色粘質土であり、遺物は、SK 9から染付皿(27)、青磁碗(28)、SK 11から備前甕(29、30)がそれぞれ出土し、SK 10・12からの出土遺物はほとんどみられなかった。

#### SK 13~16

SK 13~16は、A区の東側調査区の中央部南に位置しており、SK 13~15は重複し、SK 16

は調査区の西辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、S K 13が長径1.99m、短径1.55m、深さ0.28m、S K 14は、長径3.08m、短径1.33m、深さ0.24m、S K 15は、長径2.20m、短径1.68m、深さ0.38m、S K 16は、長径2.00m、短径1.65m、深さ0.44mを測る。平面形は、S K 13・14は長方形、S K 15・16は不定形である。長軸方向は、S K 13がN-70°-W、S K 14はN-18°-E、S K 16はN-17°-Eを示すがS K 15は不明である。底面はいずれもほぼ平坦であり、断面形は、逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられず、いずれの土壌も時期は不明である。

S K 13-15は重複しており、S K 14は、S K 13・15に切られており、より古いことが判明している。

#### S K 17~21

S K 17-21は、B区の北部に位置しており、北より点在し、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、S K 17が、長径1.10m、短径1.00m、深さ0.21m、S K 18は、長径2.21m、短径1.80m、深さ0.18m、S K 19は、長径1.66m、短径0.69m、深さ0.18m、S K 20は、長径1.27m、短径は0.80m、深さ0.12m、S K 21は、長径2.33m、短径0.46m、深さ0.16mを測る。平面形は、S K 17は円形、S K 18は方形、S K 19・20は不定形、S K 21は溝状である。長軸方向は、S K 17がN-23°-E、S K 18はN-24°-E、S K 19はN-25°-E、S K 20はN-21°-E、S K 21はN-72°-Wを示す。底面はいずれも平坦であり、断面形は逆台形を呈する。S K 20・21の底面には小ピットがみられる。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられず、いずれの土壌も時期は不明である。

S K 18は、S B 1およびS K 17も切っており、より新しいことが判明している。

#### S K 22

S K 22は、B区の北部に位置しており、S B 3の南に隣接して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径3.56m、短径1.52m、深さ0.49mを測る。平面形は長方形であり、長軸方向はN-76°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、遺物は、備前播鉢(31)、唐津系甕(32)、唐津皿(36)、産地不明の壺(34)、伊万里皿(35)、京焼系碗(33)が出土しており、他に砥石(81)と石臼片(82)がみられる。これらの出土遺物により、S K 22の時期は19世紀と考えられる。

#### S K 23~26

S K 23-26は、B区の北部に点在しており、それぞれ単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上

面である。

規模はSK23が、長径1.61m、短径1.36m、深さ0.61m、SK24は、長径1.24m、短径0.98m、深さ8cm、SK25は、長径1.43m、短径1.10m、深さ0.16m、SK26は、長径1.52m、短径0.90m、深さ0.22mを測る。平面形はすべて長方形である。長軸方向は、SK23がN-7°-E、SK24はN-81°-W、SK25はN-20°-E、SK26はN-79°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は、SK23が深い逆台形であり、SK24-26は浅い逆台形を呈する。また、SK24の底面には小ピットが3個みられ、SK25・26は、西半部が渠道にかかり検出されなかった。埋土は黄灰色粘質土であり、遺物は、SK23から伊万里碗(37)、SK26から備前摺鉢(38)がそれぞれ出土し、時期は17-18世紀と考えられる。また、石製品としてはSK24からは石鐘(83)が、SK26からは線刻籠字で「鳥」と考えられる銘をもつ砥石(84)がそれぞれ出土している。

#### SK27・28

SK27・28は、B区の東部に位置しており、SK28は調査区外に延びている。検出面は第IV層上面である。

規模は、SK27が、長径2.66m、短径2.30m、深さ0.58m、SK28は、長径3.98m、短径2.16m、深さ0.24mを測る。平面形はいずれも楕円形であり、長軸方向は、SK27がN-15°-E、SK28はN-2°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は、SK27が箱形、SK28は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土に黄褐色と茶褐色の粘質土のブロックを含んでいる。遺物は、SK27から京焼系碗(39)と伊万里碗(40)、石臼(85)、SK28からは伊万里皿(41)、備前壺(42)、石臼(86)がみられた。他にも近代の陶磁器の細片が含まれており、近代の土塚と考えられる。

SK28は、SK27に切られており、より古いことが判明しているが、時期差はあまりないとみられる。

#### SK29~34

SK29~34は、B区の中央部に点在しており、それぞれ単独で検出されている。検出面は第IV層上面である。

規模は、SK29が、長径1.46m、短径0.82m、深さ0.10m、SK30は、長径1.86m、短径1.29m、深さ0.47m、SK31は、長径1.82m、短径1.64m、深さ0.75m、SK32は、長径2.96m、短径1.48m、深さ0.45m、SK33は、長径1.29m、短径0.95m、深さ0.37m、SK34は、長径1.78m、短径1.32m、深さ0.15mを測る。平面形は、いずれも方形および長方形であり、長軸方向は、SK29がN-24°-E、SK30はN-75°-W、SK31はN-77°-W、SK32はN-19°-E、SK33はN-72°-W、SK34はN-33°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は、SK29・34が逆台形、SK30~33は壁が垂直に近く立ち上がり、箱形を呈する。埋土は、SK29・34が灰色粘質土であり、SK30~33は黄灰色粘質土である。遺物は、SK34から木製の玉製品(88)

が出土している他にはほとんどみられず、近世～近代の陶磁片が若干出土しているのみであり、その時期の土壇と考えられる。

S K 30・31は、S B 8の柱穴を切っており、より新しく、S K 32・33は、S B 6・7と重複して切っているので、より新しいことが判明している。

#### S K 35～37

S K 35～37は、B区の西部に位置しており、重複して検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、S K 35が、長径1.40m、短径0.82m、深さ7cm、S K 36は、長径0.93m、短径0.74m、深さ0.17m、S K 37は、長径2.50m、短径1.56m、深さ0.28mを測る。平面形は、S K 35が方形、S K 36は円形、S K 37は不定形であり、長軸方向は、S K 35がN-22°-E、S K 36はN-29°-E、S K 37はN-61°-Wを示す。底面はすべて平坦であり、断面形も逆台形である。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

S K 35～37は重複しているが、埋土の違いはみられず、新旧関係は不明である。

#### S K 38

S K 38は、B区の西部に位置しており、S K 35～37の南に隣接し、調査区外に延びている。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径5.96m、短径1.99m、深さ0.45mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN-11°-Eを示す。底面はわずかな傾斜をもち、壁も緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。中央部には、南北に区切るように、長径20～30cmの楕円形の自然石を1～2段に積んでおり、北部および北壁にも、同様に自然石がみられる。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、底面直上に、瀬戸天目茶碗(46)がみられ、埋土上面からは、備前甕(45)、京焼系碗(47)、唐津系皿(48)、肥前系碗(49)が出土している。时期的には、埋土と底面直上の天目茶碗により、15世紀と考えられ、水に関連する機能をもっていたのではないかと推定される。

#### S K 39

S K 39は、B区の南西部に位置しており、S K 38の南東1.6mに、単独で検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、長径2.80m、短径1.05m、深さ0.18mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN-51°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は浅い逆台形を呈する。北東部は、県道下にあたり、検出されなかった。埋土は灰色粘質土である。出土遺物はみられず、S K 39の時期は不明である。

#### SK40~45

SK40~45は、B区の南部に位置しており、重複し、集中して検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、SK40が、長径3.38m、短径1.46m、深さ0.49m、SK41は、長径4.02m、短径3.50m、深さ0.36m、SK42は、長径1.64m、短径1.40m、深さ0.40m、SK43は、長径5.13m、短径2.17m、深さ0.36m、SK44は、長径4.32m、短径3.96m、深さ0.45m、SK45は、長径2.76m、短径2.33m、深さ0.28mを測る。平面形は、SK40・41・45は、方形、SK42は円形、SK43は長方形、SK44は不定形である。長軸方向は、SK40がN-8°-E、SK41はN-14°-E、SK42はN-77°-W、SK43はN-72°-W、SK44はN-8°-E、SK45はN-10°-Eを示す。底面はいずれも平坦であり、断面形は、SK40・42~45は逆台形、SK41は箱形を呈する。埋土は灰色粘質土に黄褐色と黒褐色粘質土のブロックが混入している。遺物は、SK41から唐津系皿(50)と土鐘(51)、SK44からは備前甕(52)が出土しているが、近代の陶磁器片も出土しており、埋土からみても、いずれも時期は近代と考えられる。

#### 溝

#### SD1

SD1は、A区の北部に位置しており、東と西、中央の県道部と3ヶ所に分かれて検出された東西方向の堀と考えられる溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、幅約5.20m、深さ約2.50mを測り、検出長は西から、6.12m、3.65m、3.08mである。基底部の幅は0.40~0.63mと狭く、壁の下半分は傾斜がきつくV字状をなし、上半部は緩やかな傾斜となる。北壁は、調査区外に延びており、基底部から約1mの部分が検出された。埋土は色調により5~6層に分層されたが、暗灰色から黒灰色の粘土であり、一部に間層として砂層がみられた。出土遺物は、土師質土器鍋(53)、備前甕(54)がみられ、時期は15世紀と考えられる。また、木製品として、木札(89)、小形槽状木器(90)、曲物底部(91)、異形木器(92、93)、火鑪片(94)、炭化棒(95)、切口をもつ丸棒(96~99)、杭(100、101)が出土している。

SD1は、検出された位置からみれば、千屋城の外堀と推定されるが、検出部分是一部であり、不明な点が多く、断定することはできない。

#### SD2

SD2は、A区の西側調査区の北部に位置しており、SD1の南1.9mに検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長6.40m、幅1.36m、深さ0.21mを測り、方向はN-82°-Wを示す。底面は

平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SD 2は単独で検出されており、重複する遺構もなく、時期も不明である。

#### SD 3

SD 3は、A区の西側調査区に位置しており、SK 2・3の間に検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長2.83m、幅0.56m、深さ0.12mを測り、方向はN-80°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器片が若干みられた。

SD 3は、SK 2・3と重複しており、SK 2には切られており、より古いのが、SK 3については切り合いが明確ではなく、新旧関係は不明である。また、SD 3は、SD 2と同じ方向性を示すので、関連性をもつ溝かもしれない。

#### SD 4

SD 4は、A区の西側調査区の北部に位置しており、SD 3の南3.45mに検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長4.86m、幅0.62m、深さ0.17mを測る。方向はN-80°-Wを示し、SD 2・3と同じ方向をもっている。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿(55)がみられ、時期は15-16世紀と考えられる。

SD 4は、SD 5と重複しており、切られているので、より古いことが判明している。

#### SD 5

SD 5は、A区の西側調査区の北部に位置しており、SD 4と直交し、検出された、南北方向の溝である。

規模は、検出長6.10m、幅0.82m、深さ0.43mを測り、方向はN-21°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。北端部はSK 3と重複し、東へ曲がり、延びており、南端部はそのままで終わっている。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SD 5は、SD 4を切っており、15世紀以降の時期と考えられる。また、SK 3と重複するが新旧関係は不明である。

#### SD 6

SD 6は、A区の西側調査区の南部に位置しており、単独で検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、幅4.65m、深さ3.32mを測り、検出長は、東西方向部分は4.12mを測り、南壁が西端部で南へ直角に曲がり、9.02mほど延びた後、西南へ曲がりさらに延びている。基底部の幅は0.42mと非常に狭く、北壁は、基底部から急角度で立ち上がり、上部は緩やかな傾斜となる。南壁から東壁はきわめて急傾斜で立ち上がり、断面形は、鋭いV字形を呈する。埋土は青灰色から暗灰色の粘土であり、基底部に木葉がみられた。出土遺物は、土師質土器皿(56~58)、須恵質土器甕(59)、土錘(60)がみられ、時期はやはり15世紀と考えられる。

SD6は、規模、埋土などから堀の一部ではないかと考えられ、千屋城に関するものと考えられる。また、基底部上の埋土中から木葉が出土していることから、空堀の状態にあったと推定される。

#### SD7

SD7は、A区の東側調査区の北部に位置しており、SK8と重複して検出された。東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長1.87m、幅0.24m、深さ6cmを測り、方向はN-79°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は白磁皿(61)が出土しており、時期的には15世紀と考えられ、SK8に切られている。

#### SD8

SD8は、A区の東側調査区の南部に位置しており、SD9と平行して検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長6.43m、幅1.04m、深さ0.11mを測り、方向はN-85°-Wを示す。東端部で2条に分かれ、北の溝は幅0.56m、南の溝は幅0.35mを測り、深さの変化はみられない。底面は平坦であり、断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

#### SD9

SD9は、A区の東側調査区の南部に位置しており、SD8の南1.20mに検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長6.41m、幅1.12m、深さ0.18mを測り、方向はN-80°-Wを示す。東端部で2条に分かれ、北の溝は幅0.36m、南の溝は幅0.33mを測り、深さの変化はみられない。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は備前甕底部(62)がみられ、時期は不明確ではあるが15世紀と考えられる。

#### SD10

SD10は、A区の東側調査区の南部に位置しており、SD9の南約10mに検出された、北西から南東方向への溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長7.63m、幅1.49m、深さ0.19mを測り、方向はN-38°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰色砂質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

#### SD11

SD11は、B区の北部に位置している。北東から南西方向への溝であり、北部は調査区外に延びている。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長9.63m、幅0.64m、深さ0.11mを測り、方向はN-62°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

#### SD12

SD12は、B区の北部に位置しており、SD11の東7mに検出された、L字形の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、幅0.64m、深さ0.21mを測り、検出長は、南北方向4.83m、東西方向4.02mである。方向は南北部分でN-8°-Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SD12は、SB1・2を切っており、より新しいことが判明しているが、SK18については、埋土の違いも明確ではなく、新旧関係は不明である。

#### SD13

SD13は、B区の西部に位置しており、調査区外に延びている。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長3.41m、幅0.76m、深さ0.18mを測り、方向はN-10°-Eを示す。底面には小ピットと落ち込みがみられ、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられず、SD13の時期は不明である。

#### SD14

SD14は、B区の南部に位置しており、SD15・16と平行して検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長4.68m、幅1.83m、深さ0.32mを測り、方向はN-73°-Wを示す。底面は平坦であり、南が最も深く、北は浅い溝に分かれている。断面形は逆台形であり、埋土は灰褐

色粘質土である。出土遺物は土師質土器皿(63~73)が床面上にみられ、時期的には15世紀と考えられる。

#### SD15

SD15は、B区の南部に位置しており、SD14の南0.83mに検出された、東西方向の溝である。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長4.10m、幅0.62m、深さ0.56mを測り、方向はN-71°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は深い逆台形を呈し、東端部はそのまま終わっている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿(74、75)がみられ、時期は15世紀と考えられる。

#### SD16

SD16は、B区の南東部に位置しており、SK45の南3.63mに検出された。検出面は第IV層上面である。

規模は、検出長4.12m、幅4.20m、深さ1.84mを測り、方向はN-84°-Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。西端部はそのまま終わっており、東端部は東へ延びているが、人家が残されており調査不可能であった。埋土は青灰色から黒灰色の粘土であり、SD1・6の埋土に類似している。出土遺物はみられなかった。

SD16は、検出された位置、埋土からみれば、堀と考えられ、やはり、千屋城の南の外堀の一部であろうと考えられる。

#### ビット

#### P1

P1は、B区の中央部に位置しており、第IV層上面に検出された。規模は、直径21cm、深さ18cmを測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器杯(76)と砥石(87)がみられた。

#### P2

P2は、B区の中央部に位置しており、第IV層上面に検出された。規模は、直径32cm、深さ21cmを測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は青磁碗(77)がみられた。

#### P3

P3は、B区の中央部に位置しており、第IV層上面に検出された。規模は、直径31cm、深さ25cmを測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は青磁皿(78)がみられた。

#### P 4

P 4は、B区の中央部に位置しており、第IV層上面に検出された。規模は、直径28cm、深さ12cmを測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は備前壺(79)がみられた。

#### 5. まとめ

Loc. 48で検出された遺構は、掘立柱建物址8棟、土坑45基、溝16条、多数のピットであるが、出土遺物からみれば、15世紀と考えられる遺構と、近世及び近現代の遺構に大別される。15世紀を中心とする遺構は、SK 3・38、SD 1・6・7・9・14~16であり、掘立柱建物址は、SB 4が15世紀ではないかと考えられる以外は不明である。

溝の中でもSD 1・6・17は、千屋城の堀と考えられ、千屋城の存続期間及び範囲を知る上で貴重な資料とみられる。千屋城址は、県道の西75mに跡が位置しており、その南には土塁の一部が残されている。この土塁を東へ延長したライン上にSD 16が検出されており、南の外堀と考えられる。SD 16は、東へは延びているが、西はそのまま消滅しており、この部分が城の虎口であった可能性も充分存する。また、SD 1の西延長上、県道の西には、幅3m、長さ10mほどの土塁状の地形がみられ、ここも北の外堀を形成する可能性をもつ。

今回の調査では、15世紀と考えられる遺構は少なく、千屋城跡と関連をもつ遺構としては堀が存在するが、他の遺構については不明な点が多い。土坑は大半が近現代であり、掘立柱建物址は時期不明のものが多いが、やはり15世紀の千屋城関係の遺構ではないかと考えられる。

第23表 獨立柱建物址計測表

棟別番号	遺構番号	規 模			棟 方 向	面 積 (㎡)	備 考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)			
第175回	SB 1	1×2	2.69×3.59	1.64~2.69	N-20°-E	9.7	
	SB 2	2×2	3.62×3.95	1.80~2.05	N-13°-E	14.3	
第176回	SB 3	1×2	2.40×3.73	1.62~2.40	N-10°-E	9.0	
	SB 4	1×1	2.64×2.85	2.60~2.85	—	7.5	
第177回	SB 5	2×3	2.93×7.29	1.14~3.38	N-80°-W	21.4	
	SB 6	1×2	2.61×4.33	2.02~2.61	N-15°-E	11.3	
第178回	SB 7	2×2	3.08×3.49	1.40~1.95	N-78°-W	10.7	
	SB 8	1×2	2.56×4.00	1.71~2.56	N-8°-E	10.2	

第24表 土坑計測表

棟別番号	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	斷 面 形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第179回	SK 1	橢円形	1.16	0.94	0.38	N-37°-W	箱 形	
	SK 2	溝 状	4.98	0.91	0.35	N-15°-E	逆 台 形	
	SK 3	不定形	4.97	1.20	0.42	N-18°-E	+	
	SK 4	+	2.24	0.72	0.11	N-5°-E	+	
第180回	SK 5	円 形	2.06	1.71	0.86	N-18°-E	箱 形	
	SK 6	楕円形	2.10	1.60	0.48	N-20°-E	逆 台 形	
	SK 7	不定形	1.95	1.60	0.10	N-13°-E	+	
	SK 8	+	2.95	1.46	0.16	N-13°-E	+	
	SK 9	不整形	2.24	0.36	0.10	N-70°-W	+	
第181回	SK 10	円 形	1.15	1.06	0.12	N-15°-E	+	
	SK 11	不定形	1.45	1.19	0.30	N-79°-W	+	
	SK 12	+	1.09	0.91	0.30	N-17°-E	+	
	SK 13	長方形	1.99	1.35	0.28	N-70°-W	+	
	SK 14	+	3.08	1.33	0.24	N-18°-E	+	
	SK 15	不定形	2.20	1.68	0.38	—	+	
第182回	SK 16	+	2.00	1.65	0.44	N-17°-E	+	
	SK 17	円 形	1.10	1.00	0.21	N-23°-E	+	
	SK 18	方 形	2.21	1.80	0.18	N-24°-E	+	

押印番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第182回	SK 19	不定形	1.66	0.69	0.18	N-25°-E	逆台形	
*	SK 20	*	1.27	0.80	0.12	N-21°-E	*	
*	SK 21	溝状	2.33	0.46	0.16	N-72°-W	*	
第183回	SK 22	長方形	3.56	1.52	0.49	N-76°-W	*	
*	SK 23	*	1.61	1.36	0.61	N-7°-E	*	
*	SK 24	*	1.24	0.98	0.08	N-81°-W	*	
*	SK 25	*	1.43	1.10	0.16	N-20°-E	*	
*	SK 26	*	1.52	0.90	0.22	N-79°-W	*	
第184回	SK 27	楕円形	2.66	2.30	0.58	N-15°-E	楕形	
*	SK 28	*	3.98	2.16	0.24	N-2°-W	逆台形	
*	SK 29	方形	1.46	0.82	0.10	N-24°-E	*	
*	SK 30	*	1.86	1.29	0.47	N-75°-W	楕形	
*	SK 31	*	1.82	1.64	0.75	N-77°-W	*	
第185回	SK 32	長方形	2.96	1.48	0.45	N-19°-E	*	
*	SK 33	方形	1.29	0.95	0.37	N-72°-W	*	
*	SK 34	*	1.78	1.32	0.45	N-33°-E	逆台形	
*	SK 35	*	1.40	0.82	0.07	N-22°-E	*	
*	SK 36	円形	0.93	0.74	0.17	N-29°-E	*	
*	SK 37	不定形	2.50	1.56	0.28	N-61°-W	*	
第186回	SK 38	楕円形	5.96	1.99	0.45	N-11°-E	楕形	
*	SK 39	不定形	2.80	1.05	0.18	N-51°-E	逆台形	
第187回	SK 40	方形	3.38	1.46	0.49	N-8°-E	*	
*	SK 41	*	4.02	3.50	0.36	N-14°-E	楕形	
第188回	SK 42	円形	1.64	1.40	0.40	N-77°-W	逆台形	
*	SK 43	長方形	5.13	2.17	0.36	N-72°-W	*	
第189回	SK 44	不定形	4.32	3.96	0.45	N-8°-E	*	
*	SK 45	方形	2.76	2.33	0.28	N-10°-E	*	

第25表 包含層出土土器観察表

標記番号	層位	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
1	第Ⅲ層	土師質土器 杯	12.1 3.9 — 5.0	胴部は直線的に外反し、口縁部は丸みをもつ。底部は上げ底状。	内外面共クロコナナ調整。内面にクロコナナ。	
2	+	土師質土器 鉢	24.0 (4.7) — —	口縁部は内傾し、端部は丸みをもつ。	内外面共横方向のナゲ調整。	
3	+	撞鉢	25.4 (4.5) — —	口縁部は直立し、端部は段をなす。	内外面共クロコナナ調整。	磨前焼。
4	+	+	33.0 (6.4) — —	口縁部は直立し、端部はやや内傾する。	+	+
5	+	壺	34.8 (6.4) — —	口縁部はやや内傾する。端部は丸みをもつ。	+	+
6	+	青磁 碗	15.0 (3.3) — —	口縁部は丸みをもつ。	外面に、形くずれの直文帯をもつ。全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。緑色釉。
7	+	+	16.6 (4.5) — —	+	外面に縦線弁文。全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。淡緑色釉。
8	+	+	11.6 (4.5) — —	胴部は、内湾する。	外面に縦線弁文。	胎土、灰色。緑色釉。
9	+	+	14.8 (3.0) — —	口縁部は外反する。		+
10	+	聚付 皿	— (1.7) — 5.6	高台内の削りが深い。	足込筋ノ目輪ハナシ。高台外面に2条の界線をもつ。	胎土、灰白色。外底面に「大」の黒書銘。伊万里焼。
11	+	青磁 碗	— (1.9) — 4.6	+	足込筋ノ目輪ハナシ。高台内無輪。	
12	+	皿	— (1.6) — 4.2	高台内の削りが浅い。底残片。	糸切り底。	胎土、淡赤褐色。灰白色釉。磨前焼。
13	+	土鉢	全長 5.9 径 1.9 重量(g) 13.9	両端は欠損。	不明。	
14	+	+	全長(2.4) 径 1.5 重量(g) 4.6	大きく欠損する。	+	
15	+	+	全長(3.3) 径 1.8 重量(g) 7.5	+	+	

第26表 遺構出土土器観察表

洋国番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
16	S B 4	土師質土器 皿	13.2 ( 2.9) — —	口縁部は肥厚する。	内外面共にナデ調整。	
17	*	*	15.2 ( 2.7) — —	口縁部は縦やかに外反する。口縁端部は丸みをもつ。	内外面共にナデ調整。 口縁部内外面に黒塗有り。	
18	S B 8	青磁 碗	( 1.3) — 6.8 —	高台内の削りが浅い。	外底底面、ロクロナデ調整。	淡青灰色。
19	*	鉢	20.8 ( 4.1) — —	直立する体部に、やや外傾する玉縁状の口縁部をもつ。	内外面共にロクロナデ調整。	陶器。
20	S K 1	染付 碗	8.0 4.7 — 2.9	体部は内湾する。	外面に、菊花を表わすコンニャク割が3ヶ所施文される。	
21	*	青磁 人形	全長 5.2 全幅 3.4 厚 2.1	道初段で、結核跡の形をとる。上部は右に傾く。	背面下半から底面にかけて穿孔する。 外面には自然釉付着。	青白色釉。
22	S K 3	盃	( 3.7) — 7.0 —	平川な底部に、内湾する体部をもつ。	内外面共にロクロナデ調整。	備前焼。
23	*	甕	(10.5) — 25.0 —	体部は厚みを持つ。	外底面、ヘウ削り調整。	*
24	*	*	( 4.7) — 33.2 —	平底。	内外面共にロクロナデ調整。	*
25	*	青磁 輪花瓶	12.2 ( 2.4) — —	口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。	全面に貫入が入る。	粘土、淡灰白色。 淡緑色釉。
26	S K 4	甕	31.2 ( 5.1) — —	口縁部は内傾する。	内外面共にロクロナデ調整。	備前焼。
27	S K 9	染付 皿	( 1.8) — 4.4 —	高台内の削りが深い。	内面に染付。 貫入を持つ。	粘土、茶白色。
28	*	青磁 碗	12.8 ( 6.1) — —	内湾する体部から、口縁部が直立状に立ち上がる。	全面に貫入がはいる。	粘土、灰白色。 淡緑色釉。
29	S K 11	甕	40.0 ( 4.5) — —	口縁端部の破片。	口縁端部は、粘土を外側へ折り返す。	備前焼。
30	*	*	17.4 ( 2.6) — —	やや外傾する口縁端部をもつ。	内外面共にロクロナデ調整。	*

押印番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
31	S K 22	瑠 鉢	37.2 ( 6.6)	口縁部は直立する。	内外面にロクロナゲ調整。	備前焼。
32	*	壺	30.4 (13.3)	口縁縁部は肥厚し、平坦面をもつ。	内外面ともロクロナゲ調整。	備前焼。
33	*	甕	( 6.7)	高台内の削りが深い。体部は直文する。	外面にロクロ目痕を残す。	
34	*	青 磁 細首壺	— ( 9.0) 11.7 5.0	体部上半は薄い。	内面にロクロ目痕。	緑灰色釉。
35	*	染 付 皿	14.0 3.0 7.0	高台縁はとがりきみ。 高台高は低い。	内面底面に五弁花の印花文。見込筋ノ目輪ハギ。	淡白青色釉に、淡青色の染付。
36	*	皿	— ( 1.8)	底部の破片。	内面底面に墨絵模。	唐津焼。
37	S K 23	染 付 碗	— ( 3.6)	高台縁部は丸みをもつ。	高台外面と体部下手に2条の界線。	粘土、淡紫褐色。 淡青緑色釉。
38	S K 26	瑠 鉢	28.0 ( 9.8)	口縁部はやや内傾し、端部は丸みをもつ。	内面に細い糸線をもつ。	備前焼。
39	S K 27	甕	( 5.8)	高内内の削りが深い。	体部はやや内湾する。	新土、淡白黄色。 淡黄茶色釉。
40	*	染 付 碗	( 2.8)	底部の破片。	高台外面に2条の界線をもつ。	伊万里焼。
41	S K 28	皿	13.0 ( 2.0)	口縁部の破片。 口縁端部は外反する。	内外面共、ロクロナゲ調整。	
42	*	壺	12.2 ( 4.3)	口縁端部は丸みをもつ。	外面胴部上半に波状文。 内外面共ロクロナゲ調整。	備前焼。
43	S K 31	土師質土器 皿	13.8 3.6 5.0	口縁部は、やや肥厚する。	内外面共、横方向のナゲ調整を施す。	
44	S K 38	壺	( 5.6)	高台の高さは低い。	高台端部を削る。	唐津焼。
45	*	*	( 5.9)	底部の破片。	内外面共ロクロナゲ調整。	備前焼。
			39.7			

標記番号	遺構番号	器 種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
46	SK 38	天目茶碗	— ( 5.8 ) — 4.2	高台と体部の境が明確。	外面に施釉。	胎土、白灰色。 瀬戸焼。
47	*	碗	— ( 4.5 ) — 4.8	体部は内湾する。	内外面共ロクロナデ調整。	
48	*	皿	— ( 2.5 ) — 4.0	体部は薄い。	内面に胎土目。	唐津焼。
49	*	碗	— ( 2.0 ) — 6.1	底部の破片。 高台端部はとがりぎみ。	高台内を深く削る。 高台外面に1条の青線。	
50	SK 41	皿	— ( 1.4 ) — 4.5	底部の破片。 高台高は低い。	内外面共ロクロナデ調整。	唐津焼。
51	*	土 鐘	全 長 ( 2.3 ) 径 1.4 重 量 3.0	片割を欠損する。 全体に丸みをもつ。		
52	SK 44	甕	26.6 ( 5.4 ) — —	口縁部はやや内傾する。	内外面共ロクロナデ調整。	瀬戸焼。
53	SD 1	土師質土器 鍋	18.8 ( 4.3 ) — —	口縁部は内傾し、端部は面をもつ。	口縁部すみに、断面三角形の突帯をもつ。	
54	*	壺	27.4 ( 6.8 ) — —	口縁部は、体部上端を外側へ折り返して形成する。	内外面共横方向のナデ調整。	瀬戸焼。
55	SD 4	土師質土器 皿	14.0 3.0 — —	口縁部はやや肥厚する。	口縁部に面をもつ。	
56	SD 6	*	11.2 2.2 — —	口縁部は厚みをもつ。 底部は薄い。	内外面共ロクロナデ調整。	
57	*	*	13.1 3.7 — 6.0	体部は内湾し、端部は肥厚する。	*	
58	*	*	16.2 ( 3.3 ) — —	口縁部はやや外反する。	*	
59	*	須恵質土器 甕	— ( 4.0 ) — 10.0	底部の破片。 平底。	内外面に横方向のナデ調整がある。	
60	*	土 鐘	全 長 3.4 径 1.2 重 量 2.6g	不整形な体部をもつ。		

標頭番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
61	SD 7	白磁 罎	13.8 3.3 — 8.6	口縁部は直線的に外反し、胴部は曲をもつ。	外面に施釉。	白色釉。
62	SD 9	甕	( 5.3) — 25.2	底部の破片。 平底。	内外面共にロコナゲ調整。	無前提。
63	SD 14	土師質土器 罎	13.0 4.2 — 5.0	口縁端部は肥厚する。底部は薄い。	。	
64	。	。	13.2 ( 3.2) — —	底部は直線的に外反する。	。	
65	。	。	13.4 3.2 — 5.5	口縁部は肥厚する。	。	
66	。	。	15.2 3.1 — 9.2	口縁端部はやや外反する。	口縁端部に強いロコナゲ調整を施す。	
67	。	。	14.4 3.3 — 5.0	。	内外面に指頭圧痕をもつ。	
68	。	。	14.6 3.2 — —	口縁端部は肥厚する。	内外面共にロコナゲ調整。	
69	。	。	13.7 4.1 — 7.0	。	。	
70	。	。	14.5 3.8 — 7.2	底部下半は薄く、口縁端部は肥厚する。	。	
71	。	。	15.1 3.6 — —	口縁端部はやや外反する。	。	
72	。	。	14.8 3.5 — —	。	口縁端部に強いロコナゲ調整を施す。	
73	。	。	14.3 ( 3.8) — —	。	。	
74	SD 15	。	12.1 2.0 — 6.0	器高は低く、口縁部は肥厚する。	。	
75	。	。	16.0 ( 2.7) — —	口縁部はやや外反する。	内外面共に、ロコナゲ調整を施す。	

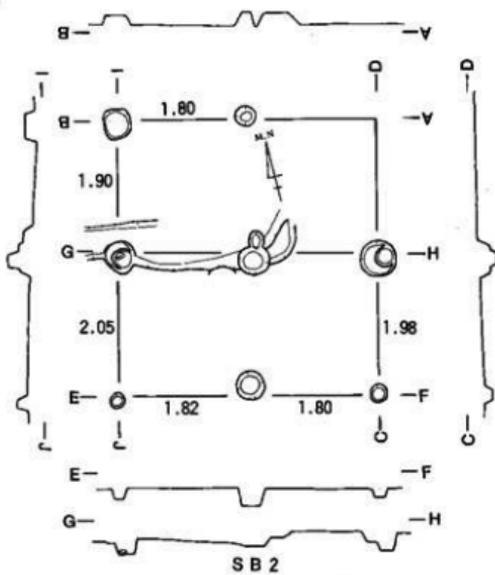
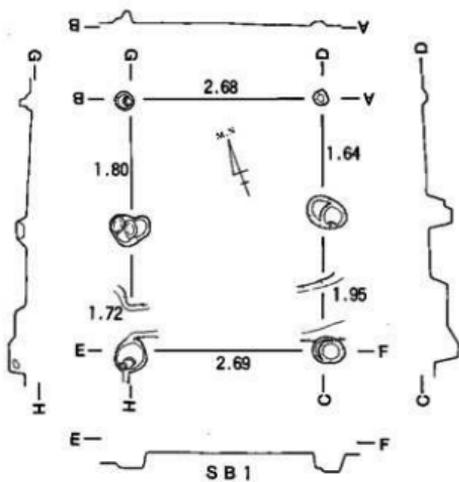
採掘番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 手 法	備 考
76	P 1	土師質土器 杯	9.4 3.8 — 4.9	平底で、体部は内湾する。	内外面共にクロコナダ調整。	
77	P 2	青磁 碗	— (2.4) — 5.3	碗底部。	見込に「雅」の字が印刷される。 全面に貫入がみられる。	胎土、灰色。 緑色釉。 外底面、蛇ノ目 輪ハキ。
78	P 3	青磁 輪花皿	10.5 (2.1) — —	口縁部は大きく外反する。底部 は丸い。波状口縁。	全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。 緑色釉。
79	P 4	壺	4.0 (1.5) — —	小壺。口縁部は短く外反する。	内外面共にクロコナダ調整。	備前焼。

第27表 遺構出土石器観察表

採掘番号	遺構番号	器種	最大長 最大幅 最大厚 計測値 (cm, g) 重 量	材 質	特 徴	備 考
80	S K 6	砥石	13.3 8.8 3.1 543.0	砂岩	使用面は、3面にみられる。 使用痕をもつ。	
81	S K 22	*	10.8 5.4 1.4 83.8	頁岩	組織状の使用痕がみられる。	
82	*	石白	9.7 5.0 3.5 253.0	砂岩	割線が残る。	
83	S K 24	石錘	13.2 7.4 2.7 403.0	*	構内状の河原石の、中央部両端を打ち欠く。	
84	S K 26	石製品	4.5 5.2 1.6 52.3	泥岩	直線状の割線が4本認められる。「鳥」のく ずし文字を削む。	
85	S K 27	石白	21.0 14.5 7.2 3400.0	砂岩	片面は、熱変化している。	
86	S K 28	*	14.3 12.1 6.2 1545.0	*	引き白の破片。 7本の割線がみられる。	
87	*	砥石	4.1 2.9 0.7 10.6	安山岩	組織の観察痕が多数みられる。	

第28表 遺構出土木器観察表

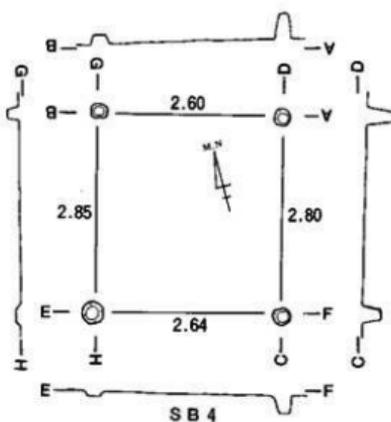
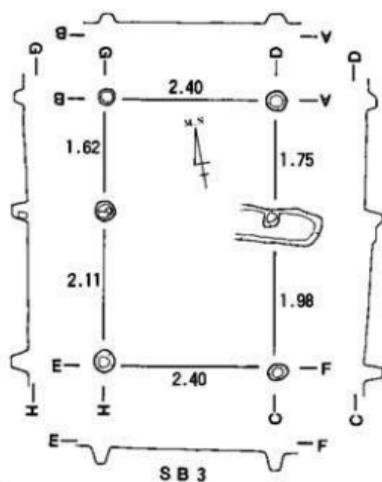
押込番号	遺構番号	器 種	最大長 最大幅 計測値 (cm, #) 最大厚 重 量	材 質	特 徴	備 考
88	S K 34	不 明	直径5.3 — — 5.5	不 明	球形を呈する。頂部に1孔もうけるが、貫通しない。金粉が塗られている。	
89	S D 1	木 札	20.7 3.7 0.3	*	長方形状で、厚みは薄い。	
90	*	小形樽状 木 器	11.6 4.1 1.5	*	同型のくりこみをもつ。 加工痕をもつ。	
91	*	曲 物	14.5 2.1 0.5	*	底部の破片。側面は弧状を呈する。	
92	*	異形木器	11.6 2.4 1.2	*	用途不明。断面は長方形。	
93	*	*	9.7 2.0 1.1	*	*	
94	*	火 鑽 杵	14.1 2.2 1.2	*	棒状で、端部は丸みをもつ。	
95	*	不 明	10.4 2.4 2.1	*	断面は円形を呈する。炭化している。	
96	*	*	25.0 2.3 2.2	*	加工木で切り口をもつ。 用途不明。	
97	*	*	20.7 3.0 2.9	*	*	
98	*	*	17.6 2.8 2.6	*	*	
99	*	*	12.2 2.9 3.1	*	*	
100	*	杖	17.6 2.8 2.6	*	先端は尖る。	
101	*	*	12.2 2.9 3.1	*	加工痕をもつ。	



DL = 5.00m



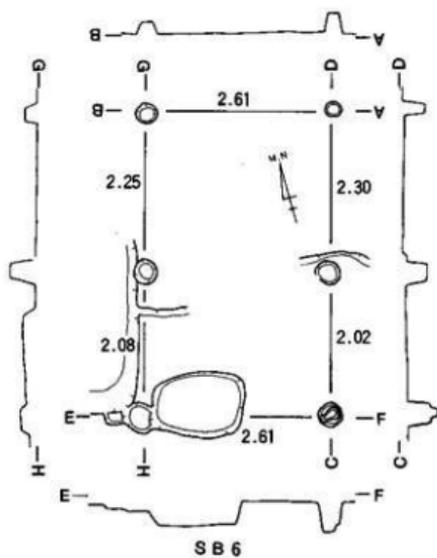
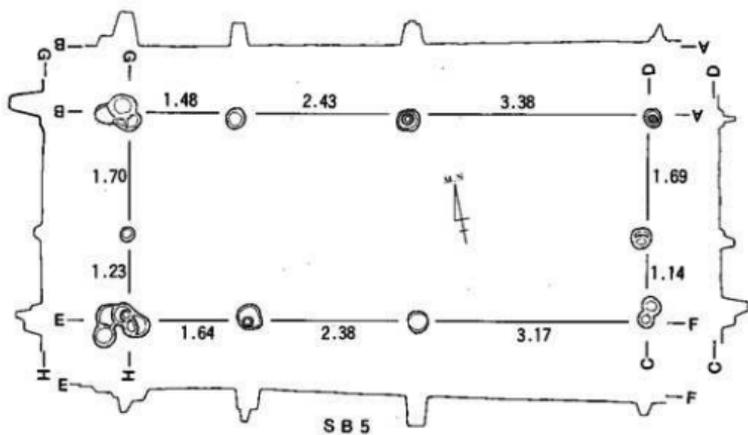
第175圖 SB 1 · 2



DL = 5.00m



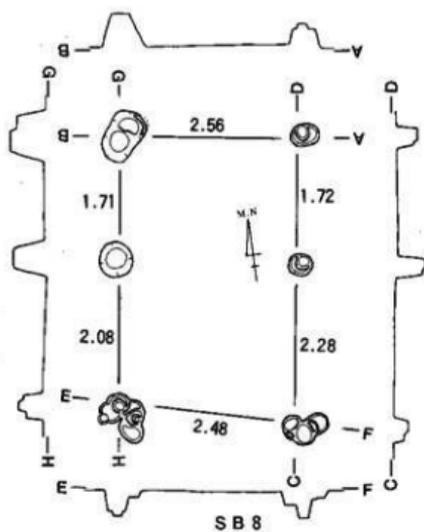
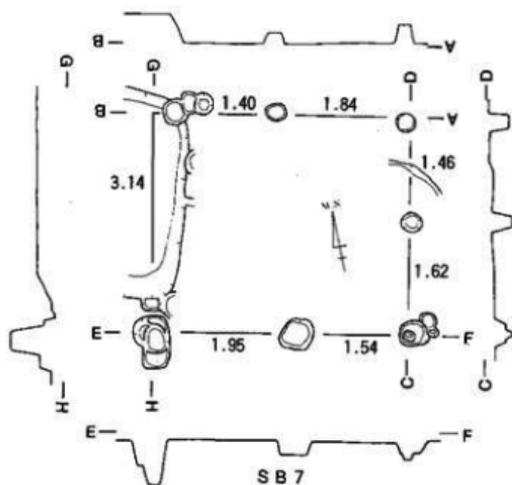
第176圖 SB 3 · 4



DL = 5.00m



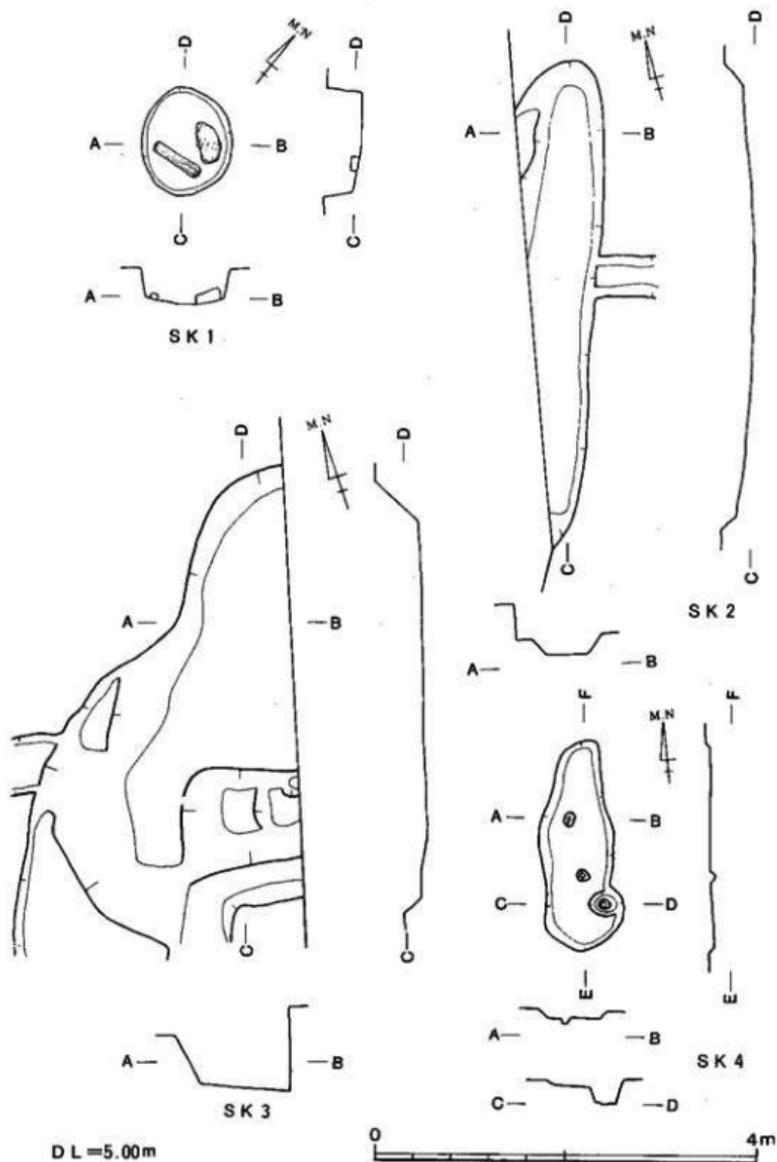
第177图 SB 5 · 6



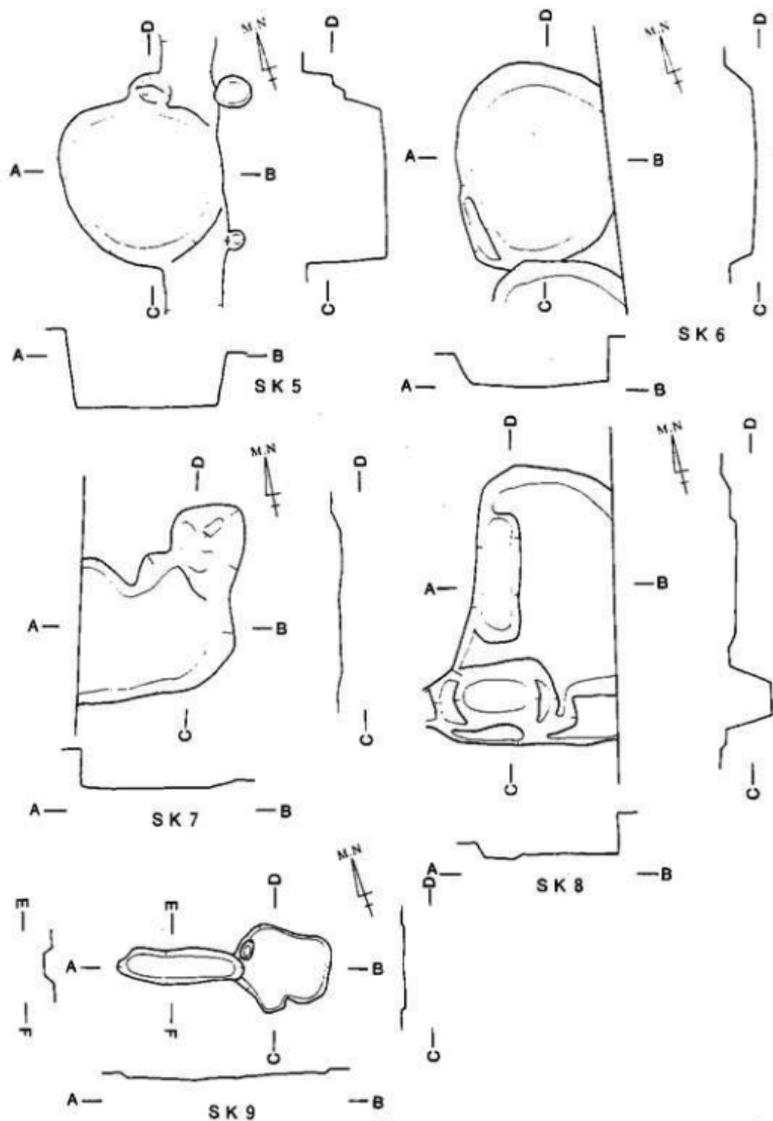
DL = 5.00m



第178図 SB 7・8

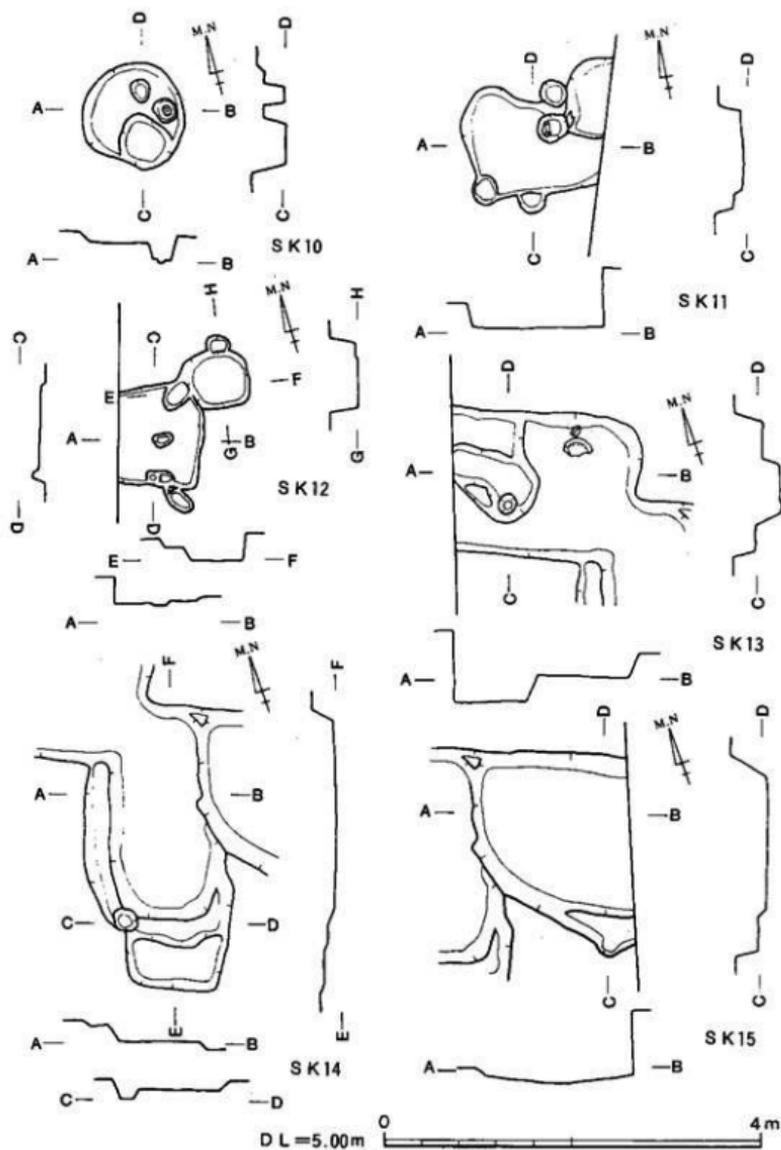


第179圖 SK 1~4

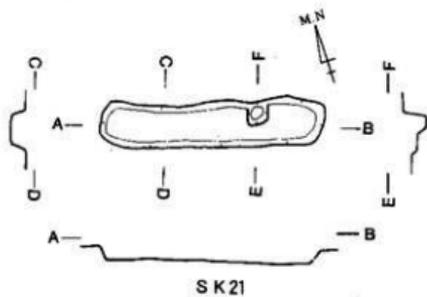
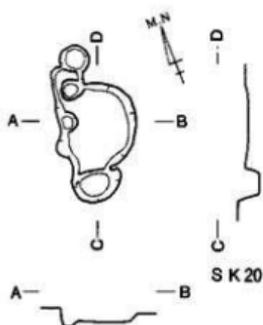
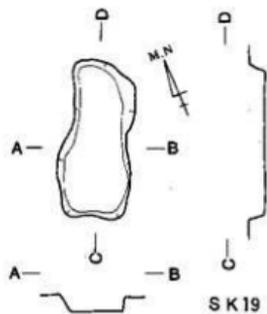
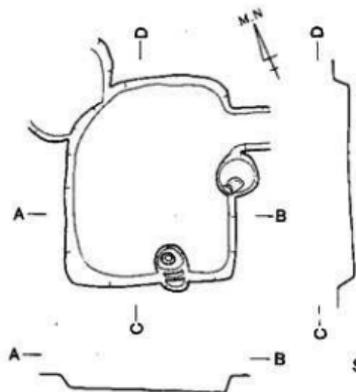
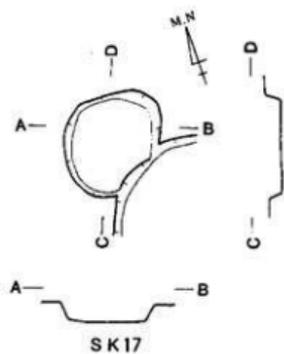
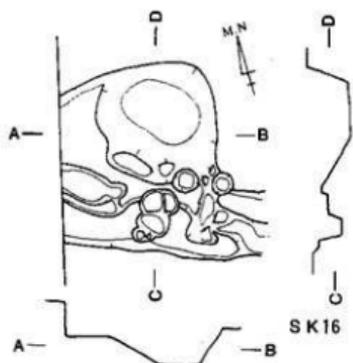


DL=5.00m

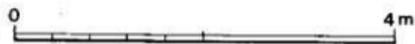
第180図 SK 5~9



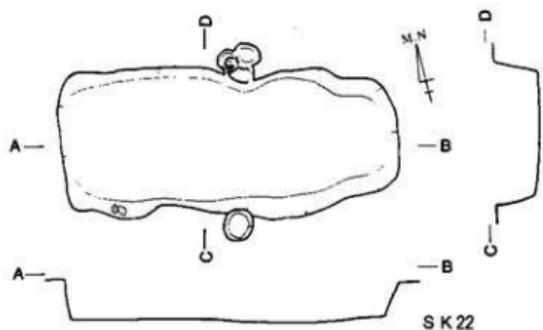
第181图 SK10~15



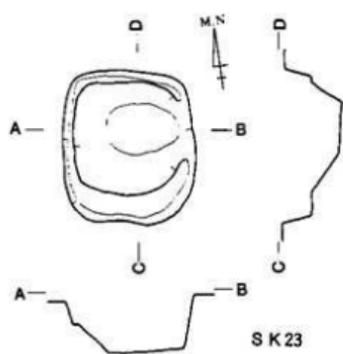
DL = 5.00m



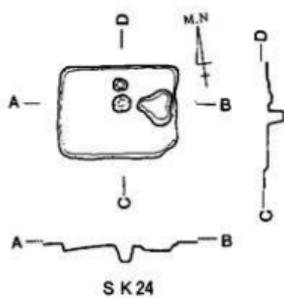
第182図 SK16~21



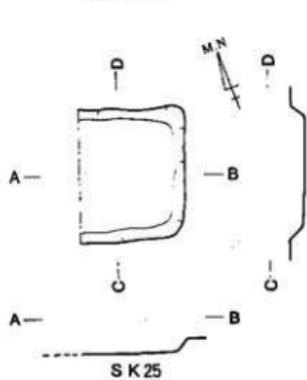
SK22



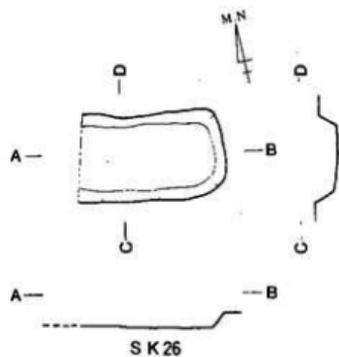
SK23



SK24



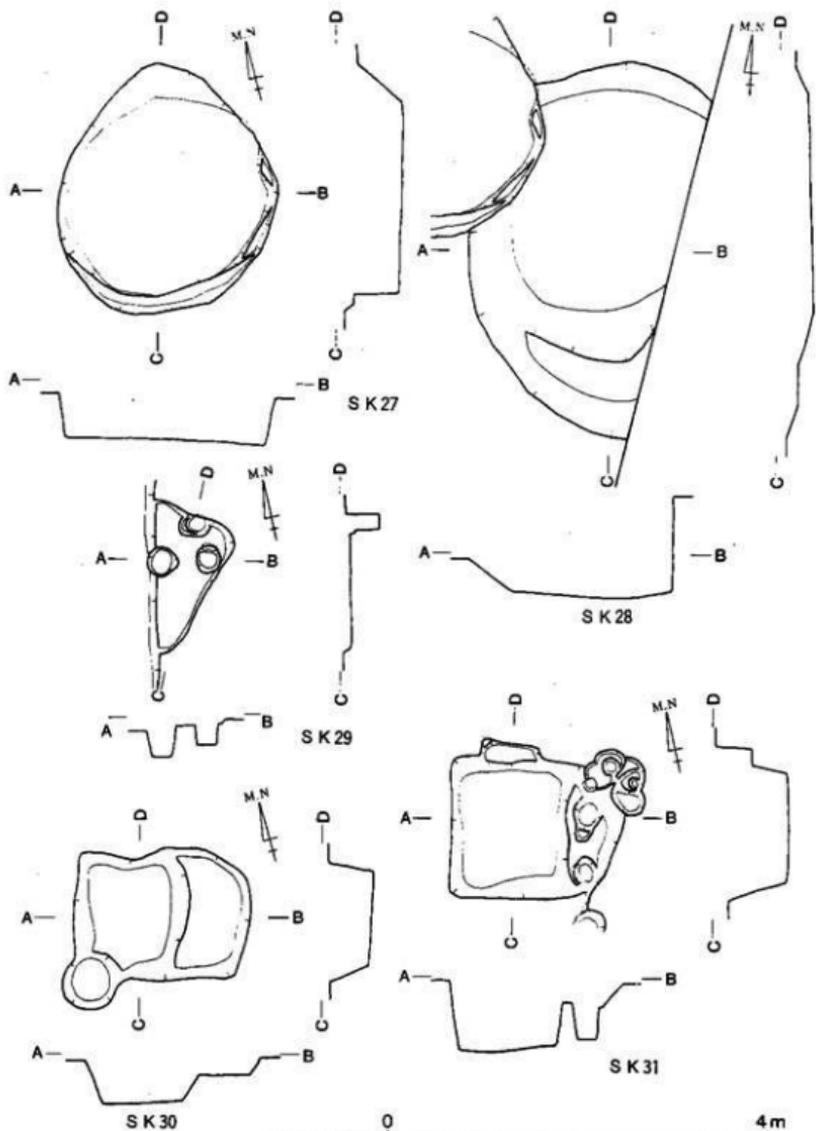
SK25



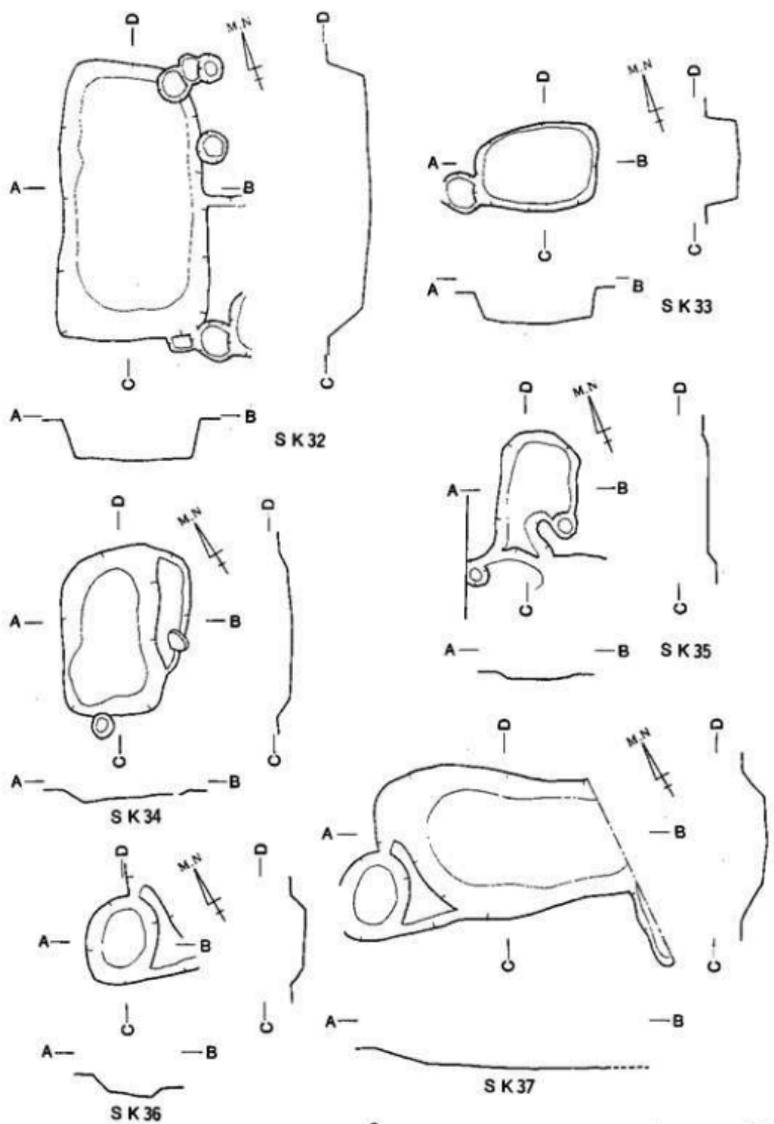
SK26



第183回 SK22~26

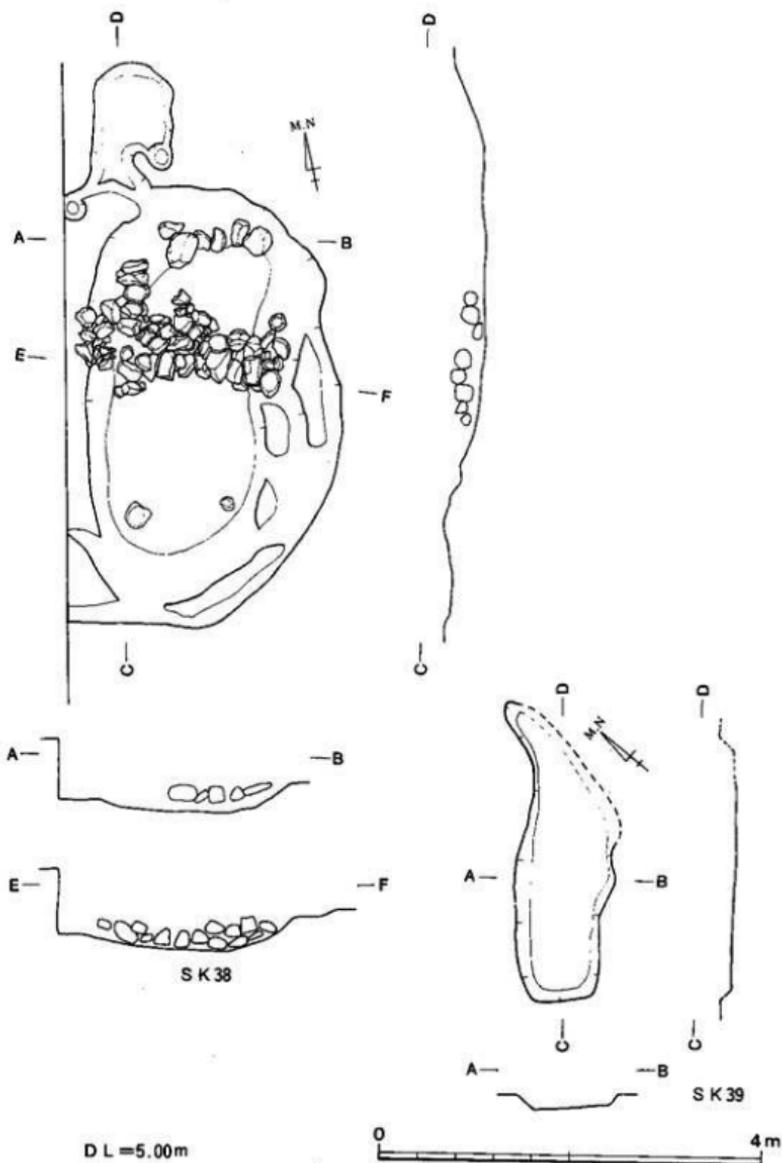


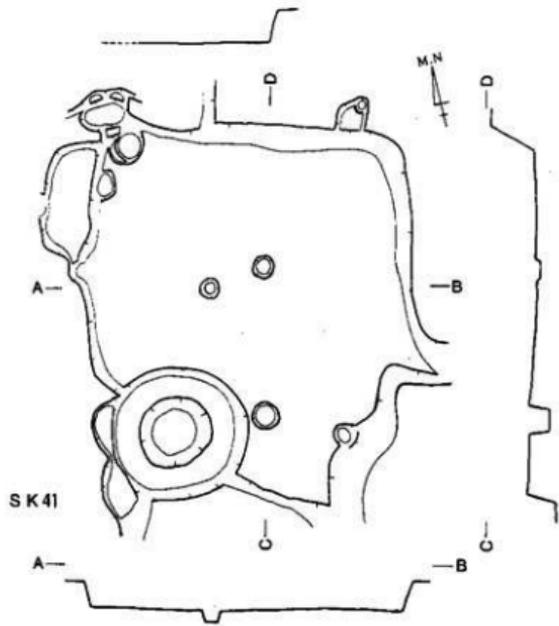
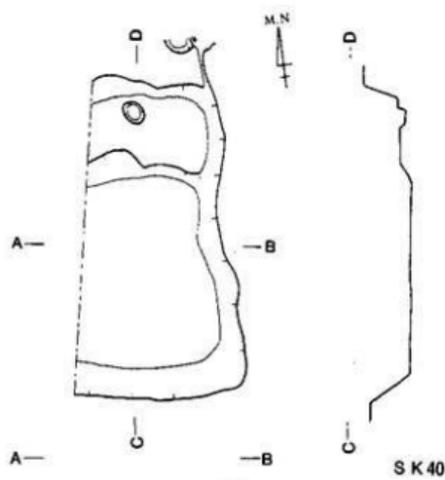
第184图 SK 27~31



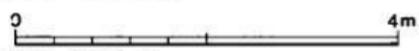
DL = 5.00m 0 4m

第185圖 SK 32~37

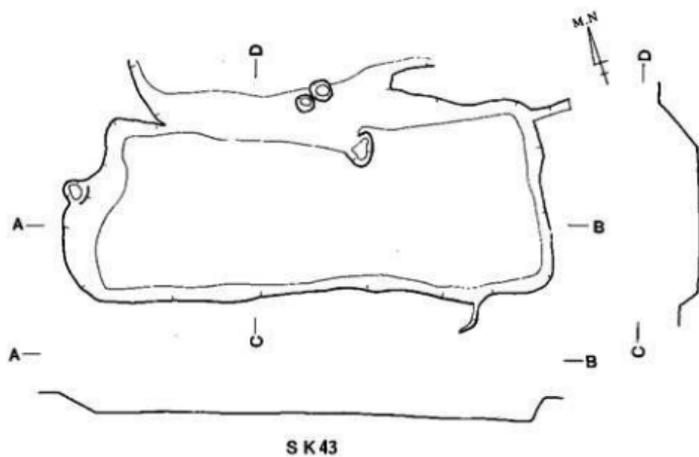
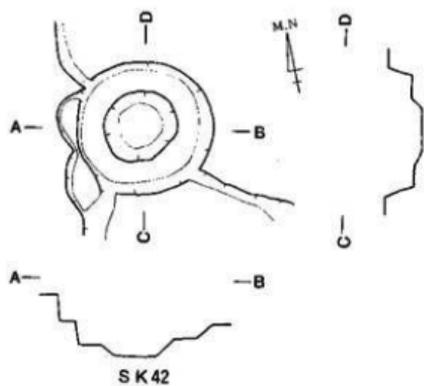




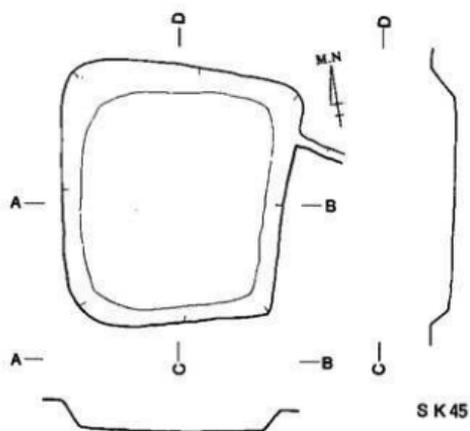
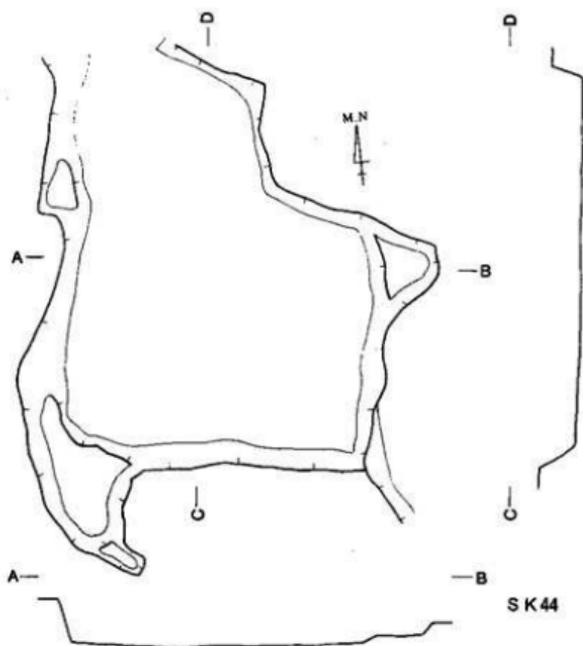
DL=5.00m



第187圖 SK40・41



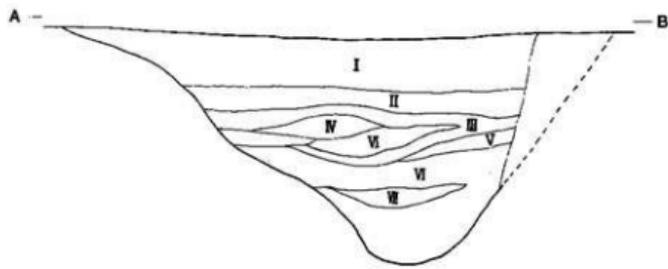
第188圖 SK 42・43



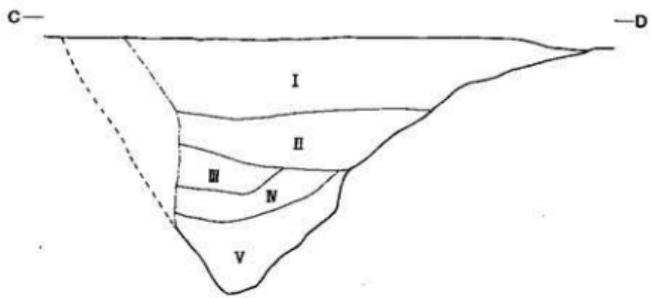
D L = 5.00m



第189図 SK44・45



SD1 西壁



SD1 東壁



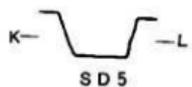
SD 2



SD 3



SD 4

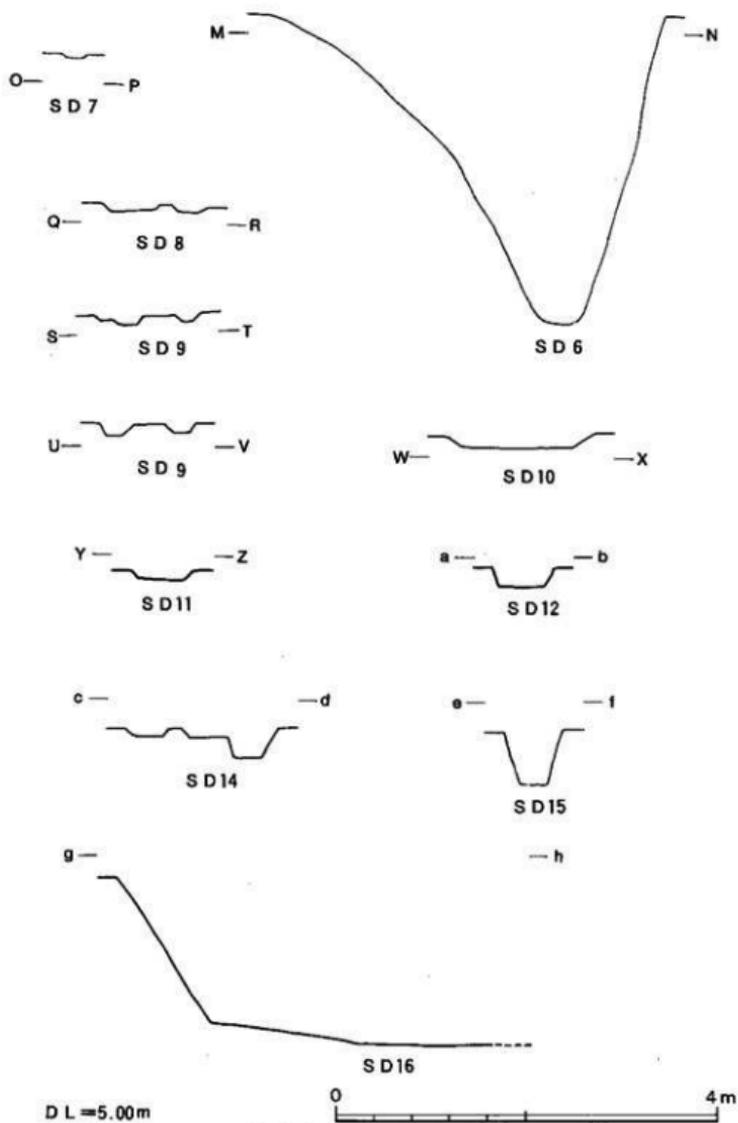


SD 5

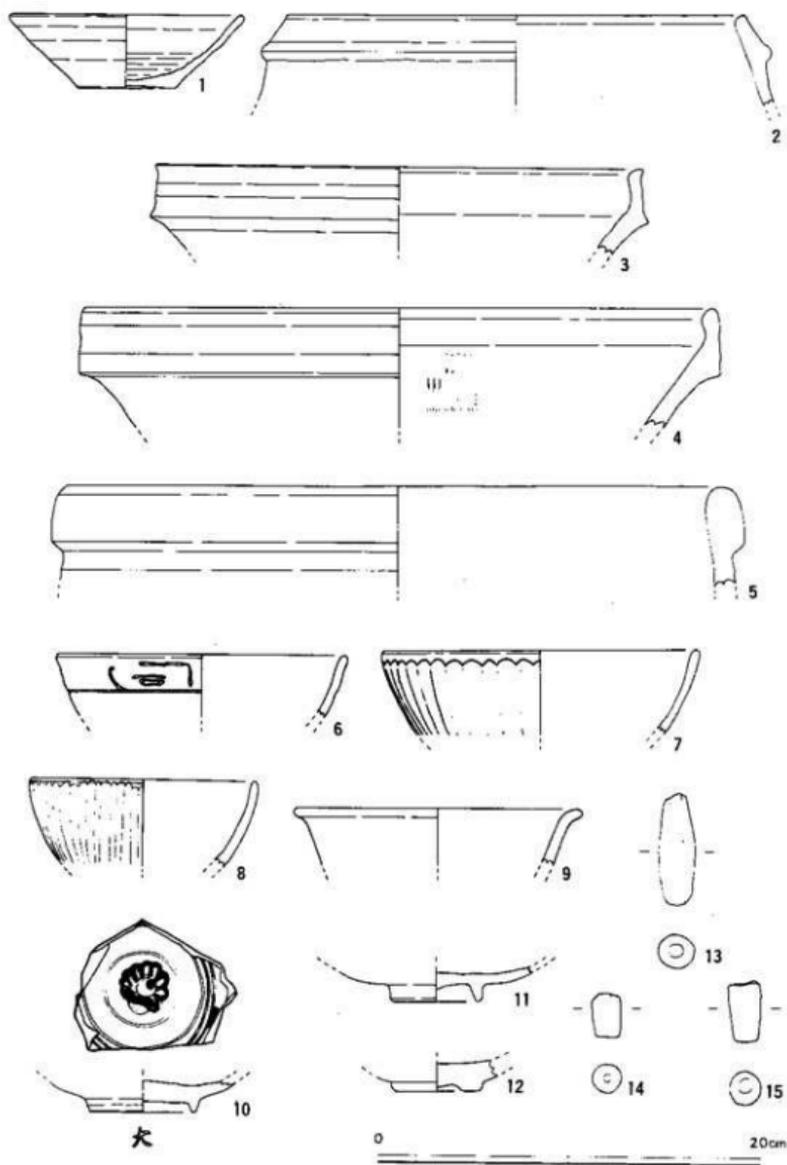
DL=5.00m



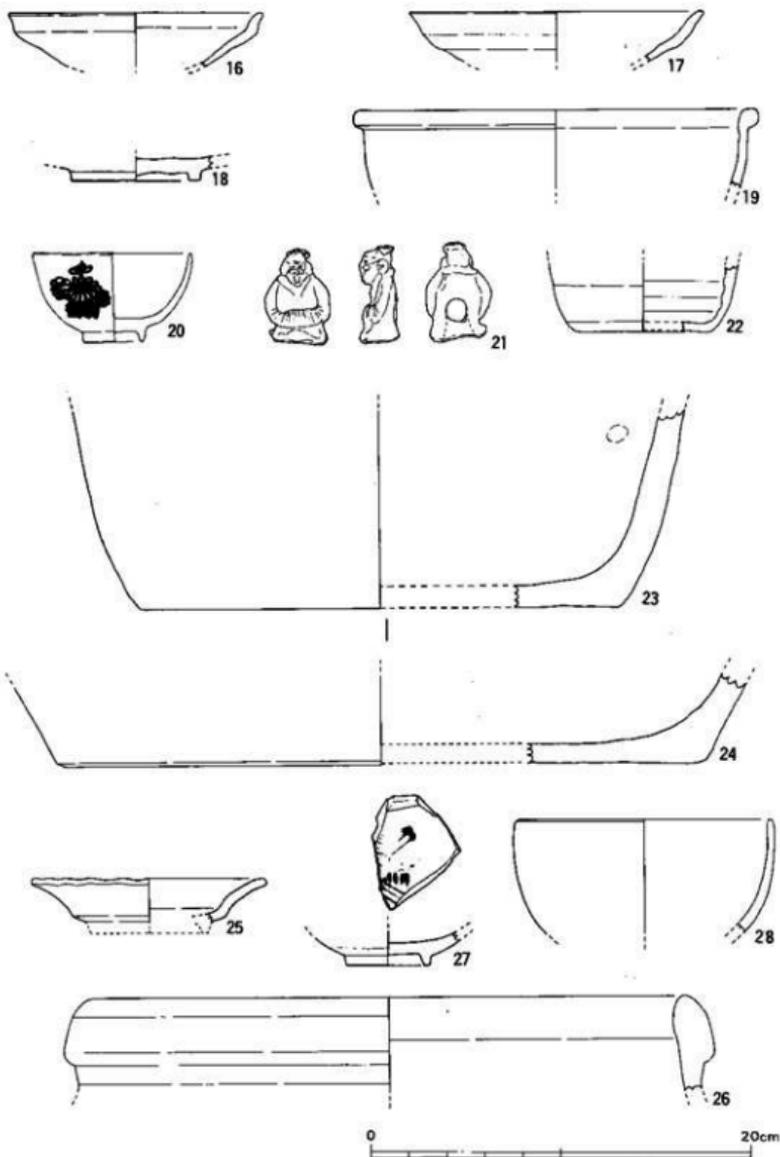
第190圖 SD1~5



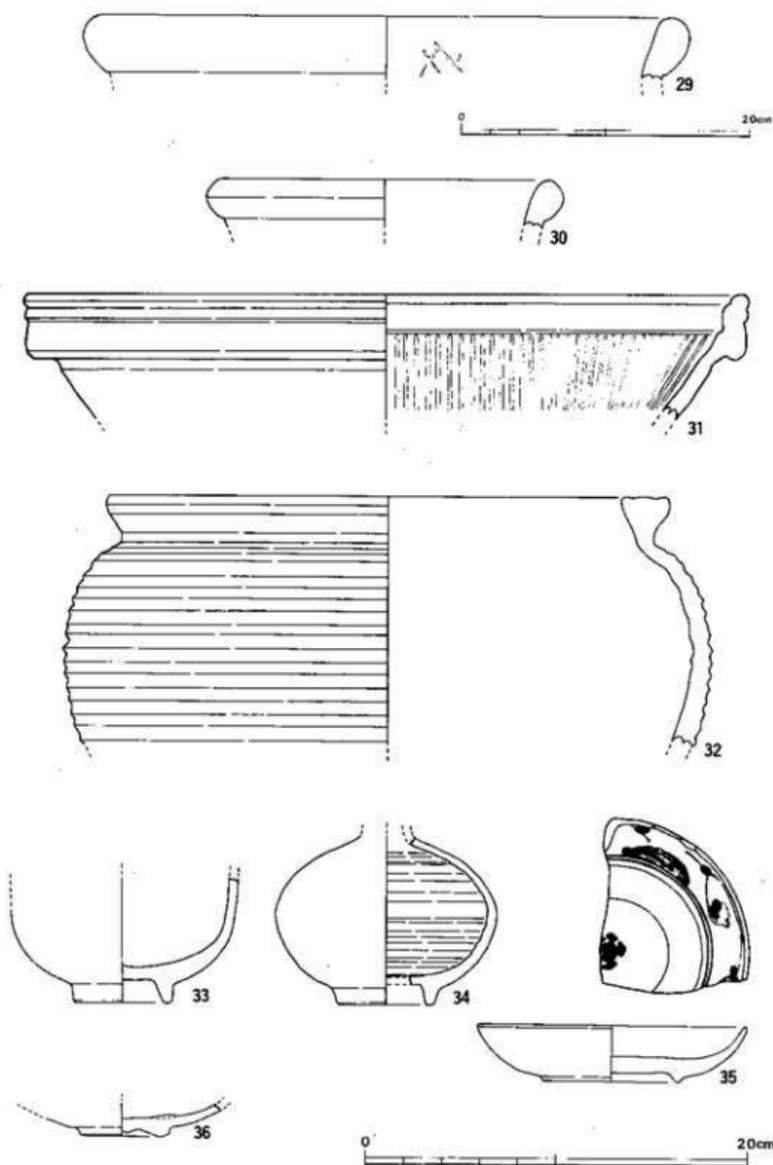
第191圖 SD 6~12 · 14~16



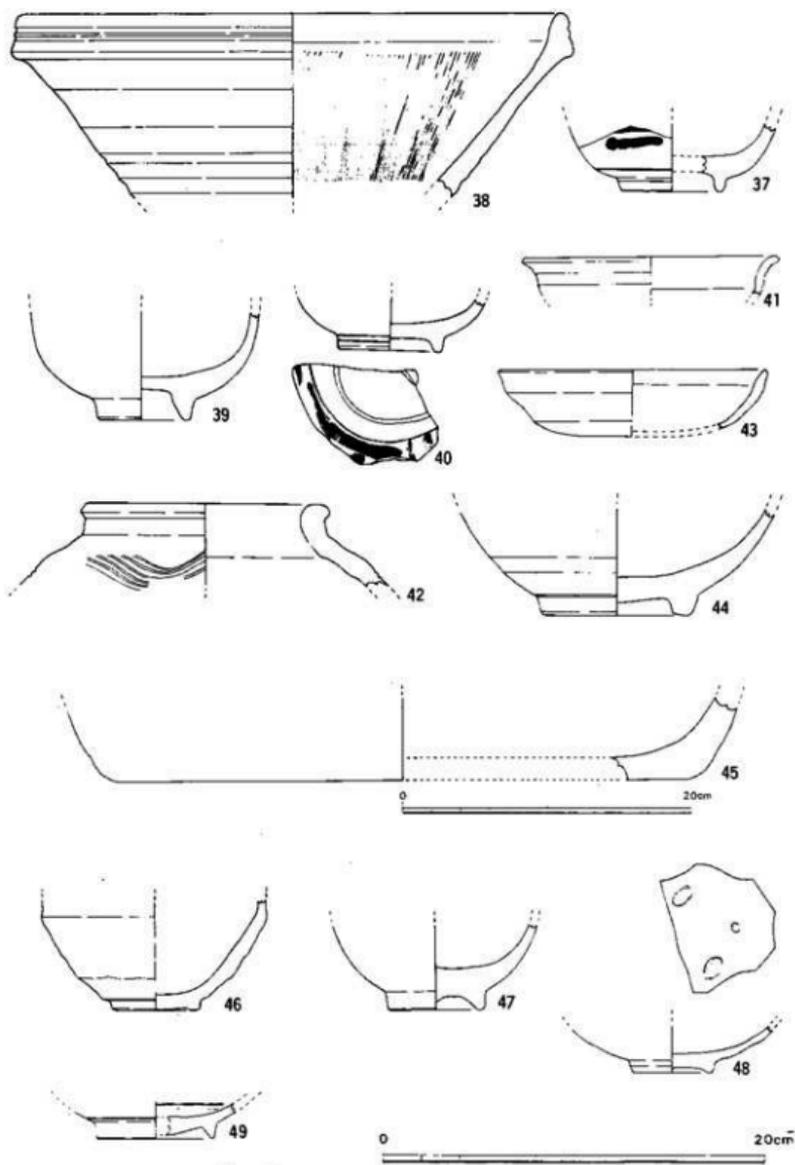
第192図 第三層 出土遺物



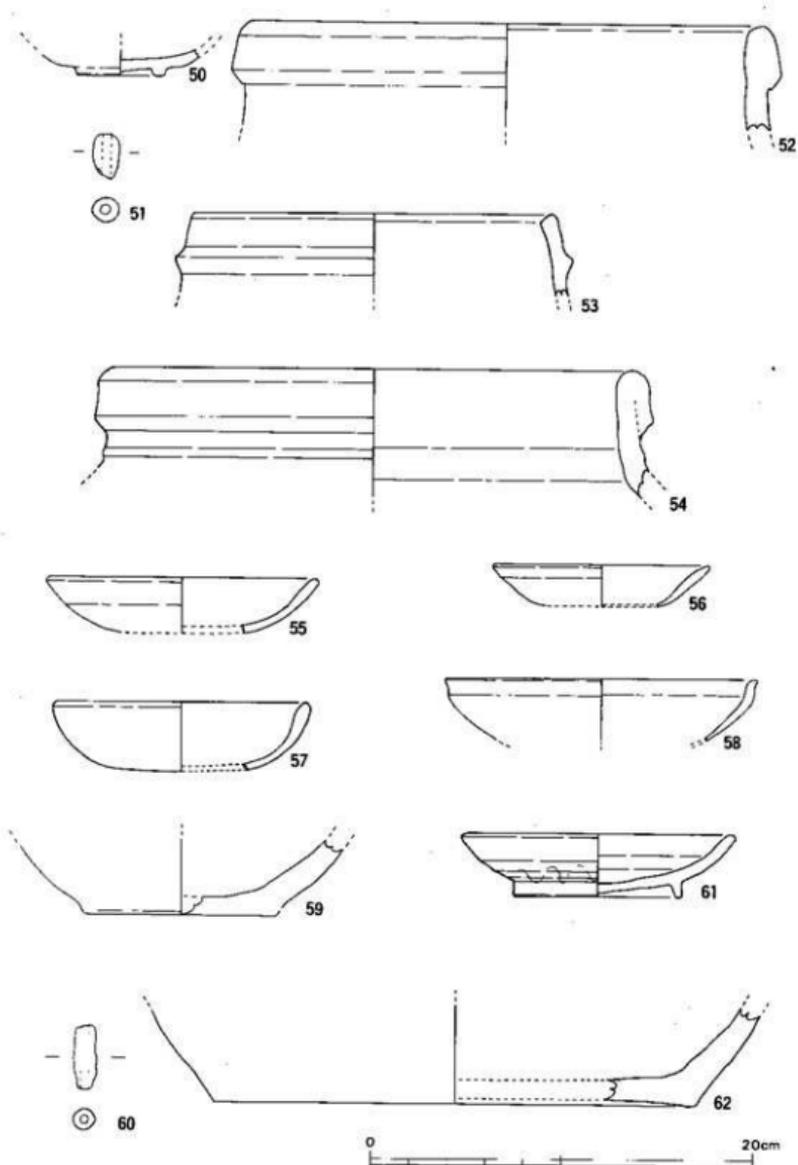
第193圖 SB 4・8、SK 1・3・4 出土遺物



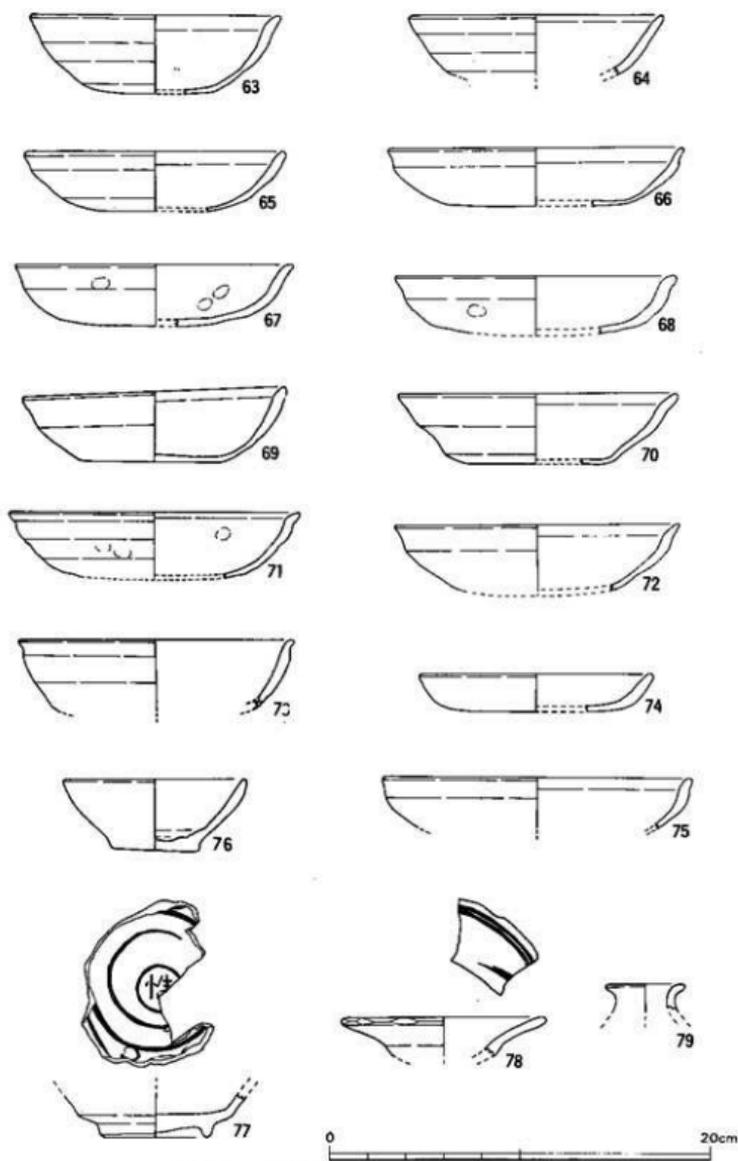
第194図 SK11・22・23 出土遺物



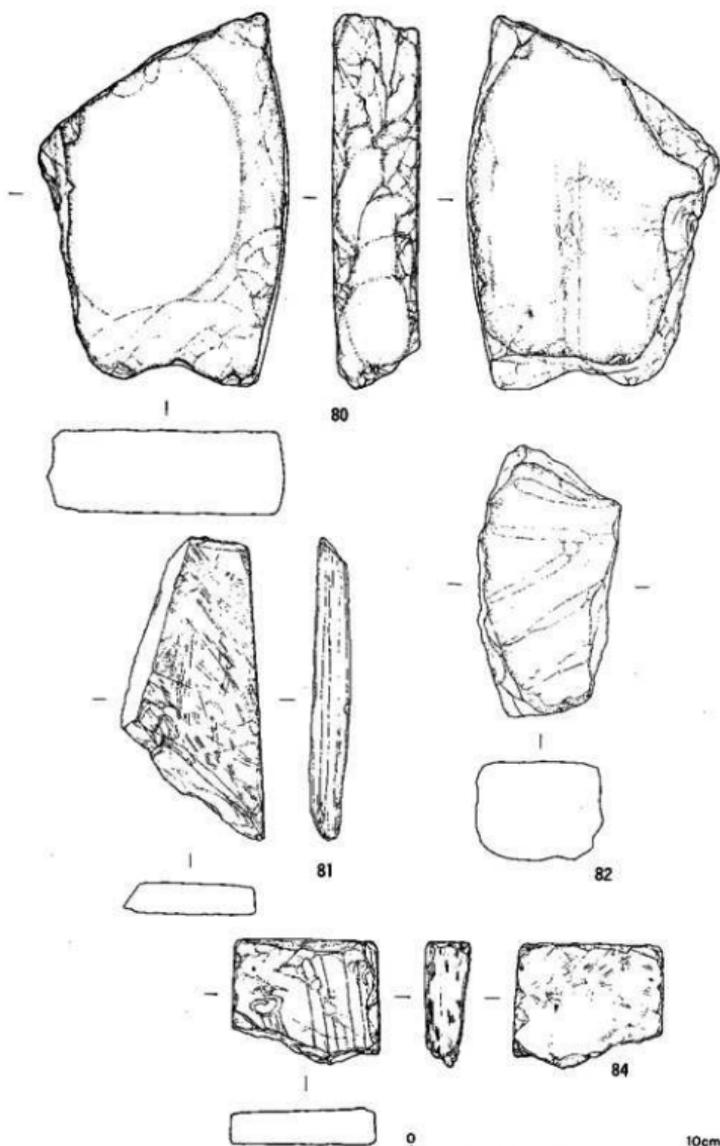
第195図 S K 26~28・31・38 出土遺物



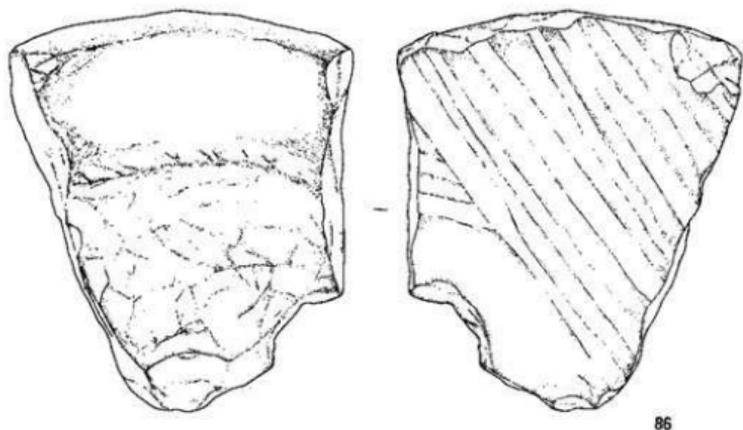
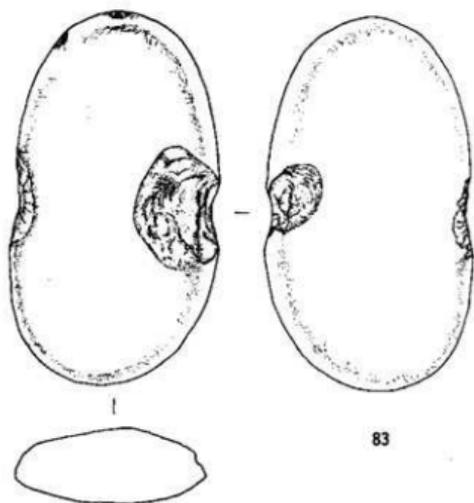
第196図 SK41・44、SD1・4・6・7・9 出土遺物



第197图 SD14・15、P1~4 出土遺物



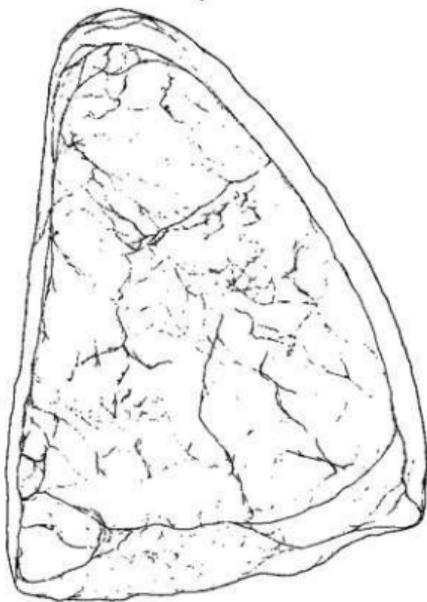
第198圖 SK 6・22・24・26 出土遺物



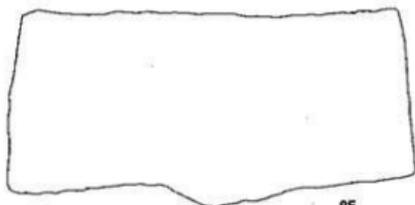
第199圖 S K 24・28 出土遺物



87



1



85



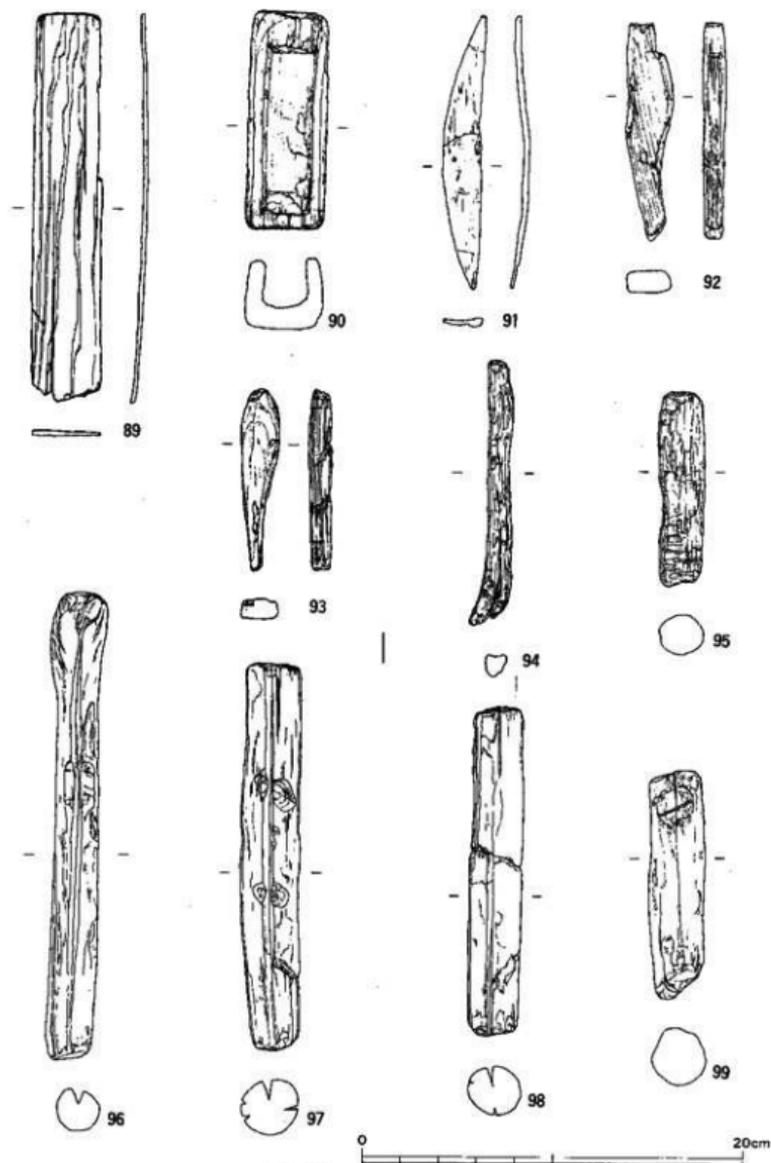
1



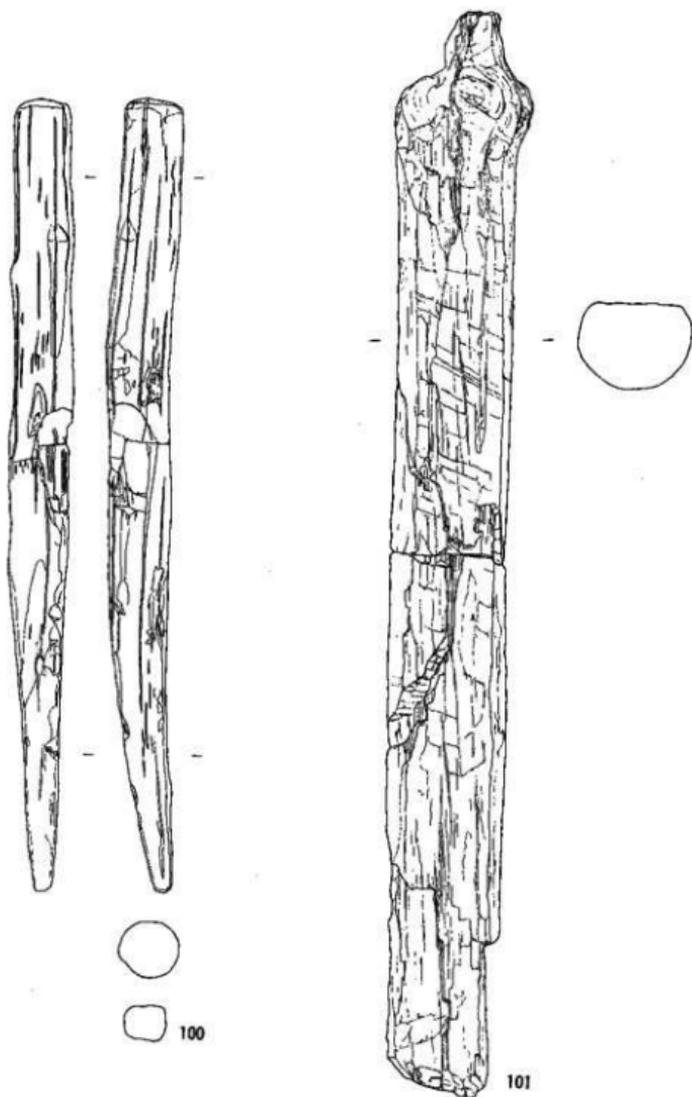
88



第200图 SK 27 · 28 · 34 出土遺物



第201图 SD 1 出土遺物



第202図 S D 1 出土遺物

0 20cm

## 6. 中～近世小結

## 6. 中～近世小結

### はじめに

田村遺跡群において検出された主な中近世遺構は、掘立柱建物址、土壇、溝及び井戸等である。これらは、分布密度に大小はあるものの、Loc. 1～48の調査区の大半において検出されている。

掘立柱建物には、溝に囲まれた区画内にあるものとそうでないものがあり、また、溝に囲まれた屋敷の中にも井戸を有するものと有さないものがある。土壇も多数検出されているが、中世墓あるいは近世墓の他は性格が明瞭でないものが多い。出土遺物も、検出遺構の数に比例して絶対量が非常に多く、その時期も13世紀から18世紀までの長期にわたっている。

中近世編の小結としては、これらの全遺構、遺物を俯瞰して論述すべきではあるが、これに関しては、各調査区毎のまとめを参照して頂くことにして、本項では、溝に囲まれた屋敷址を中心に、まず、その出土遺物について触れ、続いて同遺構に関する資料の集計を行い、かつ、『長宗我部地検帳』<sup>註1</sup>の記載事項との関連も追求することによって、小結に代えたい。

### 1. 出土遺物

田村遺跡群の中近世の調査において、14～17世紀初頭に至る掘立柱屋敷址を検出した。それに伴って、各遺構から多量の遺物が出土した。ここでは、土師質土器、瓦質土器の形態分類を行い、併せて遺構から伴出している国内産陶器、輸入陶磁器類との関係をも検討していきたい。また、土師質土器、瓦質土器が、この期間にどのような変遷をしているかという点に注目し、田村遺跡群における中世土器の編年試案を考えることにする。

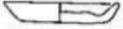
#### (1) 形態分類

##### 土師質土器

器種として、杯、皿、小杯、小皿、鍋、釜、鉢、碗がある。釜、鉢、碗、小杯を除き各器種ごとに分類を行う。<sup>註2</sup>

##### a) 小皿

A類は、ロクロ成形で、器高1.0～1.5cm前後、口径6～8cmを測る。口径及び口縁部の形態によって分類する。<sup>註3</sup>

形態分類	土師質土器	小皿
A-I-a類		
A-I-b類		
A-II-a類		
A-II-b類		
A-III類		
B-I類		
B-II類		

第203図 土師質小皿分類表  
(S=1)

A-I類：口径6cm前後で、体部が直線的に外上方に立ち上がるもの。さらに口縁部の形態によって細分する。

A-I-a類：口縁端部が面取りされるもの。

A-I-b類：口縁部は直線的にそのまま引き上げられるもの。

A-II類：口径7~8cm前後を測る。さらに口縁部の形態によって細分する。

A-II-a類：口縁部が外反するもの。

A-II-b類：口縁部は外反せず、そのまま直線的に引き上げられるもの。

A-III類：比較的高い高台を有するもの。

B類は、ロクロ未使用で手づくねにより成形され、口径6~8cmを測る。口径及び形態によって分類する。

B-I類：口径6~7cm前後で器高1.5~2.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がる。

B-II類：口径8cm前後で、器高1cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。

#### b) 皿

A類は、ロクロ成形で器高3cm以内、口径8cm以上のものである。以下口径及び口縁部の形態によって分類を行う。

A-I類：口径13cm前後で、口縁部が外反するもの。

A-II類：口径10cm前後で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部に至るもの。

B類は、ロクロ未使用で、器高3cm以内、口径8cm以上のものである。以下口径、胎土及び形態によって分類する。

B-I類：口径12~13cmで、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデのため外反する。さらに胎土によって細分する。

B-I-a類：胎土が浅黄橙色を呈する。

B-I-b類：胎土が灰褐色を呈する。

形態分類	土師質土器皿
A-I類	
A-II類	
B-I-a類	
B-I-b類	
B-II-a類	
B-II-b類	
B-III類	
B-IV類	

第204図 土師質土器皿分類表 (S=1)

B-II類：体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外反する。白色系のもので、さらに口径によって細分を行う。

B-II-a類：口径が10cm前後のもの。

B-II-b類：口径が15cm前後のもの。

B-III類：口径18cmで、口縁部は大きく内湾気味に開き、口縁部はヨコナデにより外反する。白色系のものである。

B-IV類：口径14cm前後で、器高4cmを測る。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外反する。

#### c) 杯

ロクロ成形で、器高3cm以上、口径8cm以上のものである。以下口径及び口縁部、底部の形態的な特徴で分類を行う。

A類：口径13cm以上で、口縁部が外反するもの。

B類：口径10-12cm前後で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。さらにこの中で、底部の形態的特徴により細分を行う。

B-I類：底部の器壁が厚く台状の底部を有するもの。

B-II類：B-I類と同形態であるが、器壁が薄く平底なもの。

B-III類：平底で、口径と底径の比率が2:1になるもの。

B-IV類：平底で、口径と底径の比率が3:1になるもの。

C類：口径9cm前後で、体部から内湾して外上方に立ち上がり、口縁部に至るもの。

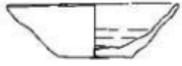
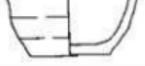
#### d) 鍋

鍋は、鈎の有無で大きく分類を行い、その中でさらに形態、手法の特徴で細分した。

A類：口縁部下に鈎を有し、胴部に最大径をもつ。口縁部は内傾し、端部は面取りを行う。

B類：口縁部下に鈎を有さないもので、形態、手法の特徴により細分を行う。

B-I類：肩部は内傾し、口縁部はやや肥厚して外反する。

形態分類	土師質土器 杯
A 類	
B-I類	
B-II類	
B-III類	
B-IV類	
C 類	

第205図 土師質土器杯分類表 (S=1)

B-II類：胴部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。

B-III類：胴部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。B-II類に比べ器高が浅い。

B-IV類：胴部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は面をなす。

B-V類：胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は外側からヨコナデが施され内傾する。

B-VI類：口縁部は内傾し、胴部外面に斜格子の叩きが施される。

#### 瓦質土器

瓦質土器の中で、多量に出土している鍋の分類を行うことにする。大きく鈔の有無で分類し、さらに形態的な特徴によって細分する。

A類：口縁部下に鈔を有するもので、胴部から脚が付く。胴部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は内傾する。

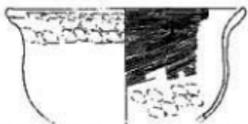
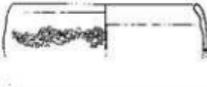
B類：口縁部下に鈔を有さないもの。形態的な特徴により細分する。

B-I類：球形の胴部を有し、頸部で屈曲し口縁部は外傾する。

B-II類：胴部から内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反気味になる。

B-III類：胴部から内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。

以上4類に分類を行ったが、B-I類においては、口縁部の形態が上方に立ち上がるものをさらに細分できる可能性があるがここでは大きくB-I類の範疇で捉えていくことにする。

形態分類	土 師 質 土 器 鍋
A 類	
B-I類	
B-II類	
B-III類	
B-IV類	
B-V類	
B-VI類	

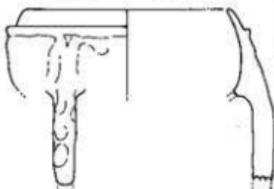
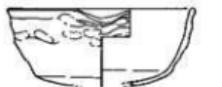
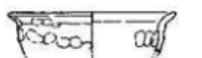
第206図 土師質土器鍋分類表 (S=土)

(2) 遺物の出土状況と共存関係について

田村遺跡群出土の土師質土器、瓦質土器と国内産陶器、輸入陶磁器の共存関係について、各調査区を概観し出土状況の良好な遺構を抽出してみたい。なお、土師質土器、瓦質土器については前述した分類に従って述べることにし、輸入陶磁器は横田・森田編年を使用し、国内産陶器は、備前・<sup>註4</sup>間壁編年、常滑・赤羽編年、瀬戸・井上編年<sup>註5</sup>を使用して説明していく。<sup>註6</sup><sup>註7</sup>

Loc. 1では、包含層出土の遺物が多く、P4のみで土師質土器小皿と瓦器碗が共存している。小皿は、A-II-b類で瓦器碗は底部破片で明確でないが13世紀後半のものと考えられる。Loc. 4では、溝と井戸出土の遺物があるが、その中で屋敷址を囲む溝のSD1・3から多量に出土している。SD1では、瓦質土器の鍋でB-I類が多い。

土師質土器は、細片が多く不明な点が多いが、皿の中で口径が広く器高がやや深い点などからB-IV類の範疇に入ると考えられる。国産陶器は、常滑焼が出土しておりⅢ期のものである。輸入陶磁器では、龍泉窯系の青磁でI-4、I-5類が出土している。白磁はⅣ類である。これら輸入陶磁器類は、12~13世紀中葉に編年されているもので、他の遺物と比較すると古く位置づけられ、伝世された可能性がある。SD3では、SD1同様土師質土器の皿はB-IV類があり、瓦質土器はB-I類が多くを占めている。国産の陶器は少なく、備前焼の檜鉢が出土しているのみで、Ⅲ期からⅣ期にかけてのものである。輸入陶磁器は、古いものと新しいものが混在している。その中で特に注目されるものは、高麗青磁で12~13世紀頃生産された梅瓶が出土している。Loc. 6は、良好な溝に囲まれた屋敷址を検出した調査区である。この屋敷址を囲む溝からの出土遺物が多い。土師質土器は少なく、皿はB-IV類で、鍋はB-I類が存在する。瓦質土器が多量に出土しており、鍋でB-I類が多く占める。その中で若干A類が存在している点が注目される。国産陶器類は、Ⅳ期初頭の備前焼檜鉢や、伝世品と考えられるが、瀬戸の八床窯期の製品で瓶子の口縁部破片が出土している。その他、14世紀に生産されたと考えられる魚住焼の捏鉢が出土している。Loc. 7では、良好な遺構は少ないが、溝のSD2から土

形態分類	瓦 質 土 器 鍋	
A 類		
B-I類		
B-II類		
B-III類		

第207図 瓦質土器分類表(S=1)

師質土器で皿のB-IV類と、備前焼の播鉢でIV期に編年されるものが共伴している。

Loc. 13では、SD 1の出土遺物に共伴関係をみることができる。土師質土器は、杯がC類、鍋はB-III、B-V、B-VI類が存在する。備前焼はV期の播鉢、青磁は稜花皿や線描き細蓮弁文の碗、染付は口縁部で外反する碗が出土している。このSD 1は16世紀に位置付けることができる。Loc. 14では、土塚、ピットに良好な共伴関係をみることができる。土塚のSK 31からは平安時代後期と考えられる良好な土師器が出土している。ピット群ではP 33で、土師質土器小皿のA-II-b、A-III類、P 34で、小皿のA-III類と皿のA-I類が共伴している。P 35では、土師質土器小皿のA-II-a、A-II-b、A-III類と、杯でB-I、A類が存在する。Loc. 15では、SD 1の遺構を抽出することができる。SD 1は東西に流れる単独の溝であり、若干古代の遺物も混入しているが、良好な土師質土器の杯と小皿が出土している。杯は、口縁部が外反するA類で、小皿はA-II-b類が存在する。13世紀に生産されたと考えられる瓦器椀と共伴している点が注目される。Loc. 19では、L字状に屋敷を囲むSD 10をみることにする。SD 10では、土師質土器で皿のB-I-a類、鍋はB-V類が存在する。輸入陶磁器は、高台アーチ状を呈する白磁の皿、幅広の蓮弁文の碗や細蓮弁文の碗が出土している。15-16世紀に位置付けできるものである。

Loc. 21では、土塚、溝、井戸に良好な資料が存在する。SK 60では、土師質土器で皿のB-I-a類と杯のB-III類が共伴している。SK 76でも同様なことがいえる。SE 3では、土師質土器杯のB-I、B-II類と備前焼IV-V期にかけての播鉢、甕が共伴している。SD 4・5・9もSE 3と同様であるが、さらに16世紀代の青磁、染付類が伴っている。Loc. 25のSD 1では、土師質土器の皿でB-I-a類が存在し、鍋は鈷を有するA類が多い。また、瓦質土器の播鉢と共に鍋のB-I類が共伴している。備前焼をみるとIV期のものがほとんどで、輸入陶磁器の青磁は、15世紀のものが多い。これらの出土状況からSD 1は、15世紀代に機能したと考えられる。

Loc. 31Aは、良好な溝に囲まれた屋敷を検出した調査区である。屋敷を囲む溝としては、出土遺物は少ないが、その中でも土師質土器の杯と瓦質土器の鍋が共伴している。杯はB-II類、鍋はA類とB-I類が存在し、A類がその中でも多くを占めている。その他は、14世紀に生産されたと考えられる魚住焼の掬鉢が出土している。屋敷内のSE 1からの出土遺物は、瓦質土器の鍋A類とB-II類が存在し、常滑焼でIII期の大甕が共に出土している。これらのことから、Loc. 31Aの屋敷は、14-15世紀初頭に機能したとみることができる。Loc. 31Bも屋敷址を検出した調査区であるが、Loc. 31Aと比べると小規模である。屋敷を囲むSD 3からの遺物を見ていくとSD 3では、土師質土器の皿、杯、備前焼、輸入陶磁器が出土している。土師質土器の皿はA-II類、杯はC類である。備前焼はV期の播鉢である。輸入陶磁器は、白磁の端反りの形態を有する皿である。その他、唐津焼の皿も出土している。これらの遺物から時期を16世紀後半におくことができる。Loc. 39Bでは、SD 6・7から主に遺物が出土している。SD 6を

みると、土師質土器の皿がB-I-a類、杯がB-III類である。さらに鍋はA類が大半を占めている。これに備前焼IV期の播鉢が共存している。Loc. 25のSD1と同様な出土状況を示している。

Loc. 40では、SD1から土師質土器でB-III類の杯と、鍋でB-II、B-V類が出土し、備前焼はV期、輸入陶磁器では染付が出土している。Loc. 42は、田村城館内に位置する調査区である。他の調査区に比べ、中世の遺物が多量に出土している。土坑及び溝から良好な一括資料を得ることができた。土坑ではSK96があげられる。SK96は、一括して土器が廃棄されており、共存関係をさぐる上で良好な遺構である。このSK96の詳細は後述することにする。溝では、SD2・7の遺物を見ることにする。SD2においては、土師質土器の皿類が多く出土し、SD7は反対に杯類が多い。両溝とも皿はB-I-a類が出土し変化はないが、杯類は、SD2がB-III類、SD7がB-IV類と分類することができる。しかし、その他の遺物の構成が変わらないことから、ほぼ15世紀後半～16世紀にかけて杯と皿を分けて一括廃棄したものと考えられる。ここでは杯、皿と同様に小杯が多く出土している。SD3では、量的に少ないが、土師質土器皿でB-IV類と備前焼IV期初頭の播鉢が出土している。SD2・7に比べるとやや古くなると考えられる。Loc. 43で注目される遺物は、田村城館の外堀から共存して出土した土師質土器皿類と御札である。土師質土器は皿と小皿が存在し、皿はB-I-b類で、小皿はB-I類である。共存した御札は、大永年間の紀年銘を有しており、時期を明確におさえることができた。

### (3) Loc. 42、SK96の出土遺物について

遺物の出土状況と共存関係について概観してきたが、遺物は、各調査区とも屋敷址を囲む溝と土坑から出土しているものが多い。その中で、Loc. 42のSK96からは、土師質土器が一括して多量に出土しており、一時期に廃棄されたものと考えられる。ここでは、SK96から出土した遺物について説明を加え、若干の考察を行うことにする。

SK96は、田村城館内でLoc. 42の南東部に位置する。出土遺物は、床面直上及び埋土中より多量の土師質土器が重なりあった状況で出土した。器種をみると、皿、小皿、杯、小杯が認められる。前述した形態分類に従うと、皿はB-I-a、B-II-a、B-II-b類、杯がB-III類、小皿がB-I類である。土坑内出土の土師質土器の個体数を割り出してみる。個体数の計算は、口縁部計測法を使用し行った。本遺構の出土品で分類・計測の対象とした口縁部<sup>註8</sup>破片数は、931片である。完形品に換算すると123個体分で、小杯が19個、杯が15個、皿の中でB-I-a類が86個、B-II-b類が3個である。図示でき得たものと合計すれば、小杯が36個、杯が47個、皿の中でB-I-a類が117個、B-II-a類が4個、B-II-b類が13個である。総計217個体分が一括廃棄されていることになる。この中で特徴として大きく捉えることができる褐色系、白色系の遺物をもてみると、杯類はすべて褐色系で、皿はB-I-a類が

褐色系で、B-II-a、B-II-b類は白色系を呈している。白色系の皿は、17個体分出土していることになる。これらの白色系の土師質土器の皿をみるとロクロは未使用であるが、非常に丁寧な作りである。褐色系の皿類と比べると成形段階において技術的な差を見いだすことができる。高知県内では、芳原城から同類のものが出土している。これらは、「白カワラケ」と呼ばれているものであり、畿内からの搬入品と考えることができる。本土城から出土した土師質土器類は、白カワラケ以外にも芳原城出土のものと同様の形態を有するものが多い。これらのことから、一括廃棄された時期は、芳原城が機能した時期とほぼ同一と考えてよい。本土城から共伴して出土した輸入陶磁器の青磁・碗も、芳原城出土の青磁と同類である。芳原城では、明応2年という紀年銘を有する護符が共伴して出土していることから、15世紀終末から16世紀初頭に機能した時期をおくことができる。次にこの時期の田村における細川氏の動向をみてみたい。文亀元年から永世年間における田村では、①文亀元年(1501年)1月、細川勝益が田村庄に桂昌寺を建てる。②文亀二年(1502年)6月4日、細川勝益没す。③永世四年(1507年)6月、管領細川政元が謀殺されたため、細川一族上京する。以上の大きな歴史的背景がある。土城が217個体分の土師質土器を一括廃棄されたという性格を持っていることと、前述した細川氏の動向とを一致させることは、時期尚早と考えるが、田村城館内に位置しているSD2・7で、SK96出土の土師質土器と同形態のものが多量に廃棄されていることを考え合わせると興味深い点である。今後田村城館内での広い範囲の調査を期待するところである。以上のことから、SK96出土の土師質土器類は、時期を大きく捉えても15世紀後半～16世紀前半に位置付けることができる。

#### (4) 編年試案について

今回の調査で検出した遺構の中で、特に国産陶器類と共伴して出土した土師質土器、瓦質土器を中心に、その変遷を考えていきたい。以下4期に区分して概要を説明していく。

##### I期(13世紀)

I期として考えられる遺構は、Loc. 1のP4、Loc. 15のSD1、Loc. 14のP33～35である。瓦質土器類は出土しておらず、土師質土器の小皿、皿、杯類を位置付けることができる。小皿はA-II-a、A-II-b、A-III類、皿はA-I類、杯はA類である。Loc. 1のP4、Loc. 15のSD1で、13世紀と考えられる瓦器・碗と共伴しており、また土佐国衛跡のSD17でも同様な器種構成で出土している。

##### II期(14～15世紀初頭)

II期として考えられる代表的な遺構は、Loc. 4のSD1・3、Loc. 6のSD1、Loc. 31AのSD1、SE1がある。この期で特徴的なことは、瓦質土器の鍋が多量に出土していることである。土師質土器の鍋は若干B-I類が存在するのみである。土師質土器の皿でB-IV類も出土しているが、Loc. 42のSD3の出土状況を考えるとII～III期にかけてのものと考えられる。

杯類は、B-II類が大半を占めており、II期に位置付けられる。瓦質土器の鍋は、Loc. 6でB-I類が多く、Loc. 31AではA類が多い。共伴関係から、Loc. 6の溝がLoc. 31Aの溝に比べやや後出すると考えられる。

#### III期（15世紀前半～16世紀前半）

III期は、田村城館に居城した守護代細川氏の最盛期から衰退期にかけての時期である。細川氏が上京した永世四年を含め文龜～大永年間までは16世紀前半に入るものである。このIII期は、数多く遺構を取り上げることができる。その中で良好な一括資料としては、Loc. 42のSK96がある。土師質土器の皿は、B-II-a、B-I-a、B-II-b類、杯はB-III類、小皿はB-I類である。また、Loc. 42のSD7から出土している土師質土器杯B-IV類や、Loc. 43で田村城館の外堀から大永年間の紀年銘がある御札と共伴関係にある皿のB-I-b類、小皿B-I類も含まれる。土師質土器の鍋は、A類が大半を占めており、15世紀を境にして鍋は瓦質土器から土師質土器へ大きく主流が移るのではないかと考えられる。

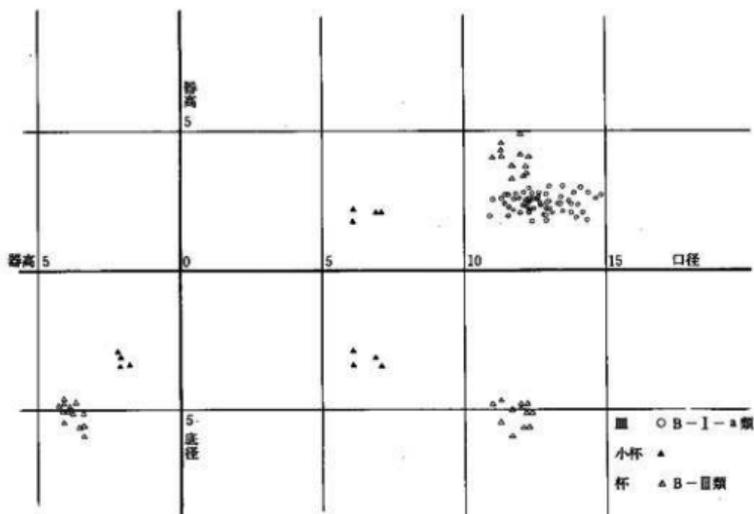
#### IV期（16世紀前半～16世紀後半）

IV期は、細川氏によって支配され統制されていた守護領国体制が終焉し、土佐において戦国時代の突入による国人諸豪族の台頭をみる時期から、長宗我部氏により土佐国内が統一された時期である。このIV期に位置付ける遺構としては、Loc. 31BのSD3、Loc. 39のSE1、SK111をあげることができる。土師質土器の皿はA-II類、杯はC類が主流を占める。鍋はB-V、B-VI類が出現している。土師質土器皿、杯類は主にIV期でも後半に位置付けできるものと考えられる。

以上、簡単に4期区分した概要を述べてきたが、土師質土器、瓦質土器はその形態的特徴によって、時間的変遷の大略を掴むことができた。土師質土器の杯は、すべてロクロ成形であり、口縁部、体部、底部の特徴をみると、13世紀のものは、口縁部が外反し、14・15世紀になると体部から直線的に外上方へ立ち上がり口縁部に至るものになる。その中でやや古く位置付けられるものは、台状の底部を有するものであり、次に台状の底部が消滅し、平底に変わり、さらに口径に対して底径が狭くなるという変化がみられる。16世紀後半になると、器壁が厚くコップ状の形態を有するものに変化する。体部から口縁部にかけて内湾気味に外上方に立ち上がる特徴がある。土師質土器皿で、13世紀にみられるものは杯と同様にロクロ成形で口縁部が外反する特徴を有する。14世紀に位置でき得る良好な資料は抽出することができなかった。15～16世紀前半にかけては、ロクロ未使用で、口縁部をヨコナデし、やや外反させたものである。その中でやや古く位置付けられるものは、大振りの皿で、口径が大きく器高がやや高いものである。15世紀後半になると畿内からの搬入品もみられるようになる。16世紀後半になると、ロクロ成形のものが再度出現し、小振りで体部から内湾気味に外上方に立ち上がる形態をもつ皿等がある。小皿では、13世紀は口縁部を外反させるものや、高台付小皿が主流を占める。分類した中で、A-I-a、A-I-b、B-II類は不明な点が多く明確でないが、14～15世紀に

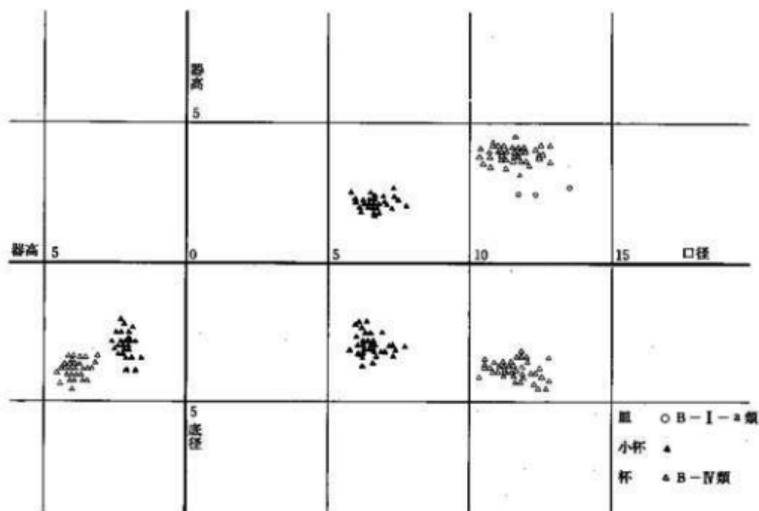
は位置付けることが可能と考えられる。15世紀後半から16世紀にかけては、手づくねによる小皿が主流を占めてくる。これに伴うものとして小杯が存在するが、これはA-I-a、A-I-b類の小皿から変化してきたものと考えられる。土師質土器の鍋は、15-16世紀に盛行したのと考えられる。鈔を有するものから、そうでないものに変化してくるものと考えられる。その中でB-I、B-IV類は不明で、明確に位置付けることができない。瓦質土器の鍋は、14世紀頃に鈔を有するものが盛行し、その後B-I類の鍋に変化してくるものと考えられる。15世紀後半になると瓦質土器から土師質土器に大きく主流が変わってくる。器種の構成として現段階で捉えられるものは、I期には土師質土器の小皿、皿、杯、碗が存在し、II期では碗、皿が数少なく、杯、小皿、瓦質土器鍋、摺鉢が主流で、III・IV期では小皿、皿、杯、鍋があり、新しく小杯、釜、鉢の器種が出現してくる。

以上、中世の土器について形態分類及び編年試案の説明を加えてきた。しかし、今回の報告では、種々の問題から十分な検討を加えることができなかった。また、この試みは、県内では初めての試みでもあり、今後の研究によっては、再検討しなければならない点や、訂正する点が多くあることを承知頂きたい。



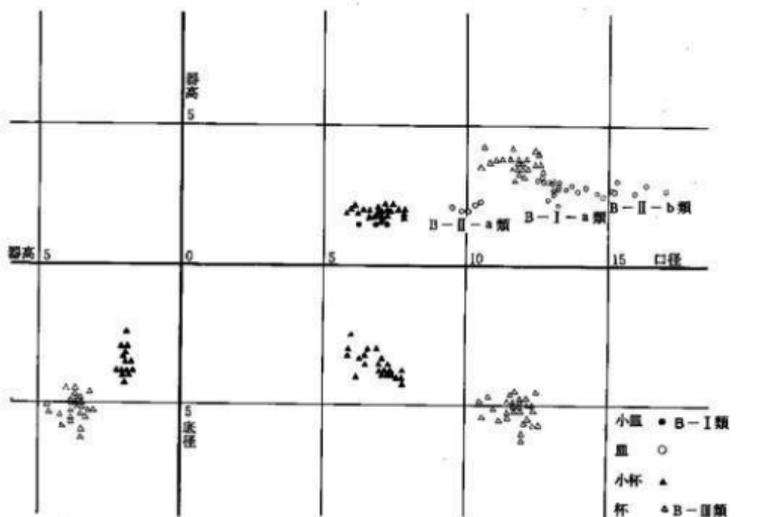
第29表 Loc. 42 S D 2 出土土師質土器度量

単位cm



第30表 Loc. 42 S D 7 出土土師質土器法量

單位cm



第31表 Loc. 42 S K 96 出土土師質土器法量

單位cm

## 2. 遺構

田村遺跡群において検出された中世遺構の中の圧巻は、溝に囲まれた屋敷址群である。これらの遺構は、溝による区画が歴然としたものから若干不明瞭なものまで合わせて計31区画ほど確認された。時期的にみても、14世紀代に成立したものから、17世紀代に廃絶したものまであり、かなり大きな時間的幅をもっている。

ここでは、まず、各調査区毎に紹介されたところの屋敷址に関する集計資料を提示し、次に、同遺構について、「長宗我部地検帳」の記載事項との照合を試み、最後に、若干の考察を加えてみたい。

### (1) SH1～31の概略

本項では、各調査区において検出された「溝に囲まれた屋敷址」に対して、便宜上、SHの略号を付して説明することにした。SH番号は、原則として西北部の調査区より順に表記したが、各Loc.番号とSH番号との関連は第32表の通りである。(例えば、SH1とはLoc.34で確認されたところの溝に囲まれた屋敷址を指す。)なお、同表において、各SHの概略を記してあるので、第209～219図の略図と合わせて参照頂きたい。

また、各SHを構成していたと判断される掘立柱建物址は、重複しているものを含めて総計378棟に及ぶが、これらを単位面積別に集計したのが第33表である。なお、柱穴が密集して検出された地点等では、建物址の決定方法にも難があり、この表にどれだけの資料的価値があるか疑問ではあるが、大略を把握する上での参考にはなり得ると考える。

### (2) 「長宗我部地検帳」の記載事項とSH

「長宗我部地検帳」は、周知の如く、土佐の中・近世史研究上の一等史料である。そのうち天正16年(1589年)の「香美郡上田村地検帳」と「香美郡下田村庄地検帳」とに、当田村地区一帯を対象とした検地状況が記されている。

ところで、当地区においては、幸いにも天正年間の地名呼称が「かなり正確に踏襲され現在にいたっている」<sup>註11</sup>ため、現在の小字名から容易に各調査区の天正年間の状況を類推することができる。よって、本項では、各SH毎に「長宗我部地検帳」(以下「地検帳」と略す)の記載事項との比較対照を試みてみたい。なお、各SHの全体的な位置関係と小字名とを併記したのが第208図である。

#### SH1

SH1は小字横手の南東部に位置するが、「ヨコテ」について「地検帳」には次のように記されている。

第32表 SH1~31の概略

SH	Loc.	所在地 (小字)	存続時期 世紀	敷地面積 ㎡	屋敷を囲む溝 の南北軸方向	溝の深さ	付属施設			備考
							掘分する溝	井戸 (位置)	屋敷基 (位置)	
1	34	横手	15-17初頭	1,488	N-20°-E	11	4	SE1 (南東部)		
2	33	横手前	15-16	1,197	N-18°-E	21	1	SE1 (南東部)	SK40 (南西部)	
3	31A	コキカ内	14-15初頭	1,360	N-16°-E	17	1	SE1 (南東部)	SK28 (南東部)	区画不明瞭。
4	31B	*	16-17初頭	1,189	N-12°-E	6	1			南西部は調査区外。
5	30	柿の木	14-15初頭	1,217	N-11°-E	14	1			東部は調査区外。
6	39A	寺の前	16-17初頭	382	N-18°-E	2	0			北西部は調査区外。 区画不明瞭。
7	*	*	*	687	N-17°-E	8	0		SK2-5 (北西部)	北部は調査区外。 区画不明瞭。
8	*	*	*	1,180	*	11	0	SE1 (南東部)		北部は調査区外。
9	*	*	*	1,728	N-20°-E	12	0		SK18 (南東部)	区画不明瞭。
10	39B	*	16	1,920	*	33	2	SE1 (南東部)		区画不明瞭。 北辺の溝は趣杖を呈す。
11	39C	*	15-16	1,640	N-22°-E	6	3	SE2 (南寄り)		
12	*	*	15-17初頭	1,056	N-20°-E	7	7	SE1 (南東部)		
13	40	島の本	16	1,872	*	37	0			SD1の南辺が南北して 屋敷を掘分している。
14	*	*	*	640	*	12	0			
15	21	正吉	*	690	N-15°-E	15	0	SE2 (南東部)		北東部は調査区外。
16	*	*	*	1,296	*	29	0	SE3 (南東部)		
17	20	*	15-16後半	1,232	N-20°-E	13	1	SE1 (南東部)	SK17 (東部)	
18	19	*	16	377	N-18°-E	7	0			西部は調査区外。
19	*	*	*	324	N-20°-E	7	0			
20	*	*	*	391	*	7	0			
21	*	*	*	323	*	8	0			
22	18	スエン坊	15-16	672	N-22°-E	6	0	SE1 (南東部)		
23	*	*	*	312	*	6	0			
24	4	下窪田	14-15初頭	462	N-15°-E	6	0	SE1 (南東部)		
25	*	*	*	640	N-22°-E	9	1			
26	25	ワカサカ内	15	1,111	N-21°-E	7	1	SE1 (南東部)		西部は調査区外。
27	*	*	*	1,758	*	4	0	SE2 (南東部)		
28	13	東松木	15-16	1,268	N-20°-E	19	3	SE1 (中央南寄り)	SK2 (北西部)	
29	14	フタナカ	*	1,330	N-18°-E	15	0		SK32-34 (北部)	
30	6	フクケ	14-15初頭	698	N-19°-E	10	0	SE1 (南東部)	SK1-2 (北西部)	
31	10	ソネ	16	346	N-4°-E	13	0			南西部は調査区外。

(注) ① 敷地面積は、溝に囲まれた区画内の面積を指す。また、溝が調査区外へ伸びる場合は、確認部のみの面積を記している。  
 ② 溝の深さは、重複関係にあるものも、それぞれ1棟として算出している。

第33表 掘立柱建物址の面積別棟数

各SBの 面積 SH	0 - 5 - 10 - 15 - 20 - 25 - 30 - 35 - 40 - 45 - 50 - 55 - 60 - 65 - 70 - 75 - 80 (㎡)																計 (棟)	備 考	
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75			80
1		2	3	4		1	1											11	東側にも建物群あり。
2		2	4	6	4	2		2				1						21	西側にも建物群あり。
3		1	5	2	2	2	3		1	1								17	
4			2	2					1	1								6	西西部は調査区外。
5		1	3	5	2	1	2											14	東部は調査区外。
6		2																2	北西部は調査区外。
7			5			3												8	北部は調査区外。
8		1	1	5	1	2			1									11	北部は調査区外。
9			3	5	1	1	1	1										12	
10			4	8	10	6		1	1	2						1		33	
11			1	1	1	1	2											6	
12			3	1	2		1											7	
13			4	3	8	4	6	9	3									37	
14			1	1	1	2	1	2	2	1						1		12	
15			2	4	4	2	3											15	北東部は調査区外。
16		2	7	5	5	3	4		3									29	
17		2	4	2	1	3		1										13	
18			3	2			1			1								7	西部は調査区外。
19		1	2	2	1			1										7	
20				4		1				1	1							7	
21			2	3	2	1												8	
22		2	3	1														6	
23			5		1													6	
24			2	2		1	1											6	
25			2	1	5						1							9	
26		2	2	1	1	1												7	西部は調査区外。
27					1	2									1			4	東側にも建物群あり。
28		1	8	4	4	1	1											19	
29		4	5	2	1	1		1	1									15	
30		1	1		2		2	1	2	1								10	
31				1	3	3	2	1	1	2								13	南西部は調査区外。 北側にも建物群あり。
計(棟)		24	87	73	67	43	32	19	17	5	5	3	0	0	1	1	1	378	

(注) ① 0-5は0㎡以上5㎡未満を意味する。

② 重複関係にある掘立柱建物址もそれぞれ1棟として扱った。

ヨコテ通ノ本五反  
一、四反拾三代五分 中 同(上田村)  
桂昌寺分

同し東本二反  
一、七反四十八代一分 中 同(上田村)  
桂昌寺分

同  
水野 四良兵衛 給

ヨコテ  
一、四十代 中  
ヤシキ分 同 香宗 奉本神良兵衛名  
御分 神良兵衛 給

同し北  
一、廿代 中  
ヤシキ分 同 明斎兼  
藤崎三良兵衛門 給  
善兵衛 給

同し東  
一、拾五代 中  
ヤシキ分 同 池添 源五良 給  
善兵衛 給

ヨコテ  
一、四十三代三分 中ヤシキ 同(上田村)  
香宗 御分 四良兵衛名  
四良兵衛 給

同し南  
一、四十九代 中ヤシキ 同 法蓮 善兵衛名  
善兵衛 給

SH1は、15世紀から17世紀初頭にかけて存続したものと判断されており、天正年間の5つの「中ヤシキ」のうちのいずれかと関連があるものと考えられる。SH1の位置及び面積からして、特に末尾の屋敷との結び付きが濃厚である。

## SH2

SH2は小字横手前の北東部に位置するが、「ヨコテノ前」について「地検帳」には次のように記されているだけである。

ヨコテノ前本寺子  
一、九反卅三代上 同(上田村)  
桂昌寺分

SH2は、15世紀から16世紀前半にかけて存続したものと判断されている。よって、当地点は、天正年間には水田化してしまい、9反余に及ぶ土地が「桂昌寺分」となったものである。なお、桂昌寺(現・細勝寺)は、文亀元年(1501年)に守護代細川勝益によって建立された日蓮宗寺院であり、守護代館の南西部に位置する。

### SH3～5

SH3は、小字コキカ内の北東に位置し、SH4はその南側に位置する。また、SH5は小字柿の木東部に位置している。「コ、キカ内」及び「カキノ木」について「地検帳」には西から東へ向かって次のように記されている。

コ、キカ内本七区南代	同(土田)正次名
一、七段繪貳代中	同し(倉本御分)
土の西	同 同し
一、四十代中ヤシキ	同し 四兵衛藏
土のヤシキ	同 同し
一、四十五代中ヤシキ	同し 森本与介
カキノ木	同 本入交備前門分
一、巻反四十貳代五分中	森本 右馬進給
同し東	同 同し
一、巻反拾六代中	同与介給
同し北	同 同し
一、廿八代二分下ヤシキ	同し給
同し東	同 同し
一、廿七代下ヤシキ伊那多	同し給 シメノ木ヤシキ 正具(同)ノヤシキ

SH3・5は、14世紀から15世紀初頭にかけてのものと考えられており、ことにSH3は区画が明瞭であり、大規模である。また、SH4は16世紀から17世紀初頭にかけて存続したものと判断されている。したがって、SH4は、「土の西」あるいは「土のヤシキ」のいずれかの「中ヤシキ」と関連をもつものと考えられ、位置からすると後者の可能性が高い。また、この「土の」呼称はおそらくSH3の遺構から生じたものと推察される。  
註12

### SH6～12

SH6～12はすべて小字寺の前に所在している。すなわち、北部にSH6～8、中央部にSH9・10、南部にSH11・12が、それぞれ東南に並んでおり、当地区全域がSHで占められている。但し、SH6・7・9は、溝による区画がさほど明確ではない。

「寺ノ前」について、「地検帳」には、

寺ノ前	古語
一、廿二代下島	入交彦作給
同し	同
一、廿七代下ヤシキ	同 孫傳し 員る
同し	同
一、卷反五代三分中ヤシキ	同 し まる
同し	同
一、卷反八代一分半中ヤシキ	同 し
同し西	同
一、卅七代二分下島	同 し 給
同し北	同
一、廿七代卷半分中ヤシキ	同 し 給
同し	同
一、廿四代中ヤシキ	同 し 給 孫傳員る

とあり、天正年間には4つの「中ヤシキ」と1つの「下ヤシキ」が存在したことを物語っている。

ところで、SH6-10およびSH12は、存続時期の下限が16世紀後半から17世紀初頭とされており、これらが上記の「ヤシキ」群と関連をもつものと考えられる。とりわけ、SH10は、中央に最大規模の掘立柱建物址(SB39)を有し、堀とも呼ぶべき壮大な溝を北面に伴っており、「主ゐ」と記された「中ヤシキ」とのつながりが想定される。

#### SH13・14

SH13は小字桑の本の東寄りに位置しており、SH14は更にその北東に所在している。「桑ノ本」について『地検帳』には次のように記されている。

桑ノ本	同(上田村)
一、卷反上六代	伊勢領 池澤邊五郎招
同し	同 正次名
一、卷反上六代二分	香宗御分
同し西	同 丸長左衛門名
一、四十六代三分上	同 し



同し前 一、卅五代 中	同 同し 分
同し前 一、卅代 中 <small>田代</small>	同 香 宗 御 分 重 名
同し 一、拾三代 三分 中	同 久 重 名 同し
同し此外小田共二 一、四十五代 上ヤシキ	同 本 以 松 重 分 豊 水 弥 九 良 給
同し同する 一、廿五代 四分 中ヤシキ	同 本 矢 の 分 岡 林 甚 衛 門 給
同し成瀬ヤシキ 一、廿壹代 中ヤシキ	同 書 匠 野 村 孫 連 給
同し前 一、卅八代 三分 中ヤシキ	井 原 田 上 田 行 井 兼 行 弘 潮 七 良 兵 衛 給
同し 一、拾三代 中盛	同 久 重 名 香 宗 御 分
同し前 一、卅六代 下	同 同し

とあり、1つの「上ヤシキ」と6つの「中ヤシキ」及び1つの「下ヤシキ」が、天正年間に存在していたことを伝えている。

ところで、SH15～21は、存続時期の下限が16世紀後半とされており、当然上記の「ヤシキ」群との関連が想定される。とすれば、これらの「ヤシキ」は、天正検地施行から時を置かずして廃絶したものと考えられよう。

#### SH22～25

SH22・23は、小字スエン坊の北部にあり、SH24・25は小字下窪田の南東部に位置している。前者の存続時期は、15～16世紀、後者のそれは14～15世紀初頭と判断されている。

「スエン坊」及び「下クホタ」について、「検地帳」には、

スエン坊本四区

一、三反中代(文)上窪田上書御久々下入  
内廿二代四分中盛

	上田村 本交彦衛門分
	香宗御分
	小工三良左衛門扣
同し東	同 阿し 内田三良左衛門
一、惣反 <sup>内田 十六代上</sup> <sub>中島</sub>	同 し
同し本一反	同 九良左衛門名
一、四十九代五分半上	同 し
同し	同 浜口四良兵衛名
一、四十五代一分上	同 し
同し本一反	同 田中市介給
一、四十八代上	同 し
同し東本一反	同 清米名
一、四十八代上	同 し
同し本一反	同 榎兵衛名
一、惣反四十七代二分上	同 し
同し東	同 小工三良左衛門
一、三反 <sup>上</sup> <sub>西谷</sub>	同 し
同し東ノへ	同 藤左衛門名
一、四十六代四分上	同 し
下ノホク	同
一、六段拾八代上	入 交彦作給

とあり、天正年譜には此地名は完全に水田化されている。

#### SH26・27

SH26は小学ワカサカ内の南西部にあり、SH27はその東に位置している。「ワカサカ内」について『検地帳』には次のように記されている。

ワカサカ内	同 下田村 藤助名
一、惣反卅七代三分下	同 し(弘興分)
同し東	同 サノノ分
一、五反 <sup>上</sup> <sub>田代 浜田三良衛門良盛</sub>	同 し

同し東	一、武反四十七代半上	同	留置名
	細川美佐衛門貞通	同	し
			千文太担
同し	一、三十代 中ヤシキ	同	同し
			同し

S H 26・27は、ともに15世紀代の遺構と判断されており、天正期にはすでに水田下に埋没していたものと考えられる。なお、『地検帳』記載の「中ヤシキ」については、詳細が不明である。但し、S H 26を切っている掘立柱建物址（S B 1）が Loc. 25の西端で検出されており、同遺構が「中ヤシキ」と何らかの関連を有する可能性がある。

#### S H 28・29

S H 28は小字東松木の南東部に位置し、S H 29は小字フクナカの南西部に所在する。両S Hは、属する小字は異なるものの、東西に隣接している。

「東松木」及び「フクナカ」について、『地検帳』には次のように記されている。

東松木	同(下田村) 井上名
一、惣反卅七代五分上	同 し(弘圓分)
同し東	同 新去衛門名
一、武反上卅二分	同 し
同し東	同 熊谷伊豆分
一、武反上卅一代分	同 し
同し東	同 松木藤五良給
一、四反上卅四代半	同 し
同し東	同 五良大末名
一、惣反十代上卅二代三分	同 し
同し東	同 田ノ内善助給
一、廿六代五分上	同 し
同し東	同 留置名
一、四拾六代上	同 し
同し東	同 正木新大末給
一、惣反廿二代上	同 し

フクナカ	同	中島久兵衛給
一、四区廿四代上	同	し
同し東	同	左馬助名
一、武蔵代上 <sup>三十三代</sup>	同	し
同し東	同	藤崎源衛門給
一、武蔵代上 <sup>十一代一分</sup>	同	し

S H 28・29は、共に15世紀から16世紀にかけて存続したものと判断されており、当地点は天正年間にはすでに水田化を終えている。

### S H 30

S H 30は小字フクタの北東部に位置するが、「フクタ」について「地檢帳」には次のように記されている。

フクタ	同(下田)	藤崎源右衛門給
一、武蔵代上 <sup>三十五代</sup>	同	し(近衛氏)
同し西	同	郷名
一、卷区四十一代四分上	同	し
同し西本五反	同	国分寺分
一、四区廿代上	同	し
同し西	同	サンチン分
一、武蔵代上 <sup>七代</sup>	同	し
同し西	同	北村右衛門給
一、武蔵代上 <sup>十六代</sup>	同	し
同し西	同	五食次名
一、武蔵代上 <sup>十八代上</sup>	同	し
同しにし	同	郷名
一、卷区廿代上 <sup>八十三代</sup>	同	し

S H 30は、14世紀から15世紀初頭にかけて存続したものと判断されている。したがって、天正年間には当地点は完全に水田化しており、長宗我部家臣の給地あるいは「国分寺分」及び旧名主層の「名」となっている。

## SH31

SH31は小字ソネの南部に位置するが、「ソネ」について、「地検帳」には、

ソネ 一・十七代下ヤシキ	同(下田村)田村新七屋敷 同し弘園分
同し家 一・十代四分下ヤシキ	下田村 中園半衛門屋敷 同し
ソネ 一・十三代四分下ヤシキ	下田村 榎曾久兵衛屋敷 弘園分
同し家 一・二十代下ヤシキ	同 五真大夫名 同し
同し家 一・拾八代三分下ヤシキ	同 正木新大夫屋敷 同し
同し家 一・十四代下ヤシキ	同 田ノ内豊兵衛屋敷 同し

とあり、6つの「下ヤシキ」が存在していたことを伝えている。

SH31は、16世紀代のものと考えられており、上記の「下ヤシキ」のうち、いずれかに関連をもつものと考えられる。なお、「地検帳」の記載に比して、SHの数が少ないのは、「下ヤシキ」が溝を伴っていなかったことによるものと推量され、実際、SH31の北側には多数の掘立柱建物址群が検出されている。

## (3) まとめ

ここで、今一度第32表に立ち返り、前節での分析を踏まえながら「溝に囲まれた屋敷」について若干の考察を加えてみたい。

同表によれば、SHは、その存続時期を基準にすると下記の6群に分類できる。

- A群……14世紀～15世紀初頭 (SH3・5・24・25・30の5屋敷)
- B<sub>1</sub>群……15世紀 (SH26・27の2屋敷)
- B<sub>2</sub>群……15世紀～16世紀 (SH2・11・17・22・23・28・29の7屋敷)
- B<sub>3</sub>群……15世紀～17世紀初頭 (SH1・12の2屋敷)
- C<sub>1</sub>群……16世紀 (SH10・13～16・18～21・31の10屋敷)
- C<sub>2</sub>群……16世紀～17世紀初頭 (SH4・6～9の5屋敷)

A群は、守護代細川氏の土佐入部(1380年頃)以前から存在していたと考えられるものであり、いずれも応仁・文明の大乱勃発(1467年)以前に完全に消滅している。これらの屋敷の規

模は、SH3・5が1,200㎡余の面積を有する他は、すべて700㎡未満となっている。溝による区画は、SH3及びSH30では歴然としているが、SH5では不明瞭である。<sup>註13</sup>

B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>群は、ともに守護代細川氏の隆盛期に成立している。しかし、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>群（但し、SH17を除く）は、長宗我部檢地施行（1589年）以前に消滅しており、15世紀に成立した屋敷のうち檢地段階まで存続したものは3例（SH1・12・17）のみである。これらの屋敷群の規模は、A群に比してそれぞれ増大しており、B<sub>1</sub>群及びB<sub>3</sub>群はいずれも敷地面積1,000㎡以上を誇り、B<sub>2</sub>群もSH22・23の他は、すべて1,100㎡以上に及んでいる。また、溝による区画も総じて明瞭である。<sup>註14</sup>

C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>両群は、ともに16世紀代に盛行したと判断されるものであり、いずれも「地検帳」記載の「ヤシキ」との関連が想定され得る屋敷群である。C<sub>1</sub>群は檢地施行から時を置かずして廃絶したものと考えられ、C<sub>2</sub>群も近世初期には消滅している。C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>両群の各屋敷の規模は、敷地面積1,100㎡以上が6（うち、1,700㎡以上が3）、600㎡代が3、300㎡代が6というように段階的な差異が顕著となっている。C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>両群の中には調査区外まで延びる可能性を有する屋敷数が含まれており、単純な一般論で論述する事は避けねばならないが、屋敷の規模に画然とした「格差」が認められるようになることは否定できない。また、この時期は田村遺跡群における「溝に囲まれた屋敷」の最終段階にあたりと考えられ、C<sub>2</sub>群消滅以降の時期に属する同類の遺構は皆無である。その故か、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>両群の中には、溝による区画に規格性を欠くものが多くなっている。

ところで、以上6群の屋敷群には、それぞれ幾つかの共通点あるいは類似点が見い出せる。

第一に、各屋敷の存続期間がおおむね100年間前後であることが指摘される（但し、B<sub>3</sub>群は例外である）。仮に、掘立柱建物の耐用年数を約30年とすれば、同一区画内においては2～3度の建て替えが行われたものと考えられる。したがって、一区画内に一時期に併存した建物は、主屋及びそれに従属する家屋等（野・納屋・厩等）数棟であったと判断され、大規模な屋敷には下人小屋的な建物も包括されていた可能性もある。なお、約100年間<sup>註15</sup>という数字は、建物の腐朽等の自然的条件によってのみ規定されるのではないことは、B<sub>3</sub>群の存在からも明らかである。

第二に、屋敷を囲む溝は、その規模に差異は認められるものの、南北軸方向は14世紀代に機能したのから17世紀代のものまで類似した数値を示しており、区画内の建物の方向もこれにほぼ平行である。これは、溝による区画が古代の条里制に強く規定されてなされたことによるものと判断される。ところで、敷地内を更に細分する形の溝も12例程検出されている。ここで注目される点は、このような細分溝は、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>群の中では1例ずつしか認められず、他はすべて14・15世紀代に成立した屋敷に伴っているという事実である。仮に、この細分溝が屋敷内の居住者を区分するために設けられたものと考えることが許されるならば、中世の小農民階級の自立との関連を想定することも可能である。

第三には、井戸及び屋敷墓の存在が挙げられる。まず、井戸は、31区画のうち16区画の屋敷において検出された。16基のうち15基までが石組の井戸と判断されており、井戸底部には木製井筒が固定されている場合が多かった。井戸を所有している屋敷は、概して大規模な屋敷が多く、敷地面積1,000㎡未満のものはわずかに3例である。井戸は、大半が敷地内南東部に構築されており、北部や西部に位置するものは皆無であった。また、屋敷墓と判断される遺構は8例検出されているが、同遺構の大半は上部や埋土中に集石を伴っており、屋敷を囲む溝のコーナー一部内側に隣接して位置するという特徴がみられる。

以上、第32表を中心にして、「溝に囲まれた屋敷址」の概要を紹介してきた訳であるが、最後に、A群からC<sub>2</sub>群に至る各屋敷群の消長の背景について付言してみたい。

A群は、田村遺跡群において確認された屋敷群の中では、時期的に最も古く位置付けられ、南北朝内乱期の前半には既に成立していたものと考えられる。言わば、「生成期」の溝に囲まれた屋敷群であるが、これらは、14世紀後半には守護代細川氏の田村城館入城という事態に直面しながらも、なお15世紀初頭まで存続している。このことから、A群の住人は在地の名主層と判断して大過ないと考えられ、その消滅にも細川氏退転との繋がりは認められない。

B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>群は、ともに細川氏の勢力拡張期に成立しており、その成立には細川氏との関連も考えられる。故に、これらの屋敷の所有者としては、在地名主層以外の有力者（細川氏家臣）をも、その範疇に入れて考える必要がある。しかし、屋敷の廃絶が細川氏の土佐退去（1507年）と時期的に一致するのはB<sub>1</sub>群のみであり、B<sub>2</sub>群（SH17を除く）は長宗我部氏隆盛に反比例するように衰滅しており、B<sub>3</sub>群は近世初頭まで存続している。

C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>両群は、B<sub>2</sub>群とは逆に、戦国時代における長宗我部氏の台頭に併行して成立している。「地検帳」の記載によれば、「ヤシキ」の住人として、同氏の給人が旧名主や農民に混って登場してくる。先に指摘した各屋敷間の規模上の「格差」は、この段階における在地名主層の階層分化の進展度を反映している可能性もある。そして、C<sub>1</sub>群は長宗我部氏衰亡期に消滅し、C<sub>2</sub>群も山内氏の土佐入国直後から廃絶の道を辿っている。

その後、「溝に囲まれた屋敷址」は、完全に水田下に没し、田村は山内藩政下の一近世村落としての道を歩むのである。田村において、溝に囲まれた屋敷は、南北朝内乱期に生成し、戦国時代に隆盛し、そして幕藩体制確立期に消滅した。同遺構は、中世動乱期が派生せしめた歴史的副産物であったとも考えられる。

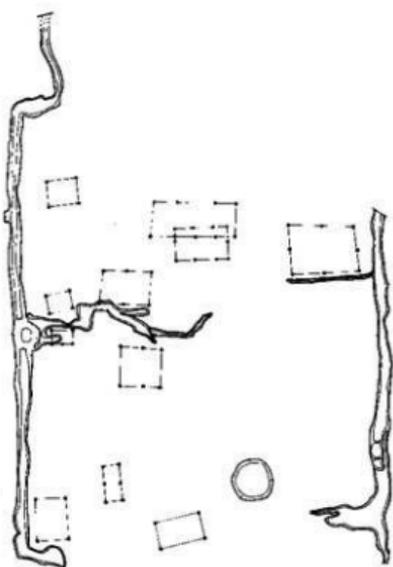
註1 高知県立図書館編『長宗我部地検帳』（香長郡上・下）1962

註2 高台付櫓も存在するが、良好な資料を得ることができなかったため今回の分類では除外することにした。

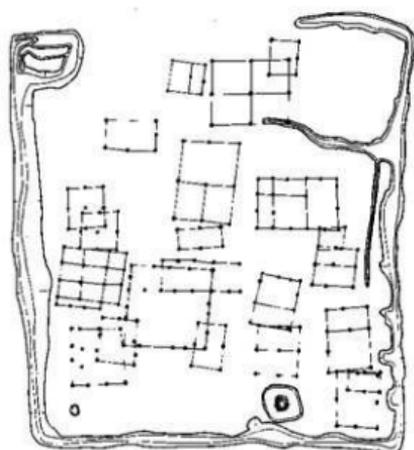
註3 各器種の口径、器高は、すべて明確に割り切れるものではない。

- 註4 横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- 註5 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集』3 1980
- 註6 赤羽一郎「常滑」『世界陶磁全集』3 1980
- 註7 井上喜久男「瀬戸編年図表」『世界陶磁全集』3 1980
- 註8 宇野隆夫「第4章遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ—白河北殿北辺の調査—1981年と同じ方法で行った。
- 註9 高知県教育委員会「芳原城址」1984
- 註10 高知県教育委員会「土佐国衛跡発掘調査報告書」第4集 1983
- 註11 高知県教育委員会「田村遺跡群—高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要—」6頁 1981
- 註12 コキカ内の南の小字は正次（まさつぐ）であるが、当地点は、「地検帳」では「正次土ぬ前」と記されている。また、コキカ内の中央には「正次様」と呼ばれる神母（「いげ」=伊毛・稲毛とも記す。稲作を守る水の神を祀る小祠。）が存在している。
- 註13 但し、SH3は2つのSHが複合したような形状を呈している。
- 註14 SH22・23はともに小規模ではあるが、両者は東西に連なる形状を呈している。
- 註15 第33表によれば、各掘立柱建物の単位面積も5㎡未満のものから70㎡を超えるものまであり、差異が著しい。その中で、35㎡以上の面積を有する建物が33棟確認されているが、これらの大半は主屋と目されるものである。
- 註16 土佐においても、建武3年（1335）以来、南朝方と北朝方の争乱が激化し、香長平野一帯も戦場となった。特に、同年4月の岩村城の戦は有名である。なお、上田村の土豪入交氏も、当初南朝方として参戦しており、南朝方敗北後は細川氏の支配下に入っている。（南国市教育委員会「南国市史」上巻 1979）
- 註17 細川氏が土佐から離れて上京するのは永正4年（1507）であり、A群の廃絶時期とは隔りがある。
- 註18 屋敷の居住者にとって（少なくとも在地名主層にとっては）、細川氏退去がさほど衝撃的な事態ではなく、以後の土佐戦国時代に如何に対処するかが、より急迫した課題であったとも推定できる。





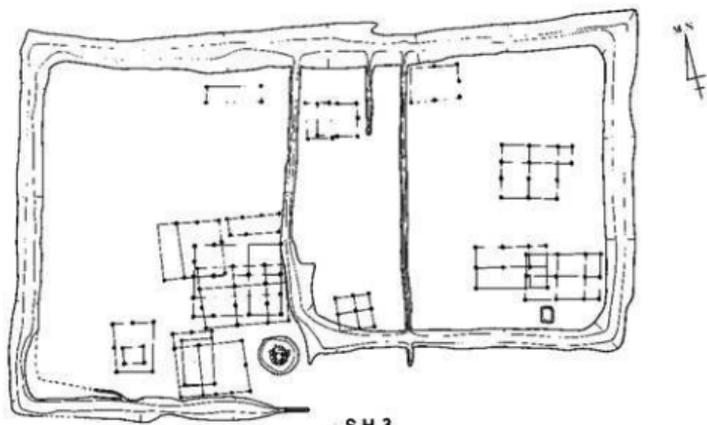
SH 1



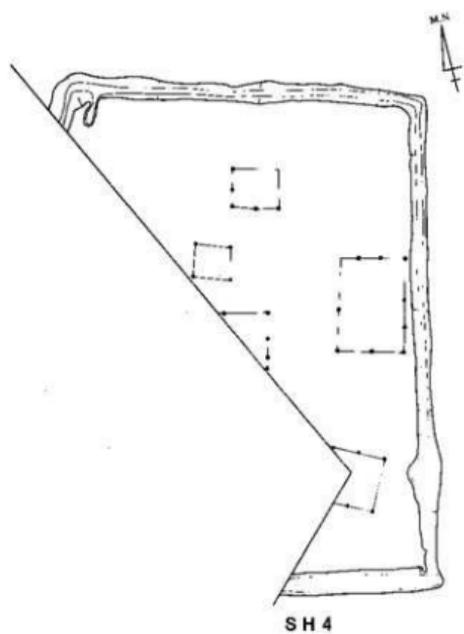
SH 2

第209圖 SH 1・2

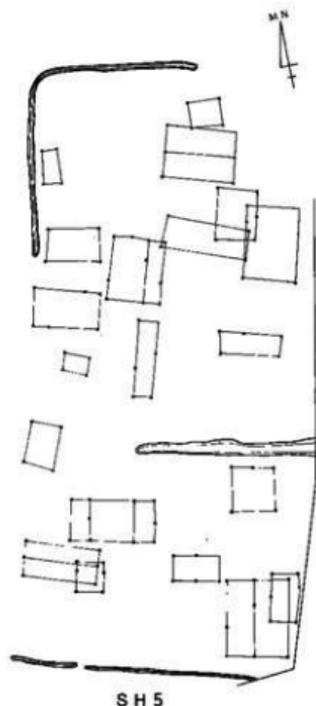
1:500



SH 3



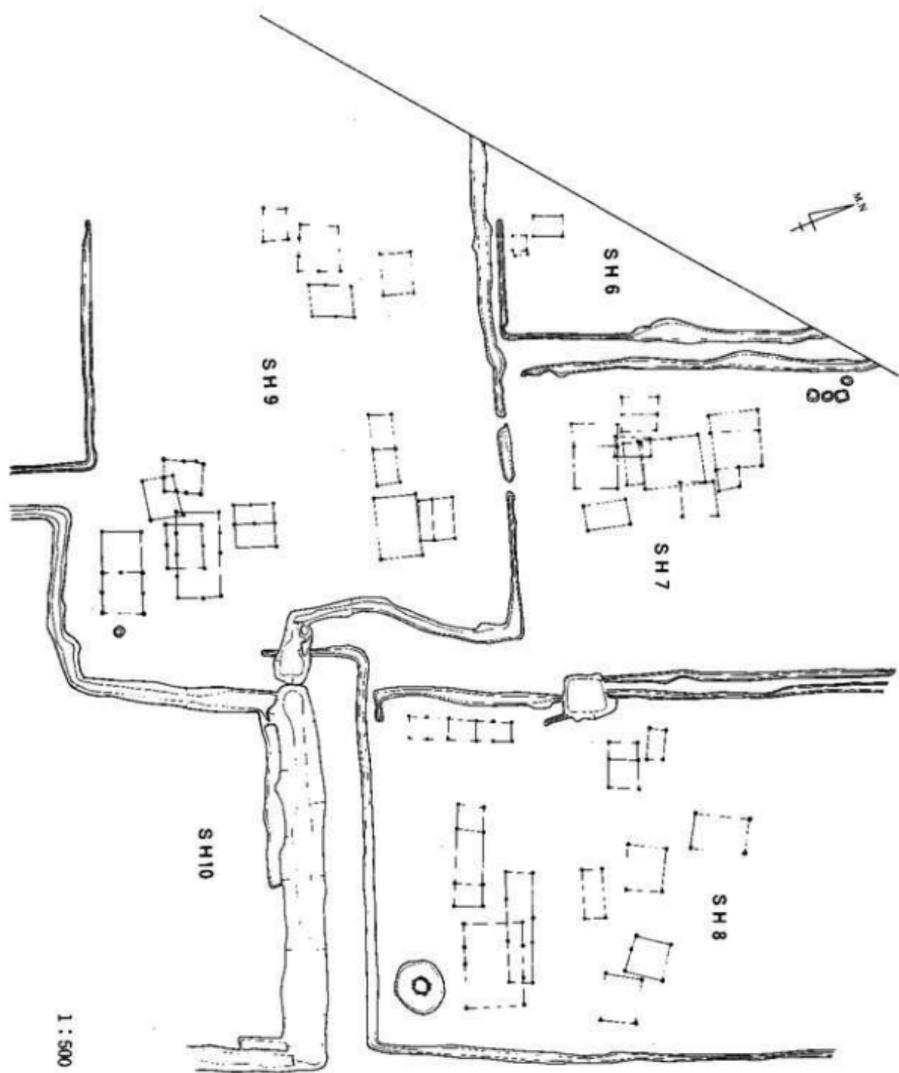
SH 4



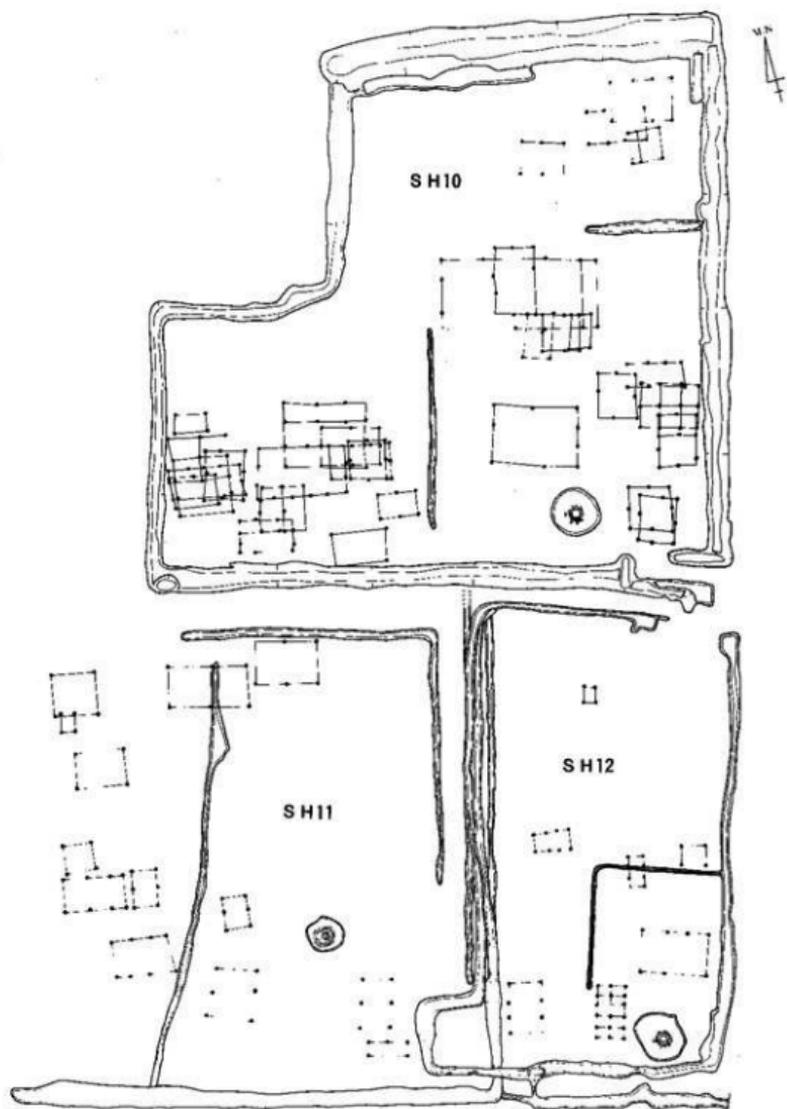
SH 5

第210圖 SH 3 ~ 5

1 : 500

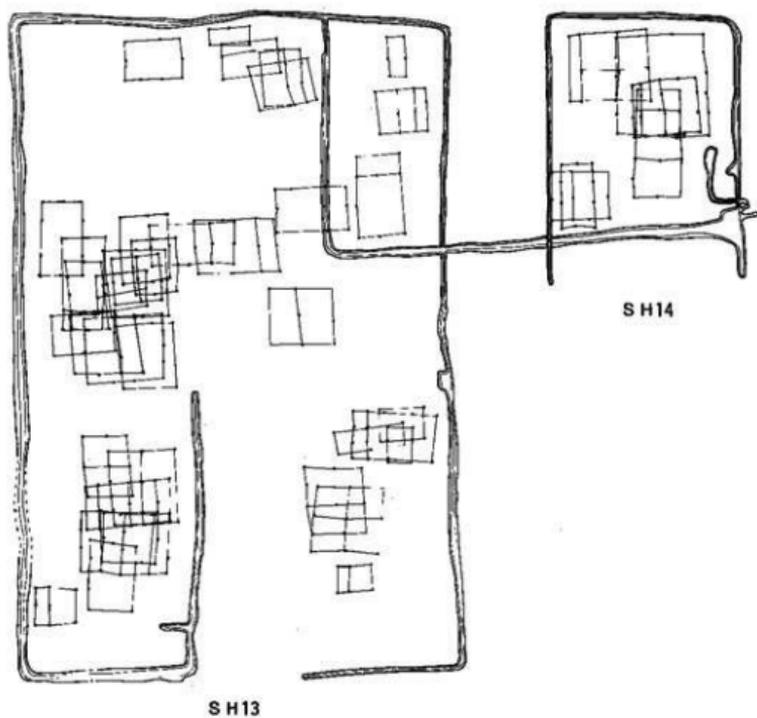


第211图 SH 6~9



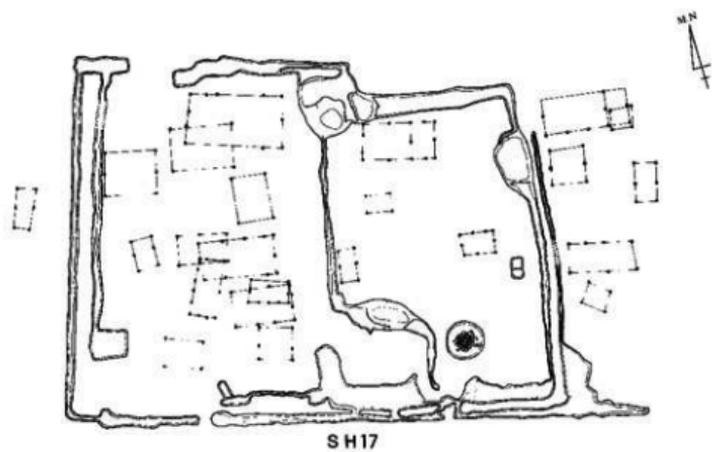
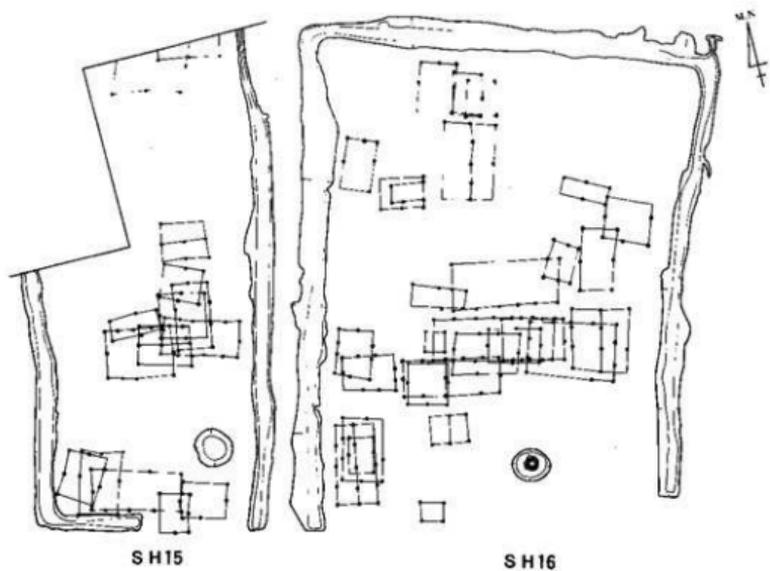
第212図 SH10~12

1:500



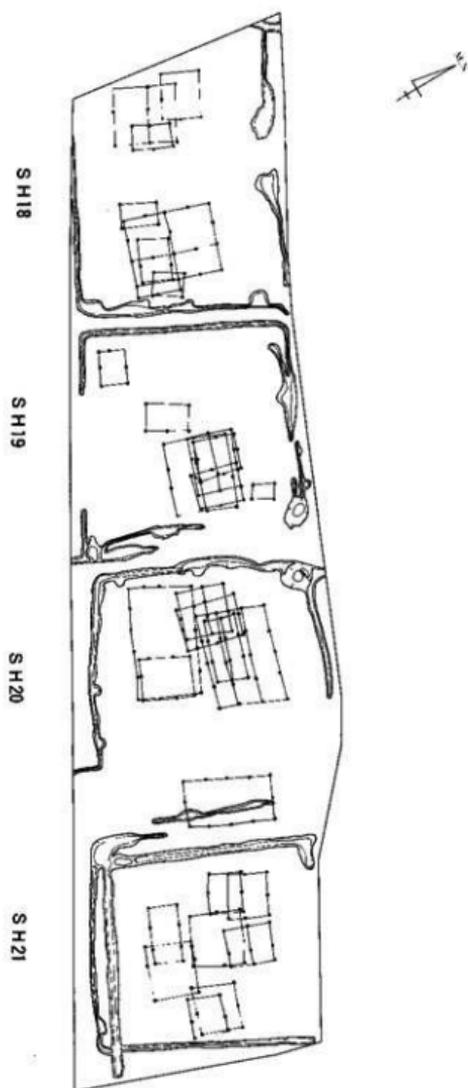
1 : 500

第213図 SH13・14



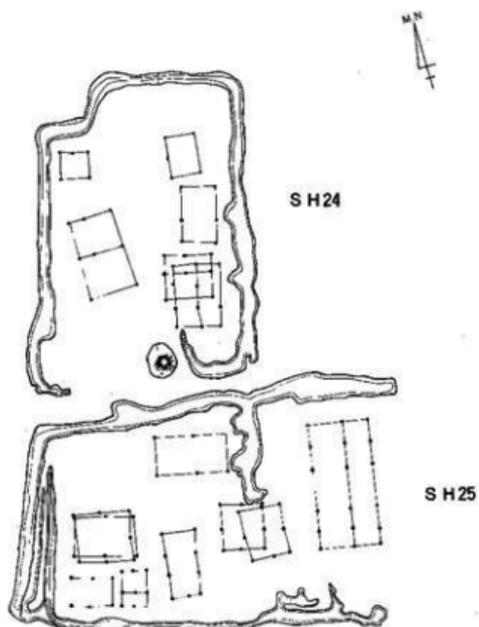
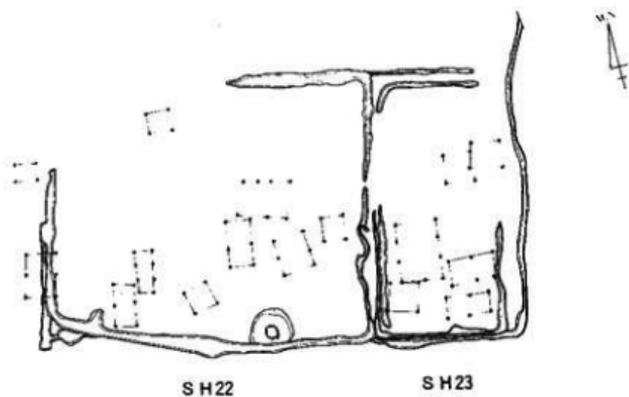
1 : 500

第214図 SH15~17



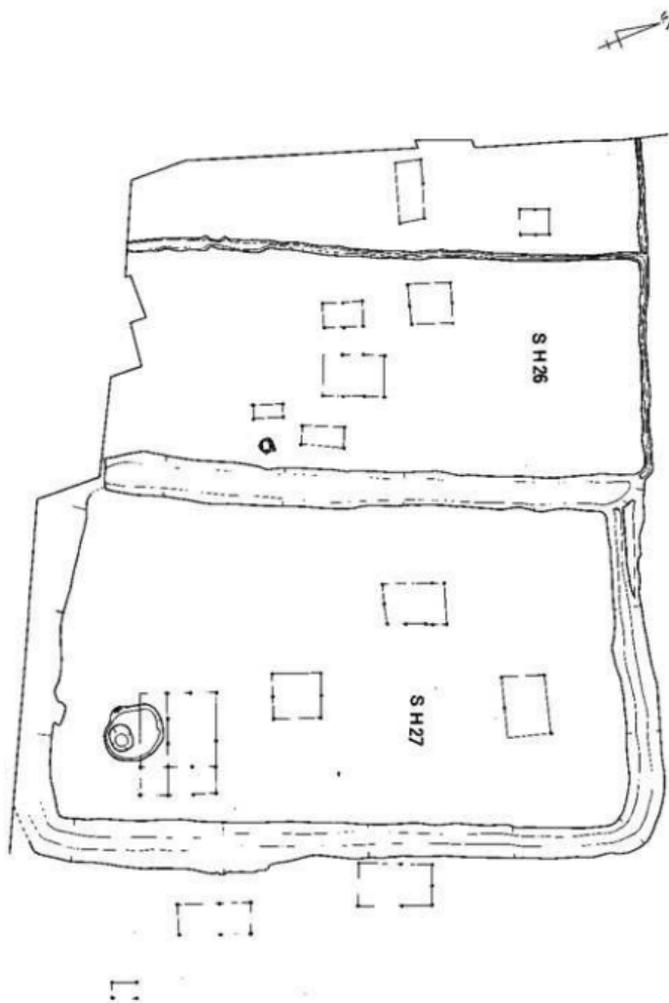
1 : 500

第215圖 SH 18~21

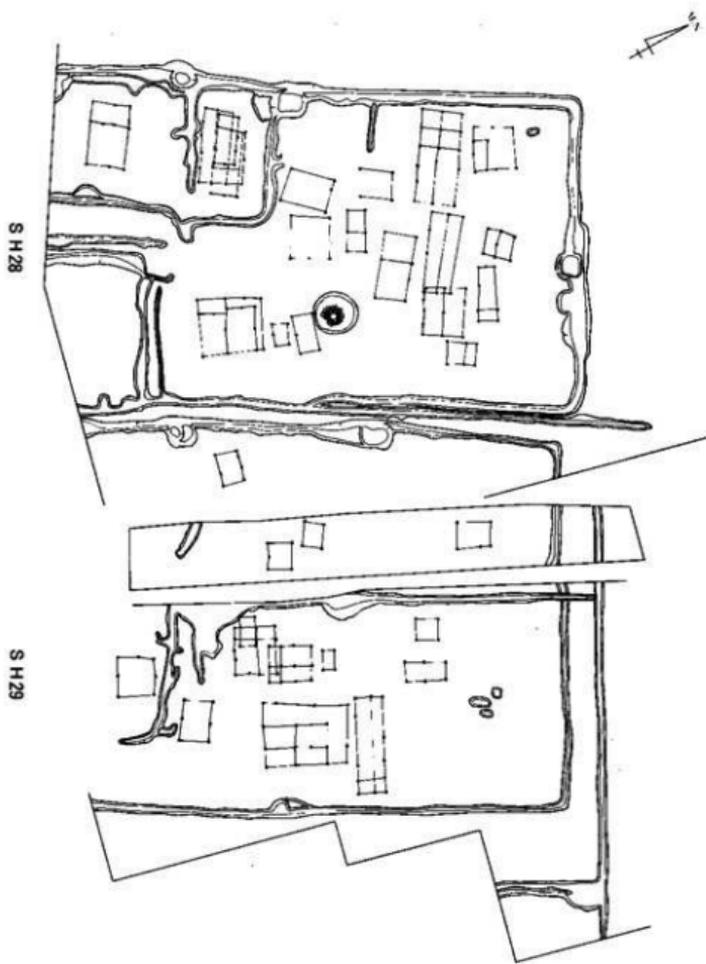


第216圖 SH 22~25

1 : 500

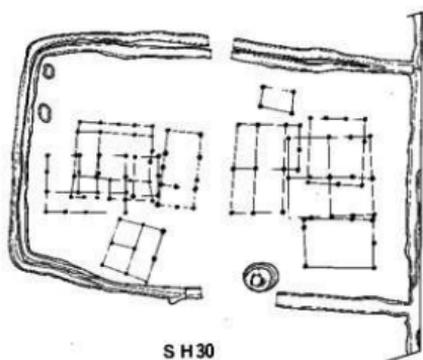


第217圖 SH26・27



1 : 500

第218図 SH28・29



SH30



SH31

1 : 500

第219圖 SH30・31

## 7. 総括Ⅱ

## 総括 II

### —古墳時代～近世—

田村遺跡群における古墳時代の遺構発見数は余りにも少ない。これを見ても、田村遺跡群では弥生後期後半以降母村の集落が崩壊した事を示している。発見された古墳時代の主要な遺構は、Loc. 12のST1、Loc. 10BのST1、そしてSK5程度である。これらの遺構の他にこの時代の遺物が散発的に田村遺跡群内から発見されているが、その発見状況から推してこの時代にはいくばくかの人々は住んだであろうが、その数は弥生時代の人々の数に比すれば寥々たるものであったと考えざるを得ない。Loc. 12のST1出土の土器は、型的的にヒビノキⅡ式土器とヒビノキⅢ式土器の間に位置付けられる早い段階の土器器群である。ただ1部にヒビノキⅡ式土器とみられるものが存するが、大半はそれに次ぐ土器型式群とみて誤りない。

田村遺跡群における条里制に関連する遺構等については、先に報告書が刊行されている。それによれば「数詞坪名に関しては新たに、いくつかの坪名を確認し、それがこれまで想定されていた条里境界線上にあてはまること、また中世城館は細川氏、千屋氏ともにこの線を踏襲して築造した可能性が強いこと」などが判明している。しかし条里に関連する地下の埋藏遺構や遺物は検出する事は出来なかった。

次に Loc. 39で発見された8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物址14棟は重要である。他に Loc. 30B等にも6棟の同期の掘立柱建物址が発見されているが、Loc. 39のものは集中して存在し、併せて多様な建物群から構成されていることから、これらは特殊な建物址群と考えなければならぬ。この建物址群に対して郡衙址との声も聞かれたが、古代田村郷の所属する香美郡下には土佐山田町岩次の方2町の「大領」「田倉」「三宅田」「風ノ尻」等の如き地名を残す香美郡衙跡が存する。一方田村遺跡群の地には土佐最古の寄進地系荘園の存在が文献面で明白であり、年代的にも合致するので Loc. 39の古代掘立柱建物群を庄所址と推定した。田村荘に関する史料として、『統編照発揮性靈集補闕抄』巻8に取められている空海の弟子真体の願文がある。この願文によると田村荘は久満荘（現高知市久万）などと共に天長3年（826）に和氣<sup>註3</sup>氏の氏寺である神護寺に寄進されている。真体は和氣清麻呂の子か孫といわれ、その縁によって神護寺領となったとみてよい。天長3年に和氣氏が神護寺に荘園を寄進したのは、その所領を守るため、これによって田村荘は寄進地系荘園となったとみてよい。横川末吉氏は、この田村荘について次の如く述べておられる。「香美郡田村郷は室町時代に土佐の中心となる。しかし地形上は物部川平野の末端である。この地域まで開発が進展したことは重要である。かくて9世紀はじめ史料の上にも土佐に荘園があらわれる。おそらく実際的にもこの前後ではなかろうかと思われる。」この横川氏の考え方に立てば田村荘は寄進地系荘園になる前に和氣氏によって開発され、<sup>註4</sup>壘田地系荘園として成立したものであろう。そしてその年代は道鏡事件がすべて片づいた宝亀元年（770）以降と筆者はみる。

Loc. 39から集中して発掘された14棟の掘立柱建物址は、出土の須恵器等から推してその年代は8世紀後半から9世紀前半とみられている。しかもこれらの建物址は富山県じょうべのま遺跡、石川県横江遺跡の庄所遺跡にみる如く、南北棟の主屋を中心に脇屋がその両側に配列し、<sup>註5</sup>さらに脇屋に接して総柱とみられる倉まで存する。このような掘立柱建物址群は静岡県御子ヶ谷遺跡や栃木県梅曾遺跡で明確になった郡衙の建物址群と比較すると、その配置や規模において異なり、<sup>註7</sup>荘園関係の庄所遺跡とみる方がより適正であり、<sup>註8</sup>田村荘を語る文献とも合致する。ただ発掘の結果は、これらの建物址群の年代が先述したように8世紀後半から9世紀前半にかけてのものであり、天長3年に寄進された年代と合致しない。しかしこの建物址群を、神護寺に寄進以前の和氣氏の壘田地系荘園段階における庄所と解釈すれば、自らこの不合理は解決できる。なお神護寺に寄進された後は、この庄所は廃され新しい所に造られたと考える。この田村荘が平安中・後期にどのようなようになったかは文献史の面でも不明であるが、今回の発掘でもLoc. 32から1棟の10世紀～11世紀の掘立柱建物址が発見されているに過ぎない。

田村遺跡群における中世および近世初頭の遺構として、最も代表的なものは古代と同様に掘立柱建物址群であろう。この掘立柱建物址群は、(1)13世紀～14世紀段階の掘立柱建物址群、(2)14世紀から17世紀初頭までの溝に囲まれた掘立柱建物址群、(3)14世紀から17世紀初頭までの溝に囲まれない掘立柱建物址群に3大別する事が出来る。

(1)の13世紀～14世紀段階の掘立柱建物址群は、(2)や(3)の掘立柱建物址群と比較するとその検出例は少ない。13世紀の掘立柱建物址として、Loc. 5、Loc. 28から検出されたものがある。Loc. 28の掘立柱建物址のうち、SB 3～5は1つの纏まりのある建物址一屋敷として把握出来るものである。うち、SB 5は3×3間の主屋、SB 4・SB 3はそれに従属する建物とみてよからう。これに対し、Loc. 5からはより小規模な2棟構成の掘立柱建物址が検出されている。これらは当時のやや裕富な農民の家屋と考えてよい。

14世紀段階になると、(2)タイプの溝に囲まれた掘立柱建物址群が検出されるが、一方で溝に囲まれない大掛かりな建物址群の1例がある。Loc. 1の掘立柱建物址群で、主屋として2×3間、そして2棟の3×2間の倉、さらに2棟の脇屋を持ち、そのうえで4箇所にわたって板塀で囲う。しかも倉以外の3棟の建物址はすべて東西棟である所をみると、これは農家とは考え難く小形の庄所の1部と考えてよいのではなからうか。田村荘は13世紀段階では皇室御領であり、14世紀に入って三池氏、そして後に摂津氏の所領となっている。

溝に囲まれた屋敷群は、それも特に14世紀～15世紀前半のものは、在地の名主層のものである事を中世の「まどめ」で述べた。また、15世紀～17世紀初頭までのものは、在地の名主層の屋敷の他に細川氏家臣団のもの、下って長宗我部氏の給人層のものもこの中に入っている。特に在地の名主層の屋敷については、血縁家族を含み被官百姓、家内下人も同一屋敷に居住する事があった事、また名主の散在屋敷一被官百姓の小屋(田屋)も存在したと考えねばならない。さらに「洛中洛外屏風」を通して名主の屋敷は、奥まった所に名主の生活の場の主屋があ

註9

り、屋敷の入口内に接して被官百姓の住居が存する。この点を考慮して、Loc. 31AのSH3の屋敷を検討すると、井戸の北側に在って重複する<sup>BE10</sup>3×3間のSB9・SB11・SB12は主屋とみられるが、3回の建て替えの在った事も知る事が出来る。井戸の東側に溝の切れているのは、これはあくまで裏木戸であり、北の溝に橋梁を掛けた部分が表門であろう。さらにSH3における1×2間のSB1、2×2間のSB7は、以上の点で表門に近い所に存した建物とみて被官百姓の住居とすべきであろうか。このように名主と同一屋敷内に住む被官百姓に対し、先述した名主の散在屋敷に住む被官百姓もある。この散在屋敷はカリヤと呼ばれる事が多く、田屋と同一語である。発掘調査で確認された名主屋敷と散在屋敷の在り方を示すものとして、Loc. 25のSH26を挙げる事が出来る。この溝に囲まれた屋敷は1井戸を持ち、全く重複していない主屋SB6(1×3間)を持ち、それに従属する建物3棟(1×2間・1×1間)を主屋の周辺に配置し、併せて門屋とも称される被官百姓の建物(2×1間)1棟を持っている。そして、この屋敷を囲むSD2の西側に鍛冶に従事する被官層の建物2棟(1×4間・1×2間)が溝の外に存在する。主屋とその周囲の建物、そして門屋は溝に囲まれた名主屋敷内にあり、この溝の囲いの外にある鍛冶関係の建物は名主の持つ散在屋敷の1つであろう。

溝に囲まれた屋敷群は、荘園制の変質・解体期に生まれた名主層を主体とする屋敷群であると筆者は考える。ただこのような屋敷を形成するには、名主層の力だけでなく当時の言葉で惣百姓と言われるように弱小農民層の力もその背景に大きく存したであろう。溝に囲まれた屋敷群の存続期間は、14世紀から17世紀初頭に及ぶが、その間に細川氏による守護領国制の展開、そして戦国動乱期および長宗我部氏の支配と検地という政治的変革をも経験する。しかし、この溝に囲まれた屋敷群は1部にそれらの影響を受けながらも、名主層としての存続をみるのであるが、最終的にこれらの屋敷群を消滅させたのは近世幕藩体制である。慶長5年(1600)に土佐に入国した山内一豊は、長宗我部の実施した兵農分離に伴う農村の再編成に努めているが、その一環として田村では浜田甚左衛門を井奉行に任命し、さらに「田地等無不作」ように命じている。この政策は農民の田地付けを進行させるもので、いわばこれによって田村が近世村落へ<sup>BE11</sup>変貌していくのである。この事象を示す一資料が、Loc. 39CのSH12の井戸から検出されている。それは慶長11年(1606)の紀年銘を持つ水供養の祈禱札である。SH12を廃棄し、井戸を埋めるに際して井戸の水神を供養した祈禱札であり、SH12の廃棄の年代を知る事が出来る。なお、この屋敷を囲むSD24の1部は、屋敷消滅後も溝として活用されたらしく17世紀前半の唐津系皿が検出されている。

田村遺跡群における近世関係の主要な遺構は近世墓である。近世墓が多く検出されたのは、Loc. 12・13・23・32・39A・39Cである。特に、Loc. 13・39Aにみられる近世墓群は出土の伊万里焼から17世紀後半に遡るものであり、方形座棺、円形座棺、それに竊棺が少し混在する。しかし、田村遺跡群で検出された近世墓群の大半は、伊万里Ⅲ期の碗が出土し17世紀末～18世紀代のものとみられる。これは農民層の生活の向上と相俟って、このような近世墓群の出現と

なる事を考えなければならない。注目さるべき近世墓群を紹介すると、まず Loc. 13 の 6 基からなる座棺墓群を挙げねばならない。6 基の座棺は一辺が 1.2~1.5m の方形のもの 3 基、それに対し径 0.4~0.8m の円形のもの 3 基からなり、前者は成人男子用、後者は女・子供用のものとみられる。また先述した Loc. 39 A の如く、17 世紀後半では座棺墓が多く、寝棺墓が少し混在する近世墓群に対し、18 世紀代とみられる近世墓群 Loc. 39 C には寝棺墓が多くなる。Loc. 39 C における近世墓群は 1 部に座棺墓も存在するが、その大半を占めるのは寝棺墓である。この寝棺墓で遺骨の残存するものを見ると、その葬法は仰臥伸展葬と横臥屈肢葬とが存する事が判る。またこれらの多くは北枕をとり、顔面を西に向けているものが半数以上を数える。S K 27 からは犬の土製品が出土し、子供の座棺墓とみられる。また S K 211 の近世墓からは、安永 10 年 (1781) の墨書紀年銘の位牌が出土している。<sup>註12</sup>

近世墓群からは碗類の他に煙管、櫛、塗碗、寛水鏡、紅猪口等が検出されている。Loc. 39 C の S K 219 は西向きの横臥屈肢の寝棺墓であるが、伊万里碗と土師質土器皿が人骨の東側に副葬されていたが、数少ない近世における土師質土器小皿の副葬例である。なお座棺墓上には、20cm 大の自然石を 20 個程度置いているが、副葬品はこの自然石の下、座棺の上から検出される例が多い。また田村遺跡群の近世墓群はその性格として、寺院の周辺に集中するタイプでなく、田の畦の広い部分とか、田の周辺の藪とかに形成されたりしく、時に縦列の形で群を形成し、ある場合は藪の形である鍵形に墓群を形成する事もある。なお、発掘調査の以前において墓標が欠失し、また除去されたための墓標とその下部の土壇ないしは木棺の相関関係が追求出来なかったのは残念な事である。

以上の近世墓群に先行する中世墓群も、田村遺跡群から検出されている。中世の溝に囲まれた屋敷の中で、やや大形の部類に属するものに屋敷墓が存在する。これは 1 基または数基にとどまり、しかも火葬墓が原則のようである。なかには瀬戸瓶子を蔵骨器としているものもある。この屋敷墓の他に、15 世紀中葉~後半の火葬墓も検出されている。Loc. 7 の S K 1・2 は、1.5×1.2m 大の土壇であり、集石下に白磁と火葬骨片が検出されている。また、Loc. 39 B の S K 14 は高さ 67cm、口径 43cm 備前大甕を使った屈肢甕棺墓で、土師質土器を副葬する。Loc. 23 の S K 4~7・9~11・13 は中世の土壇墓とみる。S K 4 を例にとると 1.3×0.8m の方形の土壇に遺骸を葬る。ただ遺骸は残っていないが屈葬をとるものと思われる。埋土中に準大の河原石が検出されているが、本来はこれらは墓上に置かれていたと思われる。土壇の掘り方からみて、土壇墓というより木棺墓であった可能性を筆者は強く感じる。この墓群は 16 世紀代とみられる。これにやや先行する同種のもので、土佐市市野々から検出されている。<sup>註13</sup>

註1 鈴木省一・井本葉子「高知空港拡張区周辺条里遺構分布調査」「田村遺跡群」—高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要— 高知県教育委員会 1981

- 註2 岡本健児「土佐神道考古学5」「土佐史談」156 土佐史談会 1981
- 註3 山本大「荘園の成立」「高知県史」古代・中世編 高知県 1971
- 註4 横川末吉「高知市史」上巻 高知市史編纂委員会 1958
- 註5 舟崎久雄「高瀬遺跡とじょうべのま遺跡」「考古学ジャーナル」241 ニュー・サイエンス社 1985
- 註6 吉岡康暢「加賀の初期荘園と横江荘遺跡」「考古学ジャーナル」241 ニュー・サイエンス社 1985
- 註7 「藤枝市埋蔵文化財発掘調査概報」昭和52年度 藤枝市教育委員会 1978
- 註8 大川清他「栃木県小川町邦須官衙跡第四次緊急発掘調査報告書」小川町教育委員会 1976
- 註9 岡見正雄・佐竹昭広「標注洛中洛外屏風上杉本」岩波書店 1983
- 註10 伊藤鄭爾「室町時代の農家」「中世住居史」東京大学出版会 1958
- 註11 山本大「兵農分離による近世村落の成立」「南国市史」下巻 南国市史編纂委員会 1982
- 註12 岡本桂典「土佐・吹越墓」「考古学ジャーナル」182 ニュー・サイエンス社 1980
- 註13 岡本健児「中世の考古学」「土佐市史」土佐市 1978

## 8. 人骨鑑定

## (1) 南国市田村遺跡群B地区出土の近世人骨について

国立科学博物館 人類研究部

山口 敏

### 埋葬姿勢

田村遺跡群B地区 Loc. 21、土坑 SK 44で発見された江戸時代人骨は、出土状態の記録写真および実測図によれば、股関節と膝関節を強く折り曲げ、大腿と下腿を上半身の長軸と平行させて、うつぶせの姿勢（俯臥屈葬位）で埋葬されたものである。

### 保存状態

上顎骨、下顎骨、および左の上腕骨、大腿骨、脛骨の各骨幹部はある程度保存されているが、他の骨は保存状態がわるく、多かれ少なかれ細片化している。

### 年齢・性

歯の萌出状態および咬耗の程度から判断して、年齢は壮年ないし熟年の範囲と考えられる。又前頭骨における眉弓の発達程度、下顎骨前部の形態等から判断して、性別は男性と推定される。

### 頭蓋

脳頭蓋では前頭鱗と左右の側頭骨の小片が若干保存されている。眉弓の隆起が明瞭に認められ、眼窩上孔が左右両側に存在する。

顔面骨格では左右の上顎骨の歯槽部と下顎骨の体部が保存されている。梨状口の下縁は鋭い稜をなさず、鈍である。上顎骨歯槽突起の高さは低く、歯槽性突顎の傾向がみられる。下顎体は低く厚い。オトガイ孔の位置での下顎体高は29mm、同厚は14mmである。オトガイ高も低い。歯槽縁がわずかに破損しているため、計測はできない。前下顎幅は53mmである。オトガイ孔は左右とも単一。下顎隆起の形成はない。

### 歯

保存状態は次のとおりである。

MMMPPCII | IICPPMMM

\*MMPPC//|//PPMMM

斜線箇所の下顎の全切歯と左犬歯は保存不良で歯冠が失われている。又\*印で示した下顎右第3大臼歯は先天的欠如である。

咬合の形式は缺状である。咬耗は切歯から第2大臼歯までがすべて第2度。第3大臼歯だけが第1度である。

上顎の3歯（左右の第1大臼歯と左の第1小臼歯）はう蝕のため歯冠がほとんど失われている。

#### 上肢骨

上腕骨では左の骨幹の中央部、約16cm長の破片が保存されている。三角筋粗面はよく発達しているが、骨幹の径はあまり大きくない。骨幹中央付近での最大径、最小径はそれぞれ23.5mm、17mmで、横断示数は72.3。中央周は69mmである。

前腕骨では左橈骨の近位半が保存されているが、表面に破損部分が多く、計測はできない。

#### 下肢骨

大腿骨では左の骨幹下部、長さ約16cmの破片が比較的よく保存されているが、中央部では表面に破損があり、骨幹径の計測はできない。粗線は比較的細く、骨幹の柱状性も強くない。

脛骨では左の骨幹中央部、約13cm長の破片が保存されている。中央部の横断面形は内側縁の長い不等辺三角形（ヘルアリチカの2型）を呈し、中央最大径は30mm、同横径はマルチン法で23mm、パロフ法で21mmである。中央横断示数はいずれにしても広型の範囲に入る。

#### まとめ

田村遺跡群B地区の土城SK 44において俯臥屈葬の状態で見られた、壮～熟年男性の一江戸時代人骨について記載した。

本人骨にみられた歯槽性突顎、低顔形、缺状咬合、う蝕、大腿骨の非柱状性、脛骨の非扁平性などの特徴は、近世日本人骨格について従来知られている一般的特徴とよく合致する。

## (2) 田村遺跡群出土骨の所見

高知医科大学 第一解剖学教室

山本 恵 三

これらの資料は田村遺跡において発掘されたもので、当時人骨と推定されていた10点と獣骨と判定されていた32点である。これらの資料のうち、人骨と判定しうるものは前者のうちNo 6の資料である。

### 1. 人骨と推定されていた資料 (No 1 ~ No 10)

#### 資料No 6

長さ約5cmの管状骨の破片と不整形の破片を含み、両者は接合できるので同一の骨の破片である。

骨片はどちらも黒褐色に着色し、欠失部が多い。前者は浅く凹んだ面と、横に軽く凸な面にはさまれたやや鋭い稜を示し、稜はやや斜めに走る。骨片は軽い彎曲を示している。後者は不整形の骨片で欠失部が多いが、表面の骨質が残存する部分は浅く凹んだ面と、それに接する鋭い稜を示し、前者に接合すると、この面と稜は前者のもつ浅く凹んだ面とそれに接する稜につながる。

これらの形態的特徴、すなわち面と稜の形や走行などの特徴は人体の尺骨上端部の外側部の面や稜の形態的特徴に酷似し、又骨片自体の彎曲は尺骨の骨体上部のそれと極めて類似している。

これらの骨片は両方ともに人骨であり、右尺骨上端部にある橈骨切痕の直上から遠位へ約6.5cmまでの回外筋稜を含む部分に同定することができる。しかし尺骨の極一部の骨片にすぎず、欠失部も多いため、性別等については判断し難い。

#### 資料No 1 ~ No 5、No 10

これらの資料のうち、No 3 ~ No 5については腐蝕、変形、破損等のため形態の保存が極めて悪く、小骨片が大部分であるため、形態的に確定的な判断は下し難い。No 3は骨片2個を含むが腐蝕が著明で、表面の骨質も失われ海綿質のみの状態である。No 4はすべて管状骨の破片と推定されるが、表面の骨質は欠失多く、亀裂を生じている。No 5は扁平骨と管状骨の破片と思われるが表面の保存が極めて悪い。したがって、これらの資料は判定のポイントとなる骨表面の状態や各種構造物を観察し難く、同定も困難である。

No 1、No 2、No 10の資料は白色を呈し、硬い。No 1は扁平骨の破片4点、骨状骨破片4点その他細骨片8点を含む。No 2はすべて小骨片で大部分は管状骨破片を推定される。No 10は管状骨破片3点、扁平骨破片1点を含み、他は細骨片である。これらの資料は比較的保存は良いが、

亀裂 (No 2) もみられ、小骨片ばかりであるため同定は困難である。

資料No 7～No 9

これらの資料は原形が良く保存されている。すべて管状骨で表面は暗褐色に着色しているが、骨端部は完全に形成されており、骨端線もみられず、完成された骨である。No 7 は長さ約18cmの管状骨で骨端の一部に欠失がある。No 8 は長さ約16cmと17cmの管状骨 2本でいずれも骨端部に一部欠失があるが形態の保存は良い。No 9 は長さ約20cmと18cmの管状骨 2本で形態保存は良いが、骨端の一部に欠失がある。

これらの資料はいずれも完成された骨であり、長さ、太さ、骨端部の骨頭や関節面の形態的特徴、又骨幹部の彎曲の特徴は人骨のそれらとは異った点が著しく、人骨ではなく、いわゆる四足獣の体肢の骨である。

2. 獣骨と判定されていた資料 (No11～No42)

これらの資料の殆んどはいわゆる骨ではなく獣類の歯牙と推定される。その大部分は草食獣の歯牙と推定されるが、極一部に肉食獣の歯冠のエナメル質と推定されるもの (No34) も含まれている。歯牙と推定される資料以外に四足獣の右肩甲骨 (No35)、肉食又は雑食獣の下顎骨右側半 (No38)、四足獣の体肢骨の一部 (No38とNo13) と推定されるものが含まれている。

第34表 出土骨一覧表

番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
1	Loc. 4 SD 1	15	Loc. 7 第IV層	29	Loc. 29 SD 2
2	Loc. 10 第III層	16	◇ ◇	30	Loc. 31 SD 6
3	Loc. 21 SD 9	17	Loc. 10 SD 8	31	◇ SD 3
4	Loc. 25 SE 1	18	◇ ◇	32	◇ ◇
5	◇ SD 1	19	Loc. 12 第II層	33	◇ 第III層
6	Loc. 39B SK18	20	Loc. 19 SD 3	34	Loc. 34 ◇
7	◇ SD 7	21	Loc. 21 SE 3	35	Loc. 39 SD 7
8	◇ ◇	22	◇ SD 5	36	Loc. 40 SK88
9	◇ ◇	23	Loc. 24 第III層	37	Loc. 41 SD 2
10	Loc. 4 第III層	24	◇ SP 1	38	Loc. 43 SD 1
11	◇ ◇	25	◇ SD 2	39	Loc. 44 SD 2
12	◇ ◇	26	◇ ◇	40	◇ 第I層
13	◇ ◇	27	◇ ◇	41	Loc. 45 ST 6
14	Loc. 7 第IV層	28	Loc. 25 SD 1	42	Loc. 4 SD 3

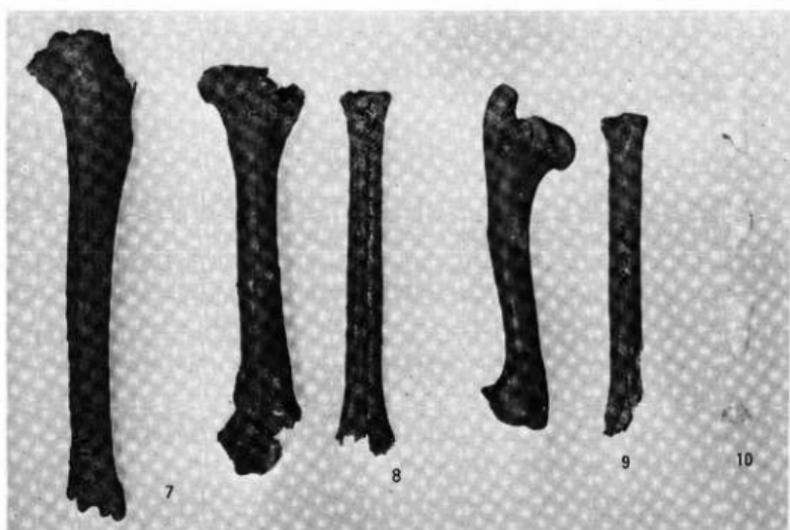


写真1 No 1~10

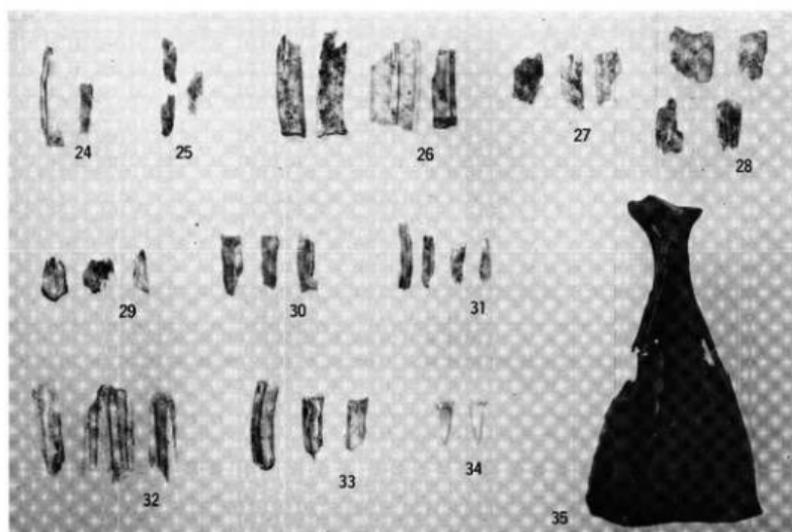
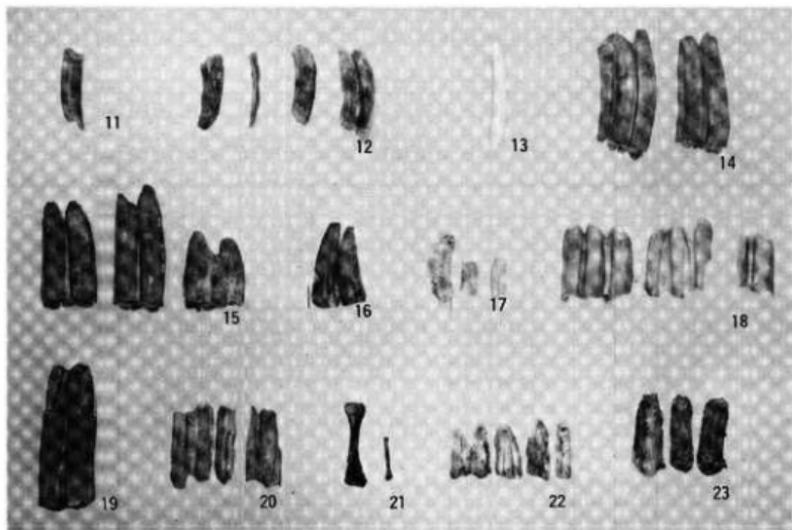


写真2 No11~35